熊本県文化財調査報告第228集

西片稲村遺跡
中片小路遺跡

九州新幹線新八代・西鹿児島間建設工事に伴う
埋蔵文化財発掘調査

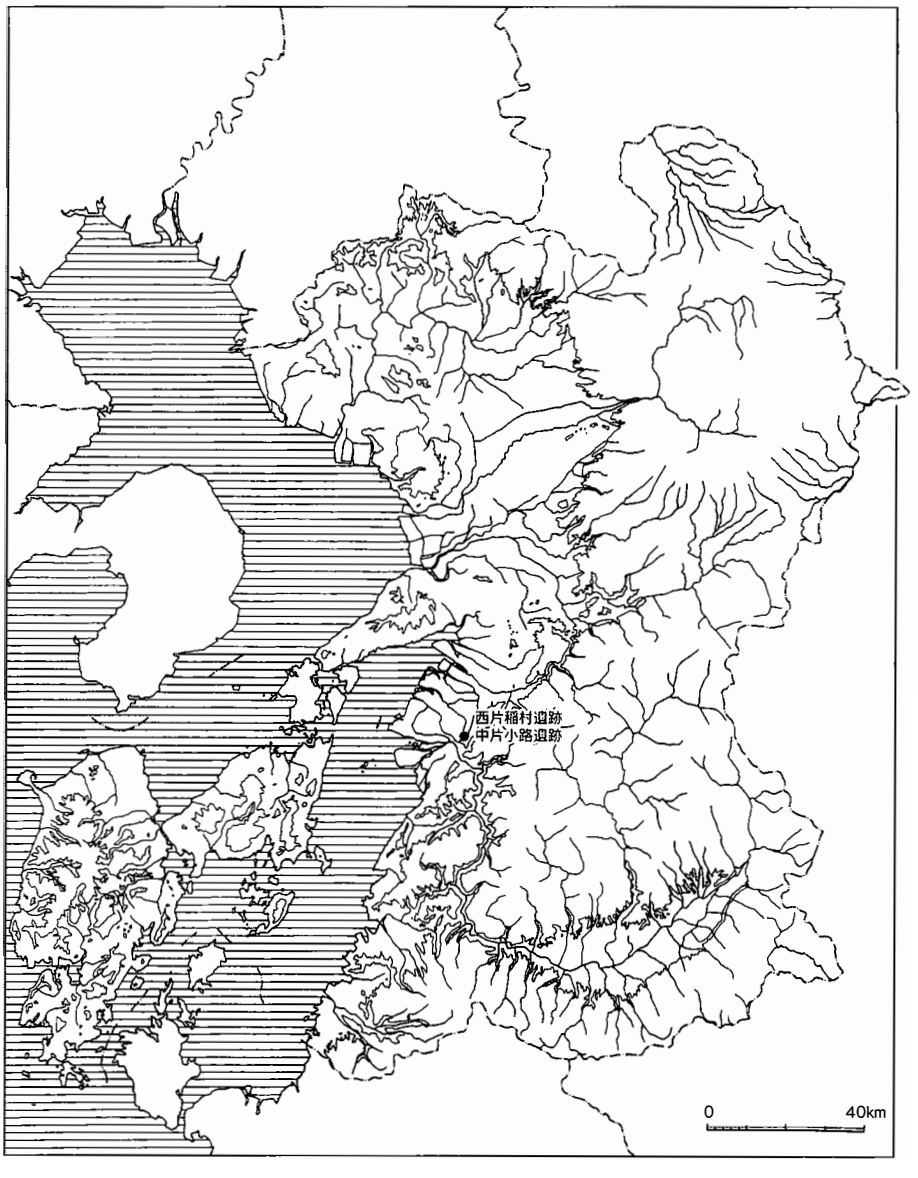
2005.3
熊本県教育委員会

PL.1　空撮(周辺地域)

PL.2　空撮(西片稲村遺跡周辺)

西片稲村遺跡
中片小路遺跡

熊本県八代市西片町・中片町に所在する遺跡



2005

熊本県教育委員会

序　　文

熊本県教育委員会では、九州新幹線新八代・西鹿児島間建設工事に伴う埋蔵文化財調査として、八代市西片町及び中片町に所在する西片稲村遺跡と中片小路遺跡の発掘調査を実施しました。

調査の結果、弥生時代から中世にかけての遺構を数多く確認しました。

中でも、土師器の底部に掘り込まれた文字等、古代から中世にかけてこの地域の様相を明らかに出来る遺物が大量に出土しました。

このたび、西片稲村遺跡・中片小路遺跡の報告書を刊行することになりましたが、本報告書が広く県民の文化財に対する認識と理解を深めることになることを願います。

なお、発掘調査を実施するにあたり、ご協力とご指導頂きました、鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部九州新幹線建設局、熊本県土木部新幹線都市整備総室、同新幹線八代事務所、八代市教育委員会及び地元の関係者の皆様方に深く感謝申し上げます。

平成17年3月31日

熊本県教育長　柿塚　純男

例　言

1　本書は、九州新幹線新八代・西鹿児島間建設工事に伴って実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2　発掘調査は、熊本県八代市西片町及び中片町に所在する西片稲村遺跡と中片小路遺跡が対象で鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部九州新幹線建設局の委託を受けた熊本県教育委員会が実施した。

3　遺物の整理は、熊本県教育庁文化課文化財整理室新幹線整理棟で熊本県教育委員会が実施した。
なお、遺物等の一切の資料は平成１６年３月３１日現在文化財資料室で一括保管している。

4　遺跡の発掘調査は、平成１４年度に実施し、整理は平成１５年度に実施した。

5　本書の地形図は、鉄道建設・運輸施設整備支援機構鉄道建設本部九州新幹線建設局から提供を受けたものを基にして作成した。

6　現地調査での実測及び写真撮影は、坂口圭太郎・出田久斎・西山由美子・森貴志・米村大が実施した。

7　遺物の実測は、横山明代・坂本千恵・井上裕美・古閑満代・佐藤淳子・園田智子・田中智恵美・平川早苗・森崎潔子が実施した。遺物の製図は横山・坂本・井上・古閑・佐藤・園田・田中が実施し、遺構の製図は横山・坂本・井上・古閑・佐藤・森崎が実施した。遺物の写真撮影は村田百合子・古閑が実施した。遺物の観察は坂田和弘（熊本県教育庁文化課）の助言を受けて坂口が実施した。

8　本書の執筆は坂口が実施した。遺物の色調は『新版標準土色帖2000年版』（日本色彩研究所）を基準に使用した。また、陶磁器の釉調は『中国の伝統色第2版』（大日本インキ化学）を基準に使用した。

9　現場の写真選別は坂口が実施した。本文の文章チェックは坂本が実施した。

10　本書の編集は坂口が実施し、校正を坂本が行った。

凡　例

1　現地での実測図は、以下の縮尺で作成した。

全体遺構図	100分の1
掘立柱建物	10分の1・20分の1
溝状遺構	10分の1・20分の1
井戸・土壙・竪穴住居・土層図	10分の1

2　本書収録の際には以下の縮尺で作成した。

全体遺構図	500分の1（西片稲村遺跡）、300分の1・200分の1（中片小路遺跡）
掘立柱建物	60分の1
溝状遺構・道路状遺構	10分の1・40分の1
井戸・土壙・竪穴住居	30分の1
不明遺構	30分の1・40分の1
土層図	50分の1

3　遺構の方位は真北である。

4　遺構は、竪穴住居＝SI、掘立柱建物＝SB、柵列＝SA、井戸＝SE、不明遺構＝SX、溝状遺構＝SD、土壙＝SK、道路状遺構＝SRと記号化した。

5　出土遺物の番号は、各図版毎に通して附した。なお、縮尺は古銭は1分の1、陶磁器・土器等は3分の1である。

6　出土遺物の解説は本文中に記した。

本 文 目 次

序文
例言・凡例

第１章　調査の概要 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 3
　　１　調査の契機 …… 3
　　２　事業照会と予備調査の経過 …… 3
　　３　調査の組織 …… 4
　第２節　調査の方法と経過 …… 6
　　１　調査の方法 …… 6
　　２　調査の経過 …… 6

第２章　遺跡の概要 …… 9
　第１節　遺跡の環境 …… 11
　　１　地理的環境 …… 11
　　２　歴史的環境 …… 11
　第２節　遺跡の概要 …… 17
　　１　西片稲村遺跡 …… 17
　　２　中片小路遺跡 …… 17

第３章　西片稲村遺跡での調査とその成果 …… 19
　第１節　遺構の概要 …… 21
　　１　竪穴住居(SI) …… 23
　　２　掘立柱建物(SB) …… 38
　　３　溝状遺構(SD) …… 48
　　４　土壙(SK) …… 51
　　５　井戸(SE) …… 55
　　６　その他の遺物 …… 55

第４章　中片小路遺跡での調査とその成果 …… 57
　第１節　Ⅰ区の遺構とそれに伴う遺物 …… 61
　第２節　Ⅱ区の遺構とそれに伴う遺物 …… 65
　第３節　Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ
　第４節　Ⅵ区の遺構とそれに伴う遺物 …… 96
　第５節　Ⅶ区の遺構とそれに伴う遺物 …… 102
　第６節　Ⅷ区の遺構とそれに伴う遺物 …… 126
　第７節　Ⅸ

第８節　Ｘ区の遺構とそれに伴う遺物 …… 150
第９節　Ⅺ区の遺構とそれに伴う遺物 …… 1

第５章　まとめ …… 189

写真図版 …… 215
あとがき …… 263
報告書抄録 …… 265
奥書

図 版 目 次

第1図　新幹線路線図 …… 5
第2図　周辺遺跡分布図 …… 12
第3図　西片稲村遺跡　基本土層図 …… 17
第4図　中片小路遺跡　基本土層図 …… 18
第5図　西片稲村遺跡　全体遺構配置図 …… 22
第6図　SI001実測図 …… 24
第7図　SI002実測図 …… 25
第8図　SI003実測図 …… 26
第9図　SI004実測図 …… 27
第10図　SI005実測図 …… 28
第11図　SI006実測図 …… 30
第12図　SI005・006出土遺物実測図 …… 31
第13図　SI008実測図 …… 33
第14図　SI008出土遺物実測図 …… 34
第15図　SI009実測図 …… 35
第16図　SI009出土遺物実測図 …… 36
第17図　SI011実測図 …… 37
第18図　SI011出土遺物実測図 …… 38
第19図　SB001・003実測図 …… 39
第20図　SB002・005実測図 …… 40
第21図　SB004・006実測図 …… 41
第22図　SB007・008実測図 …… 42
第23図　SB009・010実測図 …… 44
第24図　SB011実測図 …… 45
第25図　SB012・013実測図 …… 46
第26図　SD005・006・007実測図 …… 47
第27図　SD001実測図 …… 48
第28図　SD005・006・007出土遺物実測図 …… 49
第29図　SK001・002・003・005実測図 …… 50
第30図　SK004実測図 …… 51
第31図　SB002・003、SK002・003・004・005出土遺物実測図 …… 52
第32図　SE001実測図 …… 53
第33図　SE001出土遺物実測図 …… 54
第34図　土錘・一括出土遺物実測図 …… 56
第35図　中片小路遺跡グリッド図 …… 60
第36図　Ⅰ区全体遺構配置図 …… 61
第37図　SD001・002・003実測図 …… 62

第38図　SK001及び出土遺物実測図 …… 63
第39図　一括出土遺物実測図 …… 63
第40図　II区全体遺構配置図 …… 65
第41図　SD004・一括出土遺物実測図 …… 66
第42図　Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区全体遺構配置図 …… 67-68
第43図　SI001実測図 …… 70
第44図　SI001出土遺物実測図 …… 71
第45図　SB001実測図 …… 71
第46図　SB002・003実測図 …… 72
第47図　SB004・005実測図 …… 73
第48図　SB006・007実測図 …… 74
第49図　SB008・009実測図 …… 76
第50図　SB010・011実測図 …… 77
第51図　SB012・013実測図 …… 78
第52図　SB014・015実測図 …… 79
第53図　SB016実測図 …… 80
第54図　SD008実測図 …… 81
第55図　SD009・010・011・012・013・014実測図 …… 82
第56図　SB005・SD016・017出土遺物実測図 …… 83
第57図　SD015・016・017・018・019実測図 …… 84
第58図　SK002・003・004・005・006実測図 …… 86
第59図　SK005出土遺物実測図 …… 87
第60図　SK007・008・009・010・011・012実測図 …… 87
第61図　SK013・014・015実測図 …… 88
第62図　SE001実測図 …… 89
第63図　SE001出土遺物実測図 …… 90
第64図　SE002実測図 …… 91
第65図　SE002出土遺物実測図 …… 92
第66図　SX001及び出土遺物実測図 …… 93
第67図　Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区出土遺物実測図 …… 94
第68図　Ⅳ・Ⅴ区鞴(羽口)実測図 …… 95
第69図　Ⅵ区全体遺構配置図 …… 96
第70図　SX002・003・004、SD022・023・024実測図 …… 97
第71図　SK016・017・018実測図 …… 98
第72図　SD024・SX002・Pit・一括出土遺物実測図 …… 99
第73図　Ⅰ～Ⅵ区一括出土遺物実測図 …… 100
第74図　Ⅰ～Ⅵ区土錘実測図 …… 101
第75図　Ⅶ区全体遺構配置図 …… 103
第76図　SB017実測図 …… 104

第77図　SB018実測図 …… 105
第78図　SD025・026・027・028・029・030、SR001実測図 …… 106
第79図　SD025・026・027・028・029・030、SR001断面図 …… 107
第80図　SD025・026・027・028・029・030出土遺物実測図 …… 109
第81図　SK019・022実測図 …… 110
第82図　SK020・021・030・034実測図 …… 112
第83図　SK019・020出土遺物実測図 …… 113
第84図　SK021出土遺物実測図 …… 114
第85図　SK022出土遺物実測図(1) …… 115
第86図　SK022出土遺物実測図(2) …… 116
第87図　SK022出土遺物実測図(3) …… 117
第88図　SK023・024・025・026・028・029・031・032実測図 …… 119
第89図　SK027・033・035実測図 …… 120
第90図　SE003実測図 …… 121
第91図　SE003、SR001出土遺物実測図 …… 123
第92図　SK021・022・一括出土遺物実測図 …… 123
第93図　Ⅶ区一括遺物実測図 …… 124
第94図　Ⅷ区全体遺構配置図(古代の面) …… 126
第95図　Ⅷ区全体遺構配置図(拡張区・中世の面) …… 127
第96図　SB019・020実測図 …… 129
第97図　SB021実測図 …… 130
第98図　SB022実測図 …… 131
第99図　SB023及び出土遺物実測図 …… 132
第100図　SB024及び出土遺物実測図 …… 133
第101図　SB025実測図 …… 134
第102図　SD031・032・033実測図 …… 135
第103図　SD032出土遺物実測図 …… 135
第104図　SK037・038・039・041・042実測図 …… 137
第105図　SK040・043・044・045・046実測図 …… 138
第106図　SK047・048・049・050・051・073・074、SX005実測図 …… 140
第107図　SK040・041・043・045・051・072出土遺物実測図 …… 142
第108図　SK041・043・044・045・046・073出土遺物実測図 …… 143
第109図　SK041・042・043・051出土遺物実測図 …… 145
第110図　SA001・002実測図 …… 146
第111図　Pit …… 147
第112図　Ⅷ区一括出土遺物実測図 …… 148
第113図　Ⅹ区全体遺構配置図 …… 150
第114図　SB028・035実測図 …… 152
第115図　SB036・037実測図 …… 153

第116図　SB038実測図 …… 154
第117図　SK052・053・SK054実測図 …… 155
第118図　SK055・056・057・058、ST001実測図 …… 156
第119図　SE004実測図 …… 157
第120図　SD・SK・SE・Pit
第121図　XI区全体遺構配置図 …… 160
第122図　SB029実測図 …… 162
第123図　SB030実測図 …… 163
第124図　SB031実測図 …… 164
第125図　SB032実測図 …… 165
第126図　SB033実測図 …… 166
第127図　SB034実測図 …… 167
第128図　SD039・040実測図 …… 168
第129図　SD036・037・038・041・042・043・044・SX012実測図 …… 169
第130図　SD044断面図 …… 170
第131図　SD039・040・044出土遺物実測図 …… 171
第132図　SD044出土遺物実測図(1) …… 172
第133図　SD044出土遺物実測図(2) …… 173
第134図　SD044出土遺物実測図(3) …… 174
第135図　SK061・062・063・064・065・066実測図 …… 176
第136図　SK067・068・071実測図 …… 178
第137図　SK058・061・065・067・071出土遺物実測図 …… 179
第138図　SK058・059・060・SX007・010実測図 …… 180
第139図　SX006・011実測図 …… 181
第140図　SX008・009実測図 …… 182
第141図　SX006出土遺物実測図 …… 183
第142図　SX007・009・011出土遺物実測図 …… 184
第143図　Pit
第144図　VIII・XI区出土銅銭 …… 187

写 真 図 版

PL.1 空撮(周辺地域)
PL.2 空撮(西片稲村遺跡周辺)
PL.3 西片稲村遺跡全景
PL.4 SI001完掘状況
PL.5 SI002～4完掘状況
PL.6 SI002～4完掘状況
PL.7 SI004完掘状況
PL.8 SI006完掘状況
PL.9 SI009完掘状況
PL.10 SB001 完掘状況
PL.11 SB002完掘状況
PL.12 SB003完掘状況
PL.13 SB004完掘状況
PL.14 SB005完掘状況
PL.15 SB013完掘状況
PL.16 SD001完掘状況
PL.17 SD001完掘状況
PL.18 SD005完掘状況
PL.19 SD006･7完掘状況
PL.20 SK002完掘状況
PL.21 SK003完掘状況
PL.22 SE001石材検出状況
PL.23 SE001石組完掘状況
PL.24 SE001井戸枠検出状況
PL.25 SE001井戸枠
PL.26 SI005出土遺物
PL.27 SI006･8出土遺物
PL.28 SI009出土遺物
PL.29 SI009･11出土遺物
PL.30 SD005･6･7出土遺物
PL.31 SE001出土遺物
PL.32 SB002･3、SK002～5出土遺物
PL.33 調査区一括遺物
PL.34 Ⅰ区溝状遺構完掘状況
PL.35 II区完掘状況
PL.36 Ⅲ･Ⅳ･Ⅴ区完掘状況
PL.37 Ⅵ区完掘状況
PL.38 Ⅶ区完掘状況
PL.39 Ⅷ区完掘状況
PL.40 X区完掘状況
PL.41 XI区完掘状況
PL.42 Ⅲ区SB001完掘状況
PL.43 Ⅲ区SI001完掘状況
PL.44 SX001遺物出土状況
PL.45 Ⅳ･Ⅴ区SB002･3完掘状況
PL.46 Ⅳ･Ⅴ区SB004完掘状況
PL.47 Ⅳ･Ⅴ区SB005完掘状況
PL.48 Ⅳ･Ⅴ区SB011完掘状況
PL.49 Ⅳ･Ⅴ区SB013完掘状況
PL.50 Ⅳ･Ⅴ区SB012･15完掘状況
PL.51 Ⅳ･Ⅴ区SD009･17完掘状況
PL.52 Ⅳ･Ⅴ区SD009･17完掘状況
PL.53 Ⅳ･Ⅴ区SD019完掘状況
PL.54 Ⅳ･Ⅴ区SB002･3完掘状況
PL.55 Ⅵ区SK016完掘状況
PL.56 Ⅵ区K017完掘状況
PL.57 Ⅵ区SK018半裁状況
PL.58 Ⅵ区SX002完掘状況
PL.59 Ⅶ区SB018完掘状況
PL.60 Ⅶ区SD030完掘状況
PL.61 Ⅶ区SR001断面状況
PL.62 Ⅶ区SR001･SD030完掘状況
PL.63 Ⅶ区SK019検出状況
PL.64 Ⅶ区SK022遺物出土半裁状況
PL.65 Ⅶ区SK019完掘状況
PL.66 Ⅶ区SK025･26完掘状況
PL.67 Ⅶ区SK027完掘状況
PL.68 Ⅶ区SK031･32完掘状況
PL.69 Ⅶ区SK035完掘状況
PL.70 Ⅶ区ＳＫ035完掘状況
PL.71 Ⅶ区SD025･26完掘状況
PL.72 Ⅶ区SR001完掘状況
PL.73 Ⅶ区SD028･029完掘状況
PL.74 Ⅷ区SB021完掘状況

PL.75　Ⅶ区SB021・23完掘状況
PL.76　Ⅶ区SB024完掘状況
PL.77　Ⅶ区SK039完掘状況
PL.78　Ⅶ区SK039完掘状況
PL.79　Ⅶ区Pit
PL.80　Ⅶ区SK042完掘状況
PL.81　Ⅶ区SK043完掘状況
PL.82　Ⅷ区SK045完掘状況
PL.83　Ⅷ区拡張区完掘状況
PL.84　Ⅷ区拡張区完掘状況
PL.85　Ⅹ区SE004完掘状況
PL.86　Ⅹ区完掘状況
PL.87　Ⅺ区SB030 Pit
PL.88　Ⅺ区SB029完掘状況
PL.89　Ⅺ区SB029完掘状況
PL.90　Ⅺ区SB030完掘状況
PL.91　Ⅺ区SB031完掘状況
PL.92　Ⅺ区SB034完掘状況
PL.93　Ⅺ区SD036・37・38完掘状況
PL.94　Ⅺ区SB031完掘状況
PL.95　Ⅺ区SD043完掘状況
PL.96　Ⅺ区SD044完掘状況
PL.97　Ⅺ区SD044完掘状況
PL.98　Ⅺ区SD044水没状況
PL.99　Ⅺ区SD044検出状況
PL.100　Ⅺ区SK065完掘状況
PL.101　Ⅺ区SX009擂鉢出土状況
PL.102　Ⅺ区SX009土坑半裁状況
PL.103　Ⅺ区Pit
PL.104　Ⅺ区SX006遺物出土状況
PL.105　Ⅺ区SX006遺物出土状況
PL.106　Ⅺ区SX006・SD039完掘状況
P.L107　Ⅺ区SX007半裁状況
PL.108　Ⅺ区SX007半裁状況
PL.109　Ⅺ区SX011完掘状況
PL.110　Ⅹ区SE004井戸枠検出状況
PL.111　Ⅹ区SE004井戸枠
PL.112　Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ区出土遺物
PL.113　Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区出土遺物(1)
PL.114　Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区出土遺物(2)
PL.115　Ⅵ・Ⅰ～Ⅵ区出土遺物
PL.116　Ⅶ区出土遺物(1)
PL.117　Ⅶ区出土遺物(2)
PL.118　Ⅶ区出土遺物(3)
PL.119　Ⅶ区出土遺物(4)
PL.120　Ⅶ区出土遺物(5)
PL.121　Ⅷ区出土遺物(1)
PL.122　Ⅷ区出土遺物(2)
PL.123　Ⅷ区出土遺物(3)
PL.124　Ⅹ区出土遺物
PL.125　Ⅺ区出土遺物(1)
PL.126　Ⅺ区出土遺物(2)
PL.127　Ⅺ区出土遺物(3)
PL.128　Ⅺ区出土遺物(4)

表　目　次

第１表　周辺遺跡一覧表 …… 13
第２表　西片稲村遺跡 出土遺物観察表 ・
第３表　西片稲村遺跡 土錘観察表 …… 197
第４表　中片小路遺跡 出土遺物観察表 …… 198
第５表　中片小路遺跡 陶磁器観察表 …… 208
第６表　中片小路遺跡 土錘観察表 …… 211
第７表　中片小路遺跡 石製品観察表 …… 212
第８表　中片小路遺跡 紡錘車・鞴観察表 … 213
第９表　中片小路遺跡 銅銭観察表 …… 213
第10表 中片小路遺跡 特殊遺物観察表 …… 213

第１章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

１　調査の契機

２　事業照会と予備調査の経過

３　調査の組織

第２節　調査の方法と経過

１　調査の方法

２　調査の経過

第１章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

１　調査の契機

九州新幹線新八代・西鹿児島間は、政府によって昭和47年６月27日に基本計画が決定され、昭和48年11月13日に整備計画が決定された。ここに博多－西鹿児島間の257kmの九州新幹線新八代・西鹿児島間建設計画が具体的に定まり、昭和61年８月29日に工事実施計画が申請された。

しかし、緊急景気対策や緊急雇用対策等の社会施策の変化に伴い、全体計画のうち新八代－西鹿児島間の126.07kmを平成３年８月９日に工事実施計画が申請され、同年８月22日に認可された。

これを受けて平成３年９月７日に建設工事が起工し、平成15年度に八代－西鹿児島間の開通を目指す九州新幹線新八代・西鹿児島間の具体的な建設が開始された。

２　事業照会と予備調査の経過

平成９年５月６日の旧日本鉄道建設公団九州新幹線建設局からの津奈木町域での文化財の照会並びに試掘調査の依頼を皮切りに、熊本県内でも新幹線建設に伴う埋蔵文化財調査が本格化した。

八代市域でも旧日本鉄道建設公団九州新幹線建設局の依頼を受けて、県文化課が平成10年度に遺跡台帳の照合と現地踏査を実施した。その結果、建設工事予定地内に周知の埋蔵文化財包蔵地が多数含まれることが判明した。県文化課は、この結果を受けて旧日本鉄道建設公団九州新幹線建設局に建設予定地での試掘調査並びに確認調査が必要な旨を通知した。

県文化課は平成11年７月の西片町での試掘調査を皮切りに予備調査を開始し、平成12年11月には本線建設予定地の八代市西片町及び中片町での試掘調査を実施した。

その結果、柱穴や土壙等の遺構と土師器や須恵器等の遺物を確認したため県文化課は、平成12年12月13日に旧日本鉄道建設公団九州新幹線建設局長及び八代市教育委員会へ試掘結果を通知すると共に当該地での本調査が必要な旨と未調査の部分での今後の予備調査が必要な旨を通知した。

この後、八代市教育委員会と旧日本鉄道建設公団九州新幹線建設局と熊本県教育庁文化課で協議を行い埋蔵文化財包蔵地内での工事前の記録保存実施を決定した。

協議の結果を受けて、平成13年度から西片稲村遺跡及び中片小路遺跡の調査を開始し、両遺跡の本調査は翌年の平成14年度まで実施された。

３　調査の組織

【

調査責任者　阪井大文（文化課長）、島津義昭（課長補佐）

調査総括　　高木正文（主幹兼調査第1係長）

調査担当　　長谷部善一（主任学芸員）

調査事務局　川上康治（課長補佐）、中村幸宏（主幹兼総務係長）、上村修治（参事）、広瀬泰之（参事）

杉村輝彦（主事）

【

調査責任者　阪井大文（首席教育審議員兼文化課長）、島津義昭（課長補佐）

調査総括　　高木正文（主幹兼調査第1係長）

調査担当　　【西

坂口圭太郎（県文化課　文化財保護主事）

田口剛（熊本県新幹線都市整備総室　技師）

西山由美子・森貴志（県文化課　嘱託：西片稲村遺跡）

【中

出田久斎（県文化課　文化財保護主事）

米村　大（県文化課　嘱託）

調査事務局　小田信也（課長補佐）、中村幸宏（主幹兼総務係長）、広瀬泰之（参事）、杉村輝彦（主事）

助言及び協力者　山本信夫（山本考古研究所）、八代市教育委員会（吉永明、澤田宗順、濱田健資、山内淳司）、八代市立博物館未来の森ミュージアム（阿蘇品保夫、福原透、早瀬輝美、石原浩、山崎摂、林千寿）、日本鉄道公団九州新幹線建設局八代鉄道建設所、新幹線八代事務所、八代市新幹線推進室

【

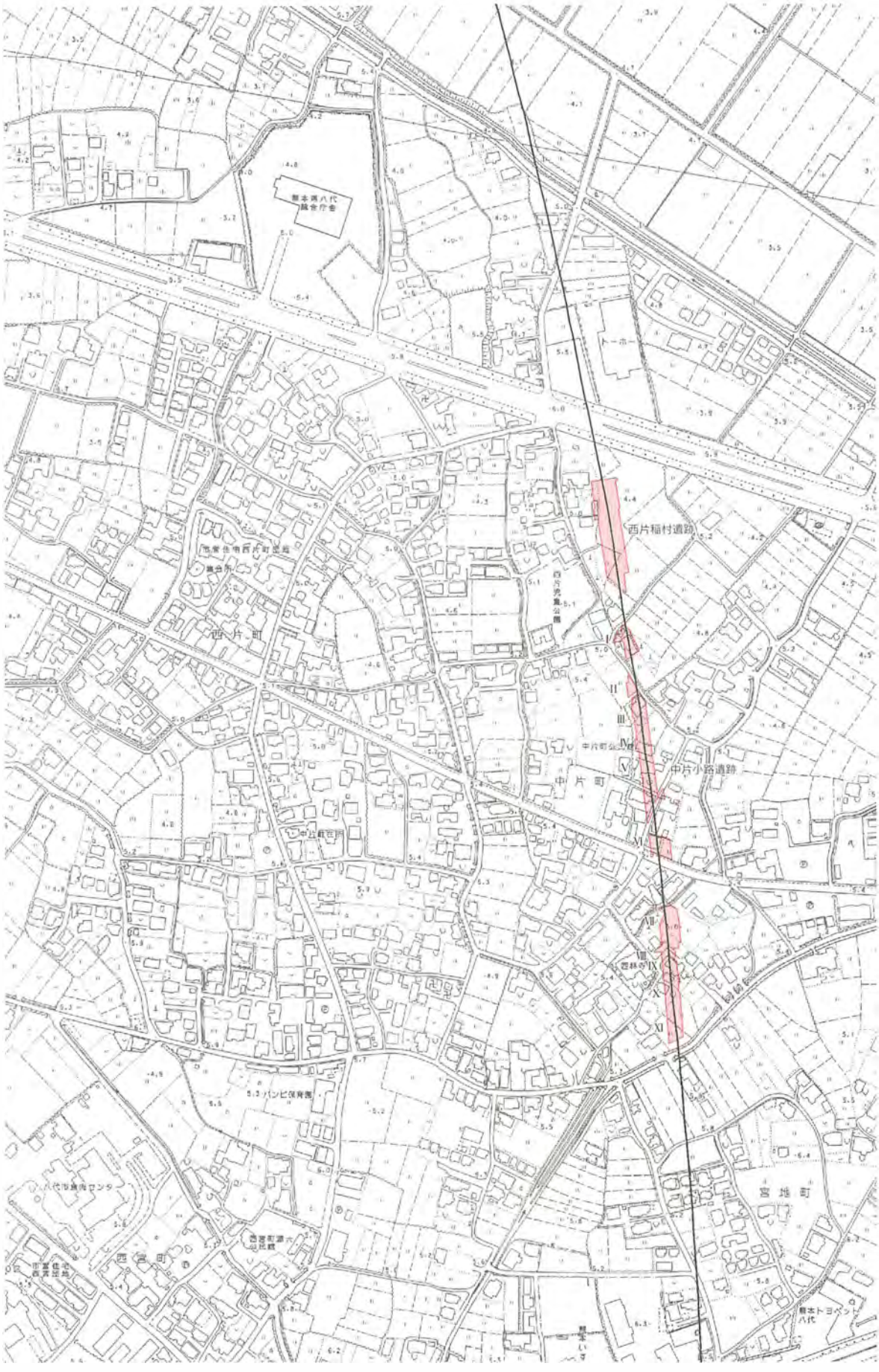
調査責任者　成瀬烈大（文化課長）、島津義昭（課長補佐）

調査総括　　高木正文（主幹兼調査第1係長）

調査担当　　坂口圭太郎（文化課　参事）

横山明代・坂本千恵・中尾健照（文化課　嘱託）

調査事務局　吉田惠（課長補佐）、欄杭正義（主幹兼総務係長）、天野寿久（主任主事）、杉村輝彦（主事）



第1図　新幹線路線図(1/5,000)

第２節　調査の方法と経過

1　調査の方法

調査区は水田であったので、まず重機による耕作土除去を行い、作業員による遺構検出を行った。続いて、遺構の配置図作成のために国土座標軸に合わせたグリッドを調査区内に設定した。設定した方眼の一辺の長さは5mとした。

調査地は耕作土(Ⅰ層)が厚さが約30cmほど堆積し、その直下に硬くしまった旧耕作土の床土(II層)が5cmほどの厚みを持っていた。Ⅰ・II層を除去すると黄褐色の堆積土(Ⅲ層)があり、この層に掘り込まれた遺構が検出された。

2　調査の経過

西片稲村遺跡は平成13(2001)年4月15日に本調査を開始し、平成13(2001)年9月28日に終了した。同じく、中片小路遺跡は平成12(2001)年8月2日に本調査を開始し、平成14(2002)年3月31日に終了した。

以下、その経過を遺跡毎に整理して経過を記す。

西片稲村遺跡

平成13年(2001)年

【4月】

西片稲村遺跡の調査は、平成13年4月15日から重機による表土剥ぎを着手した。

【

5月の連休明けから作業員を雇用し本格的な調査に入った。調査区全域の基本層序の確認と併せて全面の遺構検出を行った。この結果、Ⅲ層の面を掘り込んで全ての遺構が存在することがわかり、古墳時代から中世にかけて同じレベルで遺構の掘削作業を実施することにした。

【6

雨天が続き、調査区が水没し、調査が断続的に中断させられた。

【

梅雨が過ぎ、ようやく調査区の遺構掘削作業が再開出来た。まず、古代～中世の遺物を含む、溝状遺構と掘立柱建物跡及び竪穴住居跡の掘削作業、遺構実測及び遺構写真撮影を実施した。

古代から中世にかけての遺構の掘削を引き続き実施した。調査区の東側で集石遺構を検出した。凝灰岩の切石は五輪塔の地輪と考えられるため、中世の塚の可能性も視野に入れ実測作業を進めた。

【8月】

古代～中世にかけてのすべての遺構の掘削作業を終了した。遺構実測作業と平行して、集石遺構の掘削を進めた。さらに、水路付け替えに伴う調査区西側の表土を新たに除去し拡張して調査を開始した。

【

集石遺構が井戸を埋めた跡と判明したため、全ての石を遺構から除去した。井戸底より、木製の刳り貫き木枠が検出された。全ての調査区の遺構掘削、遺構実測及び遺構写真撮影が終了した。調査員と作業員の全てが10月から中片小路遺跡(Ⅰ区からⅥ区)の調査へ移行する。

中片小路遺跡(Ⅰ区～Ⅵ区)

【

10月1日からⅠ区～Ⅵ区の表土除去に着手する。基本的な層序は、西片稲村遺跡と変わらないため、Ⅰ層(耕作土)を除去後、全体の遺構検出を行った結果、西片稲村遺跡同様、Ⅲ層の面を掘り込んで全ての遺構が存在することがわかり、古墳時代から近世にかけて同じレベルでの遺構の掘削作業を実施することにした。

【

古代～近世の遺物を含む溝状遺構及び土坑と掘立柱建物跡の掘削作業、遺構実測及び遺構写真撮影を実施した。特にⅥ区では、中世から近世にかけての溝状遺構と柱穴群のより時代の古い遺構は検出されなかったため、先行して調査を終了した。11月19日終了。Ⅰ区については、近世の異物を含む区画された溝を検出した。Ⅱ区及びⅢ区では、数度に渡って掘り返された溝状遺構を検出した。この溝は、遺跡を南北に分断していた。

【

Ⅰ区～Ⅲ区の調査を終了した。Ⅴ区については、調査面積が区の中で一番広く、かつ遺構が密集しているため、調査に時間が懸かった。このころから、現場での霜対策が必要になってきており、朝は霜柱の掃除追われていた。

【

Ⅳ区の調査を終了した。Ⅴ区では、古墳時代の住居跡を確認したため、更に掘削作業を進めた。

【

全ての調査区を終了した。Ⅵ区を除けば、遺跡の性格は西片稲村遺跡とほぼ同様であった。言い換えれば、Ⅵ

中片小路遺跡（Ⅶ区～Ⅺ区）

平成12年(2000)年

【8

中片小路遺跡の調査は、Ⅺ区から調査に着手し、平成12年8月4日から重機による表土剥ぎを実施した。表土除去後、遺構検出を行い、溝状遺構、土坑及びピット群を検出した。

【

調査区全域の基本層序の確認と併せて検出したピット群の発掘を行った。また、土坑の遺物が近代から近世初頭のものと判明した。また中世の遺物を含む掘
測作業及び遺構写真撮影に入った。また、複数の時期に渡る溝状遺構については、近世の遺物を含む比較的新しい遺構から、発掘を行った。

【

掘立柱建物がほぼ、完掘した。溝状遺構については、数度のわたる利用状況が判明し、時期ごとに、慎重な掘削の必要性を認識した。

【

溝状遺構以外の遺構は、ほぼ掘削が終了した。溝状遺構については、古墳時代の遺物を含む層まで発掘作業が進んだ。遺構実測作業と遺構写真撮影を進め、すべての作業を11月30日に終了した。

【

事務所の整理と図面整理を行った。

第２章　遺跡の概要

第１節　遺跡の環境

１　地理的環境

２　歴史的環境

第２節　遺跡の概要

１　西片稲村遺跡

２　中片小路遺跡

第２章　遺跡の概要

第１節　遺跡の環境

１　地理的環境

西片稲村遺跡・中片小路遺跡は、八代平野の北西の沖積平野に存在する。西に八代海が広がり、東に九州山地を望んでいる。八代平野は近世から現代に至る干拓により形成されており、全平野面積のほぼ80％が旧干潟からなる。本来の地形は、九州山地から流れる氷川をはじめとする、いくつかの河川が流れ込んで形成されていた、沖積平野であった。現在の鹿児島本線が往事の海岸線であるとする研究史もあり、現在の環境とは大きくことなる点である。

本遺跡は、旧沖積平野の微高地に位置している。八代市史によるところでは、この地に開田が及んだのは、中世であり、その後、干拓による海岸線の移動で今の景観になったと考えられる。従来は、四方に水田が広がる田園地帯であったが、近年の開発により、宅地化が進み、また九州新幹線建設工事や大型の商業施設が進出するに及んで、急速な変貌を遂げている。

２　歴史的環境

本遺跡の周辺には、数多くの遺跡が存在する。古くは弥生時代から、近世にかけて生活の拠点として利用されている。前節でも触れているが、八代平野は干拓により作り出された人工的な平野であり、従来は干潟であった。本遺跡は干拓以前の干潟を望んだ微高地に位置しており、西側への遺跡の広がりはあまり認められない。むしろ東側の九州山地へ向かい広がりを見せている。

周辺の遺跡では、西片百田遺跡をはじめとするいくつかの遺跡が挙げられる。その中で九州新幹線建設工事に伴って新たに発見された遺跡について紹介しておく。

西片百田遺跡は、弥生から古墳にかけての集落址であり、現在整理報告書作成中である。キリシタン寺院跡は小西行長の時代に造られたキリシタン遺跡であり、瓦が表採されている。従来の寺院を壊した後に建てられたと資料に記されているが、今回の調査では明確な答えは検証出来なかった。上日置女夫木遺跡は、西片百田遺跡よりやや、新しい時期に営まれた、集落と墓域を併せ持った遺跡である。西片園田遺跡は、木器が多量に出土した貴重な遺跡である。島田遺跡は、弥生時代前期の集落址で、八代平野で確認された最も古い集落である。

第2図　周辺遺跡分布図(1/50,000)

第1表　周辺主要遺跡一覧表

遺構番号	遺　跡　名	所　在　地	時　代	種　別	指定	備　　考
202-001	産島古墳群	古閑浜町　産島	古墳	古墳		
	第1号墳	古閑浜町　産島	古墳	古墳		箱式石棺・人骨・三社権現が建つ
	第2号墳	古閑浜町　産島	古墳	古墳		箱式石棺・冠・剣・鏡・三社権現が建つ
	第3号墳	古閑浜町　産島	古墳	古墳		箱式石棺・人骨・三社権現が建つ
202-002	産島貝塚	古閑浜町　産島	縄文～古墳	貝塚	市	押型文・曾畑・黒川・黒髪・免田・須恵
202-003	群築十二番町	群築十二番町	縄文	包蔵地		黒川・西平・御領・鹿角出土
202-004	車塚古墳	川田町東　車塚	古墳	古墳		前方後円墳、周囲は水田、墳丘の一部削平
202-005	川上古墳群	川田町東　川上	古墳	古墳		
	第1号墳	川田町東　川上	古墳	古墳		鬼の岩屋式石室、蜜柑園に石室露出
	第2号墳	川田町東　川上	古墳	古墳	市	鬼の岩屋式石室、蜜柑園に石室露出
	第3号墳	川田町東　川上	古墳	古墳		雑木林に石材が散在する
202-006	東川田	川田町東　西	弥生	包蔵地		磨製石斧・弥生土器・土師器・五輪・板碑
202-007	岡塚古墳群	川田町東　岡塚	古墳	古墳		
	第1号墳	川田町東　岡塚	古墳	古墳		通称「前塚」、円墳・現在畑地
	第2号墳	川田町東　岡塚	古墳	古墳		通称「岡の坊古墳」、前方後円墳・墳丘は畑
202-008	川田京坪	川田町西　京坪	弥生～近世	包蔵地		弥生・土師・須恵・瓦・近世陶磁器
202-009	川田小築	川田町西　小築	近世	包蔵地		木製品・近世陶磁器
202-010	西川田古墳群	川田町西　久木原	古墳	古墳		
	第1号墳	川田町西　久木原	古墳	古墳		
	第2号墳	川田町西　久木原	古墳	古墳		
	第3号墳	川田町西　久木原	古墳	古墳		
202-011	沖片	西片町　辻田他	弥生	包蔵地		須恵器・土師器・軽石製人面・黒髪・野辺田
202-012	橋ノ上貝塚	西片町　橋ノ上	古墳	貝塚		弥生土器・土師器、墓地
202-034	浄沢寺貝塚	古閑中町　碇	古墳	貝塚		須恵器・土師器・浄沢寺境内内及び周辺
202-035	船蔵貝塚	上野町　船蔵	古墳	貝塚		須恵器・土師器
202-036	砲塚貝塚	上野町　砲塚	古墳	貝塚		須恵器・土師器
202-037	芝口貝塚	田中町　芝塚	古墳	貝塚		獣骨
202-038	夫婦石貝塚	古閑上町　聖神	古墳	貝塚		須恵器・土師器・夫婦石周辺
202-039	古閑上町貝塚	古閑上町　聖神	古墳	貝塚		須恵器・土師器
202-040	用七古墳	長田町　用七	古墳	古墳		箱式石棺・剣、線路西側に移設、石材を石碑に転用
202-041	竹原	竹原町　空正	弥生～古墳	包蔵地		須恵・土師・石鍋・土錘・野辺田・西新、病院敷地内
202-042	竹原町古墳群	竹原町・上日置町ほか	古墳	古墳		10基
202-043	日置町古塔群	上日置町　白石	中世	石造物		五輪塔・10基・第二中校庭出土
202-044	日置町貝塚	日置町　東畑	古墳	貝塚		須恵器・土師器・土錘出土、太田郷小校庭内
202-045	いら塚古墳	井上町　正里	古墳	古墳		円墳、須恵器、周囲は水田
202-046	鐘楼堂貝塚	井上町　鐘楼堂	弥生～古墳	貝塚	市	黒髪・免田・野辺田・土師器・須恵・土錘
202-047	鐘楼堂	井上町　鐘楼堂	縄文～古墳	包蔵地		土師・須恵・夜臼・磨製石斧、宅地・畑地
202-048	鐘楼堂古墳	井上町　鐘楼堂	古墳	古墳		石室は埋没し上に堂が建つ
202-050	長田町	長田町　一本橋	縄文～古墳	包蔵地		弥生・須恵器・土師器・黒髪・野辺田
202-051	西片町	西片町　稲村・園田	弥生	包蔵地		弥生・須恵器・土師器・黒髪・野辺田
202-052	虚空蔵古墳	長田町　大間	古墳	古墳	市	鬼の岩屋式石室、石室露出
202-053	白石貝塚	上日置町　白石	弥生～古墳	貝塚		須恵器・土師器・布目瓦・黒髪・人骨・土錘、蜜柑園
202-054	東片町古墳群	東片町　岡神(上)	古墳	古墳		
202-055	天神古墳	東片町　岡神(上)	古墳	古墳		円墳、天神を祭る、墳頂に石灰岩巨石が露出
202-056	岡ノ上古墳	東片町　岡神(上)	古墳	古墳		
202-057	むかいやぼ古墳	東片町　岡神(上)	古墳	古墳		蜜柑園に石材が残る
202-058	御経塚古墳	東片町　岡神(上)	古墳	古墳		円墳、墳丘が残る
202-059	長塚古墳	上片町　下野森	古墳	古墳		前方後円墳、土師・須恵・円筒・埴輪、蜜柑園

遺構番号	遺　跡　名	所　在　地	時　代	種　別	指定	備　　考
202-060	大塚古墳	上片町　下野森	古墳	古墳	市	最大の前方後円墳、須恵・人物埴輪（女性）、用水路横断
202-061	茶臼山古墳	上片町　下野森	古墳	古墳	市	二段築円墳、茶臼の形
202-062	方見堂	東片町　方見堂	近世	包蔵地		弥生・須恵・土師・瓦・近世陶磁器他
202-063	高取上ノ山古墳	上片町　高取	古墳	古墳		前方後円墳、横穴式石室、側壁の一部が残る
202-064	上片町鬼の岩屋古墳群	上片町　高取	古墳	古墳		
	第1号墳	上片町　高取	古墳	古墳	市	鬼の岩屋式石室、国道3号線脇に石室露出
	第2号墳	上片町　高取	古墳	古墳		墓地
	第3号墳	上片町　高取	古墳	古墳		周辺は水田、墳丘の一部が残る
	第4号墳	上片町　高取	古墳	古墳		鬼の岩屋式石室、安山岩巨石3個、須恵器
	第5号墳	上片町　高取	古墳	古墳		通称天神岩、・円墳、墳頂に安山岩巨石が露出
202-065	乙丸古墳群	宮地町	古墳	古墳		
	第1号墳	宮地町　五反田	古墳	古墳		畑
	第2号墳	宮地町　乙丸	古墳	古墳		畑
	第3号墳	宮地町　乙丸	古墳	古墳		土師・須恵・白磁・青磁・天目
	第4号墳	宮地町　乙丸	古墳	古墳		
	第5号墳	宮地町　乙丸	古墳	古墳		蜜柑園に石室残欠
	第6号墳	宮地町　乙丸	古墳	古墳		前方後円墳、蜜柑園に墳丘の一部残る
	第7号墳	宮地町　乙丸	古墳	古墳		墓地、畑
	第8号墳	宮地町　乙丸	古墳	古墳		畑、宅地
	第9号墳	宮地町　二反田	古墳	古墳		畑
	第10号墳	宮地町　二反田	古墳	古墳		畑、墓地
202-066	源六遺跡	西宮町				
202-067	宝泉院勝延行者の墓	西宮町　小寺	近世	墓地		板碑（正保二年銘）
202-068	荒神塚	宮地町　石原	弥生～古墳	包蔵地		黒髪・須恵、用水路一帯
202-069	村上河内屋敷跡	宮地町　池尻	近世	包蔵地		五輪塔残欠
202-070	神宮寺跡	宮地町　池尻	中世～近世	寺社		宮地小敷地
202-071	院主跡	宮地町　小畑	中世～近世	寺社		宅地
202-072	一乗坊跡	宮地町　小畑	中世～近世	寺社		須恵器・土師器、宮地公民館敷地
202-073	観行寺跡	宮地町　小畑	中世～近世	寺社		須恵器・土師器・布目瓦
202-074	宮前	宮地町　小畑	近世	包蔵地		宅地、道路
202-075	池尻	宮地町　池尻	中世～近世	包蔵地		土師器・須恵器・円面硯、五輪塔
202-076	符山焼窯跡	宮地町　池尻	近世	生産		符山焼
202-077	御小袖塚	妙見町　悉知院	中世	墳墓	市	五輪塔・無縫塔、懐良親王ご建立のご両親の陵墓
202-078	護国山顕孝寺跡	妙見町　悉知院	中世	寺社		五輪塔、蜜柑園、懐良親王ご創建のご両親菩提所
202-079	木村喜三次屋敷跡	妙見町　山下	近世	包蔵地	市	
202-080	階下古墳群	西宮町　西階下ほか	古墳	古墳		12基、小型円墳、須恵・土師出土
202-083	松浜軒の茶庭	北の丸町	近世	庭園	県	
202-084	泰勝院跡・細川三斉公毘所の甘草園・泰巖院跡	北の丸町	近世	寺社	市	五輪塔、一中校庭内
202-085	松井神社の茶庭	北の丸町	近世	庭園	市	臥龍梅、鶯宿梅
202-086	八王神社の庚申碑	北の丸町　北ノ丸	近世	石造物	市	代陽小校庭内
202-087	八代城跡	松江城町　他	近世	城	県	中心に八代宮をまつる。内堀、外堀、本丸
202-088	医王寺の庚申碑	袋町	近世	石造物	市	木造薬師如来立像国指定、木造聖観世音菩薩立像県指定
202-089	御客屋敷跡	本町二丁目	近世	包蔵地	市	
202-090	鏡の池跡	迎町二丁目	近世	庭園	市	道路、宅地
202-091	麦島城跡	古城町	中世	城	市	瓦、道路・宅地
202-092	栽柳園	植柳上町	近世～明治	庭園		植柳小校庭内
202-093	洗切貝塚	清水町　洗切	古墳	包蔵地		須恵器、土師器、獣骨
202-095	加藤忠正墓	妙見町　谷	近世	墓	市	五輪塔、泉福山本成寺
202-096	中宮山護神寺跡（塔心礎）	妙見町　中宮	中世	寺社	市	布目瓦・礎石群・塔心礎石・スラッグ、広場
202-097	護神寺製鉄跡	妙見町　中宮	平安～中世	生産		鉄滓
202-098	懐良親王御墓・宝篋印塔	妙見町　中宮	中世	石造物	市	宝篋印塔、御墓内に移設
202-099	妙見中宮跡	妙見町　中宮	中世	寺社	市	布目瓦、畑地、手洗い舎市指定
202-100	櫨場	妙見町　櫨場	古墳	包蔵地		須恵器・土師器・石斧・瓦塔、道路

遺構番号	遺　跡　名	所　在　地	時　代	種　別	指定	備　　考
202-101	山下古墳	古麓町　新城	古墳	古墳		円墳、須恵器出土、新城山下にあり、蜜柑園
202-102	江東山春光寺・実相院の庚申碑	古麓町　地領	近世	石造物	市	五輪塔・板碑、古廟・新廟
202-103	春光寺製鉄跡	古麓町　地領	平安～中世	生産		鉄滓
202-104	御内古墳	古麓町　御内	古墳	古墳		宅地内にあり、須恵器・土師器・金環1
202-105	御内	古麓町　上り山	古墳～中世	包蔵地		須恵器・土師器多数・瑞花双鳳八稜鏡、蜜柑園
202-106	相良義陽墓	古麓町　上り山	中世	墓	市	通称首塚、大正11年移設
202-107	勝尾城跡	古麓町　上り山	中世	城		中世城跡、蜜柑園
202-108	新城跡	古麓町　上り山	中世	城		中世城跡、堀切、古麓歴史自然公園展望所
202-109	丸山城跡	古麓町　上り山	中世	城		
202-110	鞍掛城跡	古麓町　上り山	中世	城		中世城跡、鉄塔、雑木林
202-111	古麓城跡	古麓町　上り山	中世	城	市	
202-112	鷹峯城跡	古麓町　上り山	中世	城		中世城跡、石垣、鉄塔、雑木林、一部蜜柑園
202-113	飯盛城跡	古麓町　上り山	中世	城		中世城跡、堀切、蜜柑園
202-114	遥拝堰	古麓町　上り山	近世	建造物	市	通称「枕瀬」
202-115	懐良親王御所跡	奈良木町　宮園	中世	包蔵地	市	中院義定卿館跡、八代征西府跡
202-116	奈良木古墳群	奈良木町	古墳	古墳		
	第1号墳	奈良木町　三森	古墳	古墳		通称短冊塚、石材1個露出
	第2号墳	奈良木町　三森	古墳	古墳		蜜柑園
	第3号墳	奈良木町　三森	古墳	古墳		通称三森塚円墳、土師・土錘、周囲は水田、墳丘の一部残る
	第4号墳	奈良木町　三森	古墳	古墳		
	第5号墳	豊原上町　遥拝	古墳	古墳		
	第6号墳	奈良木町　中野口	古墳	古墳		
	第7号墳	奈良木町　中野口	古墳	古墳		
	第8号墳	奈良木町　中野口	古墳	古墳		
	第9号墳	奈良木町　三森	古墳	古墳		
	第10号墳	奈良木町　三森	古墳	古墳		円墳、下の口古墳群中の最大円墳
202-117	妙見上宮跡	妙見町　上宮	平安	寺社	県	海抜400m、石囲みあり、布目瓦・土器
202-118	八丁嶽城跡	古麓町　上り山	中世	城		中世城跡
202-119	大島古墳	大島町　前鼻	古墳	古墳		箱式石棺、直刀
202-120	十三重塔	植柳元町	中世	建造物	国	湯前町明導寺より移設、現在十一重
202-121	小鼠蔵山古墳群	鼠蔵町　小島辺	古墳	古墳	市	
	第1号墳	鼠蔵町　小島辺	古墳	古墳	市	竪穴式石室（装飾）、切石組み箱式石棺露出、小山頂点、石室開口
	第2号墳	鼠蔵町　小島辺	古墳	古墳	市	箱式石棺、石棺露出
	第3号墳	鼠蔵町　小島辺	古墳	古墳	市	箱式石棺（装飾）、石棺露出
	第4号墳	鼠蔵町　小島辺	古墳	古墳	市	箱式石棺（装飾）、石材残る
	第5号墳	鼠蔵町　小島辺	古墳	古墳	市	箱式石棺、土師
202-122	木下し窯跡	奈良木町　釜尾	近世	生産		登窯、高田焼、窯道具、蜜柑園
202-123	十二里木跡	平山新町　平山	近世	交通	市	
202-124	平山古墳	平山新町　下山	古墳	古墳		小円墳、横穴石室、剣・鎧・玉類、副葬品多数、蜜柑園に石材残る
202-125	平山城跡	平山新町　下山	中世	城	市	土塁、蜜柑園
202-126	高田焼平山窯跡	平山新町　下山	近世	生産	県	登窯、高田焼、窯道具、蜜柑園
202-127	羽火原火葬墓	奈良木町　羽火原	中世	墓地		蔵骨器
202-129	丸山古墳群	敷川内町　丸山	古墳	古墳		
	第1号墳	敷川内町　丸山	古墳	古墳		地下式板石積石室、高さ70mの丸山頂上、封土を失なう
	第2号墳	敷川内町　丸山	古墳	古墳		地下式板石積石室、高さ71mの丸山頂上、封土を失なう
	第3号墳	敷川内町　丸山	古墳	古墳		地下式板石積石室、高さ72mの丸山頂上、封土を失なう
202-130	丸山製鉄跡	敷川内町　丸山	平安～中世	生産		鉄滓多量、鞴、蜜柑園
202-131	丸山窯跡	敷川内町　丸山	古墳	生産		登窯、須恵器・土師器、蜜柑園
202-132	吉平瓦窯跡	敷川内町　丸山	近世	生産		吉平瓦、蜜柑園
202-133	三宮火葬墓	敷川内町　三宮	中世	墓地		蔵骨器出土、蜜柑園
202-165	小島	郡築十二番町	古墳～中世	包蔵地		人骨
202-168	高島新地旧堤防	井揚町	近代	建造物		石積み堤防
202-173	阿弥陀堂	田中町　阿弥陀堂	中世	包蔵地		土師器、人骨16体、獣骨
202-175	球磨川はね	宮地町　萩原町	近世	建造物		石ばね・石段・敷石
202-176	札の辻跡	本町2丁目	近世	高札場		薩摩街道十一里跡
202-177	正法寺跡	西宮町　階下	中世	寺社		礎石・井戸
202-178	大平城跡	妙見町　大平	中世	城		堀切一ヶ所
202-179	加藤正方父母菩提所安養寺	古麓町　能寺	中世	寺社		妙慶禅尼墓、加藤正方の母
202-180	能寺廃寺跡	古麓町　能寺	中世	寺社		布目瓦

遺構番号	遺　跡　名	所　在　地	時　代	種　別	指定	備　　考
202-181	片岡云正墓	古麓町　新城	中世	墓		五輪塔
202-182	高田手永会所跡	豊原上町　小路	近世	包蔵地		
202-183	うその谷製鉄	奈良木町　うその谷	近世	生産		近世瓦窯・古代炭窯
202-184	薬師堂	奈良木町　寺ノ迫	近世	寺社		堂跡
202-185	木下し	奈良木町　西山ノ田		生産		製鉄炉・鍛冶炉・鉄滓
202-186	万年寺跡	平山新町　平山	近世	寺社		
202-187	松岡屋敷跡	平山新町　平山	中世・近世	館		中世館跡、県教委調査
202-188	平山	平山新町　船河内	中世・近世	生産	県	瓦窯県指定、八代城の瓦
202-189	北新地旧堤防	高植木町	近世	建造物		石積み
202-192	長田町古墳群	長田町　白石	古墳	古墳		巨石横穴石室円墳
202-193	浪川貝塚	十条町　浪川		貝塚		十条製紙工場内
202-198	田平山遺跡	上片町　田平	古代			骨器
202-200	伝習堂と教衙場跡	松江城町	近世	建造物	市	
202-201	永御蔵跡	西松江城町	近世	包蔵地	市	建物のみ現在地に移築
202-202	永御蔵御門と番所跡	古麓町	近世	建造物	市	
202-203	宝泉院屋敷跡	北の丸町　北小路	近世	包蔵地		
202-204	泉福山本成寺跡	妙見町　谷	近世	寺社	市	
202-205	松浜軒	北の丸町	近世	建造物	県	
202-206	泉福山高麗門跡	北の丸町	中世	包蔵地	市	
202-207	悟真寺宝篋印塔	宮地・妙見町　谷	中世	石造物	市	懐良親王御自筆
202-208	中宮山悟真寺	宮地・妙見町　谷	中世	建造物	市	
202-211	新城	古麓町　新城	中世	城		
202-212	三宮屋敷跡	敷川内町　三宮・迫山		包蔵地		
202-213	古麓城下遺跡	古麓町　砥崎	中世	集落		
202-215	織田信長墓五輪塔	北の丸町	中世	石造物	市	
202-218	条里跡		古代・中世	生産		
202-219	条里跡	西片町	古代・中世	生産		
202-220	条里跡	島田町	古代・中世	生産		
202-221	条里跡		古代・中世	生産		
202-222	条里跡	西片町	古代・中世	生産		
202-223	条里跡	東片町				
202-224	島田遺跡	島田町	弥生	集落		
202-225	西片稲村遺跡	西片町　稲村	古代～中世	集落		
202-226	西片百田遺跡	西片町　百田	弥生	包蔵地		黒髪式土器、野部田式土器、須恵器、土師器
202-227	上日置・女夫木遺跡	上日置町　女夫木他	弥生・古墳	集落・墓地		
202-228	古麓能寺遺跡	古麓町　能寺	古代・中世	集落		須恵器、土師器、瓦質土器、陶磁器、建物跡多数
202-229	宮地観行寺遺跡	宮地町　観行寺	古墳～古代	集落		
202-230	宮地小畑遺跡	宮地町　小畑	古墳～近世	集落		
202-231	宮地池尻遺跡	宮地町　池尻	古代～中世	集落		
202-232	宮地年神遺跡	宮地町　年上	弥生～古代	集落		
202-233	キリシタン寺院跡	宮地町				
202-234	中片小路遺跡	中片町　小路他	古墳～近世	集落		
461-001	相良氏墓地	西部ろ　谷向	中世	墓地		14代相良長毎
461-002	亀の尾窯跡　第1・2炉跡	西部ろ　山際	中世	生産		
461-003	今泉製鉄跡	西部ろ　鉄山	中世	生産	県	
461-004	原女木経塚	西部ろ　下原木	中世	経塚		板碑・経石埋納
462-001	島貝塚	新牟田(通称島)	古代	貝塚		土師器・須恵器・瓦器
462-002	上土城跡	大牟田　城	中世	城	町	
462-003	北吉王丸	吉王丸　中の丸	古代・中世	包蔵地		城跡、環濠聚落
463-013	大鞘樋門	両出(通称大鞘)	近世	建造物	町	

※周辺主要遺跡分布図及び周辺遺跡地名表については、平成10年発行の「熊本県遺跡地図」(熊本県教育委員会)と同様の番号を付した。市町村コードにあたる3桁の数字に対応する市町村は以下の通りである。
202…八代市、461…坂本村、462…千丁町、463…鏡町

第２節　遺跡の概要

１　西片稲村遺跡

本遺跡では、現地表下から20cm余りの耕作層(Ⅰ層)があり、この層を除去すると、褐色の層(Ⅱ層)が現れる。このⅡ層中には、古墳時代の遺物が含まれる。暗黄褐色の層(Ⅲ層)には遺物を全く含まない。

今回の調査では、褐色土(Ⅰ層)に掘り込まれた掘立柱建物跡13棟、溝状遺構5条、竪穴住居5軒、土壙4基、井戸1基と暗黄褐色土(Ⅱ層)に掘り込まれた溝状遺構1条、竪穴住居5軒、土壙1基を確認した。褐色の層(Ⅲ層)及び灰色の層(Ⅳ層)には遺構、遺物とも全く含まれなかった。

−20cm	表　土
−35cm	Ⅰ層(褐色粘質土)
−50cm	Ⅱ層(暗黄褐色粘質
−60cm	Ⅲ層(褐色砂質土)
−70cm	Ⅳ層(灰色砂質土)

層位	内　容
Ⅰ層	マンガンを若干含む(包含層中に古墳時代の遺物を若干含む)
Ⅱ層	マンガンを含む(包含層中に遺物を含まない)
Ⅲ層	砂レキを若干含む(包含層中に遺物を含まない)
Ⅳ層	砂レキを多量に含む(包含層中に遺物を含まない)

第3図　西片稲村遺跡　基本土層図

２　中片小路遺跡

本遺跡では、現地表下から20cm余りの耕作層(Ⅰ層)があり、この層を除去すると、褐色の層(Ⅱ層)が現れる。このⅡ層中には、古墳時代の遺物が含まれる。暗黄褐色の層(Ⅲ層)には遺物を全く含まない。土層は西片稲村遺跡と非常に似通っている。

本遺跡の調査は11区に分けて実施した。

Ⅰ区からは近世の遺物を含む溝状遺構が1条と土壙が1基確認された。

Ⅱ区からは溝状遺構が4条確認された。出土遺物から同時期に掘削されたものではないと確認できた。

Ⅲ区からⅤ区にかけては、西片稲村遺跡で検出された、ほぼ同じ時期の遺物を含む掘立柱建物が16棟、溝状遺構が11条、土壙が14基、竪穴住居が1軒、井戸が2基、性格が不明な遺構が1基確認された。

Ⅵ区からは溝状遺構が8条、土壙が4基確認できた。柱穴群も多数確認できたが、建物として並び立つものは確認できなかった。併せて溝状遺構との関連を指す痕跡も確認できなかった。

Ⅶ区からは南北に走る溝状遺構1条と掘立柱建物2棟、土壙8基、焼成遺構1基、井戸1基が確認できた。

この大溝の性格は不明である。生活排水路としては、幅深さとも他の遺跡の事例と比べると、大きすぎる。生活道路として使用されているならば、本来出来るべき硬化面がない。北の水無川からの距離も離れており、用水路としての役目にも疑問符が付く。この遺跡での今後の検討課題である。

Ⅷ区と拡張区からは溝状遺構11条と掘立柱建物8棟、柵列状遺構1基、土壙17基、井戸1基が確認された。

掘立柱建物は建て方が、かなり歪である。出土遺物から古代の時期に作られたと考えられる。

また、この建物を囲む柵列状遺構も検出されている。

Ⅸ区は近世から近現代にかけての墓地であり、地表面から３ｍほどの深さまで、墓穴が及んでおり、かつて遺構が存在した可能性はあるが、墓造営に際し徹底的に破壊されていることが確認できたため、本調査は実施しなかった。

Ｘ区からは掘立柱建物５棟、土壙５基、井戸１基が確認できた。

この調査区の掘立柱建物はⅧ・Ⅸ区の掘立柱建物と比較してほぼ歪みがない。

Ⅺ区からは溝状遺構８条と掘立柱建物６棟、土壙12基、不明遺構６基が確認できた。

土壙のうちSK067は焼土を含む事から焼成遺構とも考えられたが、底に焼跡が認められなかった。

−20cm	表　　土
−35cm	Ⅰ層(褐色粘質土)
−50cm	Ⅱ層(暗黄褐色粘質土)
−60cm	Ⅲ層(褐色砂質土)
−70cm	Ⅳ層(灰色砂質土)
−80cm	Ⅴ層(灰色粘質土)

層位	内　　容
Ⅰ層	マンガンを若干含む(包含層中に古墳時代の遺物を若干含む)
Ⅱ層	マンガンを含む(包含層中に遺物を含まない)
Ⅲ層	砂レキを若干含む(包含層中に遺物を含まない)
Ⅳ層	砂レキを多量に含む(包含層中に遺物を含まない)
Ⅳ層	砂レキを若干含む(包含層中に遺物を含まない)

第4図　中片小路遺跡　基本土層図

第３章　西片稲村遺跡での調査とその成果

第１節　遺構の概要

１　竪穴住居(SI)

２　掘立柱建物(SB)

３　溝状遺構(SD)

４　土壙(SK)

５　井戸(SE)

６　その他の遺物

第３章　西片稲村遺跡での調査とその成果

第１節　遺構とそれに伴う遺物

西片稲村遺跡について

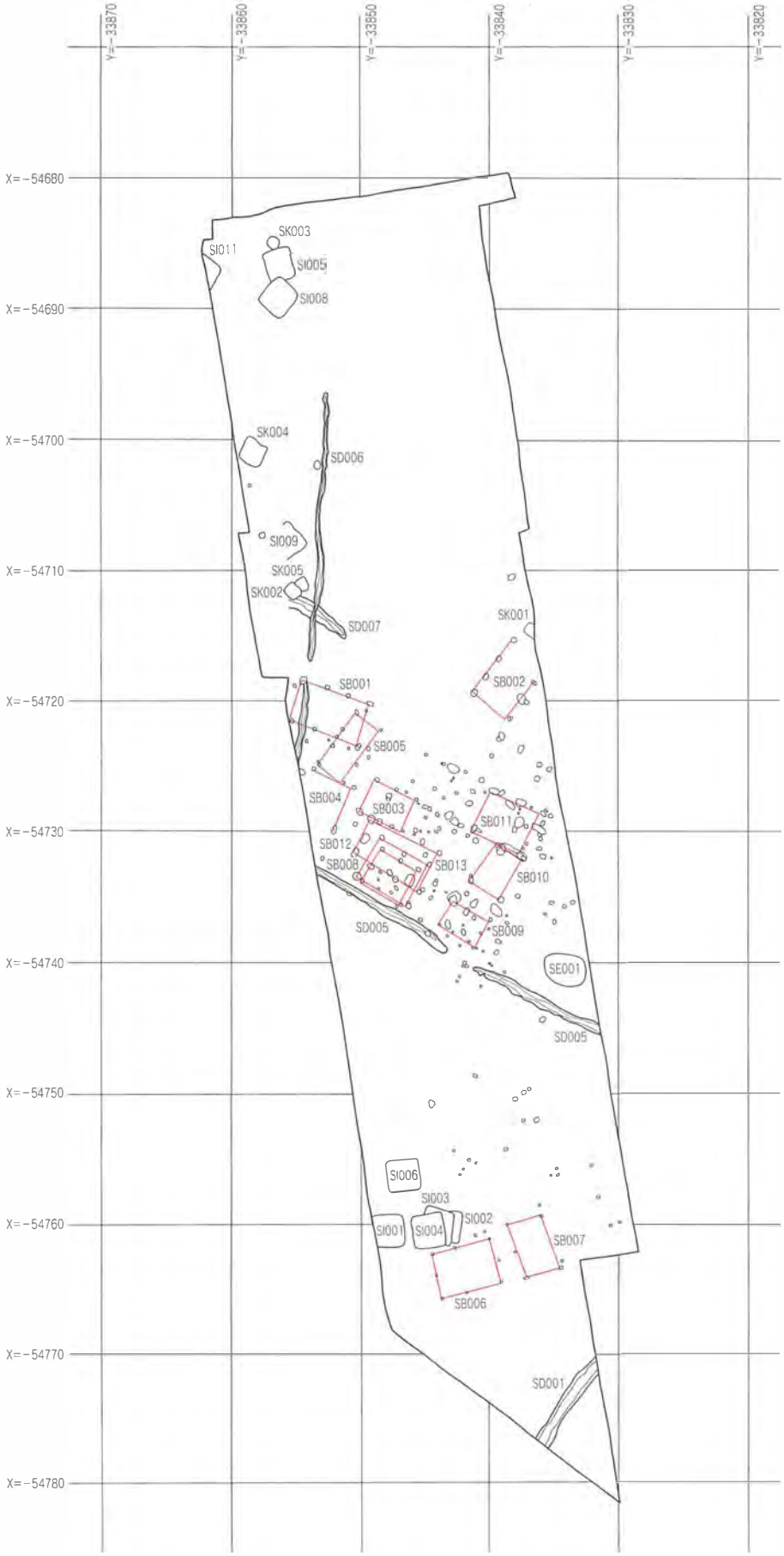
本遺跡では、古代から中世の遺物を含む掘立柱建物跡13棟、その掘立柱建物の外側に沿って、掘られている4条の溝状遺構が確認されている。溝に囲まれた掘立柱建物11棟は、大きさ、向き及び配置から、2時期に分けられる。当初は、比較的大きな1間×3間の掘立柱建物が並んで確認された。SB001、SB002、SB006、SB007、SB012がそれに相当する。次にやや小型の掘立柱建物が建てられている。SB003、SB004、SB005、SB008、SB009、SB010、SB011である。このうち、SB008とSB011は建て直されたものと考えられる。

竪穴住居跡は5軒確認されているが、古代の遺物を含む、SI001、SI002、SI003、SI004、SI005、SI006は出土遺物から同時期に営まれていたと考えられる。SI008、SI009、SI011は、古式土師器が住居跡内から見つかっており、古墳時代前期の住居跡である。

土壙5基の内、SK001、SK002、SK003、SK005は遺物から、古代末から中世にかけての遺構と考えられる。残りの土壙、SK004は、古式土師器を含むので古墳時代前期に掘られたと考えられる。

調査区の南側で検出された、溝状遺構SD002は他の溝状遺構とは埋土が大きく異なる事から、古代以前に掘られた可能性がある。時期を決定できる遺物が検出されなかった為、残念ながら造られた時期は不明である。

井戸1基、SE001は中世末に造られたと考えられる。掘りぬいたクヌギの木を組み合わせて作ってある。



第5図　西片稲村遺跡　全体遺構配置図

1　竪穴住居(SI)

SI001(第6図)

一辺が約2.5mの隅丸方形で4本柱である。柱穴の深さはいずれも、約20cmを測る。竈又は炉跡のような火を焚いた痕跡は認められなかった。出土遺物が無いが、同様の形態のSI005から出土した遺物が奈良時代のものであることから、この時期の遺構と考えられる。柱に囲まれた床面は顕著な硬化は確認できなかった。

SI002(第7図)

一辺が約2.4mの隅丸方形で4本柱である。柱穴の深さはいず
火を焚いた痕跡は認められなかった。出
のものであることから、この時期の遺構と考えられる。柱に囲まれた床面は顕著な硬化は確認できなかった。

SI003(第8図)

一辺が約2.4mの隅丸方形で4本柱である。柱穴の深さはいずれも、約20cmを測る。竈又は炉跡のような火を焚いた痕跡は認められなかった。出土遺物が無いが、同様の形態のSI005から出土した遺物が奈良時代のものであることから、この時期の遺構と考えられる。柱に囲まれた床面は顕著な硬化は確認できなかった。

SI004(第9図)

一辺が約2.4mの隅丸方形で4本柱である。柱穴の深さはいずれも、約30cmを測る。竈又は炉跡のような火を焚いた痕跡は認められなかった。出
のものであることから、この時期の遺構と考えられる。柱に囲まれた床面は顕著な硬化は確認できなかった。SI002～SI004は建替えであり、切り合いから、SI002が最も古く、次いでSI003、最後に作られた住居がSI004である。

SI005(第10図)

長辺が約2.5m、短辺約2.1mのやや隅丸長方形で
分かれる。構造上の違いが考えられるが、詳細は不明である。他の住居跡と同様、竈又は炉跡のような火を焚いた痕跡は認められなかった。出土した遺物が奈良時代のものである。柱に囲まれた床面は顕著な硬化は確認できなかった。

この遺構からは10点の遺物が出土している。(第13図)

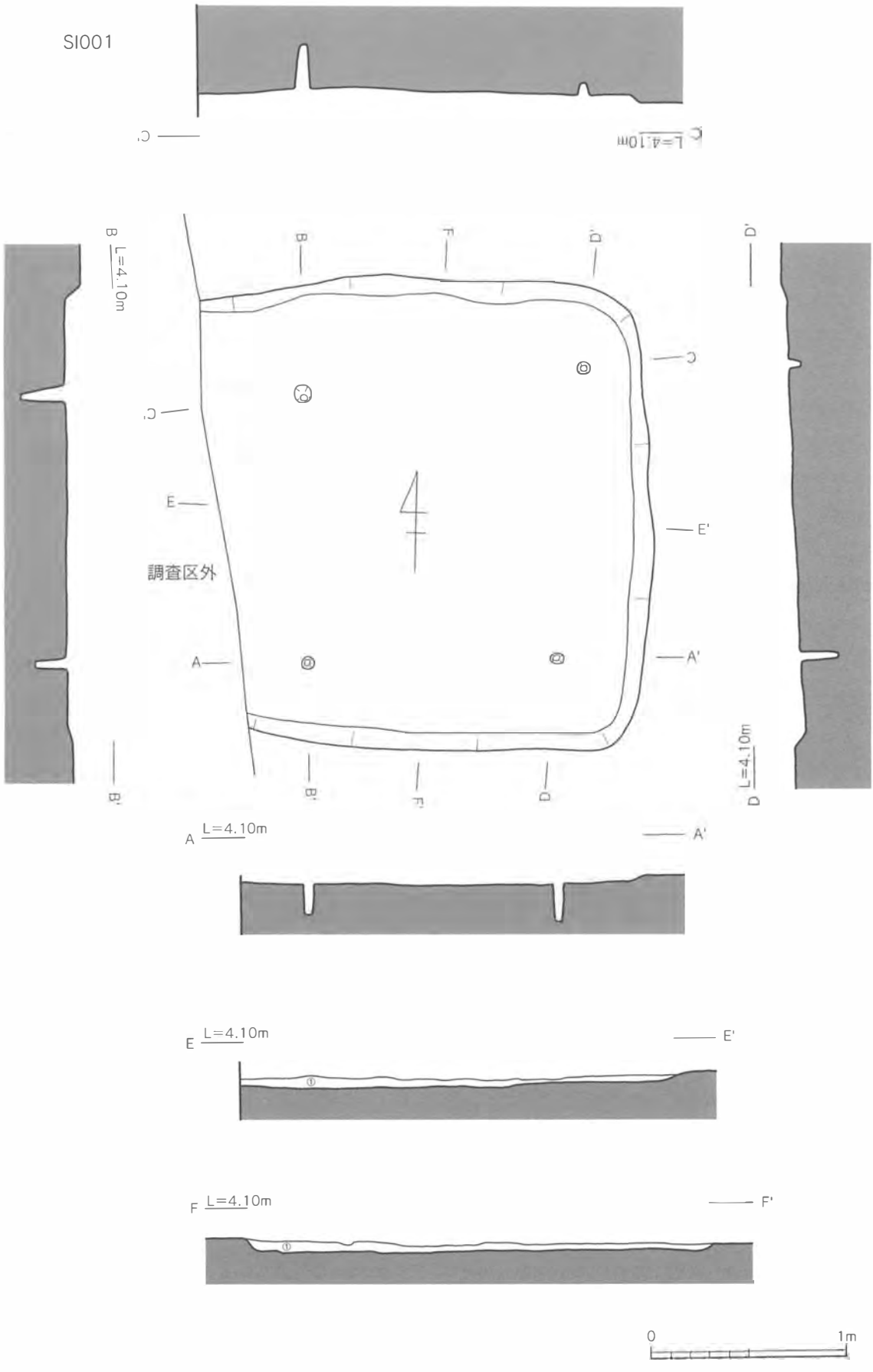
1は小型甕の口縁である。2も1と同じ甕の口縁である。3は口縁に1条の沈線をもつ甕の口縁である。4はやや小ぶりの甕の口縁と胴部の一部である。5は坏の口縁である。6はやや外反する坏の口縁である。7は宝珠つまみをもつ須恵器の坏蓋である。奈良時代の遺物である。8・9・10は7と同様の宝珠摘みをもつ須恵器の坏蓋である。

SI006(第11図)

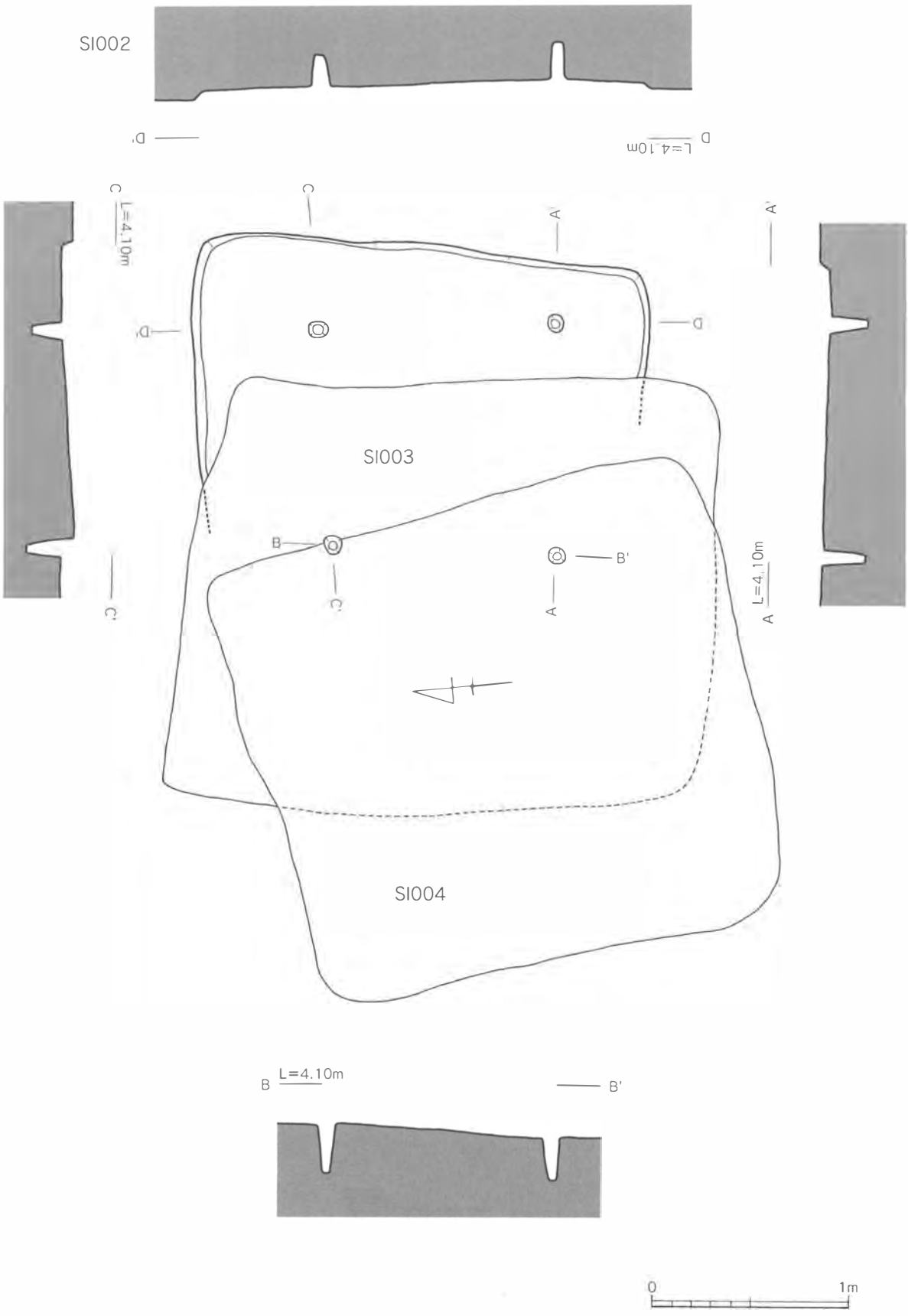
一辺が約2.3mの隅丸方形で6本柱である。柱穴
穴はやや浅く、約10cmを測る。竈又は炉跡のような火を焚いた痕跡は認められなかった。出土
奈良時代のものである。柱に囲まれた床面は顕著な硬化は確認できなかった。

この遺構からは9点の遺物が出土している。(第13図)

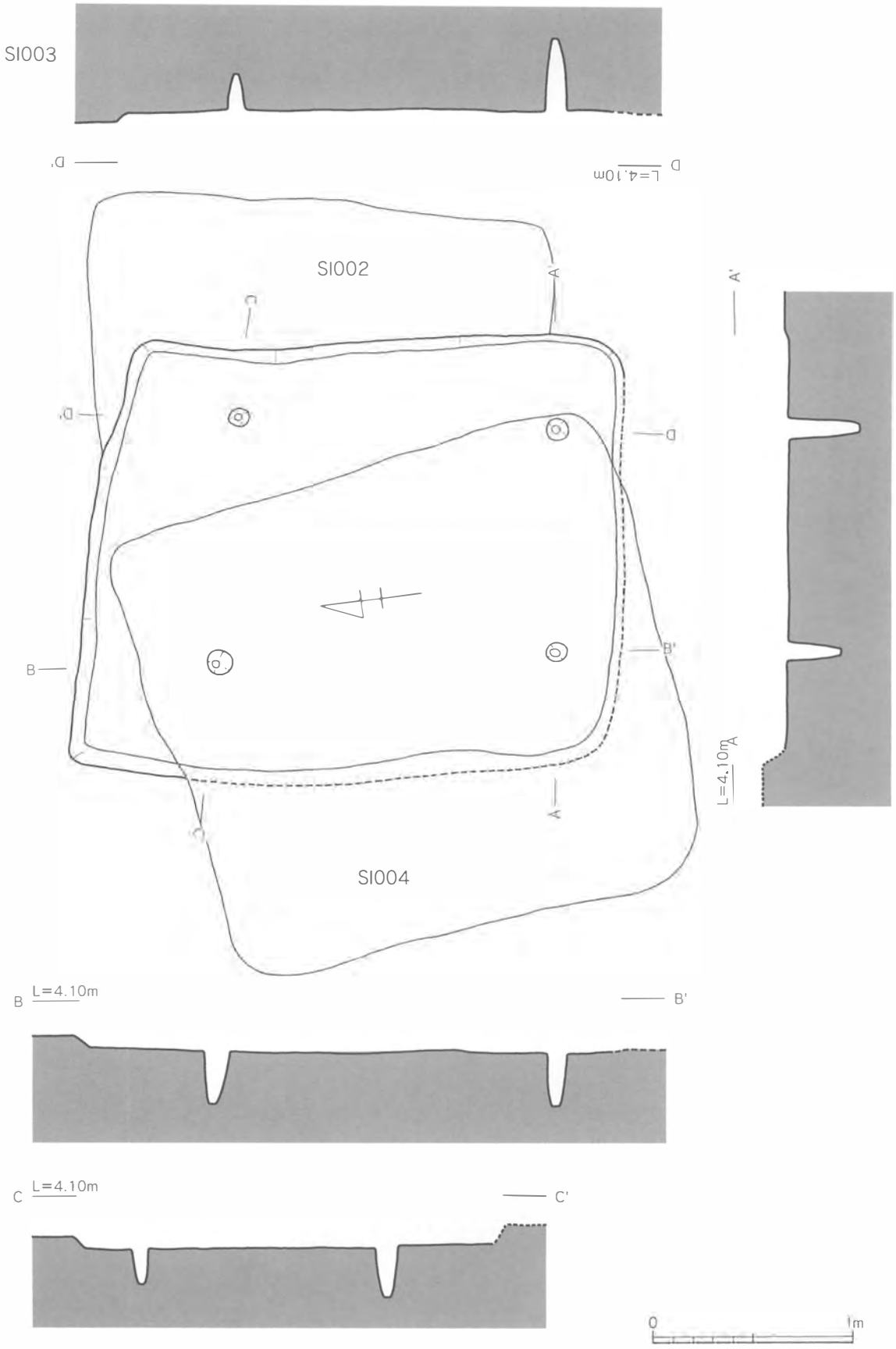
11は坏身である。やや浅い。12と13も坏身の底部であるが、11と比較してやや深い。14と15は須恵器の坏である。奈良時代の遺物である。15は須恵器の小型壺である。17は須恵器の大甕の胴部である。18は甑の胴部である。支えが残っている。19は台付き坏の底部である。



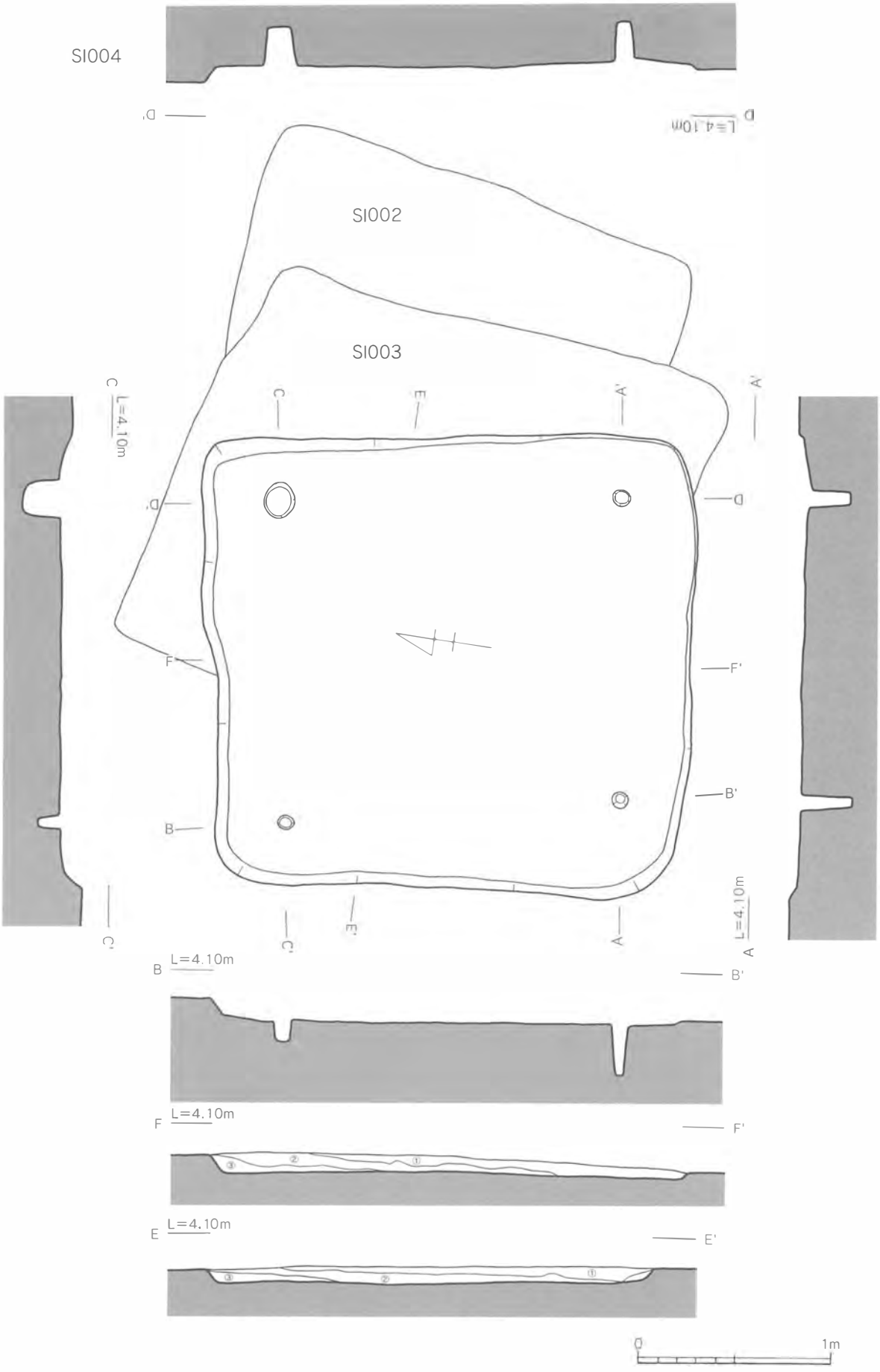
第6図　SI001実測図



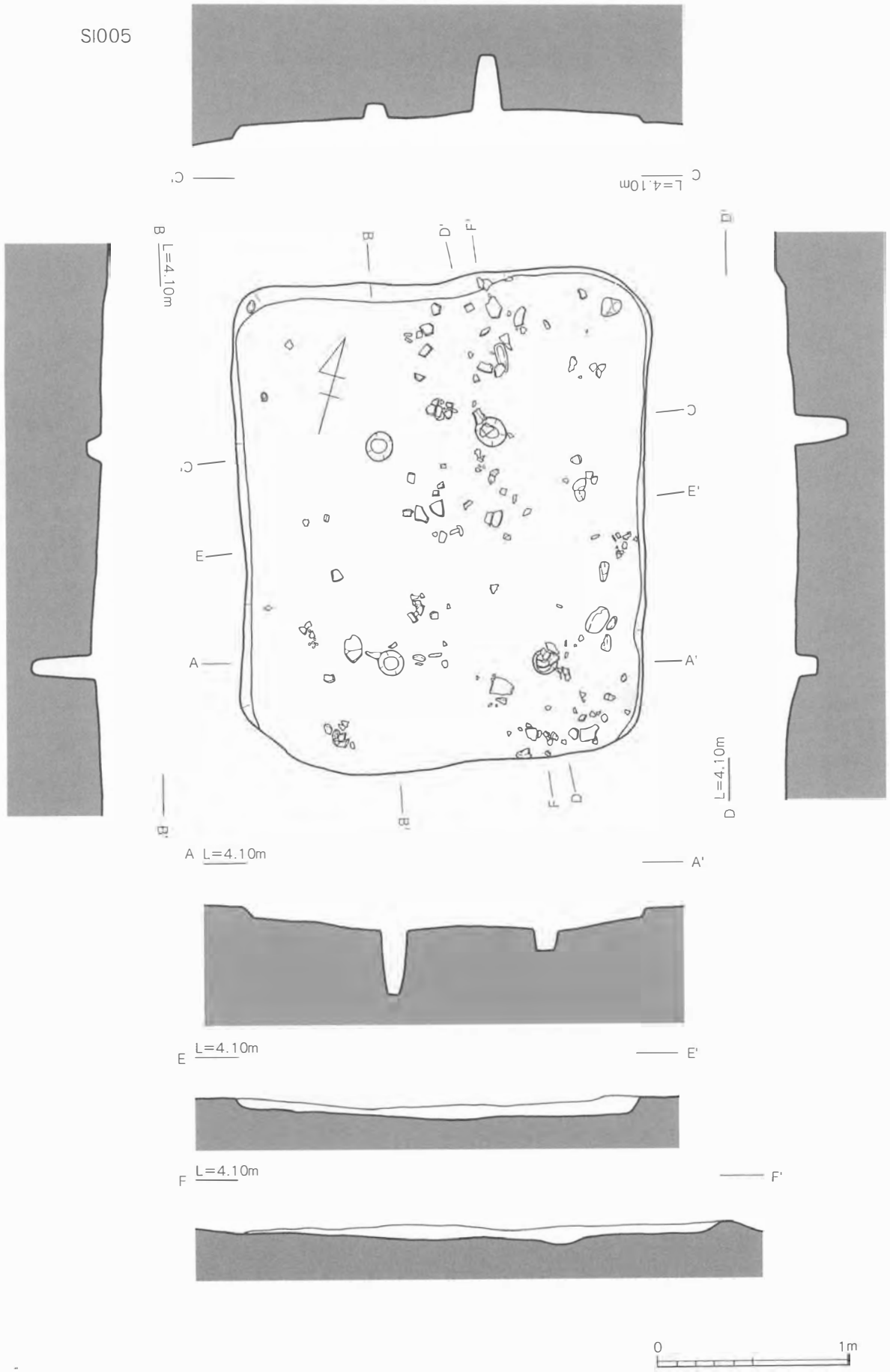
第7図　SI002実測図



第8図　SI003実測図



第9図　SI004実測図



第10図　SI005実測図

SI008（第13図）

一辺が約2.5mの隅丸方形で4本柱である。柱穴の深さは約70cmを測る。竈又は炉跡のような火を焚いた痕跡は認められなかった。出土した遺物が奈良時代のものである。柱に囲まれた床面は顕著な硬化は確認できなかった。

この遺構からは36点の遺物が出土している。（第14図）

20は小型甕の口縁である。21はSI005の3と同じ甕の口縁である。22は須恵器の坏蓋である。23と24はやや浅めの坏身である。奈良時代後期の遺物である。25から31までは、やや深めの坏身である。32は浅めの坏であるが、残りが悪いため、全体の形は不明である。33・35・37・38は高台付きの坏身である。すべて奈良時代後期の遺物である。34は須恵器の大甕の胴部である。36は甑の摘みである。奈良時代の遺物である。

SI0009（第15図）

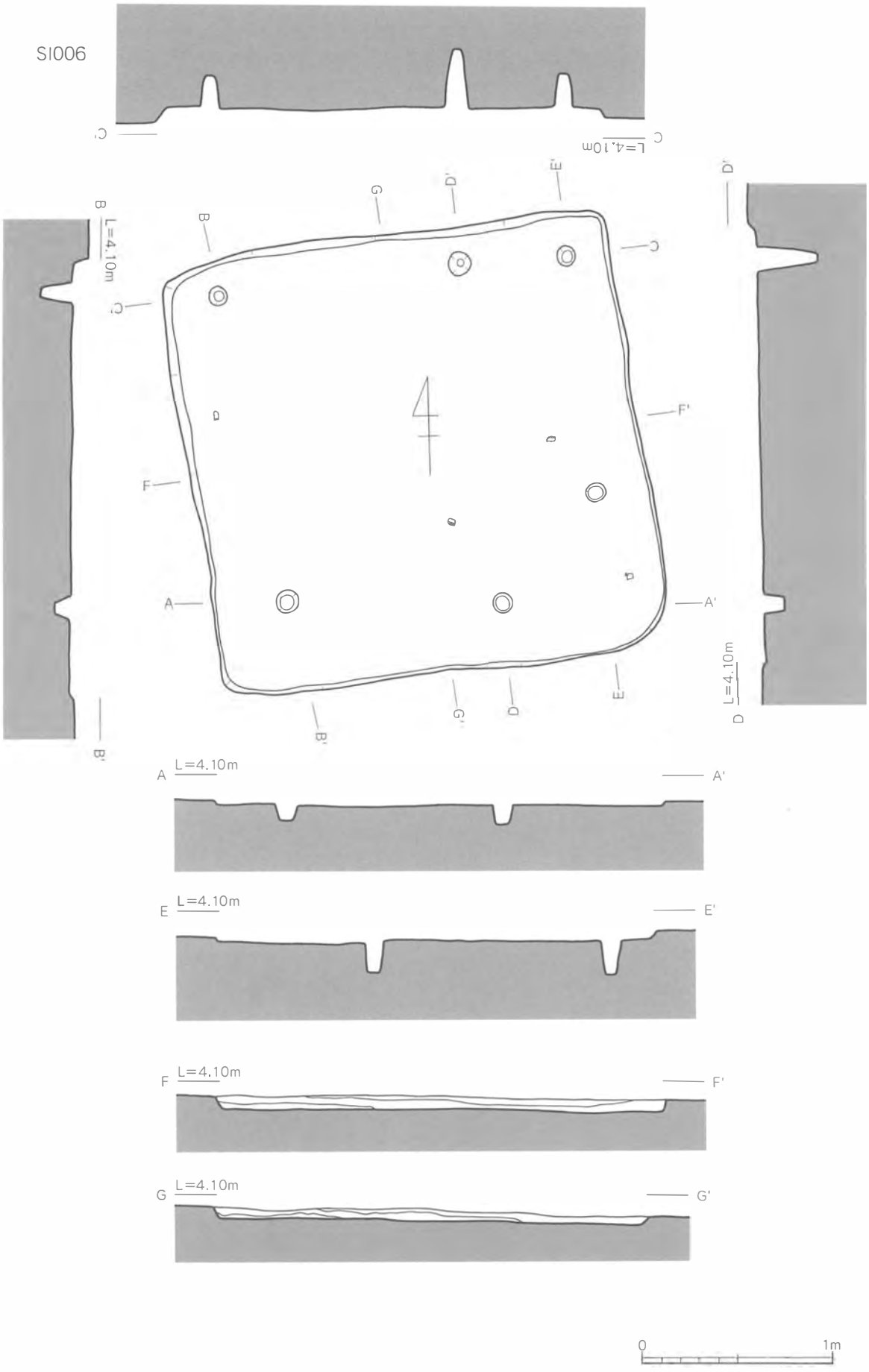
一辺が約2.3mを測る。西側は調査区外になるため、全体の形は推測するほか無いが、他の遺構の形態から、隅丸方形で4本柱と考えられる。穴の深さは約20cmを測る。竈又は炉跡のような火を焚いた痕跡は認められなかった。出土した遺物が奈良時代のものである。柱に囲まれた床面は顕著な硬化は確認できなかった。

この遺構からは10点の遺物が出土している。（第15図）

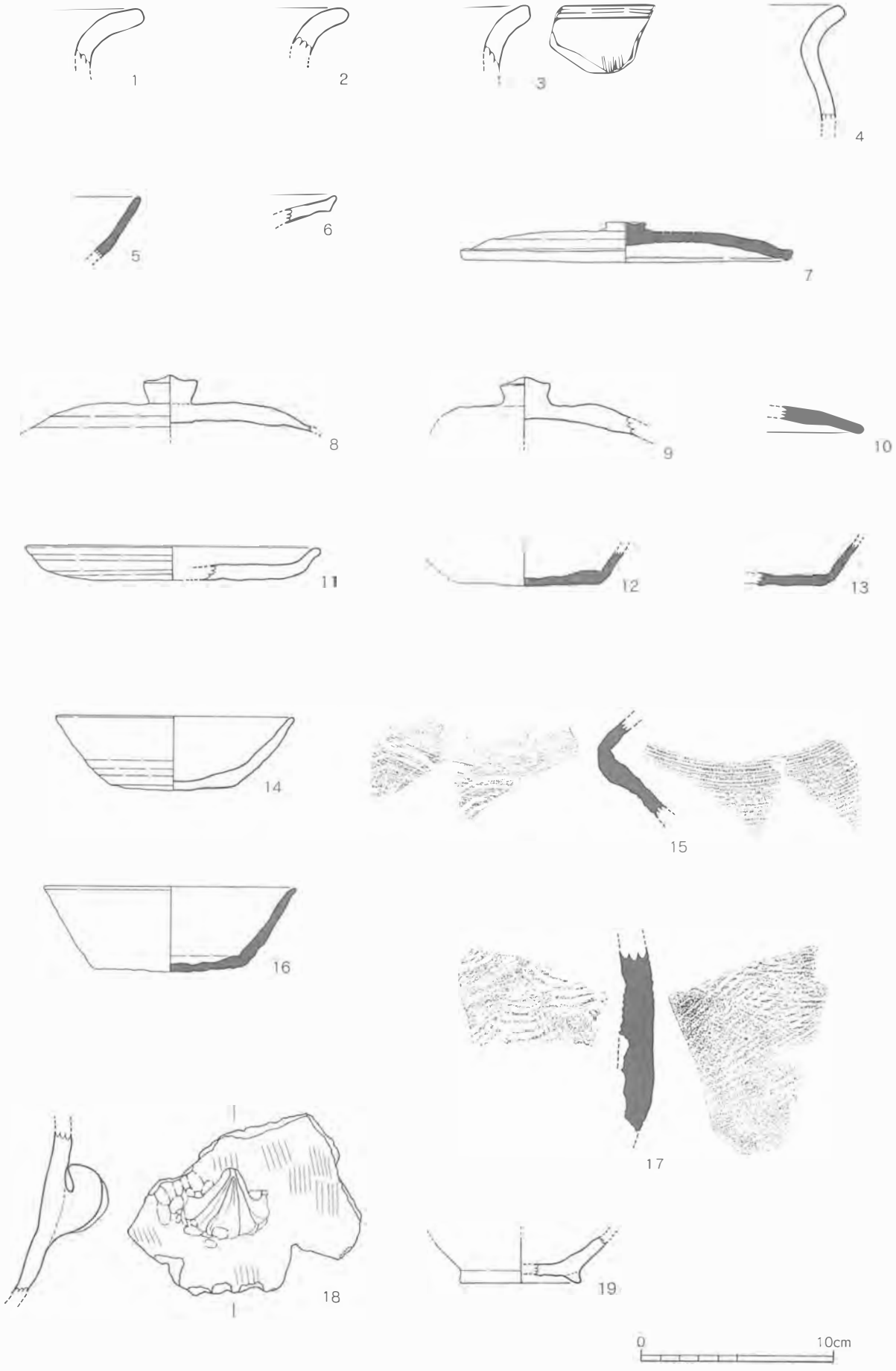
39は宝珠摘みをもつ須恵器の坏蓋である。奈良時代の遺物である。40・41は高台付きの坏身である。42は甑である。奈良時代後期の遺物である。43は坏身である。底部に線刻が認められる。『王刀』と刻まれているが、名称が指すものは不明である。44は須恵器の大甕の胴部である。45は須恵器の大甕の肩部である。46は須恵器壺の底部である。47・48は須恵器の大甕の胴部である。

SI011（第17図）

西側は調査区外になるため、出土した遺物は古式土師器が主体であり、このことから古墳時代初頭作られたと考えられる。

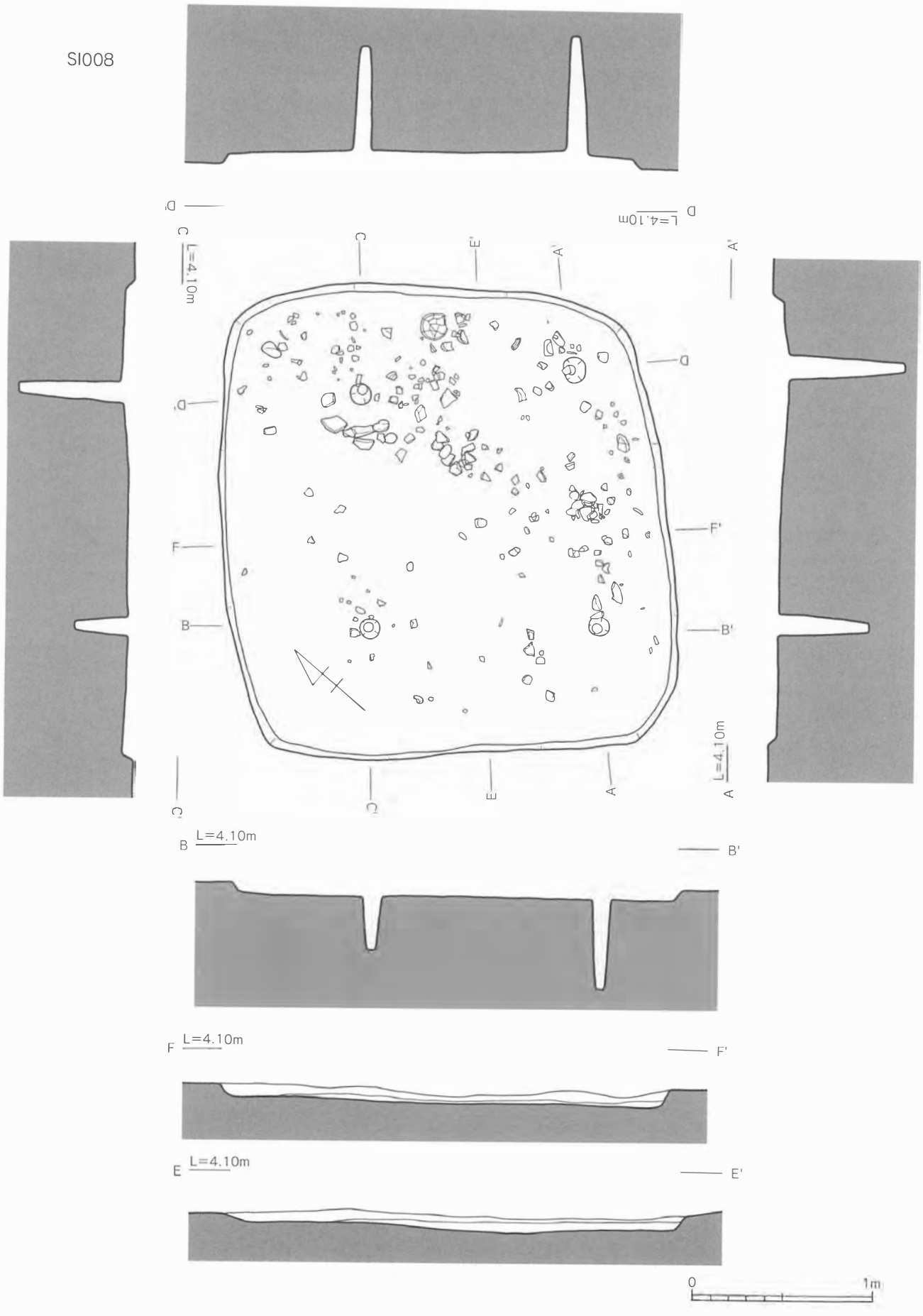


第11図　SI006実測図

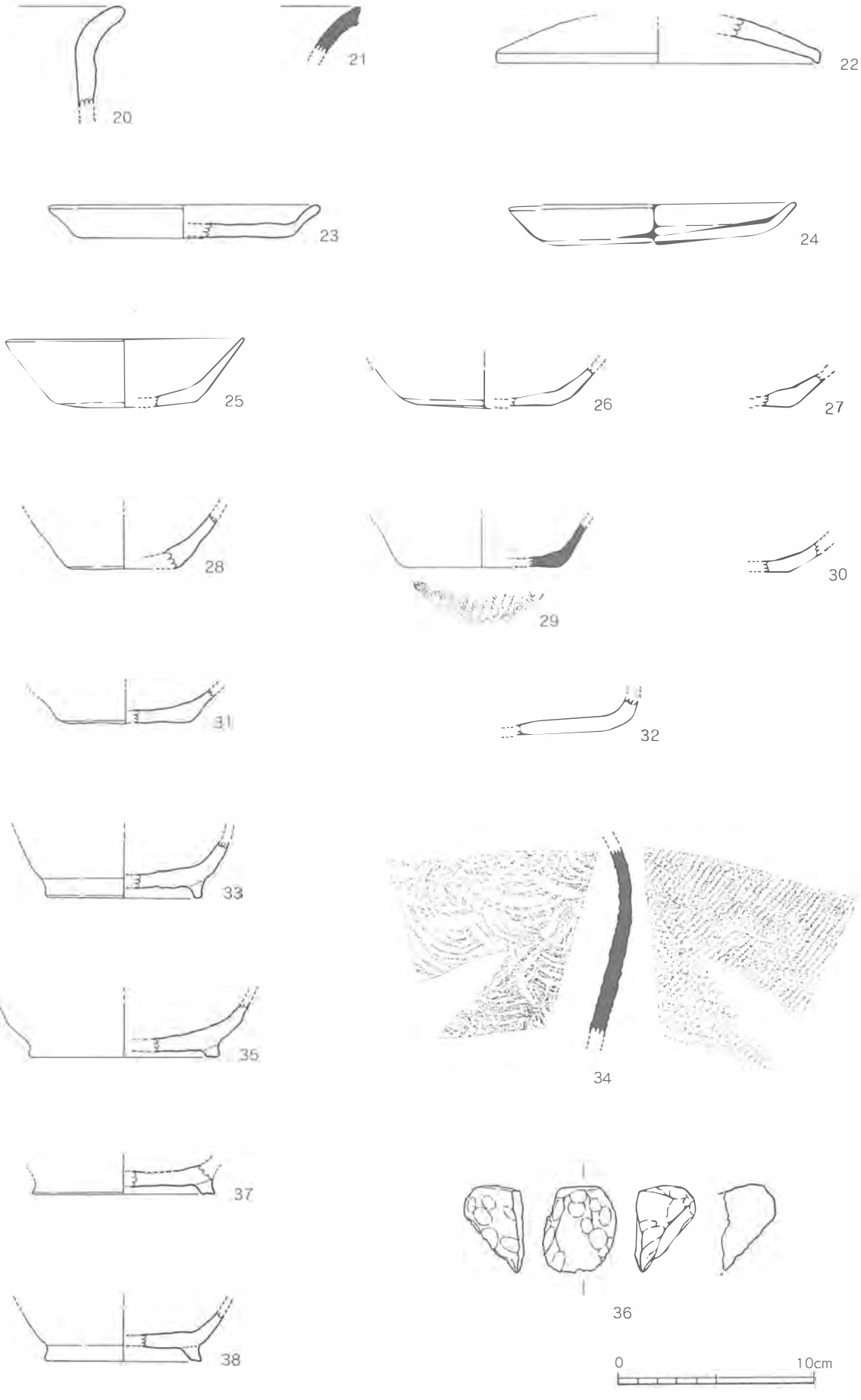


第12図　SI005･006出土遺物実測図

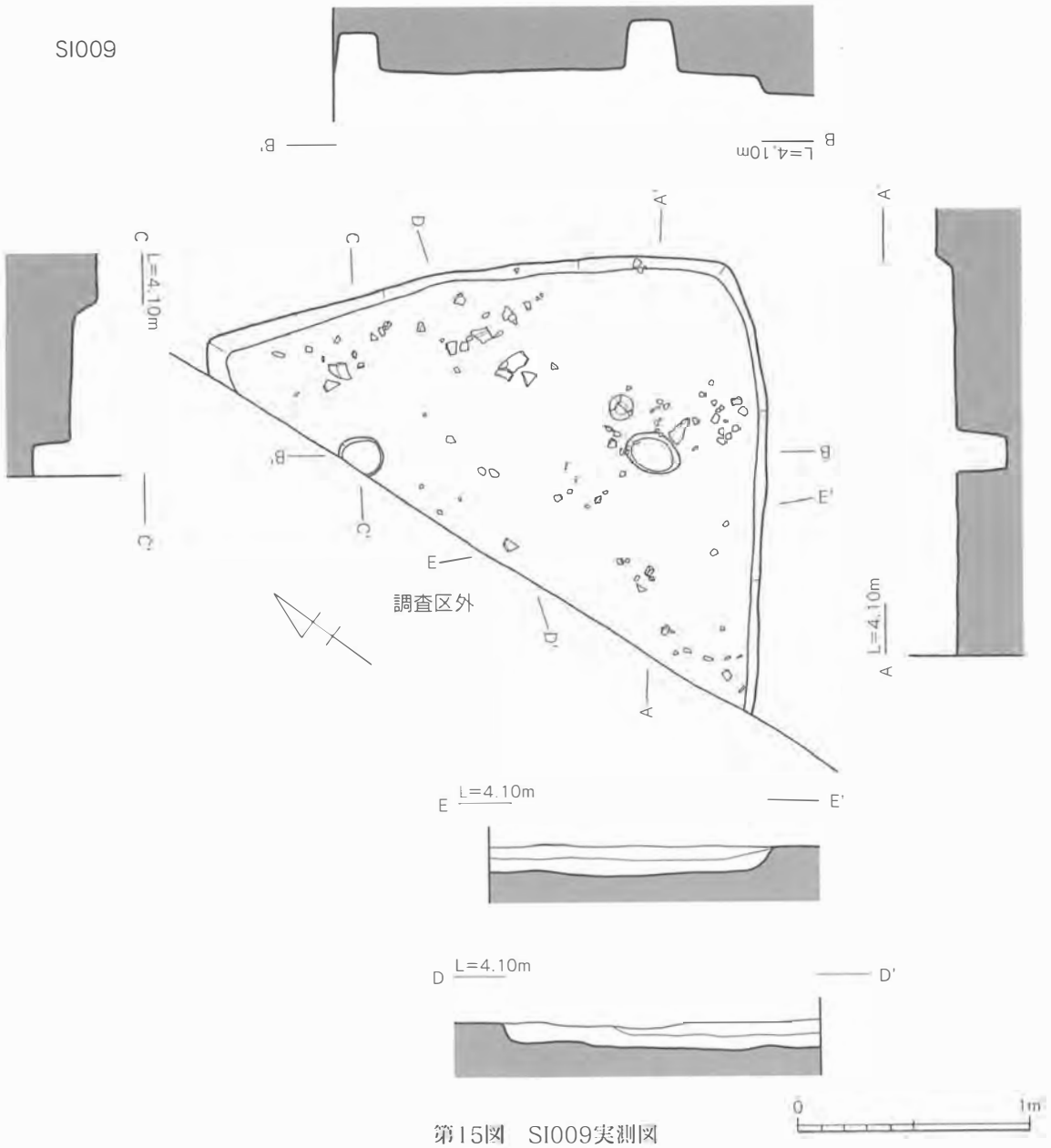
SI008



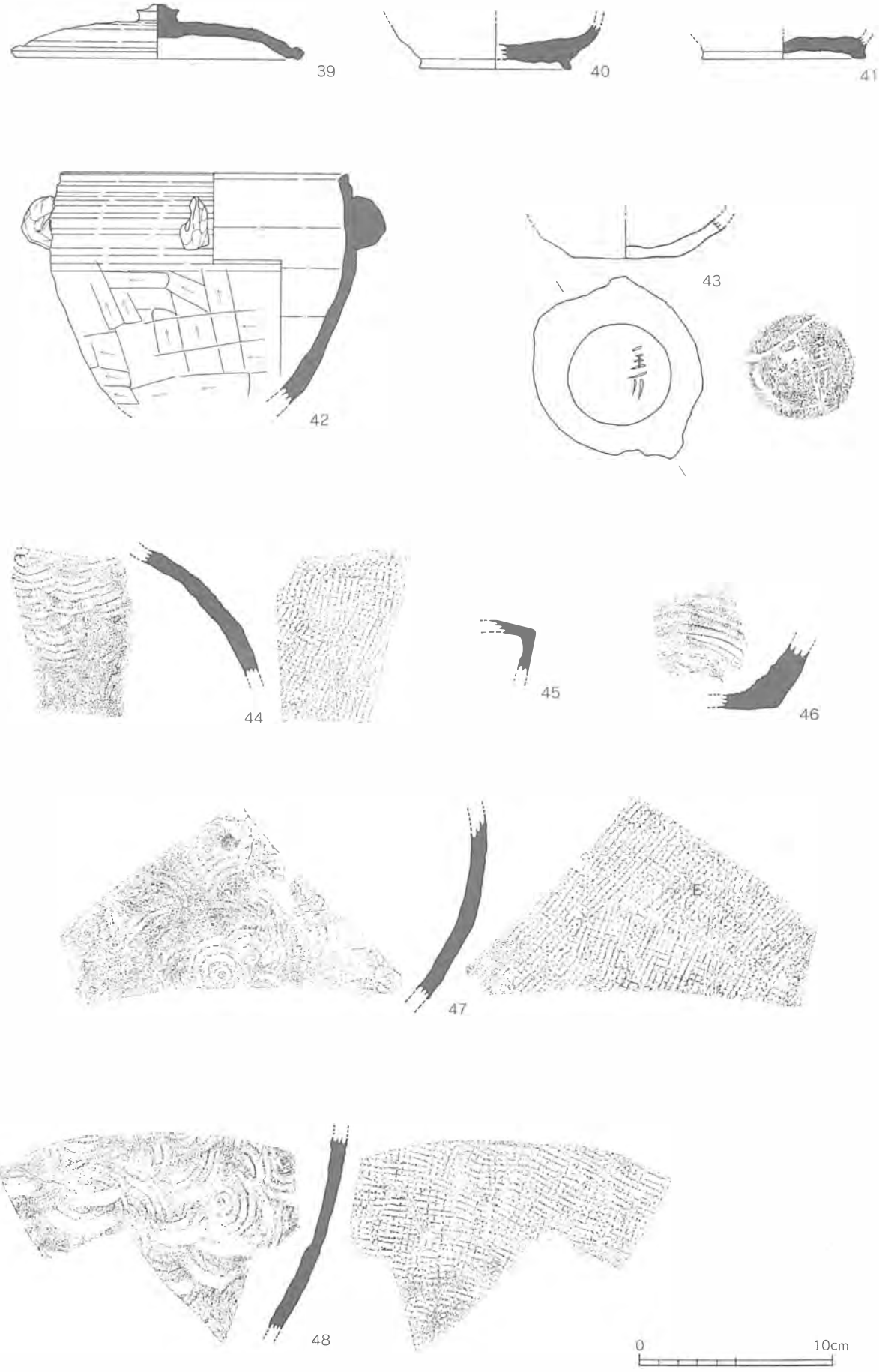
第13図　SI008実測図



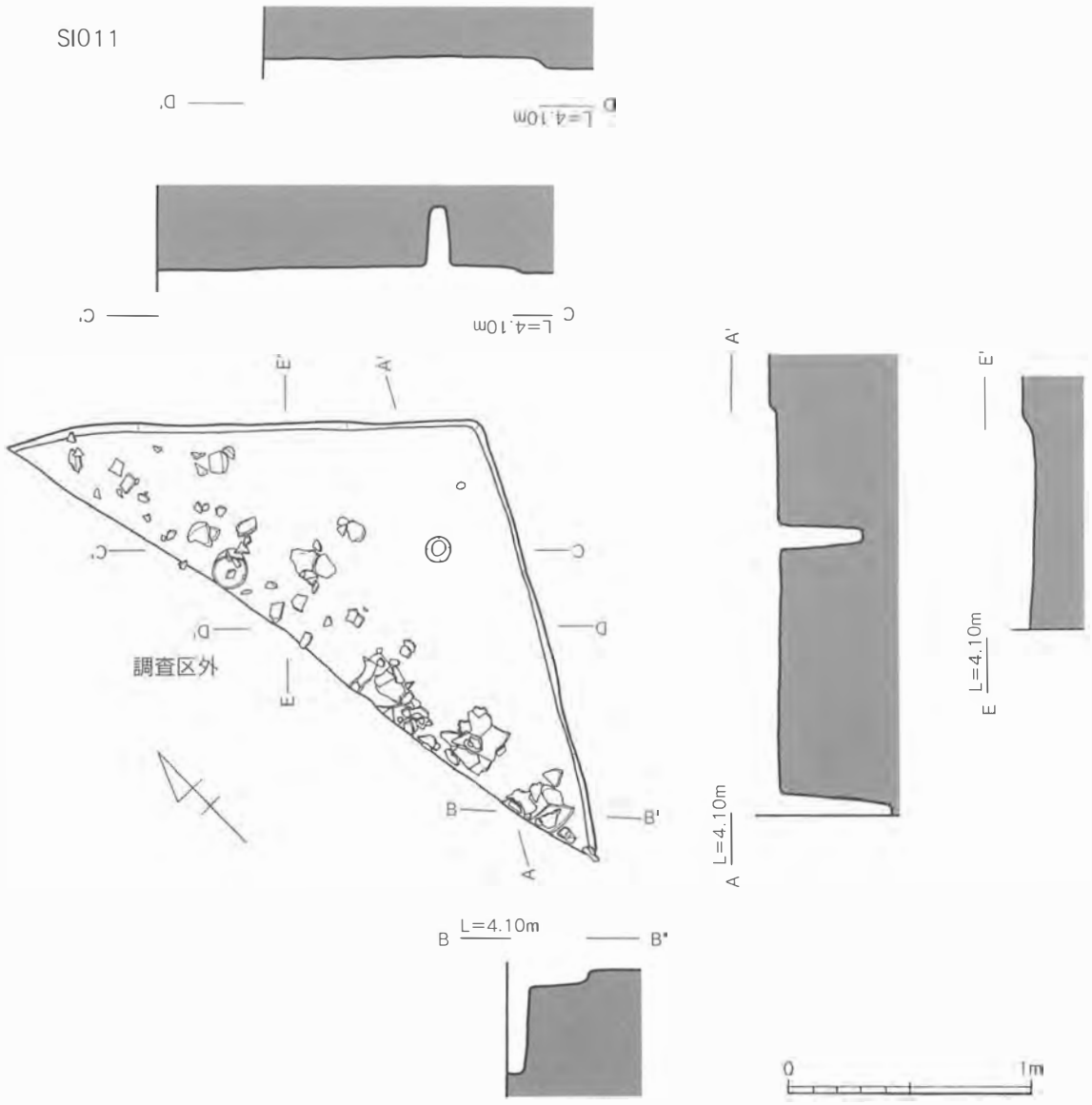
第14図　SI008出土遺物実測図



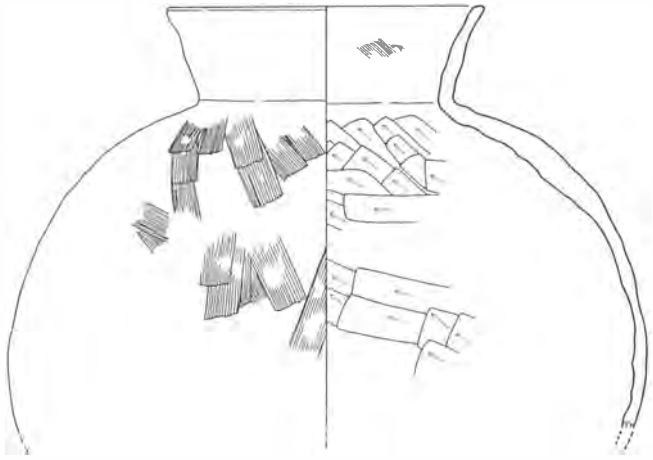
第15図　SI009実測図

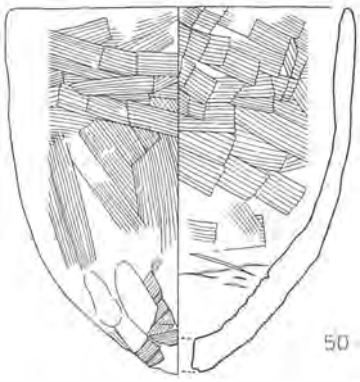


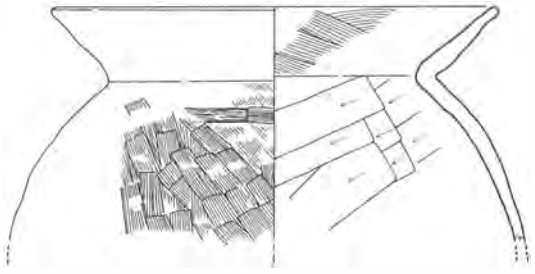
第16図　SI009出土遺物実測図

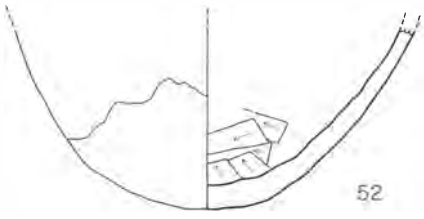


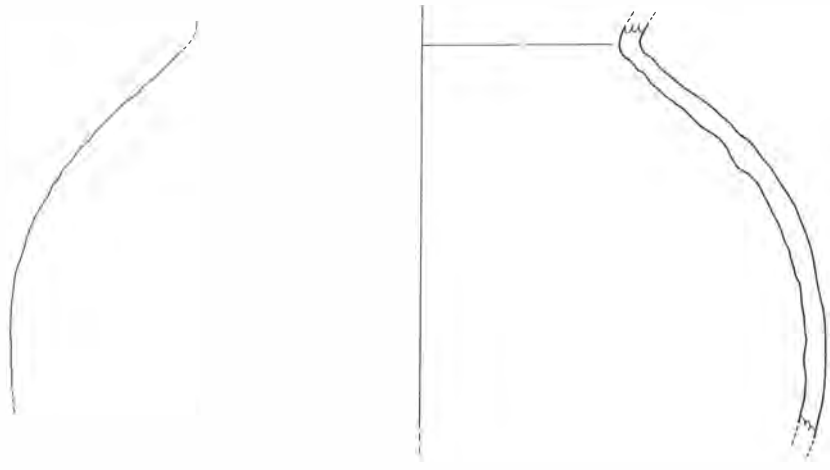
第17図　SI011実測図

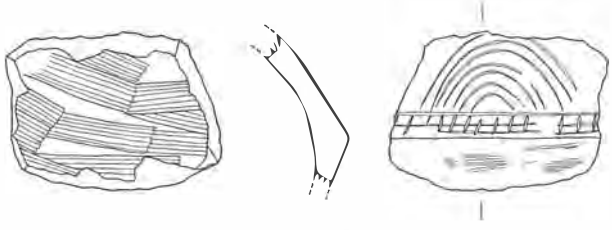


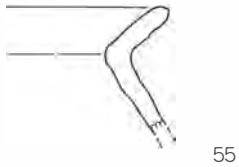












第18図　SI011出土遺物実測図

2　掘立柱建物(SB)

SB001(第19図)

長軸約5.4m、短軸約3mの、1間×3間の8本柱の掘立柱建物遺構である。柱穴の深さは、深いもので約50cm、浅いもので約20cmである。柱に囲まれた中は特に硬化していない。遺物を共伴しないため、作られた時期は不明であるが、この遺構を囲む様に掘られた溝状遺構の出土遺物から古代末に作られた可能性がある。

SB002(第20図)

東側が調査区外であるため、全体の形は推測するしかないが、長軸約5m、短軸約3.5mの、1間×3間の7本柱の掘立柱建物遺構である。柱穴の深さは、深いもので約40cm、浅いもので約20cmである。遺物を共伴しないため、作られた時期は不明であるが、この遺構を囲む様に掘られた溝状遺構の出土遺物から古代末に作られた可能性がある。

SB003(第19図)

長軸約3.3m、短軸約2.8mの、1間×2間の6本柱の掘立柱建物遺構である。柱穴の深さは、いずれも約20cmである。柱に囲まれた中は特に硬化していない。遺物を共伴しないため、作られた時期は不明であるが、この遺構を囲む様に掘られた溝状遺構の出土遺物から古代末に作られた可能性がある。

SB004(第21図)

西側が調査区外であるため、全体の形は不明である。柱穴の深さは、いずれも約30cmである。遺物を共伴しないため、作られた時期は不明であるが、この遺構を囲む様に掘られた溝状遺構の出土遺物から古代末に作られた可能性がある。

SB005(第20図)

長軸約4.7m、短軸約2.4mの、1間×3間の8本柱の掘立柱建物遺構である。柱穴の深さは、いずれも約30cmである。柱に囲まれた中は特に硬化していない。遺物を共伴しないため、作られた時期は不明であるが、この遺構を囲む様に掘られた溝状遺構の出土遺物から古代末に作られた可能性がある。

SB006(第21図)

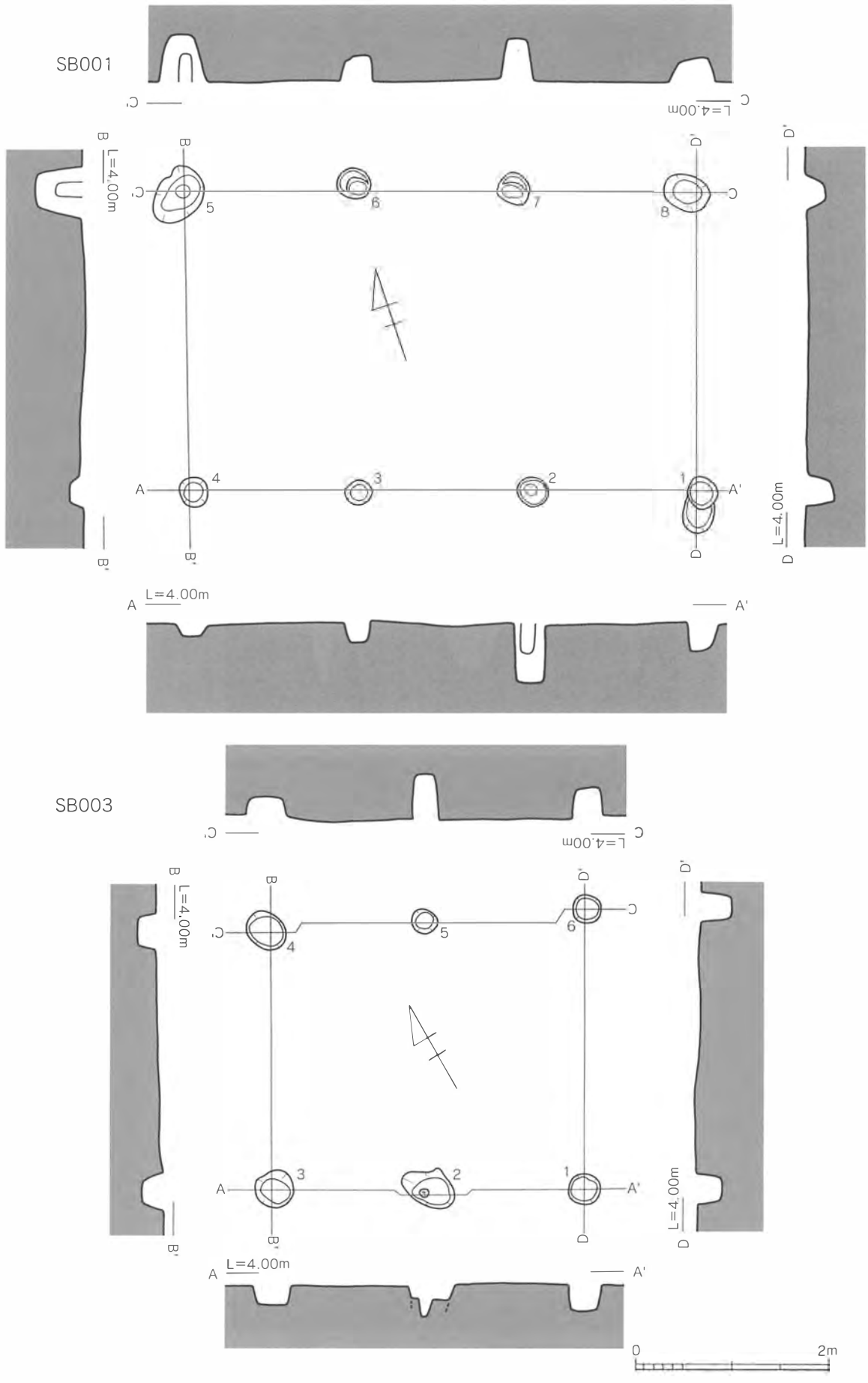
長軸約4.5m、短軸約3.4mの、2間×3間の8本柱の掘立柱建物遺構である。柱穴の深さは、深いもので約40cm、浅いもので約10cmである。柱に囲まれた中は特に硬化していない。遺物を共伴しないため、作られた時期は不明であるが、この遺構を囲む様に掘られた溝状遺構の出土遺物から古代末に作られた可能性がある。

SB007(第22図)

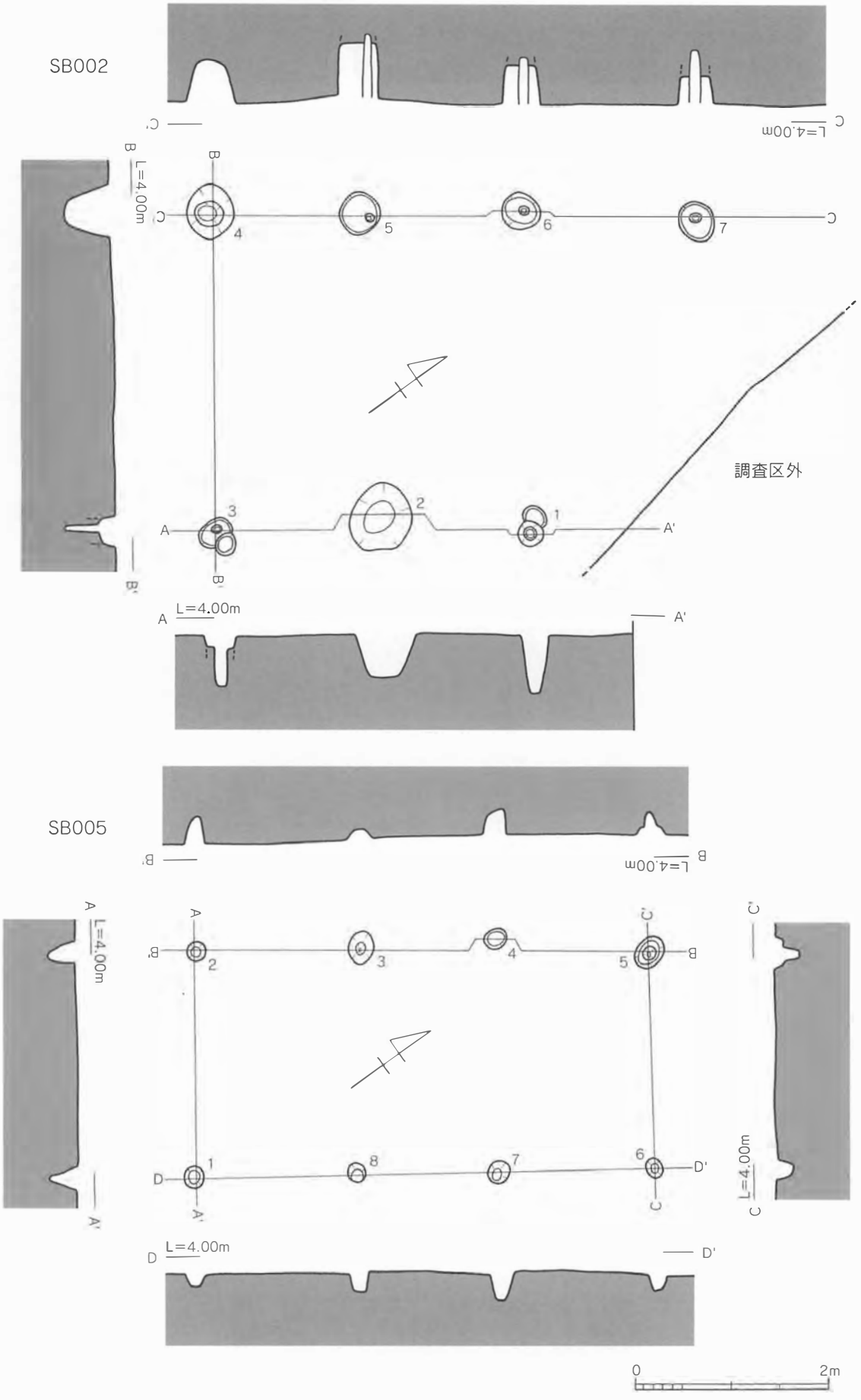
長軸約5m、短軸約2.8mの、1間×2間の5本柱の掘立柱建物遺構である。柱穴の深さは、深いもので約60cm、浅いもので約30cmである。柱に囲まれた中は特に硬化していない。遺物を共伴しないため、作られた時期は不明であるが、この遺構を囲む様に掘られた溝状遺構の出土遺物から古代末に作られた可能性がある。

SB008(第22図)

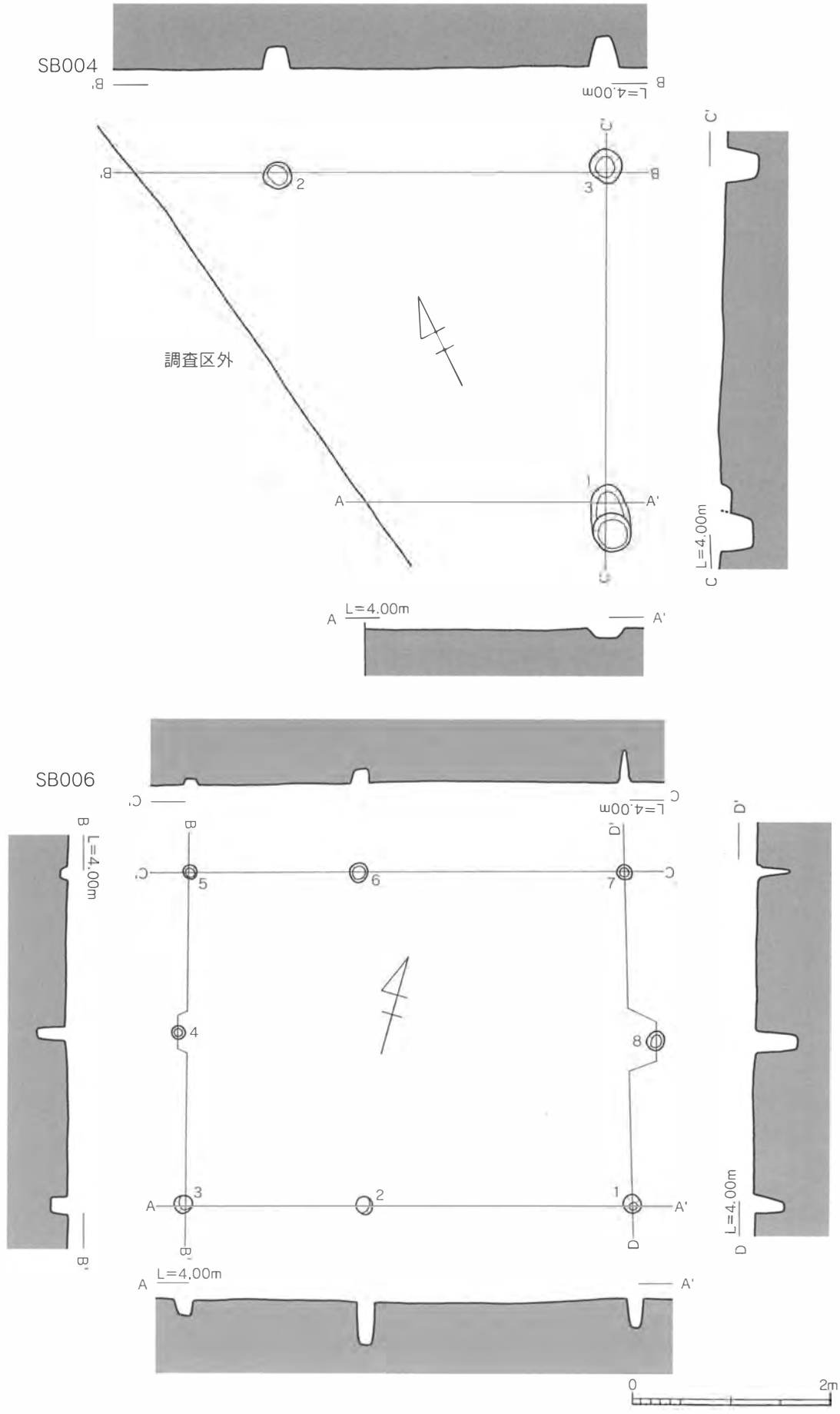
長軸約4.5m、短軸約3.4mの、1間×2間の6本柱の掘立柱建物遺構である。柱穴の深さは、深いもので約60cm、浅いもので約40cmである。柱に囲まれた中は特に硬化していない。遺物を共伴しないため、作られた時期は不明であるが、この遺構を囲む様に掘られた溝状遺構の出土遺物から古代末に作られた可能性がある。



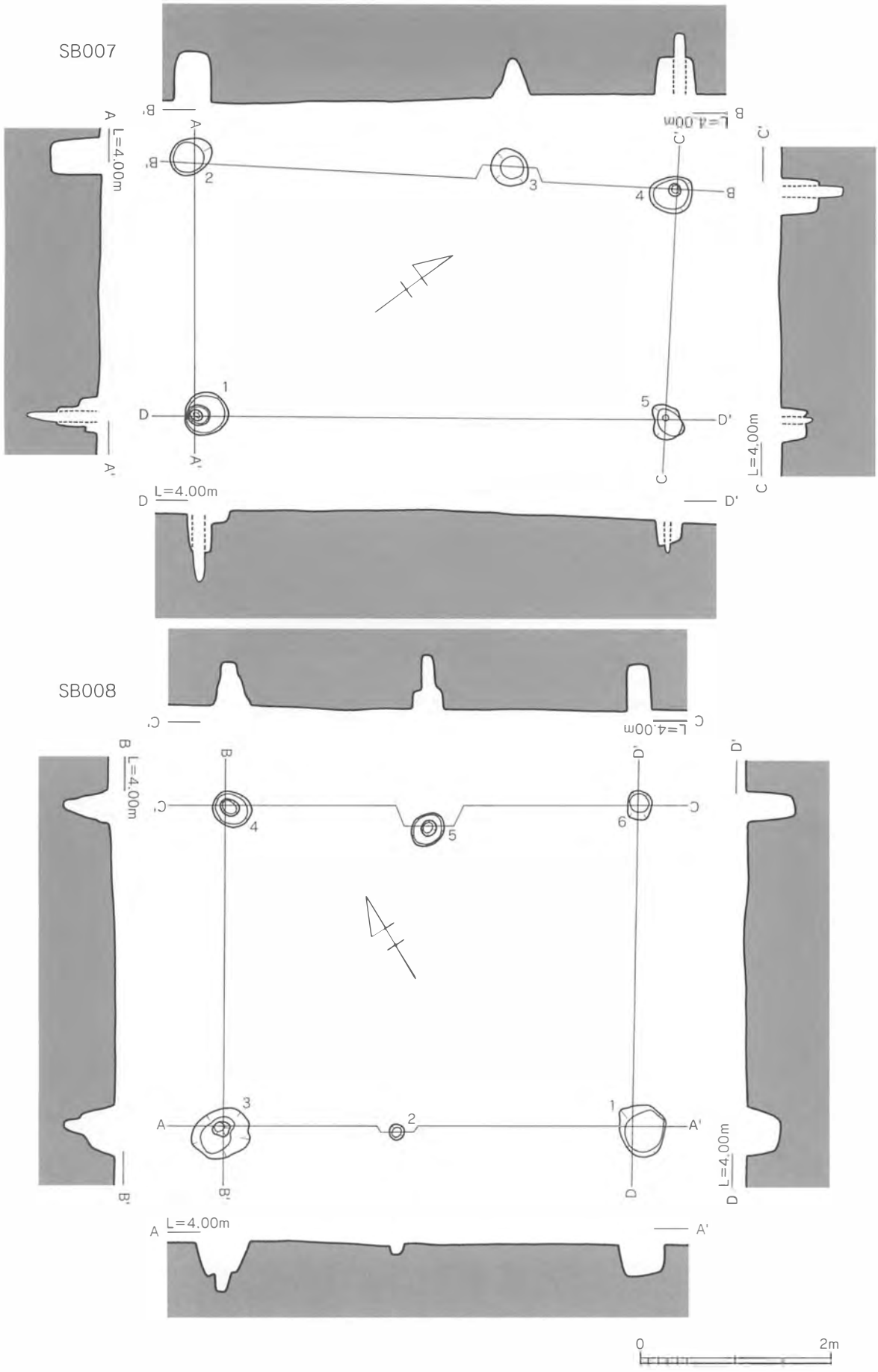
第19図　SB001·003実測図



第20図　SB002·005実測図



第21図　SB004・006実測図



第22図　SB007·008実測図

SB009（第23図）

長軸約3.2m、短軸約2.2mの、1間×1間の4本柱の掘立柱建物遺構である。柱穴の深さは、深いもので約60cm、浅いもので約40cmである。柱に囲まれた中は特に硬化していない。遺物を共伴しないため、作られた時期は不明であるが、この遺構を囲む様に掘られた溝状遺構の出土遺物から古代末に作られた可能性がある。

SB010（第23図）

長軸約4m、短軸約2.8mの、1間×2間の5本柱の掘立柱建物遺構である。柱穴の深さは、深いもので約50cm、浅いもので約20cmである。柱に囲まれた中は特に硬化していない。遺物を共伴しないため、作られた時期は不明であるが、この遺構を囲む様に掘られた溝状遺構の出土遺物から古代末に作られた可能性がある。

SB011（第24図）

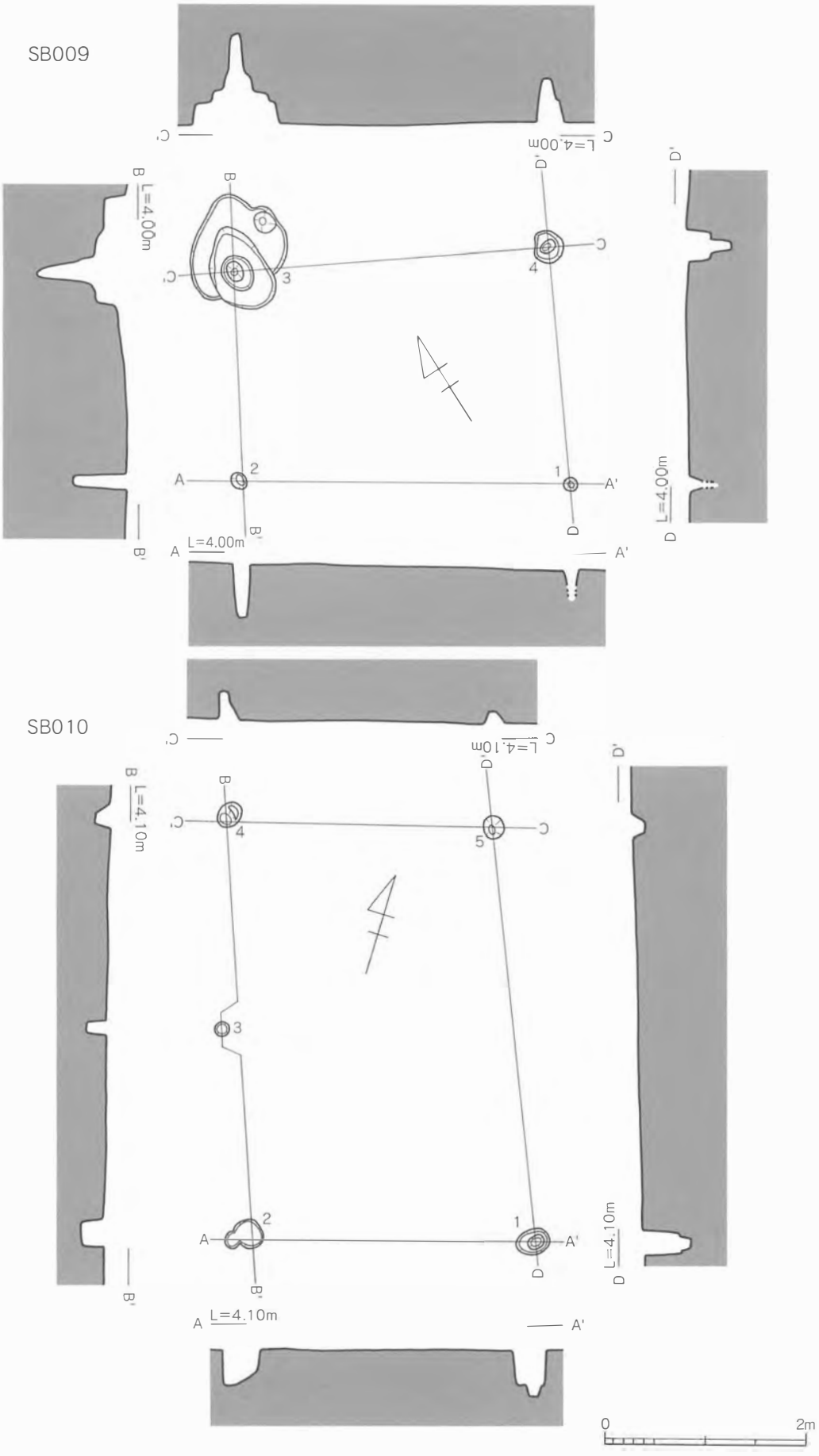
長軸約4.4m、短軸約3.7mの、1間×2間の6本柱の掘立柱建物遺構である。柱穴の深さは、深いもので約60cm、浅いもので約40cmである。柱に囲まれた中は特に硬化していない。遺物を共伴しないため、作られた時期は不明であるが、この遺構を囲む様に掘られた溝状遺構の出土遺物から古代末に作られた可能性がある。

SB012（第25図）

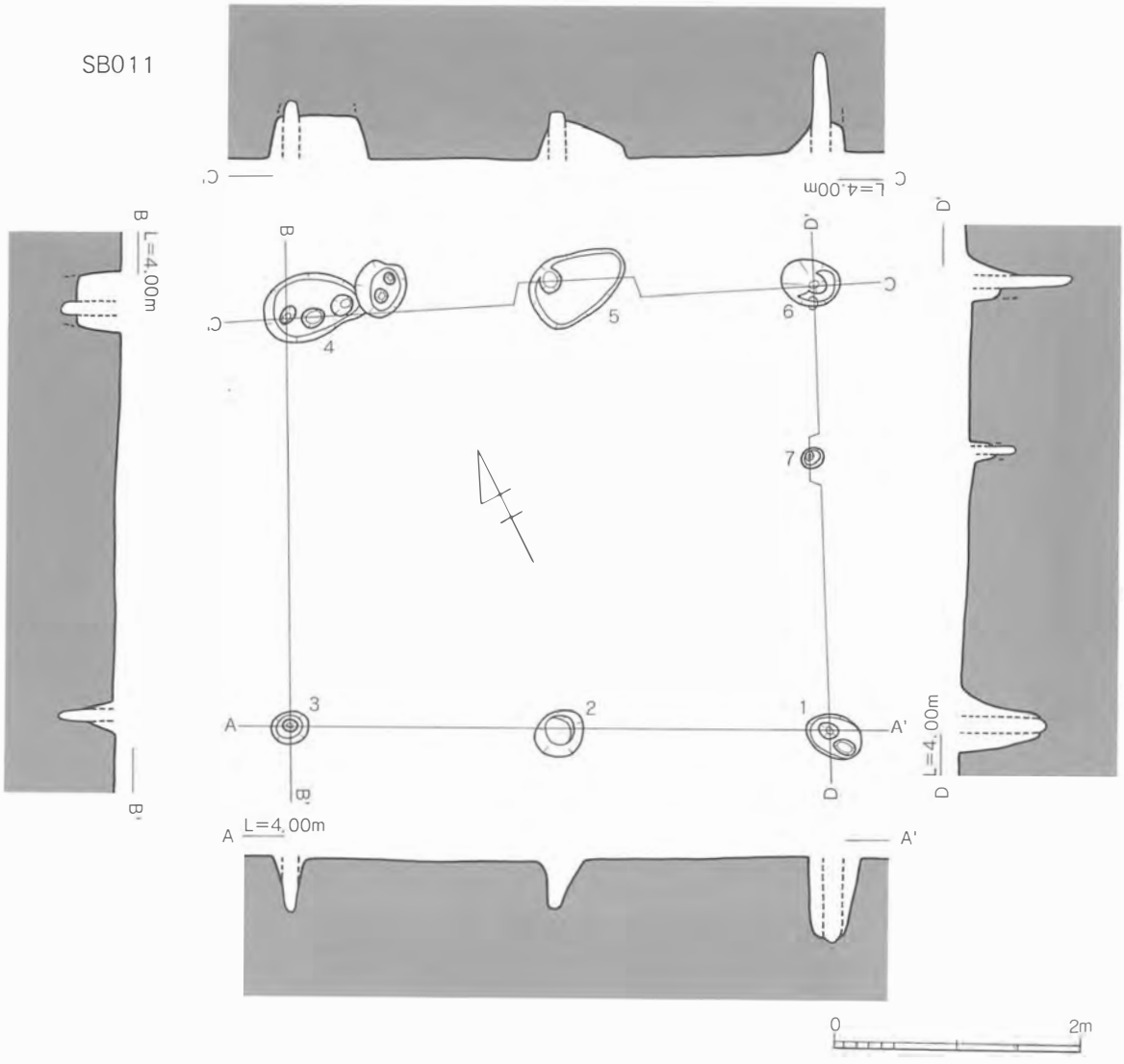
長軸約5.6m、短軸約3mの、1間×3間85本柱の掘立柱建物遺構である。柱穴の深さは、深いもので約50cm、浅いもので約20cmである。柱に囲まれた中は特に硬化していない。遺物を共伴しないため、作られた時期は不明であるが、この遺構を囲む様に掘られた溝状遺構の出土遺物から古代末に作られた可能性がある。

SB013（第25図）

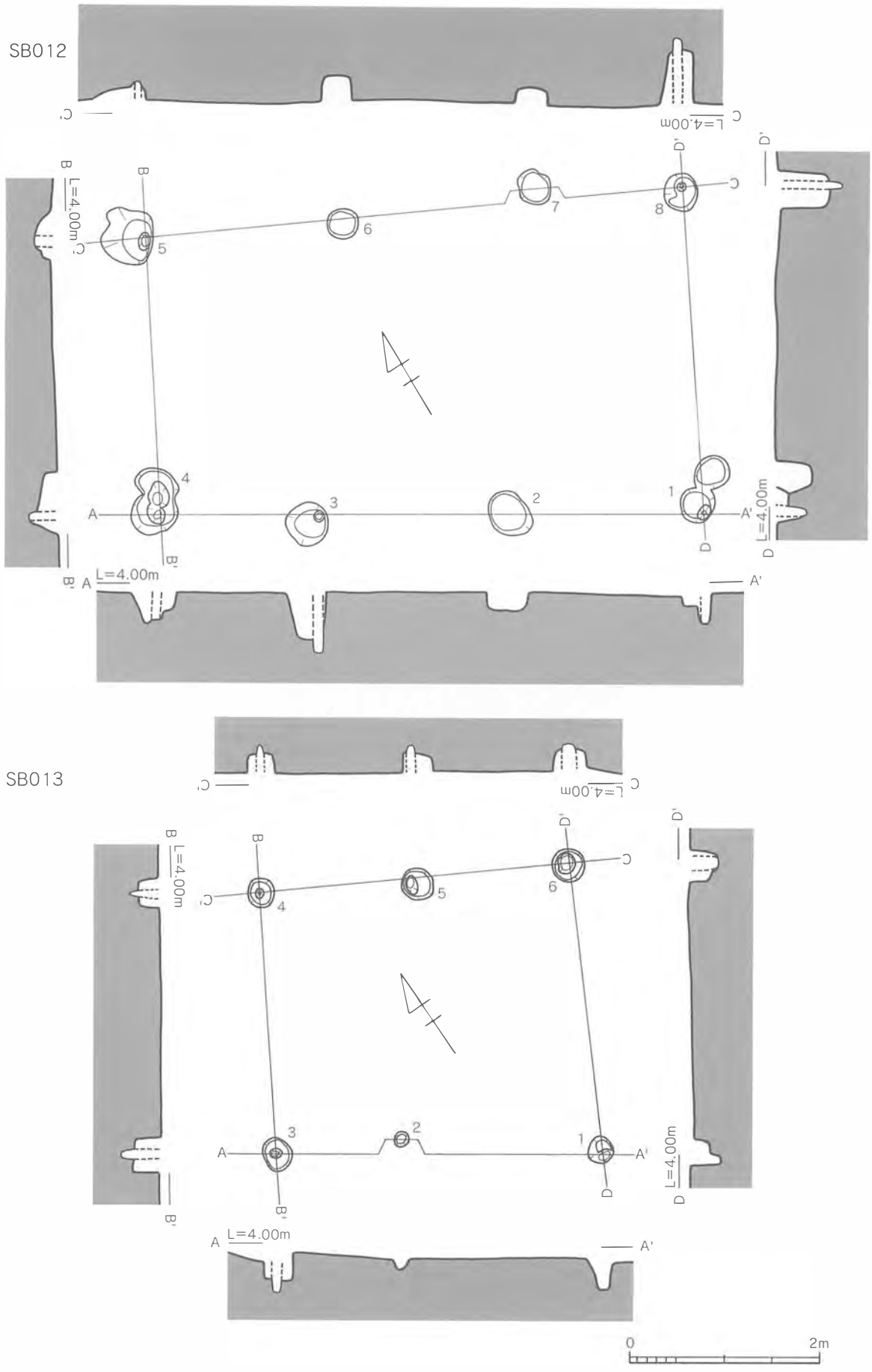
長軸約3.5m、短軸約2.8mの、1間×2間の6本柱の掘立柱建物遺構である。柱穴の深さは、深いもので約50cm、浅いもので約20cmである。柱に囲まれた中は特に硬化していない。遺物を共伴しないため、作られた時期は不明であるが、この遺構を囲む様に掘られた溝状遺構の出土遺物から古代末に作られた可能性がある。



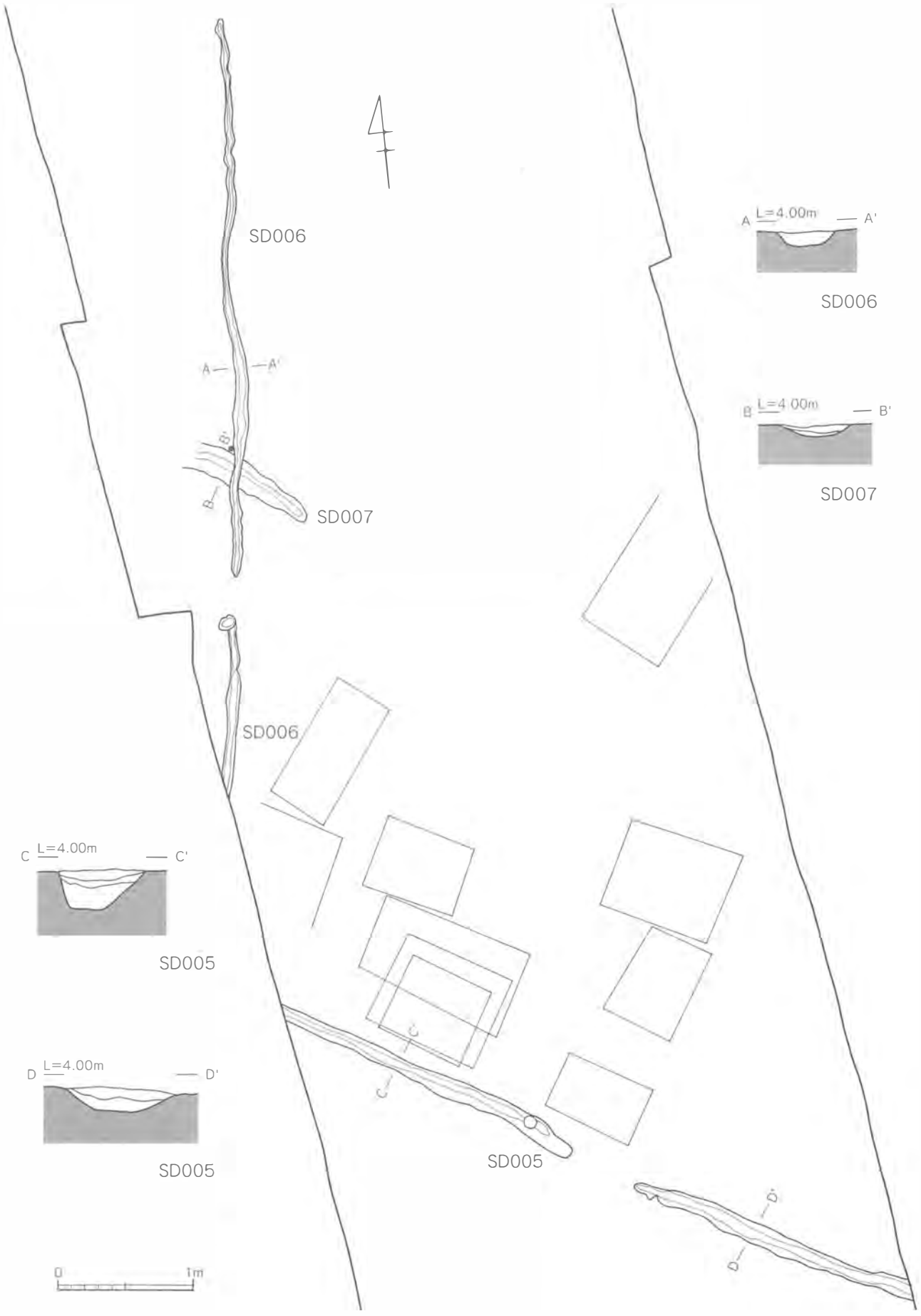
第23図　SB009·010実測図



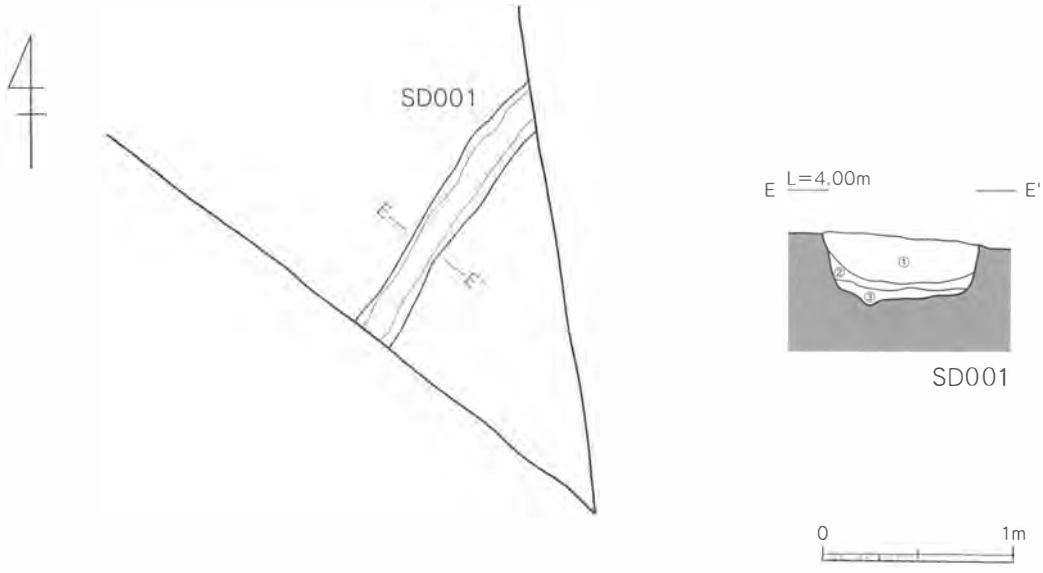
第24図　SB011実測図



第25図　SB012・013実測図



第26図　SD005･006･007実測図



第27図　SD001実測図

3　溝状遺構(SD)

SD001(第27図)

幅約40cmで深さ約50cmの溝状遺構である。遺物を共伴しないため、作られた時期は不明である。埋土の状況から、古代以前に掘られたと考えられる。

SD005(第26図)

幅約40cmで深さ約20cmの溝状遺構である。奈良時代の遺物がこの遺構より検出されている。

掘立柱建物を囲む様に掘られている。溝の内側がやや高くなっており、この溝は、建物群に水が入らないように掘られた可能性がある。

SD006(第26図)

幅約40cmで深さ約20cmの溝状遺構である。SD005と対を成す遺構である。奈良時代の遺物がこの遺構より検出されている。

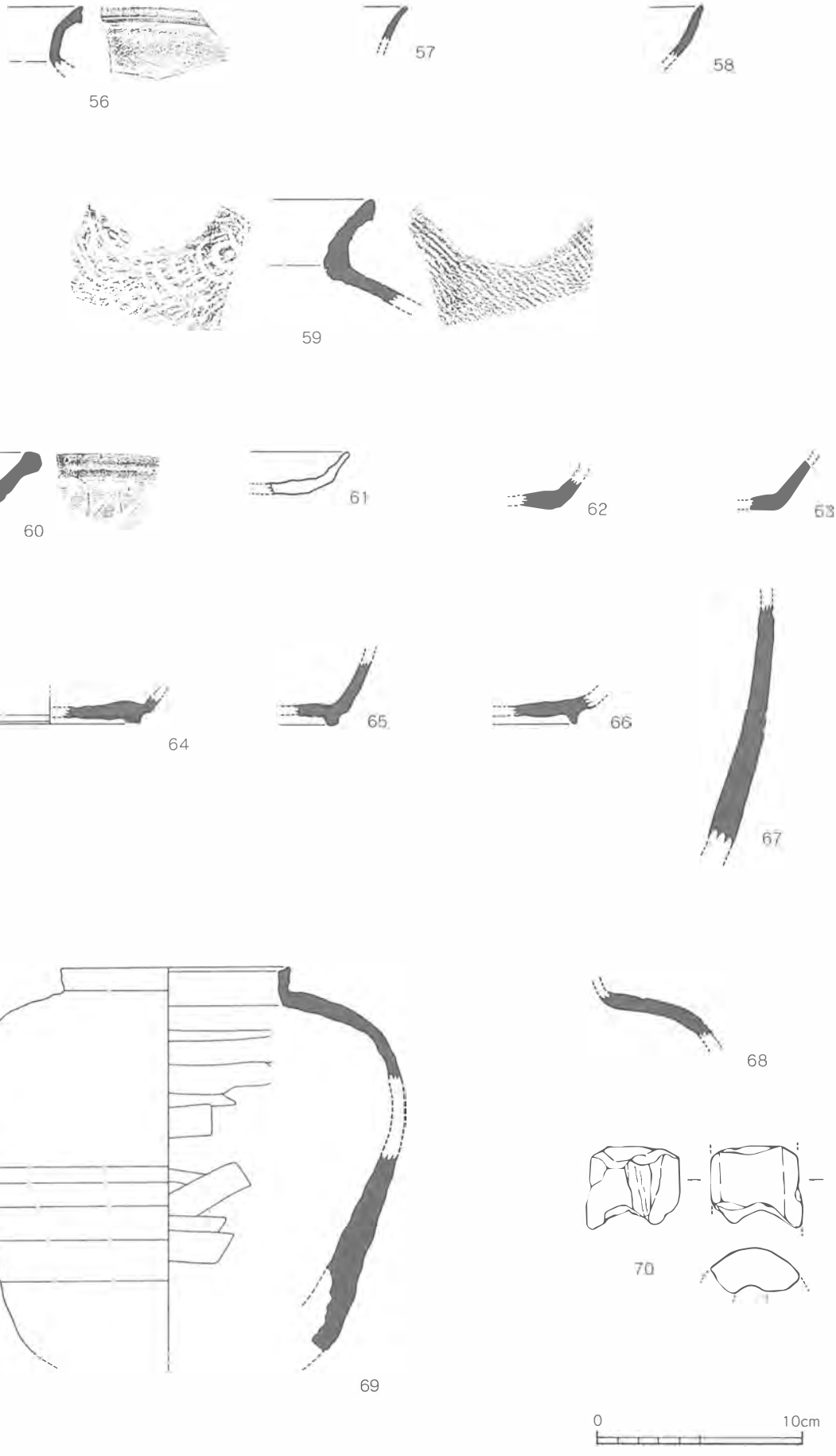
掘立柱建物を囲む様に掘られている。溝の内側がやや高くなっており、この溝は、建物群に水が入らないように掘られた可能性がある。

SD007(第26図)

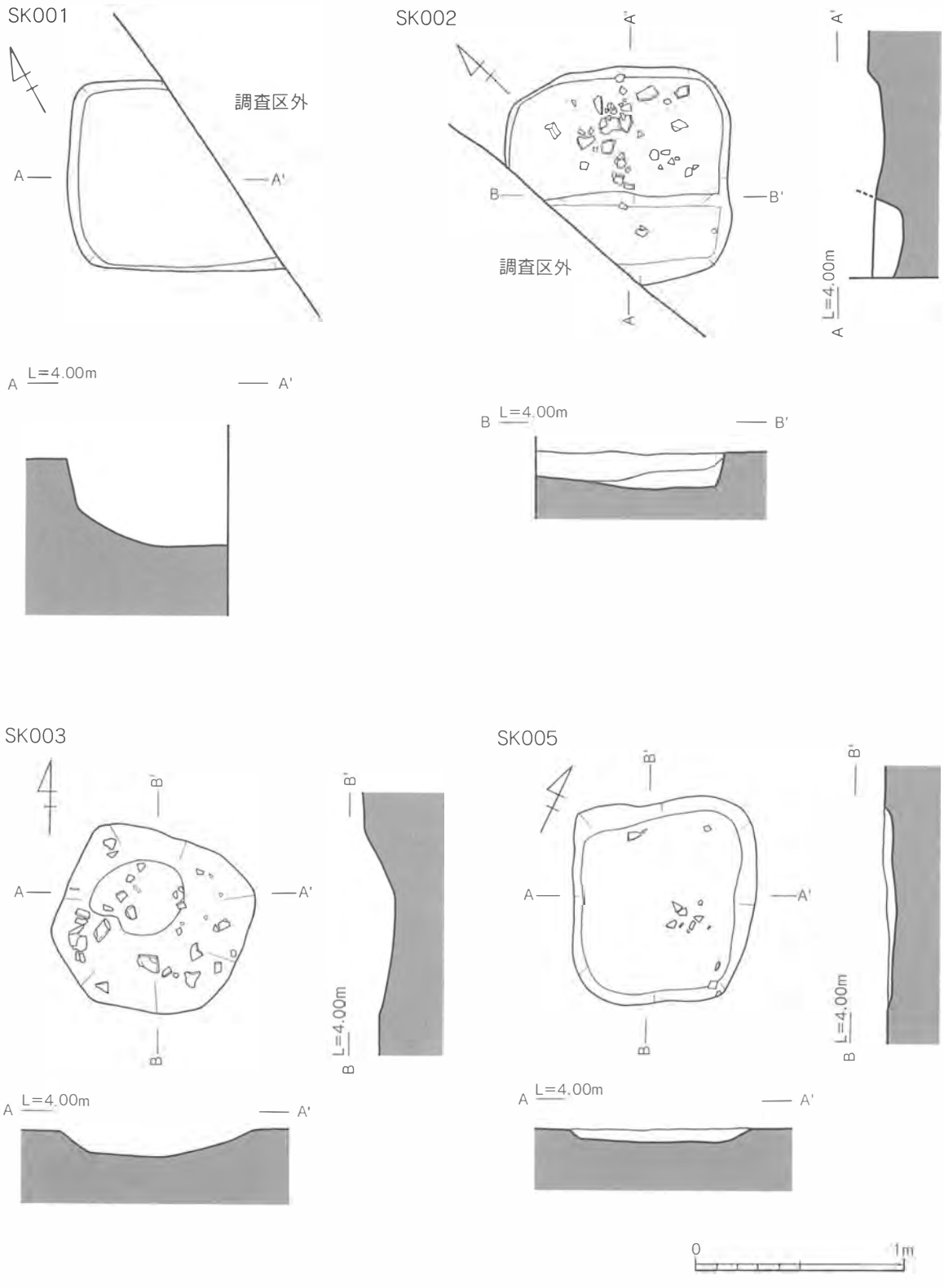
幅約80cmで深さ約20cmの溝状遺構である。奈良時代の遺物がこの遺構より検出されている。溝の切合いからSD006・005以前に作られた溝状遺構である。

SD005とSD006からは15点の遺物が出土している。(第26図)

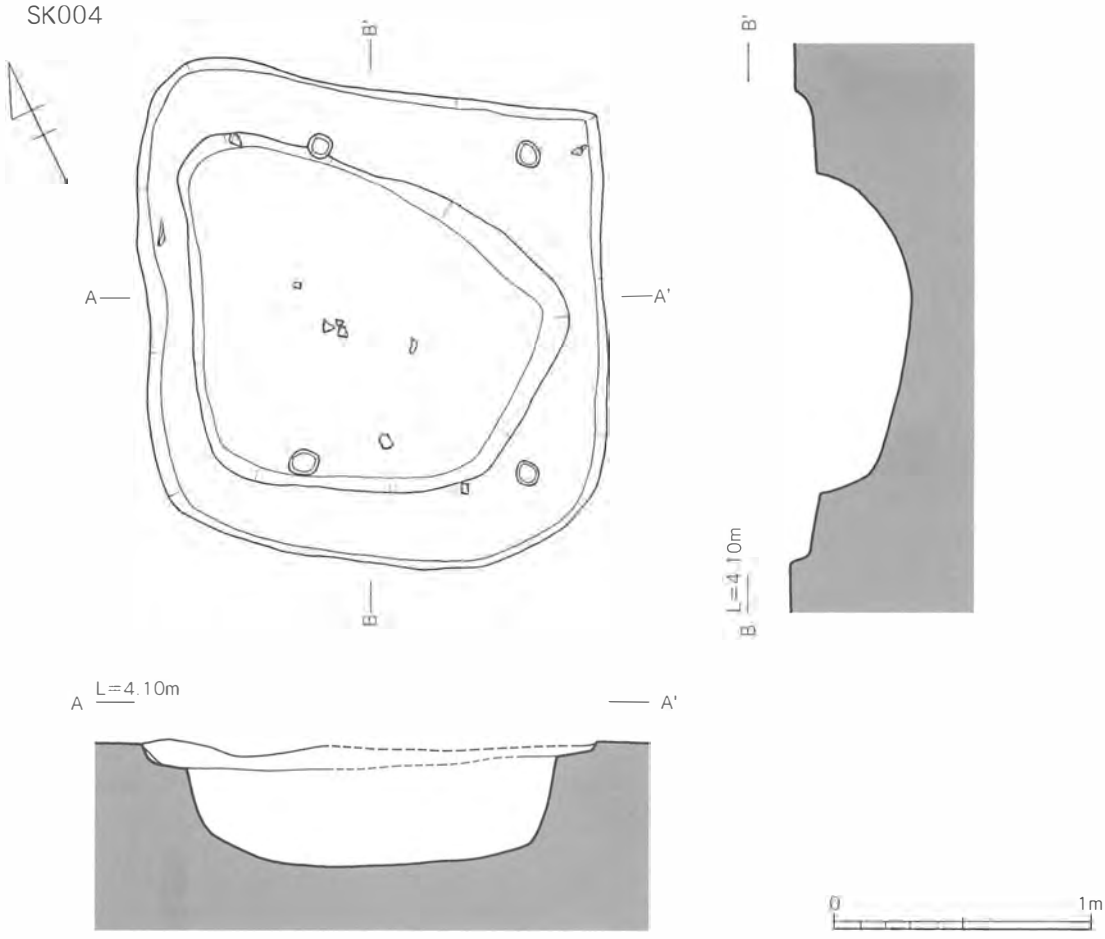
56は小型甕の口縁である。SI005から同様の遺物が出土している。57・58は小型の坏身である。59は須恵器の壺の口縁である。内面に叩きが認められる。60は壺の口縁である。61・62・63は坏身である。64・65・66は高台付きの坏身である。いずれも古代の遺物である。67は甕の胴部である。68は壺の肩部である。69は須恵器の短頸壺である。奈良時代後期の遺物である。70は鞴の羽口である。この遺跡内では、鍛冶遺構は確認されていないが、周辺で製鉄が行われていたことを示す資料である。



第28図　SD005･006･007出土遺物実測図



第29図　SK001・002・003・005実測図



第30図　SK004実測図

4　土壙(SK)

SK001(第29図)

西側が調査区外のため、全体の形状は不明である。推定形であるが、長辺約1m、短辺約0.7mで底面がややフラットな長方形の土壙である。遺物を共伴しないため、作られた時期は不明である。

SK0012(第29図)

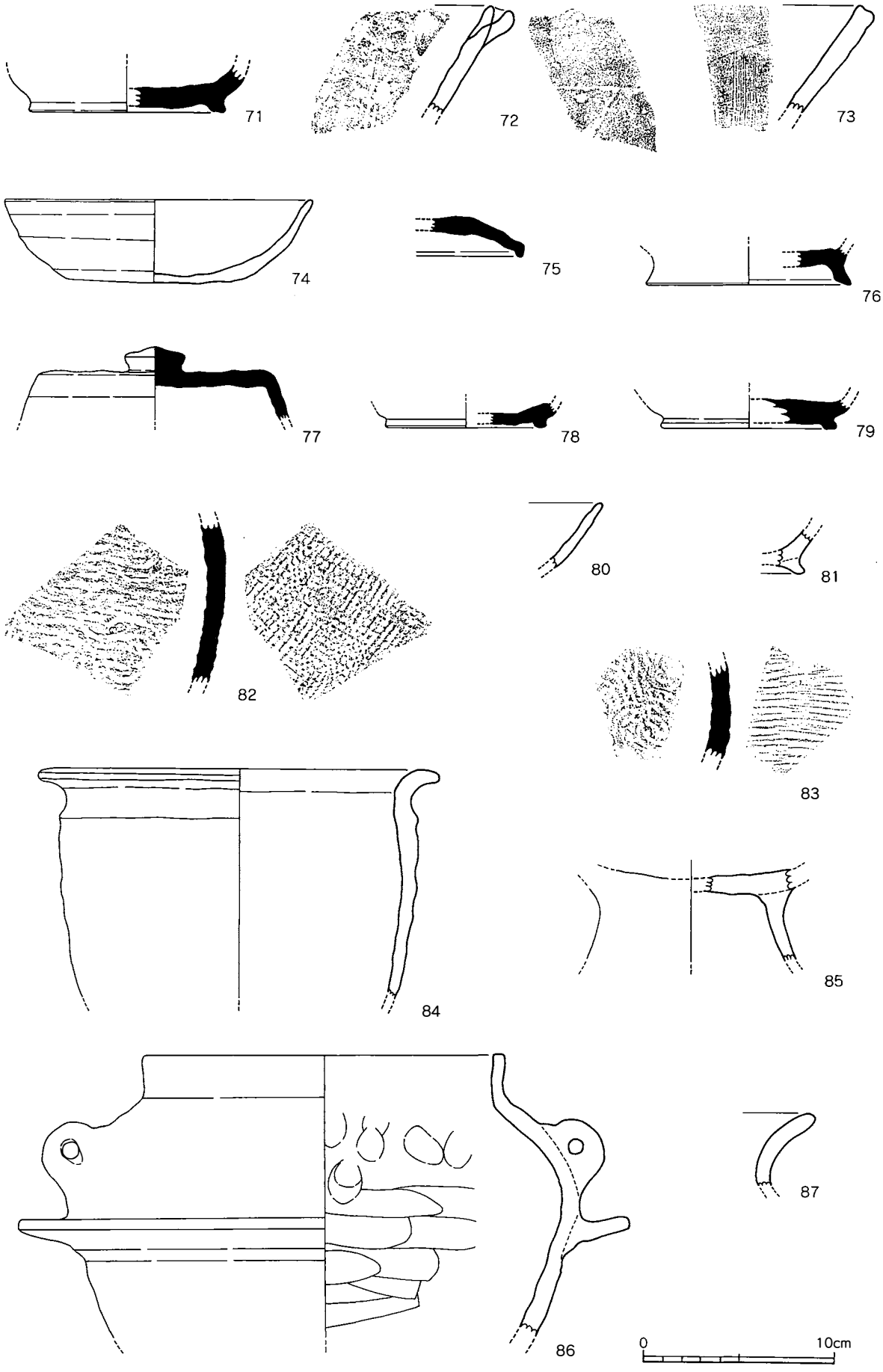
東側が調査区外のため、全体の形状は不明である。推定形であるが、一辺約1mで底面がややフラットな隅丸方形の土壙である。途中に段落ちしている。奈良時代の遺物が共伴している。

SK003(第29図)

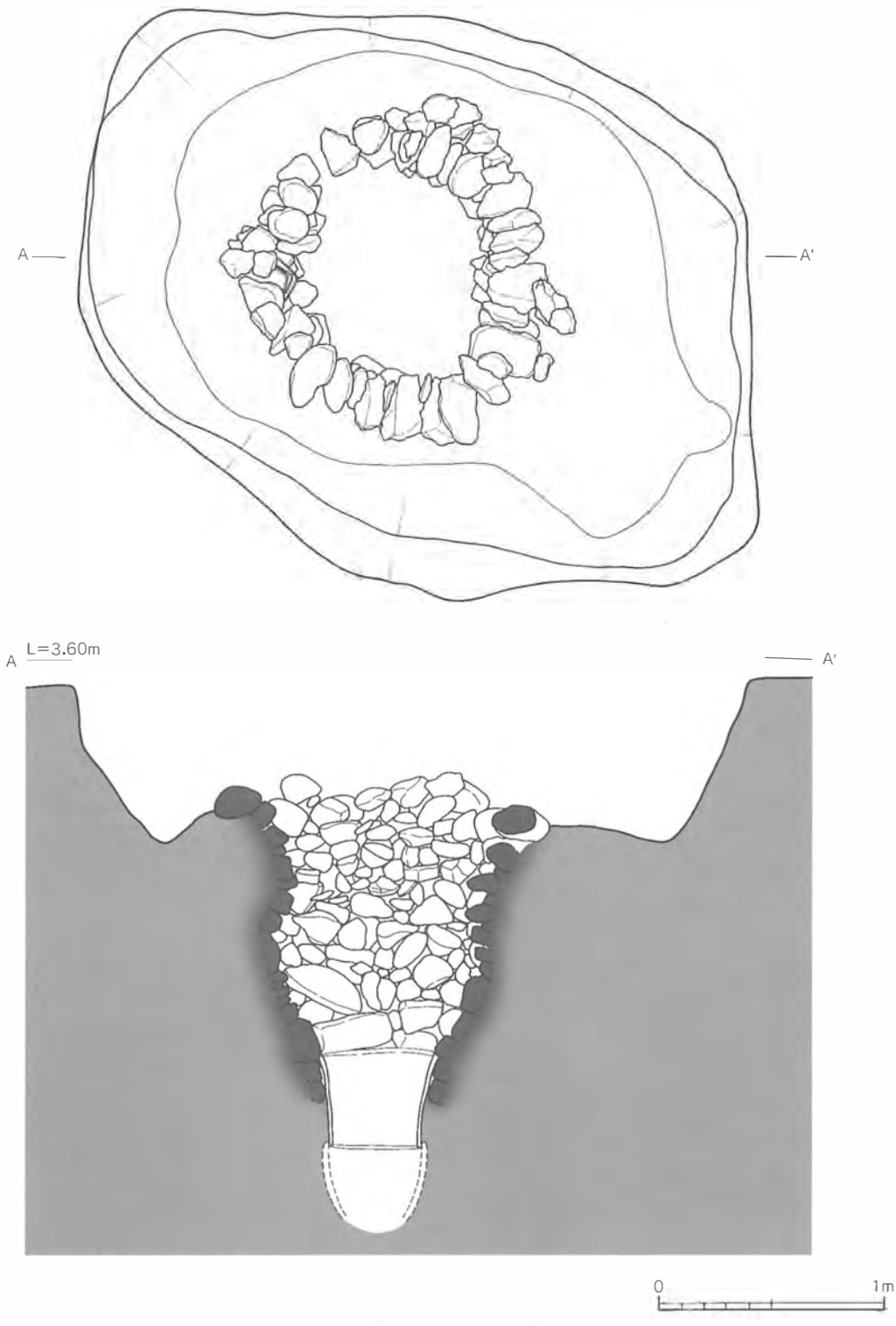
長径約0.7m、短辺約0.6mで底面がややすり鉢状の不整形を呈する土壙である。奈良時代の遺物が共伴している。

SK005(第29図)

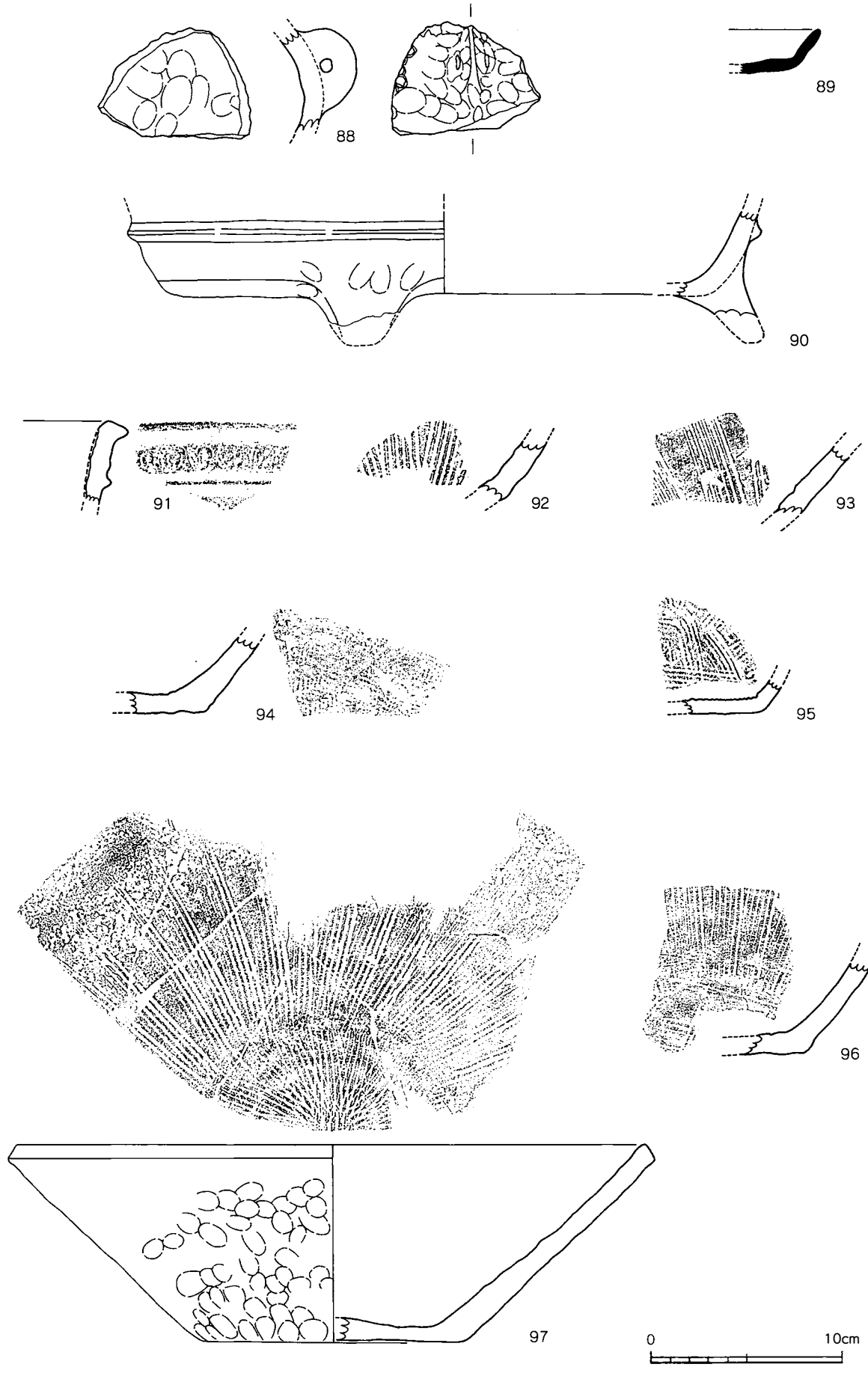
長径約0.7m、短辺約0.5mで底面がややフラットな長方形を呈する土壙である。奈良時代の遺物が共伴している。



第31図　SB002・003、SK002・003・004・005出土遺物実測図



第32図　SE001実測図



第33図　SE001出土遺物実測図

SK004（第30図）

一辺約2mで、途中で段落ちしている。底面がややフラットで隅丸方形を呈する土壙である。古墳時代前期の遺物が共伴している。

SB002・003・SK002～005・SX054の遺物（第31図）

71は高台を持つ坏身の底部である。72はすり鉢の口縁である。注ぎ口が付いている。83もすり鉢である。84は坏身である。やや大きい部類に入り、奈良時代後期の遺物である。85は須恵器の坏蓋である。86は高台付きの坏身の底部である。87は宝珠摘みをもつ須恵器の坏蓋である。奈良時代の遺物である。88・89も86同様、高台付きの坏身の底部である。90は坏身の口縁である。91は高台付きの坏身の底部である。やや外反し、平安時代の遺物である。92・93は須恵器の甕の胴部である。94は甕である。95は高坏の脚部である。96は羽釜である。古代末の遺物と考えられる。97は甕の口縁である。

5　井戸（SE）

SE001（第32図）

SE001は素掘りの穴の底にくり貫きの丸木を置き、その上にもうひとつくり貫きの丸木を重ねて底を造った後に人頭大の石を穴の周辺に積み上げて造られている。この遺跡自体が海抜が低く、2mほど掘り下げるだけで容易に湧水を得られる。調査区の他の遺構より造られた時代が新しいが、中世になって本遺跡付近を新田として開拓した記録があり、このことを裏付ける遺構である。

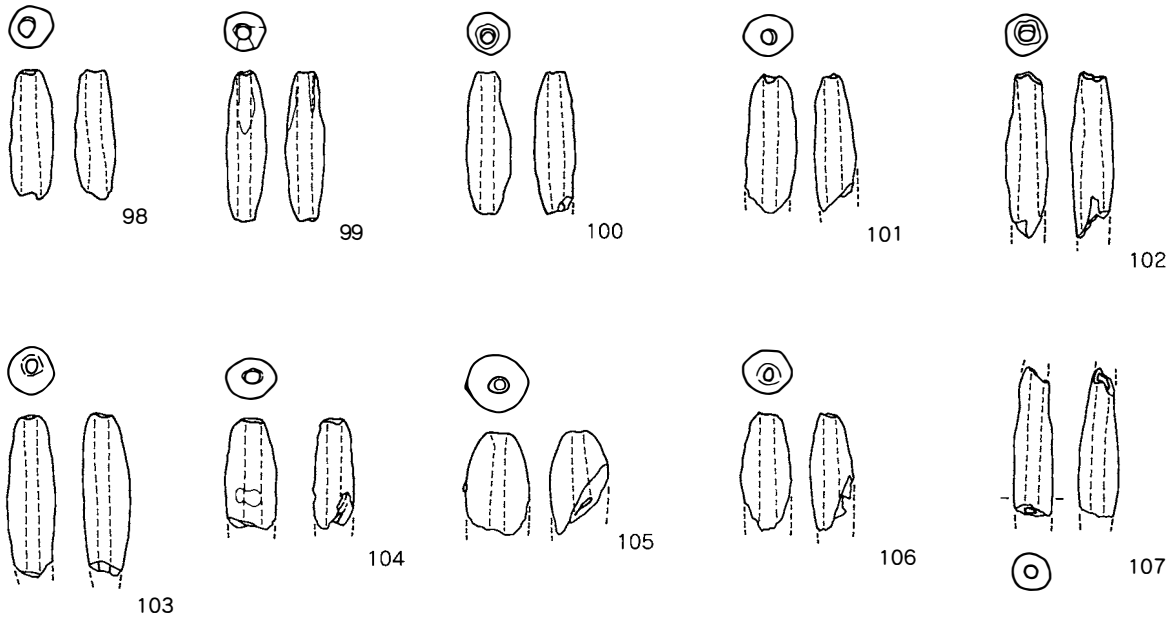
この遺構からは10点の遺物が出土している。（第33図）

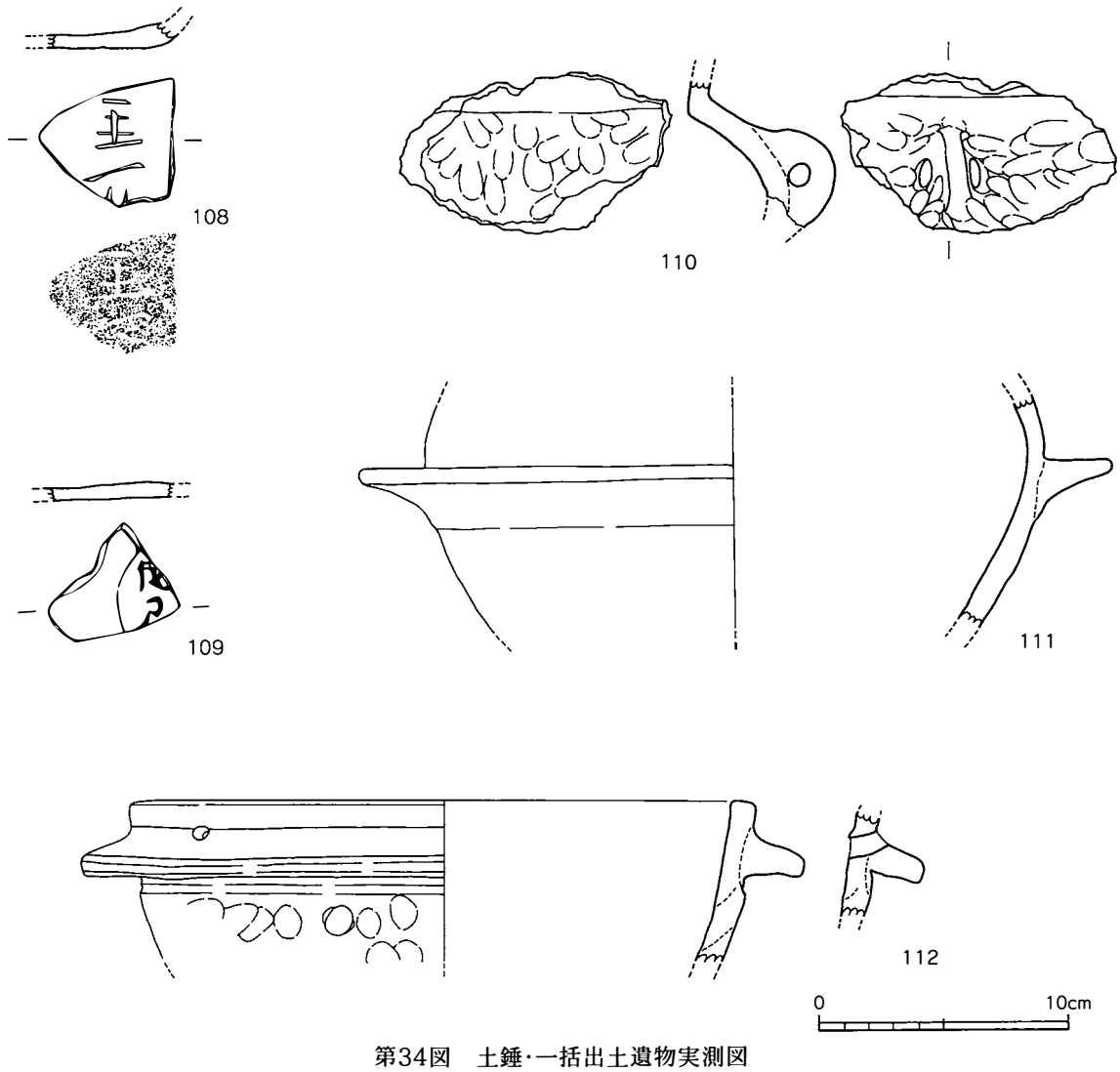
88は滑石製の石鍋の耳である。鎌倉時代の遺物である。89は坏身である。90は火舎である。88と同じく鎌倉時代の遺物である。91も90同様の火舎の口縁である。92・93・94・95・96・97はすり鉢である。

6　その他の遺物

98～107までは、土錘である。刺し網のもので、この遺跡の近辺で漁を行っていた事を示す貴重な資料である。

108は坏身である。底部に線刻が認められる。『 』と見て取れる。SI009にも同様な文字があるが、示す意味は不明である。110は滑石製の石鍋の耳である。109は坏身である。108と異なり。墨書で文字が記されている。『 』と見て取れる。111は羽釜である。112も111同様の羽釜である。いずれも中世の遺物である。





第34図　土錘・一括出土遺物実測図

第4章　中片小路遺跡での調査とその成果

第1節　Ⅰ区の遺構とそれに伴う遺物

第2節　Ⅱ区の遺構とそれに伴う遺物

第3節　Ⅲ･Ⅳ･Ⅴ区の遺構とそれに伴う遺物

第4節　Ⅵ区の遺構とそれに伴う遺物

第5節　Ⅶ区の遺構とそれに伴う遺物

第6節　Ⅷ区の遺構とそれに伴う遺物

第7節　Ⅸ区の遺構

第8節　Ⅹ区の遺構とそれに伴う遺物

第9節　Ⅺ区の遺構とそれに伴う遺物

第４章　中片小路遺跡での調査とその成果

第１節　遺構とそれに伴う遺物

中片小路遺跡について

本遺跡は、XI区に分けて調査を実施した。ここで各区の概要を述べておく。

Ⅰ区は近世の遺物を含む溝状遺構のみが確認された。区画された溝であり、囲まれた中は削平されていた。

II区では、数度の掘削の痕跡を持つ溝状遺構が確認された。SD004の溝状遺構とSD005からSD007の溝状遺構は、埋土の状況から別時期に作られた可能性がある。

Ⅲ区からⅤ区にかけては、用地取得時期に併せて調査区を分け、調査を実施したが、最終的にはひとつの調査区として終了した。これらのIIからⅤ区では、古墳時代の遺物を含む竪穴住居跡も2軒と西片稲村遺跡で検出された同じ時期の遺物を含む掘立柱建物を14棟検出した。

VI区は溝状遺構と多数の柱穴が検出された。溝状遺構はほぼ、南北に走るものと、東西に走るものとに区別できる。柱穴群と溝状遺構との関連を指す痕跡は確認できなかった。

Ⅶ区はいくつのも南北に走る溝状遺構と掘立柱建物と近世の遺物を含む土坑が検出された。溝状遺構は、下層では古墳時代の遺物が包含され、上層では近世の遺物を多量に含む。

Ⅷ区と拡張区では溝状遺構11条と掘立柱建物8棟、柵列状遺構1基、土壙17基、井戸1基が検出された。溝状遺構は全て北東から南西にかけて規則的に走っているが、用途は全く持って不明である。

掘立柱建物は建て方が、かなり歪である。出土遺物から古代の時期に作られたと考えられる。

また、土壙は17基を確認した。

井戸は、曲物を転用した井戸である。出土遺物から中世末から近世にかけて、この井戸は使用されたと考えられる。

IX区の全てが近世から近代にかけての墓域であり、地表面から3mほどの深さまで、墓穴が及んでおり、墓造営に際し、破壊されていることが確認できたため、本調査は実施しなかった。

Ⅹ区では掘立柱建物5棟、土壙6基、井戸1基がこの調査区で検出されている。

Ⅷ・Ⅶ区の掘立柱建物と比較してほぼ歪みがない。出土遺物から古代の時期に作られたと考えられる。

土壙はいずれも不整形である。用途も不明である。掘立柱建物と同時期の遺構と考えられる。

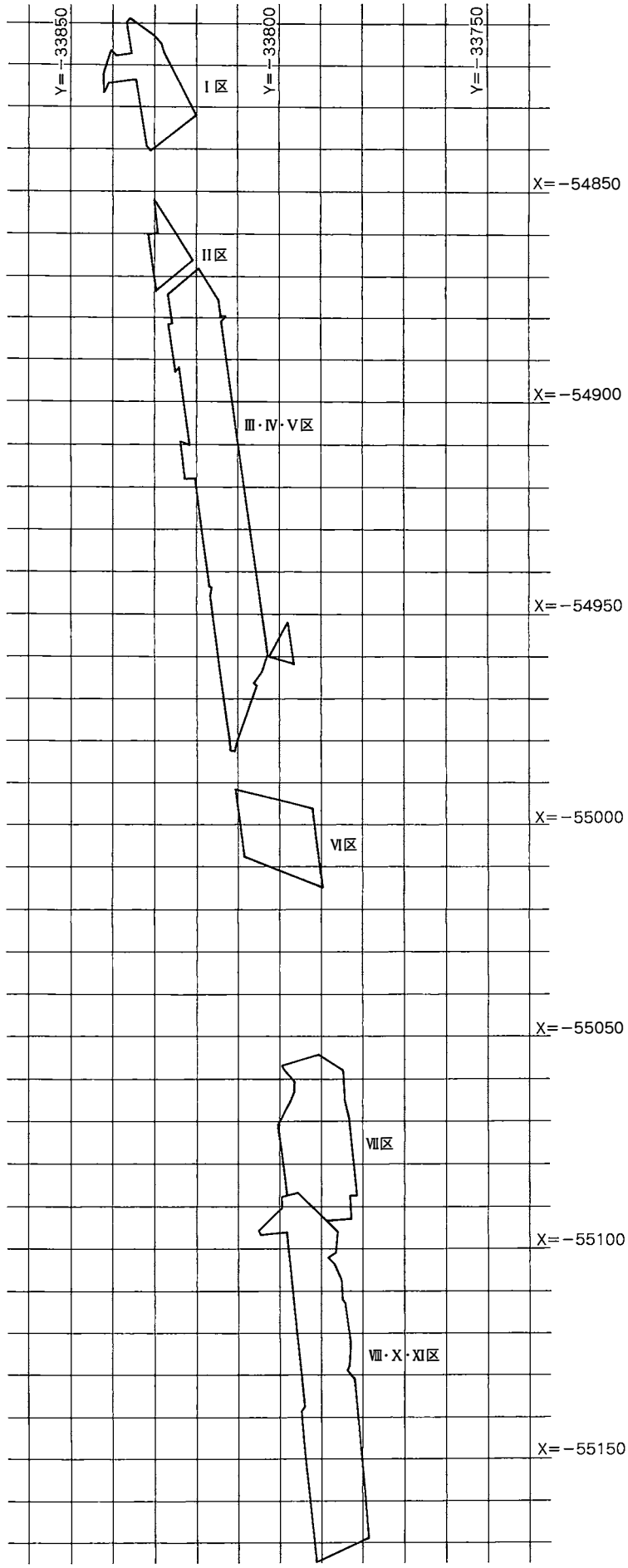
井戸は方形の平面プランをもつが、時期は特定できなかった。

XI区では溝状遺構9条と掘立柱建物6棟、土壙12基を検出した。

Ⅷ・Ⅶ区の掘立柱建物と比較してほぼ歪みがない。近世の遺物を含む事から、この時期に作られたと考えられる。

土壙のうちSK067は焼土を含む事から焼成遺構とも考えられたが、底部に焼成痕が認められなかったため、焼土が遺構に混入したと考えられるため区別している。

以上が、この中片小路遺跡の概要である。Ⅰ区とⅢ区からⅤ区、VI区からXI区で遺跡の様相が若干異なる。詳細は、各区の説明で述べる事とする。



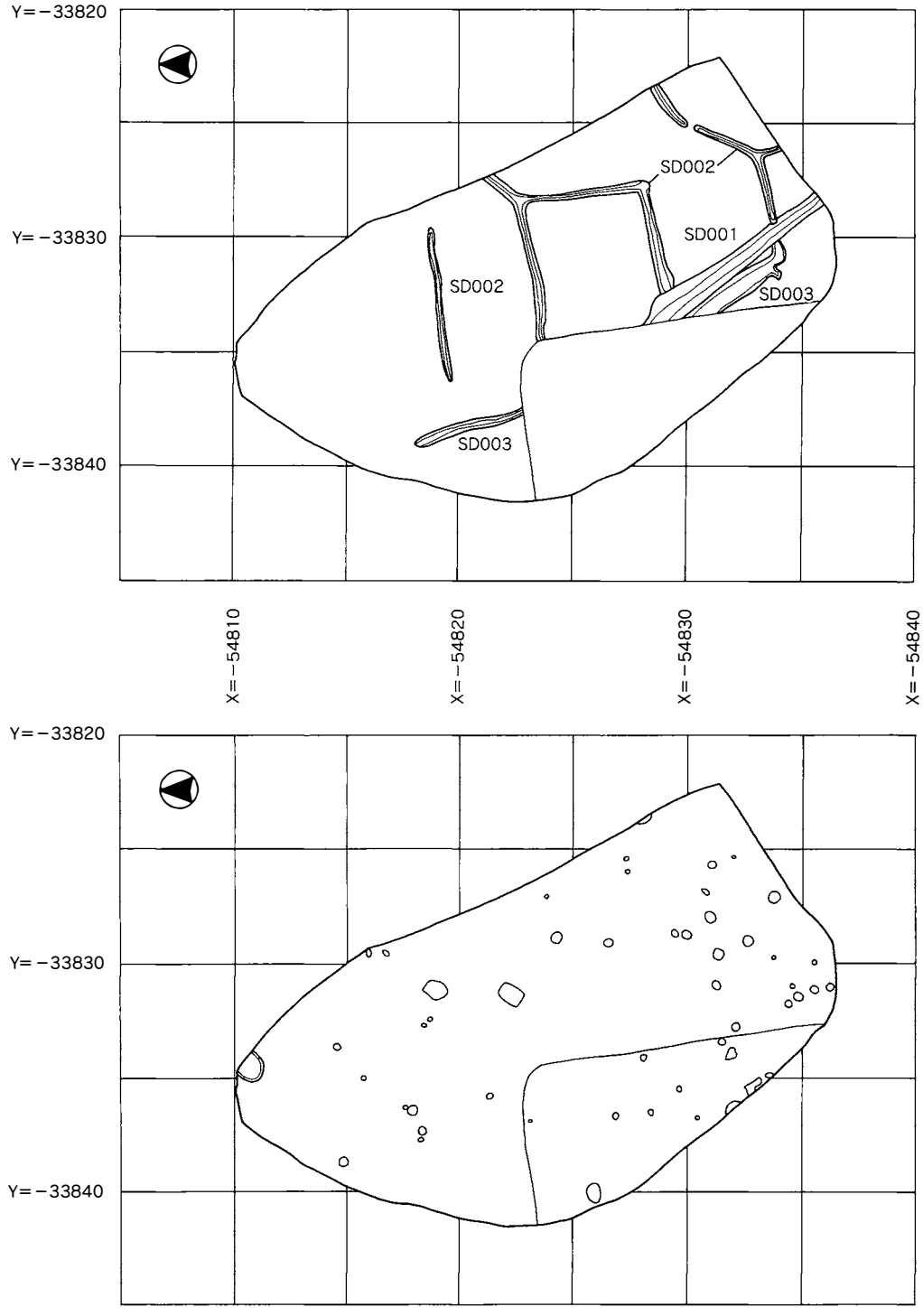
第35図　中片小路遺跡グリッド図

第１節　遺構とそれに伴う遺物

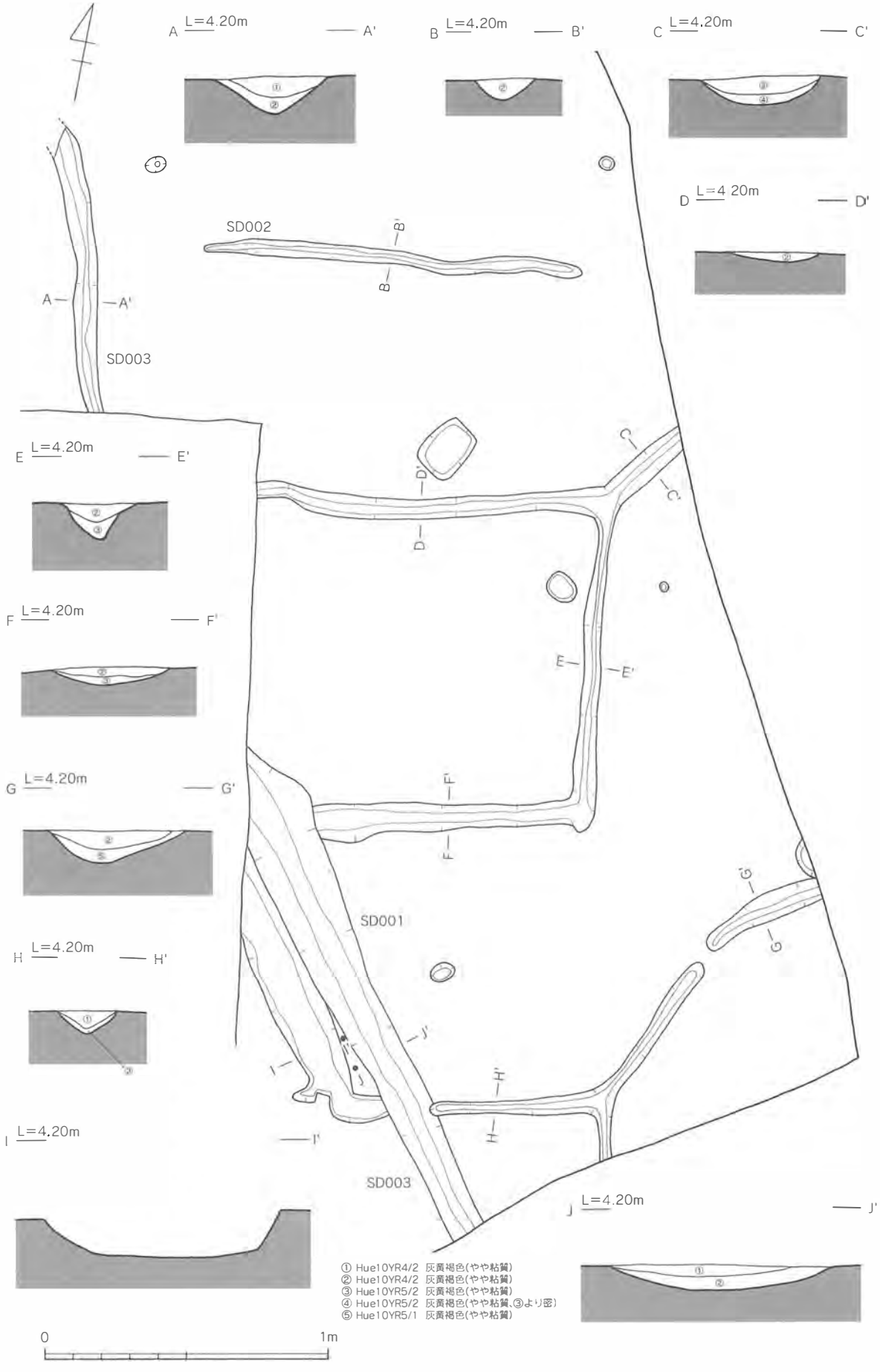
Ｉ区について

近世の遺物を含む溝状遺構3条と土壙1基が確認された。SD003は一辺約10mに区画されており、用排水路としての性格は考えがたい。溝の内側が削平されているため、用途は断定できないが、畑としての区画溝として作られた可能性が考えられる。

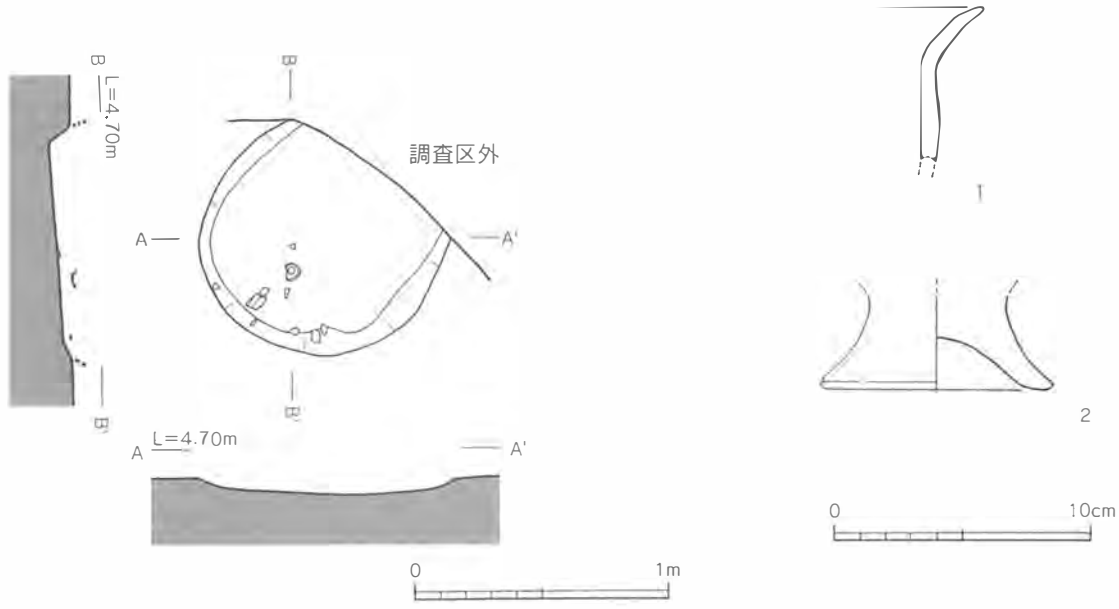
SK001は出土遺物から中世に作られたと考えられる。上部が大きく削平されて、現存の深さが10cm余りである。遺物は土壙墓に供献される事の多い陶磁器であることから、土壙墓である可能性もある。



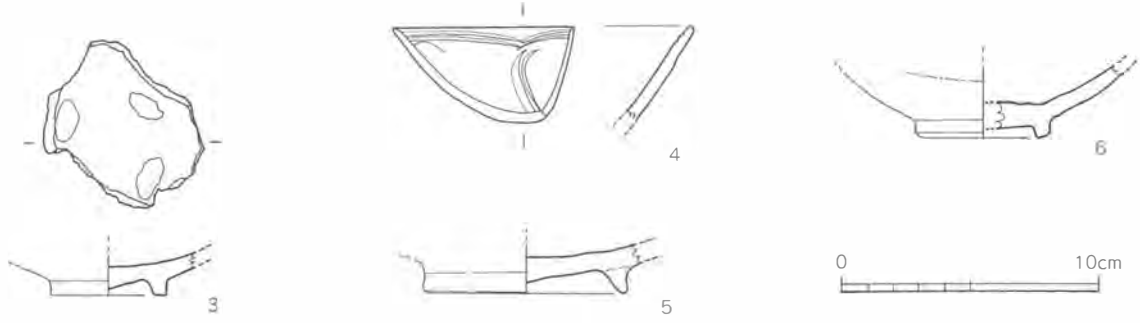
第36図　Ｉ区　全体遺構配置図(1/300)



第37図　SD001·002·003実測図　平面図(1/100)



第38図　SK001及び出土遺物実測図



第39図　一括出土遺物実測図

1 溝状遺構（SD）

SD001（第35図）

幅約60cm、深さ約30cm、北西から南東へ走る溝状遺構である。SD003を切って掘られている事から、SD003より新しい。出土遺物が無いため、性格等は不明である。

SD002（第35図）

幅約40cm、深さ約20cm、東西方向に約15m走る溝状遺構である。形状はSD003と似通っているが、同じ遺構とする根拠が検出できなかった。

SD003（第35図）

幅約40cm、深さ約20cm、10mを一辺とした方形の規格を持つ。出土遺物が無いため、詳細は不明である。溝の埋土状況から、区画の中央部が大きく削平されている可能性があり、柱穴等も無いため、近世の畑とも考えられる。

2　土壙（SK）

SK001（第36図）

一部が調査区外にあるが、現状からやや楕円形を呈する。長辺約1.6m、短辺約1.4mで底面がややフラットな形状をもつ。出土遺物から中世に作られたと考えられる。

この遺構からは3点の遺物が出土している。は甕の口縁である。表面が摩滅しており、内外面の調整は不明である。形態から弥生土器であることがわかる。2は同じく甕の脚部で弥生時代中期の土器である。1と2は、本来この遺構に伴うものではなく、土壙が掘られた際の流れ込みと考えられる。3は内面重ね焼きの砂粒跡(焼台痕)を残す陶器である。4は外面に蓮状文を施す青磁である5は底部のみであるが、削りだしの高台をもつ青磁である。

第２節　II区の遺構とそれに伴う遺物

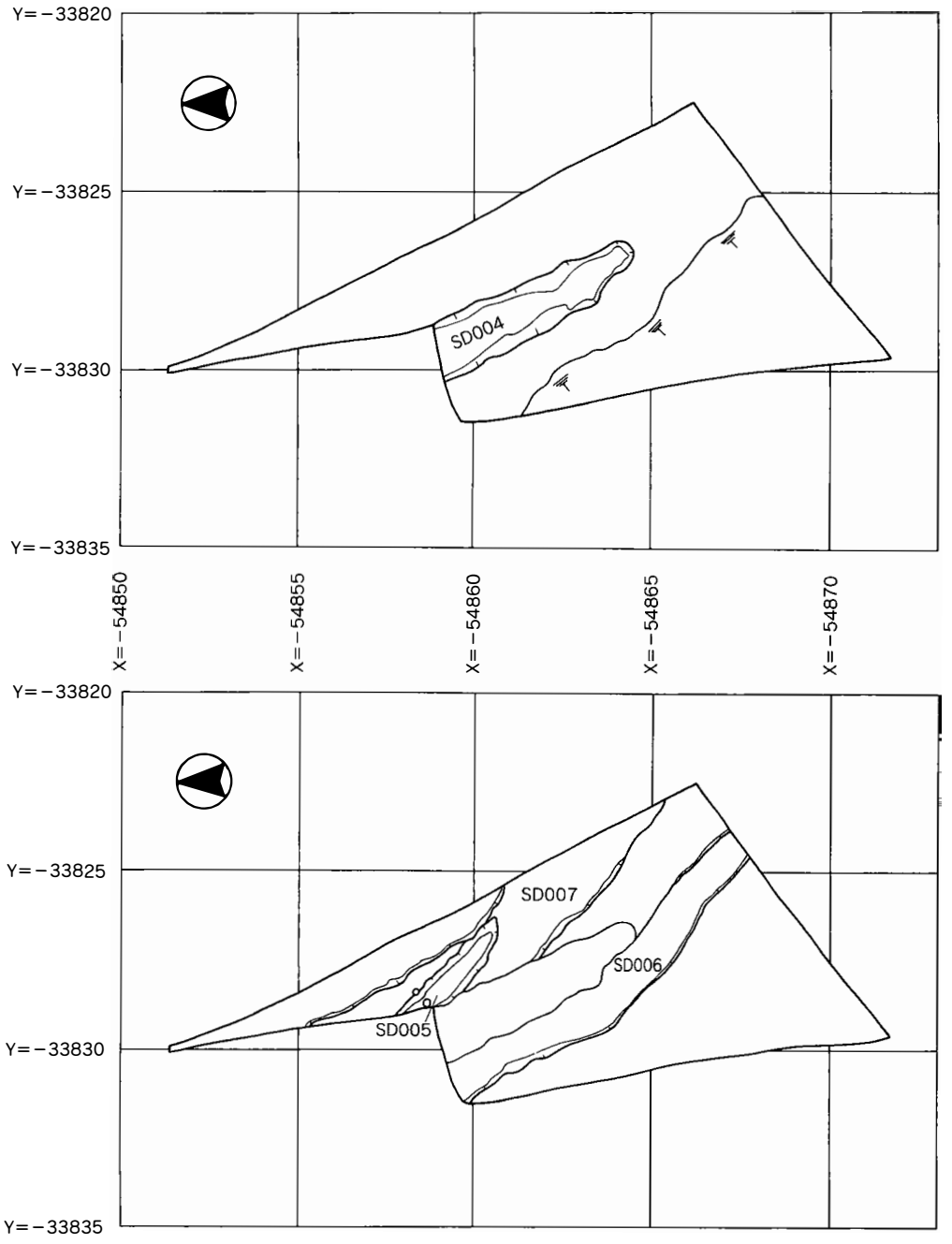
II区について

溝状遺構が4条確認された。SD004は溝状遺構で出土遺物から中世に掘られたと考えられる。SD005からSD007は出土遺物がないため時代の特定は出来ないが、SD005からSD007が完全に、その溝状遺構としての役目を終えて埋没して後、SD004が掘られているため、中世より古い時期に掘削が行われたと考えられる。

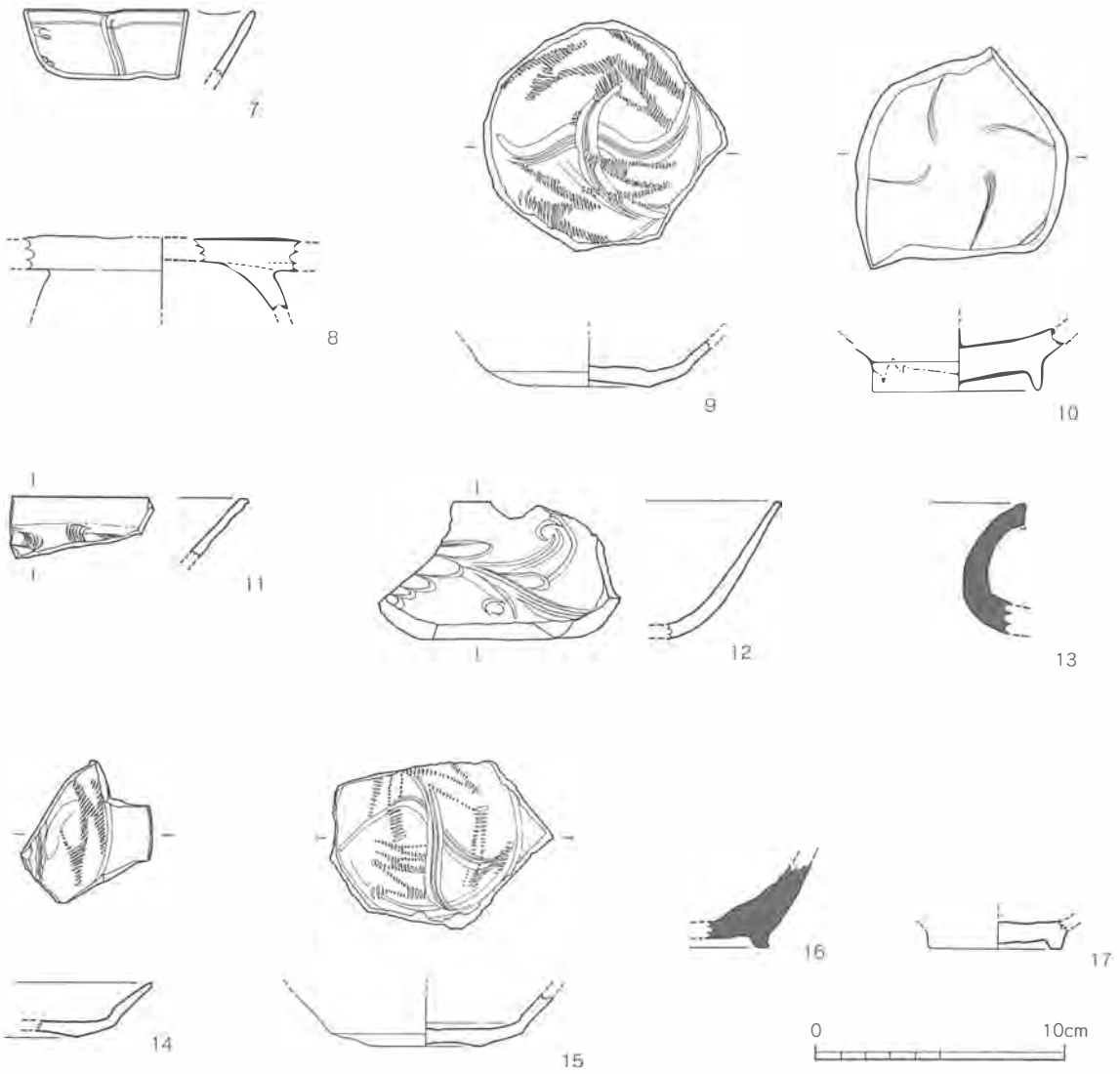
1　溝状遺構（SD）

SD004（第40図）

幅約3m、深さ約50cm、北西から南東へ走る溝状遺構である。出土遺物から中世に作られたと考えられる。この遺構からは11点の遺物が出土している。



第40図　II区　全体遺構配置図（1/200）



第41図　SD004・一括出土遺物実測図

7は口縁を花状に整え、内面に飛雲文を施す中世の青磁碗である。8は高台付盤である。脚と皿の一部のみを残すため、全体の形状は不明である。9は内面に鳥文を施す鎌倉時代の青磁製碗である。10は削り高台をもち内面に鳥文を施す白磁碗である。11は内面に鳥文を施す鎌倉時代の青磁皿である。12は底部が欠損しているが、内面蓮華文を施す鎌倉時代の青磁碗である。13は須恵器の小型壺である。口縁のみのため、全体の形状は不明である。14は内面に鳥文を施す鎌倉時代の青磁台付碗である。15は内面に鳥文を施す鎌倉時代の青磁小皿である。16は貼り付け高台をもつ須恵器の壺の底部である。17は中世の青磁碗の底部である。(第41図)

SD005(第40図)

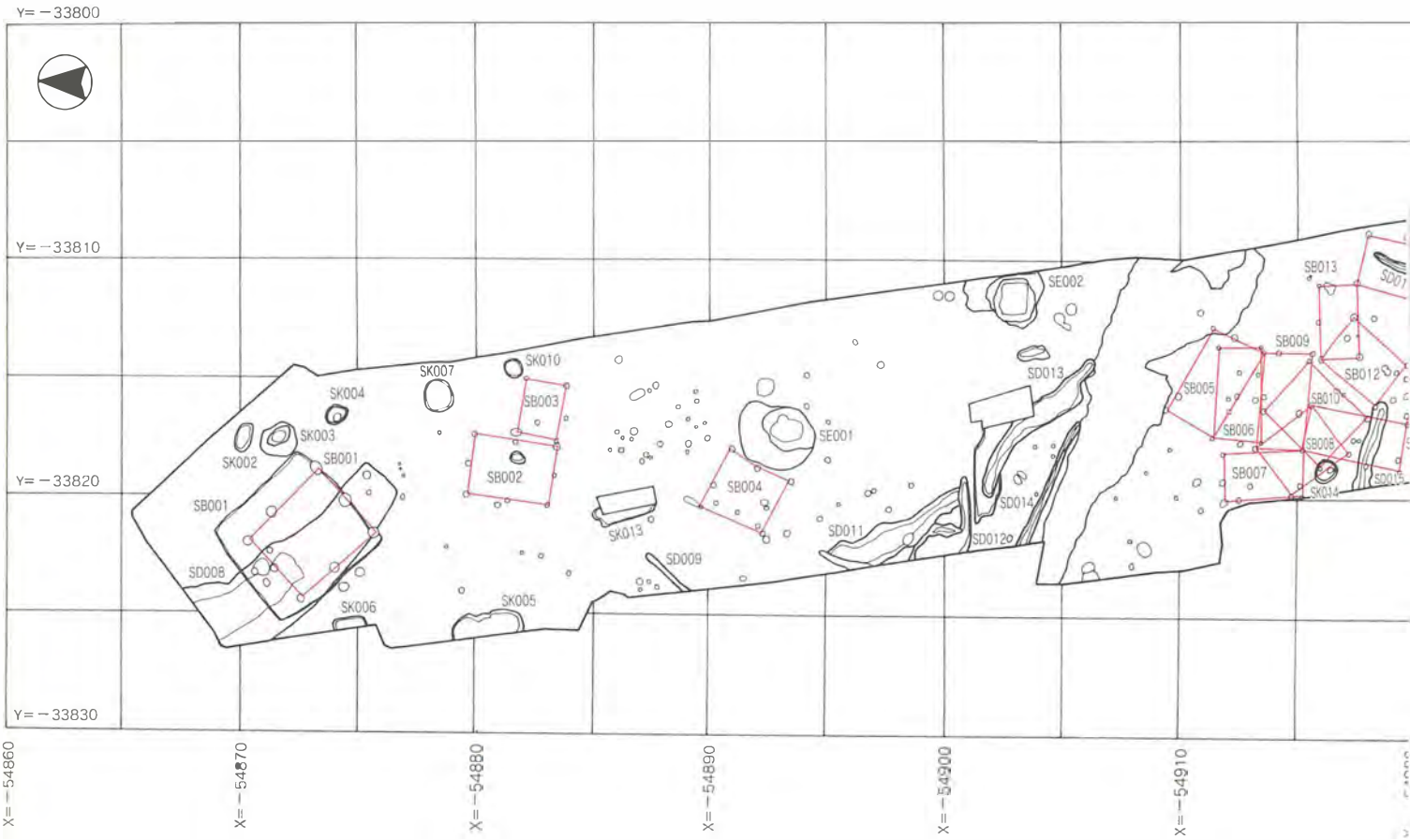
幅約2m、深さ約30cm、北西から南東方向に約7m走る溝状遺構である。出土遺物が無いため、遺構の性格と時期は不明である。

SD006(第38図)

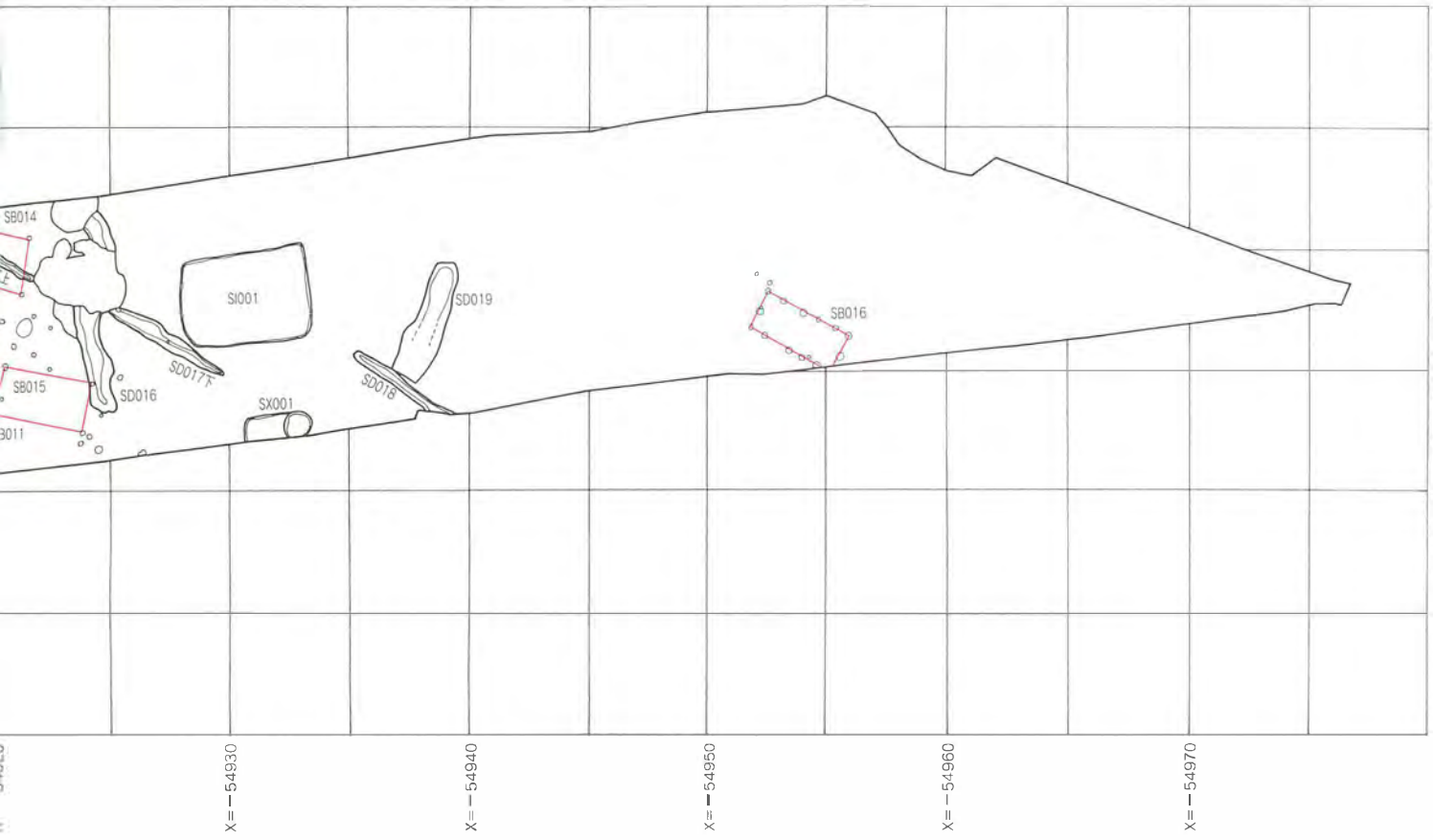
幅約5m、深さ約30cm、北西から南西方向に弧を描いて約20m走る溝状遺構である。出土遺物が無いため、遺構の性格と時期は不明である。

SD007(第38図)

幅約4m、深さ約30cm、北西から南東方向に弧を描いて約20m走る溝状遺構である。出土遺物が無いため、遺構の性格と時期は不明である。


Y=－33800
Y=－33810
Y=－33820
Y=－33830
X=－54860
X=－54870
X=－54880
X=－54890
X=－54900
X=－54910
SK001
SK002
SK003
SK004
SK005
SK006
SK007
SK008
SK009
SK010
SK011
SK012
SK013
SK014
SB001
SB002
SB003
SB004
SB005
SB006
SB007
SB008
SB009
SB010
SB011
SB012
SB013
SD008
SD009
SD011
SD012
SD013
SD014
SD015
SE001
SE002

第42図　Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区



全体遺構配置図(1/300)

第３節　Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区の遺構とそれに伴う遺物

Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区について

古代の遺物を含む竪穴住居跡を１軒確認した。

また、西片稲村遺跡で検出されたものと同じ時期の遺物を含む掘立柱建物が16棟検出された。その他には溝状遺構が７条、土壙が19基、井戸が２基、不明遺構が１基検出された。

この調査区が中片小路遺跡での中心である。八代平野の微高地に営まれた本遺跡では、弥生時代から中世にかけての遺物が出土した。

しかし、近世の開墾や近年の宅地開発等に伴い、削平され多くの遺構が消失している。

今回の調査では残された僅かな遺構から、古代末から中世にかけて、掘立柱建物を中心に溝状遺構によって区画され、計画的に建てられた本遺跡の様相が窺い知れる。

また、井戸等が検出されることから、今回の調査区外に生活遺構が包蔵されていることは予測される。

更に、いくつかの遺構は土壙墓の可能性も考えられたが、明確に証明でき得る資料は得られなかった。今後の調査成果によって更に本遺跡が解明される事が待ち望まれる。

１　竪穴住居（SI）

SI001（第43図）

長辺が約9m、短辺約6mのやや隅丸長方形で４本柱である。柱穴はいずれも深さが約40cmを測る。内部に硬化している痕跡が認められなかった。この遺構からは竈又は炉跡のような火を焚いた痕跡は認められなかった。この遺構からは、７点の遺物が出土している。

18は古代の土師器である。貼り付けの高台をもつ。19は古代の土師器である。貼り付けの高台をもつ。20は古代の土師器である。つまみ出しの高台をもつ。21は古代の土師器である。つまみ出しの高台をもつ。22は古代の土師器である。貼り付けの底部をもつ。23は古代の土師器である。24は古代の土師器である。

２　掘立柱建物（SB）

SB001（第45図）

長軸約4m、短軸約3.4mで２間×２間の８本柱の側柱構造の掘立柱建物遺構である。柱穴の深さは、深いもので約20cm、浅いもので約10cmである。柱の外側に浅く掘り囲まれていた。中は特に硬化していない。遺物を共伴しないため、作られた時期は不明である。浅く掘り窪められている事から、作業場としての用途も考えられるが、類例が無いこと、証明に値する出土品が無いことから、推測の域を出ない。

SB002（第46図）

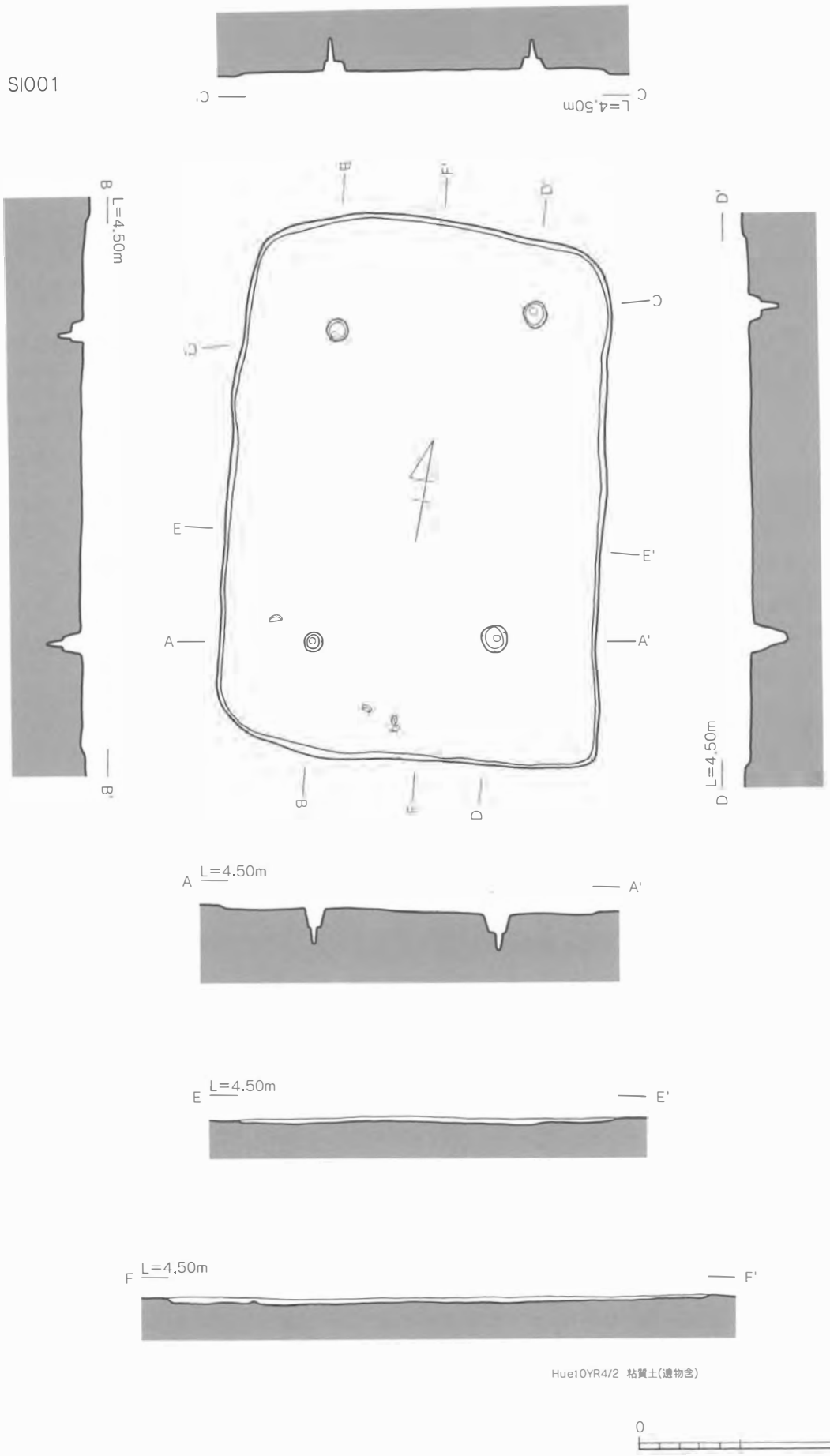
長軸約3.5m、短軸約2.5mの、２間×２間の６本柱の側柱構造の掘立柱建物遺構である。柱穴の深さは、深いもので約20cm、浅いもので約10cmである。柱の内側は特に硬化していない。遺物を共伴しないため、作られた時期は不明である。

SB003（第46図）

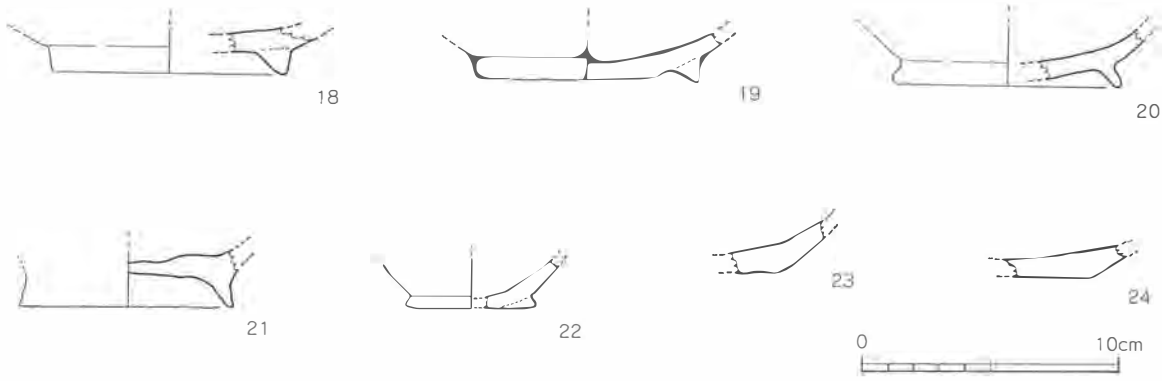
長軸約2.4m、短軸約1.8mの、１間×１間の４本柱の側柱構造の掘立柱建物遺構である。柱穴の深さは、深いもので約20cm、浅いもので約10cmである。柱の内側は特に硬化していない。遺物を共伴しないため、作られた時期は不明である。

SB004（第47図）

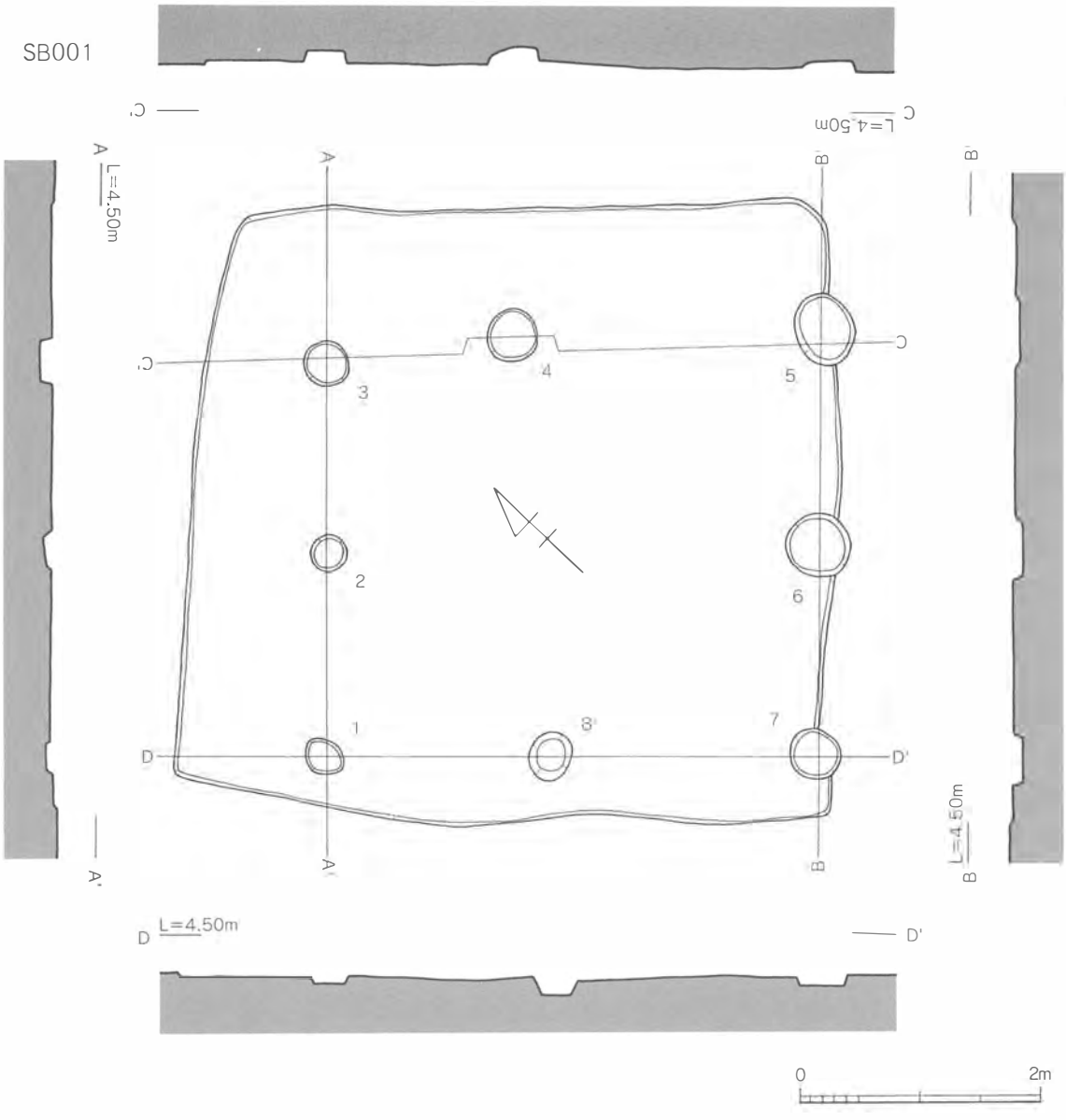
長軸約3m、短軸約2.8mの、１間×１間の４本柱の側柱構造の掘立柱建物遺構である。柱穴の深さは、深いもので約20cm、浅いもので約10cmである。柱の内側は特に硬化していない。遺物を共伴しないため、作られた時期は不明である。



第43図　SI001実測図



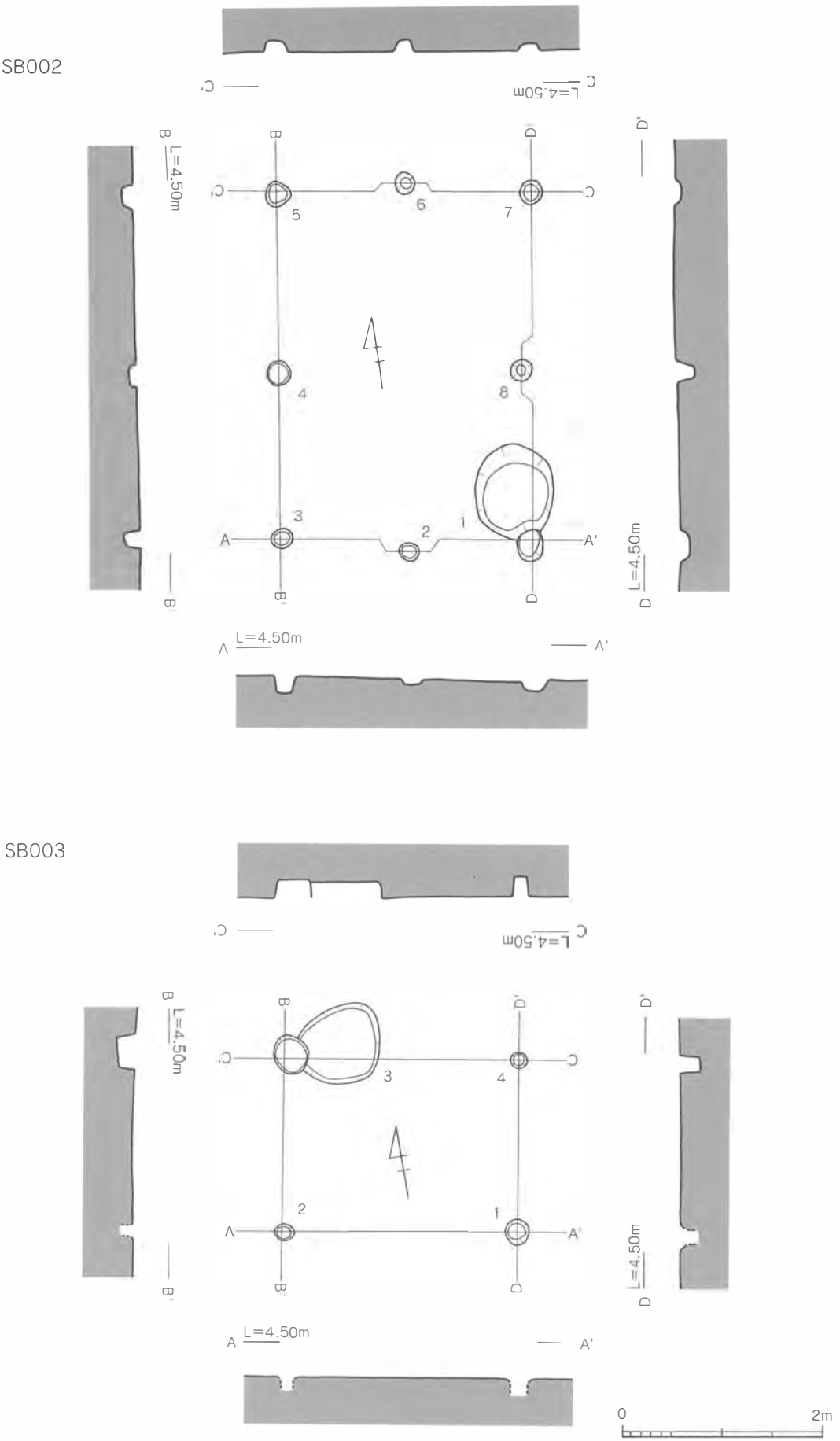
第44図　SI001出土遺物実測図



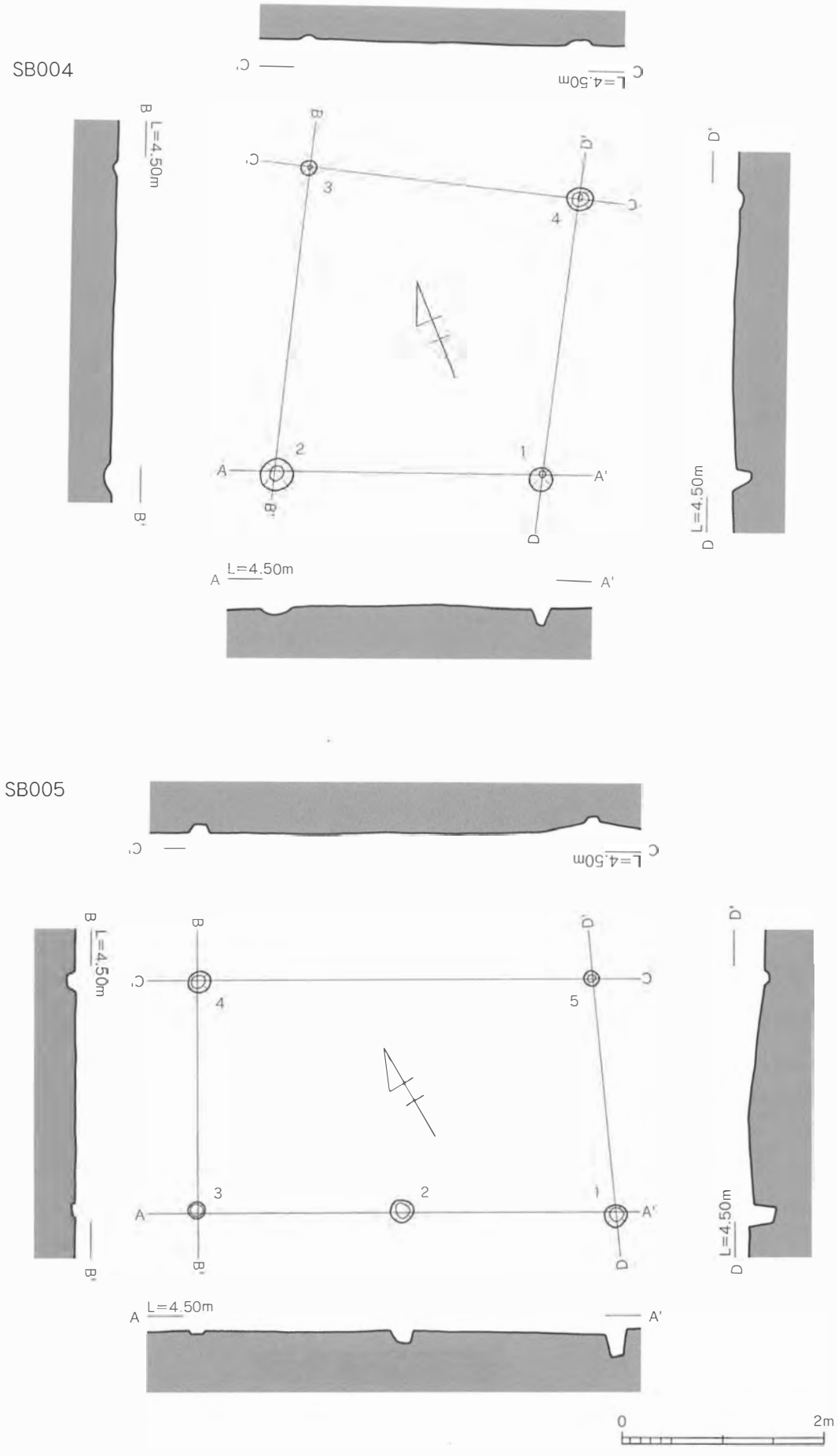
第45図　SB001実測図

SB002

SB003

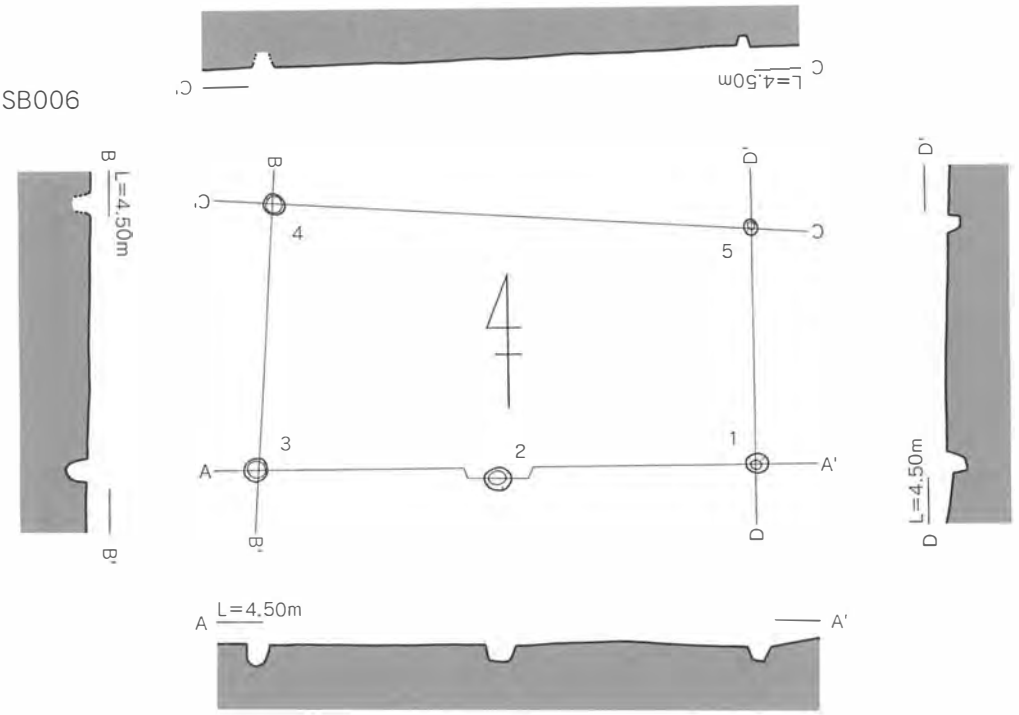


第46図　SB002·003実測図

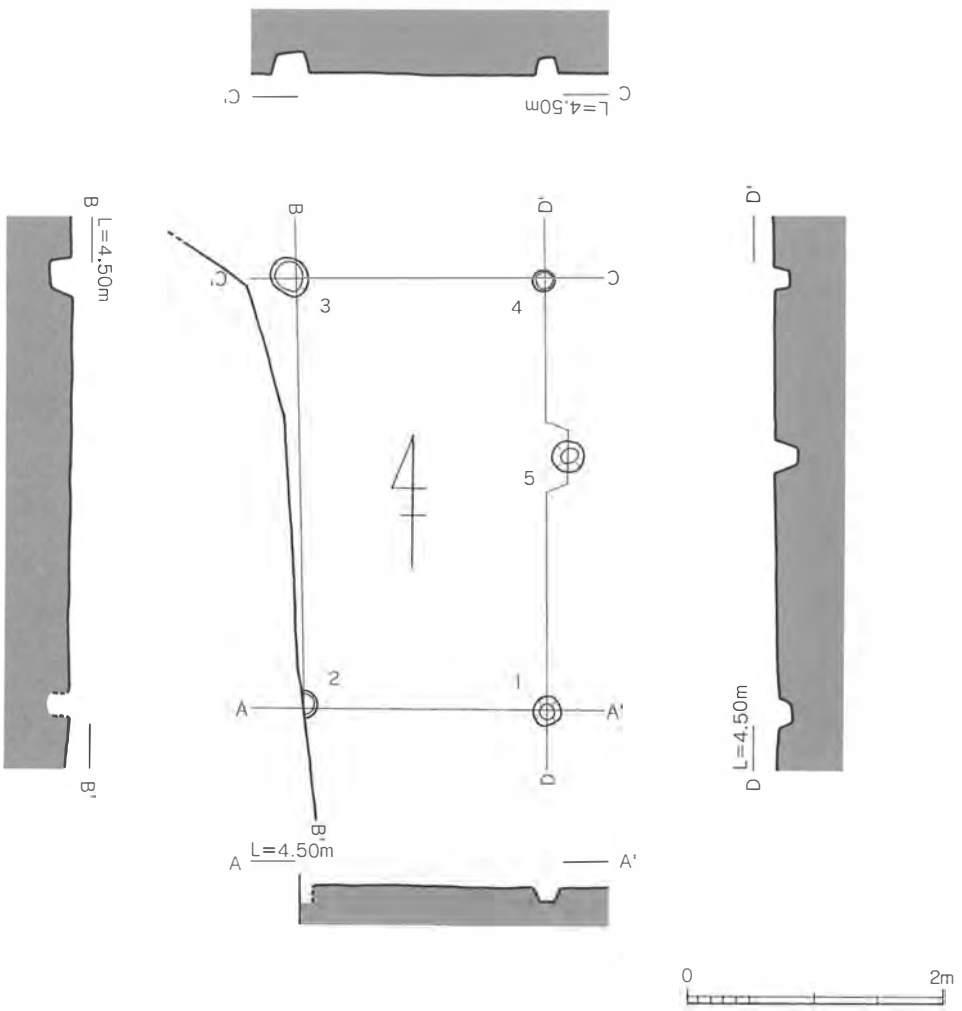


第47図　SB004·005実測図

SB006



SB007



第48図　SB006·007実測図

SB005（第47図）

長軸約4m、短軸約2.3mの、1間×2間の5本柱の側柱構造の掘立柱建物遺構である。柱穴の深さは、深いもので約30cm、浅いもので約10cmである。柱の内側は特に硬化していない。出土遺物から中世の掘立柱建物と考えられる。

この遺構からは、3点の遺物が出土している。(第56図)

33は滑石製の石鍋の一部である。34は土師器の碗である。35は須恵器の壺である。貼り付け高台をもつ。いずれも中世の遺物である。

SB006（第48図）

長軸約3.9m、短軸約2mの、1間×2間の5本柱の側柱構造の掘立柱建物遺構である。柱穴の深さは、深いもので約20cm、浅いもので約10cmである。柱の内側は特に硬化していない。

SB007（第48図）

長軸約3.4m、短軸約2mの、1間×2間の5本柱の側柱構造の掘立柱建物遺構である。柱穴の深さは、深いもので約20cm、浅いもので約10cmである。柱の内側は特に硬化していない。

SB008（第49図）

長軸約3m、短軸約2.5mの、1間×1間の4本柱の側柱構造の掘立柱建物遺構である。柱穴の深さは、深いもので約20cm、浅いもので約10cmである。柱の内側は特に硬化していない。

SB009（第49図）

長軸約4m、短軸約2mの、1間×2間の6本柱の側柱構造の掘立柱建物遺構である。柱穴の深さは、深いもので約30cm、浅いもので約20cmである。柱の内側は特に硬化していない。

SB010（第50図）

長軸約3.5m、短軸約2.9mの、1間×2間の6本柱の側柱構造の掘立柱建物遺構である。柱穴の深さは、深いもので約20cm、浅いもので約10cmである。柱の内側は特に硬化していない。

SB011（第50図）

長軸約4.3m、短軸約2mの、1間×2間の6本柱の側柱構造の掘立柱建物遺構である。柱穴の深さは、深いもので約30m、浅いもので約20cmである。柱の内側は特に硬化していない。

SB012（第51図）

長軸約3m、短軸約2.3mの、1間×1間の4本柱の側柱構造の掘立柱建物遺構である。柱穴の深さは、深いもので約20cm、浅いもので約10cmである。柱の内側は特に硬化していない。

SB013（第51図）

長軸約3m、短軸約1.8mの、1間×2間の6本柱の側柱構造の掘立柱建物遺構である。柱穴の深さは、深いもので約20cm、浅いもので約10cmである。柱の内側は特に硬化していない。

SB014（第52図）

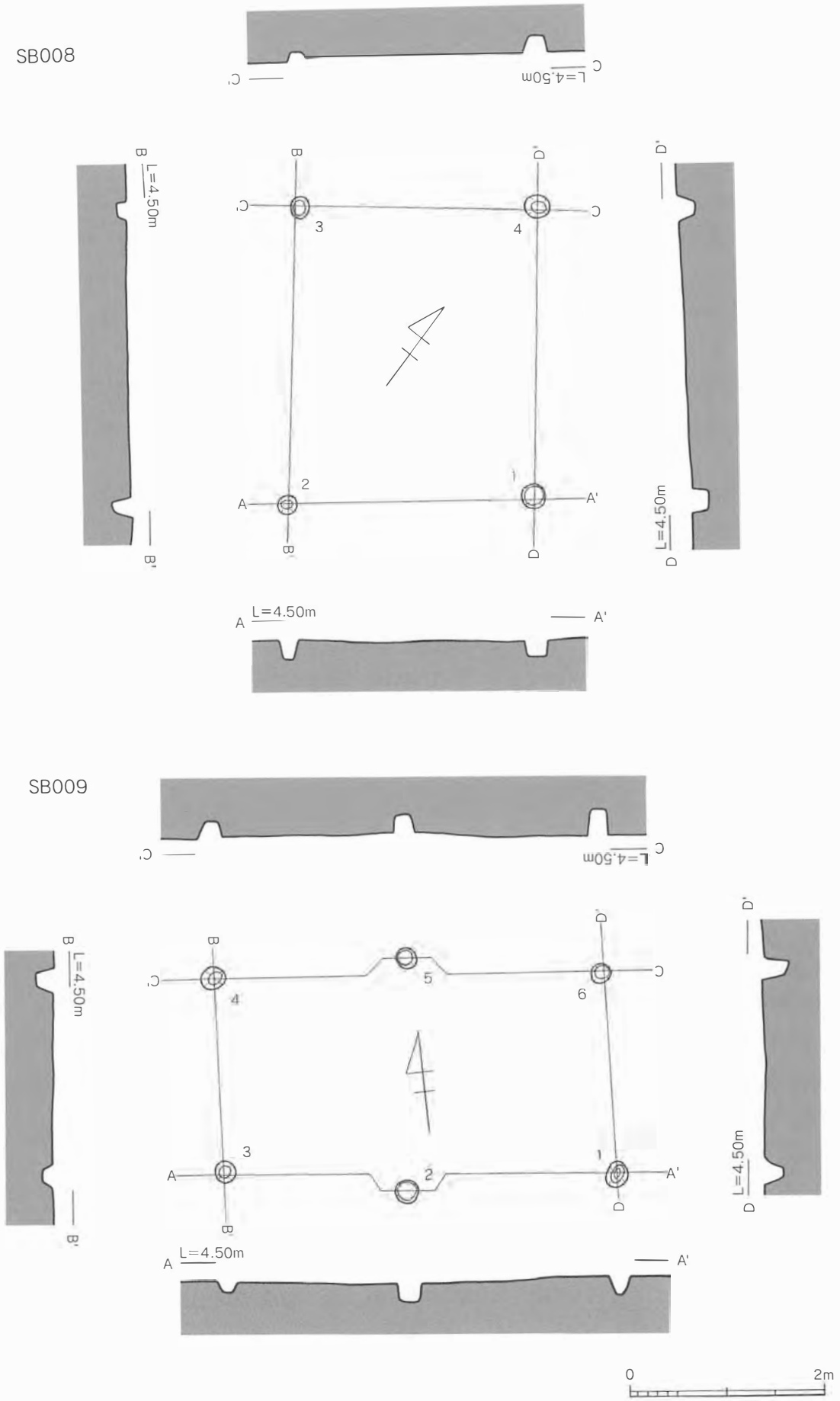
長軸約3.5m、短軸約2.1mの、1間×2間の5本柱の側柱構造の掘立柱建物遺構である。柱穴の深さは、深いもので約20cm、浅いもので約10cmである。柱の内側は特に硬化していない。

SB015（第52図）

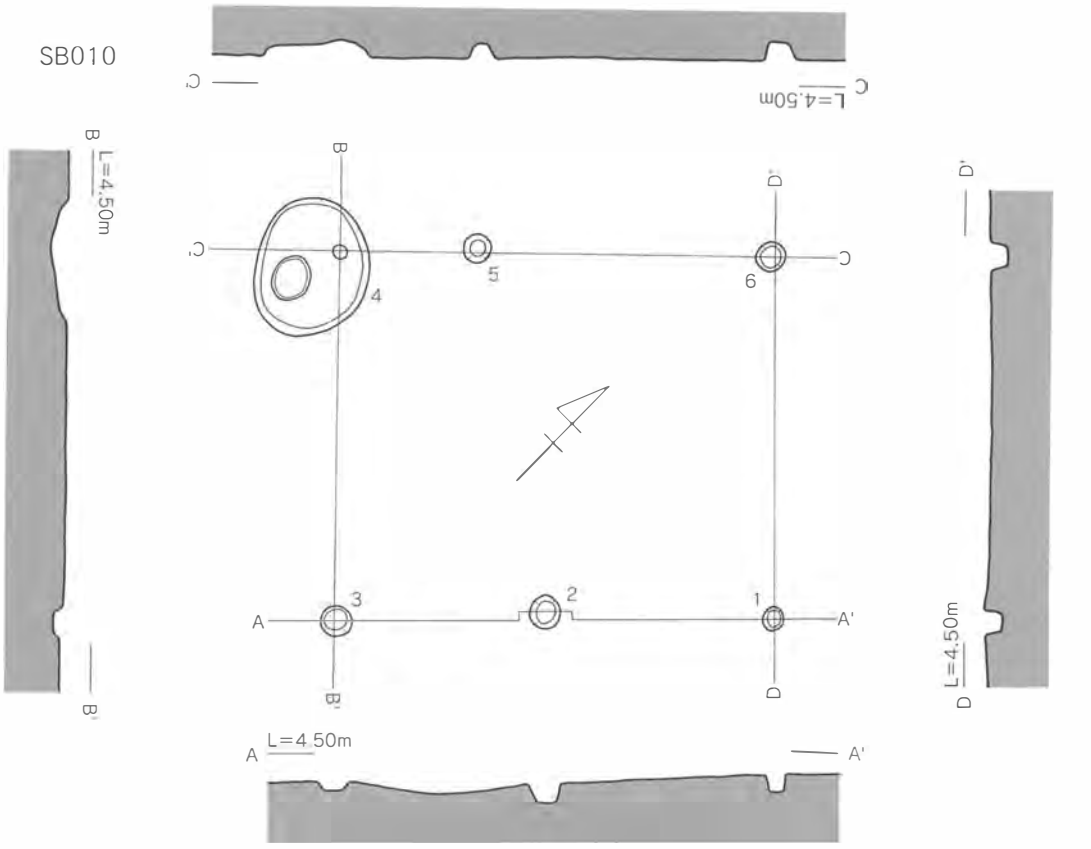
長軸約4m、短軸約2mの、1間×2間の5本柱の側柱構造の掘立柱建物遺構である。柱穴の深さは、深いもので約30cm、浅いもので約10cmである。柱の内側は特に硬化していない。

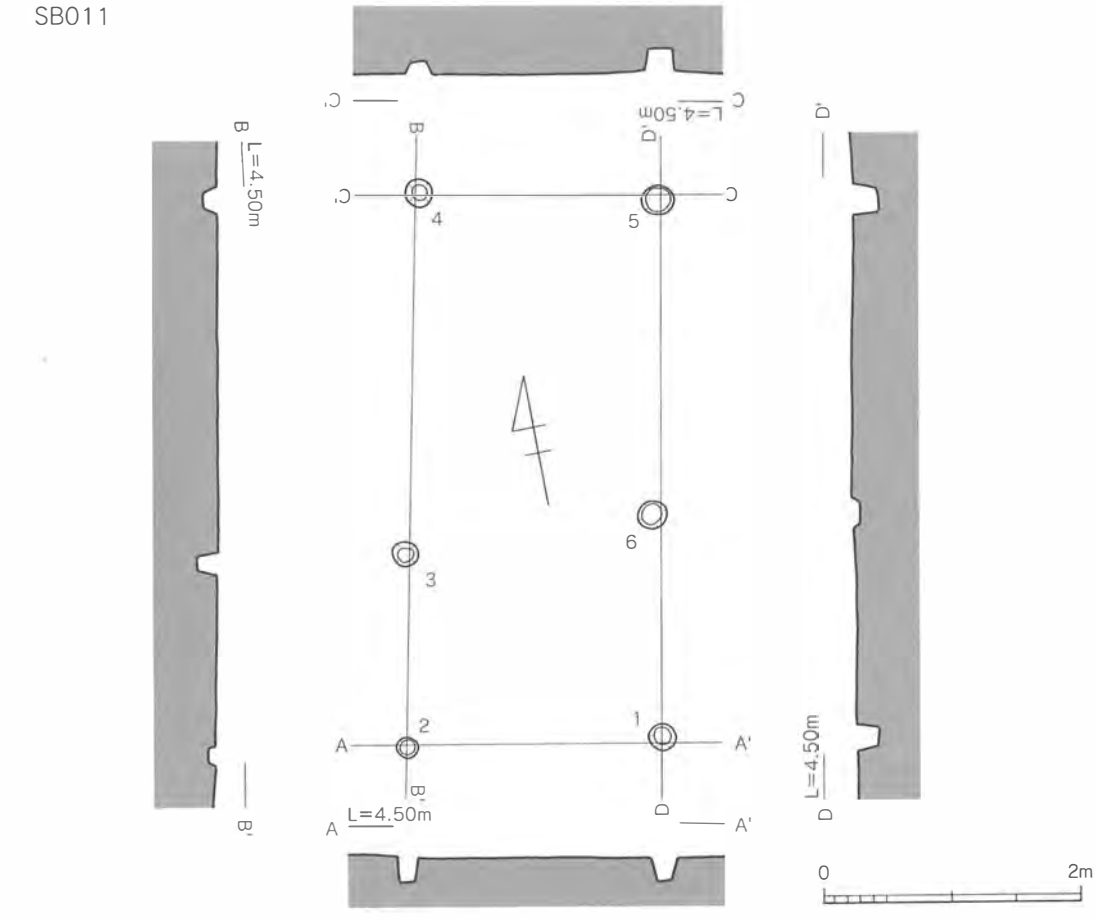
SB016（第53図）

長軸約4m、短軸約1.7mの、2間×6間の13本柱の側柱構造の掘立柱建物遺構である。柱穴の深さは、深いもので約30cm、浅いもので約20cmである。柱の内側は特に硬化していない。



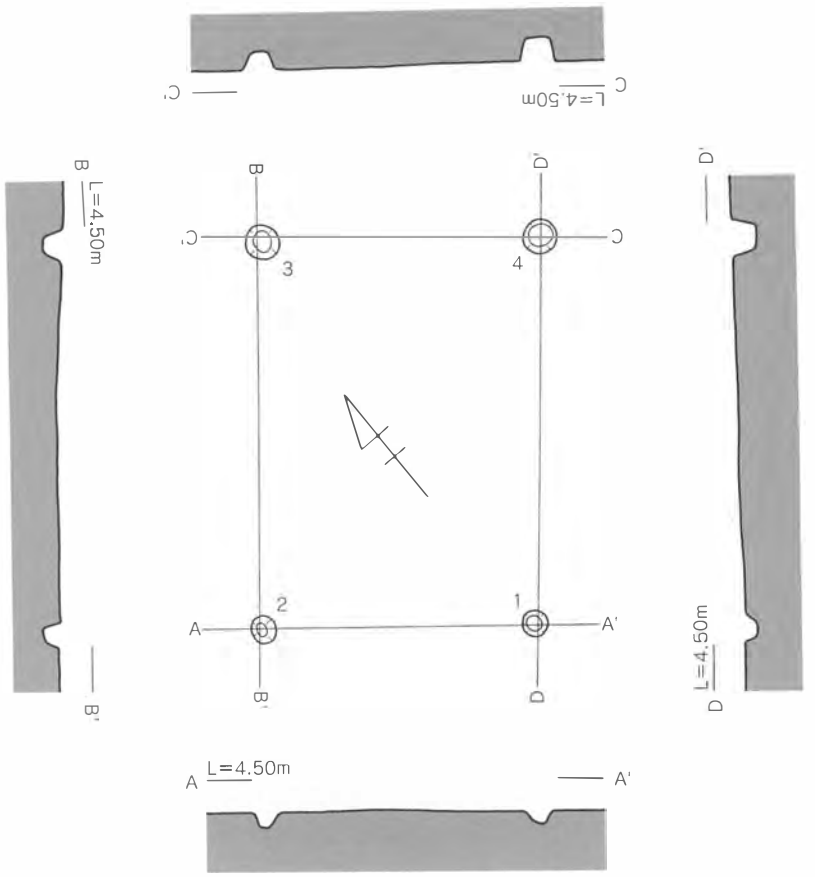
第49図　SB008·009実測図



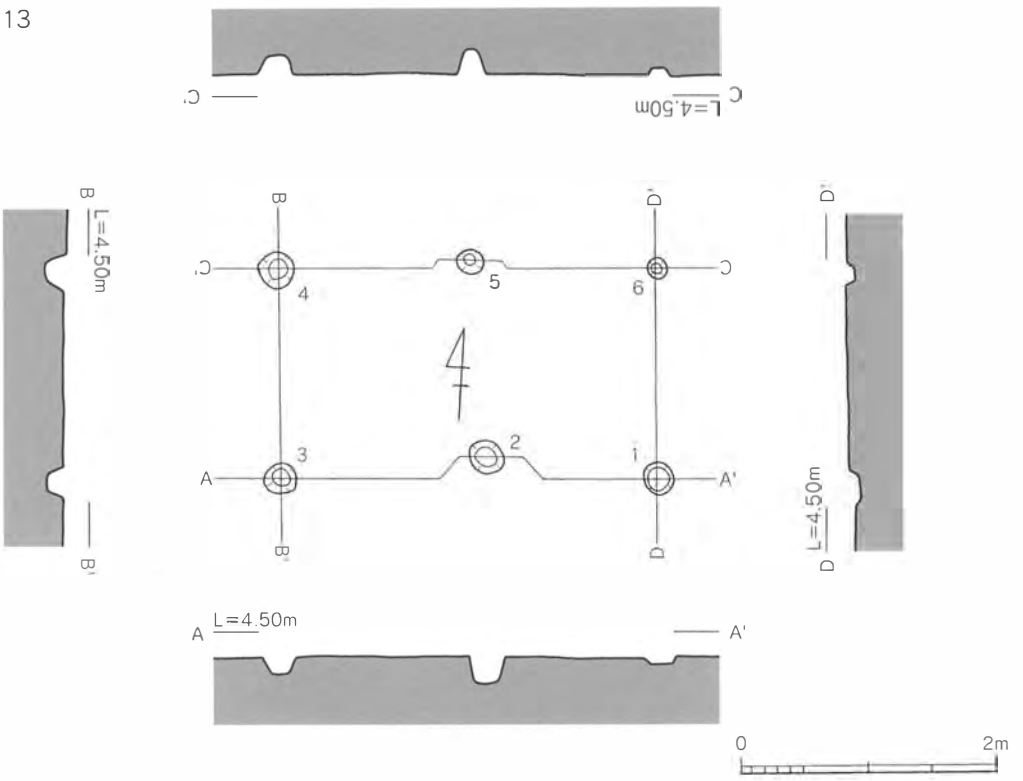


第50図　SB010・011実測図

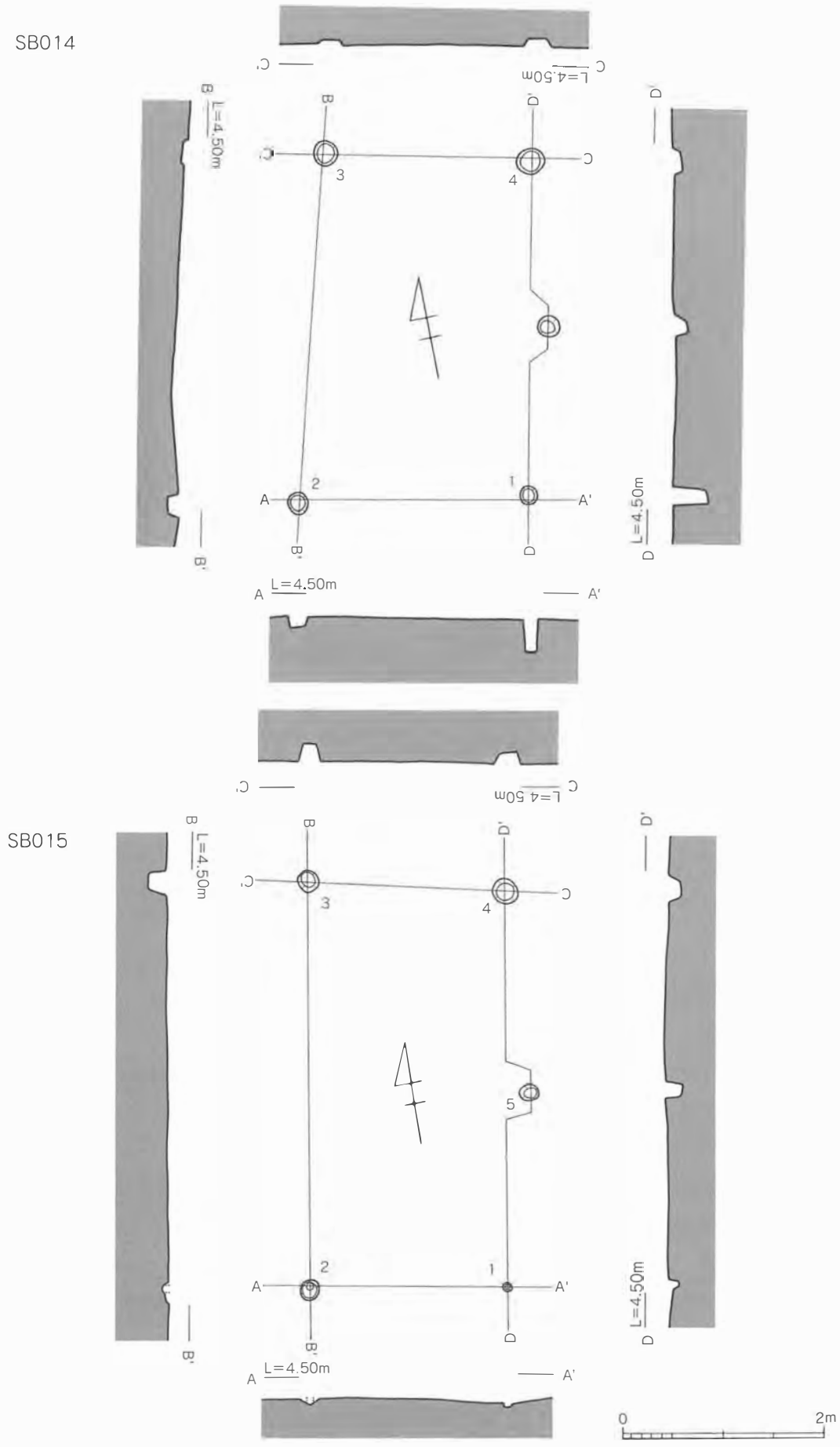
SB012



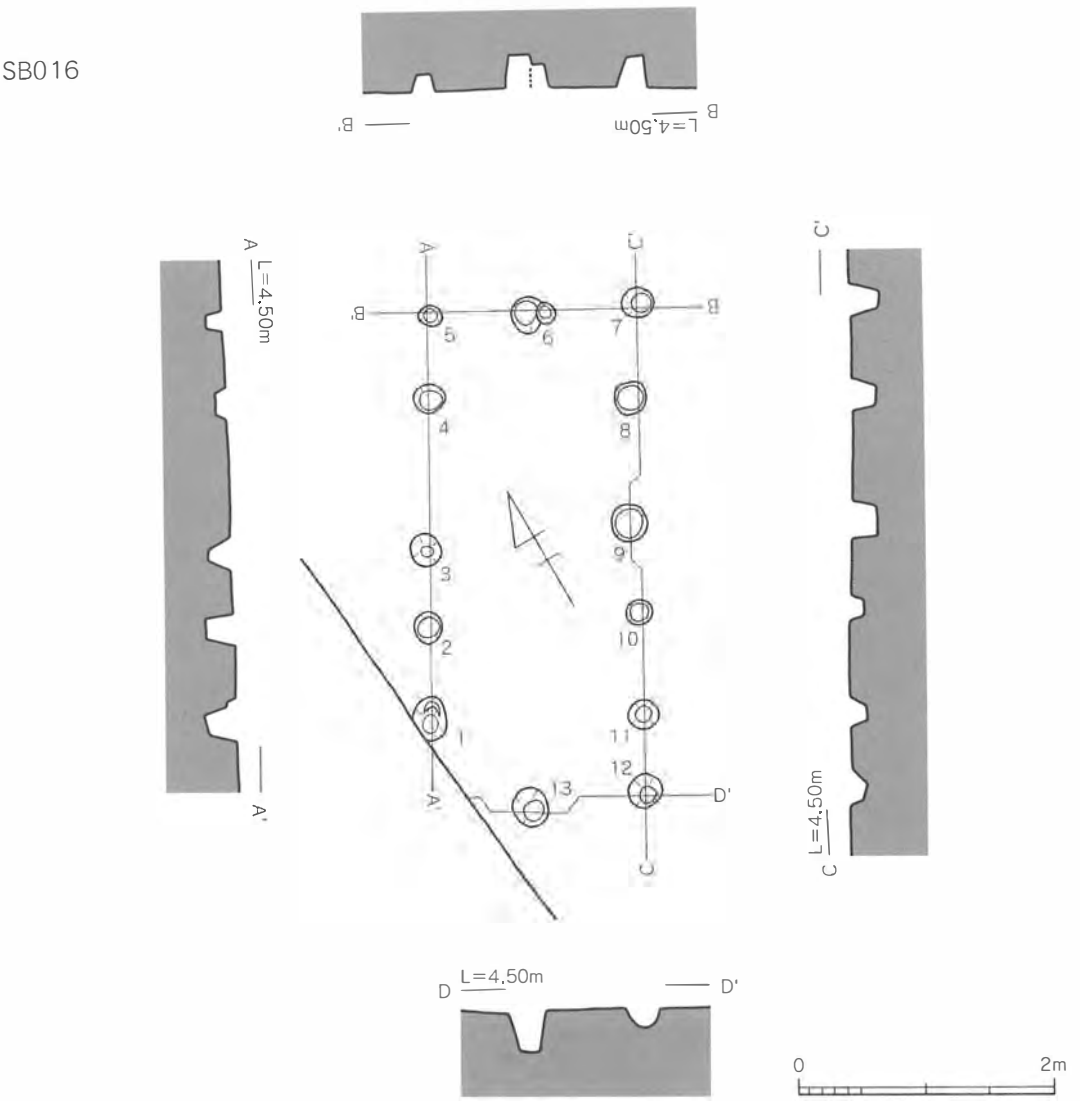
SB013



第51図　SB012・013実測図



第52図　SB014・015実測図



第53図　SB016実測図

2　溝状遺構（SD）

SD008（第54図）

幅約6m、深さ約20cm、北西から南東方向に約20m走る溝状遺構である。出土遺物が無いため、遺構の性格と時期は不明である。

SD009（第55図）

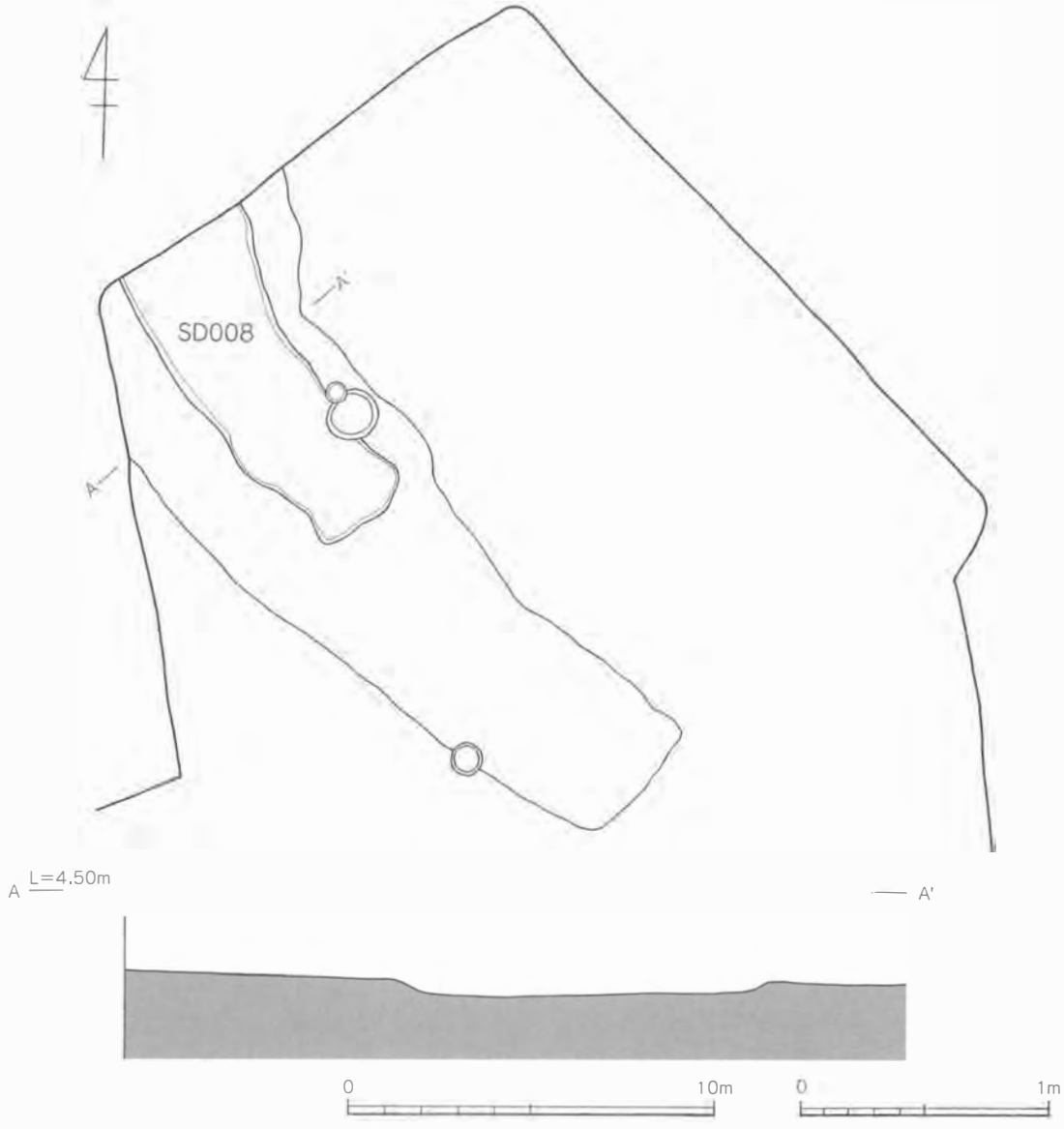
幅約40cm、深さ約20cmで底面の形状はやや丸みを帯びている。北東から南西方向に約8m走る溝状遺構である。出土遺物が無いため、遺構の性格と時期は不明である。

SD010（第55図）

幅約40cm、深さ約20cm、底面の形状はやや丸みを帯びている。北東から南西方向に約2m走る溝状遺構である。出土遺物が無いため、遺構の性格と時期は不明である。

SD011（第55図）

幅約5m、深さ約20cm、底面の形状はやや丸みを帯びている。広いところで幅約4m、狭いところで幅約1m、深さ約20cm、東西方向に約10m走る溝状遺構である。出土遺物が無いため、遺構の性格と時期は不明である。



第54図　SD008実測図(平面図S＝1/100)

SD013（第55図）

幅約4m、深さ約20cm、底面の形状はやや丸みを帯びている。北西から南方向に弧を描く様に約20m走る溝状遺構である。出土遺物が無いため、遺構の性格と時期は不明である。

SD014（第55図）

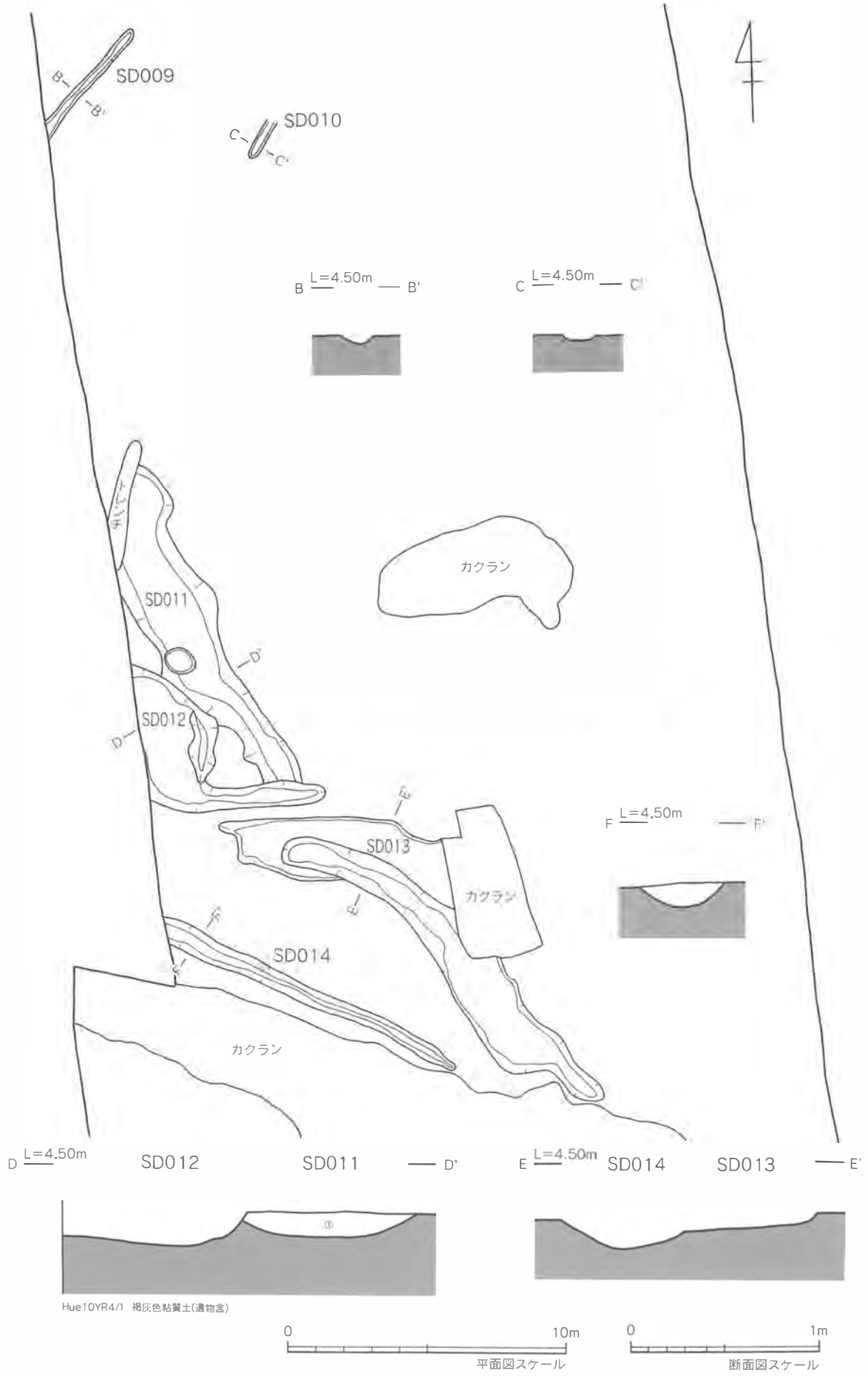
幅約1.5m、深さ約20cm、底面の形状はやや丸みを帯びている。東西方向に約20m走る溝状遺構である。出土遺物が無いため、遺構の性格と時期は不明である。

SD015（第57図）

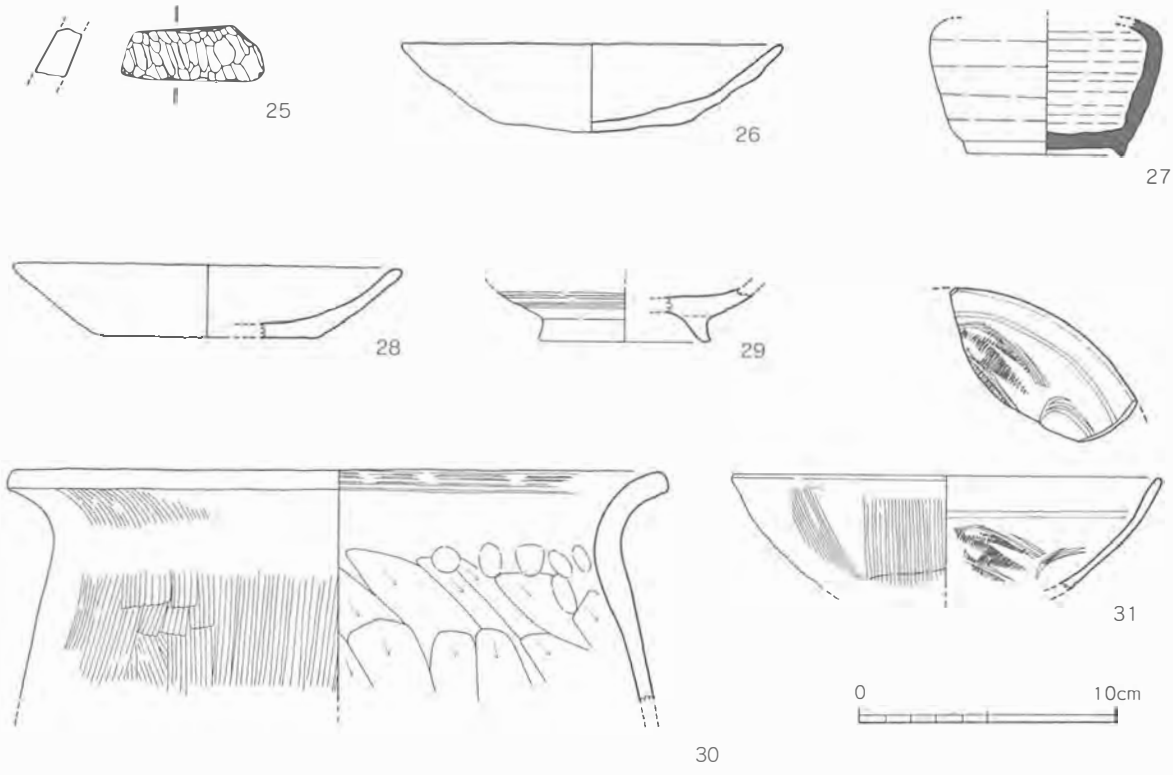
幅約1m、深さ約20cm、底面の形状はやや平らである。東西方向に約10m走る溝状遺構である。出土遺物から古代末から中世にかけて作られたと考えられる。

この遺構からは、4点の遺物が出土している。（第56図）

28は中世の土師器の椀である。29は中世の貼り付け高台付きの土師器の杯である。30は古代の土師器の甕である。口縁がやや緩やかに外反する。内面の調整は口縁の曲がりの付近まで、削りが入っている。外面は刷毛目調整を施している。31は内面に鳥文を外面に刷毛状の調整を施す鎌倉時代白磁碗である。



第55図　SD009·010·011·012·013·014実測図(平面図S＝1/100)



第56図　SB005･SD016･017出土遺物実測図

SD016（第57図）

幅約１m、深さ約20cm、底面の形状はやや平らである。東西方向に約20m走る溝状遺構である。

出土遺物が無いため、遺構の性格と時期は不明である。

SD017（第57図）

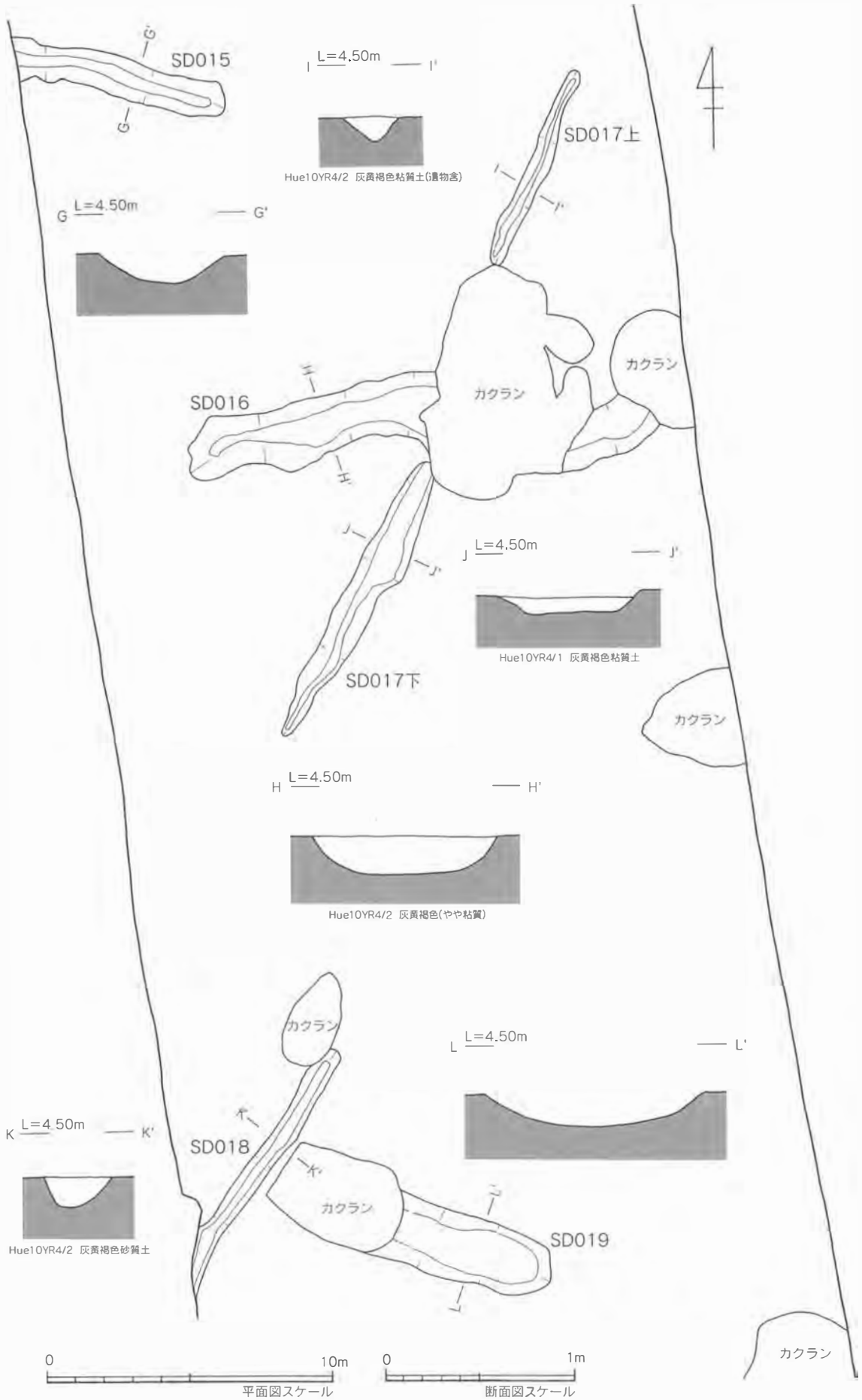
幅約１m、深さ約20cm、底面の形状はやや平らである。南北方向に約40m走る溝状遺構である。出土遺物が無いため、遺構の性格と時期は不明である。

SD018（第57図）

幅約70cm、深さ約20cm、底面の形状はやや平らである。南北方向に約40m走る溝状遺構である。出土遺物が無いため、遺構の性格と時期は不明である。

SD019（第57図）

幅約3m、深さ約20cm、底面の形状はやや丸みを帯びている。東西方向に約10m走る溝状遺構である。出土遺物が無いため、遺構の性格と時期は不明である。



第57図　SD015·016·017·018·019実測図(平面図S＝1/100)

3　土壙（SK）

SK002（第58図）

平面がやや楕円形を呈する。長辺約3m、短辺約2mで底面がややフラットな形状をもつ。出土遺物が共伴しないため、遺構の性格や時期は不明である。

SK003（第58図）

平面は不整形を呈する。2段に段落ちしている。長辺約3.5m、短辺約3mで底面がすり鉢上に呈する。出土遺物が共伴しないため、遺構の性格や時期は不明である。

SK004（第58図）

平面は不整形を呈する。長辺約2m、短辺約1.6mで底面がフラットを呈する。出土遺物が共伴しないため、遺構の性格や時期は不明である。

SK005（第58図）

平面は不整形を呈する。3つの遺構が重なっている。北側の遺構と南側の遺構で中央の遺構が壊されている。北は平面がやや楕円形で長辺約3.5m、短辺約3mで底面がすり鉢上に呈する。南は平面がやや楕円形で長辺約3.8m、短辺約3mで底面がフラットを呈する。中央の遺構は切りあいにより、平面形は不明である。底面は現状からフラットを呈すると考えられる。

この遺構からは、2点の遺物が出土している。（第59図）

32は中世の白磁の碗である。削りだしの高台をもち内外面に、薄く透明色の釉がかかっている。33は中世の白磁の碗である。削りだしの高台をもち内外面に、薄く透明の釉がかかっている。

SK006（第58図）

平面形からやや隅丸長方形を呈する。長辺約1.4m、短辺約0.4mで底面がややフラットな形状をもつ。出土遺物が無いことから時期と遺構の性格は不明である。

SK007（第60図）

平面形からやや楕円形を呈する。長辺約1.6m、短辺約1.4mで底面がややフラットな形状をもつ。出土遺物が無いことから時期と遺構の性格は不明である。

SK008（第60図）

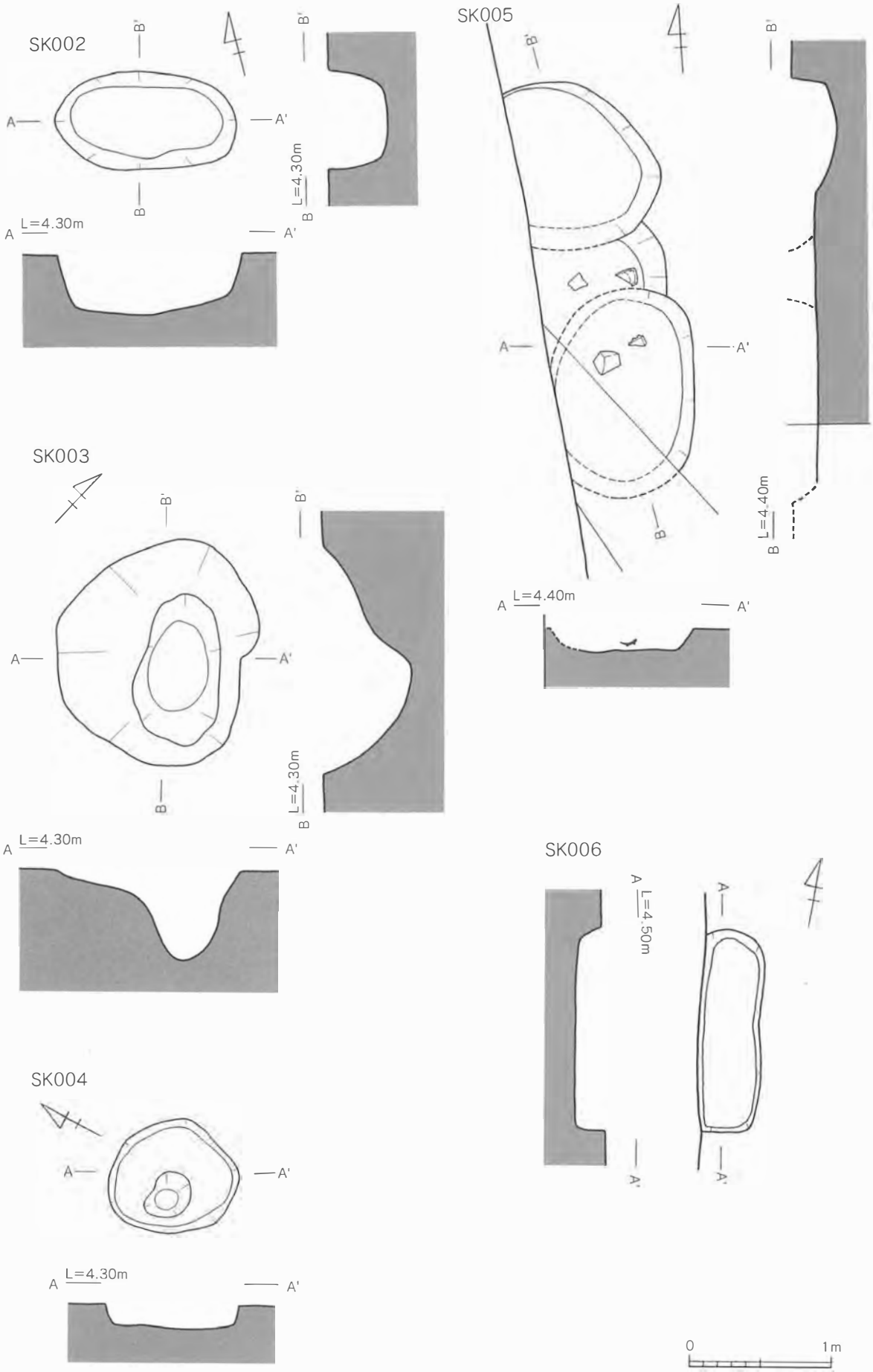
平面形からやや楕円形を呈する。長辺約1.2m、短辺約70cmで底面がややフラットな形状をもつ。出土遺物が無いことから時期と遺構の性格は不明である。

SK009（第60図）

平面形からやや楕円形を呈する。長辺約1.4m、短辺約1.1mで底面がややフラットな形状をもつ。出土遺物が無いことから時期と遺構の性格は不明である。

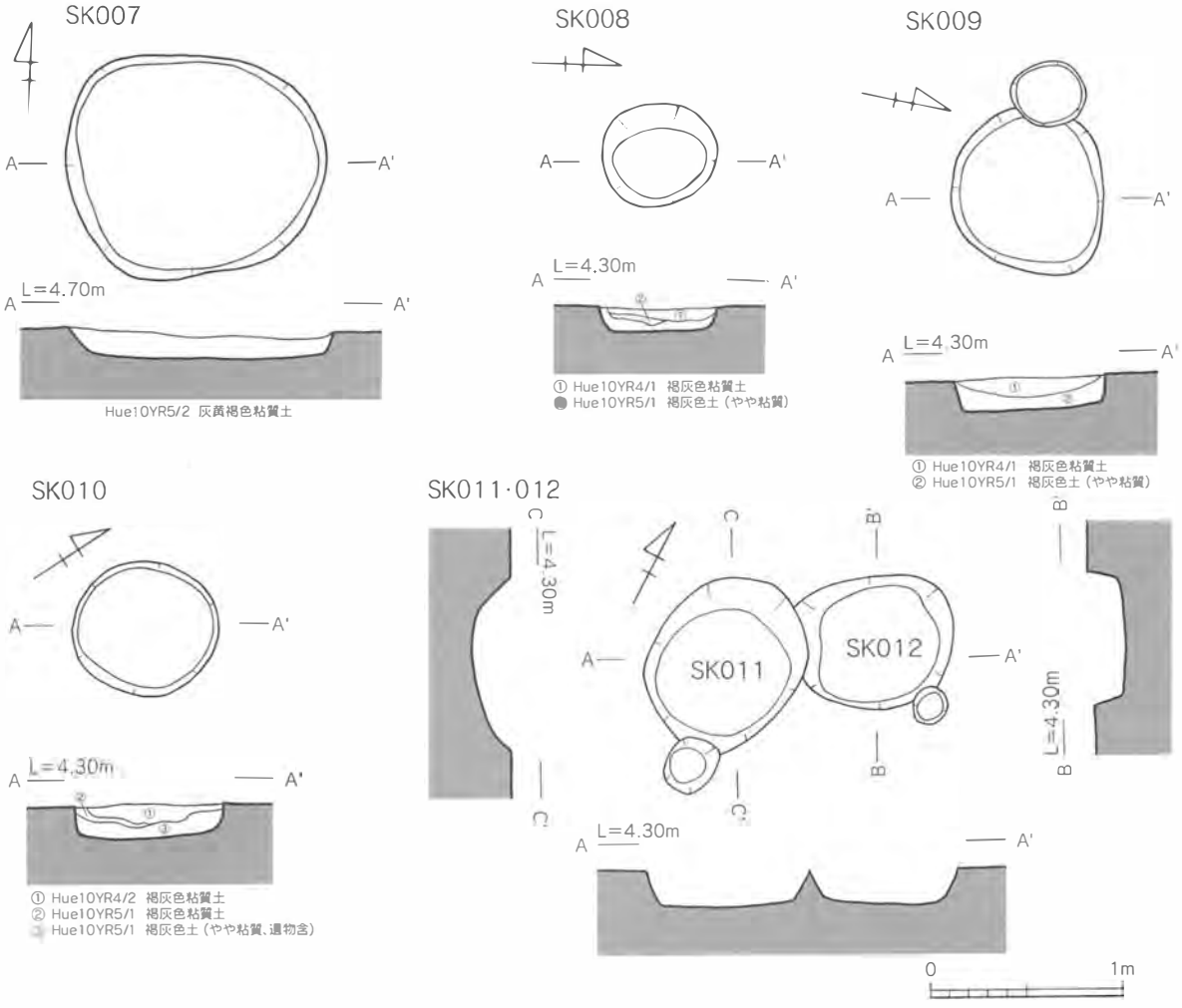
SK010（第60図）

平面形からやや楕円形を呈する。長辺約1.3m、短辺約1.2mで底面がややフラットな形状をもつ。出土遺物が無いことから時期と遺構の性格は不明である。



第58図　SK002・003・004・005・006実測図

第59図　SK005出土遺物実測図



第60図　SK007・008・009・010・011・012実測図

SK011（第60図）

平面形からやや楕円形を呈する。長辺約1.3m、短辺約1.1mで底面がややフラットな形状をもつ。出土遺物が無いことから時期と遺構の性格は不明である。

SK012（第60図）

平面形からやや楕円形を呈する。長辺約1.4m、短辺約1.2mで底面がややフラットな形状をもつ。出土遺物が無いことから時期と遺構の性格は不明である。

SK013（第61図）

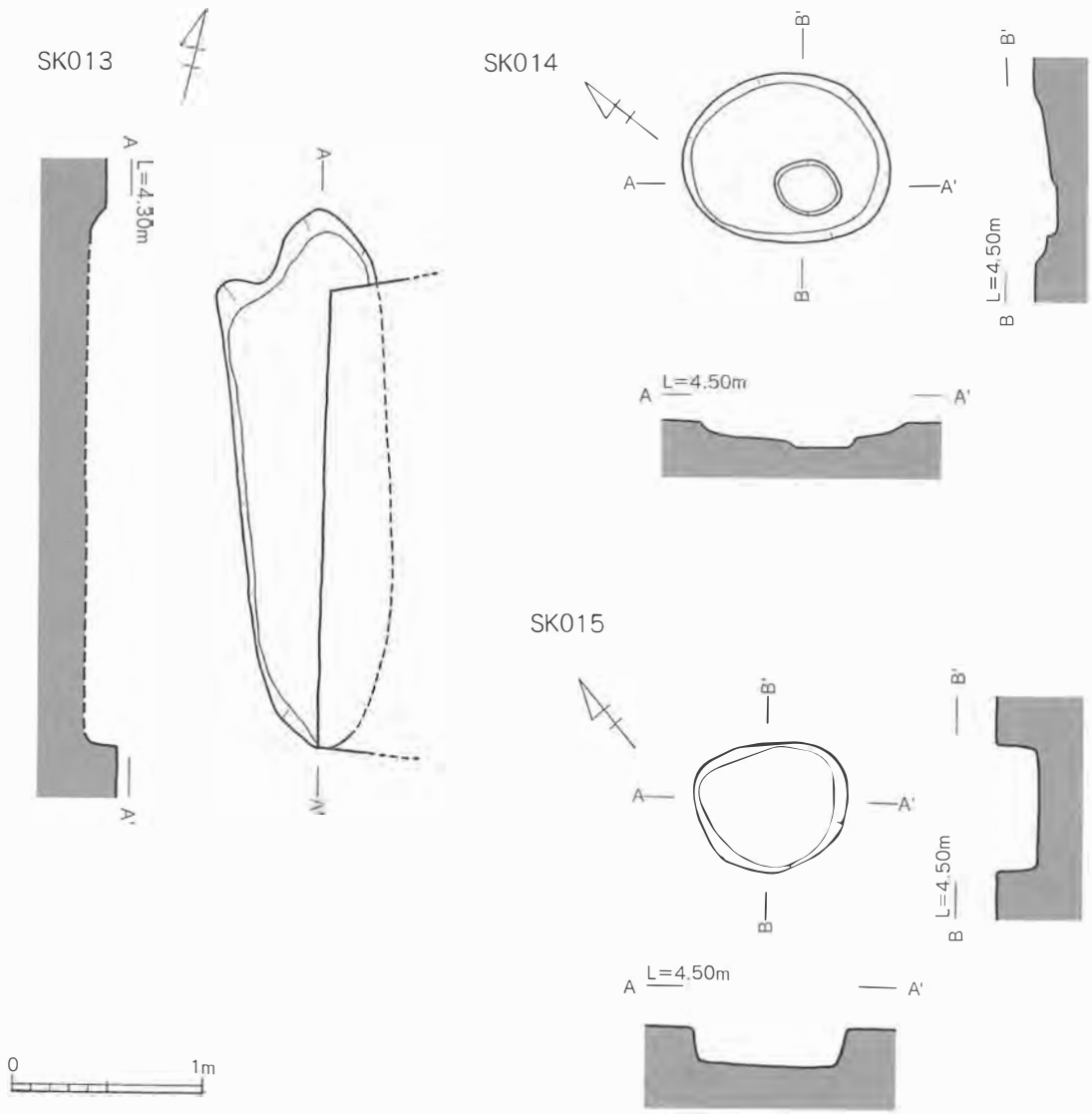
平面形から南北方向に長い小判状を呈する。長辺約2.6m、短辺約0.8mで底面がフラットな形状をもつ。出土遺物が無いことから時期と遺構の性格は不明である。

SK014（第61図）

平面形からやや楕円形を呈する。長辺約2.2m、短辺約1.6mで、2段に段落ちする。底面がややフラットな形状をもつ。出土遺物が無いことから時期と遺構の性格は不明である。

SK015（第61図）

平面形からやや楕円形を呈する。長辺約1.5m、短辺約1.3mで底面がフラットな形状をもつ。出土遺物が無いことから時期と遺構の性格は不明である。



第61図　SK013·014·015実測図

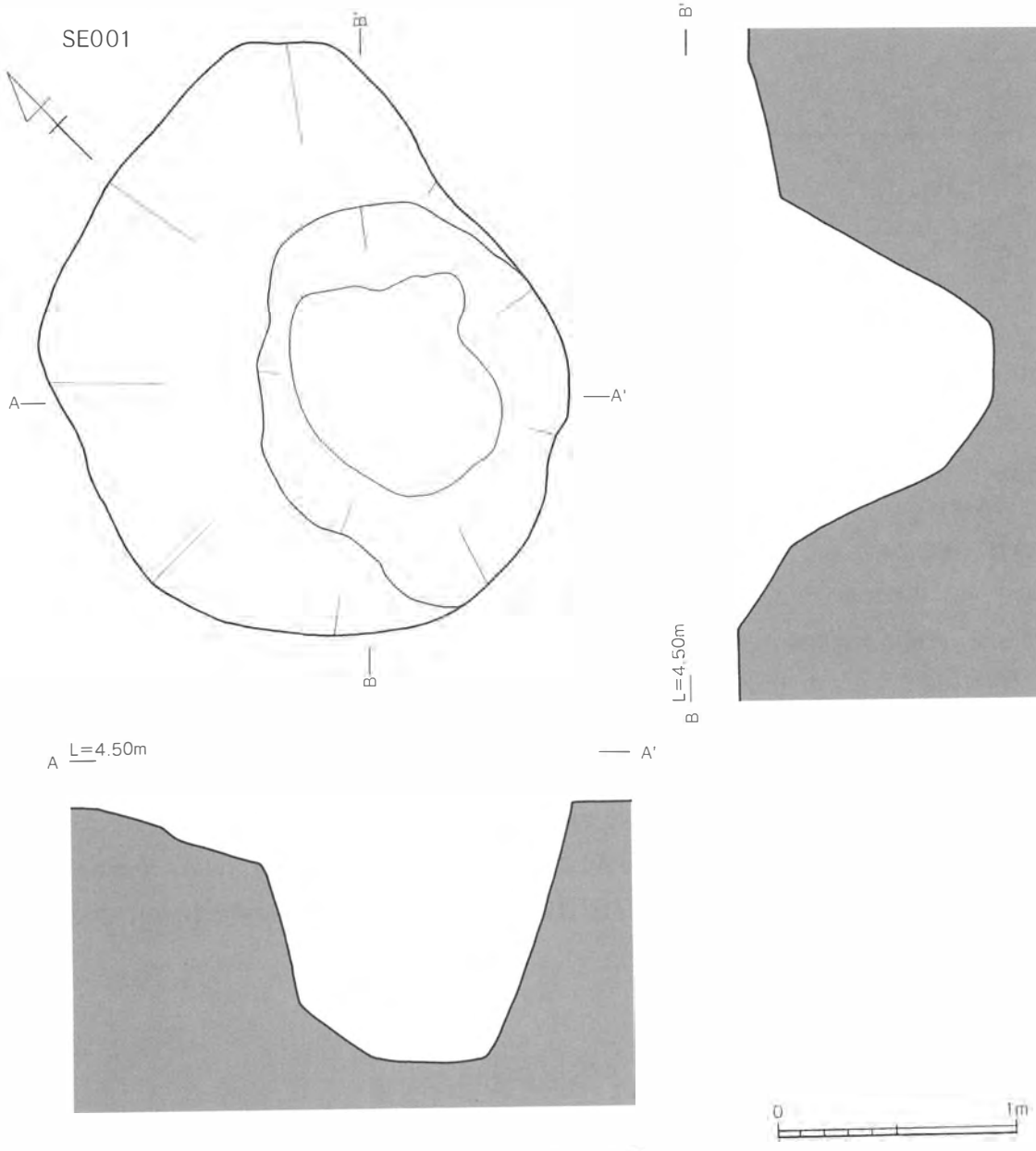
４　井戸（SE）

SE001（第62図）

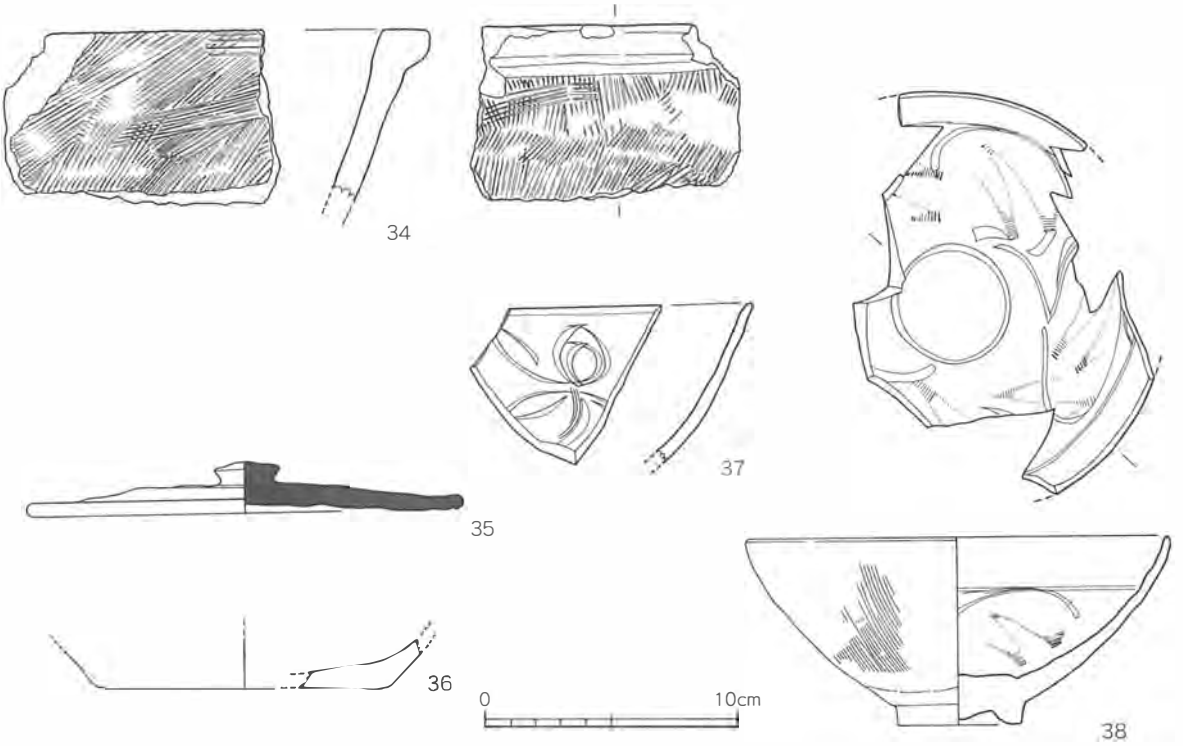
素掘りの井戸である。平面形の上部は不整形を呈する。長辺約3.4m、短辺約2.3mで、２段に段落ちし、底面がややすり鉢状である。

この遺構からは、６点の遺物が出土している。（第63図）

34は甕の口縁である。内外面とも刷毛目調整が施されている。古代の土師器である。35は宝珠摘みをもつ杯蓋である。古代の須恵器である。37は内面に花文を施す鎌倉時代の青磁碗である。36は壷の底部である。中世の遺物である。38は内面に花鳥文を施し、外面に刷毛目状の文様を施す鎌倉時代の青磁碗である。



第62図　SE001実測図



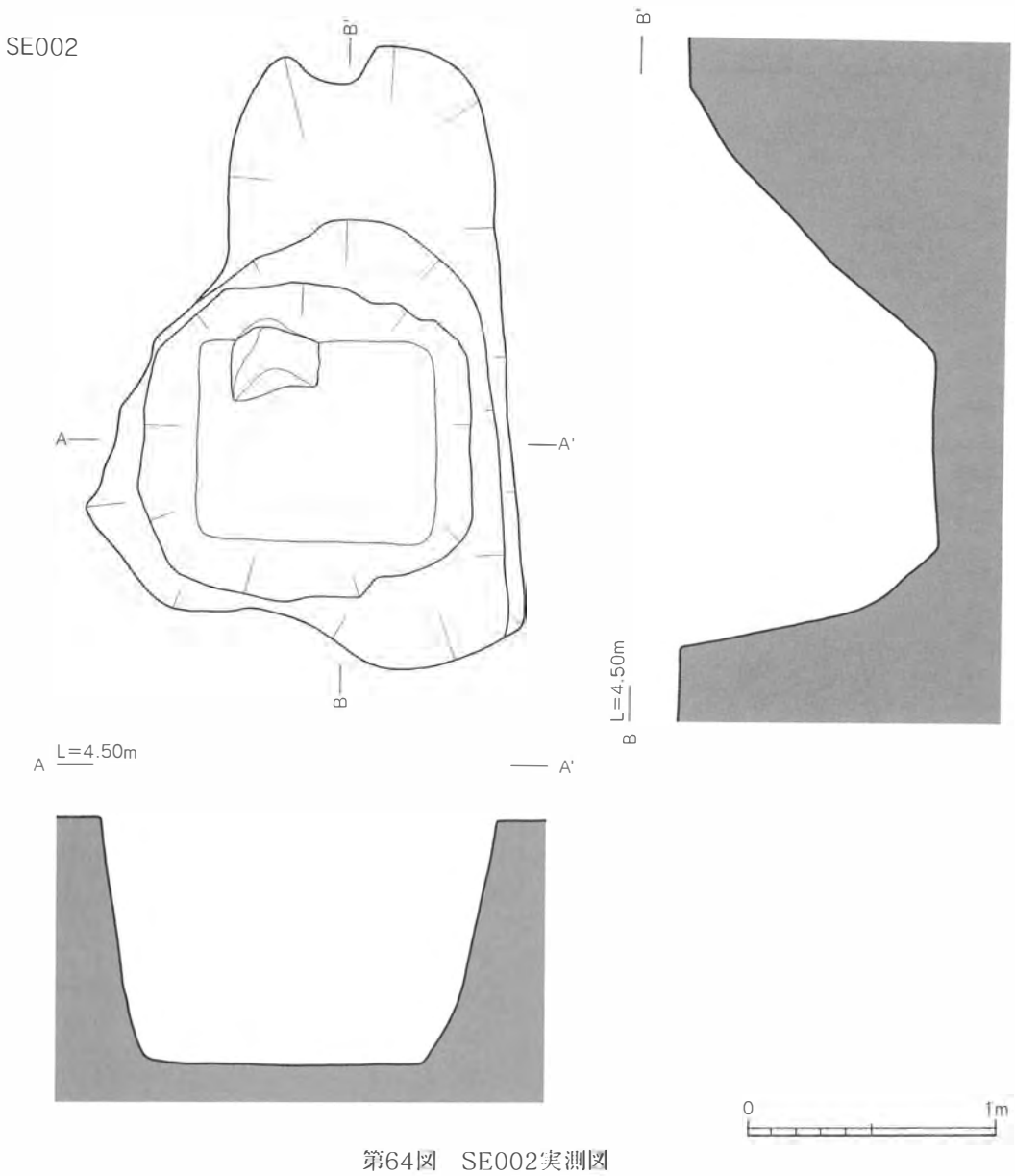
第63図　SE001出土遺物実測図

SE002（第64図）

素掘りの井戸である。平面形の上部は不整形を呈する。底部は隅丸方形に掘り抜かれている。長辺約4.2m、短辺約2.8mで、2段に段落ちし、底面はフラットである。

この遺構からは、16点の遺物が出土している。（第65図）

39は土師器の杯である。40は土師器の杯である。底部に糸きり痕が認められる。内外面ともなで調整を施している。中世の遺物である。41は陶器の壺の底部である。内外面とも厚く釉がかけられている。42は杯である。底部に糸きり痕が認められる。内外面ともなで調整を施している。土師器で中世の遺物である。43は内面に花文を施す中世（鎌倉時代）の青磁小皿である。44は削り出し高台を持つ杯である。古代の遺物である。45は壺の底部である。底は張り付けになっている。削り出しの高台をもち中世の遺物である。46は内面に花鳥文を施し、外面に刷毛目状の文様を施す中世（鎌倉時代）の青磁碗である。47は底部のみであるが、内面に花鳥文を施し、外面に刷毛目状の文様を施す鎌倉時代の青磁碗である。48は底部のみであるが、内面に花文を施す鎌倉時代の青磁碗である。49は碗で中世の白磁である。50は口縁のみであるが、中世の青磁碗である。51は碗で中世の白磁である。52は碗で中世の白磁である。53は碗で中世の白磁である。54は碗で中世の白磁である。



第64図　SE002実測図

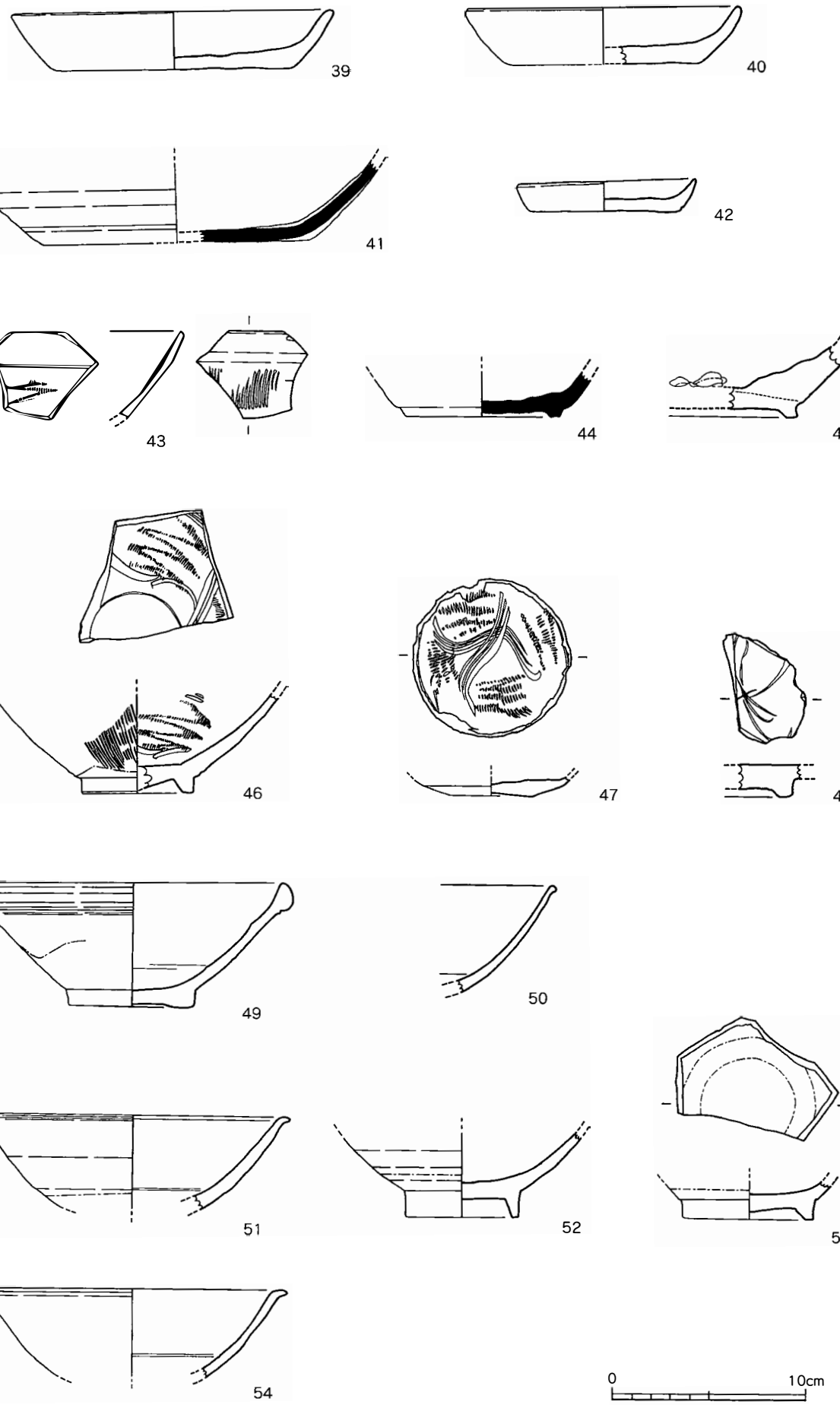
5　不明遺構（SX）

SX001（第66図）

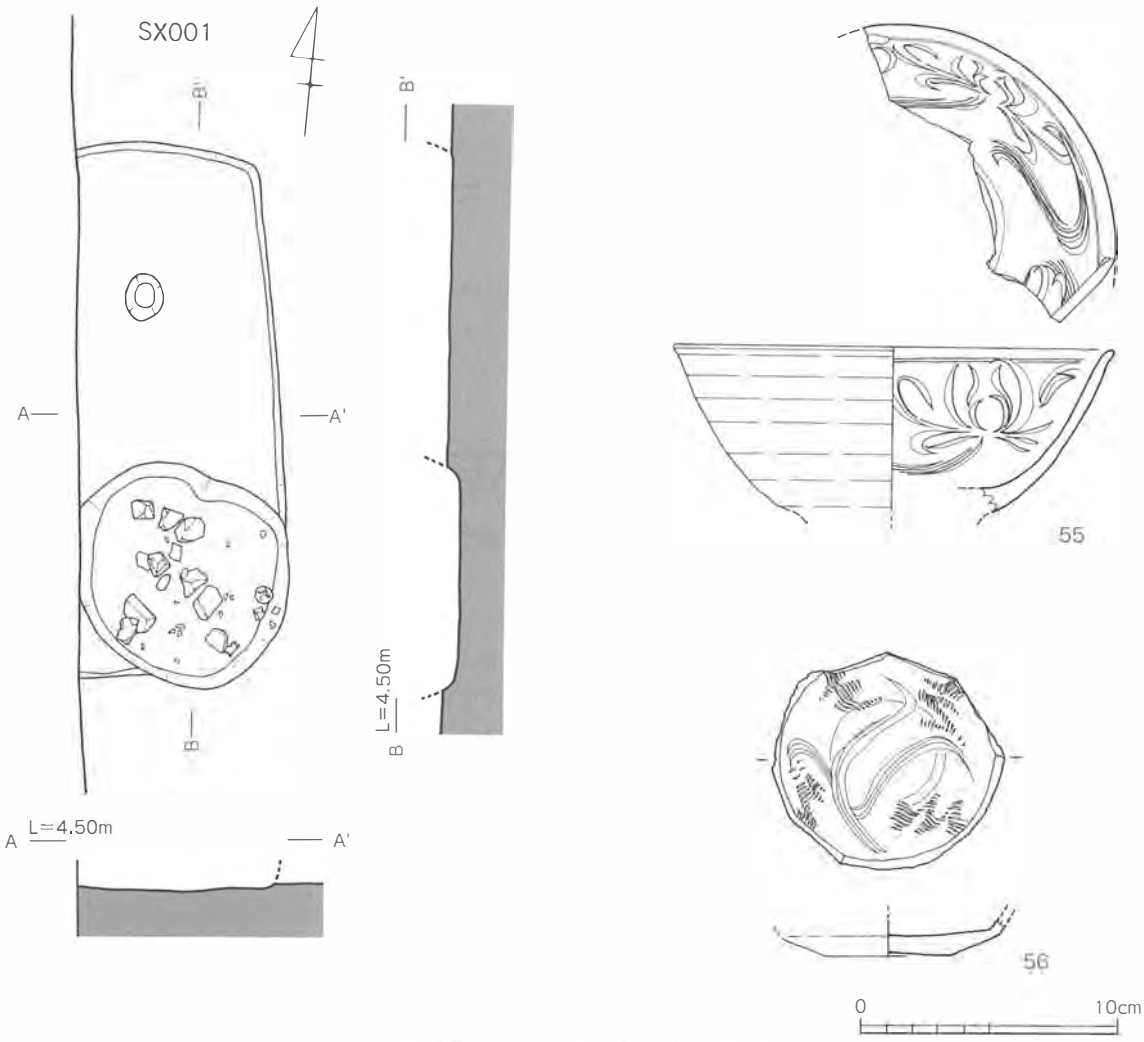
平面は隅丸長方形を呈する。長辺約3.7m、短辺約1mで途中から段落ちになっており、深さは浅いところで約5cm、深いところでも約10cmしかない。底はフラットであるが、南側がやや深くなっている。このやや深くなった箇所から土器が出土していることから、土器溜めだったとも考えられるが。

この遺構からは、2点の遺物が出土している。（第66図）

55は内面に花文を施す鎌倉時代の青磁碗である。56は内面に花鳥文を施す鎌倉時代の青磁皿である。



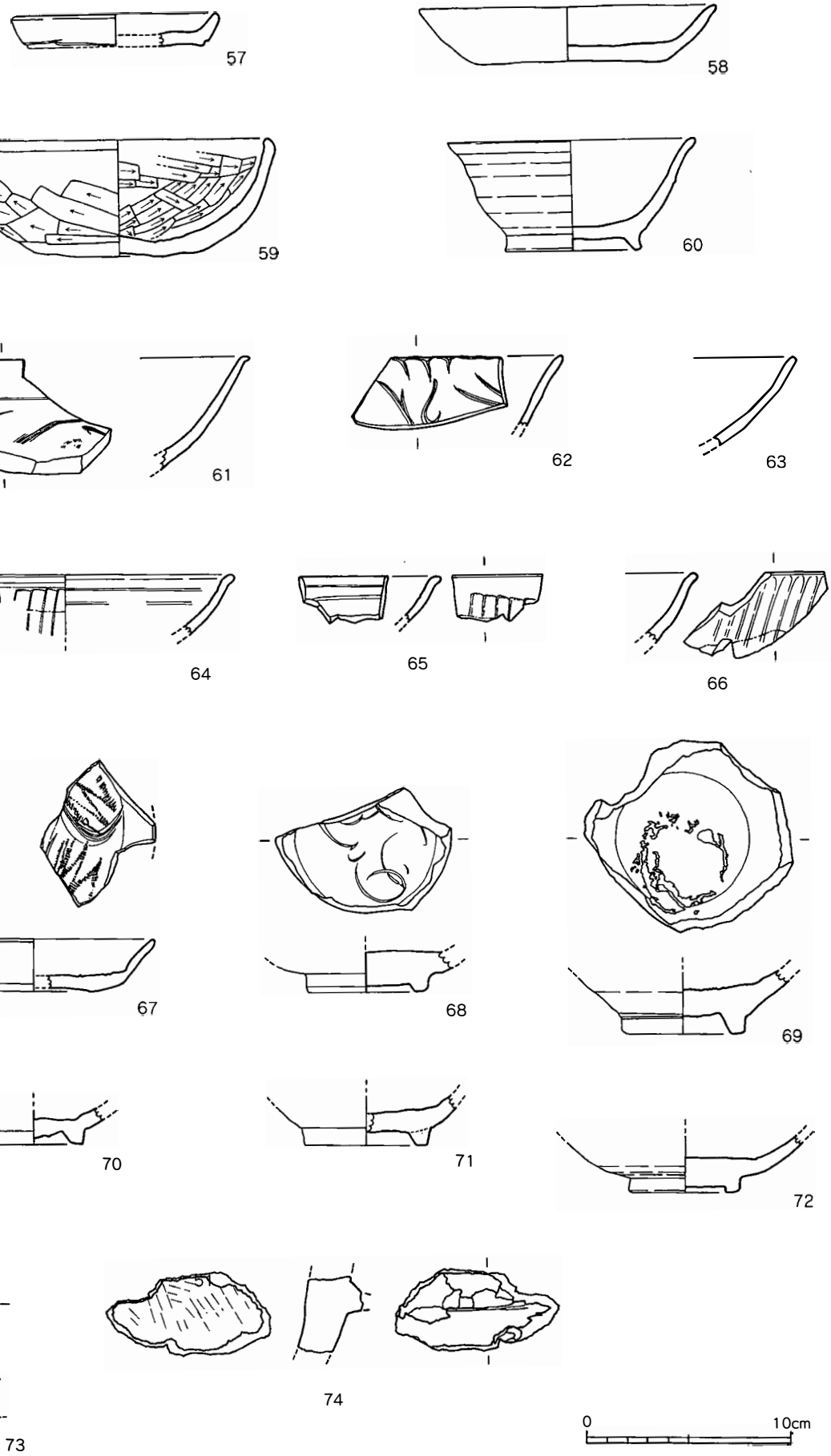
第65図　SE002出土遺物実測図



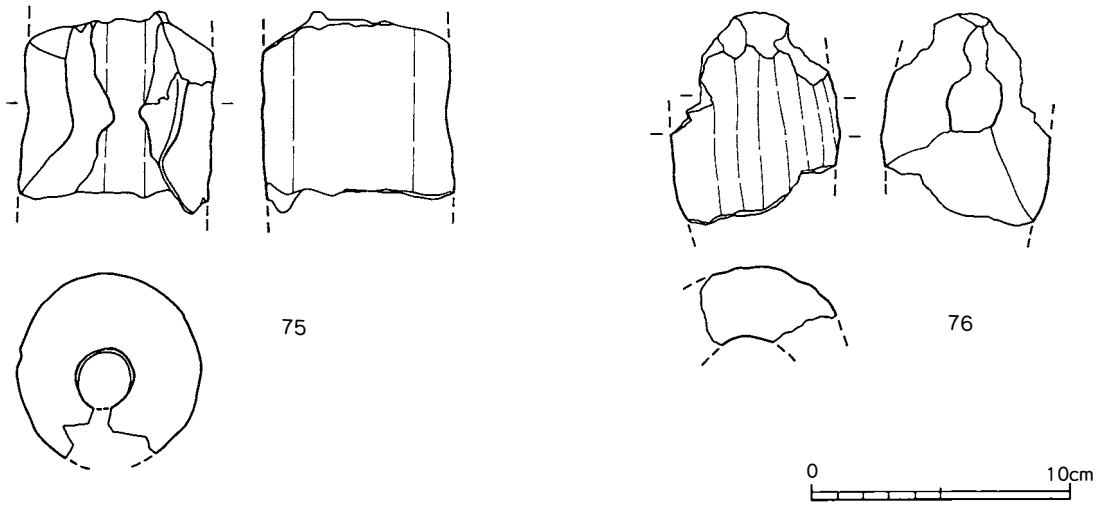
第66図　SX001及び出土遺物実測図

Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区の遺物について（第67図）

57は杯である。内外面ともになでによる調整が認められる。底面は回転糸切りが認められる。中世の遺物である。58は杯である。内外面ともなでによる調整が認められる。底部にはヘラ削りの痕跡が認められる。古代の遺物である。59は杯である。内外面ともにヘラ削りが認められる。口唇部には強いなでによる調整が認められる。古墳時代の遺物である。60は杯である。内外面ともに丁寧ななでによる調整が認められる。外底部中央にヘラ状工具による削り痕が放射状に残る。中世の遺物である。61は青磁の碗である。内外面ともに回転ヘラ削り調整が認められる。内面にはクシによる施文あり。中世の遺物である。62は青磁に皿である。内外面ともになでによる調整が認められる。内面が陽刻で蔓草文を施す。積花口縁である。63は碗である。内外面ともに丁寧ななでによる調整が認められる。中世の遺物である。64は青磁の碗である。外面は回転ヘラ削り後ヘラ状工具による縦方向の削りが認められる。鎬蓮弁である。内面には2条の沈線がはいる。釉は外面体部上部までかかる。中世の遺物である。65は青白磁の碗である。外面は回転ヘラ削り後ヘラ状工具による縦方向の削りが認められる。鎬蓮弁である。内面には2条の沈線がはいる。釉は外面体部上部までかかる。中世の遺物である。



第67図　Ⅲ･Ⅳ･Ⅴ区　出土遺物実測図



第68図　Ⅳ･Ⅴ区　鞴(羽口)実測図

66は青磁の碗である。外面は回転ヘラ削り後ヘラ状工具による縦方向の削り、鎬蓮弁を作る。釉は外面体部上部までかかる。中世の遺物である。67は青磁の皿である。外面は回転ヘラ削り。内面は三又工具とクシによる施文。釉は全面に施釉後、底部の釉を掻き取る。中世の遺物である。68は青磁の碗である。外面は回転ヘラ削り。内面はヘラによる施文。高台は削り出しである。焼台痕の付着あり。69は白磁の碗である。内外面ともに回転ヘラ削り。内面には焼台痕あり。高台は削り出しである。釉は体部下部まで施釉。中世の遺物である。70は青磁の碗である。外面は回転ヘラ削り。高台は削り出しである。中世の遺物である。71は白磁の碗である。内外面ともに回転ヘラ削り調整が認められる。内面見込みの釉を環状に掻き取る。高台は削り出しである。72は青磁の碗である。内外面ともに回転ヘラ削り調整である。高台は削り出しである。焼台痕跡が認められる。中世の遺物である。73は滑石製の石鍋である。表面を削って加工している。中世の遺物である。74は滑石製の石鍋の胴の一部である。表面を削って加工している。中世の遺物である。75は鞴の羽口である。外面はなでによる調整が認められる。中世の遺物である。76は鞴の羽口である。外面はなでによる調整が認められる。中世の遺物である。

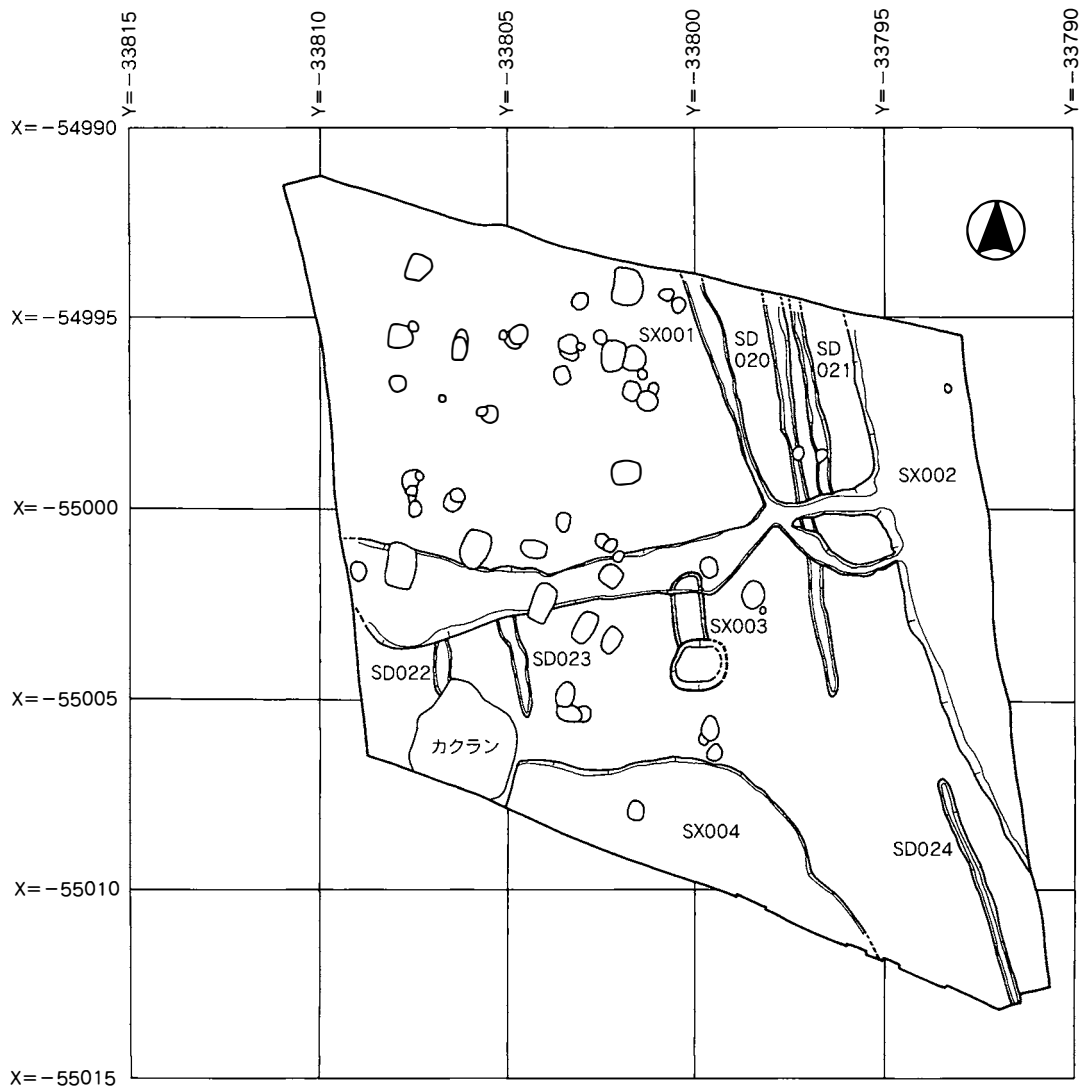
第４節　Ⅵ区の遺構とそれに伴う遺物

近世の遺物を含む溝状遺構５条と土壙４基、不明遺構３基を確認した。SD020からSD024は全て南北方向に走っている。SX001及びSX002はSD020・SD022・SD023を切っている事からSD20からSD24よりも新しい。またⅡ区で検出した区画された遺構と類似している点から畑の溝とも考えられるが、確証は得られなかった。SX030は底部に一部落ち込みがあることから、柱穴の掘り方とも考えられたが対になるべき遺構が存在しないため、不明遺構とした。SX004については、南側に緩やかに傾斜しており、自然の落ち込みの可能性もあるが、調査時の検出状況から不明遺構とする。この調査区を挟んで、南側には県道が走り、北から南に向かってやや地形的に下がっている。この調査区では、遺構密度も低いことから本遺跡においてこの県道を境に遺跡が分断されている可能性が高い。

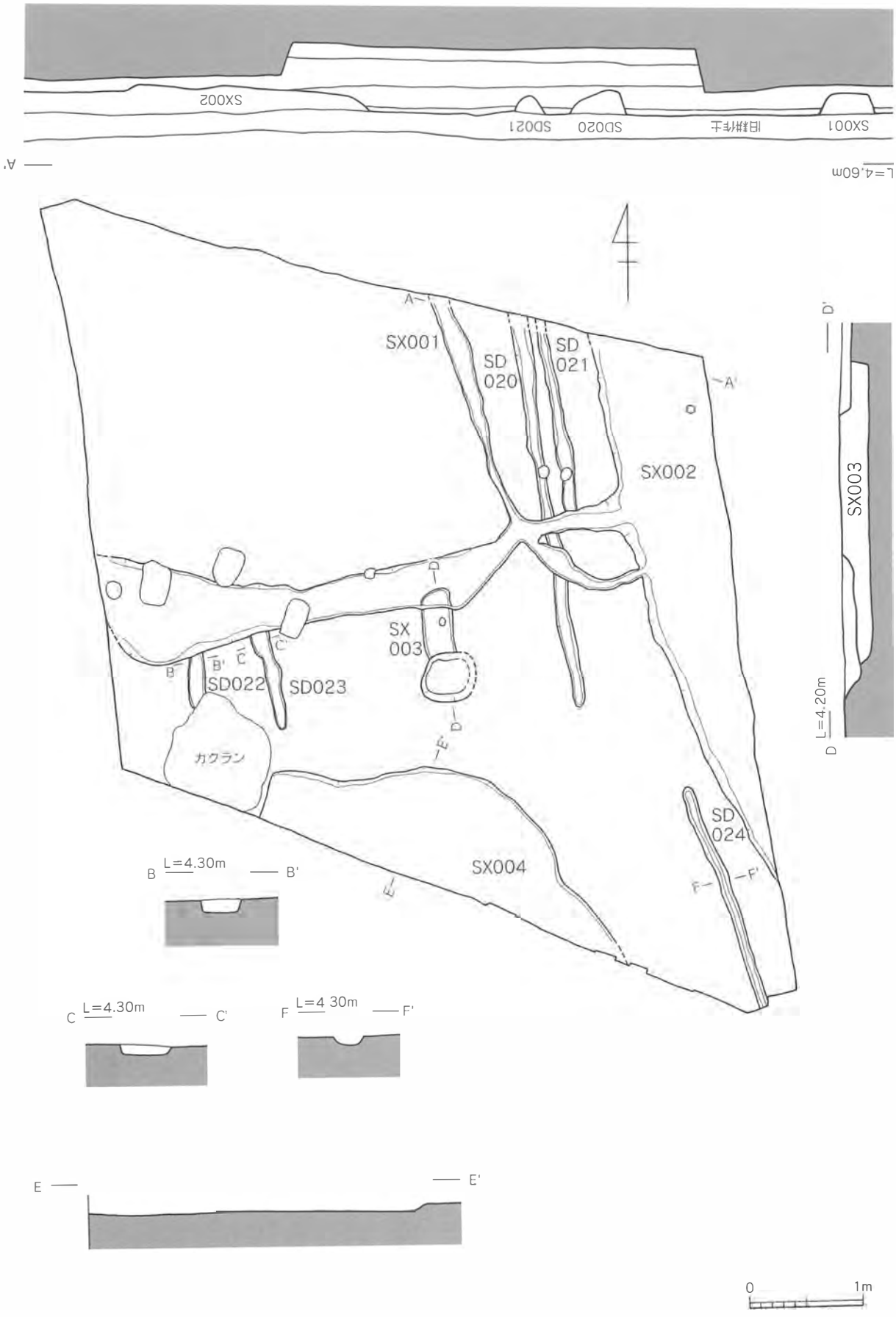
1　溝状遺構（SD）

SD020（第70図）

幅約15cm、深さ約20cm、北から南へ走る溝状遺構である。SX002に切られている。出土遺物が無いため、作られた時代は特定できない。断面はやや丸みを帯びた半円状である。SD021と平行に走っている。



第69図　Ⅵ区　全体遺構配置図



第70図　SX002・003・004、SD022・023・024実測図（平面1/150）

SD021（第70図）

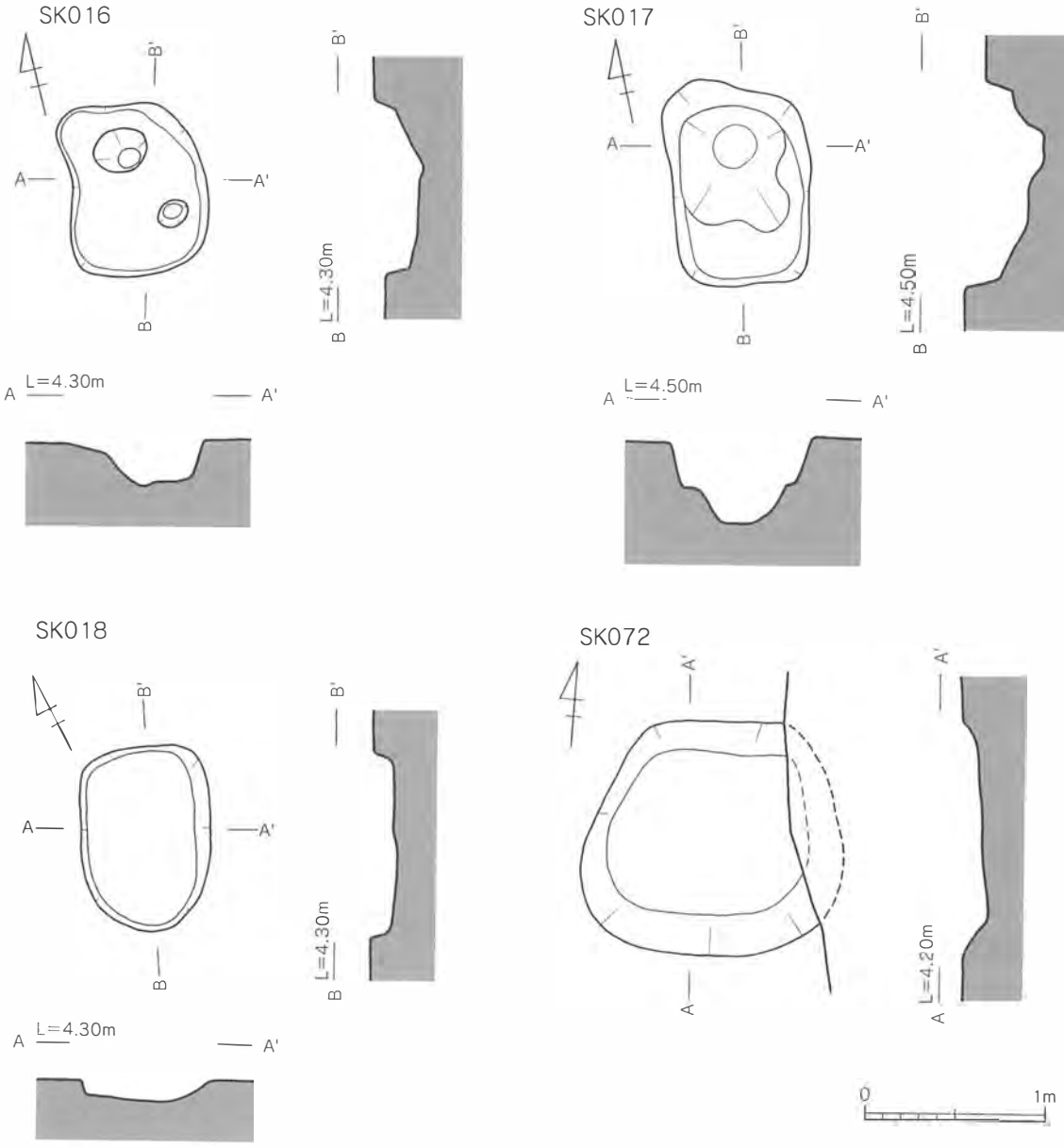
幅約10cm、深さ約15cm、北から南へ走る溝状遺構である。SD020と同様にSX002に切られている。出土遺物が無いため、作られた時代は特定できない。断面はやや丸みを帯びた半円状である。SD020と平行に走っている。

SD022（第70図）

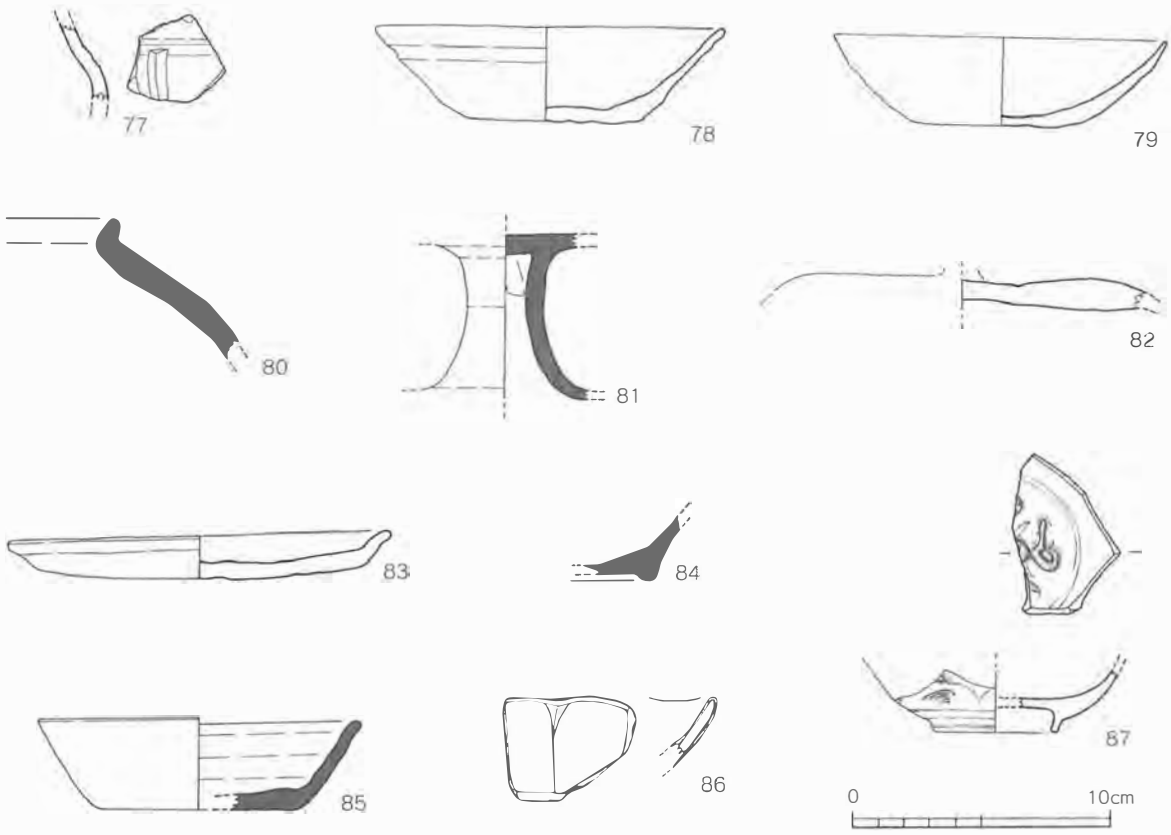
幅約15cm、深さ約10cm、北から南へ走る溝状遺構である。SD020と同様にSX002に切られている。出土遺物が無いため、作られた時代は特定できない。断面はSD020と異なり、やや四角く底部がフラットを呈す。SD023と平行に走っている。

SD023（第70図）

幅約15cm、深さ約10cm、北から南へ走る溝状遺構である。SD020と同様にSX002に切られている。出土遺物が無いため、作られた時代は特定できない。断面はSD020と異なり、やや四角く底部がフラットを呈す。SD022と平行に走っている。



第71図　SK016·017·018·072実測図



第72図　SD024・SX002・Pit・一括出土遺物実測図

SD024（第70図）

幅約10cm、深さ約10cm、北から南へ走る溝状遺構である。出土遺物が無いため、作られた時代は特定できない。断面はSD020と同様、やや四角く底部がフラットを呈す。

2　土壙（SK）

SK016（第71図）

平面形はやや不整形の隅丸長方形形を呈する。長辺約50cm、短辺約45cmで底面にピット状の掘り込みが2ヶ所に認められる。柱穴の掘り方とも考えられるが、この遺構に対応する柱穴が検出されなかったため、土壙とする。出土遺物がないため作られた時代は特定できない。

SK017（第71図）

平面形はやや不整形の隅丸長方形形を呈する。長辺約50cm、短辺約45cmで底面にピット状の掘り込みが1ヶ所に認められる。柱穴の掘り方とも考えられるが、この遺構に対応する柱穴が検出されなかったため、土壙とする。出土遺物がないため作られた時代は特定できない。

SK018（第71図）

平面形はやや不整形の隅丸長方形形を呈する。長辺約50cm、短辺約35cmで底面はフラットである。出土遺物がないため作られた時代は特定できない。

SK072（第71図）

平面形は不整形を呈する。長辺約80cm、短辺約65cmで底面はフラットである。出土遺物がないため作られた時代は特定できない。

3　不明遺構（SX）

SX001（第70図）

調査区の北から南にかけて溝状に広がり、調査区の中央やや北寄りでSX002と交わる。幅は広い箇所で約20cm、狭い箇所で約10cm、深さ約20cmを測る。底に砂粒が認められない事から本遺構を不明遺構とした。

SX002（第70図）

調査区の西で扇状に広がり、遺構の中央やや北よりで、溝状に変わり東へ広がっている。調査区の中央やや北寄りでSX001と交わり、更に調査区の西へ広がっていく。幅は広い箇所で約1ｍ、狭い箇所で約20cm、深さ約30cmを測る。本遺構の形態から、溝状遺構の可能性もあるが、SX001同様に溝としての役目を果たしていた痕跡が確認出来なかった。

SX003（第70図）

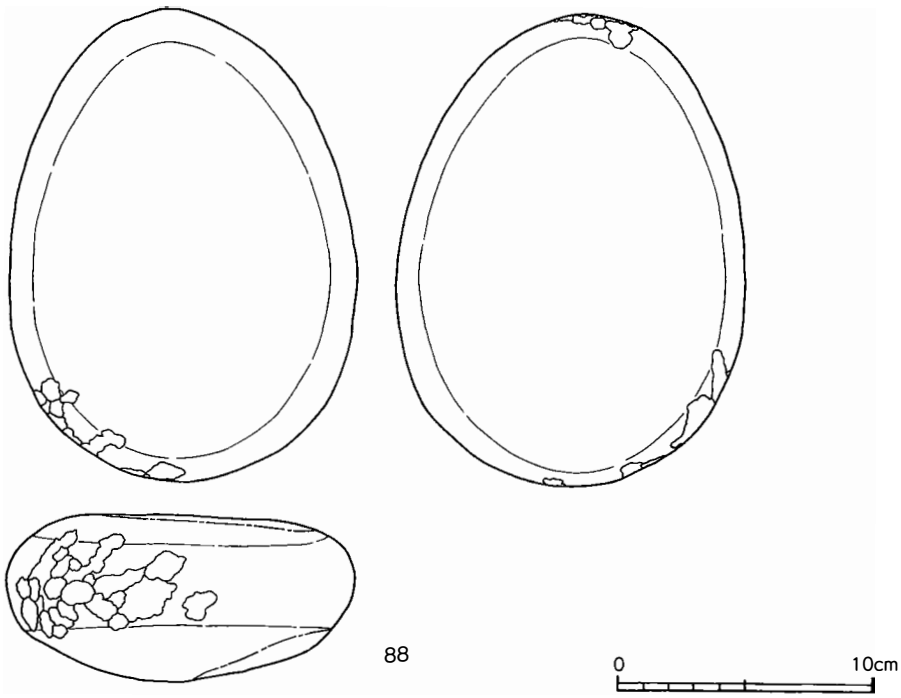
SK042とSX002に切られている。平面形はやや隅丸長方形を呈す。現存する範囲で、長辺が約60cm、短辺が約30cm、深さ約30cmを測る。形状から土壙の可能性も考えられたが、埋土状況から、土壙の可能性は低いと考えた。

SX004（第70図）

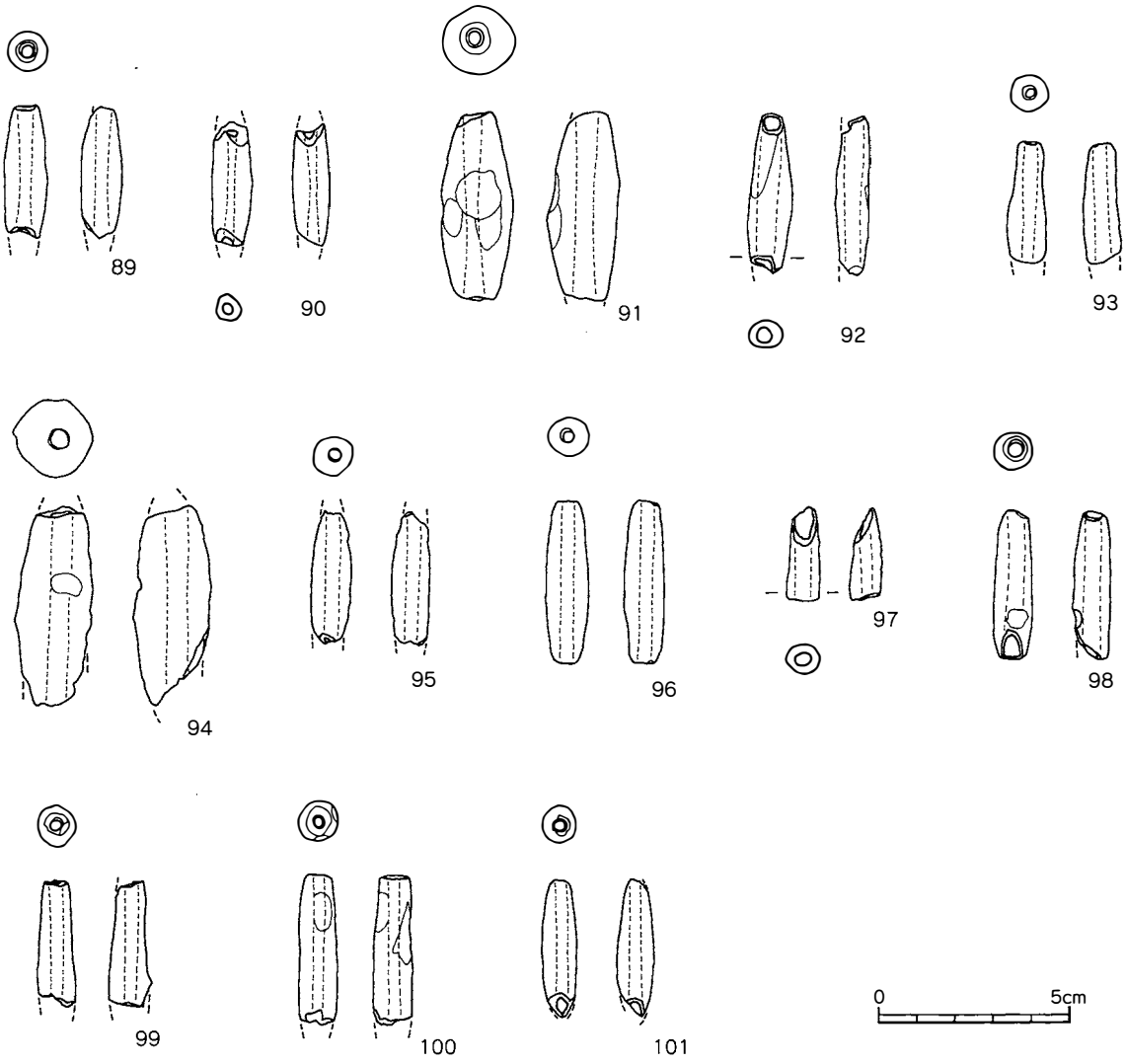
調査区の南で扇状に広がり、当初は池跡と考えられていた。確認できた範囲で、幅約3.5ｍ、深さ約10cmを測る。調査結果、池跡と立証できる資料を得ることが出来無かった。出土遺物が無く、廃棄土壙とも考えられないため、本遺構を不明遺構とした。

Ⅵ区の遺物について（第72図・第73図）

77は青磁の小型壺である。表面に刻みが施されている。中世の遺物である。78は杯である。内外面ともなで調整が認められる。底部にヘラ切り後、なで調整が認められる。古代の遺物である。79は杯である。内外面ともなで調整が認められる。古代の遺物である。



第73図　Ⅰ～Ⅵ区一括出土遺物実測図



第74図　Ⅰ～Ⅵ区土錘実測図

80は須恵器の無頸壺である。内外面ともなで調整が認められる。古代の土器である。81は須恵器の高杯である。内外面ともなで調整が認められる。古代の土器である。82は杯蓋である。摘みが欠落している。内外面ともなで調整が認められる。古代の土器である。83は杯である。内外面ともなで調整が認められる。古代の遺物である。84は須恵器の貼り付け高台をもつ杯である。内外面ともなで調整、底部はヘラ切り後なでによる調整が認められる。古代の遺物である。85は須恵器の杯である。内外面ともなで調整、底部はヘラ切り後なでによる調整が認められる。古代の遺物である。86は青白磁の鉢である。型押しで蓮華文を表現している。内外面とも釉が施されている。中世の遺物である。87は染付けの碗である。内外面に模様が描かれている。近世の遺物である。88は磨石である。楕円形で先端に顕著な敲打痕が認められる。弥生時代の遺物と考えられる。

89から101は漁具の土錘である。89は長さ4.5cm、幅1.2cmで胴部がやや張り出す。90長さ4.5cm、幅1.2cmで胴部がやや張り出す。91は長さ4.5cm、幅1.2cmで胴部がやや張り出す。92は長さ4.5cm、幅1.2cmで胴部がやや張り出す。93は長さ4.5cm、幅1.2cmで胴部がやや張り出す。94は長さ4.5cm、幅1.2cmで胴部がやや張り出す。95は長さ4.5cm、幅1.2cmで胴部がやや張り出す。96は長さ4.5cm、幅1.2cmで胴部がやや張り出す。97は長さ4.5cm、幅1.2cmで胴部がやや張り出す。99は長さ4.5cm、幅1.2cmで胴部がやや張り出す。100は長さ4.5cm、幅1.2cmで胴部がやや張り出す。101は長さ4.5cm、幅1.2cmで胴部がやや張り出す。

第５節　Ⅶ区の遺構とそれに伴う遺物

Ⅶ区について

南北に走る大きい道路状遺構１条、溝状遺構６条と掘立柱建物２棟、土壙17基（内焼成遺構１基を含む）、井戸１基をこの調査区で検出した。SD025とSD026は南北方向にほぼ平行に作られている。SD027とSD028はSD025とSD026を分断して、東西方向に作られており、遺構の切り合いからSD025とSD026より新しく作られている。SD029もSD027・028同様に東西方向に作られており、遺構の切り合いからSD025・026より新しい。SD030も北西から南東方向に作られており、遺構の切り合いからSD025・026より新しい。SR001は地山削り出しで作られた溝状遺構であるが、調査結果により、地山が硬化しており道路として使用された可能性が考えられる。

この調査区の最も重要な遺構はこれらの溝状遺構である。SD025とSD026は現地表面から１ｍ20cmほどの深さを測り、出土遺物から古墳時代に作られたと考えられる。遺物が摩滅していることから、溝内では流水があった事が考えられる。この遺構の目的を考えるにあたって、常時、用水路としての利用ではなく、遺跡内に雨水が流入するのを防ぐために掘られたと考える。

一方、SD027からSD030の溝状遺構は現地表面から30cmから50cm余りの深さを測り、出土遺物から古代末から中世にかけて作られたと考えられる。溝の幅と深さ、遺物の摩滅が余り見られないことから、遺跡内での簡易な排水路として作られた可能性がある。

掘立柱建物は出土遺物が無く作られた時期は不明である。柱穴の埋土と本調査区の遺構との関連から古代末から中世にかけて作られた可能性は高い。

土壙は17基を検出した。出土した遺物から古代に作られたと考えられる。SK021とSK022は不整形の土壙であるが、この土壙内に多量の土器が遺棄されていることから土器溜と考えられる。SK027は埋土中多量の焼土と炭を含んでいた。遺物を一切含まず、底に焼成痕が認められることから、何らかの物を燃やした焼成遺構と考えられる。

その他の土壙はいずれも小型でかつ残存状況が極めて悪いので遺構の性格は不明である。

井戸は素掘りである。Ⅲ区～Ⅴ区で検出された井戸と似通っているが、この調査区の井戸から検出される遺物は、古代のものであり、やや時期が下る。木枠や石積みは全く認められなかった。

１　掘立柱建物（SB）

SB017（第76図）

長軸約６ｍ、短軸約4.7ｍの、１間×２間の５本柱の側柱構造の掘立柱建物遺構である。柱穴の深さは、深いもので約50cm、浅いもので約30cmである。柱の内側は特に硬化していない。

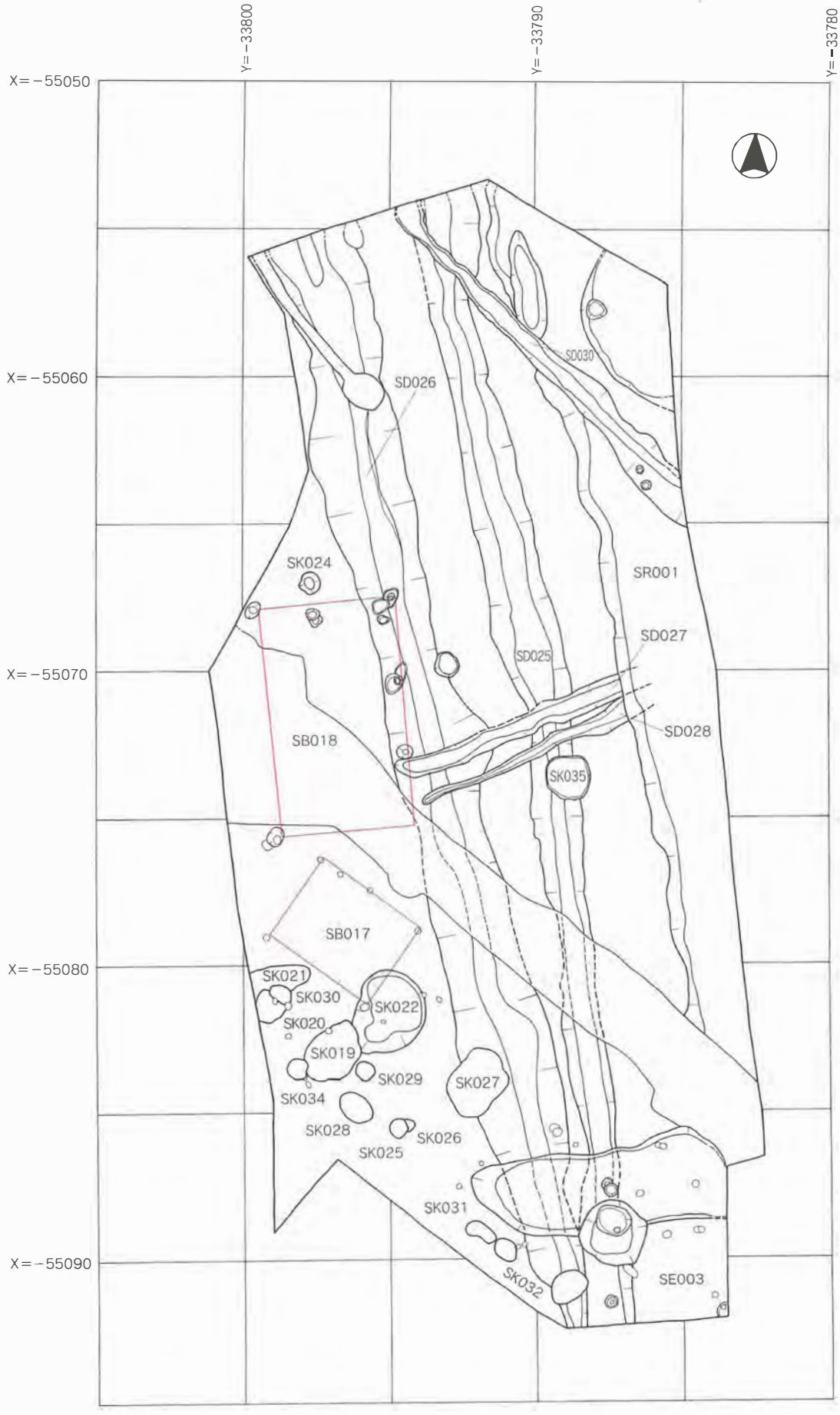
SB018（第77図）

南東側が撹乱により一部破壊されている。長軸約7.8ｍ、短軸約4.8ｍの、２間×３間の10本柱（現存は６本）の側柱構造の掘立柱建物遺構である。柱穴の深さは、深いもので約70cm、浅いもので約30cmである。柱の内側は特に硬化していない。

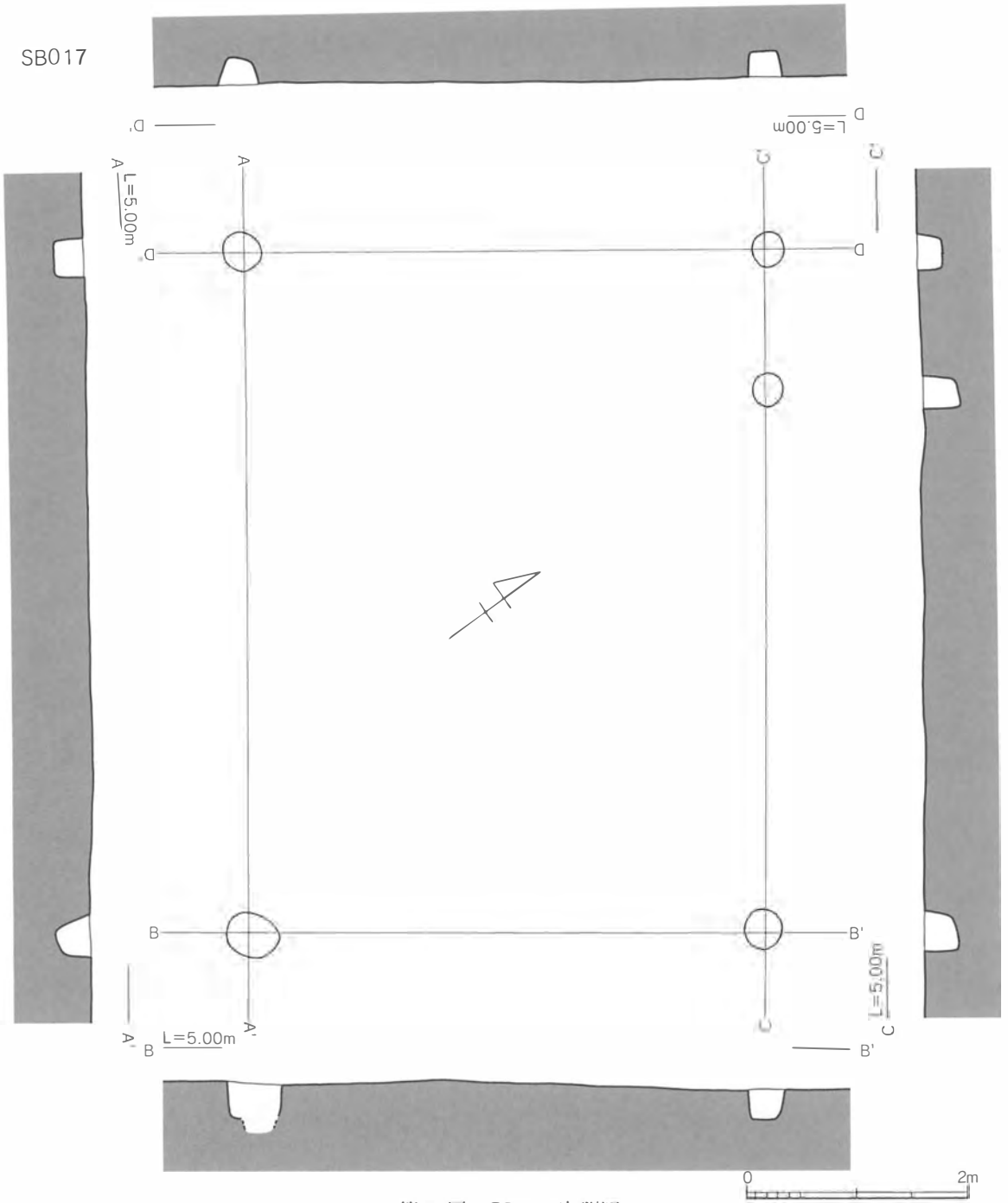
２　溝状遺構（SD）

SD025（第78図）

幅約７ｍ、深さ約40cm、北から南方向に約75ｍ余り走る溝状遺構である。出土遺物から古墳時代に作られたと考えられる。



第75図　Ⅶ区　全体遺構配置図



第76図　SB017実測図

SD026（第78図）

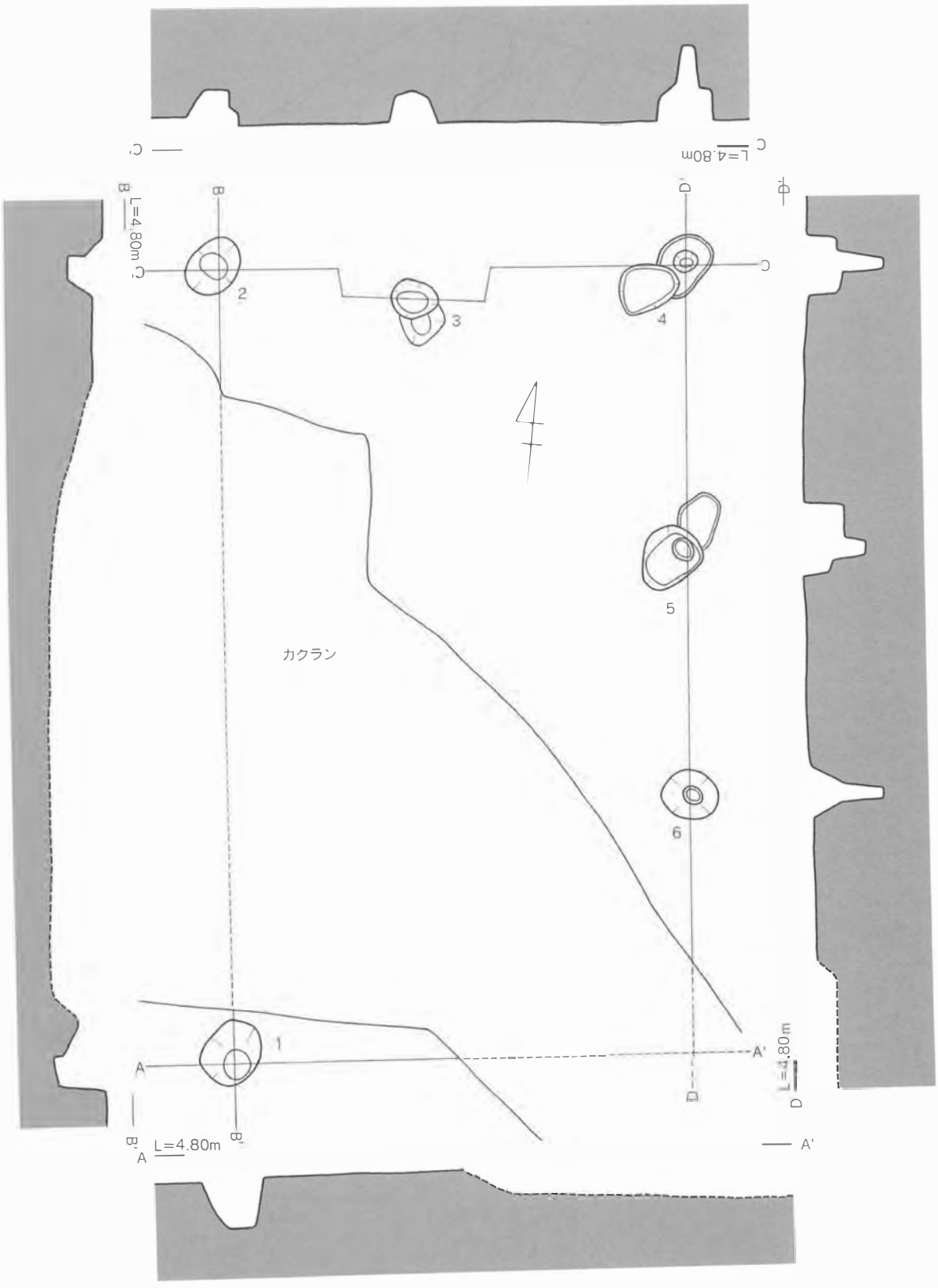
幅約７ｍ、深さ約40cm、北から南方向に約75ｍ余り走る溝状遺構である。出土遺物から古墳時代に作られたと考えられる。

SD027（第78図）

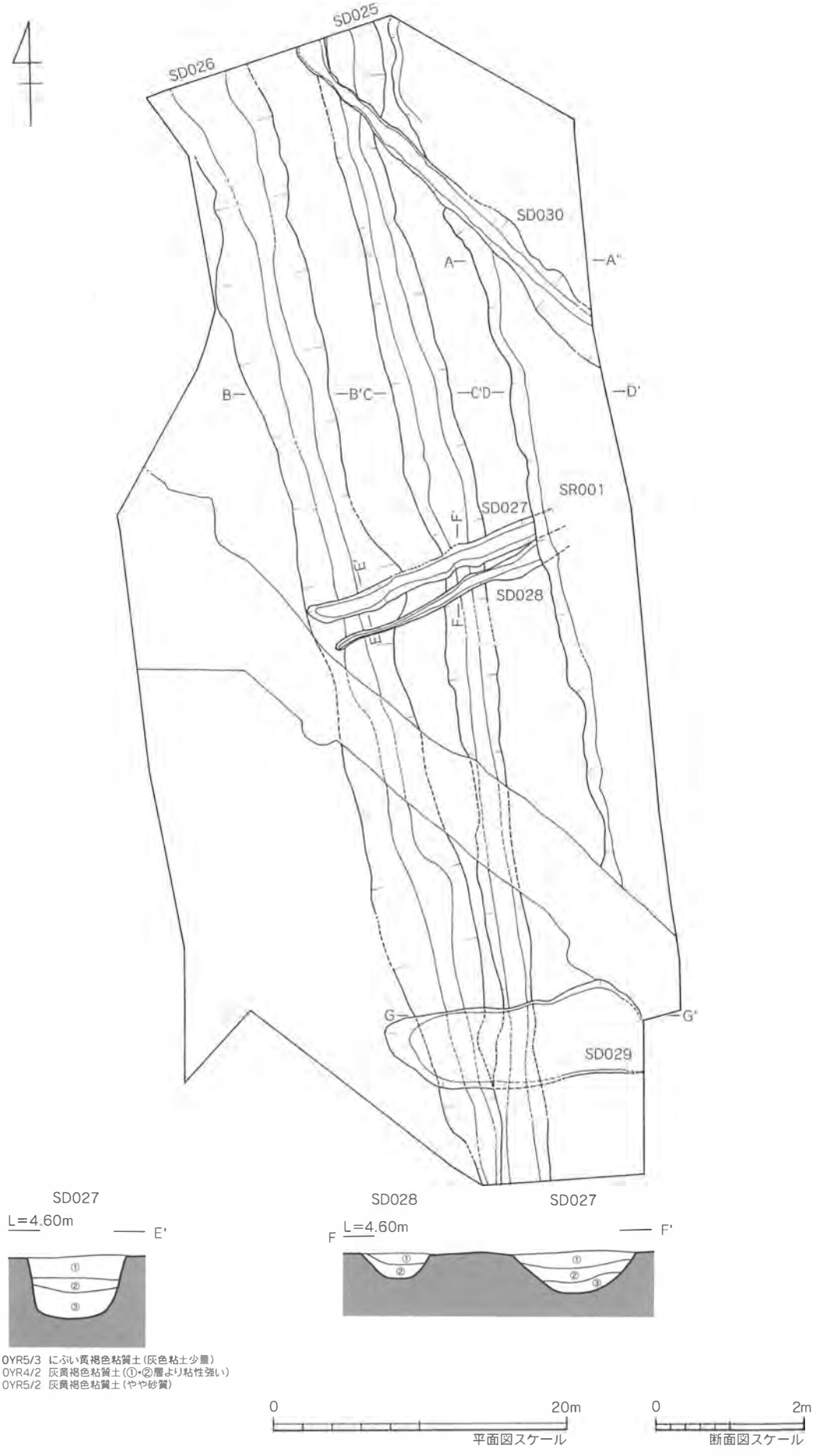
幅約1.4ｍ、深さ約40cm、東からか西南方向に約17ｍ余り走る溝状遺構である。出土遺物が無いため、作られた時代は不明である。

SD028（第78図）

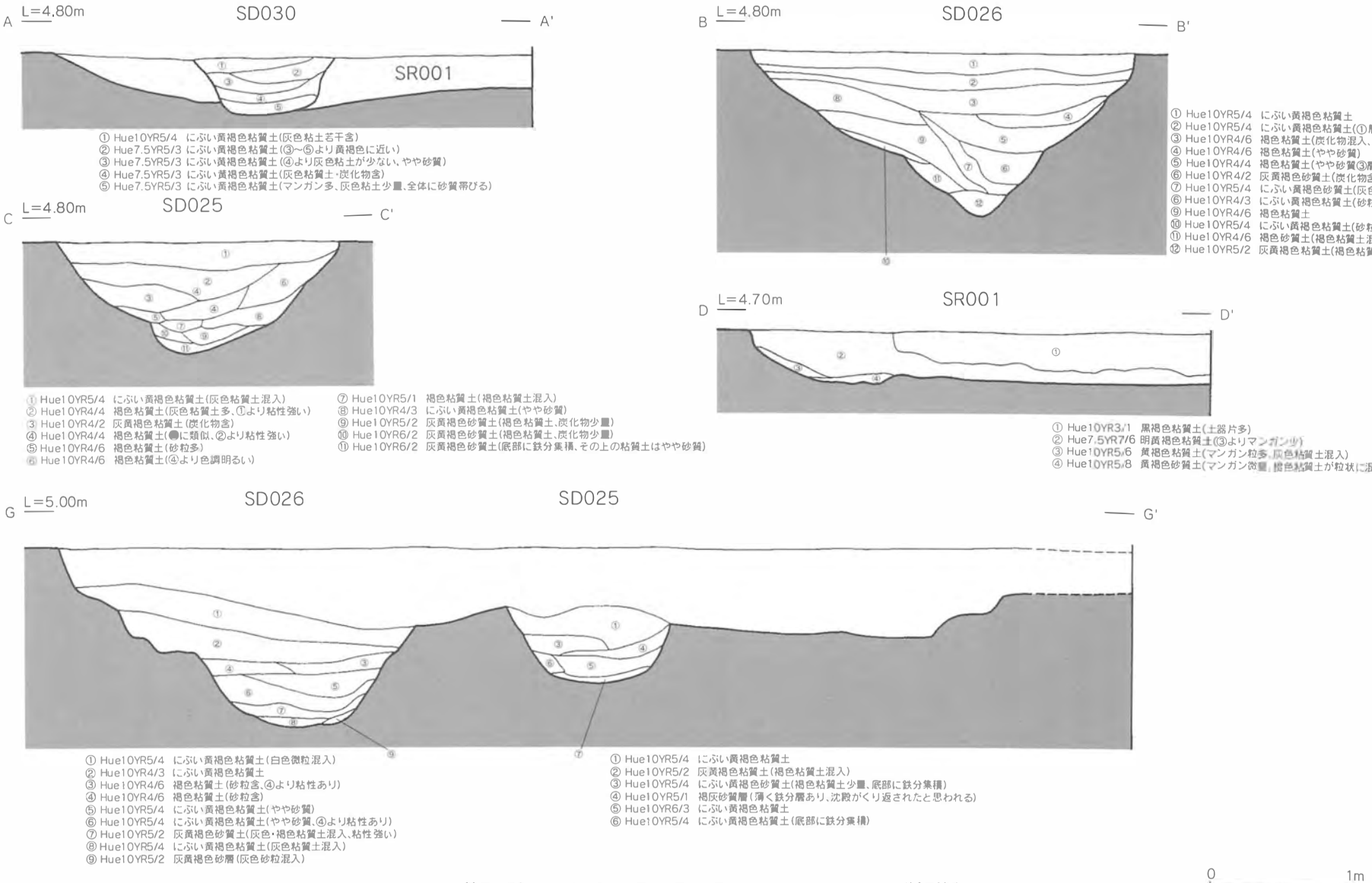
幅約１ｍから２ｍ、深さ約60cmから100cm、東から西方向に約17ｍ余り走る溝状遺構である。出土遺物が無いため、作られた時代は不明である。



第77図　SB018実測図



第78図　SD025・026・027・028・029・030、SR001実測図



第79図　SD025・026・027・028・029・030、SR001断面図

SD029（第 78 図）

幅約６ｍで、東から西方向に約 18 ｍ余り走る溝状遺構である。出土遺物から古代に作られたと考えられる。

SD030（第 78 図）

幅約１ｍから２ｍ、深さ約 40cm、北西から南東方向に約 27 ｍ余り走る溝状遺構である。出土遺物から古代に作られたと考えられる。

SD025 ～ SD030 出土の遺物について（第 80 図）

102 は甕の脚部である。弥生時代後期の遺物であるが、SD027 が作られた時代に混入したものと考えられる。103 は高杯の脚部である。古墳時代の遺物である。104 は甕の口縁である。内面にヘラ削りが認められる。古墳時代の遺物である。105 は甕の完形である。内外面ともハケ目による調整が認められる。古墳時代の遺物である。106 は小型丸底壺の完形である。内外面ともハケ目による調整が認められる。古墳時代の遺物である。

107 は甕の口縁である。古代の遺物である。108 は甕の口縁である。古代の遺物である。109 は杯である。古代の遺物である。110 は杯である。古代の遺物である。111 は杯である。古代の遺物である。112 は杯である。古代の遺物である。109 から 112 は全て SD030 から出土している。113 は須恵器の杯である。貼り付け高台で、内外面ともなで調整が認められる。古代の遺物である。114 は杯である。外面にヘラ削りを残す。高台は貼り付けである。古代の遺物である。115 は小型の杯である。高台は削り出しで作られている。古代の遺物である。116 はやや深めの杯である。古代の遺物である。117 は高台付きの杯である。古代の遺物である。118 は高台付きの杯である。古代の遺物である。

3　道路状遺構（SR）

SR001（第 78 図）

調査区外に広がりを持つため、全容は不明である。現存幅約７ｍ、深さ約 30cm、南北方向に約 40 ｍ余り走る。検出面が硬化していることから、道路状遺構と考えられる。出土遺物から古代に造られたと考えられる。

4　土壙（SK）

SK019（第 81 図）

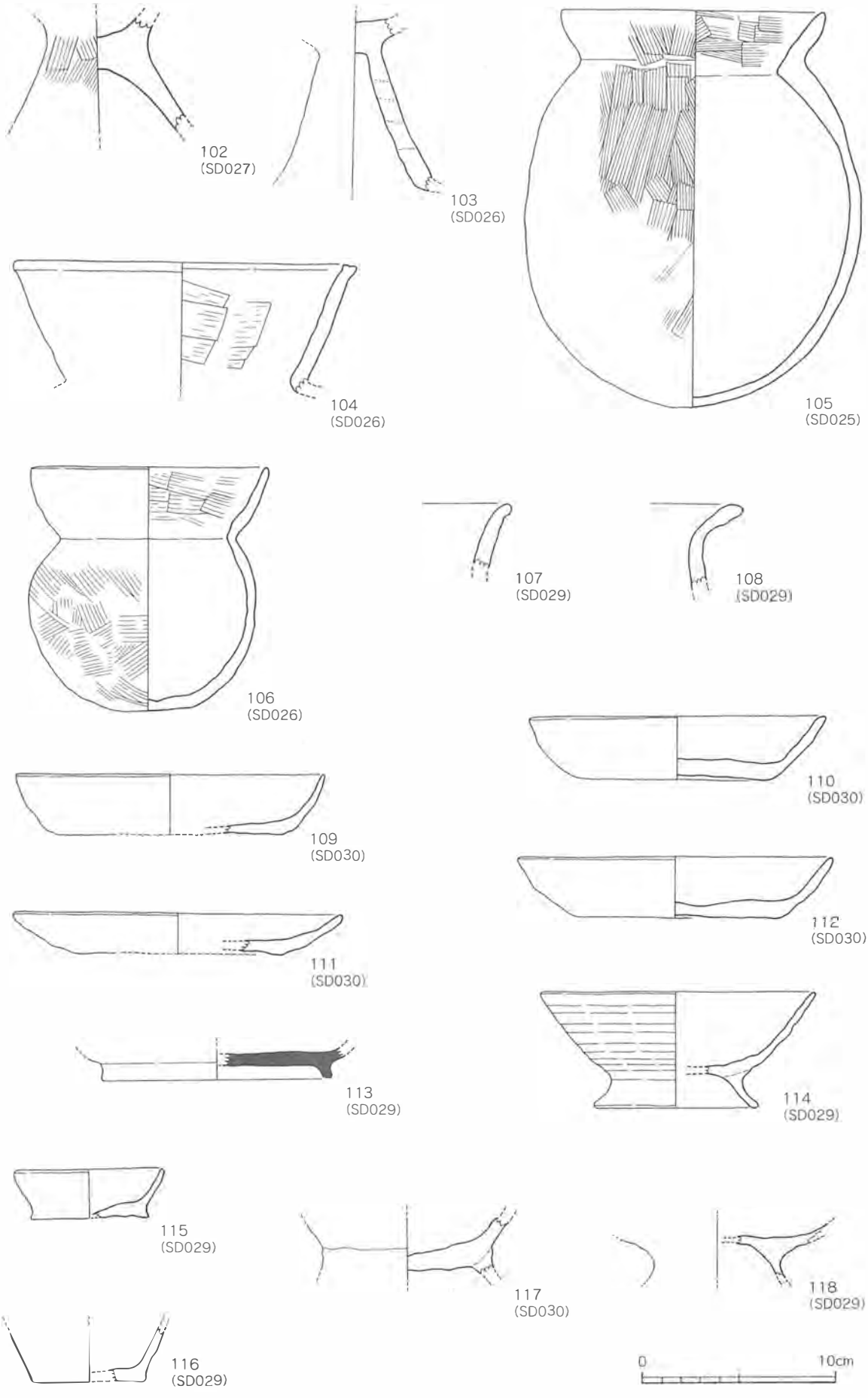
平面形は不整形を呈する。長辺約 2.2 ｍ、深さ約 70cm で底面がややフラットな形状をもつ。遺構の性格は不明である。出土遺物から古代に作られたと考えられる。

SK020（第 82 図）

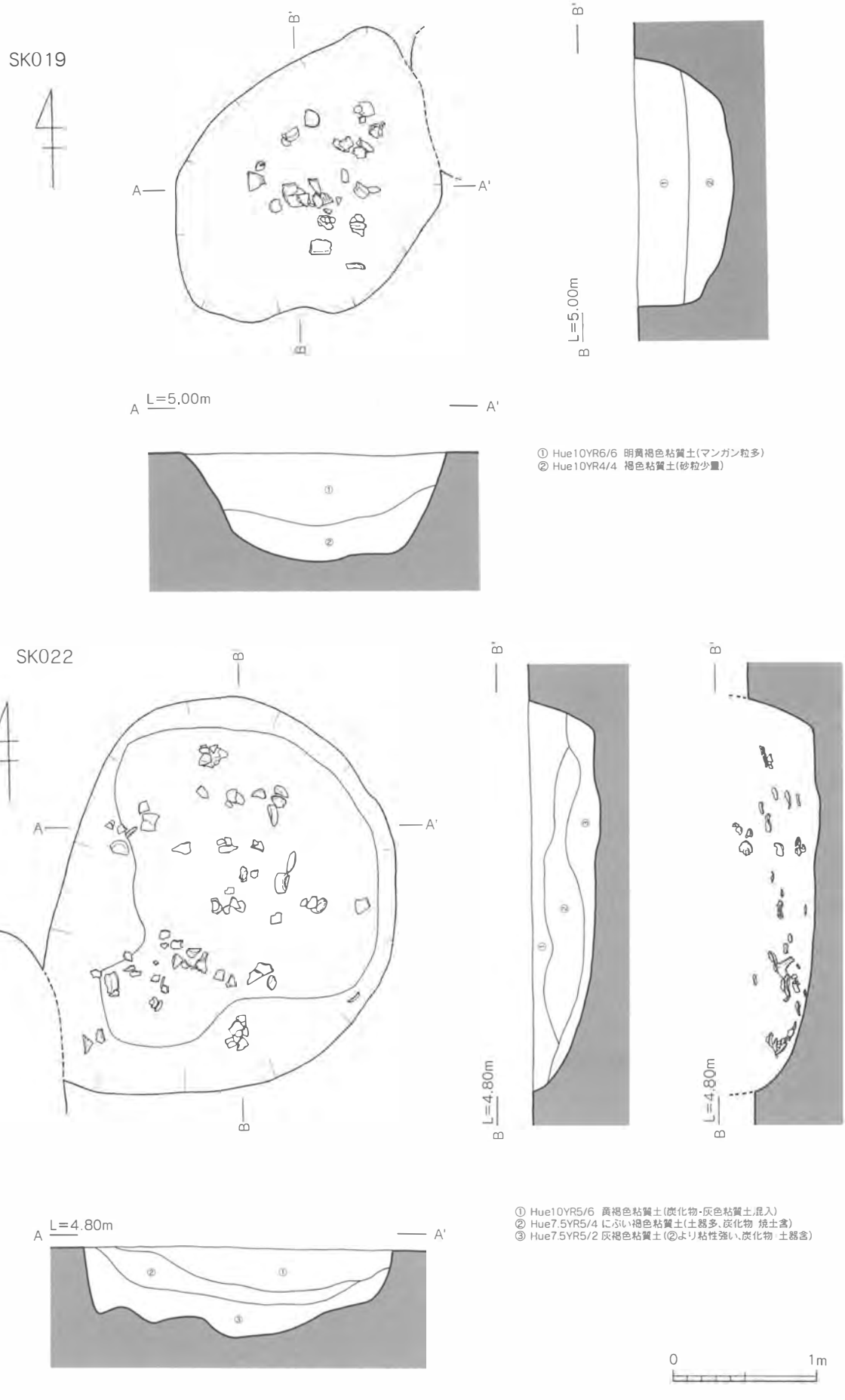
調査区外に広がっているが、平面形からやや楕円形を呈すると考えられる。残存長辺約１ｍ、深さ約 20cm で底面がややフラットな形状をもつ。遺構の性格は不明である。出土遺物から古代に作られたと考えられる。

SK021（第 82 図）

調査区外に広がっているが、平面形からやや長細い楕円形を呈すると考えられる。SK020 に切られている。残存長辺約２ｍ、深さ約 60cm で底面がややフラットな形状をもつ。埋土中に土器を多量に含むことから、土器溜と考えられる。出土遺物から古代に作られたと考えられる。



第80図　SD025･026･027･028･029･030出土遺物実測図



第81図　SK019·022実測図

SK022（第81図）

平面形は不整形を呈する。長辺約３ｍ、短辺約2.4ｍ、深さ約80cmで底面がややフラットな形状をもつ。埋土中に土器を多量に含むことから、土器溜と考えられる。出土遺物から古代に作られたと考えられる。

SK023（第88図）

平面形は不整形を呈する。長辺約0.9ｍ、短辺約0.8ｍ、深さ約15cmで底面がややフラットな形状をもつ。出土遺物が無いため、遺構の作られた時代及び遺構の性格は不明である。

SK024（第88図）

平面形は不整形を呈する。長辺約0.7ｍ、短辺約0.6ｍ、深さ約15cmで底面がややフラットな形状をもつ。出土遺物が無いため、遺構の作られた時代及び遺構の性格は不明である。

SK025（第88図）

平面形は不整形を呈する。一辺約0.6ｍ、深さ約15cmで底面がややフラットな形状をもつ。出土遺物が無いため、遺構の作られた時代及び遺構の性格は不明である。

SK026（第88図）

平面形は不整形を呈する。SK005に切られている。現存する一辺約0.3ｍ、深さ約15cmで底面がやや歪な形状をもつ。出土遺物が無いため、遺構の作られた時代及び遺構の性格は不明である。

SK027（第89図）

平面形は不整形を呈する。SK025に切られて全体の形は不明である。現存する一辺約0.3ｍ、深さ約20cmで底面がフラットである。焼土を埋土中に含むが、遺構の壁面に焼成痕が認められないため、この少土は、遺構が埋まる際に混入したものと考える。出土遺物が無いため、遺構の作られた時代及び遺構の性格は不明である。

SK028（第88図）

平面形は不整形を呈する。長辺約1.3ｍ、短辺約0.9ｍ、深さ約20cmで底面がややフラットな形状をもつ。出土遺物が無いため、遺構の作られた時代及び遺構の性格は不明である。

SK029（第88図）

平面形は不整形を呈する。長辺約0.6ｍ、短辺約0.5ｍ、深さ約20cmで底面がややフラットな形状をもつ。出土遺物が無いため、遺構の作られた時代及び遺構の性格は不明である。

SK030（第82図）

調査区外により、全体形は不明確である。数度にわたり掘り返された痕跡が認められる。確認できた長辺約２ｍ、短辺約1.8ｍ、深さ約20cmで底面がややフラットな形状をもつ。出土遺物が無いため、遺構の作られた時代及び遺構の性格は不明である。

SK031（第88図）

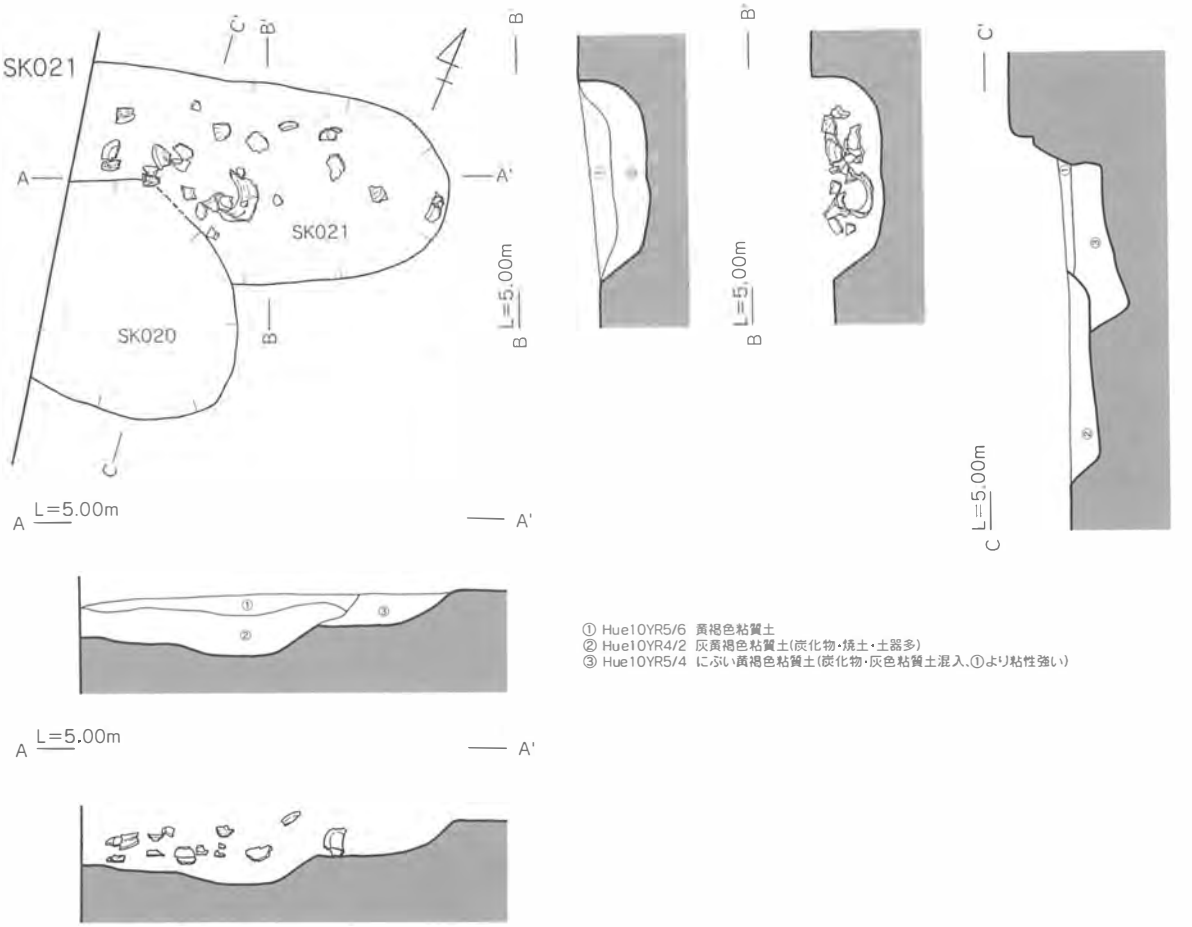
平面形は不整形を呈する。長辺約１ｍ、短辺約0.4ｍ、深さ約20cmで底面がややフラットな形状をもつ。出土遺物が無いため、遺構の作られた時代及び遺構の性格は不明である。

SK032（第88図）

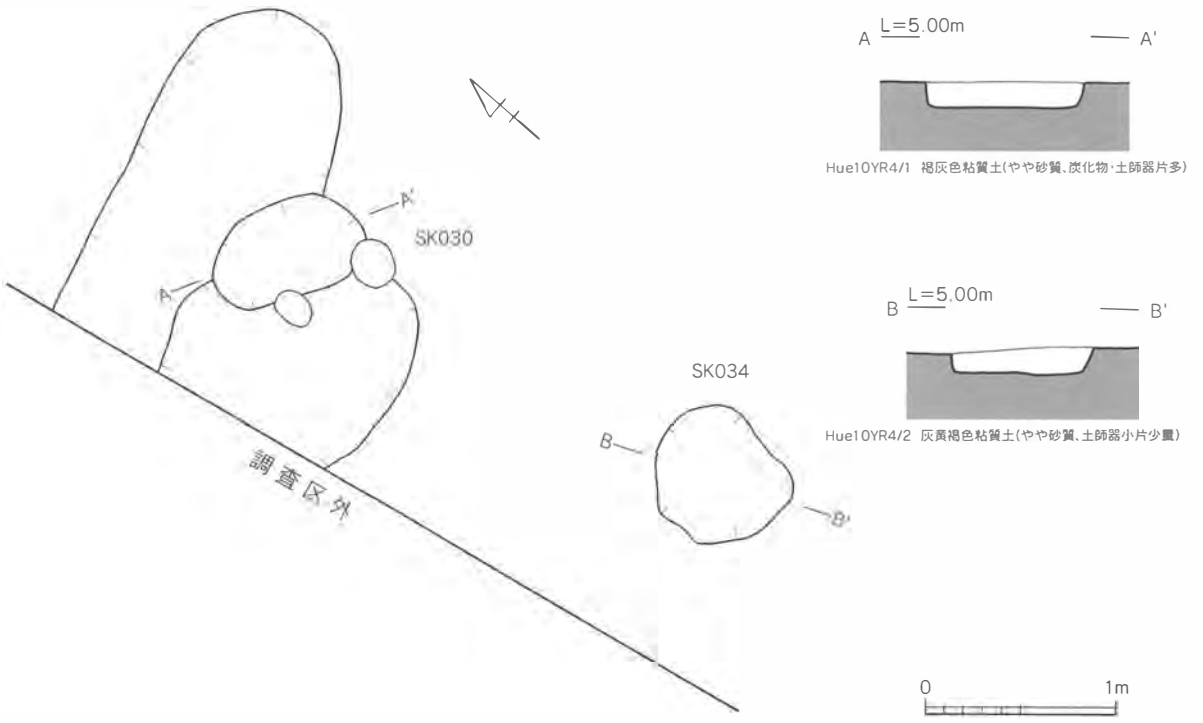
平面形は不整形を呈する。長辺約0.8ｍ、短辺約0.6ｍ、深さ約20cmで底面がややフラットな形状をもつ。出土遺物が無いため、遺構の作られた時代及び遺構の性格は不明である。

SK033（第89図）

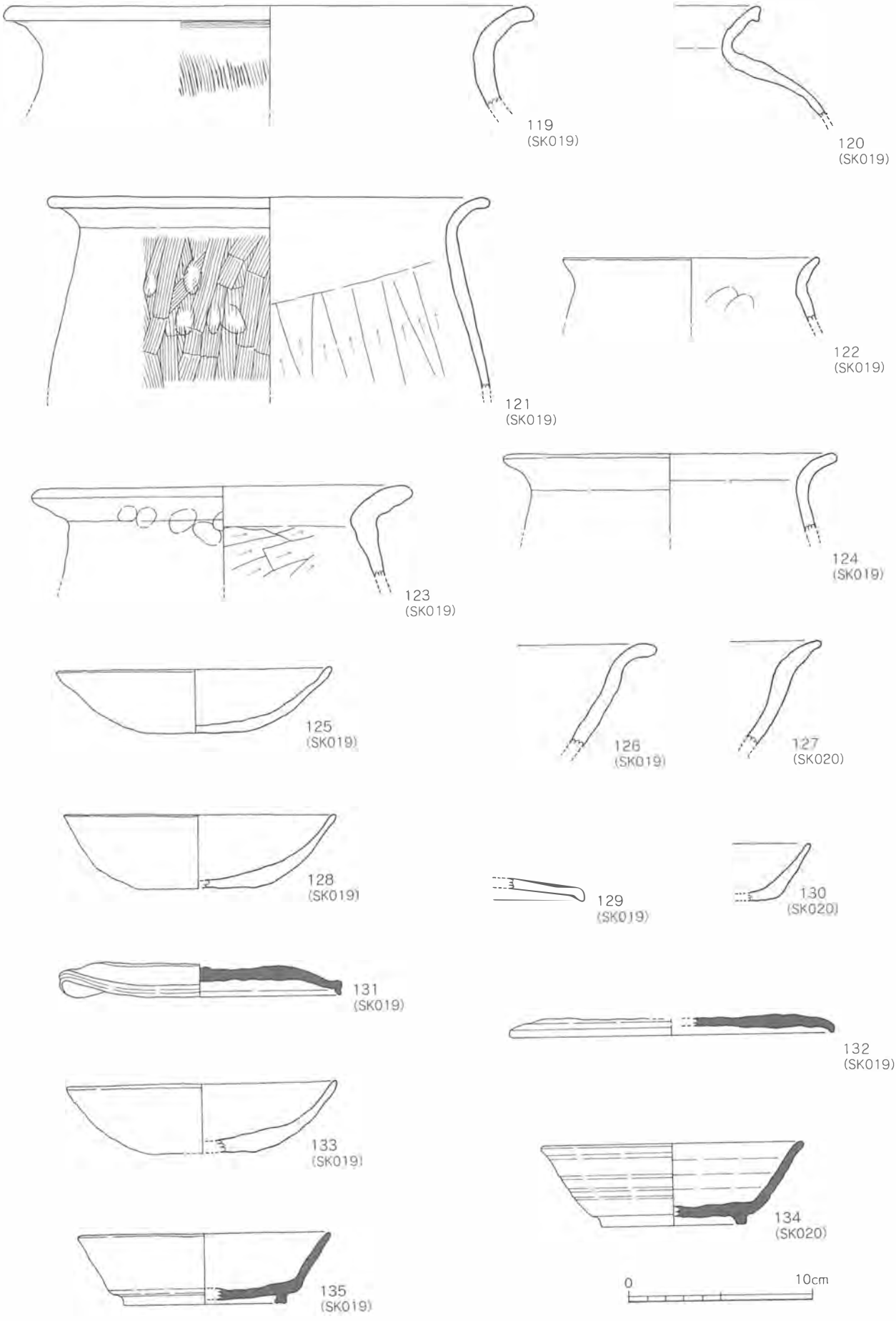
平面形は楕円形を呈する。長辺約1.3ｍ、短辺約0.9ｍ、深さ約20cmで底面がやや丸みを帯びた形状をもつ。出土遺物が無いため、遺構の作られた時代及び遺構の性格は不明である。



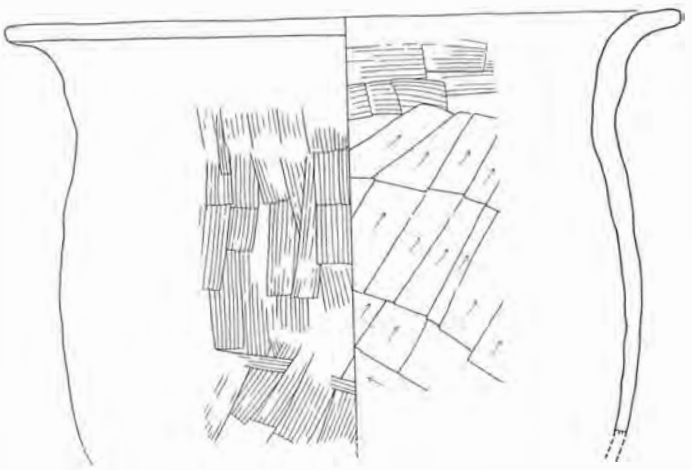
SK030·034

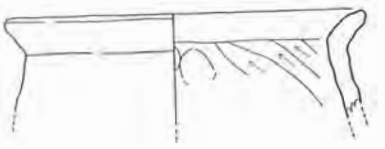


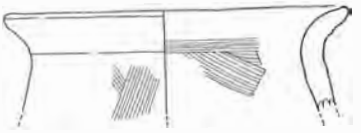
第82図　SK020·021·030·034実測図



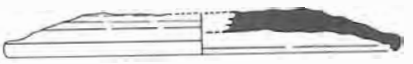
第83図　SK019･020出土遺物実測図


136

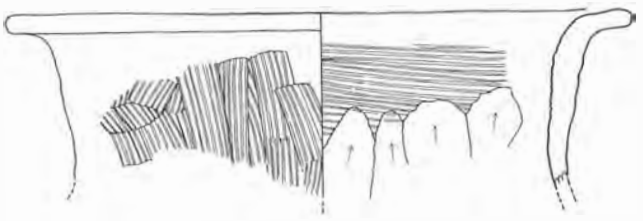

137

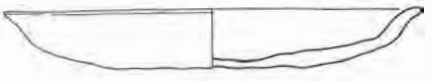

138

139


140

141


142


143

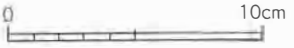
144

145

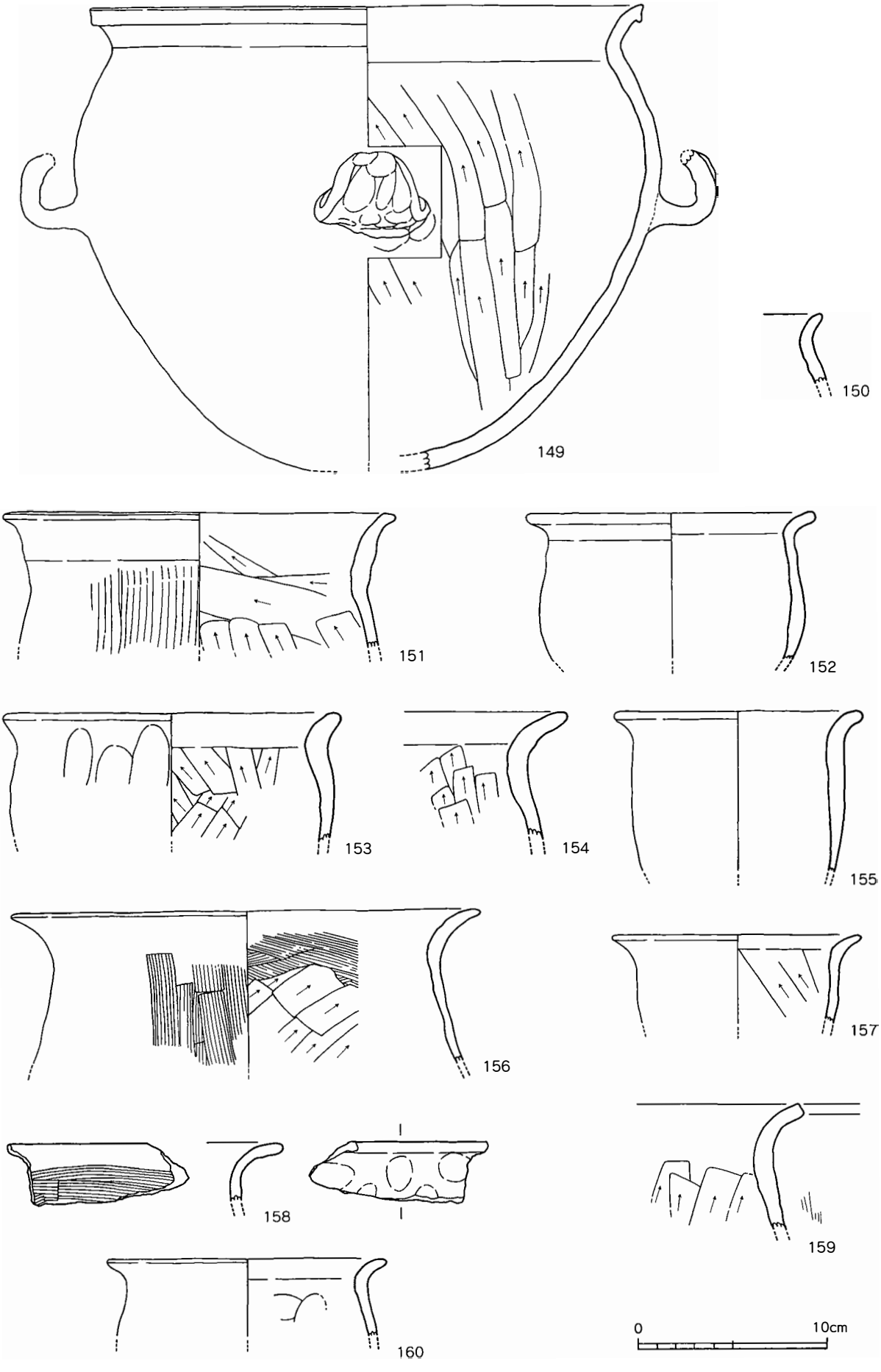
146

147

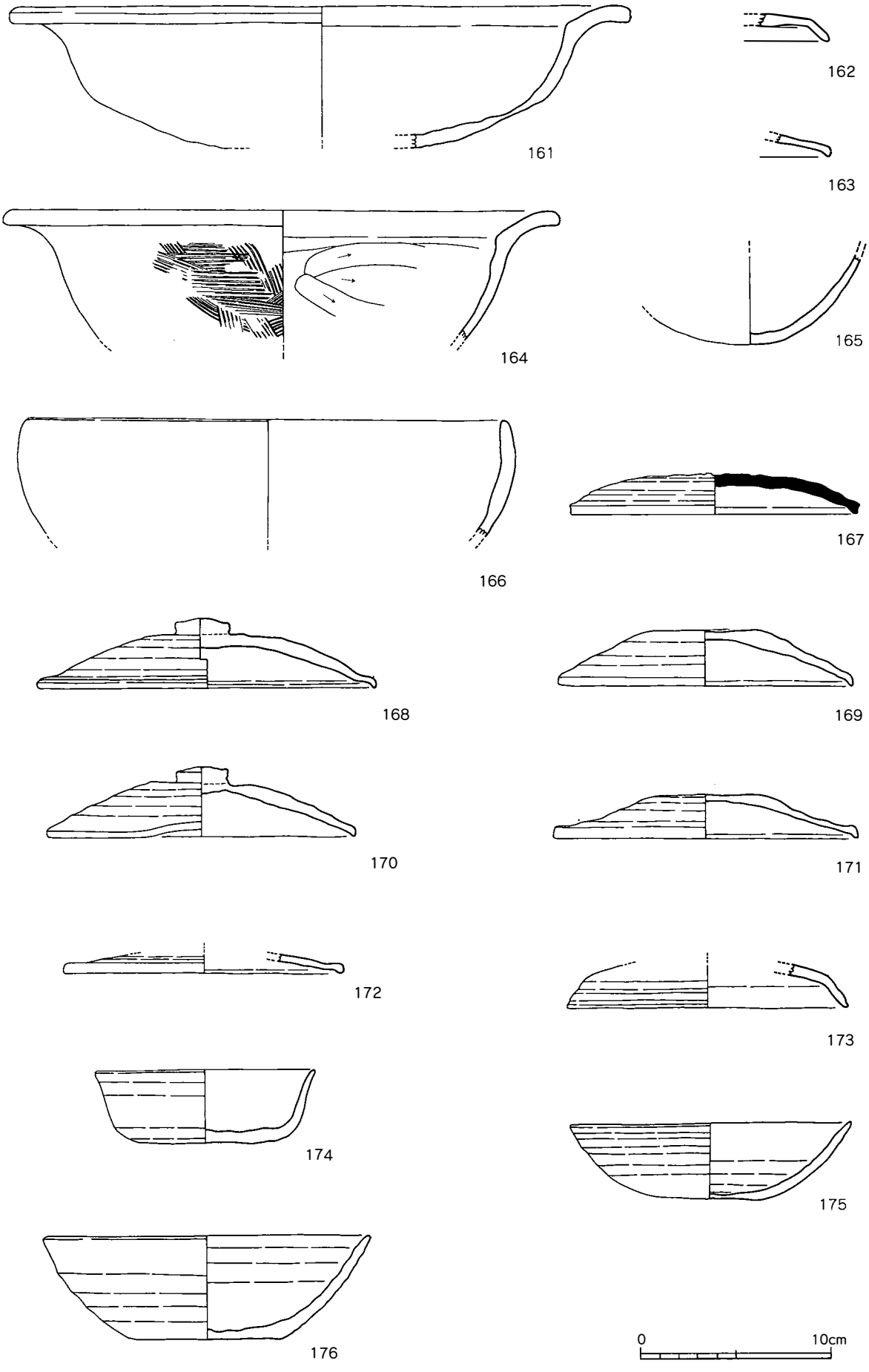
148



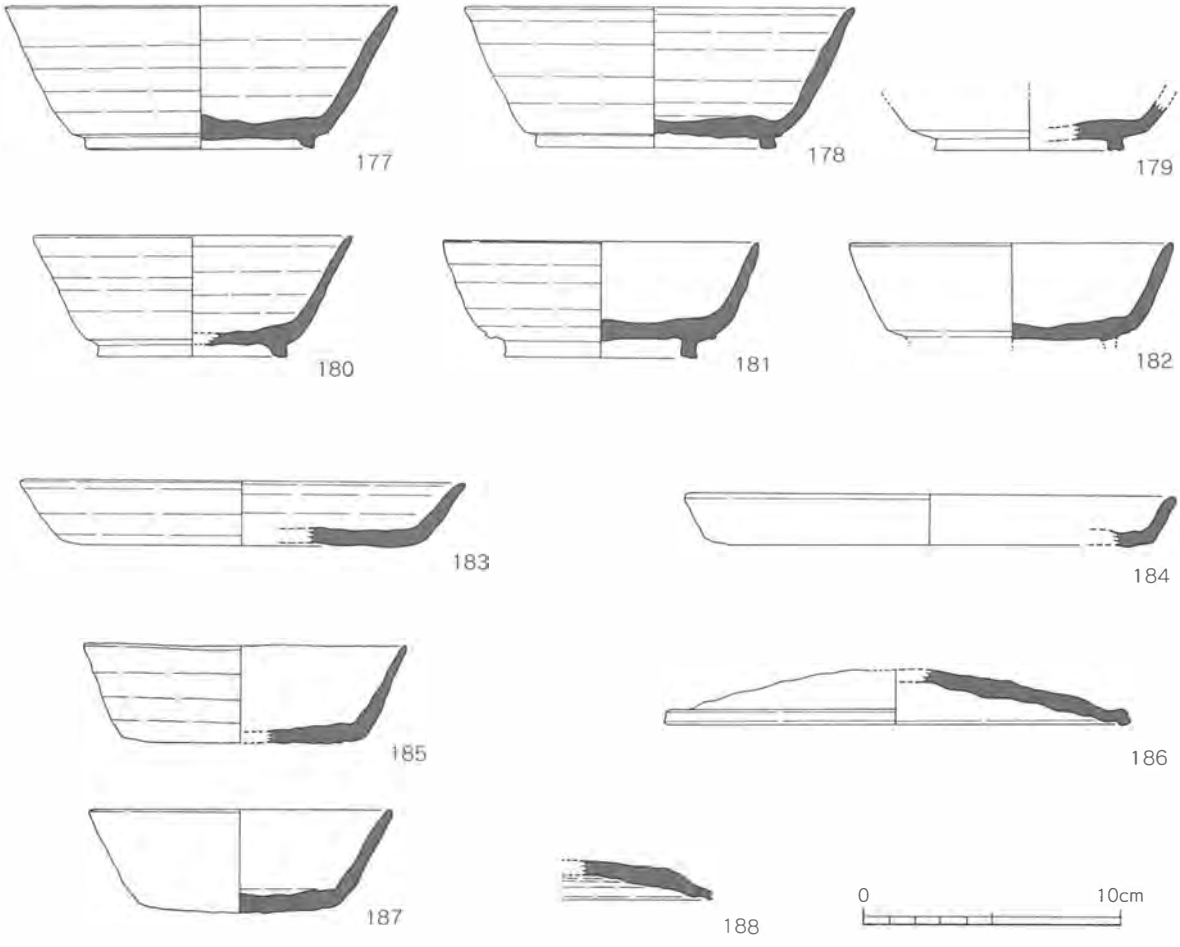
第84図　SK021出土遺物実測図



第85図　SK022出土遺物実測図(1)



第86図　SK022出土遺物実測図(2)



第87図　SK022出土遺物実測図(3)

SK034（第82図）

平面形は不整形を呈する。長辺約0.8ｍ、短辺約0.6ｍ、深さ約20cmで底面がややフラットな形状をもつ。出土遺物が無いため、遺構の作られた時代及び遺構の性格は不明である。

SK035（第89図）

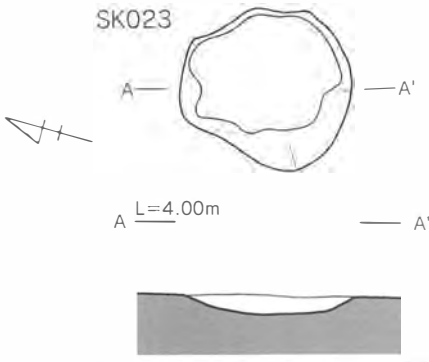
平面形は楕円形を呈する。長辺約1.5ｍ、短辺約1.4ｍ、深さ約5cmで底面はフラットな形状をもつ。出土遺物が無いため、遺構の作られた時代及び遺構の性格は不明である。

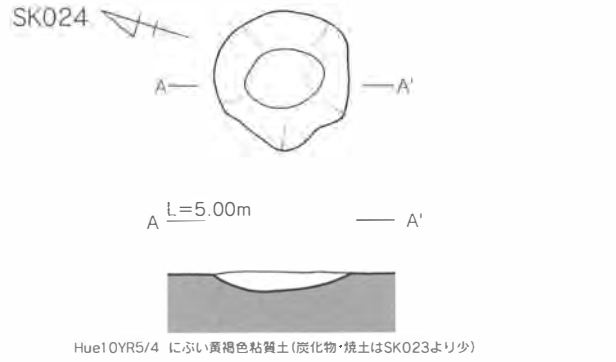
SK019～SK022出土の遺物について（第83・84・85・86・87図）

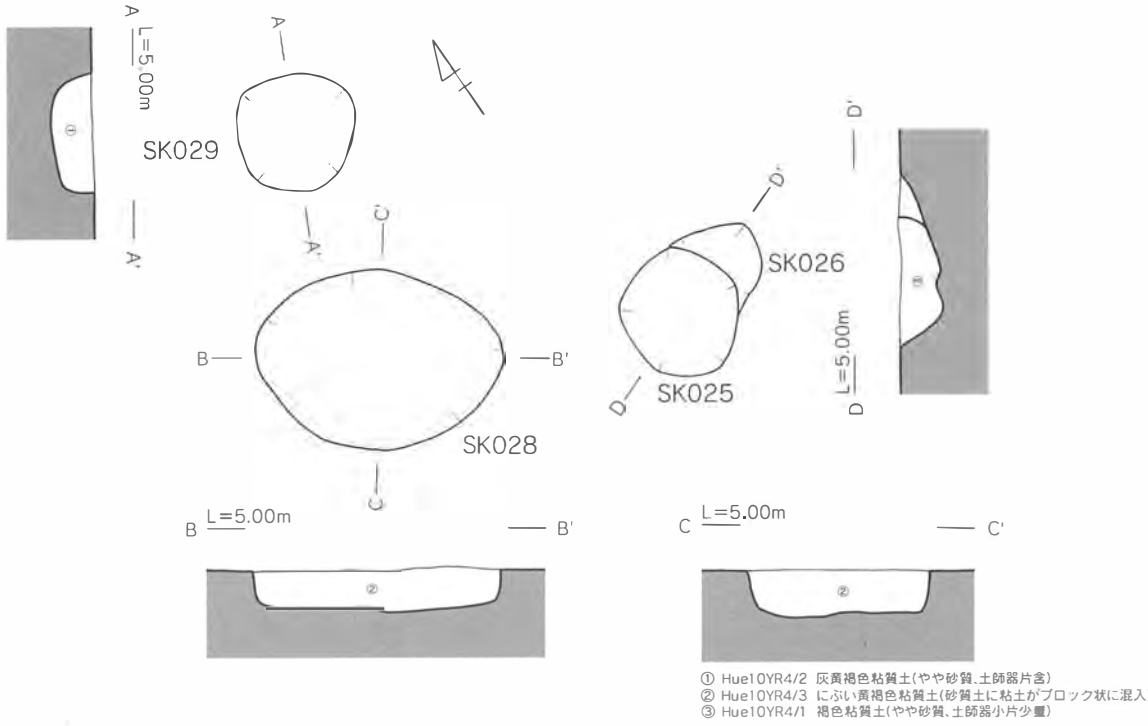
119は甕の口縁である。外面にハケ目による調整が認められる。古代の遺物である。120は壺の口縁である。外面にハケ目による調整が認められる。古代の遺物である。121は甕である。外面にハケ目による調整、内面には底部から口縁にむけて下から上に向かってのヘラ削りが認められる。古代の遺物である。122はやや小型の甕の口縁である。内外面ともなでによる調整が認められる。内側の頸部付近に指頭圧痕が認められる。古代の遺物である。123は甕の口縁である。外面はなでによる調整、内面はヘラ削りが認められる。外面の頸部付近に指頭圧痕が認められる。古代の遺物である。124は甕の口縁である。外面はハケ目による調整、内面はヘラ削り後になでによる調整が認められる。古代の遺物である。

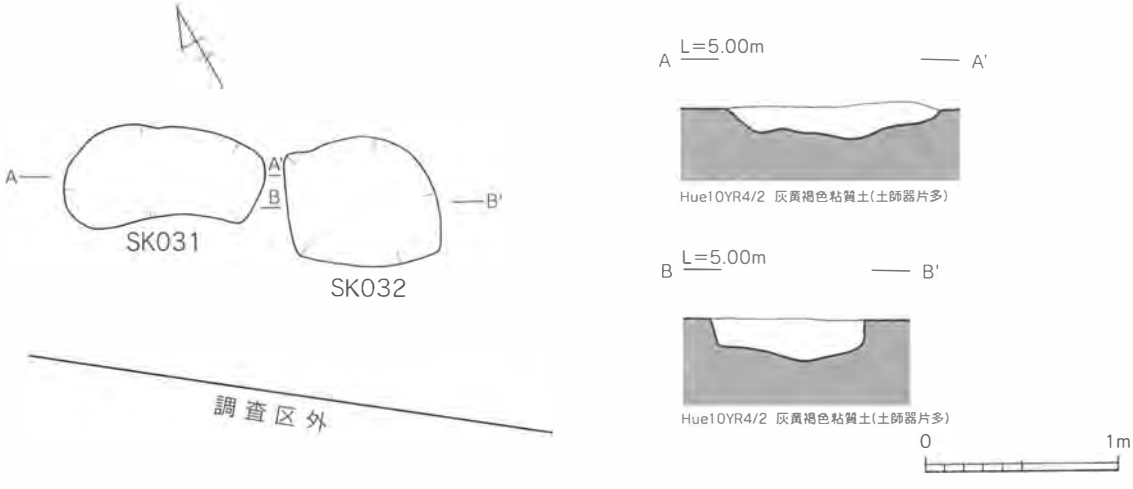
125は杯である。内外面ともなで調整が認められる。古代の遺物である。126は浅鉢である。内外面ともなで調整が認められる。古代の遺物である。127は浅鉢である。内外面ともなで調整が認められる。古代の遺物である。

128は杯である。内外面ともなで調整が認められる。古代の遺物である。129は杯蓋である。内外面ともなで調整が認められる。古代の遺物である。130は杯である。内外面ともなで調整が認められる。古代の遺物である。131は須恵器の杯蓋である。外面はヘラ削りとなでによる調整、内面はなでによる調整が認められる。古代の遺物である。132は須恵器の杯蓋である。外面はヘラ削りとなでによる調整、内面はなでによる調整が認められる。古代の遺物である。133は杯である。内外面ともなで調整が認められる。古代の遺物である。134は須恵器の貼り付け高台をもつ杯である。内外面ともなで調整、底部はヘラ切り後なでによる調整が認められる。古代の遺物である。135は須恵器の貼り付け高台をもつ杯である。内外面ともなで調整が認められる。古代の遺物である。136は甕である。外面にハケ目による調整、内面には底部から頸部にむけて下から上に向かってのヘラ削りが認められる。内面の口縁付近はハケ目による横方向の調整が認められる。古代の遺物である。137は甕の口縁である。外面はなでによる調整、内面はヘラ削りが認められる。内面の頸部付近に指頭圧痕が認められる。古代の遺物である。138は甕の口縁である。内外面ともハケ目による調整が認められる。外面の頸部付近に指頭圧痕が認められる。古代の遺物である。139は甕の口縁である。外面はハケ目による調整、内面は頸部付近から底部に向かっての下方向へのヘラ削りが認められる。内面の口縁付近は横方向のハケ目調整が認められる。古代の遺物である。140は須恵器の杯蓋である。外面はヘラ削りとなでによる調整、内面はなでによる調整が認められる。141は須恵器の杯蓋である。外面はヘラ削りとなでによる調整、内面はなでによる調整が認められる。142は甕の口縁である。外面はハケ目による調整、内面は底部から頸部に向かってのヘラ削りが認められる。内面の頸部付近では横方向のハケ目による調整が認められる。古代の遺物である。143は杯である。内外面ともなで調整が認められる。外面の底部にヘラ描きで文字が刻まれている。『稲庭』と読み取れる。古代の遺物である。144は甕の口縁である。外面はハケ目による調整、内面は底部から頸部に向かってのヘラ削りが認められる。内面の頸部付近では横方向のハケ目による調整が認められる。古代の遺物である。145は須恵器の貼り付け高台をもつ杯である。内外面ともなで調整、底部はヘラ切り後なでによる調整が認められる。古代の遺物である。146は須恵器の貼り付け高台をもつ杯である。内外面ともなで調整、底部はヘラ切り後なでによる調整が認められる。古代の遺物である。147は須恵器の貼り付け高台をもつ杯である。内外面ともなで調整が認められる。古代の遺物である。148は須恵器の貼り付け高台をもつ杯である。内外面ともなで調整、底部はヘラ切り後なでによる調整が認められる。古代の遺物である。149は甑である。外面はなでによる調整、内面は底部から頸部付近にむかってのヘラ削りによる調整が認められる。また把手には指頭圧痕が認められる。底部には穴が穿たれている。古代の遺物である。151は甕である。外面にハケ目による調整、内面には底部から口縁にむけて下から上に向かってのヘラ削りが認められる。古代の遺物である。152は甕である。外面、内面ともにヘラ状工具による調整後、なでにより仕上げられている。古代の遺物である。153は甕である。外面にハケ目による調整、内面には底部から口縁にむけて下から上に向かってのヘラ削りが認められる。古代の遺物である。154は甕である。外面にハケ目による調整、内面には底部から口縁にむけて下から上に向かってのヘラ削りが認められる。古代の遺物である。155は甕の口縁である。外面はハケ目による調整、内面はヘラ削り後になでによる調整が認められる。古代の遺物である。156は甕である。外面にハケ目による調整、内面には底部から口縁にむけて下から上に向かってのヘラ削りが認められる。古代の遺物である。157は甕の口縁である。外面はハケ目による調整、内面はヘラ削り後になでによる調整が認められる。古代の遺物である。158は甕の口縁である。外面はなでによる調整と頸部付近に指頭圧痕が認められる。内面は頸部付近に横方向からのハケ目調整が認められる。古代の遺物である。159は甕である。外面にハケ目による調整、内面には底部から口縁にむけて下から上に向かってのヘラ削りが認められる。古代の遺物である。160は甕である。内外面ともなでによる調整が認められる。内面の頸部付近に指頭圧痕が認められる。古代の遺物である。

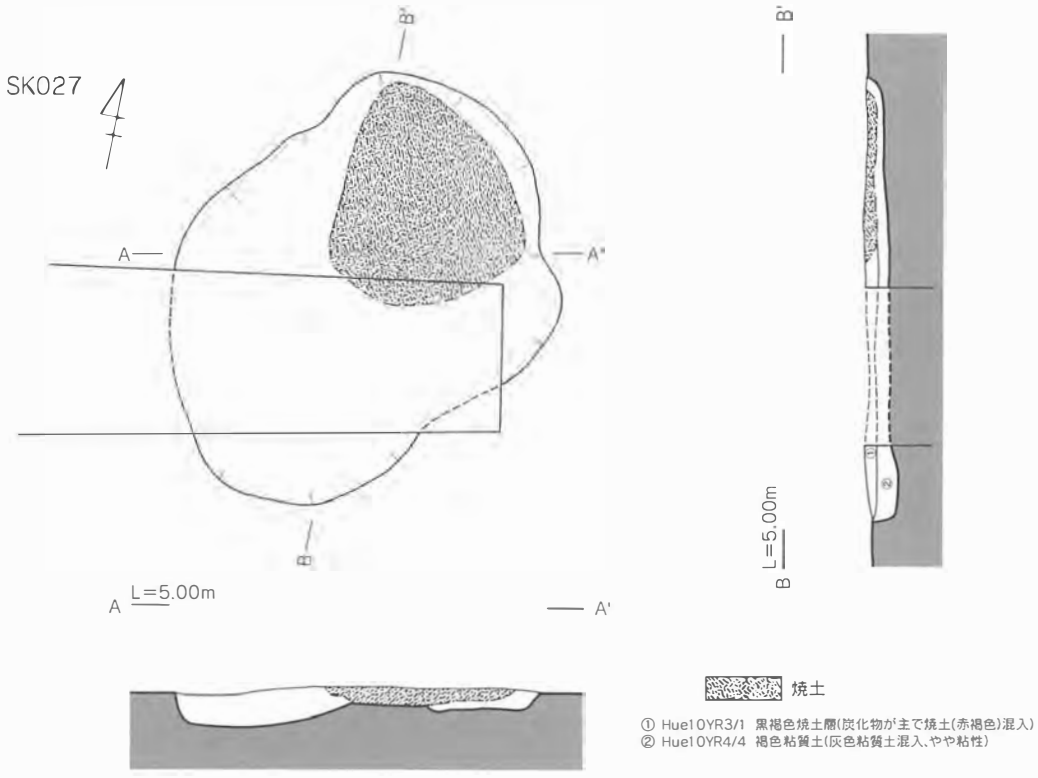


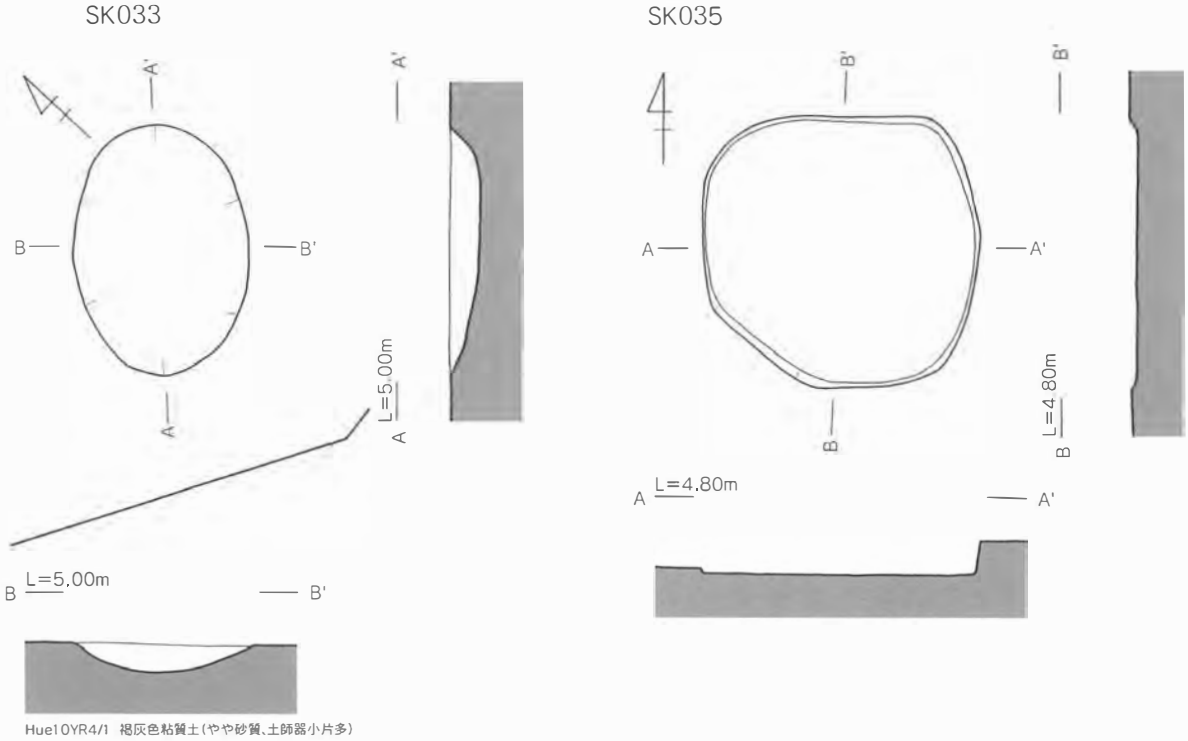






第88図　SK023・024・025・026・028・029・031・032実測図

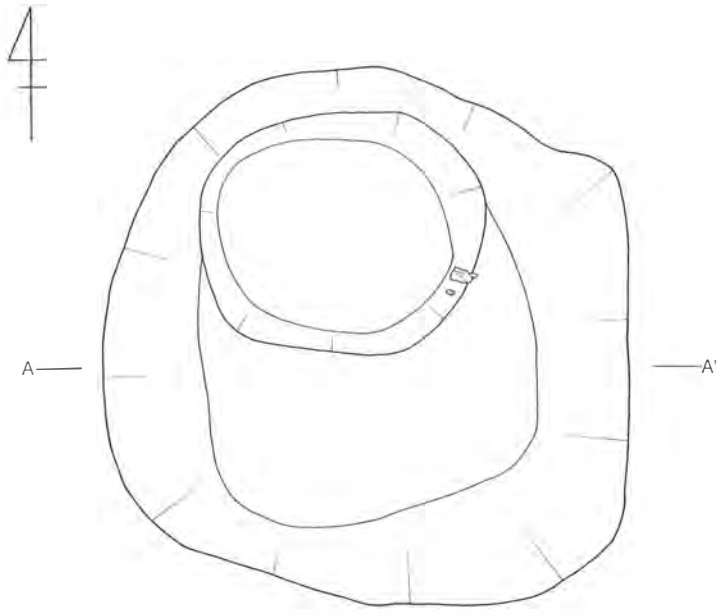


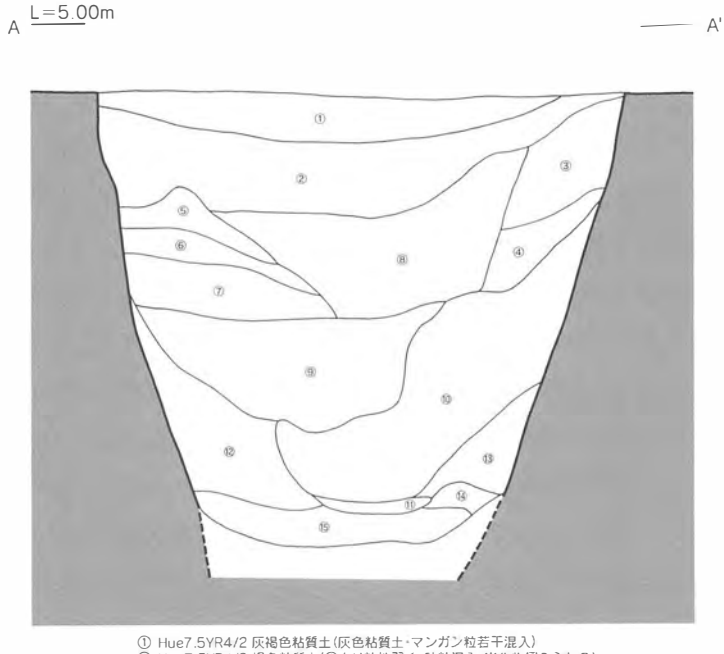


0　1m

第89図　SK027·033·035実測図

SE003





① Hue7.5YR4/2 灰褐色粘質土(灰色粘質土・マンガン粒若干混入)
② Hue7.5YR4/3 褐色粘質土(③より粘性弱く、砂粒混入、炭化物含みられる)
③ Hue7.5YR6/2 灰褐色粘質土
④ Hue7.5YR4/3 灰褐色粘質土(③より粘性あり)
⑤ Hue7.5YR4/2 灰褐色粘質土(⑧より粘性弱い)
⑥ Hue7.5YR6/2 灰褐色粘質土(炭化物含)
● Hue7.5YR6/1 褐灰色粘質土(⑨より若干粘性弱い)
⑧ Hue7.5YR4/2 灰褐色粘質土
⑨ Hue7.5YR6/1 褐灰色シルト層(④より粘性強く、粘土に近い)
⑩ Hue7.5YR5/3 にぶい褐色粘質土(灰色粘質土・砂粒・地山から成る)
⑪ Hue7.5YR6/6 橙色砂質土(やや粘性)
⑫ Hue10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土(灰色砂質土が一部スジ状に混入)
⑬ Hue10YR4/4 褐色粘質土
⑭ Hue10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土(砂粒多)
⑮ Hue10BG6/1 青灰色泥炭層(植物遺体混入)

0　1m

第90図　SE003実測図

161は浅鉢である。内外面ともなで調整が認められる。古代の遺物である。162は杯蓋である。内外面ともなで調整が認められる。古代の遺物である。163は杯蓋である。内外面ともなで調整が認められる。古代の遺物である。164は浅鉢である。内外面ともなで調整が認められる。古代の遺物である。165は甕の底部である。内外面ともなで調整が認められる。古代の遺物である。

166は無頸壺である。内外面ともなで調整が認められる。古代の遺物である。167は須恵器の杯蓋である。外面はヘラ削りとなでによる調整、内面はなでによる調整が認められる。古代の遺物である。168は宝珠摘みを持つ杯蓋である。外面はヘラ削り後になで調整、内面はなでによる調整が認められる。古代の遺物である。169は杯蓋である。外面はヘラ削り後になで調整、内面はなでによる調整が認められる。古代の遺物である。170は宝珠摘みを持つ杯蓋である。外面はヘラ削り後になで調整、内面はなでによる調整が認められる。古代の遺物である。171は杯蓋である。外面はヘラ削り後になで調整、内面はなでによる調整が認められる。古代の遺物である。172は杯蓋である。外面はヘラ削り後になで調整、内面はなでによる調整が認められる。古代の遺物である。173は杯蓋である。外面はヘラ削り後になで調整、内面はなでによる調整が認められる。古代の遺物である。174はやや深めの杯である。内外面ともなで調整が認められる。古代の遺物である。175は杯である。内外面ともなでによる調整が認められる。底部は回転ヘラ切り後になでによる調整が認められる。古代の遺物である。176は杯である。内外面ともなでによる調整が認められる。底部は回転ヘラ切り後になでによる調整が認められる。古代の遺物である。177は須恵器の貼り付け高台をもつ杯である。内外面ともなで調整、底部はヘラ切り後なでによる調整が認められる。古代の遺物である。

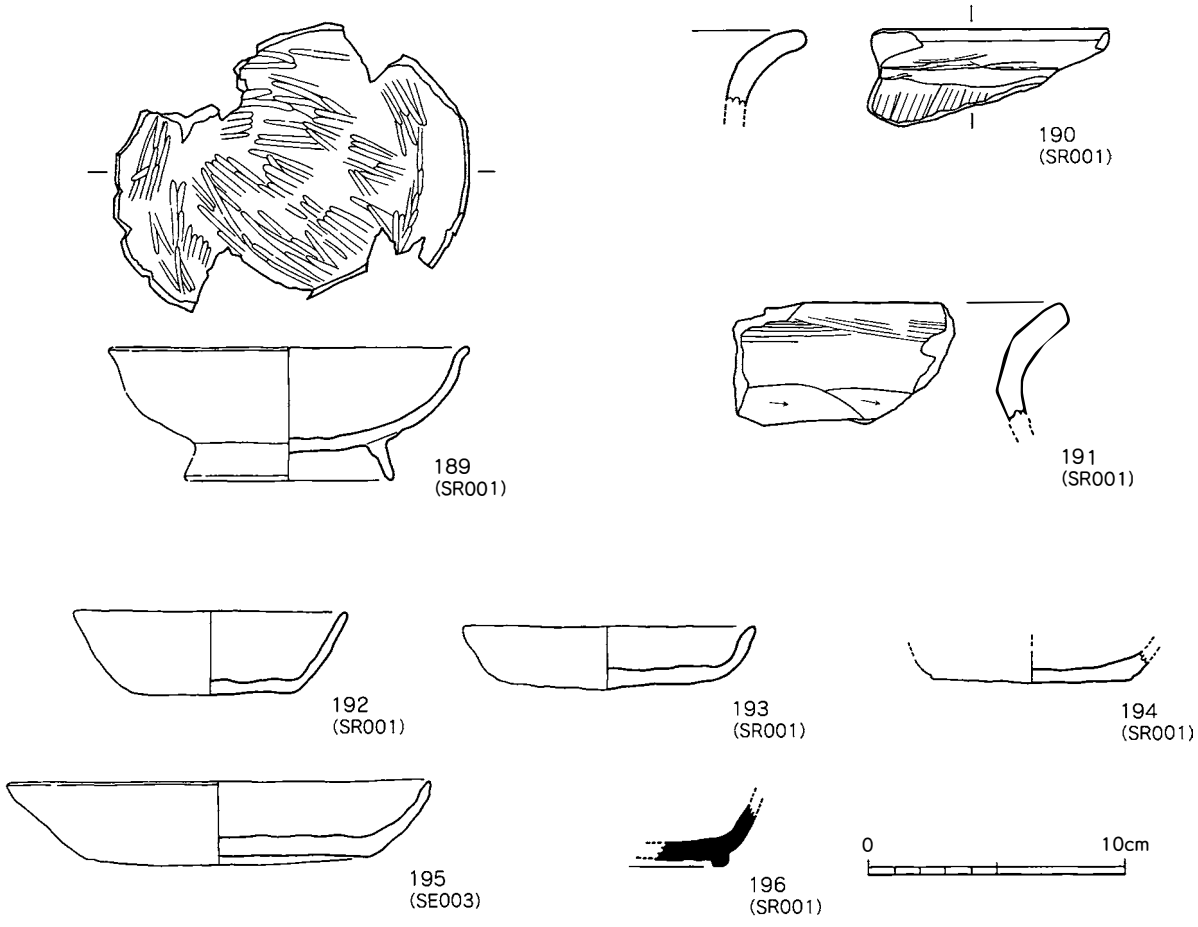
178は須恵器の貼り付け高台をもつ杯である。内外面ともなで調整、底部はヘラ切り後なでによる調整が認められる。古代の遺物である。179は須恵器の杯である。内外面ともなで調整、底部はヘラ切り後なでによる調整が認められる。古代の遺物である。180は須恵器の貼り付け高台をもつ杯である。内外面ともなで調整、底部はヘラ切り後なでによる調整が認められる。古代の遺物である。181は須恵器の貼り付け高台をもつ杯である。内外面ともなで調整、底部はヘラ切り後なでによる調整が認められる。古代の遺物である。182は須恵器の貼り付け高台をもつ杯である。内外面ともなで調整、底部はヘラ切り後なでによる調整が認められる。古代の遺物である。183はやや浅めの須恵器の杯である。内外面ともなで調整、底部はヘラ切り後なでによる調整が認められる。古代の遺物である。184はやや浅めの須恵器の杯である。内外面ともなで調整、底部はヘラ切り後なでによる調整が認められる。古代の遺物である。185はやや深めの須恵器の杯である。内外面ともなで調整、底部はヘラ切り後なでによる調整が認められる。古代の遺物である。186は須恵器の杯蓋である。外面はヘラ削りとなでによる調整、内面はなでによる調整が認められる。古代の遺物である。187はやや深めの須恵器の杯である。内外面ともなで調整、底部はヘラ切り後なでによる調整が認められる。古代の遺物である。188は須恵器の杯蓋である。外面はヘラ削りとなでによる調整、内面はなでによる調整が認められる。古代の遺物である。

5　井戸（SE）

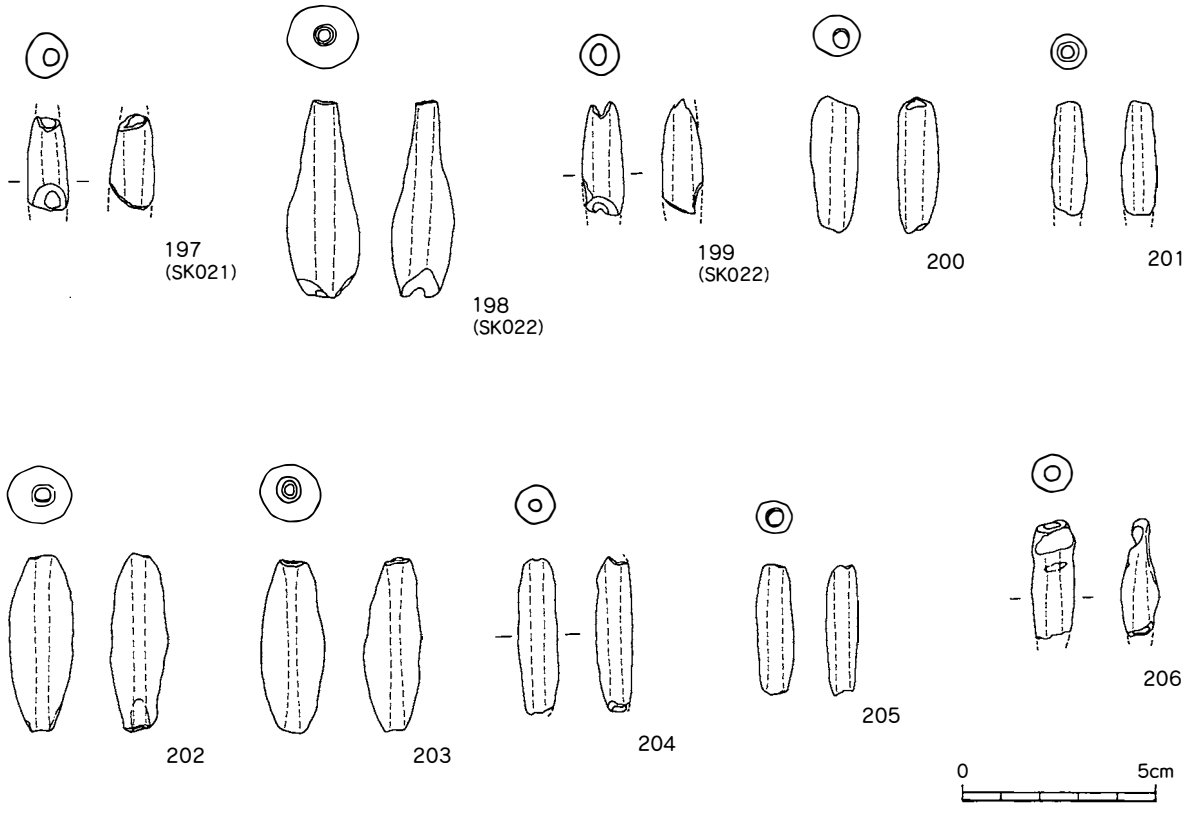
SE003（第90図）

素掘りの井戸である。平面形の上部はやや歪ながら、一辺約２ｍを測り隅丸方形を呈する。２段彫掘りになっており、地表面から1.5ｍほどの深さから更に約0.9ｍの径の大きさで円形に掘りこまれている。

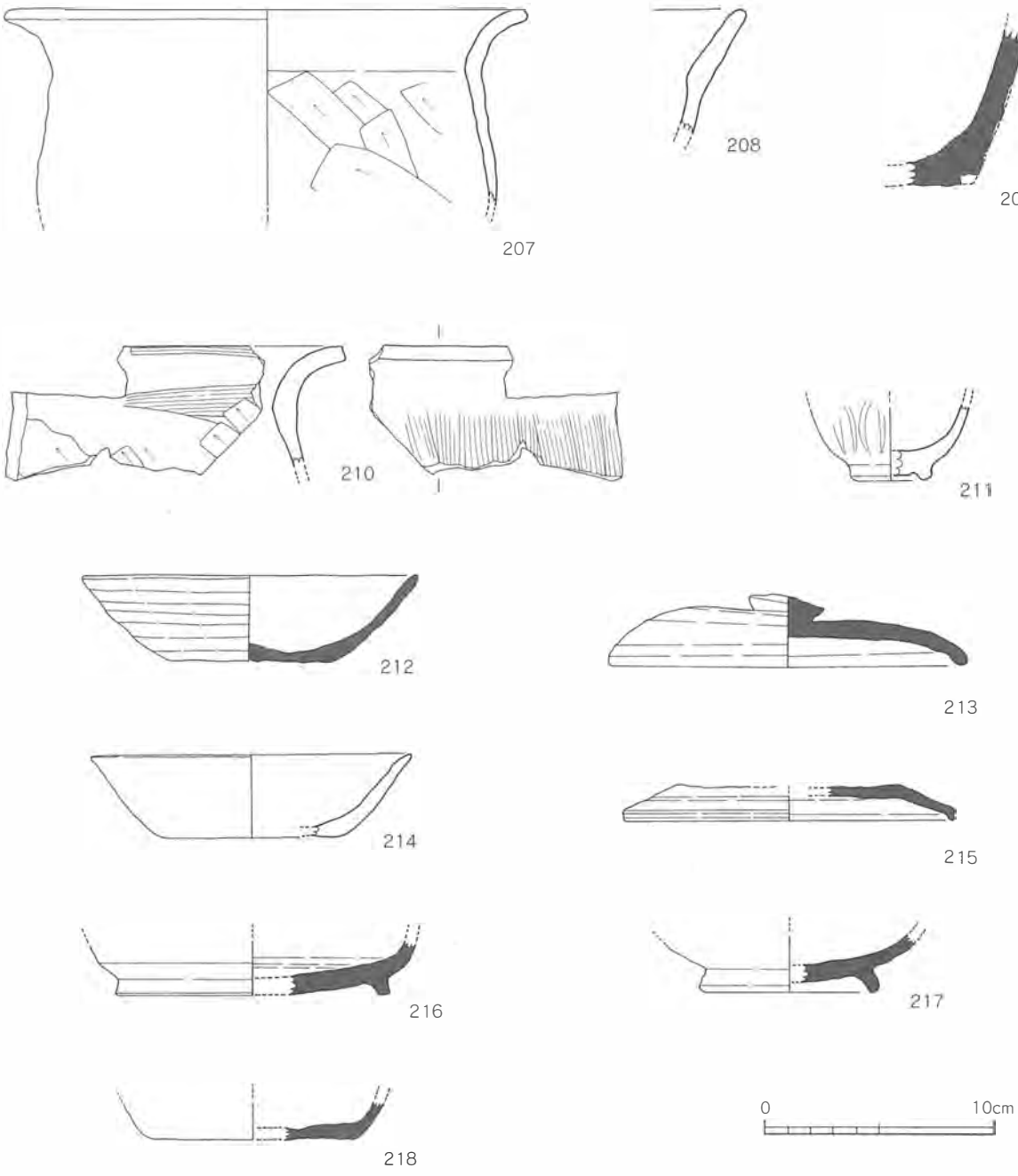
SD025～SD030出土の遺物について



第91図　SE003、SR001出土遺物実測図



第92図　SK021･022一括出土遺物実測図



第93図　Ⅶ区　一括出土遺物実測図

SE003・SR001・SK021・SK022及びⅦ区一括出土の遺物について（図91・92・93）

189は内黒土器と呼ばれる高台付きの杯である。外面はなでによる調整、内面は丁寧な磨きが認められる。高台は貼り付けで作られている。古代末頃の遺物である。190は甕である。外面はヘラ当て痕が認められる。頸部から下はハケ目による調整が認められる。内面はなでによる調整が認められる。古代の遺物である。191は甕である。外面はハケ目による調整後になでによる調整が認められる。内面はヘラ削りによる調整が認められる。古代の遺物である。192は杯である。内外面ともなでによる調整が認められる。底部は回転ヘラ切りが認められる。古代の遺物である。193は杯である。内外面ともなでによる調整が認められる。底部は回転ヘラ切りが認められる。古代の遺物である。194は杯である。内外面ともなでによる調整が認められる。底部は回転ヘラ切りが認められる。古代の遺物である。

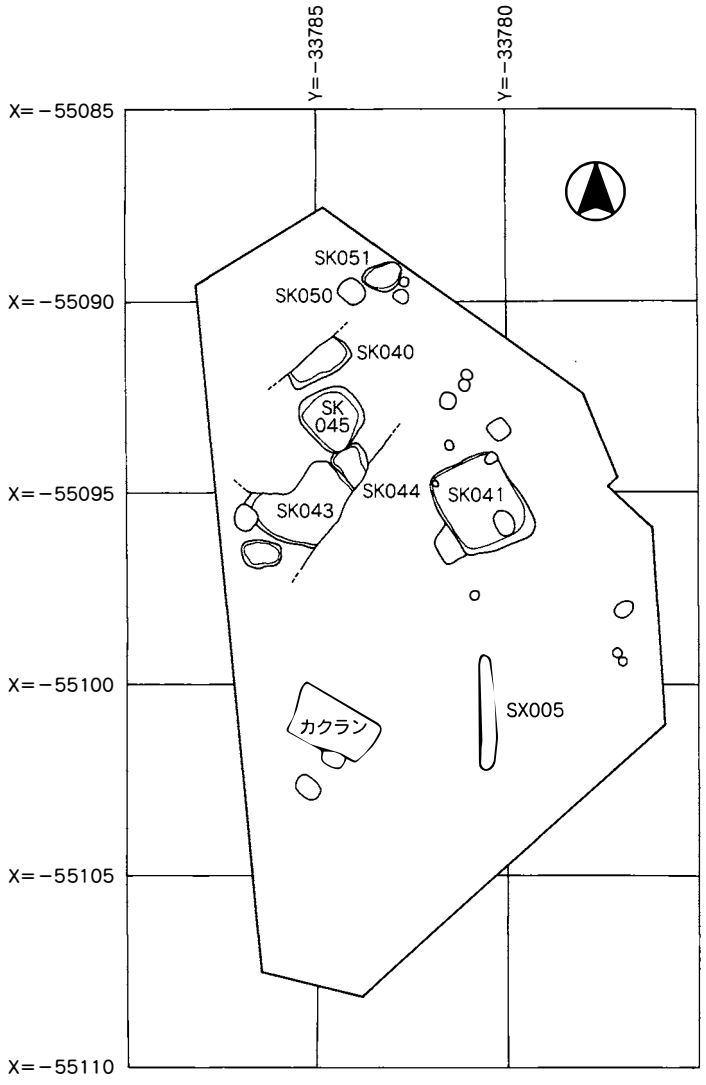
195は杯である。内外面ともなでによる調整が認められる。底部は回転ヘラ切りが認められる。古代の遺物である。196は須恵器の貼り付け高台をもつ杯である。内外面ともなで調整が認められる。古代の遺物である。197から206にかけては、土錘である。漁労具であり、本遺跡のなかで、SK021・022から出土していることは注目される。207は甕である。外面にハケ目による調整、内面には底部から口縁にむけて下から上に向かってのヘラ削りが認められる。古代の遺物である。208は甕である。外面はなでによる調整、外面はヘラ削り後なで調整が認められる。古代の遺物である。209は須恵器の甕の底部である。210は甕である。外面にハケ目による調整、内面には底部から口縁にむけて下から上に向かってのヘラ削りが認められる。古代の遺物である。　外面はハケ目調整後なで調整、内面はヘラ削りによる調整が認められる。古代の遺物である。211は青磁の小碗である。外面にヘラによる蓮華文が認められる。全体に釉が施されている。鎌倉時代頃の遺物である。212は須恵器の杯である。内外面ともなで調整、底部はヘラ切り後なでによる調整が認められる。古代の遺物である。213宝珠摘みを持つ須恵器の杯蓋である。外面はヘラ削り後になで調整、内面はなでによる調整が認められる。古代の遺物である。214は杯である。内外面ともなでによる調整が認められる。底部は回転ヘラ切りが認められる。古代の遺物である。215は須恵器の杯蓋である。外面はヘラ削り後になで調整、内面はなでによる調整が認められる。古代の遺物である。216は須恵器の貼り付け高台をもつ杯である。内外面ともなで調整、底部はヘラ切り後なでによる調整が認められる。古代の遺物である。217は須恵器の貼り付け高台をもつ杯である。内外面ともなで調整、底部はヘラ切り後なでによる調整が認められる。古代の遺物である。218は須恵器の杯である。内外面ともなで調整、底部はヘラ切り後なでによる調整が認められる。古代の遺物である。

第６節　Ⅷ区の遺構とそれに伴う遺物

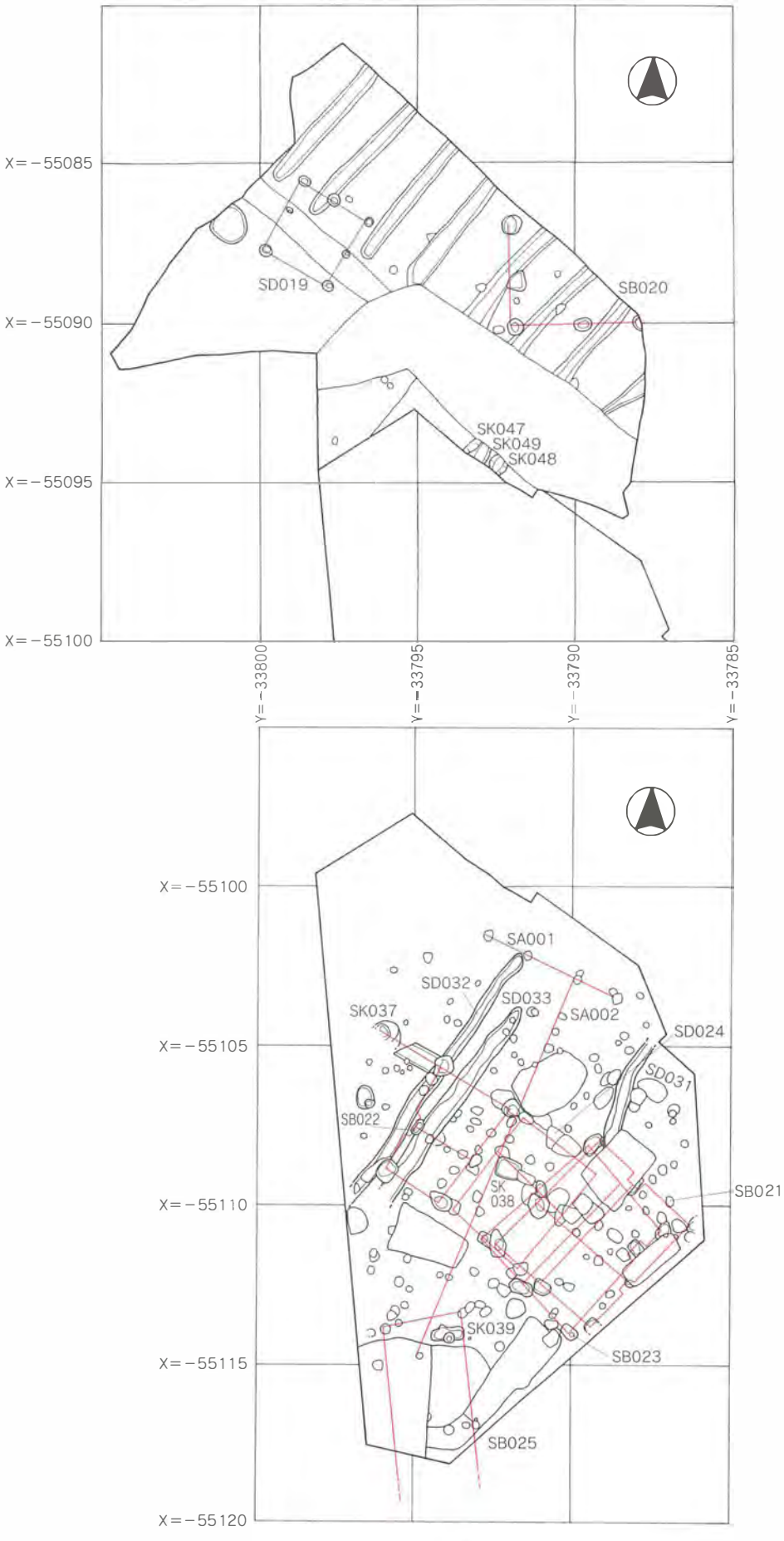
Ⅷ区について

この調査区では、古代の土壙群と中世の溝状遺構と掘立柱建物群に分けられる。古代では土壙群５基と不明遺構１基を検出した。中世では溝状遺構３条と掘立柱建物７棟、土壙１基を検出した。

本調査区では、近現代の撹乱により、遺構の検出が困難であった。当初設定された調査区の北側においても、調査開始時には着手出来ず、拡張して、ようやく調査を実施するに至った。この拡張区では、掘立柱建物を２棟検出出来たが、拡張区南側においては、撹乱により、遺構は僅かに、土壙３基を確認するに留まった。また、調査区全体が近現代に掘られた溝によって削平されており、遺物が遺構に伴わない事が多く、遺構の時期決定において、困難であった。



第94図　Ⅷ区　全体遺構配置図(古代の面)



第95図　Ⅷ区　全体遺構配置図(拡張区・中世の面)

1　掘立柱建物（SB）

共伴遺物が少なく、時期確定は困難であった。一部の遺構では、古代の土器が柱穴から検出されたが、柱穴が掘られた時代に混入した可能性が高く、よって僅かな資料ながら、中世の陶磁器が柱穴に残されていた事から、これらに掘立柱建物群は中世に作られたと考えられる。

SB019（第96図）

長軸約2.5ｍ、短軸約2.3ｍの、2間×2間の7本柱の側柱構造の掘立柱建物遺構である。柱穴の深さは、深いもので約30cm、浅いもので約20cmである。柱の内側は特に硬化していない。

SB020（第96図）

遺構の西側は調査区外であったため、柱穴の続きが確認出来なかった。残存する長軸約3.8ｍ、短軸約3.2ｍの、2間×2間の6本柱の側柱構造の掘立柱建物遺構である。柱穴の深さは、深いもので約50cm、浅いもので約20cmである。柱の内側は特に硬化していない。

SB021（第97図）

長軸約4.8ｍ、短軸約4ｍの、2間×2間の9本柱の総柱構造の掘立柱建物遺構である。柱穴の深さは、深いもので約80cm、浅いもので約20cmである。柱の内側は特に硬化していない。

SB022（第98図）

長軸約4.8ｍ、短軸約3.8ｍの、2間×2間の9本柱（現存は7本）の総柱構造の掘立柱建物遺構である。柱穴の深さは、深いもので約95cm、浅いもので約20cmである。柱の内側は特に硬化していない。

SB023（第99図）

長軸約4.3ｍ、短軸約3.5ｍの、2間×2間の8本柱の総柱構造の掘立柱建物遺構である。柱穴の深さは、深いもので約60cm、浅いもので約20cmである。柱の内側は特に硬化していない。

この遺構からは1点遺物が出土している。

219は青磁の碗である。外面に蓮華文があり、全体に釉が施されている。中世の遺物である。

SB024（第100図）

長軸約4ｍ、短軸約3ｍの、1間×2間の7本柱の側柱構造の掘立柱建物遺構である。内部に1本支え柱穴跡が確認されている。柱穴の深さは、深いもので約60cm、浅いもので約20cmである。柱の内側は特に硬化していない。

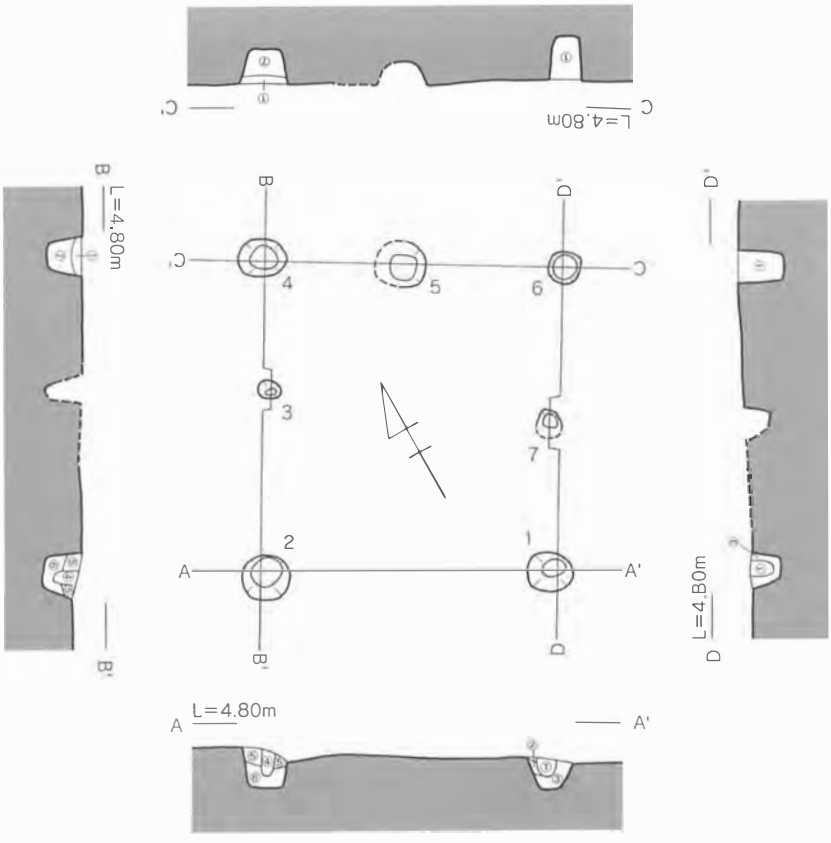
この遺構からは1点遺物が出土している。

220は須恵器の貼り付け高台をもつ杯である。内外面ともなでによる調整、底部はヘラ切り後なでによる調整が認められる。古代の遺物である。

SB025（第101図）

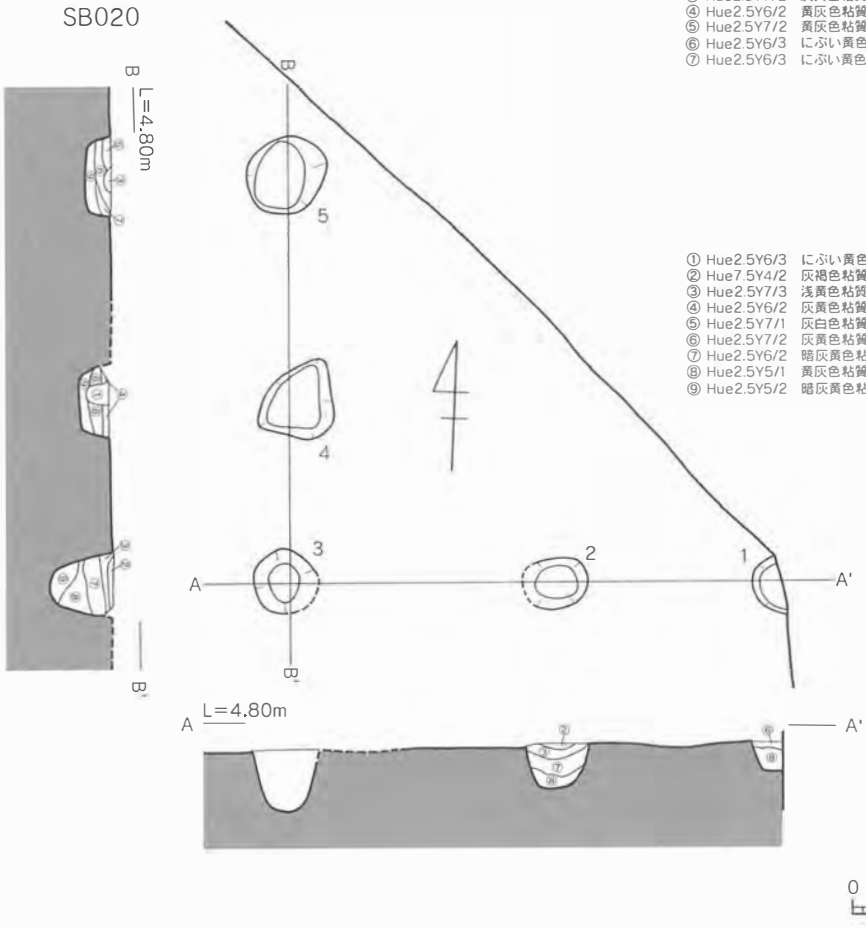
かなり歪である。長軸約6.3ｍ、短軸約2.5ｍの、1間×2間の5本柱の側柱構造の掘立柱建物遺構である。柱穴の深さは、深いもので約50cm、浅いもので約20cmである。柱の内側は特に硬化していない。

SB019



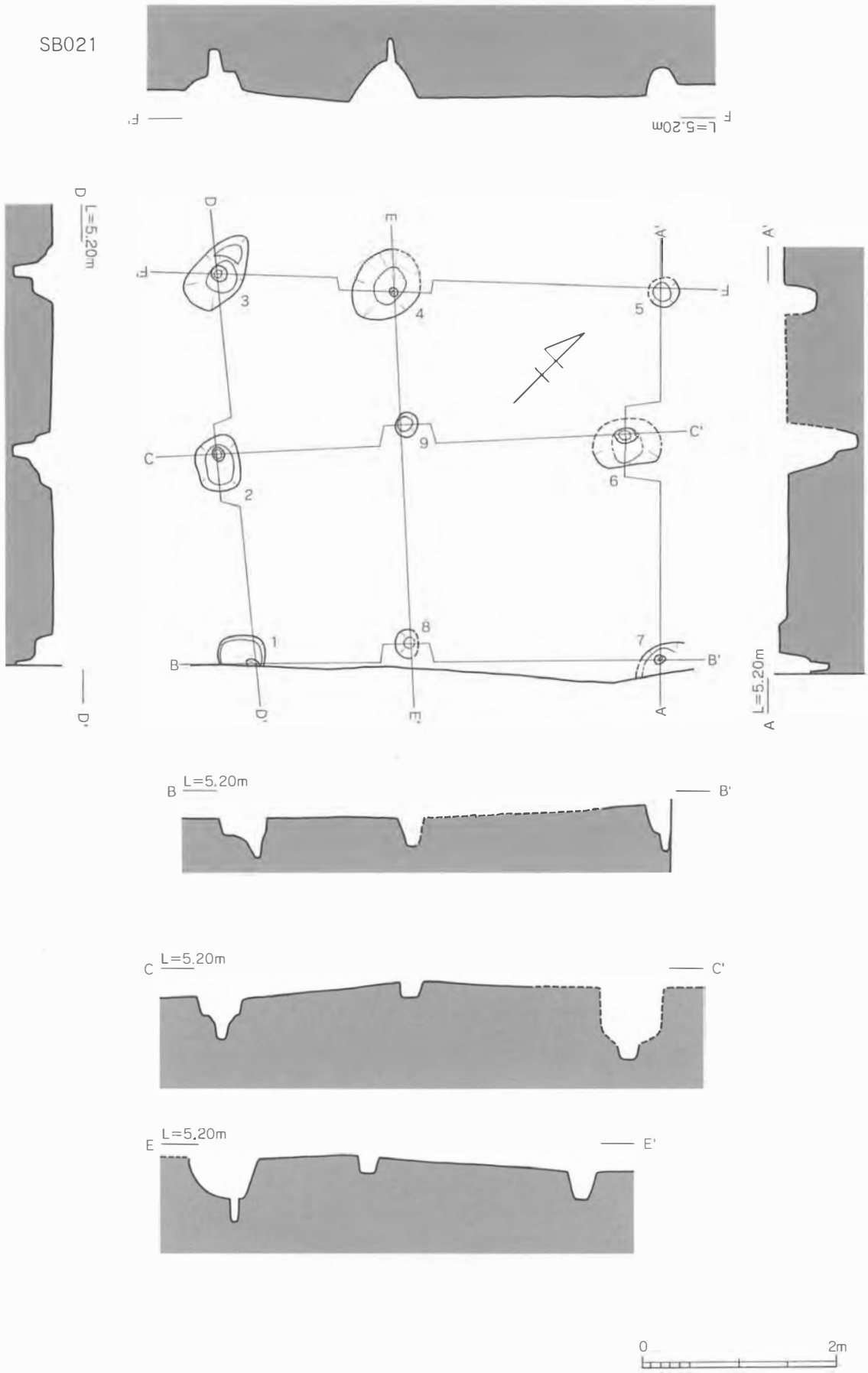
① Hue2.5Y7/3　浅黄色粘質土(やや砂質)
② Hue5B4/1　暗青灰色粘質土
③ Hue2.5Y7/2　灰黄色粘質土(やや砂質)
④ Hue2.5Y6/2　黄灰色粘質土(やや砂質、炭化物・土師片少量)
⑤ Hue2.5Y7/2　黄灰色粘質土(やや砂質、炭化物・土師片少量)
⑥ Hue2.5Y6/3　にぶい黄色粘質土(④・⑤より砂質強い)
⑦ Hue2.5Y6/3　にぶい黄色粘質土(やや砂質)

SB020

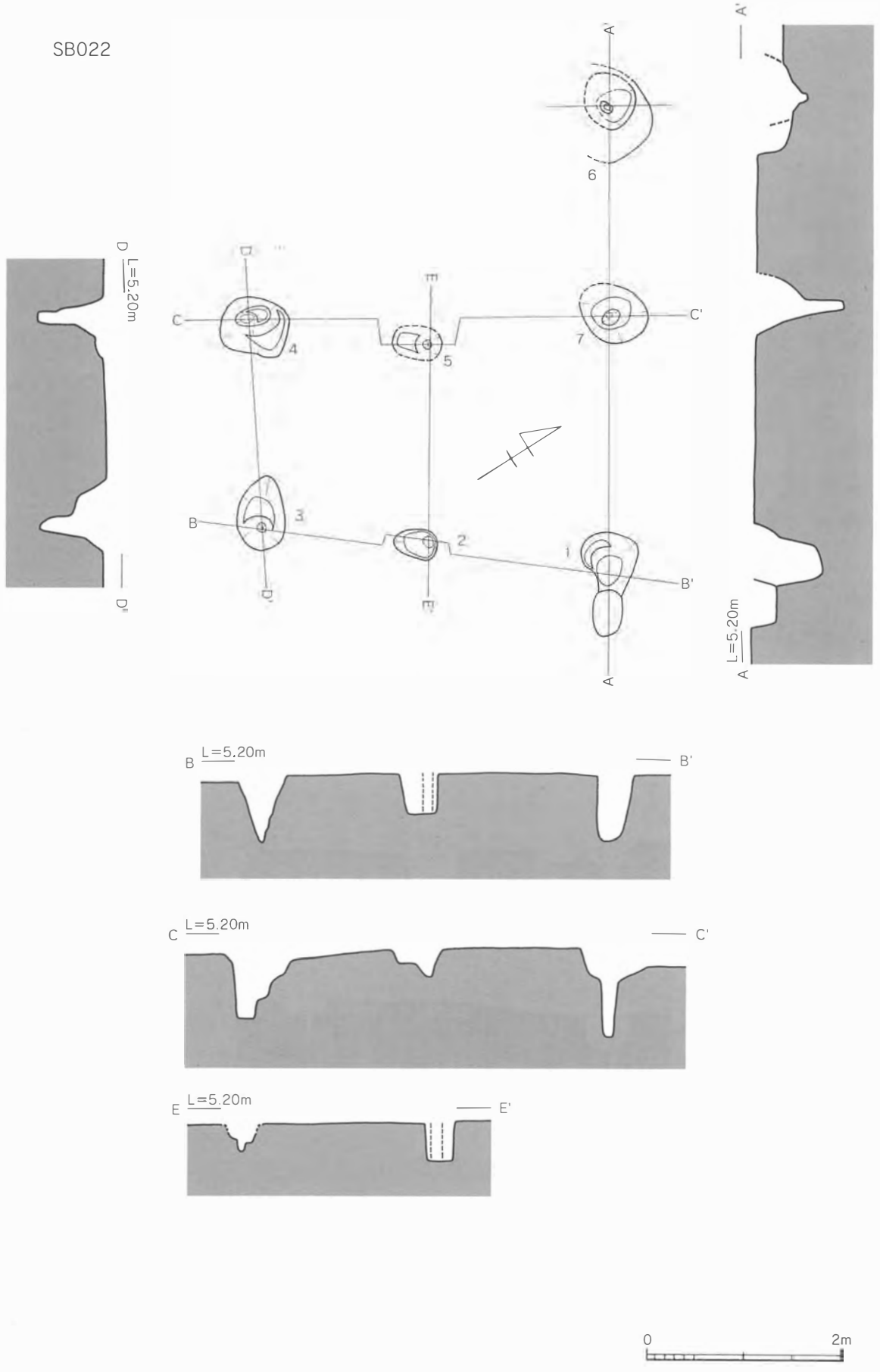


① Hue2.5Y6/3　にぶい黄色粘質土(やや砂質、炭化物多)
② Hue7.5Y4/2　灰褐色粘質土(やや砂質、炭化物・土師片少量)
③ Hue2.5Y7/3　浅黄色粘質土(やや砂質)
④ Hue2.5Y6/2　灰黄色粘質土(やや砂質、炭化物・土師片少量)
⑤ Hue2.5Y7/1　灰白色粘質土(やや砂質)
⑥ Hue2.5Y7/2　灰黄色粘質土(やや砂質、炭化物・土師片少量)
⑦ Hue2.5Y6/2　暗灰黄色粘質土(やや砂質、炭化物少量)
⑧ Hue2.5Y5/1　黄灰色粘質土(やや砂質)
⑨ Hue2.5Y5/2　暗灰黄色粘質土(やや砂質、炭化物少量)

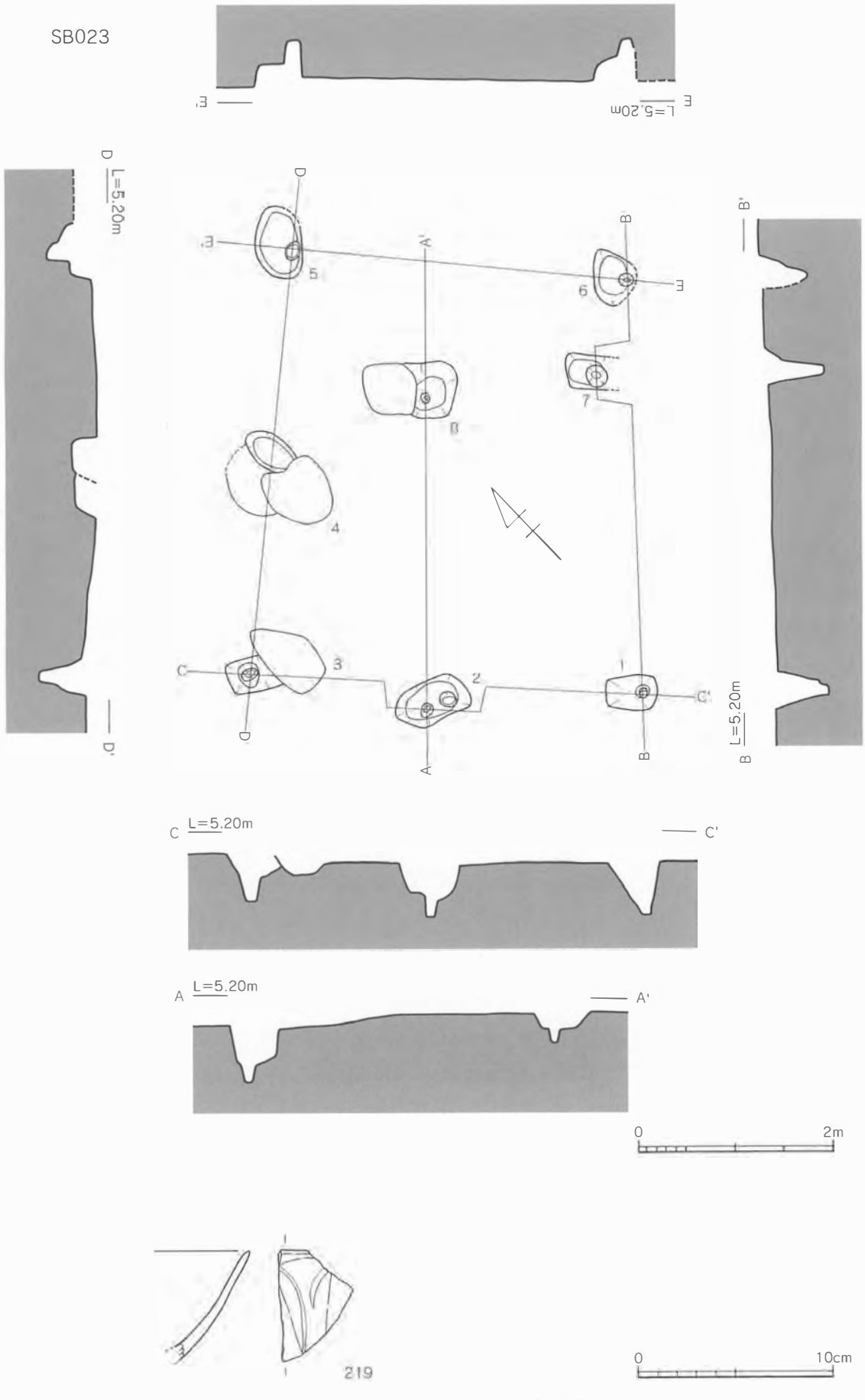
第96図　SB019・020実測図



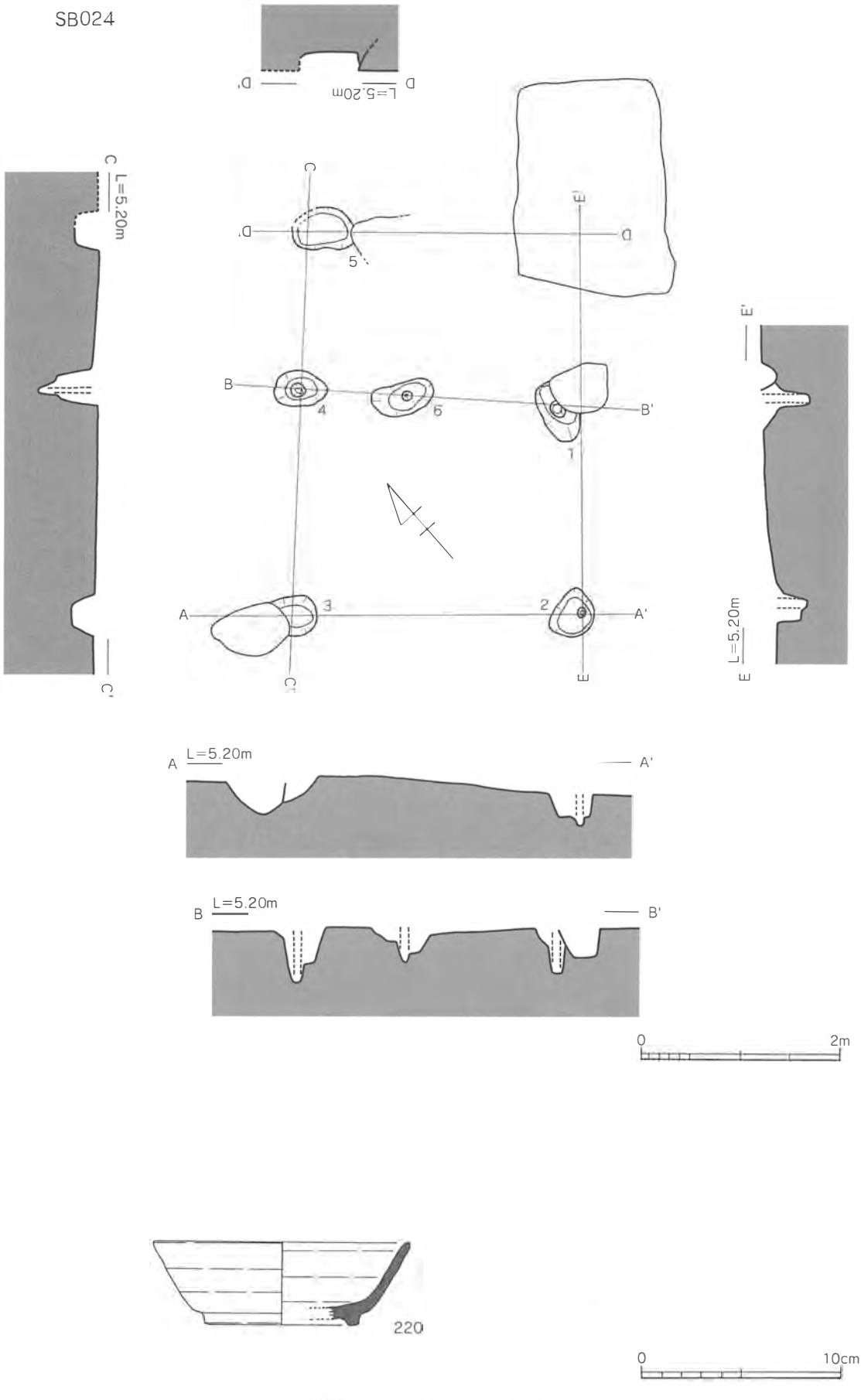
第97図　SB021実測図



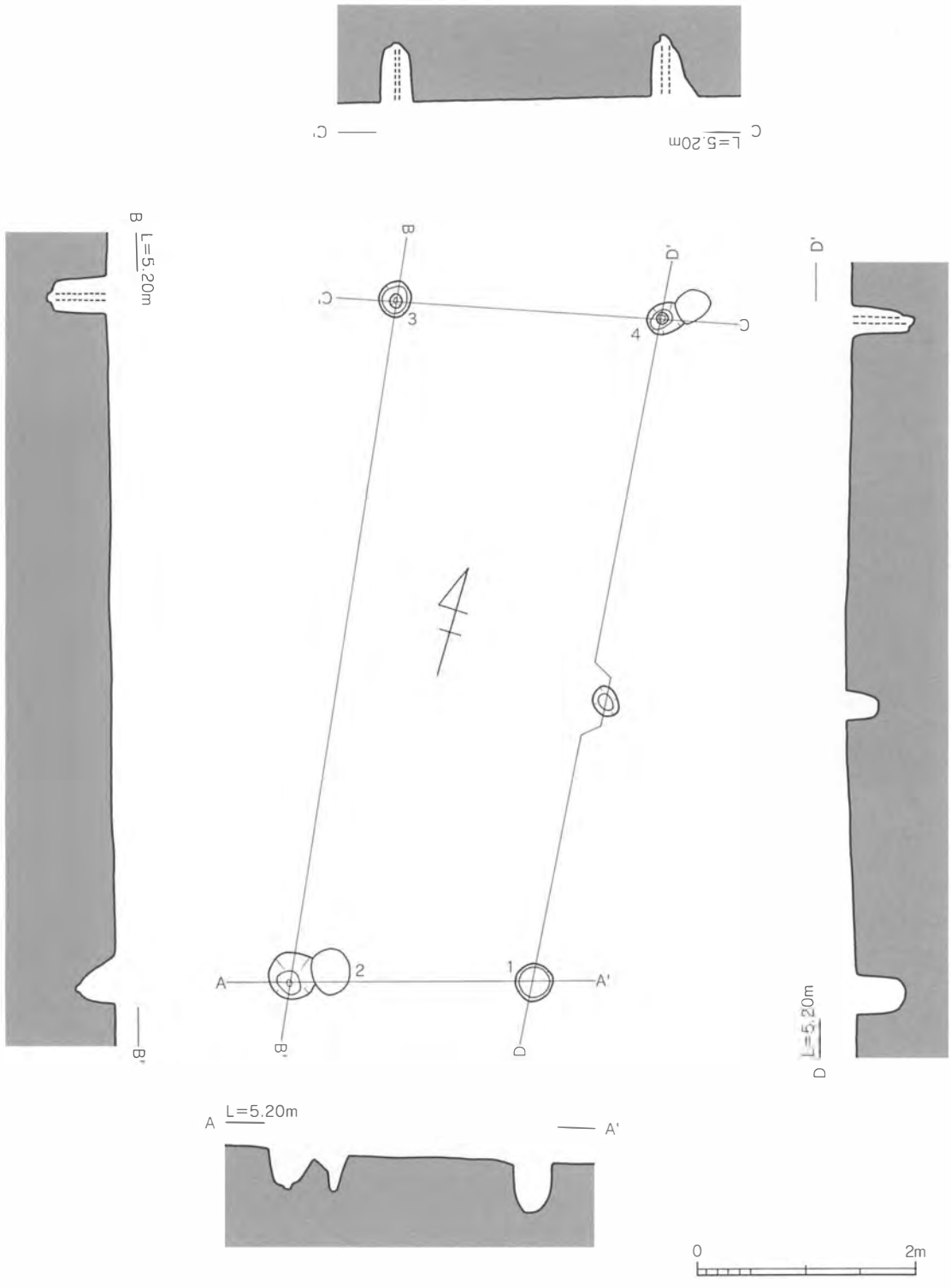
第98図　SB022実測図



第99図　SB023及び出土遺物実測図



第100図　SB024及び出土遺物実測図



第101図　SB025実測図

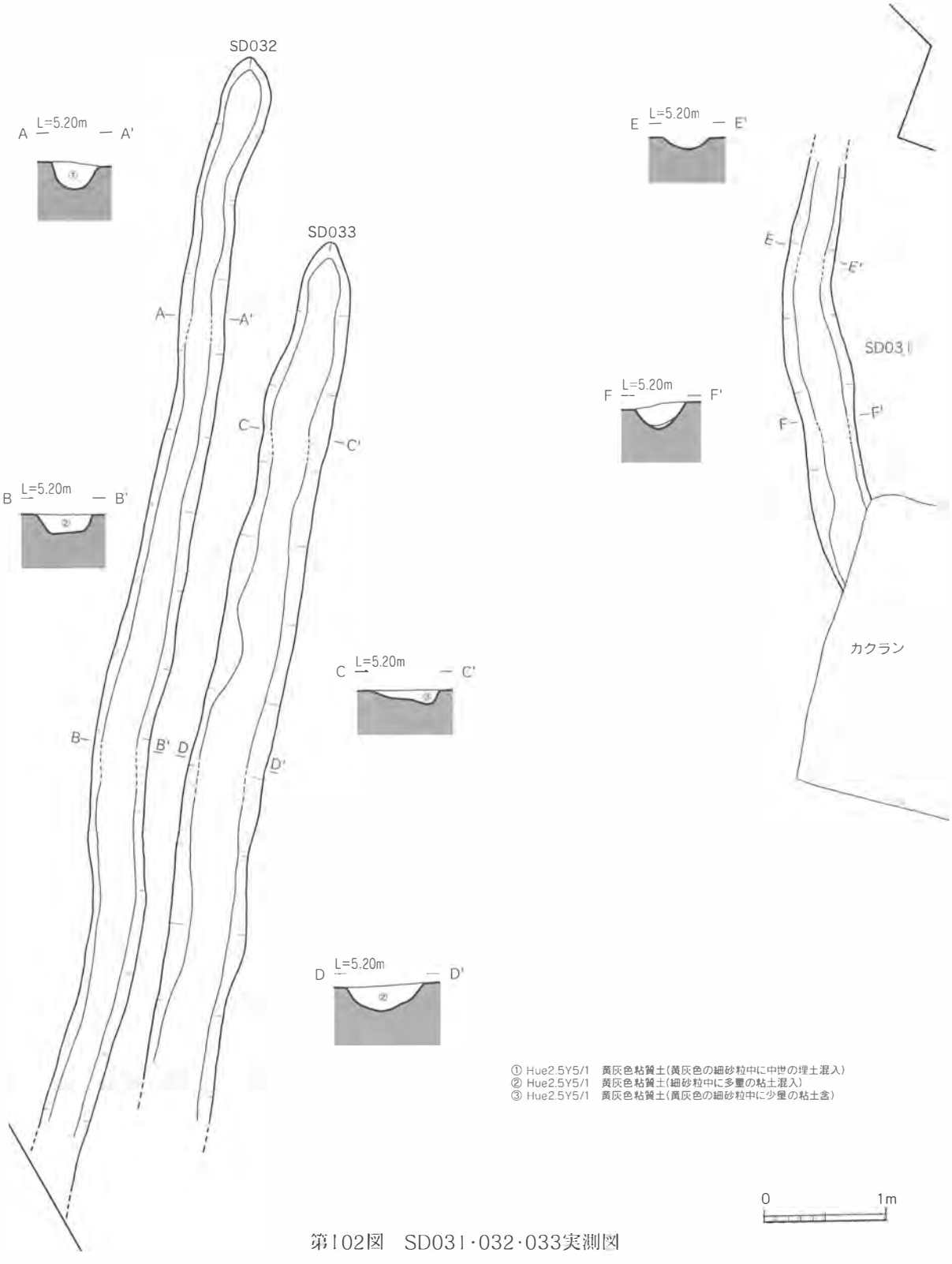
2　溝状遺構（SD）

SD031（第102図）

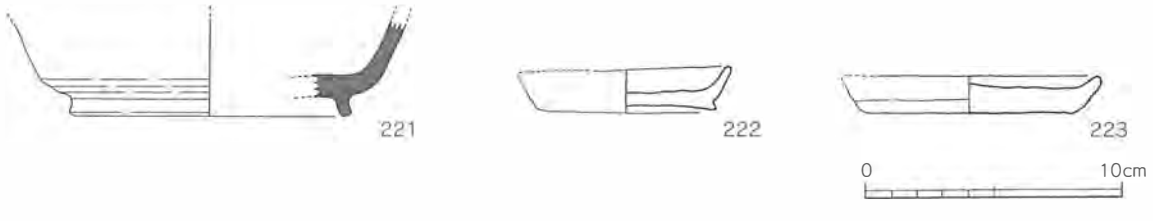
幅約0.5ｍ、深さ約20cm、北から南方向に約３ｍ余り走る溝状遺構である。出土遺物が無いため作られた時期は不明である。

SD032（第102図）

幅約0.5ｍ、深さ約20cm、北から南方向に約９ｍ余り走る溝状遺構である。出土遺物から作られた時期は中世と考えられる。



第102図　SD031・032・033実測図



第103図　SD032出土遺物実測図

SD032からは３点遺物が出土している。（第103図）

221は須恵器の貼り付け高台をもつ杯である。内外面ともなでによる調整、底部はヘラ切り後なでによる調整が認められる。古代の遺物である。この遺構が作られた時代に混入したものと考えられる。222は杯である。内外面ともなでによる調整が認められる。底部は回転糸きりが認められる。中世の遺物である。223は杯である。内外面ともなでによる調整が認められる。底部は回転糸きりが認められる。中世の遺物である。

SD033（第102図）

幅約0.7ｍ、深さ約20cm、北から南方向に約７ｍ余り走る溝状遺構である。出土遺物は無いが、埋土の状況からSD032と作られた時期は変わらないと考えられる。

3　土壙（SK）

SK037（第104図）

平面形は不整形を呈する。一部が撹乱により壊されている。残存長約0.6ｍ、深さ約40cmで段掘りがなされており、柱穴の可能性もある。埋土から掘立柱建物が作られた中世に掘られたと考えられる。

SK038（第104図）

平面形は隅丸方形を呈する。長辺約0.6ｍ、短辺約0.4ｍ、深さ約5cmで底部はフラットである。出土遺物と、埋土から掘立柱建物が作られた中世に掘られたと考えられる。

SK039（第104図）

平面形は不整形を呈する。一部が撹乱により壊されている。長辺約１ｍ、短辺約0.6ｍ、深さ約20cmで段掘りがなされており、柱穴の可能性もある。出土遺物と、埋土から掘立柱建物が作られた中世に掘られたと考えられる。

SK040（第105図）

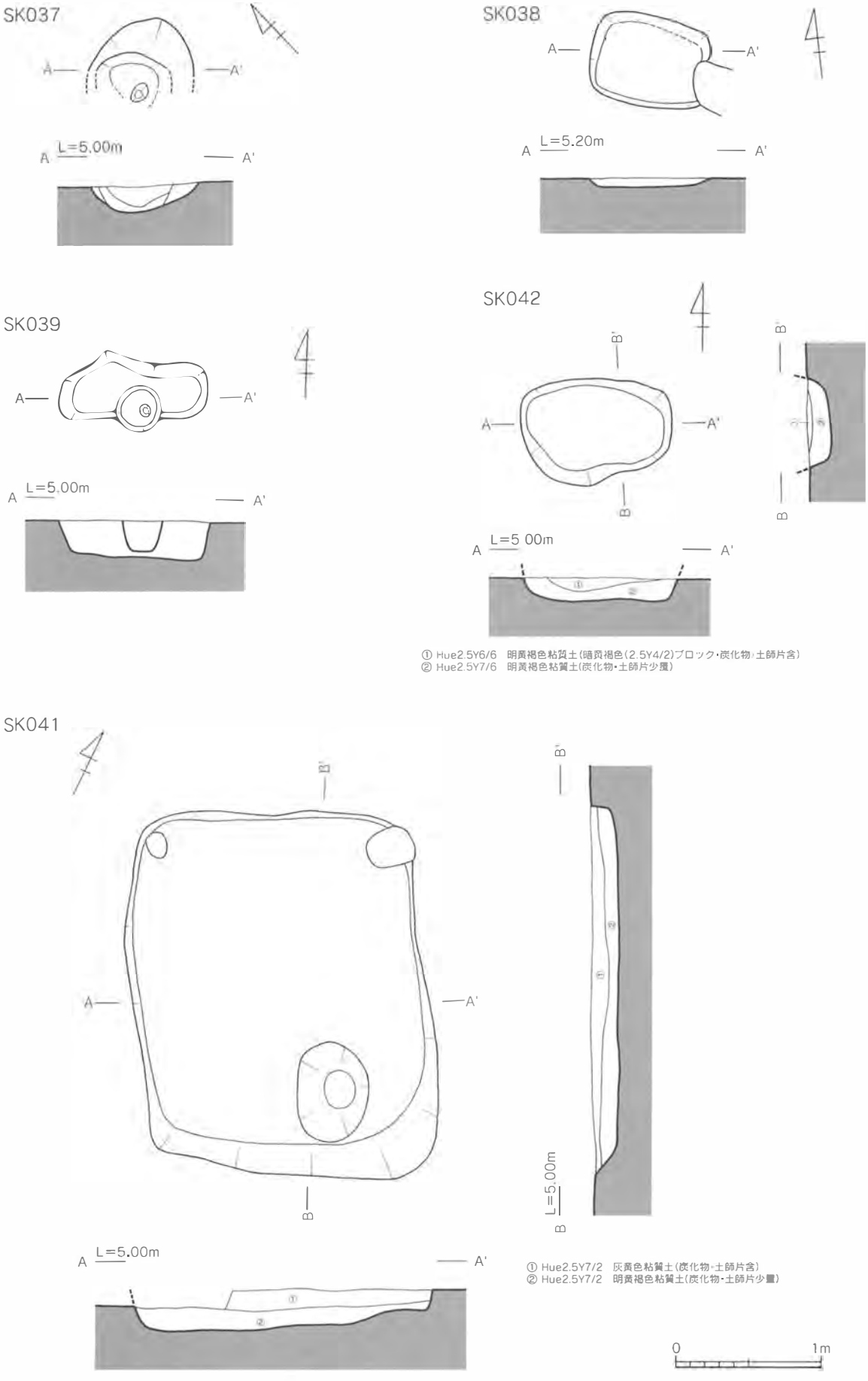
平面形は不整形を呈する。長辺約2.5ｍ、短辺約２ｍ、深さ約30cmで底面がややフラットな形状をもつ。南東隅に落ち込みが見られる。出土遺物から古代に作られたと考えられる。

SK041（第104図）

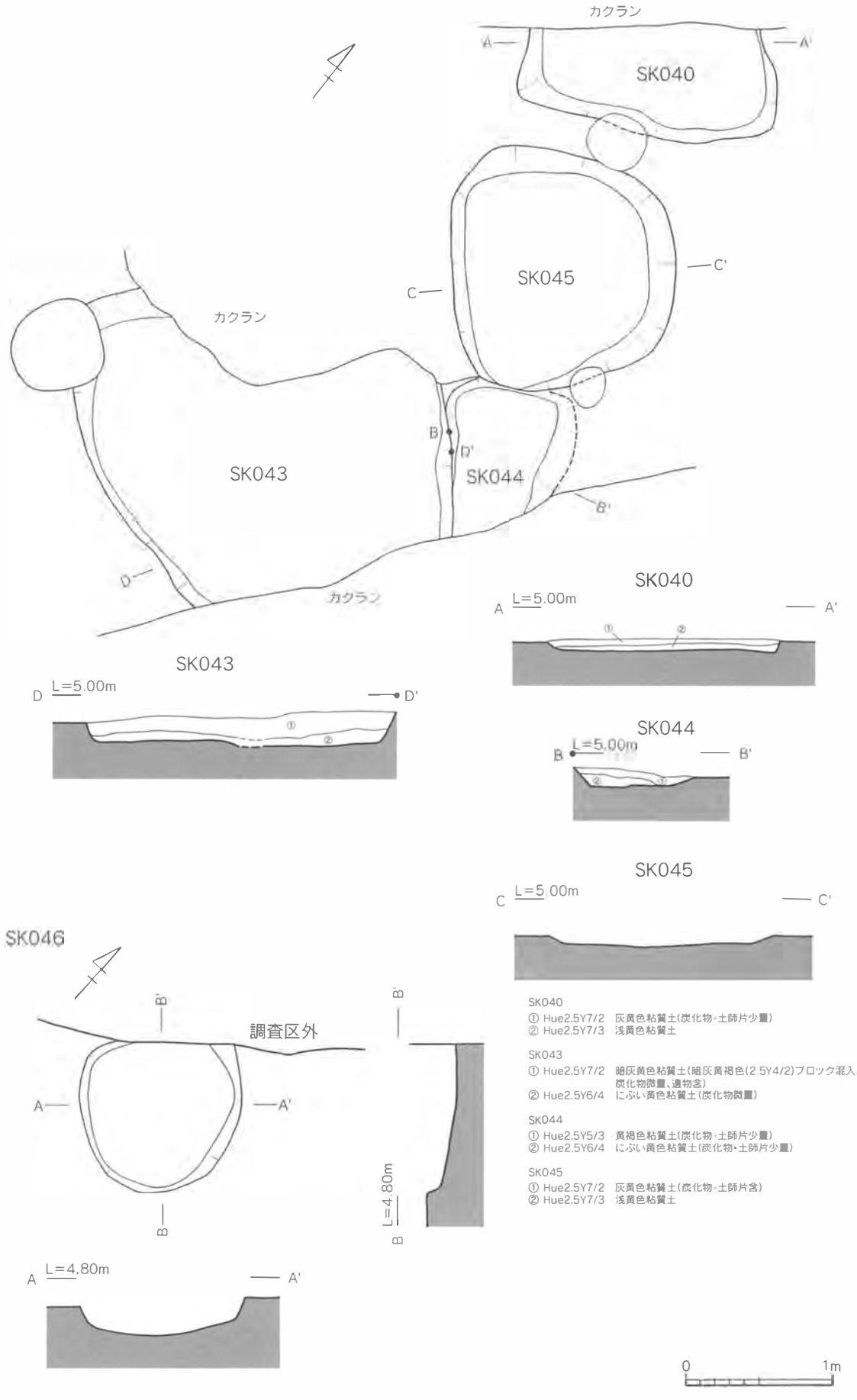
平面形は隅丸方形を呈する。北側が撹乱により壊されている。現存長辺約1.6ｍ、深さ約10cmで底面がややフラットな形状をもつ。出土遺物から古代に作られたと考えられる。

SK042（第104図）

平面形は不整形を呈する。長辺約１ｍ、短辺約0.7ｍ、深さ約15cmで底面がややフラットな形状をもつ。出土遺物から古代に作られたと考えられる。



第104図　SK037・038・039・041・042実測図



第105図　SK040・043・044・045・046実測図

SK043（第105図）

南北を撹乱のため壊されている。平面形は不整形を呈する。現存長約２ｍ、深さ約20cmで底面がややフラットな形状をもつ。出土遺物から古代に作られたと考えられる。

SK044（第105図）

SK043とSK045に切られている。南側を撹乱によって壊されている。平面形は隅丸長方形を呈する。現存する一辺約0.9ｍ、深さ約15cmで底面がやや歪な形状をもつ。出土遺物から古代に作られたと考えられる。

SK045（第105図）

平面形は隅丸正方形を呈する。SK044を切っている。長辺約1.6ｍ、短辺約1.4ｍ、深さ約5cmで底面がフラットである。出土遺物から古代に作られたと考えられる。

SK046（第105図）

平面形は円形を呈する。一辺約1.1ｍ、深さ約30cmで底面はやや丸みを帯びた形状をもつ。出土遺物から古代に作られたと考えられる。

SK047（第106図）

撹乱により遺構のほとんどが壊されている。平面形は不明。現存長辺約0.6ｍ、深さ約20cmで底面が壊されているため形状は不明である。出土遺物が無いため、遺構の時期は特定出来ないが、埋土から掘立柱建物が作られた中世に掘られたと考えられる。

SK048（第106図）

撹乱により遺構のほとんどが壊されている。平面形は不明。現存長辺約0.6ｍ、深さ約15cmで底面が壊されているため形状は不明である。出土遺物が無いため、遺構の時期は特定出来ないが、埋土から掘立柱建物が作られた中世に掘られたと考えられる。

SK049（第106図）

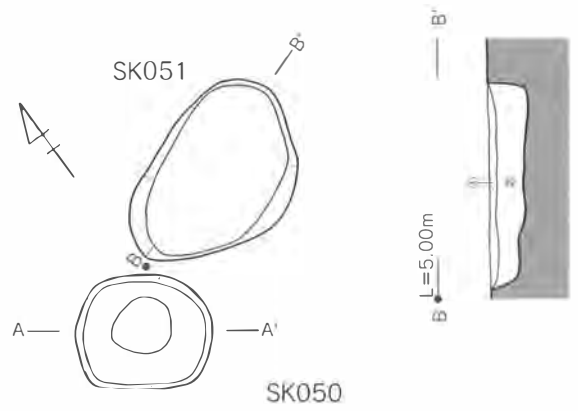
撹乱により遺構の南北が壊されている。平面は楕円形を呈する。現存長辺約0.6ｍ、深さ約15cmで底面はやや丸みを帯びた形状をもつ。出土遺物が無いため、遺構の時期は特定出来ないが、埋土から掘立柱建物が作られた中世に掘られたと考えられる。

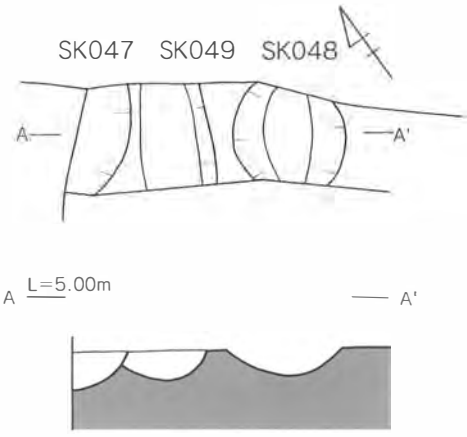
SK073（第106図）

撹乱により北西側が壊されている。平面形は長方形を呈する。長辺約1・5ｍ、短辺約0.6ｍ、深さ約10cmで底面がややフラットな形状をもつ。出土遺物が無いため、遺構の時期は特定出来ない。

SK074（第106図）

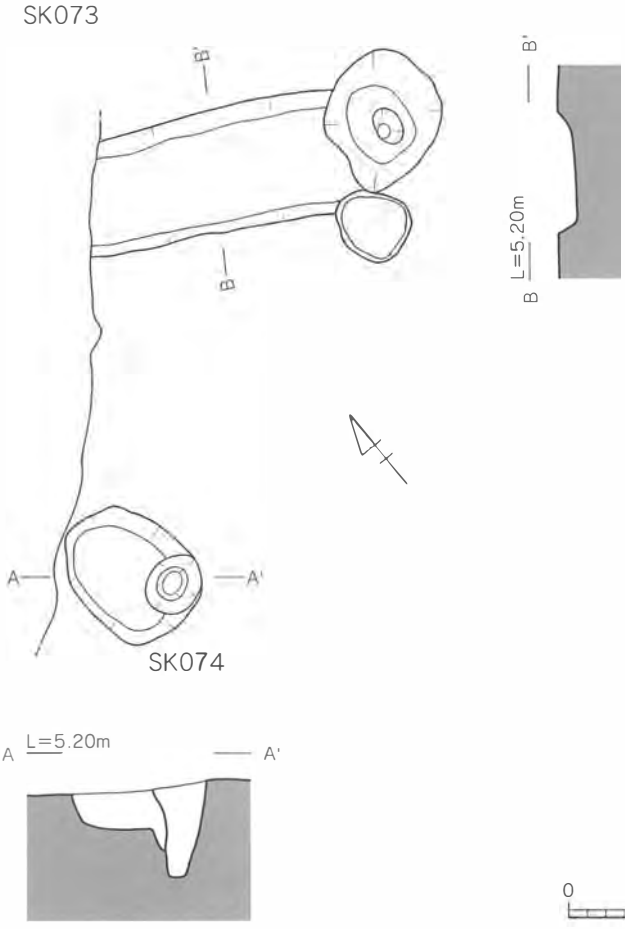
平面形は楕円形を呈する。長辺約0.8ｍ、短辺約0.6ｍ、深さ約30cmで底面はフラットで西側に更に落ち込んでいる。遺構の形態から柱穴と考えられるが、並び立つ掘立柱建物は検出出来なかった。出土遺物と埋土から掘立柱建物が作られた中世に掘られたと考えられる。

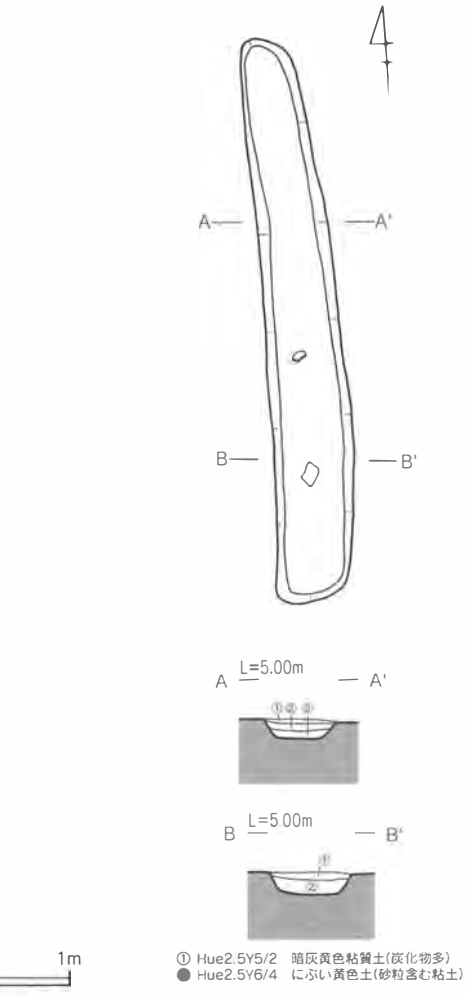




SK050
① Hue7.5YR4/2 灰褐色粘質土(砂粒多)
② Hue7.5YR4/3 にぶい黄褐色粘質土(砂粒多)

SK051
① Hue7.5YR4/2 灰褐色粘質土(砂粒・炭化物多)
② Hue7.5YR4/3 褐色粘質土(灰色粘土混入、砂粒・マンガン粒含)





① Hue2.5Y5/2　暗灰黄色粘質土(炭化物多)
● Hue2.5Y6/4　にぶい黄色土(砂粒含む粘土)

第106図　SK047・048・049・050・051・073・074、SX005実測図

4　不明遺構（SX）

SX007（第106図）

幅約40cm、長さ約2.9ｍ、深さ約10cmを測る。遺構の性格を表す様な痕跡確認出来なかったが、出土遺物から古代に作られたと考えられる。

5　柵列（SA）

SA001（第110図）

長さ約13ｍに渡っている。間隔は一定でないが、全部で７基の穴跡を検出した。SA002と一番北側の穴が直角に交わっており、同時期に作られていたことは間違いない。穴の深さ約40cmを測る。出土遺物が無いが、SA002で中世の遺物を検出しており、この事から中世に作られたと考えられる。

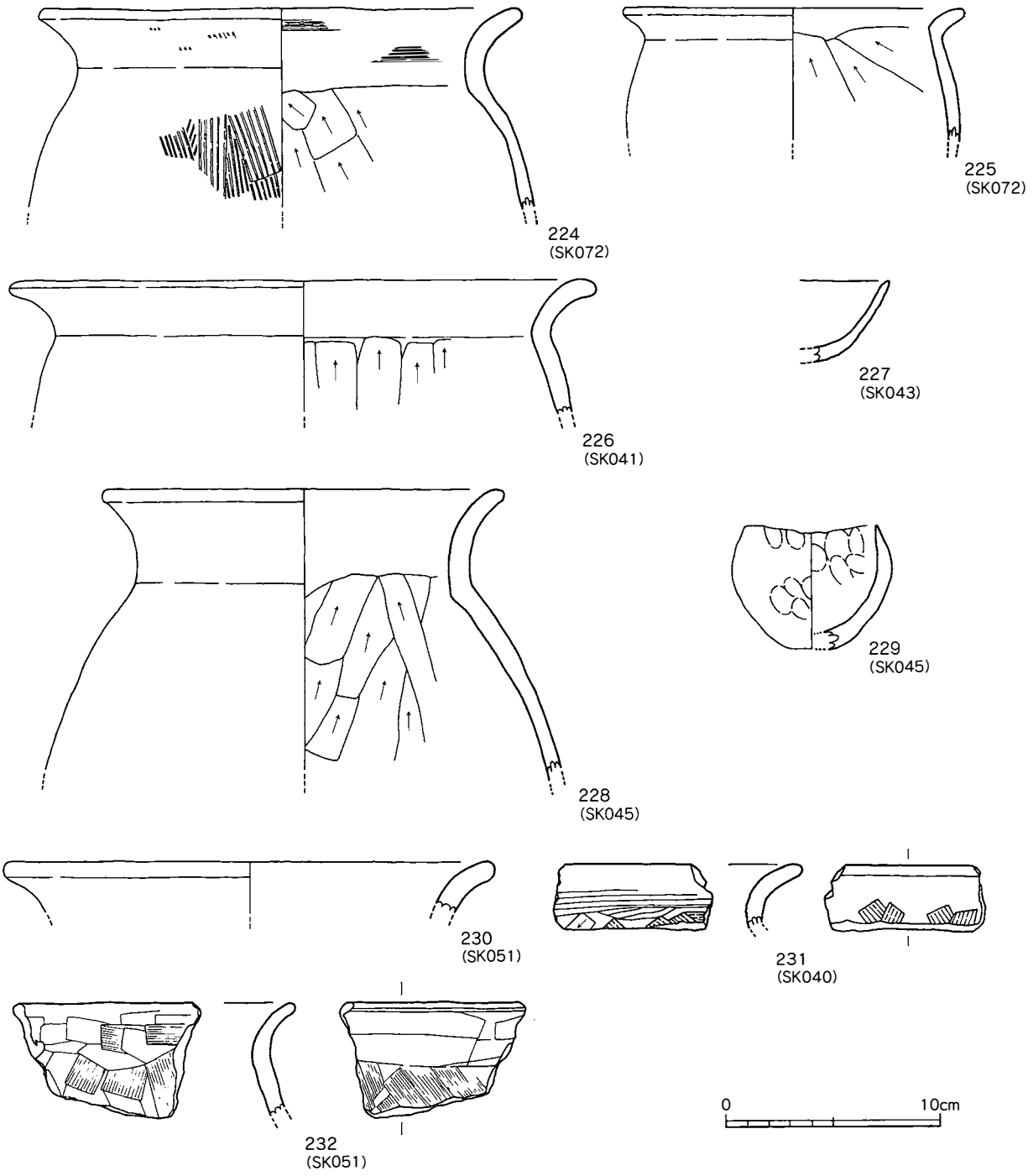
SA002（第110図）

長さ約4.5ｍに渡っている。間隔は一定でないが、全部で３基の穴跡を検出した。SA001と直交しており、同時期に作られていたと考えられる。穴の深さ約30cmを測る。出土遺物から中世に作られたと考えられる。

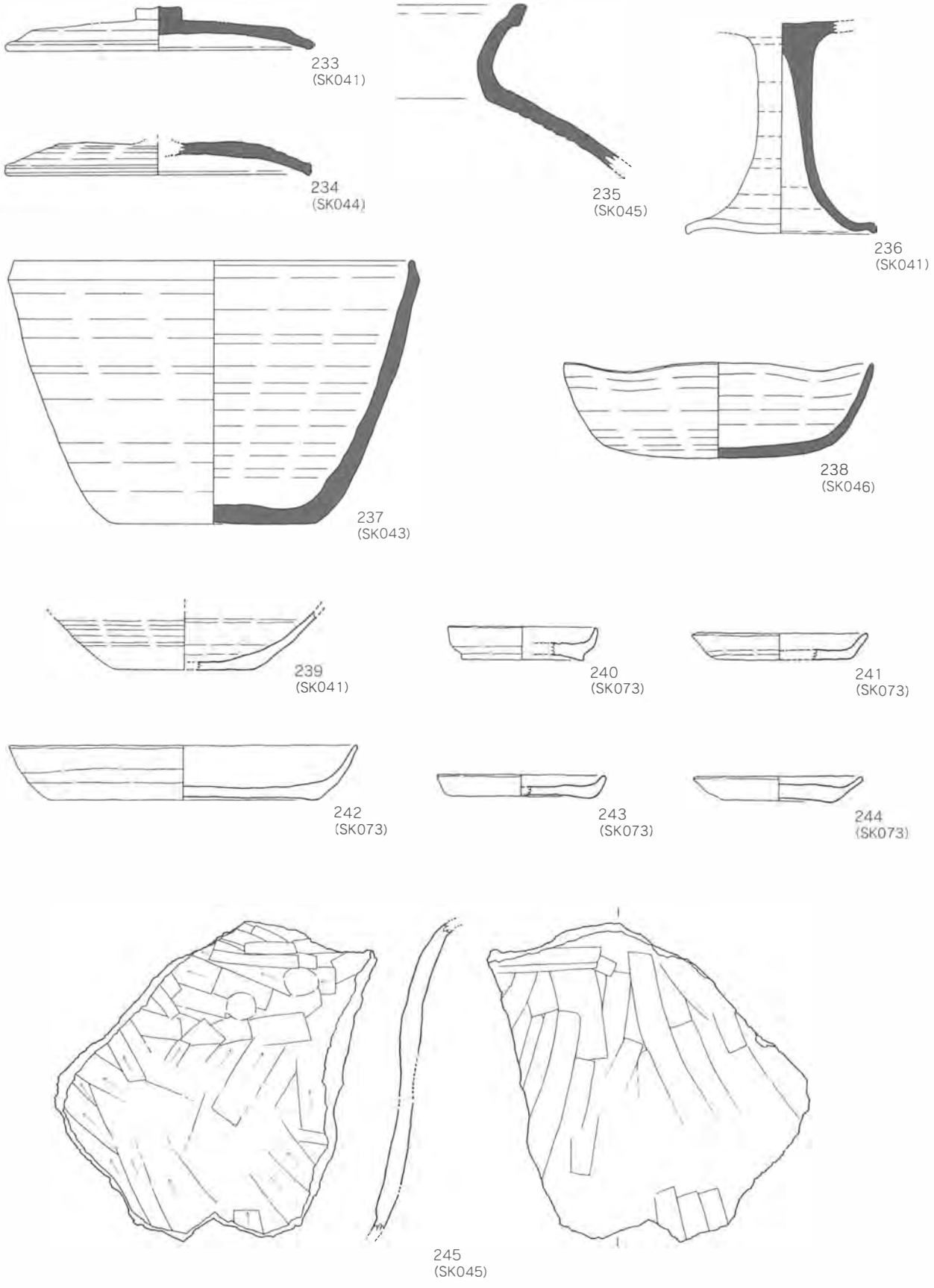
SK及びPit、調査区一括出土の遺物について（第107・108・109・111図）

224は甕である。外面にハケ目による調整、内面には底部から口縁にむけて下から上に向かってのヘラ削りが認められる。古代の遺物である。225は甕である。外面にハケ目による調整、内面には底部から口縁にむけて下から上に向かってのヘラ削りが認められる。古代の遺物である。226は甕である。外面にハケ目による調整、内面には底部から口縁にむけて下から上に向かってのヘラ削りが認められる。古代の遺物である。227は杯である。内外面ともなでによる調整が認められる。外面に赤色顔料が認められる。古代の遺物である。228は甕である。外面にハケ目による調整、内面には底部から口縁にむけて下から上に向かってのヘラ削りが認められる。古代の遺物である。229は手捏ね土器である。内外面ともになでによる調整が認められる。また、指頭圧痕も土器の表面に認められる。古代の遺物である。230は甕の口縁である。外面にハケ目による調整、内面には底部から口縁にむけて下から上に向かってのヘラ削りが認められる。古代の遺物である。231は甕である。外面にハケ目による調整、内面には底部から口縁にむけて下から上に向かってのヘラ削りが認められる。古代の遺物である。232は甕である。内外面ともにハケ目による調整が認められる。古代の遺物である。233は摘みをもつ須恵器の杯蓋である。外面はヘラ削りとなでによる調整、内面はなでによる調整が認められる。古代の遺物である。234は須恵器の杯蓋である。外面はヘラ削りとなでによる調整、内面はなでによる調整が認められる。古代の遺物である。235は須恵器の甕の口縁である。内外面とも回転なでによる調整が認められる。内面には内面体部に同心円当具痕が認められる。内外面体部に自然釉が付着している。古代の遺物である。236は須恵器の高杯の脚部である。内外面とも回転なでによる調整が認められる。古代の遺物である。237は須恵器の鉢である。内外面ともに回転なでによる調整が認められる。底部には回転ヘラ削りによる調整が認められる。古代の遺物である。238は須恵器の杯である。内外面ともなでによる調整、底部はヘラ切り後なでによる調整が認められる。古代の遺物である。239は杯である。内外面ともなでによる調整が認められる。古代の遺物である。240は杯である。内外面ともになでによる調整が認められる。底面は回転糸切りが認められる。中世の遺物である。241は杯である。内外面ともになでによる調整が認められる。底面は回転糸切りが認められる。中世の遺物である。

242は杯である。内面下部は横なでによる調整が認められる。底面は板目圧痕後なでによる調整が認められる。中世の遺物である。243は杯である。内外面ともになでによる調整が認められる。底面は回転糸切りが認められる。中世の遺物である。244は杯である。内外面ともになでによる調整が認められる。底面は回転糸切りが認められる。中世の遺物である。245は甕の胴部である。外面はヘラ削り後なでによる調整が認められる。外面下部に黒斑がある。内面上部は横方向のヘラ削りによる調整が認められる。内面中部はヘラ削による調整が認められる。内面下部は下から上方向のヘラ削りによる調整が認められる。246は須恵器の甕の口縁である。外面には格子叩き目による調整が認められる。内面には内面体部に同心円当具痕が認められる。古代の遺物である。

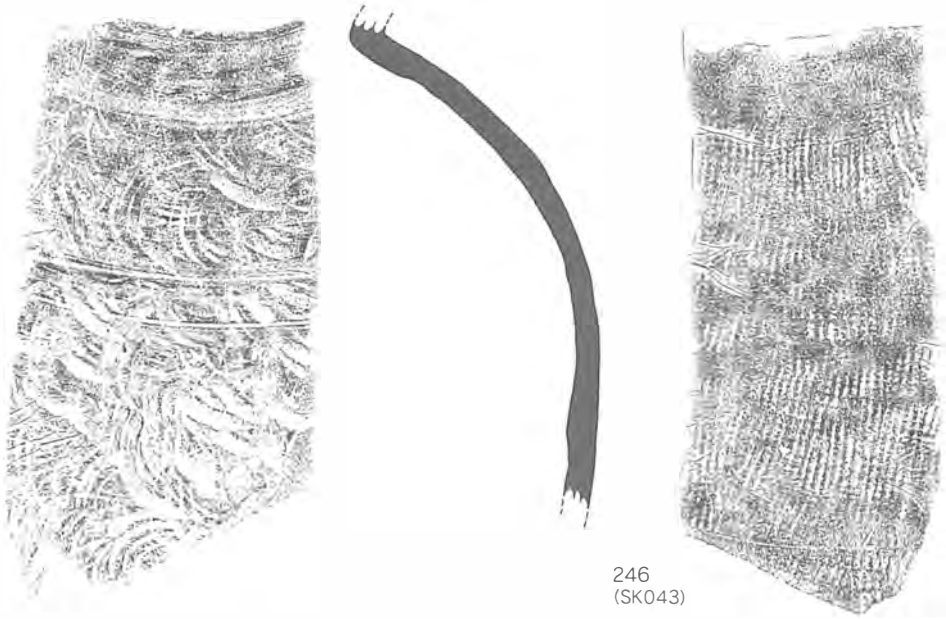


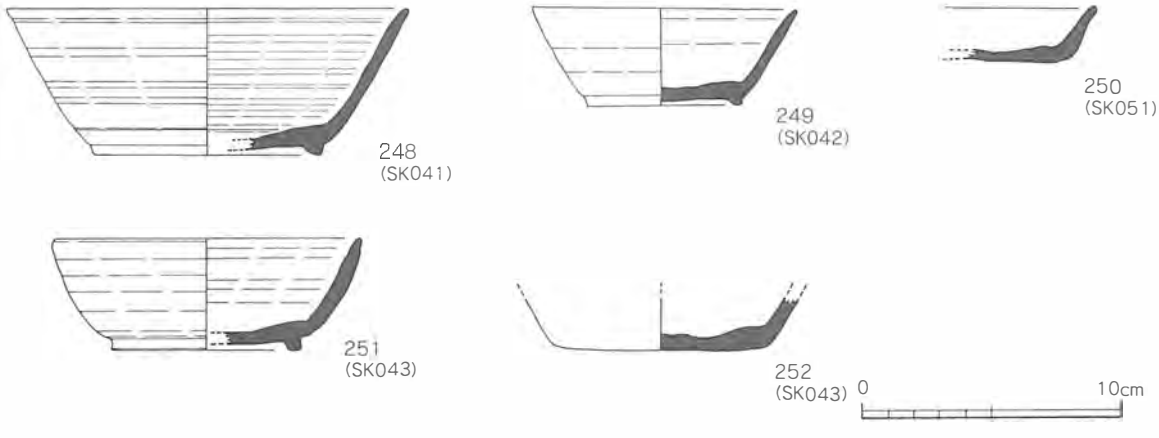
第107図　SK040･041･043･045･051･072出土遺物実測図



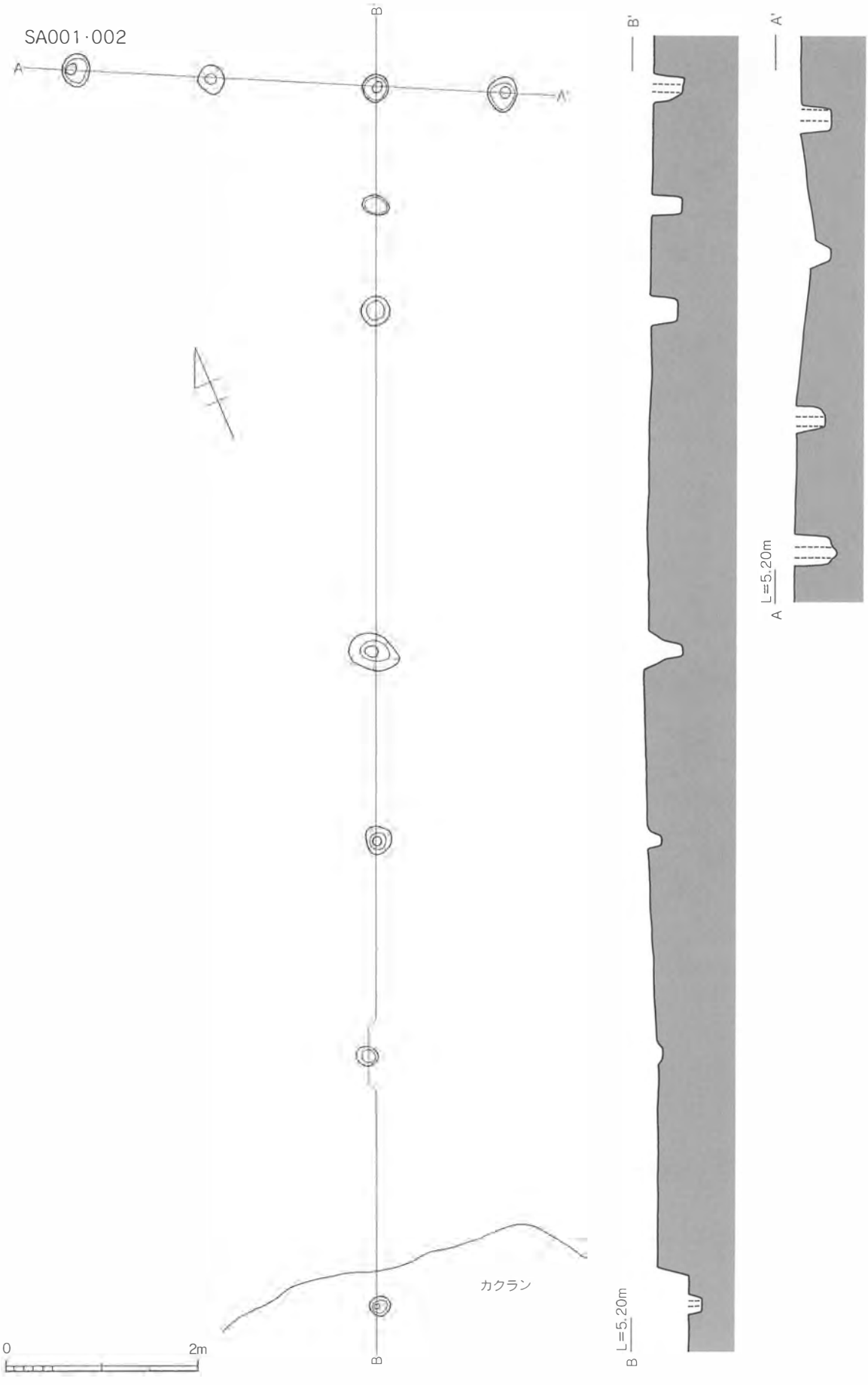
第108図　SK041·043·044·045·046·073出土遺物実測図

247は須恵器の甕の口縁である。外面には平行叩き目による調整が認められる。内面には内面体部に同心円当具痕が認められる。内外面体部に自然釉が付着している。古代の遺物である。248は須恵器の貼り付け高台をもつ杯である。内外面ともなで調整、底部はヘラ切り後なでによる調整が認められる。古代の遺物である。249は須恵器の貼り付け高台をもつ杯である。内外面ともなで調整、底部はヘラ切り後なでによる調整が認められる。古代の遺物である。250はやや浅めの須恵器の杯である。内外面ともなで調整、底部はヘラ切り後なでによる調整が認められる。古代の遺物である。251は須恵器の貼り付け高台をもつ杯である。内外面ともなで調整、底部はヘラ切り後なでによる調整が認められる。古代の遺物である。252はやや深めの須恵器の杯である。内外面ともなで調整、底部はヘラ切り後なでによる調整が認められる。古代の遺物である。253は須恵器の杯蓋である。外面はヘラ削りとなでによる調整、内面はなでによる調整が認められる。古代の遺物である。254は須恵器の杯である。内外面ともなで調整が認められる。古代の遺物である。255は須恵器の貼り付け高台をもつ杯である。内外面ともなで調整、底部はヘラ切り後なでによる調整が認められる。古代の遺物である。256は滑石製の石鍋である。中世の遺物である。257は青磁の皿である。小片のため、時期は特定出来ない。258は弥生の打製石斧である。自然流路から検出されており、調査区の近くに弥生時代の遺跡が包蔵されている可能性が高い。259は土製の紡錘車である。土師器を加工して作ったものである。中世の遺物である。260は滑石製の紡錘車である。丁寧に研磨されている。中世の遺物である。261から63は土錘である。264は甕である。内外面ともになでによる調整が認められる。古代の遺物である。265は甕である。内外面ともになでによる調整が認められる。古代の遺物である。266は甕である。内外面ともになでによる調整が認められる。古代の遺物である。267は杯である。内外面ともになでによる調整が認められる。底面は回転糸切りが認められる。中世の遺物である。268は杯である。内外面ともになでによる調整が認められる。底面は回転糸切りが認められる。中世の遺物である。269は杯である。内外面ともになでによる調整が認められる。底面は回転糸切りが認められる。中世の遺物である。270は杯である。外面は回転なでによる調整が認められる。内面は回転ヘラ削り後なでによる調整が認められる。底部はヘラ切り後なでによる調整が認められる。271は甕である。外面にハケ目による調整、内面には底部から口縁にむけて下から上に向かってのヘラ削りが認められる。古代の遺物である。272は甕である。外面にハケ目による調整、内面には底部から口縁にむけて下から上に向かってのヘラ削りが認められる。古代の遺物である。273は杯である。内外面ともに回転なでによる調整が認められる。内底面はなでによる調整が認められる。貼り付け高台である。底部にヘラ書きあり。『 』と描かれてある。古代の遺物である。274は杯である。外面・口縁はなでによる調整が認められる。内面はなでによる調整が認められる。底部はヘラ切り後なでによる調整が認められる。中世の遺物である。275は須恵器の貼り付け高台をもつ杯である。内外面ともなで調整、底部はヘラ切り後なでによる調整が認められる。古代の遺物である。

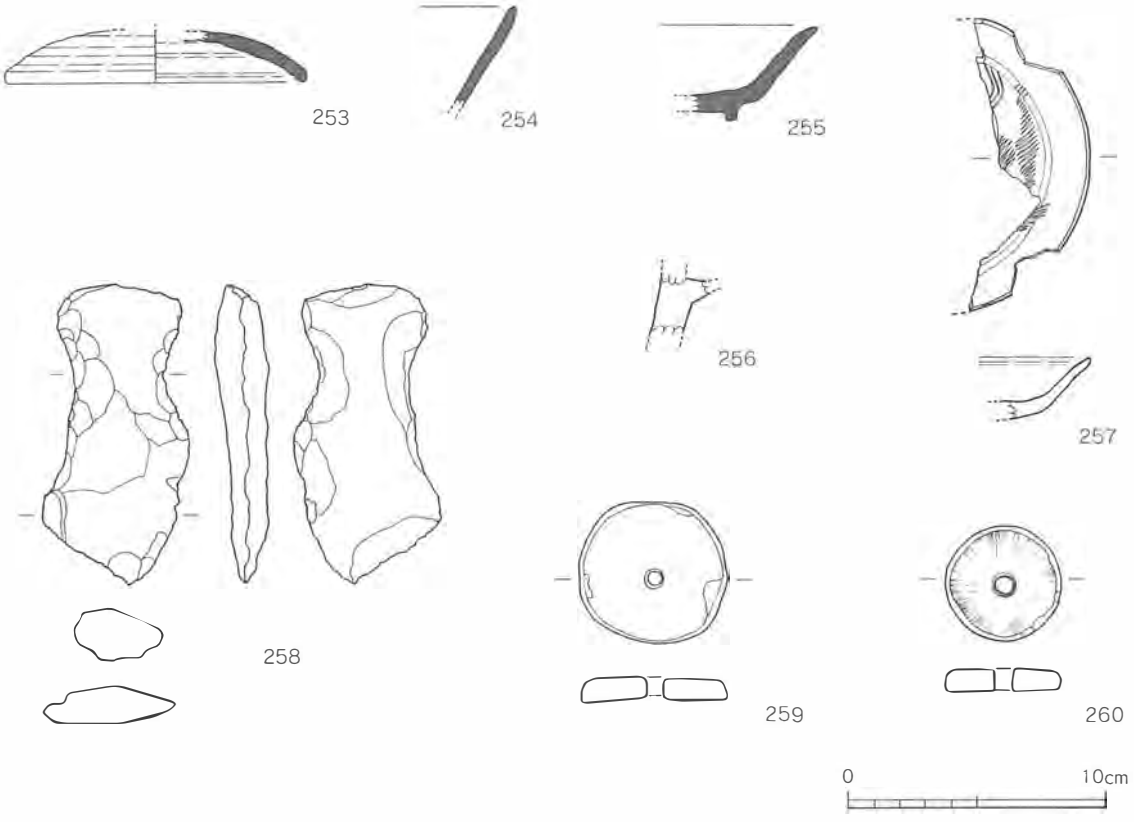


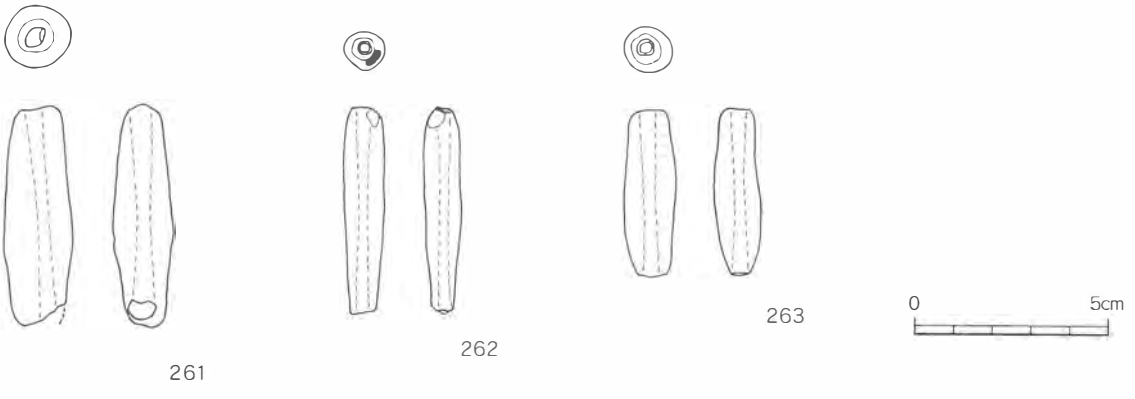


第109図　SK041·042·043·051出土遺物実測図

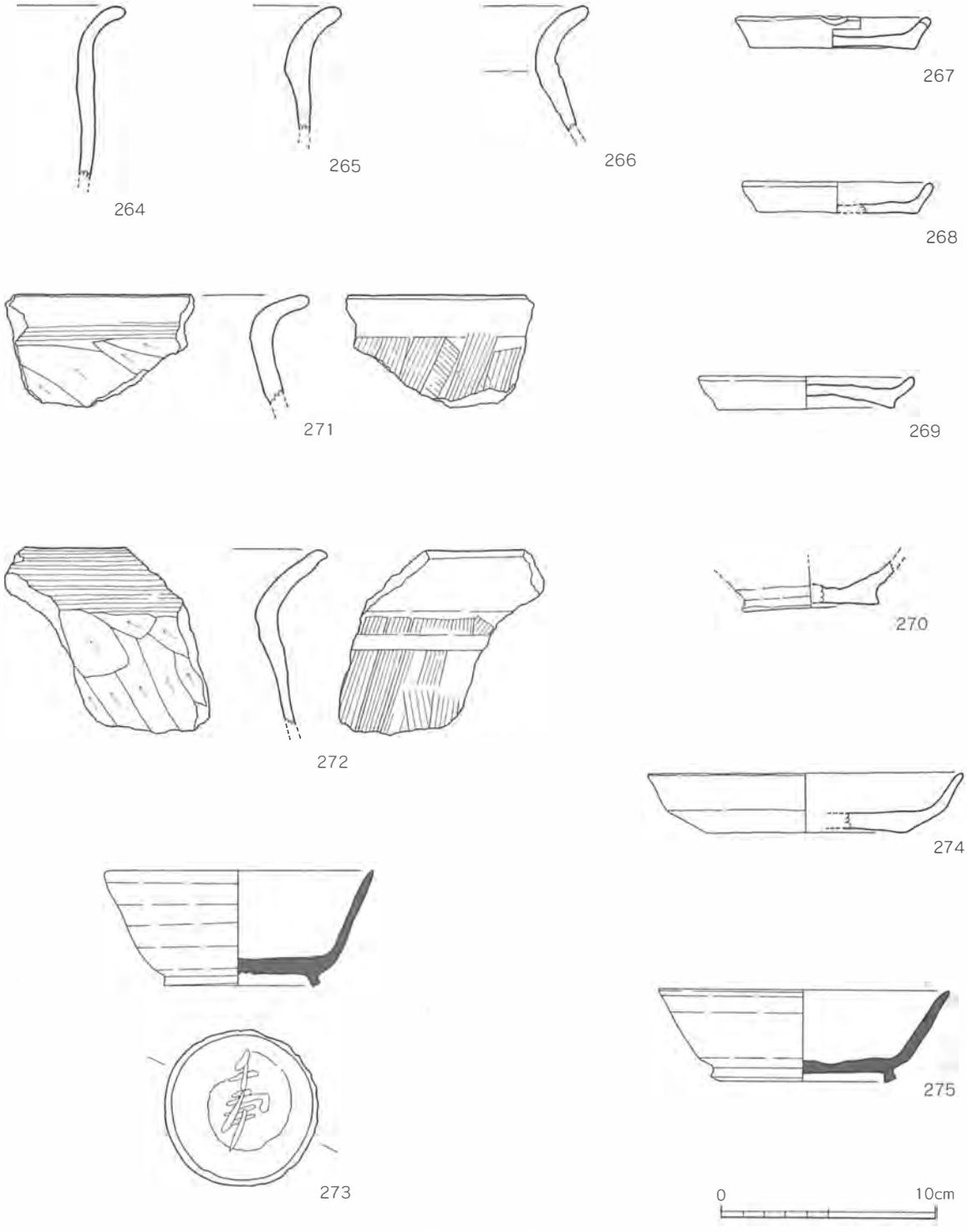


第110図　SA001·002実測図





第111図　Pit・一括出土遺物実測図



第112図　Ⅷ区　一括出土遺物実測図

第７節　Ⅸ区の遺構

Ⅸ区について

調査区の全てが墓域であり、新しくは明治末から大正期にかけての土葬墓であった。調査に先立って、改葬のための掘削作業が行われた。その結果、地表面から３ｍほどの深さまで、墓穴が及んでおり、人骨等が甕に埋葬されたまま出土し、また木棺も腐食した状態で多数検出された。

以上のことから、調査対象は全て、近現代の墓造営に際し、破壊されていることが確認できたため、本調査は実施しなかった。

第８節　Ｘ区の遺構とそれに伴う遺物

Ｘ区について

溝状遺構１条、掘立柱建物５棟、土壙６基、貯蔵穴１基、井戸１基がこの調査区で検出されている。

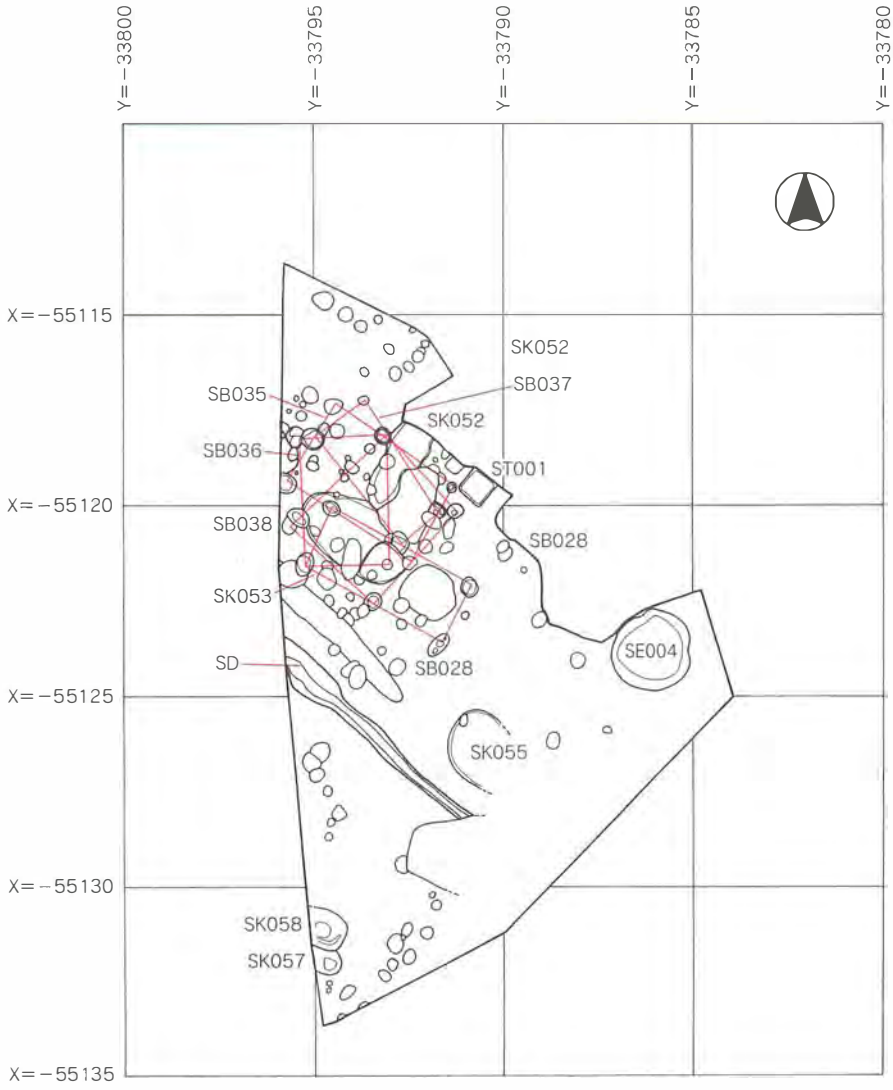
溝状遺構は、中世の遺物を含むことから中世に掘られた可能性が高い。掘立柱建物の南にあり、かつ地形的には北に比べて低く、遺構群に水が入り込む事を防ぐために作られた可能性がある。

Ⅷ・Ⅸ区の掘立柱建物と比較してほぼ歪みがない。１間×２間が４棟、１間×１間が１棟ある。柱穴も明瞭に残っている。柱穴からの出土遺物が無いため掘立柱建物の作られた時期の特定は困難であるが、本調査区において、中世以前の遺物が少量であること、中片小路遺跡の範囲において、Ⅸ区を境に古代の遺構が減じていることから、考え合わせると、中世に作られた可能性が高い。

土壙はいずれも不整形である。出土遺物から、古代と中世に作られたと考えられる。SK054 は柱穴の掘り方の可能性もあるが、特定は出来なかった。

その他の土壙についても遺構の性格は不明である。

井戸は円形の平面を持ち、３段に掘り下げられている。２段目で木枠を用い、木枠の周囲には、縁が損傷する事を防ぐ為に、置石を配している。出土遺物から中世に作られたと考えられる。



第113図　Ｘ区　全体遺構配置図

１　掘立柱建物（SB）

SB028（第114図）

長軸約2.7ｍ、短軸約1.1ｍの、1間×2間の５本柱の側柱構造の掘立柱建物遺構である。柱穴の深さは、深いもので約30cm、浅いもので約20cmである。柱の内側は特に硬化していない。

SB035（第114図）

長軸約2.6ｍ、短軸約1.6ｍの、1間×2間の５本柱の側柱構造の掘立柱建物遺構である。柱穴の深さは、深いもので約40cm、浅いもので約20cmである。柱の内側は特に硬化していない。

SB036（第115図）

長軸約2.2ｍ、短軸約1.5ｍの、1間×2間の５本柱の側柱構造の掘立柱建物遺構である。柱穴の深さは、深いもので約30cm、浅いもので約20cmである。柱の内側は特に硬化していない。

SB037（第115図）

長軸約2.4ｍ、短軸約1.1ｍの、1間×2間の５本柱の側柱構造の掘立柱建物遺構である。柱穴の深さは、深いもので約30cm、浅いもので約10cmである。柱の内側は特に硬化していない。

SB038（第116図）

長軸約2.2ｍ、短軸約1.9ｍの、1間×2間の５本柱の側柱構造の掘立柱建物遺構である。柱穴の深さは、深いもので約30cm、浅いもので約20cmである。柱の内側は特に硬化していない。

２　溝状遺構（SD）

SD035（第113図）

幅約１ｍ、北西から南東方向に約７ｍの溝状遺構である。この溝状遺構の北側に掘立柱建物群が存在し、溝状遺構から南側に向けて地形が緩やかに傾斜していく。この事から、この溝状遺構が、これらの掘立柱建物群を雨水等から防ぐ為に掘られていたと考えられる。出土遺物から中世に作られたと考えられる。

３　土壙（SK）

SK052（第117図）

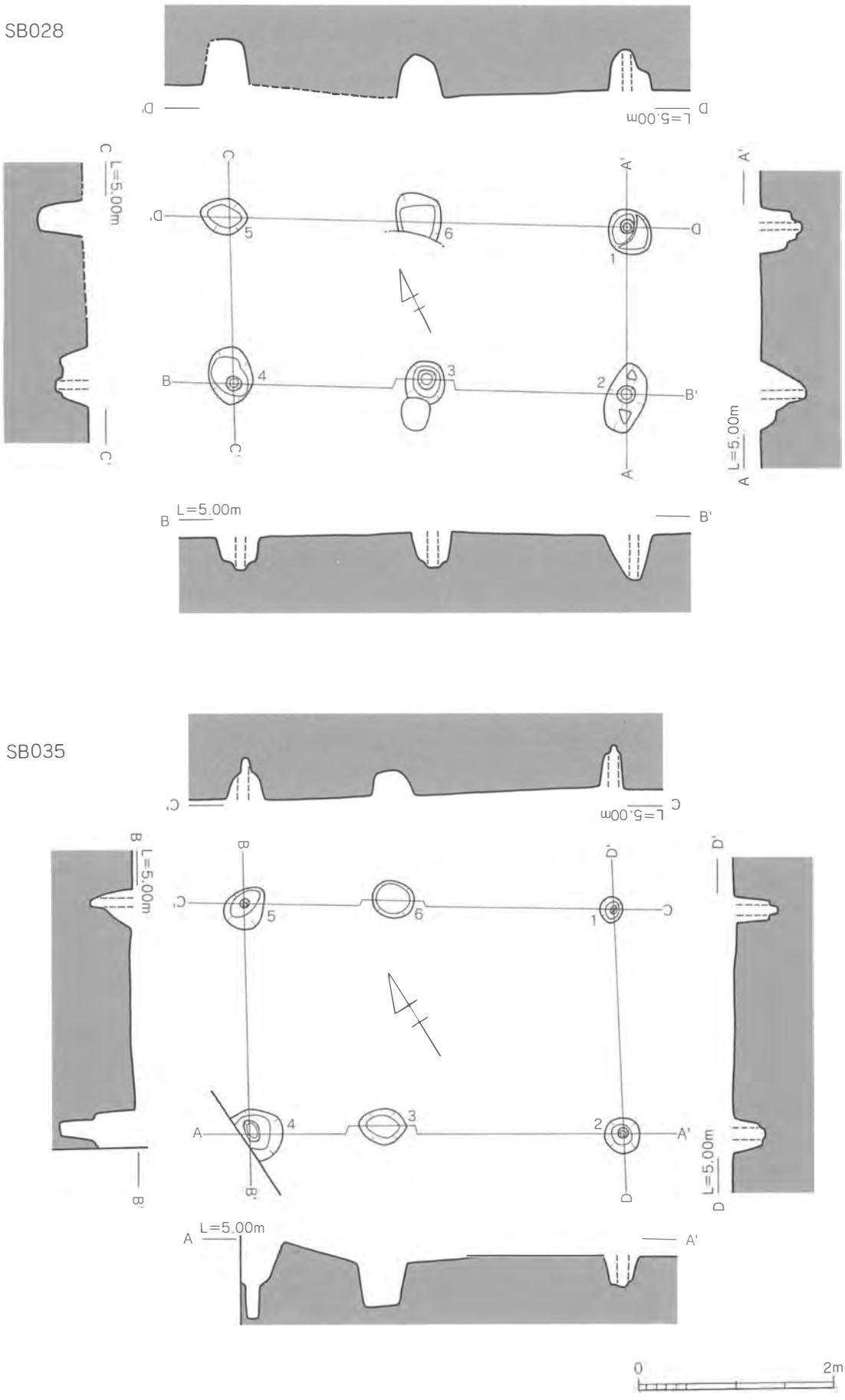
平面形は不整形を呈する。撹乱により北側の形状については不明である。現存長辺約2.4ｍ、短辺約１ｍ、深さ約15cmで底面がややフラットな形状をもつ。出土遺物から古代に作られたと考えられる。

SK053（第117図）

撹乱により全体の形状は不明であるが、現存する平面形はやや楕円形を呈する。現存長辺約2.3ｍ、短辺約1.8ｍ、深さ約10cmで底面がややフラットな形状をもつ。出土遺物から中世に作られたと考えられる。

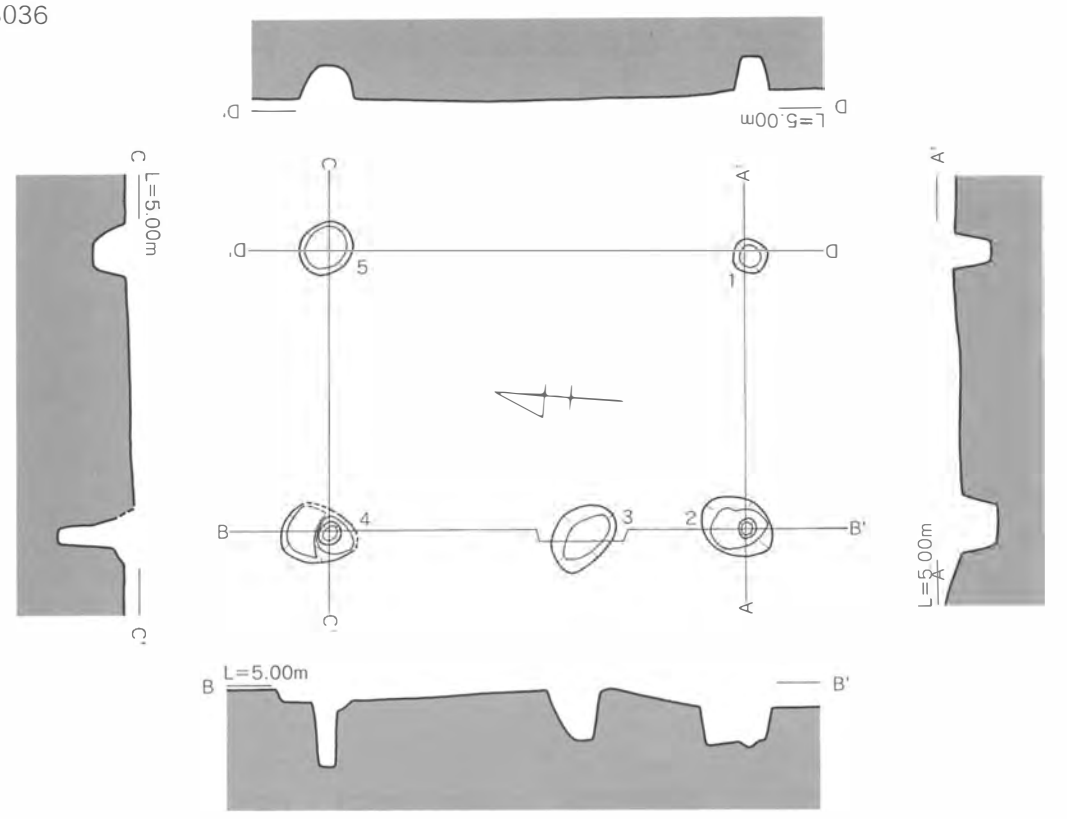
SK054（第117図）

平面形は不整形を呈する。長辺約1.2ｍ、短辺約１ｍ、深さ約30cmで底面がややフラットな形状をもち、一部が浅く掘り込まれている。柱穴の可能性もあり、掘立柱建物の可能性もあるが、調査区内で対応する遺構は確認できなかった。出土遺物が無いため、遺構の時代は特定出来なかった。

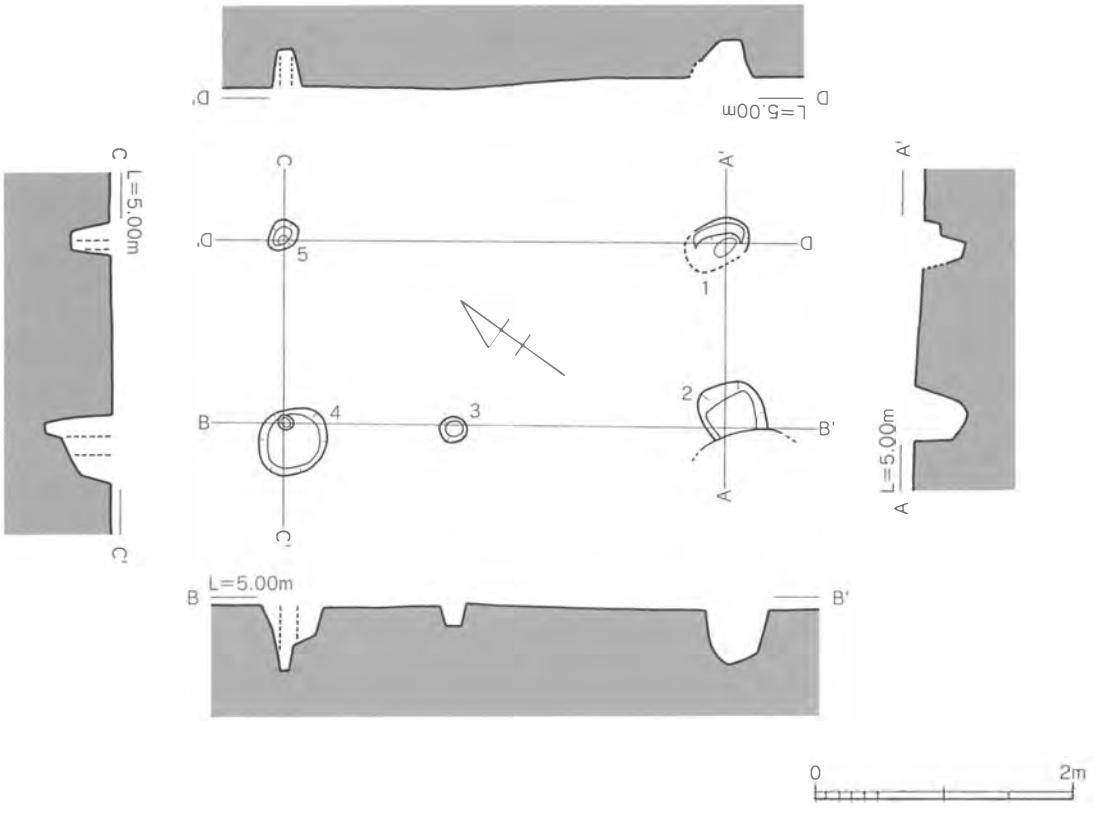


第114図　SB028·035実測図

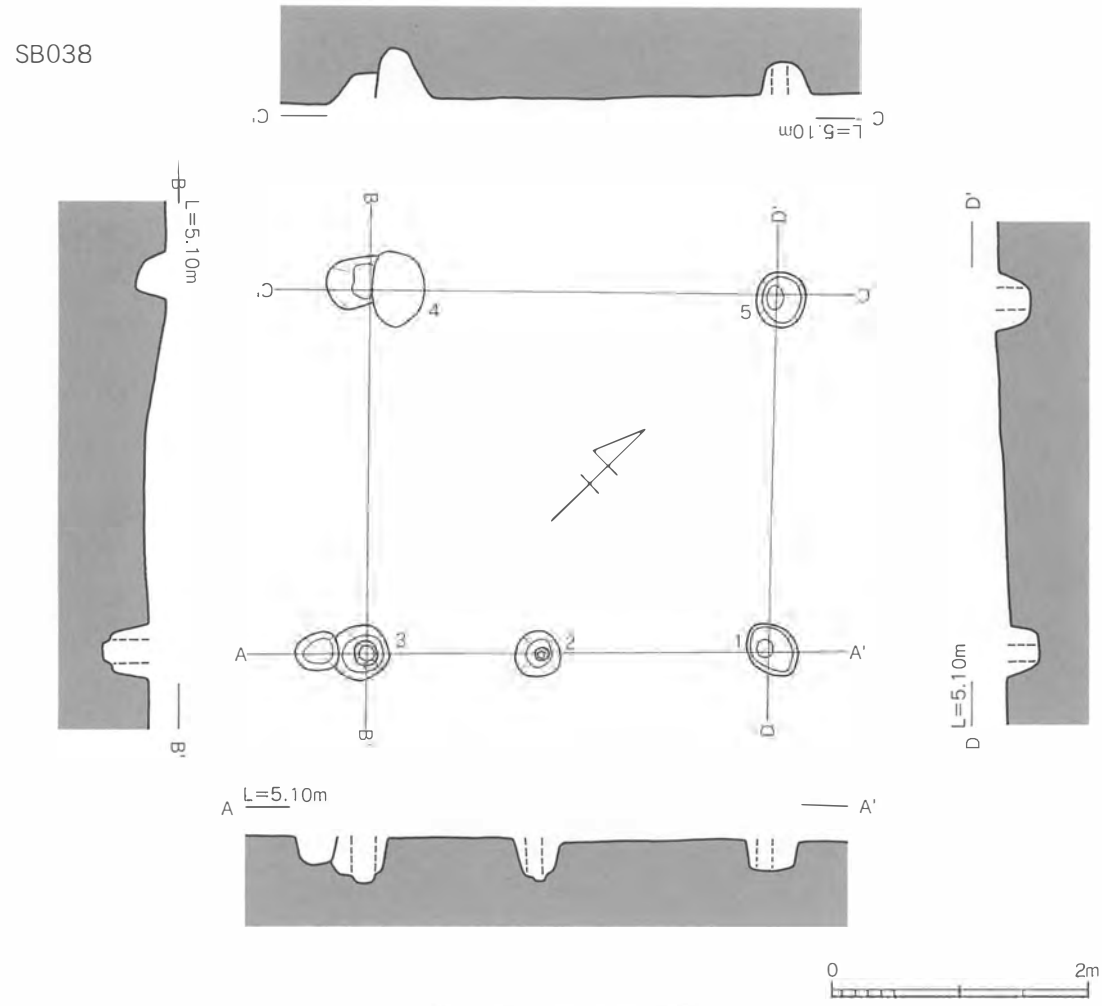
SB036



SB037



第115図　SB036·037実測図



第116図　SB038実測図

SK055（第118図）

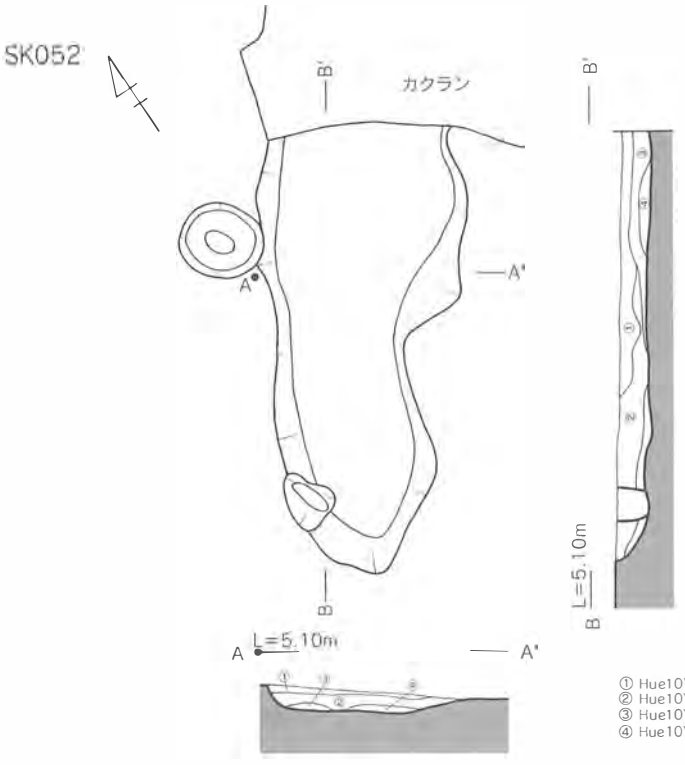
平面形は楕円形を呈する。長辺約２ｍ、短辺約1.2ｍ、深さ約5cmで底面がややフラットな形状をもち、一部が浅く掘り込まれている。柱穴の可能性もあり、掘立柱建物の可能性もあるが、調査区内で対応する遺構は確認できなかった。出土遺物が無いため、遺構の時代は特定出来なかった。

SK056（第118図）

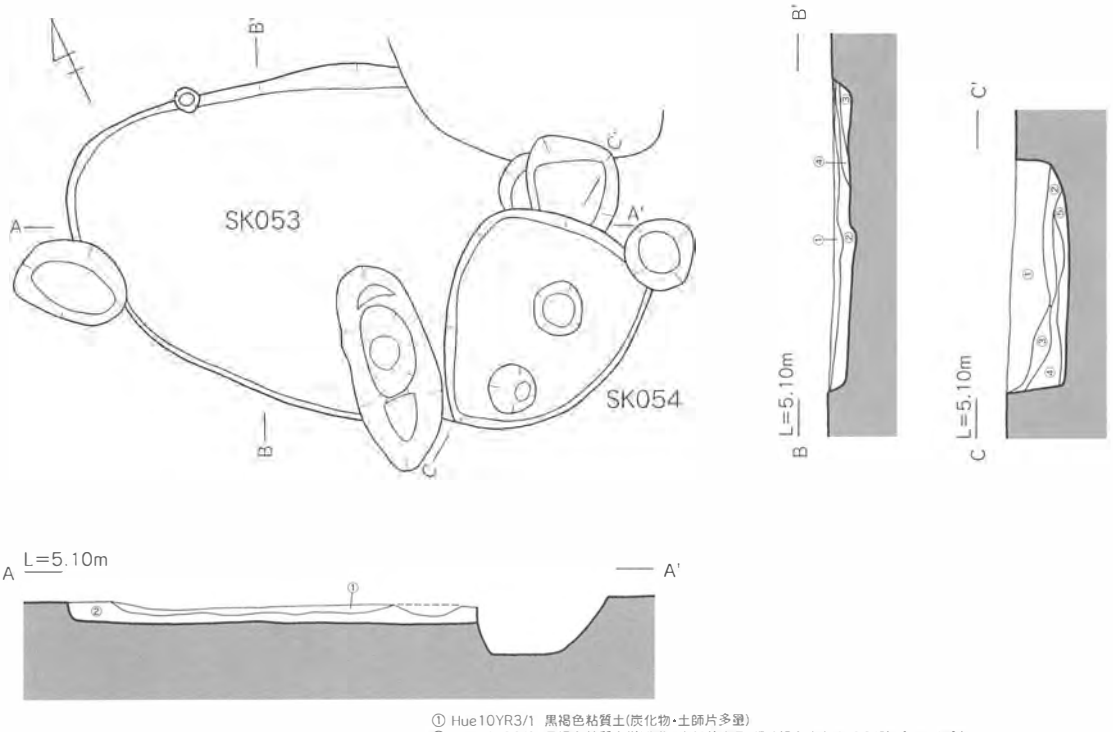
平面形は不整形を呈する。撹乱により北側が壊されている。現存長辺約１ｍ、短辺約0.9ｍ、深さ約40cmで底面がややフラットな形状をもつ。出土遺物が無いため、遺構の時代は特定出来なかった。

SK057（第118図）

平面形は不整形を呈する。撹乱により北側が壊されている。現存辺約0.6ｍ、深さ約30cmで底面がややフラットな形状をもつ。出土遺物が無いため、遺構の時代は特定出来なかった。



① Hue10YR2/2　黒褐色粘質土(炭化物・土師片多量)
② Hue10YR3/2　黒褐色粘質土(炭化物・土師片含)
③ Hue10YR5/6　黄褐色粘質土(黒褐色土(10YR3/2)ブロック混入)
④ Hue10YR3/2　黒褐色粘質土(炭化物・黄褐色土(10YR5/6)含)

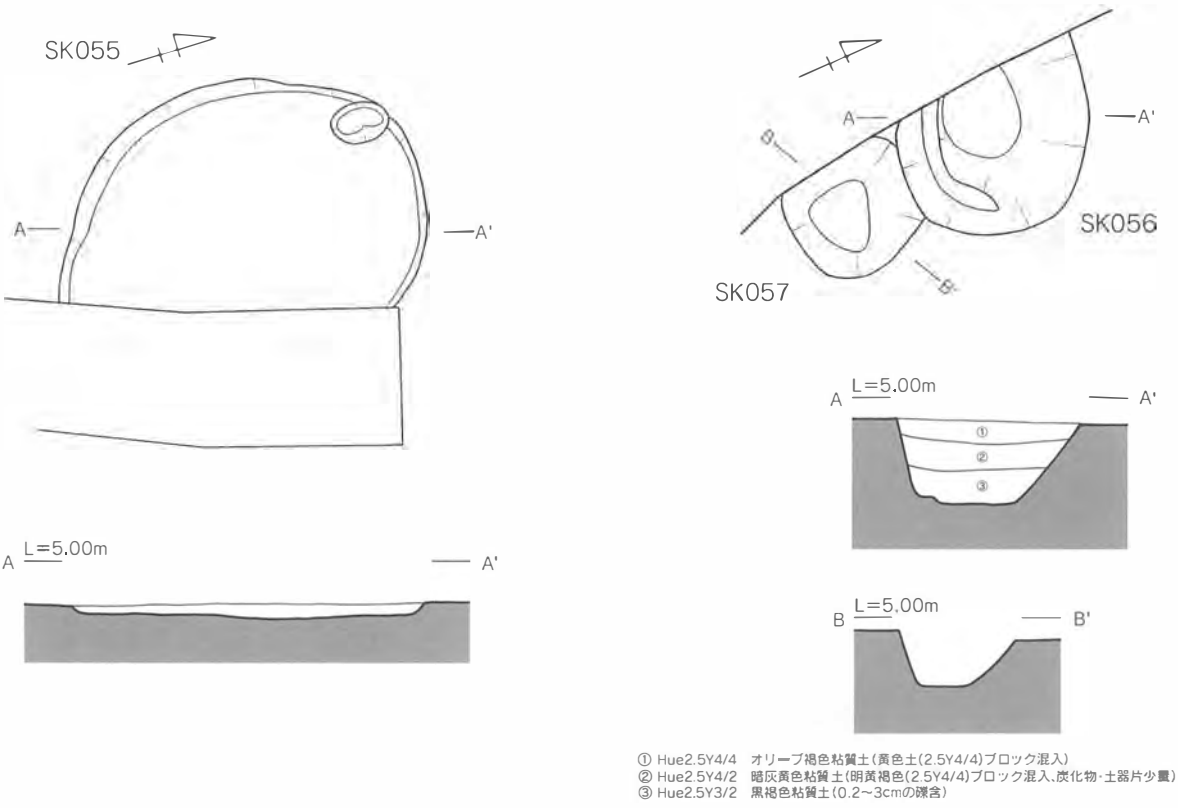


SK053
① Hue10YR3/1　黒褐色粘質土(炭化物・土師片多量)
② Hue10YR3/2　黒褐色粘質土(炭化物・土師片少量、明黄褐色土(10YR6/8)ブロック含)
③ Hue10YR6/8　明黄褐色粘質土(黒褐色土(10YR3/2)ブロック含)
④ Hue10YR3/2　黒褐色粘質土(炭化物・土師片少量)

SK054
① Hue10YR3/3　暗褐色粘質土(明黄褐色土(10YR6/8)ブロック混入、炭化物・土師片少量)
② Hue10YR2/1　黒色粘質土(明黄褐色土(10YR6/8)ブロック混入、炭化物多量)
③ Hue10YR2/2　黒褐色粘質土(明黄褐色土(10YR6/8)ブロック混入、炭化物・土師片少量)
④ Hue10YR3/1　黒褐色粘質土(明黄褐色土(10YR6/8)ブロック混入、炭化物・土師片少量)
⑤ Hue10YR6/8　明黄(黒褐色土(10YR3/2)ブロック混入)

0　1m

第117図　SK052・053・054実測図

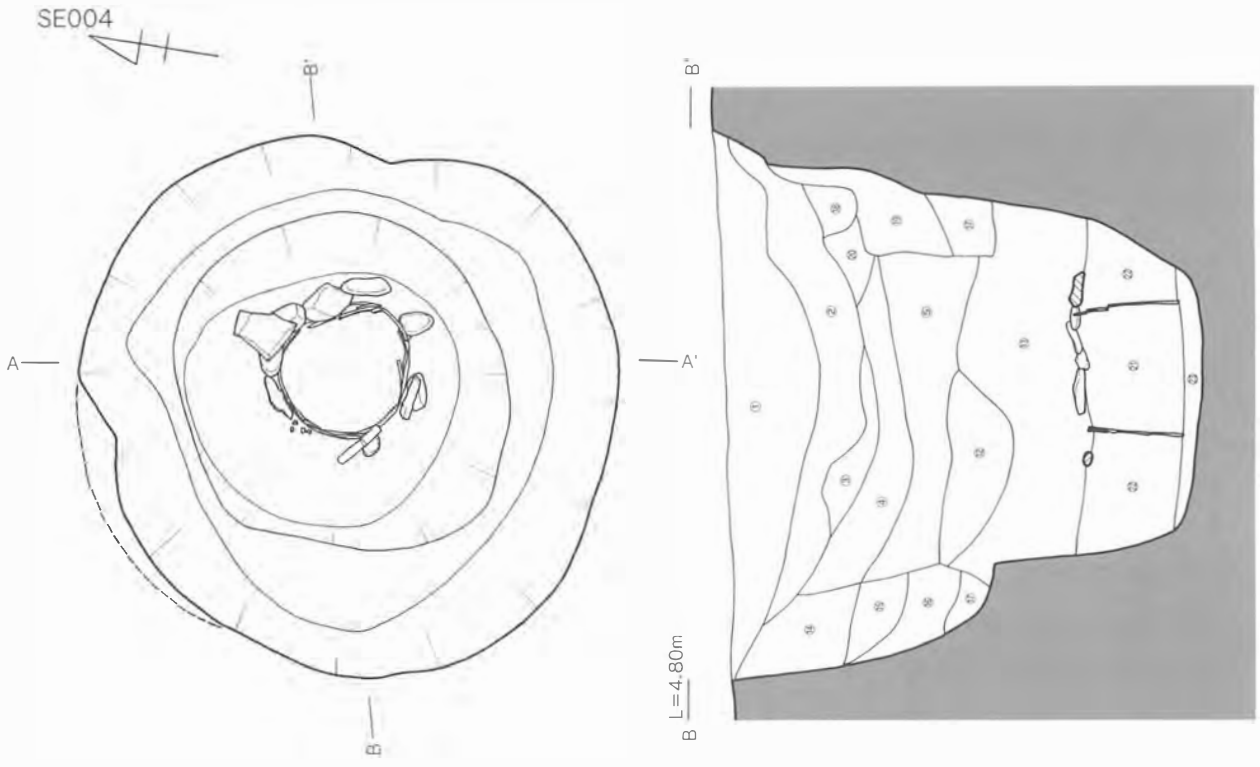


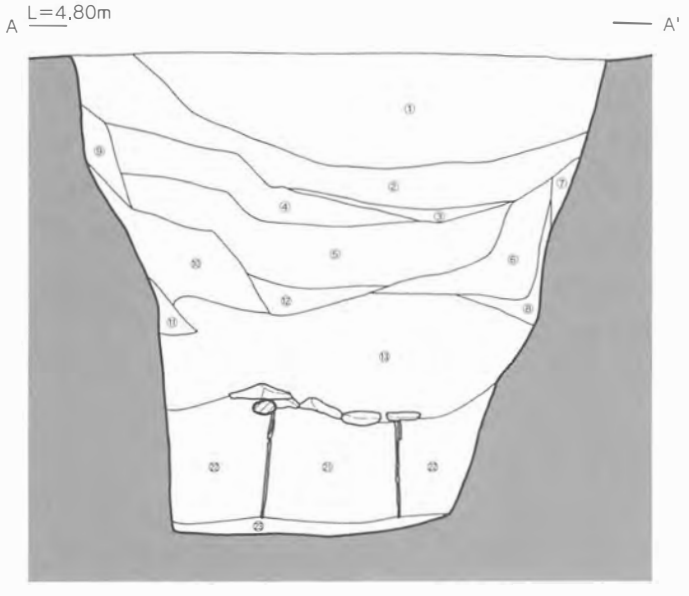
第118図　SK055·056·057·058、ST001実測図

3　貯蔵穴（ST）

ST001（第118図）

平面形はほぼ正方形を呈する。撹乱により東側が壊されている。現存長辺約0.8m、深さ約30cmを測る。底面はフラットである。埋土の状況から、貯蔵穴と考えられる。出土遺物が無いため、内部に納められたものの特定及び遺構の年代は特定出来なかった。





① Hue10YR3/2　黒褐色粘質土(明黄褐色土(10YR6/8)ブロック混入、炭化物・土師片含、土器・礫多量)
② Hue10YR3/2　黒褐色粘質土(明黄褐色土(10YR6/8)ブロック含、礫・炭化物・土師片少量)
③ Hue10YR3/2　黒褐色粘質土(炭化物、明黄褐色土(10YR6/8)ブロック少量)
④ Hue10YR4/1　褐灰色粘質土(明黄褐色土(10YR6/8)ブロック混入、炭化物・土師片少量)
⑤ Hue10YR3/2　黒褐色粘質土(明黄褐色土(10YR6/8)ブロック混入、炭化物・土師片少量、貝殻含)
● Hue10YR3/2　黒褐色粘質土(明黄褐色土(10YR6/8)ブロック混入)
⑦ Hue10YR8/8　黄橙色粘質土(やや砂質、黒褐色土(10YR3/2)ブロック混入)
⑧ Hue10YR8/8　黄橙色粘質土(黒褐色土(10YR3/2)ブロック含)
⑨ Hue10YR7/8　黄橙色粘質土(黒褐色土(10YR3/2)ブロック混入、炭化物・土師片少量)
⑩ Hue2.7Y7/8　黄色砂質粘質土(オリーブ褐色(2.5Y4/4)のシミ沈着)
⑪ Hue10YR3/1　黒褐色粘質土(黄橙色土(10YR8/8)ブロック混入)
⑫ Hue10YR3/1　黒褐色粘質土(木製品・貝殻・有機物多量)
⑬ Hue584/1　黒褐色粘質土(木片含)
⑭ Hue10YR3/2　黒褐色粘質土(明黄褐色土(10YR6/8)ブロック・炭化物・土師片含)
⑮ Hue10YR8/8　黄色粘質土(黒褐色土(10YR3/2)ブロック含)
⑯ Hue10YR3/2　黒褐色粘質土(明黄褐色土(10YR6/8)ブロック含)
⑰ Hue2.5Y5/6　黄褐色砂質土(やや粘性、鉄分沈着)
⑱ Hue2.5Y7/6　明黄褐色粘質土(炭化物・土師片少量、黒褐色土(10YR3/2)ブロック混入)
⑲ Hue2.5Y7/6　明黄褐色粘質土(炭化物・土師片少量)
⑳ Hue10YR3/2　黒褐色粘質土(明黄褐色土(10YR6/8)ブロック含)
㉑ Hue5P4/1　暗紫灰色粘土(木片・貝殻・泥炭混入)
㉒ Hue584/1　黒褐色粘質土
㉓ 砂礫層(オリーブ褐色(2.5Y4/3)砂礫・貝殻・木片混入)

0　1m

第119図　SE004実測図

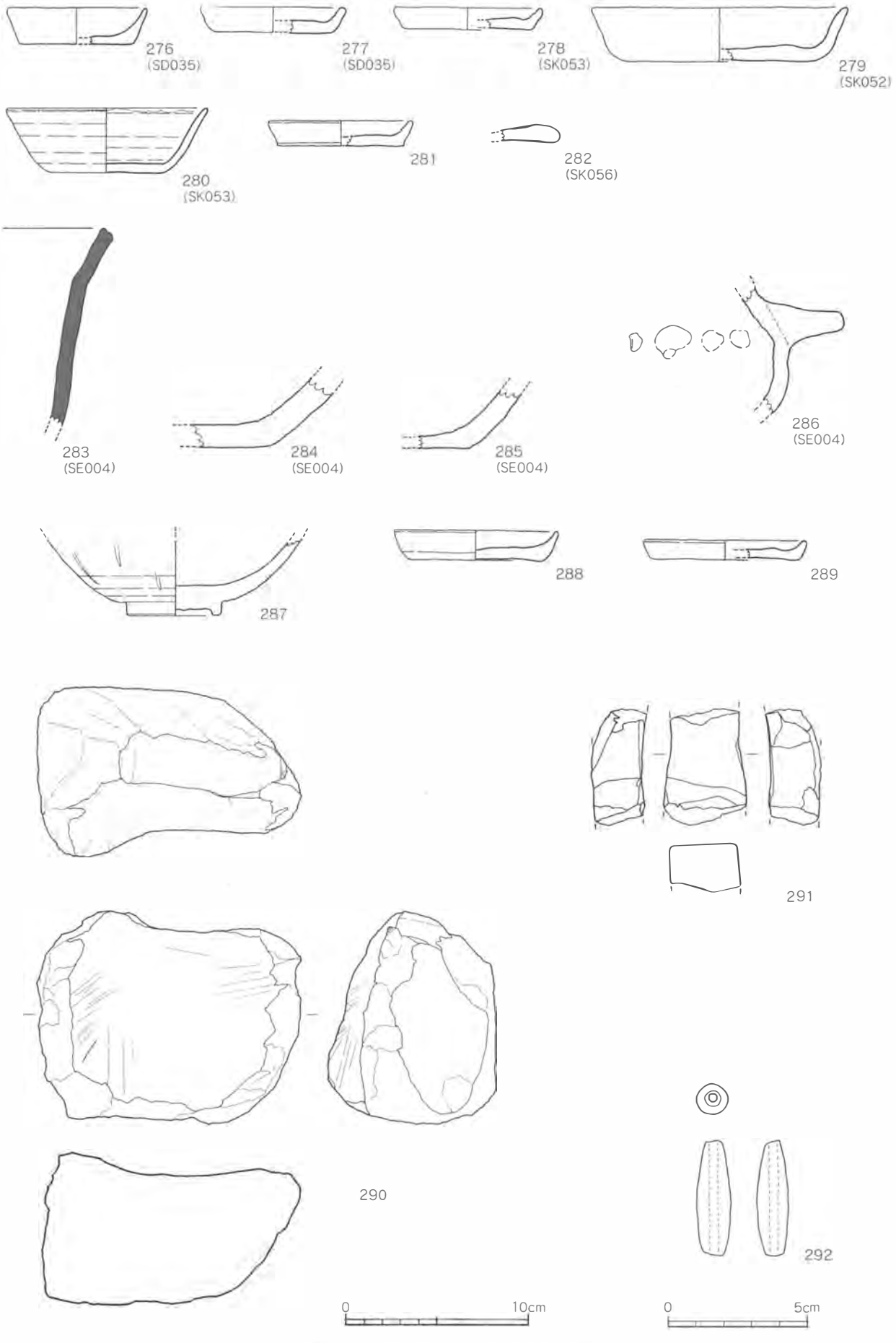
4　井戸（SE）

SE004（第 119 図）

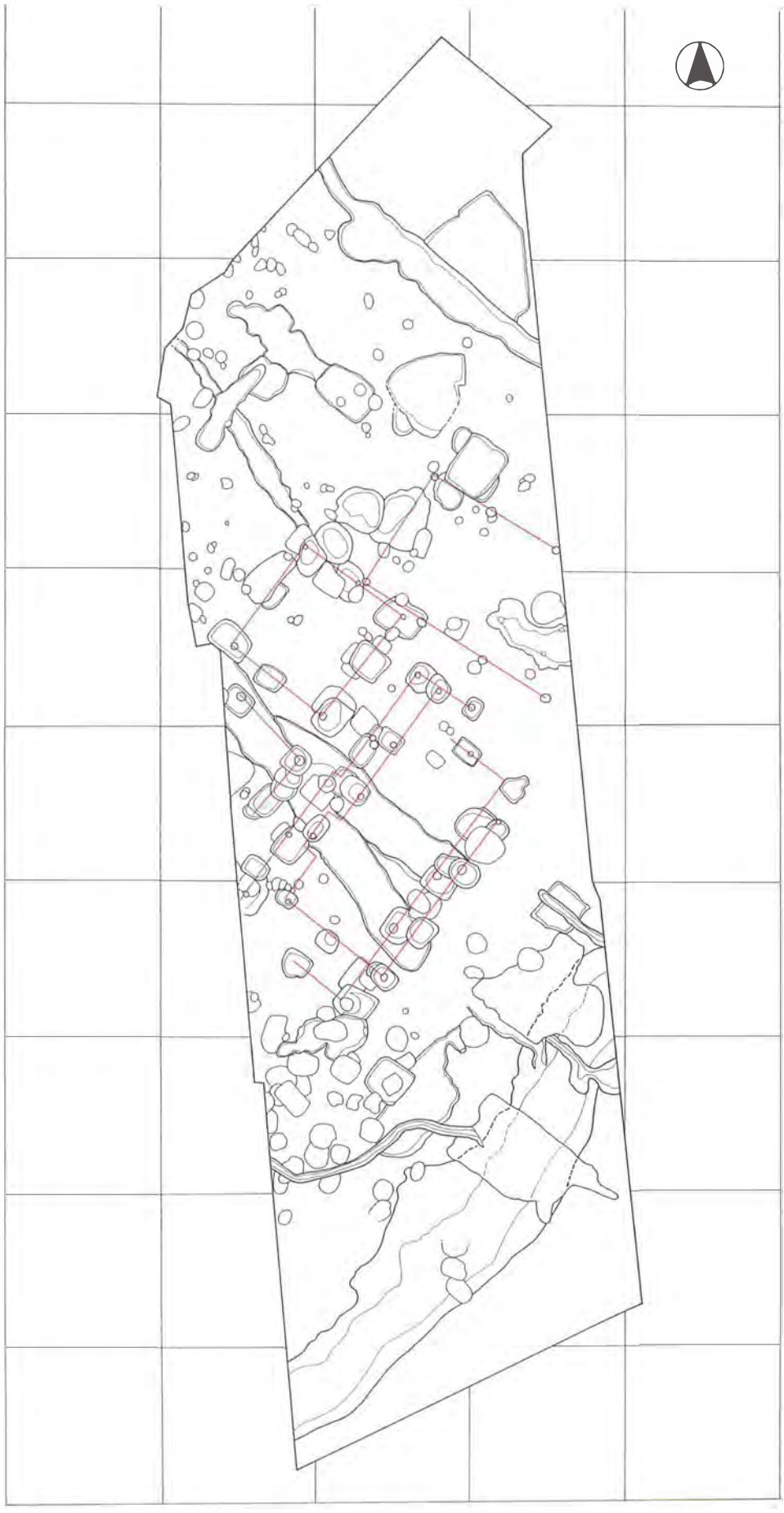
素掘りの井戸である。平面形は円形を呈する。直径約 2.8 ｍ、木枠までの深さ約 1.8 ｍを測る。地表面から３段に分けて掘り下げられている。２段目で木製の井戸枠を用い、木枠の周囲には、縁が損傷する事を防ぐ為に、置石を配している。出土遺物から中世に作られたと考えられる。

Ｘ区の遺物について

276 は杯である。内外面ともになでによる調整が認められる。底面は回転糸切りが認められる。中世の遺物である。277 は杯である。内外面ともになでによる調整が認められる。底面は回転糸切りが認められる。中世の遺物である。278 は杯である。内外面ともになでによる調整が認められる。底面は回転糸切りが認められる。中世の遺物である。279 は杯である。内外面ともなでによる調整が認められる。底部は回転ヘラ切りが認められる。古代の遺物である。280 は杯である。内外面ともなでによる調整が認められる。底部は回転ヘラ切りが認められる。古代の遺物である。281 は杯である。内外面ともになでによる調整が認められる。底面は回転糸切りが認められる。中世の遺物である。282 は釜用具である。『はま』と呼ばれ、釜の焼成に際して使用されるものである。中世の遺物である。283 は須恵器の甕である。内外面ともなでによる調整が認められる。一部に指頭圧痕が認められる。古代の遺物である。284 は瓦器のすり鉢である。外面はなでによる調整が認められる。内面はなでによる調整の後、６本単位の櫛状工具による擂目が施されている。中世の遺物である。285 は瓦器のすり鉢である。外面はなでによる調整が認められる。内面はなでによる調整の後、８本単位の櫛状工具による擂目が施されている。中世の遺物である。286 は羽釜の頸部である。外面はなでによる調整が認められる。外面の頸部下に強いなでによる調整が認められる。内面はなでによる調整と頸部付近に指頭圧痕が認められる。外面に煤が付着している。中世の遺物である。287 は青磁碗の底部である。中世の遺物である。288 は杯である。内外面ともになでによる調整が認められる。底面は回転糸切りが認められる。中世の遺物である。289 は杯である。内外面ともになでによる調整が認められる。底面は回転糸切りが認められる。中世の遺物である。290 は砥石である。石材の種類は不明である。粗仕上げ用の砥石と考えられる。中央が良く磨り減っている。291 は砥石である。石材の種類は不明であるが、現在も熊本天草地方で採れる「天草砥石」に石質は良く似通っている。石の目が細かいので、仕上げ用の砥石と考えられる。SE004 より出土していることから、中世の遺物と考えられる。292 は土錘である。



第120図　SD・SK・SE・Pit出土遺物実測図



第 121 図　XI区　全体遺構配置図

第９節　XI区の遺構とそれに伴う遺物

XI区について

溝状遺構８条と掘立柱建物６棟、土壙12基、不明遺構６基がこの調査区で検出されている。SD044は何層にも堆積が及んでいる。北西から南東に走る溝状遺構が５条、北東から南西に走る溝状遺構が１条検出されている。出土遺物からの中世末から近世にかけての時期に作られたと考えられる。

掘立柱建物はⅧ・Ⅸ区の掘立柱建物と比較してほぼ歪みがない。２間×４間が４棟、２間×２間が１棟、１間×３間が１棟ある。柱穴も明瞭に残っている。柱穴からの遺物が検出されず、作られた時代については、この掘立柱建物を囲むように掘られている溝状遺構の作られた時期とほぼ同じ時期と考えられる。

土壙はＳＫ065のみ古代の遺物を検出した。他の土壙は出土した遺物及び埋土の状況からいずれも中世に作られたと考えられる。また、SK067は焼土を含むが底部に焼けた痕跡が認められなかったため、焼成遺構とは考えられない。

６基の不明遺構は、いずれの遺構にも当てはまらず、ただ人為的な手が加わったと検証されたものを記録した。遺構の性格は特定できなかった。

１　掘立柱建物（SB）

SB029（第122図）

長軸約8.3ｍ、短軸約４ｍの、２間×４間の10本柱の側柱構造の掘立柱建物遺構である。柱穴の深さは、深いもので約70㎝、浅いもので約40㎝である。柱の内側は特に硬化していない。出土した遺物がないため、作られた時期の特定は困難であるが、溝状遺構との位置関係等から近世に作られたと考えられる。

SB030（第123図）

長軸約７ｍ、短軸約4.5ｍの、２間×４間の10本柱の側柱構造の掘立柱建物遺構である。柱穴の深さは、深いもので約60㎝、浅いもので約40㎝である。柱の内側は特に硬化していない。出土した遺物がないため、作られた時期の特定は困難であるが、溝状遺構との位置関係等から近世に作られたと考えられる。

SB031（第124図）

長軸約４ｍ、短軸約3.8ｍの、２間×２間の８本柱の側柱構造の掘立柱建物遺構である。柱穴の深さは、深いもので約80㎝、浅いもので約40㎝である。柱の内側は特に硬化していない。出土した遺物がないため、作られた時期の特定は困難であるが、溝状遺構との位置関係等から近世に作られたと考えられる。

SB032（第125図）

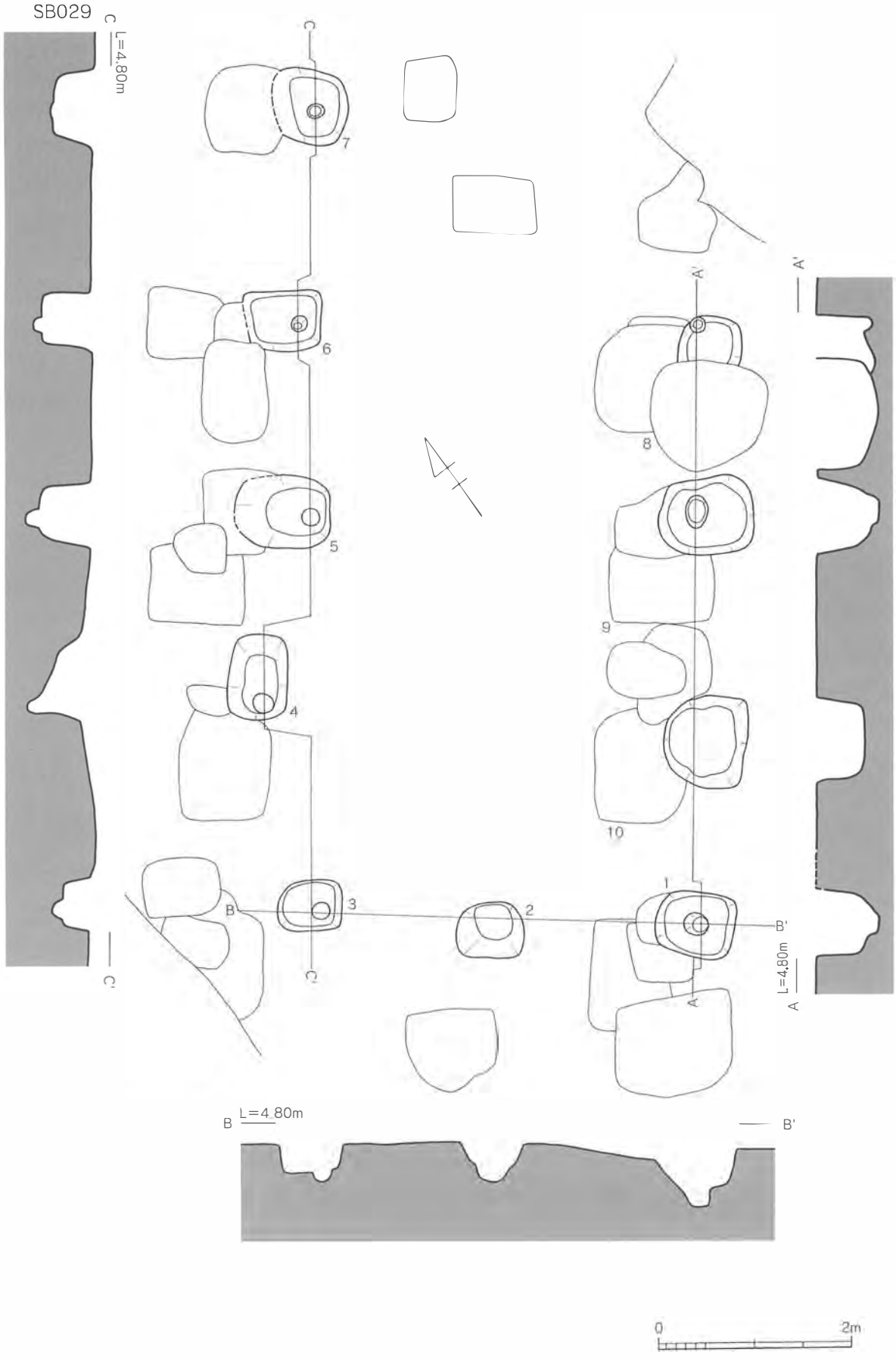
長軸約7.2ｍ、短軸約3.5ｍの、１間×３間の７本柱の側柱構造の掘立柱建物遺構である。柱穴の深さは、深いもので約60㎝、浅いもので約20㎝である。柱の内側は特に硬化していない。出土した遺物がないため、作られた時期の特定は困難であるが、溝状遺構との位置関係等から近世に作られたと考えられる。

SB033（第126図）

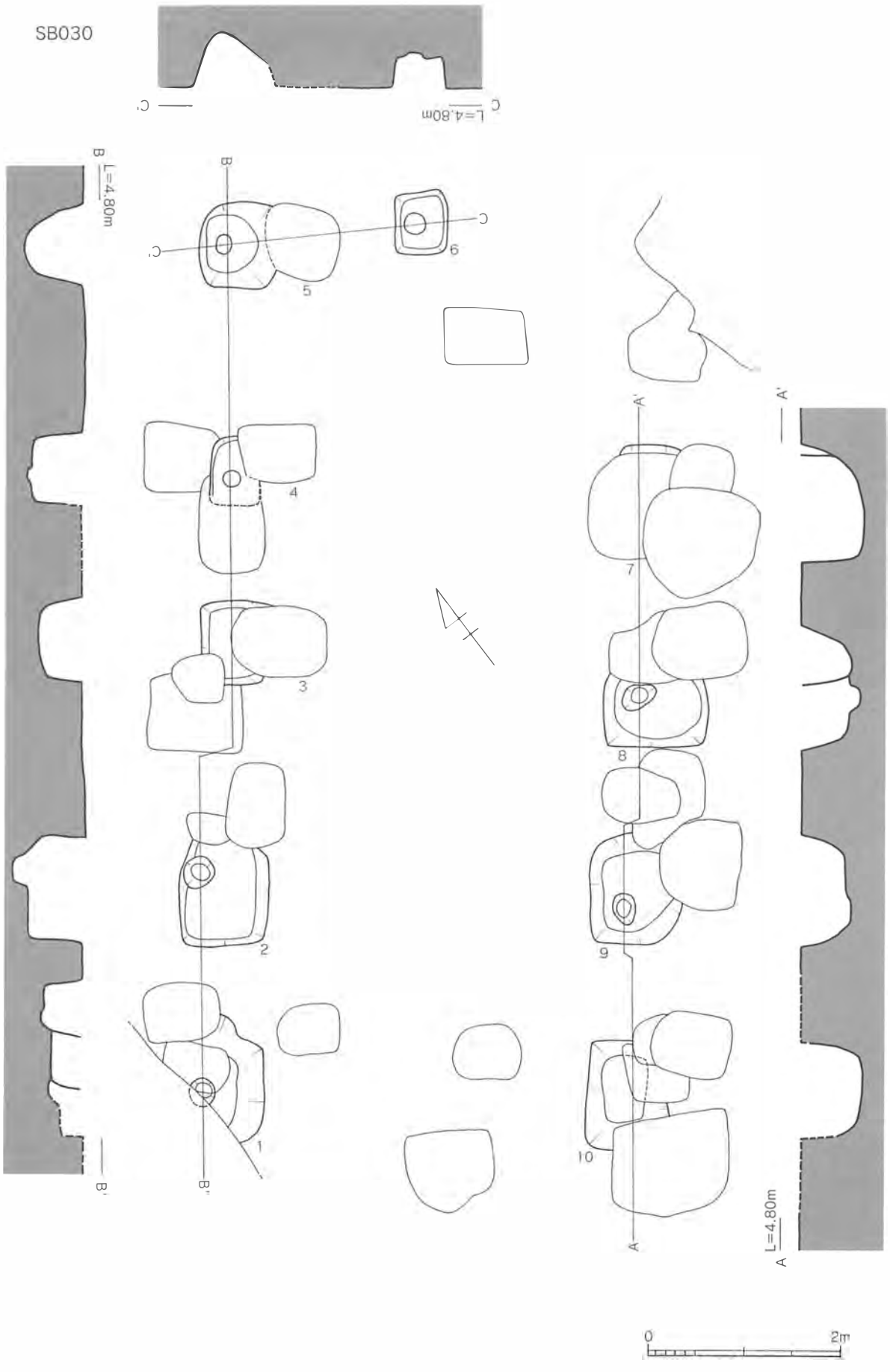
長軸約９ｍ、短軸約５ｍの、２間×５間の12本柱の側柱構造の掘立柱建物遺構である。柱穴の深さは、深いもので約80㎝、浅いもので約10㎝である。柱の内側は特に硬化していない。出土した遺物がないため、作られた時期の特定は困難であるが、溝状遺構との位置関係等から近世に作られたと考えられる。

SB034（第127図）

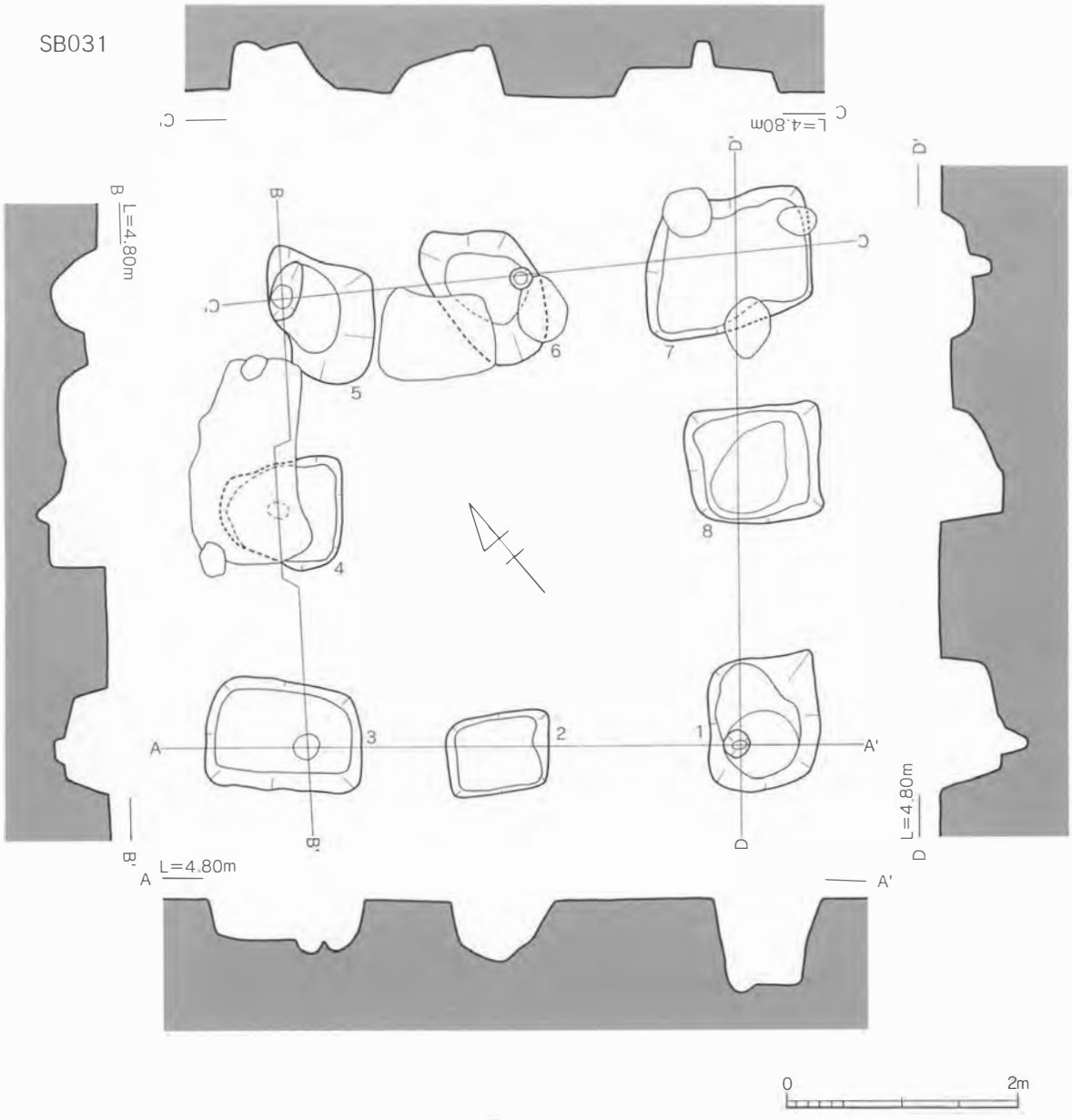
長軸約４ｍ、短軸約3.8ｍの、１間×１間の３本柱の側柱構造の掘立柱建物遺構である。柱穴の深さは、深いもので約40㎝、浅いもので約15㎝である。柱の内側は特に硬化していない。出土した遺物がないため、作られた時期の特定は困難であるが、溝状遺構との位置関係等から近世に作られたと考えられる。



第122図　SB029実測図



第123図　SB030実測図



第124図　SB031実測図

2　溝状遺構（SD）

SD036（第129図）

幅約1.5ｍ、深さ約50㎝、北西から南東方向に約11.5ｍの溝状遺構である。出土遺物が無いため作られた時期は不明である。

SD037（第129図）

SD036に切られている。撹乱により遺構の大部分が壊されているため、全体の形状は不明である。出土遺物が無いため作られた時期は不明である。

SD038（第129図）

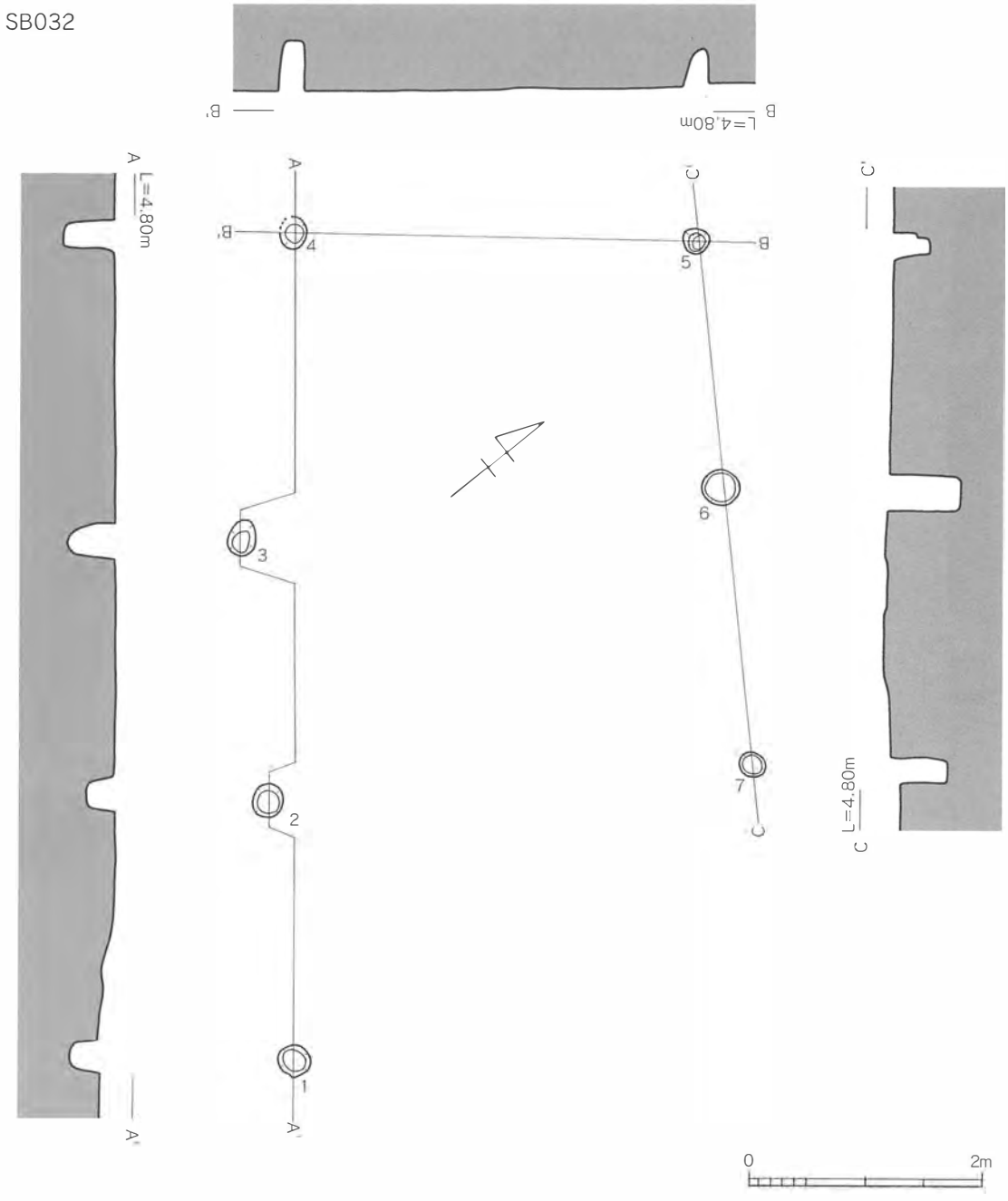
幅約1.5ｍ、深さ約80㎝、北西から南東方向に約７ｍの溝状遺構である。SD037に切られている。出土遺物が無いため作られた時期は不明である。

SD039（第128図）

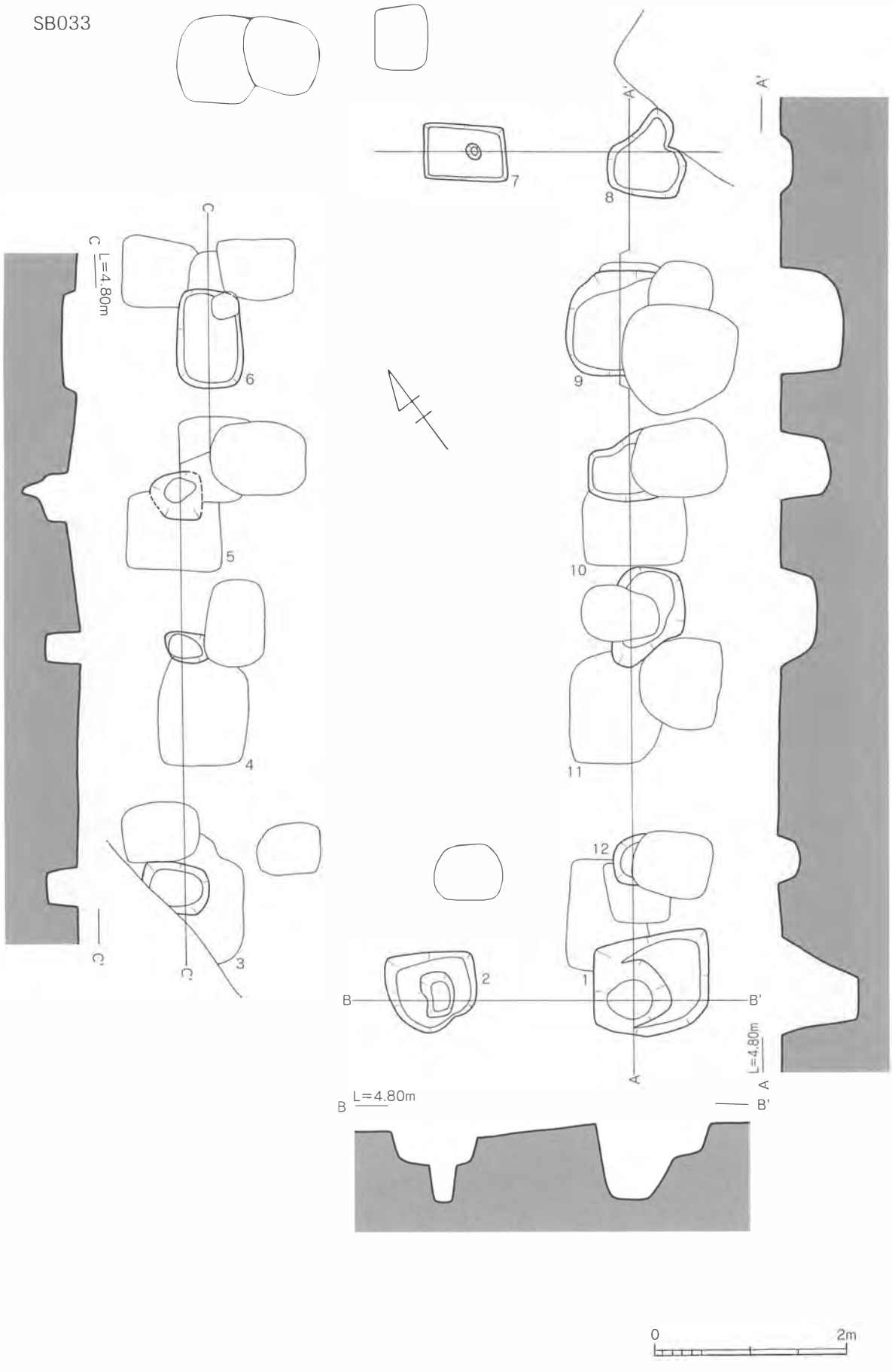
幅約1.2ｍ、深さ約30㎝、北西から南東方向に約9.5ｍの溝状遺構である。古代の遺物が出土しているが、流れ込みのため、この遺構の時期を特定するものではない。

SD040（第128図）

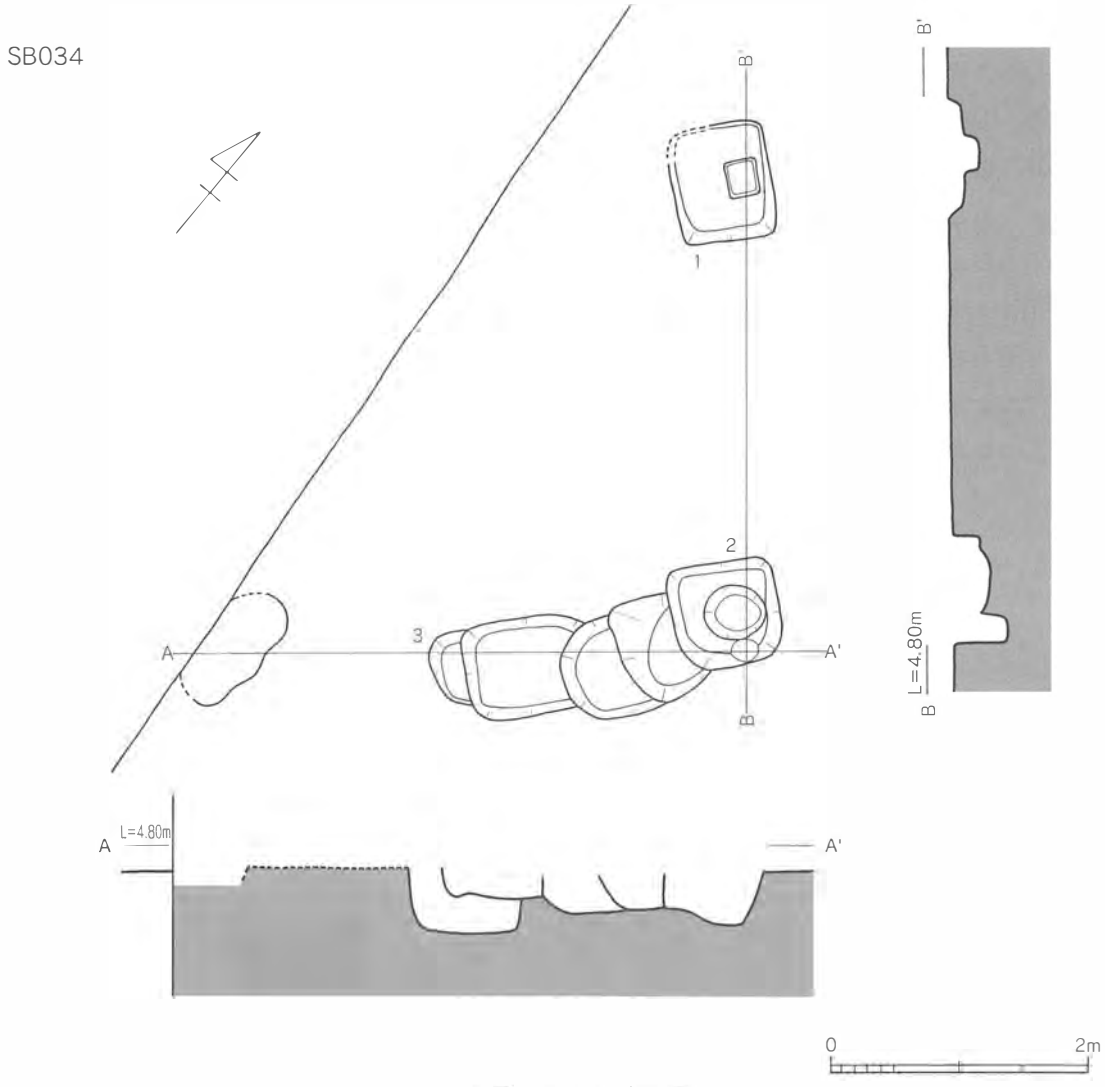
幅約1.2ｍ、深さ約30㎝、北西から南東方向に約2.6ｍの溝状遺構である。出土遺物が無いため作られた時期は不明である。



第125図　SB032実測図



第126図　SB033実測図



第127図　SB034実測図

SD041（第129図）

幅約0.3ｍ、深さ約10㎝で北西から南東方向に約2.7ｍの溝状遺構である。出土遺物が無いため作られた時期は不明である。

SD042（第129図）

幅約0.5ｍで北西から南東方向に約9.5ｍの溝状遺構である。出土遺物が無いため作られた時期は不明である。

SD043（第129図）

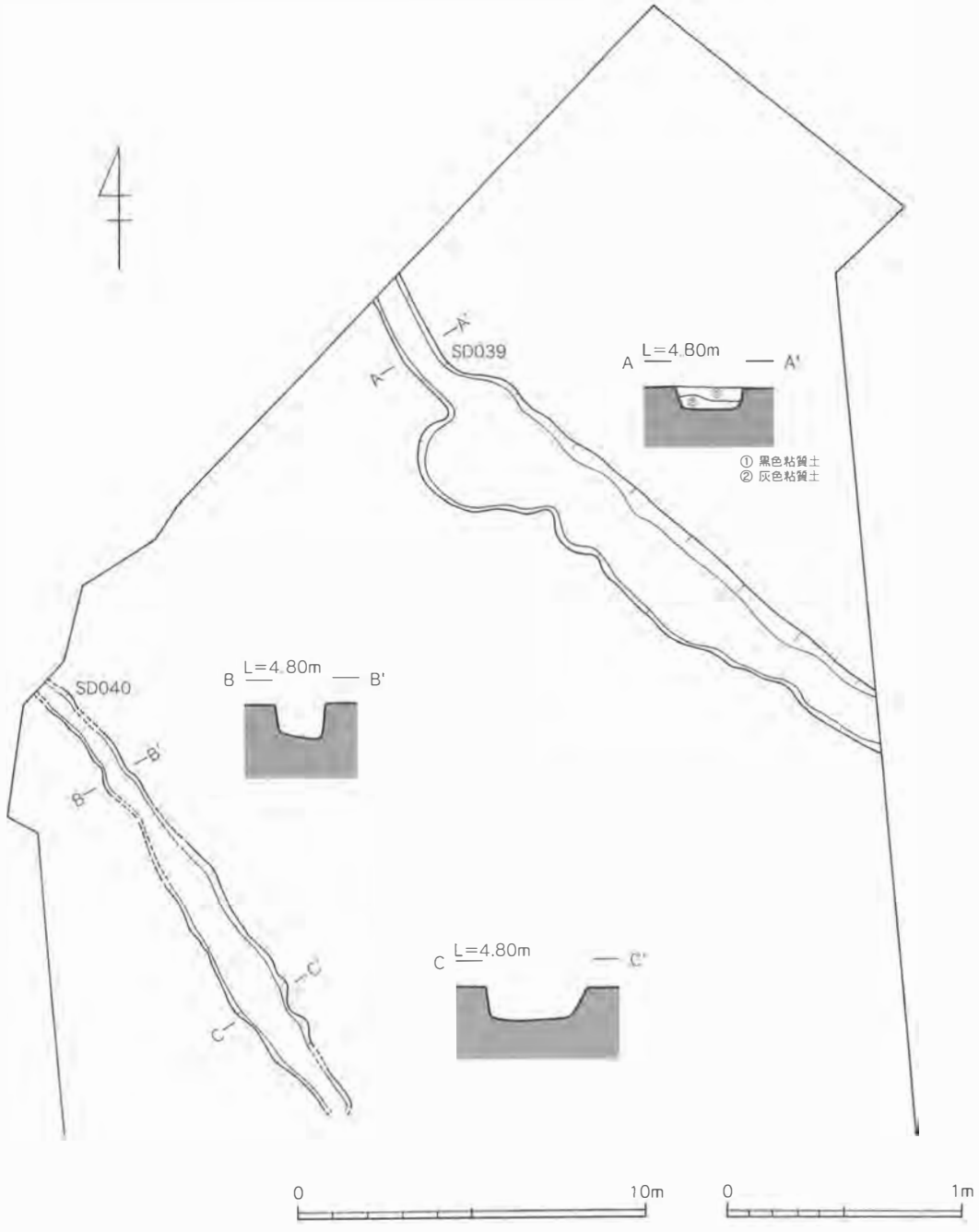
幅約0.3ｍ、深さ約10㎝、西から東方向に蛇行しながら約７ｍの溝状遺構である。出土遺物が無いため作られた時期は不明である。

SD044（第129図）

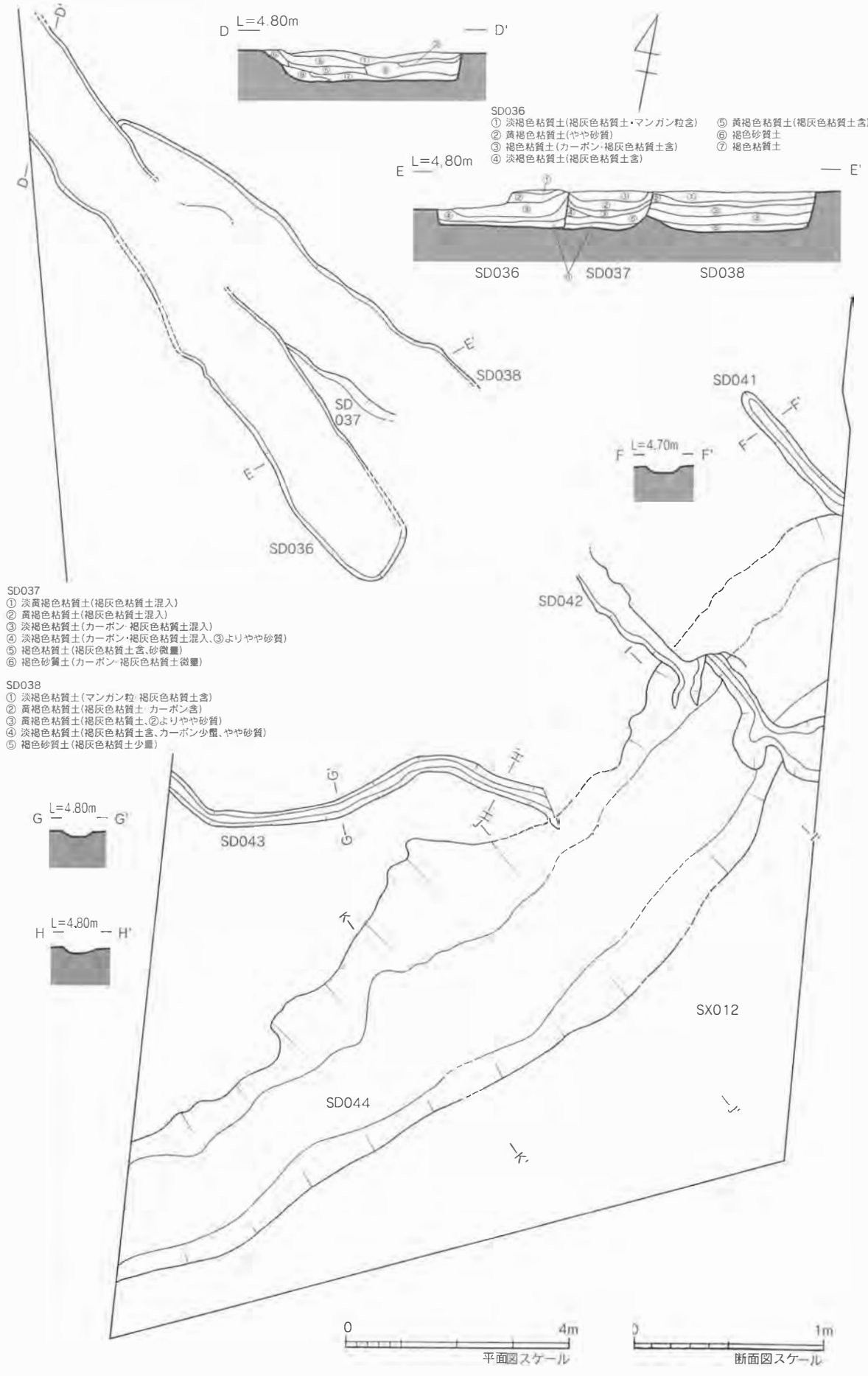
最も広い幅4.5ｍ、狭い幅2.3ｍで深さ1.2ｍを測る。出土遺物から中世末から近世にかけて作られたと考えられる。①層からは近世の染め付けがまとまって出土している。②層からは中世末の土師器、瓦器、火車等が多量に出土している。④・⑤層までは、遺物が出土するが、それ以下の層では遺物を検出することがなかった。このことから、SD044は作られた時期から徐々に埋まり始め、中世末から近世にかけて、その役目を終わったと考えられる。

SD044出土の遺物について

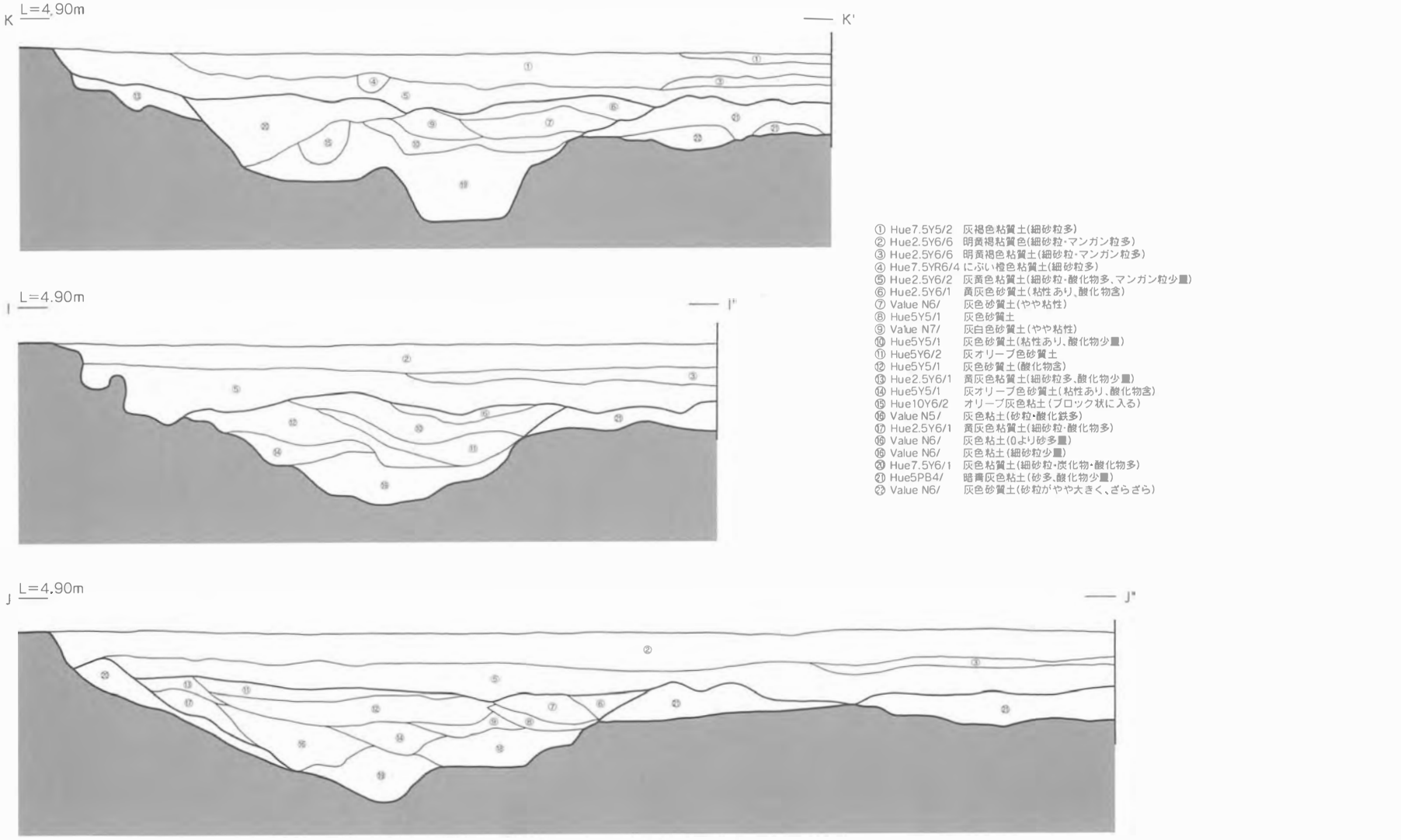
293は坏である。内外面ともになでによる調整が認められる。底部はヘラ切り後なでによる調整が認められる。古代の遺物である。294は滑石製の石鍋の底部である。内外面とも、工具による削りだした痕跡が認められる。中世の遺物である。



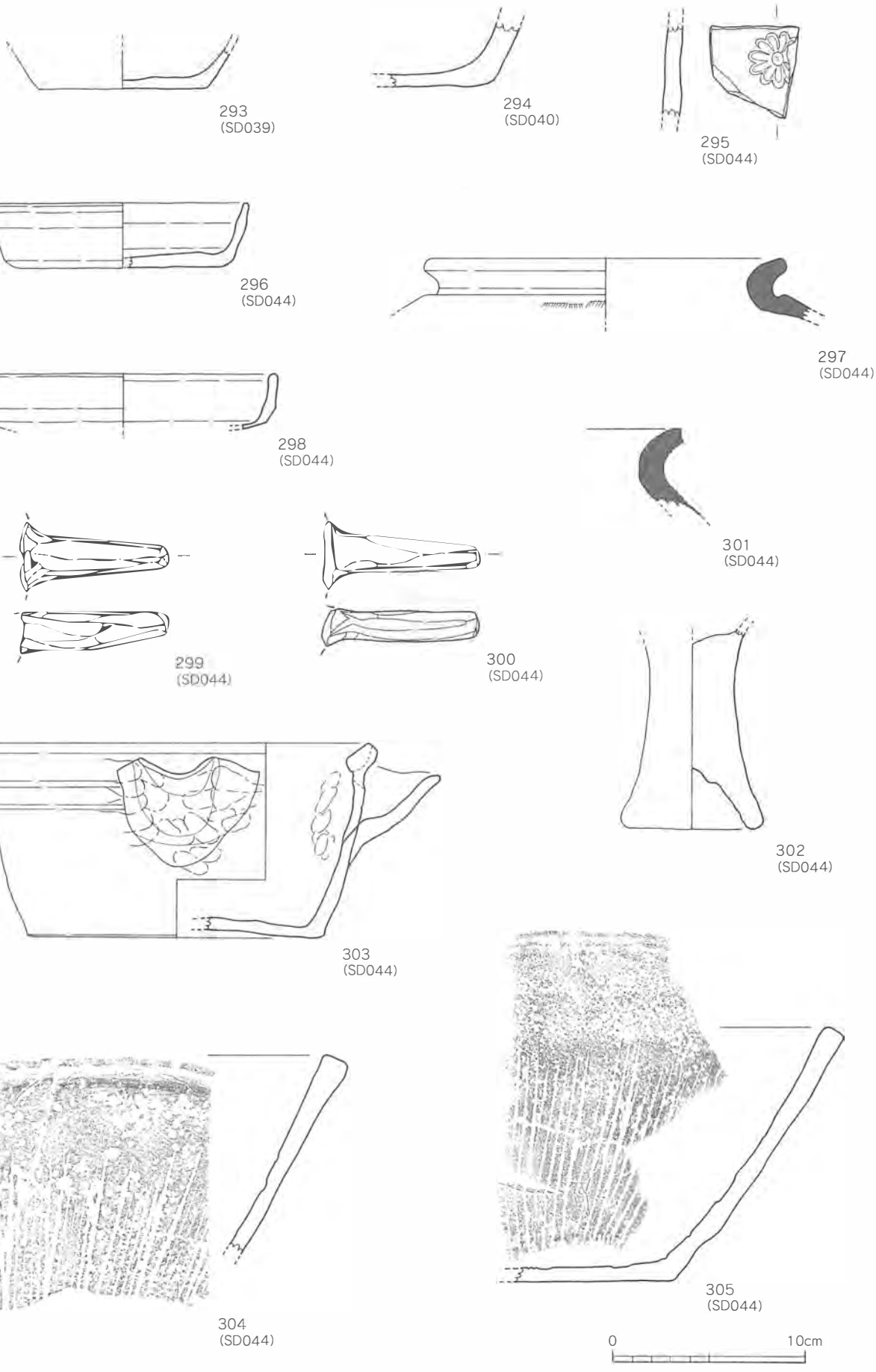
第128図　SD039･040実測図（平面図S＝1/100,断面図S＝1/30）



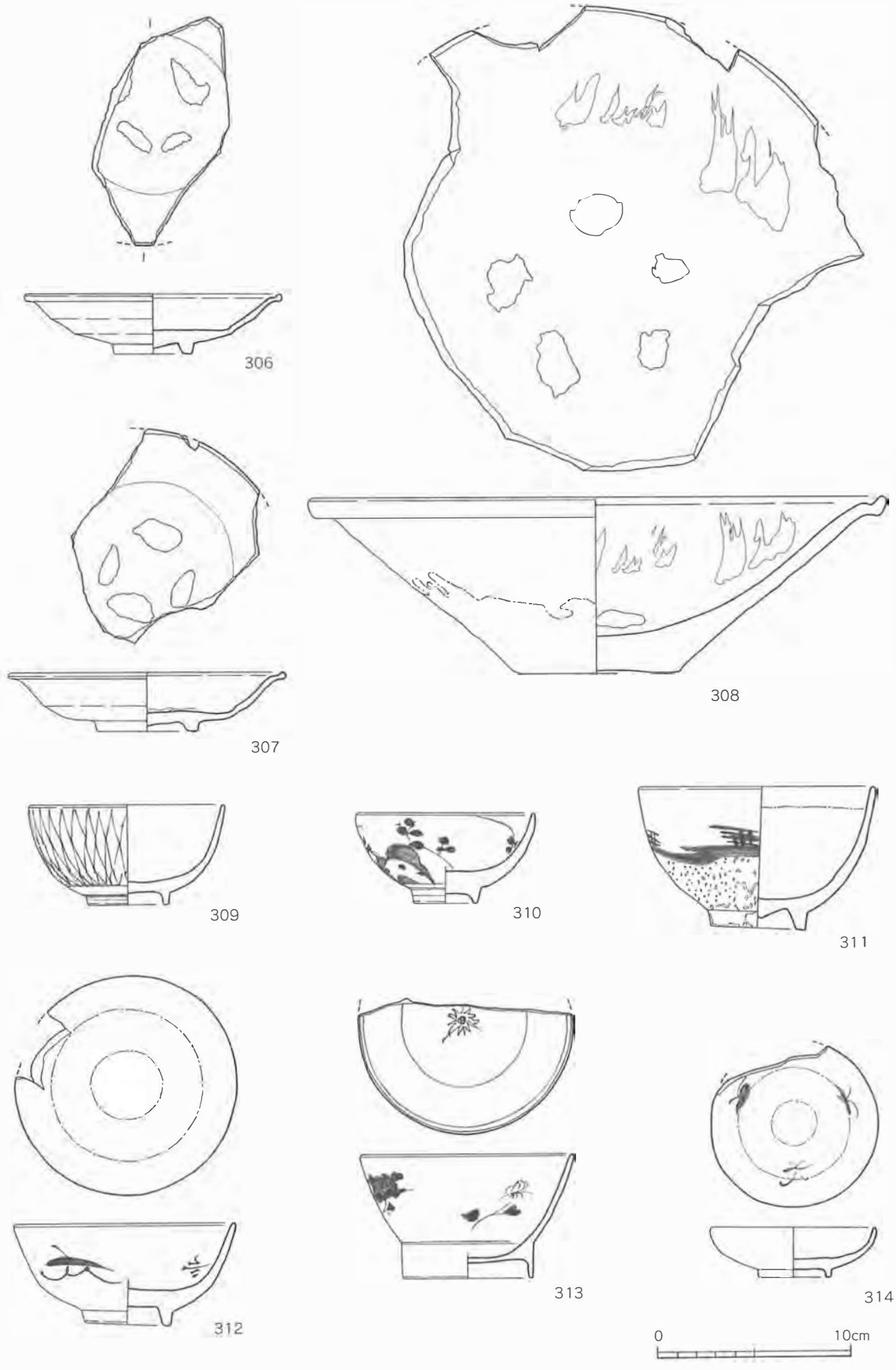
第129図　SD036・037・038・041・042・043・044、SX012実測図(S＝1/30)



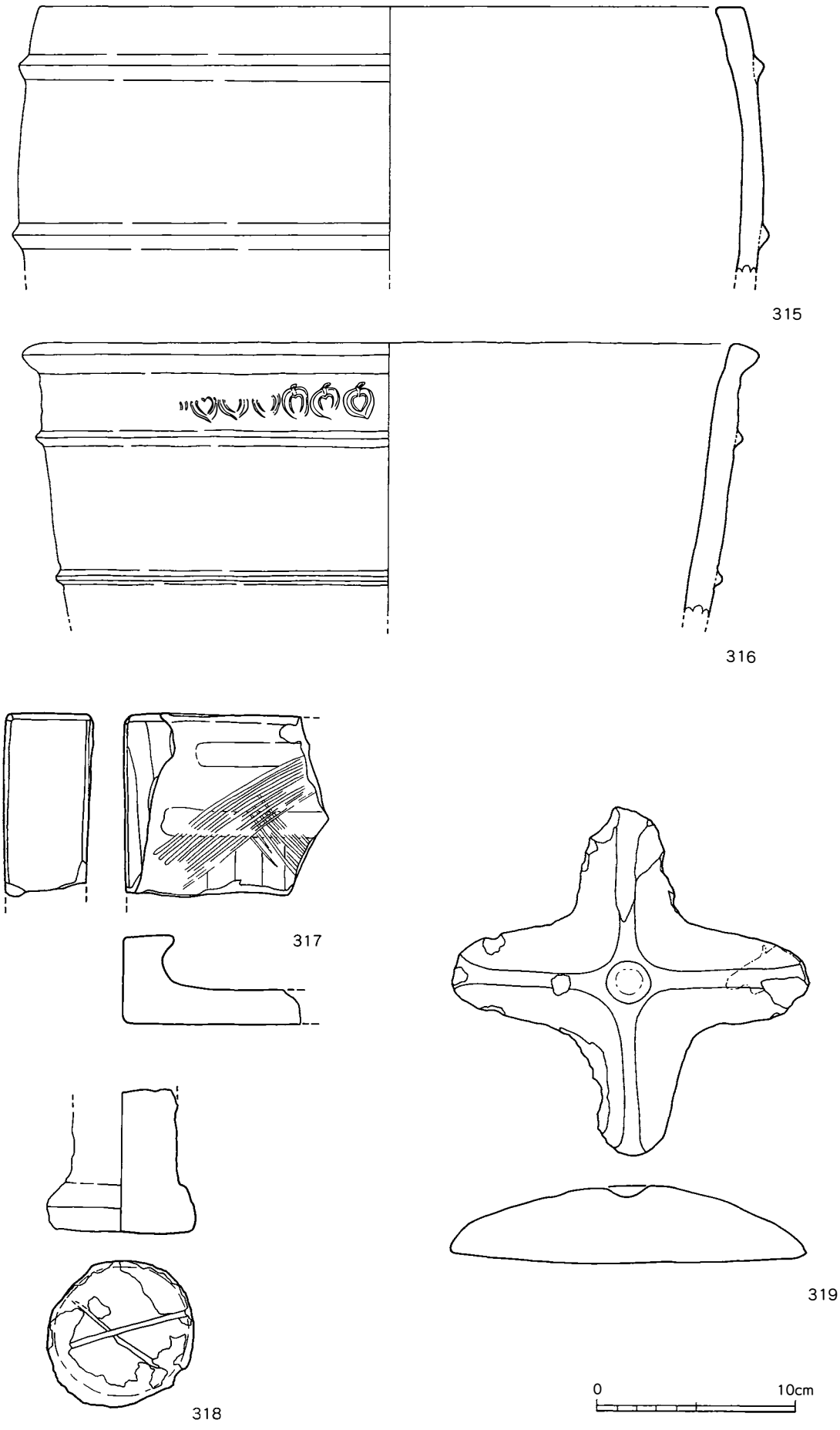
第130図　SD044断面図



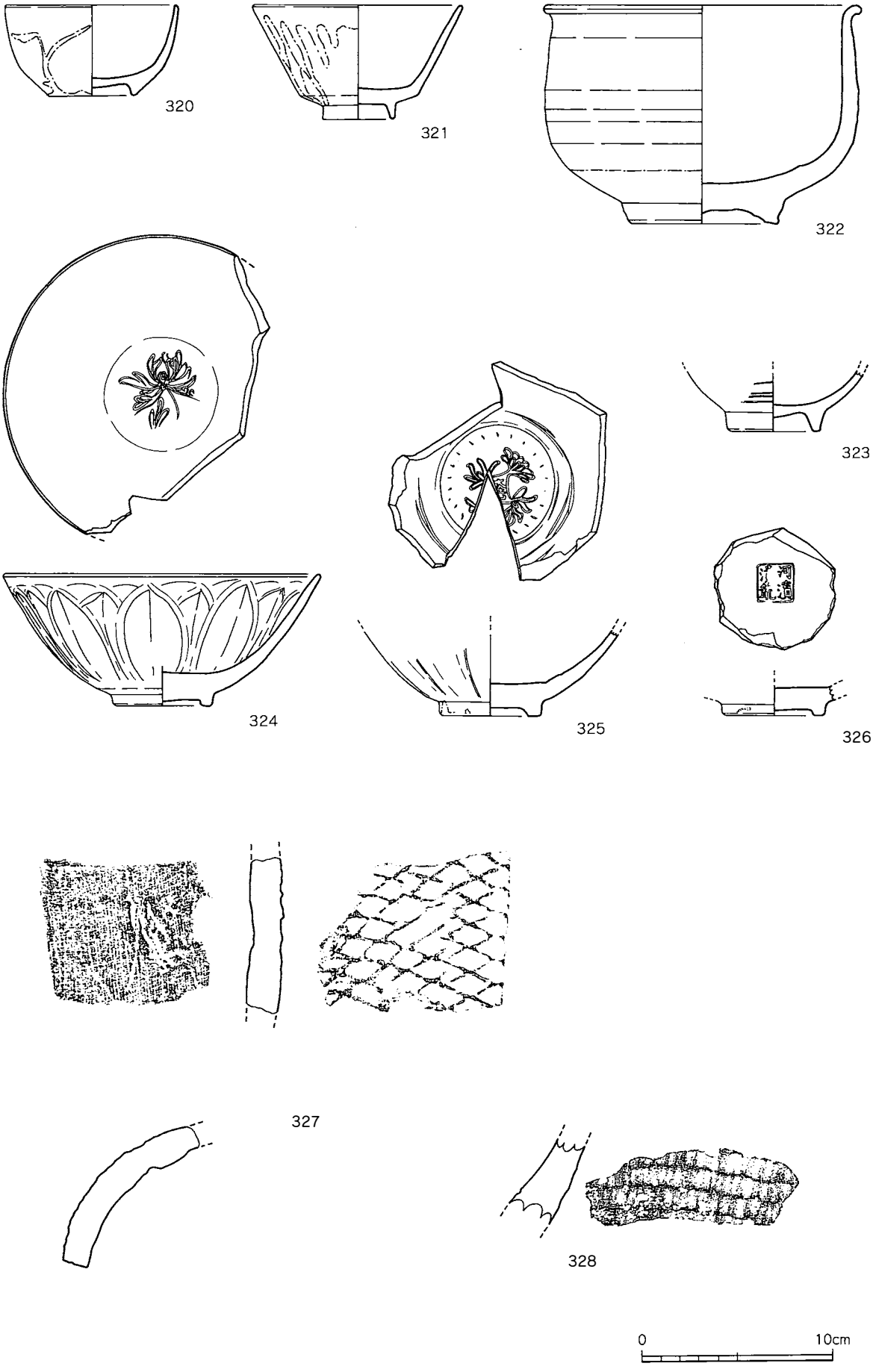
第131図　SD039･040･044出土遺物実測図



第132図　SD044出土遺物実測図(1)



第133図　SD044出土遺物実測図(2)



第134図　SD044出土遺物実測図(3)

295は火車である。外面はなでによる調整後にヘラ状工具による花文を施している。中世の遺物である。296は杯である。内外面ともになでによる調整が認められる。底部はヘラ切り後なでによる調整が認められる。古代の遺物である。297は須恵器の壺である。外面頸部は工具よる強いなでが認められる。胴部はハケ目後なでによる調整が認められる。内面は回転なでによる調整が認められる。中世の遺物である。298は柄付小型鍋である。鍋の底には熱を受けた痕跡と少量の煤が認められる。柄の部分は欠落している。外面は回転ヘラ削りによる調整が認められる。内面は回転なでによる調整が認められる。中世末頃の遺物である。299は柄付小型鍋の柄である。鍋の部分は無い。外面はなでによる調整が認められる。中世末頃の遺物である。300は柄付小型鍋の柄である。鍋の部分は無い。外面はなでによる調整が認められる。中世末頃の遺物である。301は須恵器の甕の口縁である。外面は叩きによる調整が認められる。内面はなでによる調整が認められる。中世末頃の遺物である。302は須恵器の高坏の脚部である。外面はヘラ削り後なでによる調整が認められる。底部はヘラ削り調整が認められる。古墳時代の遺物である。303は片口の鉢である。外面はヘラ削り後なでによる調整が認められる。内面は回転なでによる調整が認められる。中世の遺物である。304は瓦質の擂鉢である。内面はなでによる調整が認められる後、櫛状工具による６本単位の擂目。外面はなでによる調整が認められる。305は瓦質の擂鉢である。内面はなでによる調整が認められる後、櫛状工具による５本単位の擂目。外面はなでによる調整が認められる。306は陶器の杯である。外面は回転ヘラ削り調整が認められる。内面は回転なでによる調整が認められる。見込みに４ヶ所胎土目が認められる。高台は削りだしで作られている。中世の遺物である。307は陶器の杯である。外面は回転ヘラ削りによる調整が認められる。内面は回転なでによる調整が認められる。見込みに４ヶ所胎土目が認められる。高台は削りだしで作られている。中世の遺物である。308は陶器の鉢である。内外面ともに回転なでによる調整後に鉄釉を施している。底部は回転ヘラ削りが認められる。見込みに５ヶ所胎土目認められる。中世の遺物である。309は染付けの碗である。内外面ともに回転なでによる調整後に染付施釉を施している。高台は削りだしで作られている。近世の遺物である。310は染付けの碗である。内外面ともに回転なでによる調整後に染付施釉を施している。高台は削りだしで作られている。近世の遺物である。311は染付けの碗である。内外面ともに回転なでによる調整後に染付施釉を施している。高台は削りだしで作られている。近世の遺物である。312は染付けの碗である。内外面ともに回転なでによる調整後に染付施釉を施している。高台は削りだしで作られている。近世の遺物である。313は内外面ともに回転なでによる調整後に染付施釉を施している。高台は削りだしで作られている。近世の遺物である。314は内外面ともに回転なでによる調整後に染付施釉を施している。高台は削りだしで作られている。内外面ともに回転ナデのち染付施釉。見込みは蛇の目状に釉掻き取りしている。近世の遺物である。315は瓦質の火車である。内外面ともに回転なでによる調整が認められる。突帯は貼り付けである。316は瓦質の火車である。内外面ともに回転なでによる調整が認められる。突帯は貼り付けである。317は火車である。内面は丁寧になでた後、５本を一単位とする条線が掻かれている。条線は強いが粗く、互いに斜交している。外面は丁寧ななでによる調整が認められる。318は『トチン』と呼ばれる窯道具である。319は『タコハマ』と呼ばれる窯道具である。320は陶器の碗である。内外面ともに回転なでによる調整が認められる。外面上部に３本の沈線がある。全面施釉である。高台は削り出しで作られている。中世の遺物である。321は青磁の碗である。内外面ともに回転なでによる調整が認められる。全面施釉である。中世の遺物である。322は青磁の鉢である。内外面ともに回転なでによる調整が認められる。底部は削り出しである。中世の遺物である。323は青磁碗である。内外面ともに回転なでによる調整が認められる。外面に沈線あり。削りだし高台である。中世の遺物である。324は青磁の碗である。外面は回転ヘラ削り後ヘラによる蓮弁文が施されている。内面は回転なでによる調整が認められる。見込みには印文（草花）あり。高台は削りだしで作られている。中世の遺物である。

325は青磁の碗である。外面は回転ヘラ削り後ヘラによる蓮弁文が刻まれている。内面は回転なでによる調整後にヘラによる施文。見込みには印文（草花）あり。高台は削りだしである。中世の遺物である。326は青磁の碗である。内外面ともに回転なでによる調整が認められる。見込みに文字印文（河濱遺範）あり。高台は削りだしである。南宋からの貿易陶磁器である。中世の遺物である。327は丸瓦である。外面は斜格子目叩きが施され、内面は布目痕が残る。中世の遺物である。328は瓦である。外面は斜格子叩きが施され、内面は布目痕が残る。中世の遺物である。

3　土壙（SK）

SK061（第135図）

平面形は隅丸長方形を呈する。他の土壙に切られている。長辺約1.8ｍ、短辺約1.4ｍ、深さ約30㎝である。

SK062（第135図）

平面形は隅丸長方形を呈する。長辺約1.8ｍ、短辺約1.4ｍ、深さ約30㎝で底はフラットである。

SK063（第135図）

平面形は楕円形を呈する。ＳＫ061に切られている。長辺0.8ｍ、現存短辺約0.4ｍ、深さ約10㎝で底はフラットである。

SK064（第135図）

平面形はやや歪な隅丸長方形を呈する。ＳＫ061に切られている。長辺約１ｍ、短辺約0.6ｍ、深さ約30㎝で底はフラットである。

SK065（第135図）

平面形は隅丸長方形を呈する。ＳＫ061に切られている。長辺約1.7ｍ、短辺約1.4ｍ、深さ約25㎝で底はフラットでない。古代の遺物を含む事から、古代に作られたと考えられる。

SK066（第135図）

平面形は不整形を呈する。ＳＫ065を切っている。長辺約1.2ｍ、短辺約1.1ｍ、深さ約25㎝で底はややフラットである。

SK067（第136図）

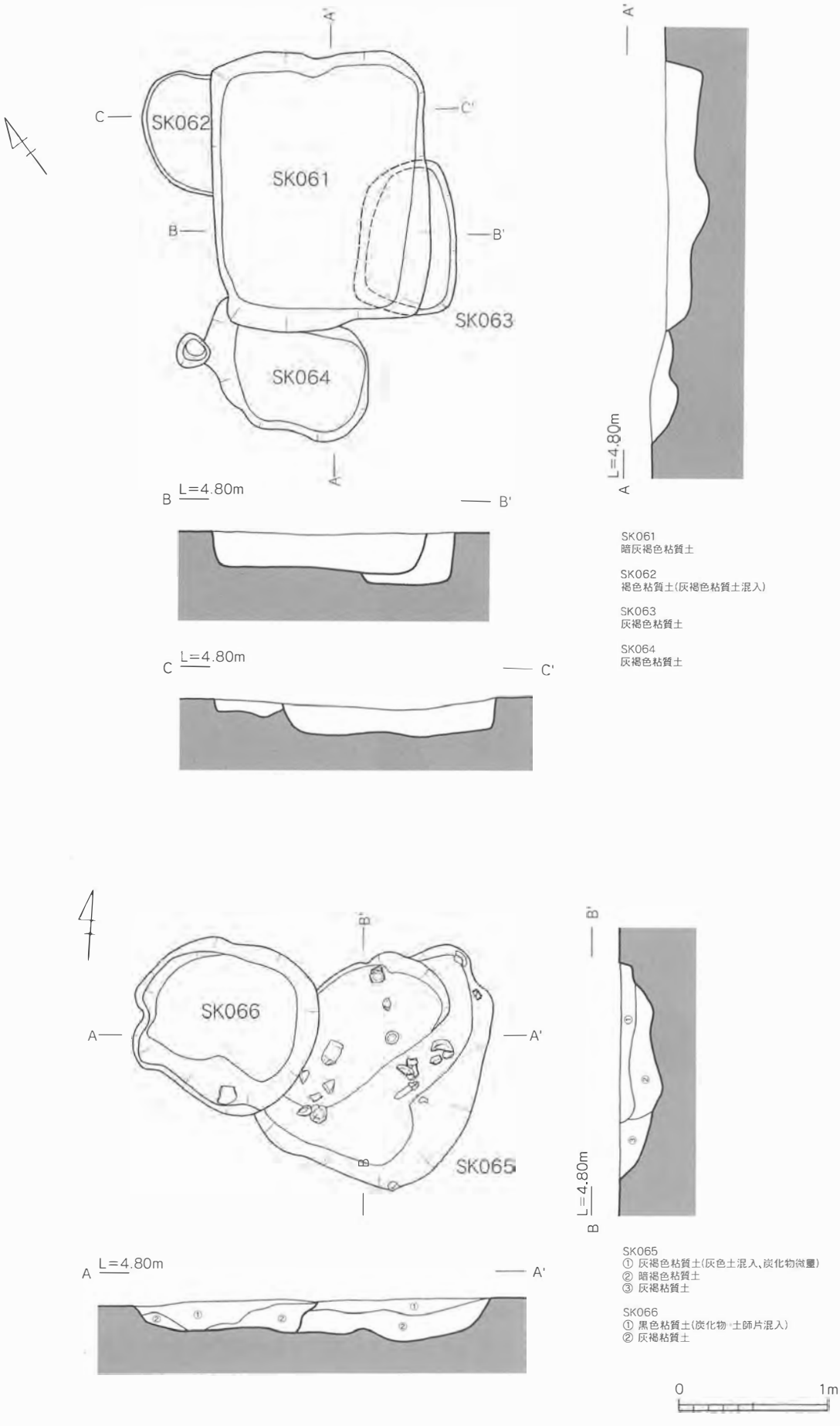
平面形は楕円形を呈する。長辺約1.4ｍ、短辺約1.2ｍ、深さ約40㎝で底は丸みを帯びている。上層に焼土を多量に含むが、壁面に焼成痕が無いため、焼成土壙ではない。

SK068（第136図）

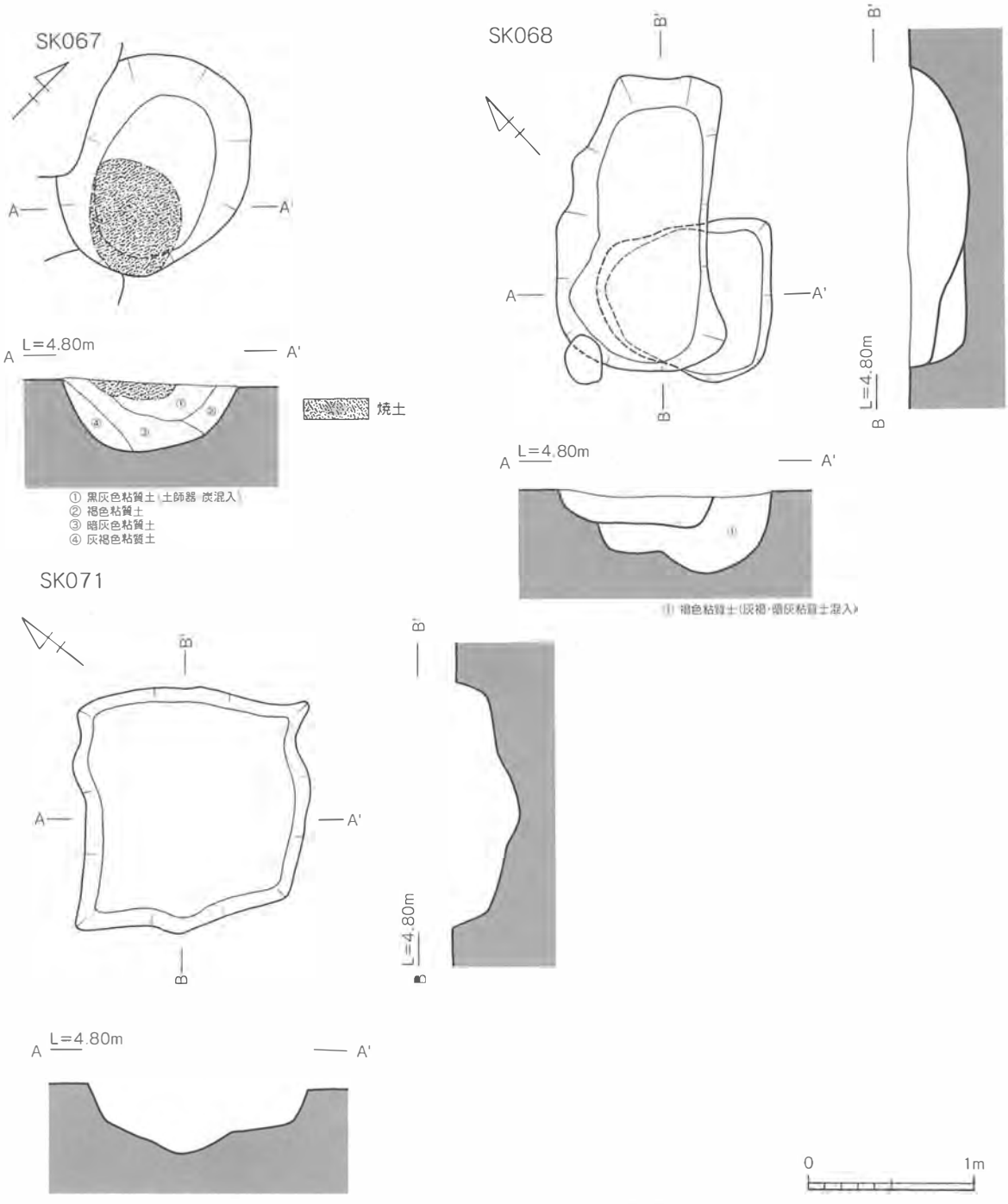
平面形は不整形を呈する。二つの土壙が切り合っているかのようであるが、調査により単一の遺構として報告されている。長辺約1.8ｍ、短辺約1.3ｍ、深さ約45㎝で、２段に掘られている。

SK071（第136図）

平面形は不整形を呈する。長辺約1.5ｍ、短辺約1.3ｍ、深さ約40㎝である。この遺構からは、中世の火鉢が検出されていることから、中世に掘られたと考えられる。



第135図　SK061・062・063・064・065・066実測図

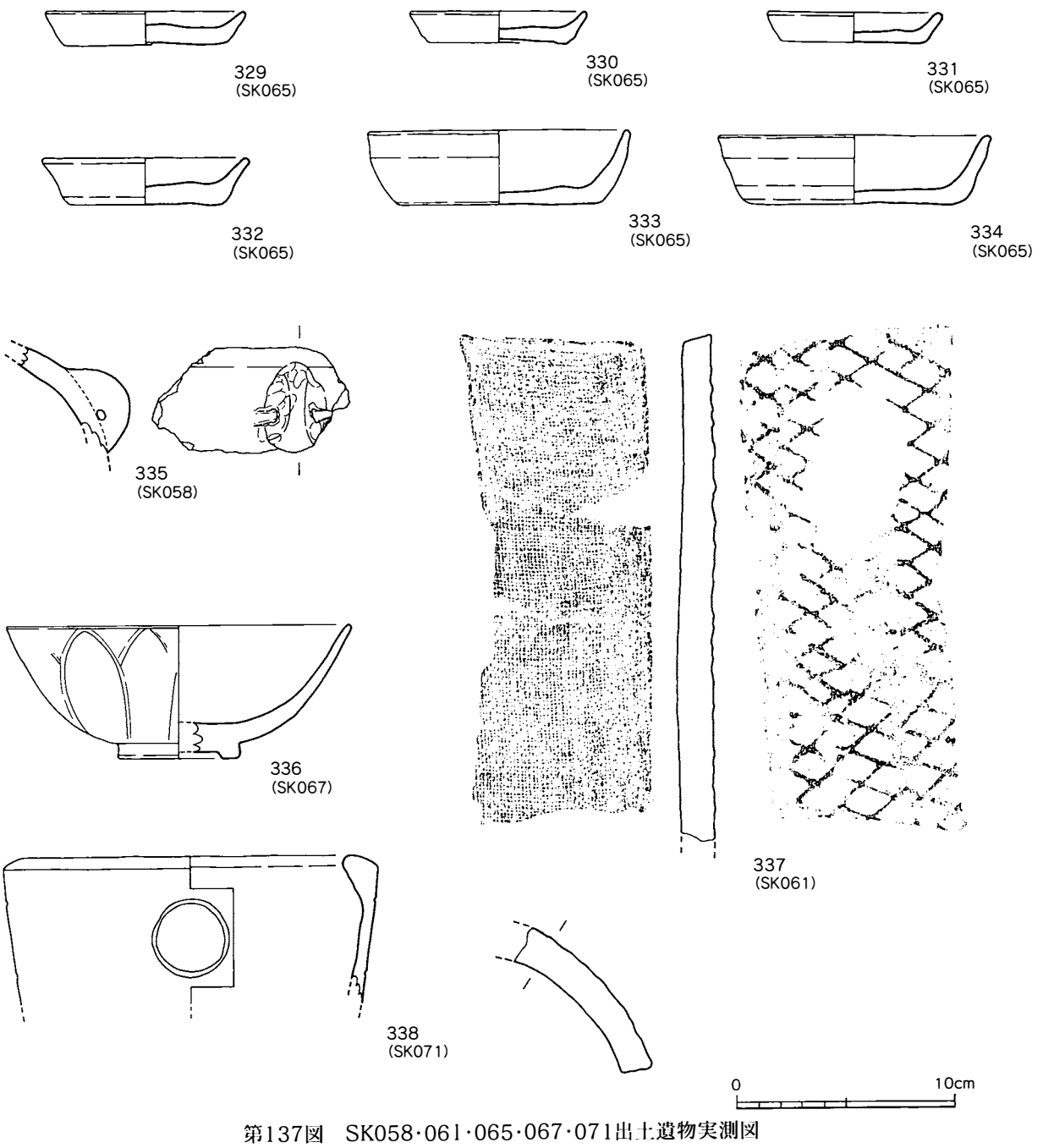


第136図　SK067･068･071実測図

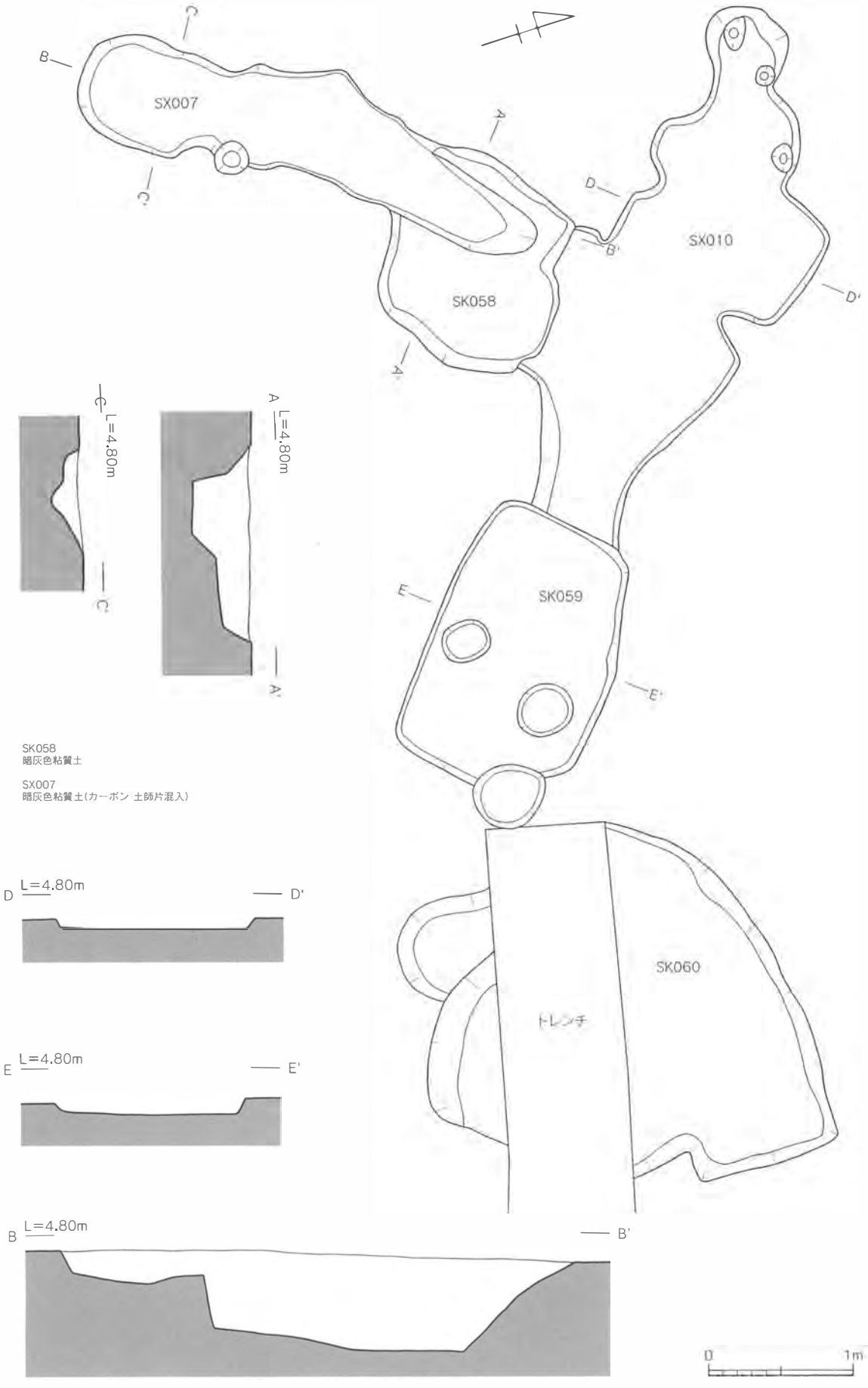
SK058・061・065・067・061の遺物ついて（第137図）

329は杯である。内外面ともになでによる調整が認められる。底面は回転糸切りが認められる。中世の遺物である。330は杯である。内外面ともになでによる調整が認められる。底面は回転糸切りが認められる。中世の遺物である。331は杯である。内外面ともになでによる調整が認められる。底面は回転糸切りが認められる。中世の遺物である。332は杯である。内外面ともになでによる調整が認められる。底面は回転糸切りが認められる。中世の遺物である。333は杯である。内外面ともになでによる調整が認められる。底面は回転糸切りが認められる。中世の遺物である。

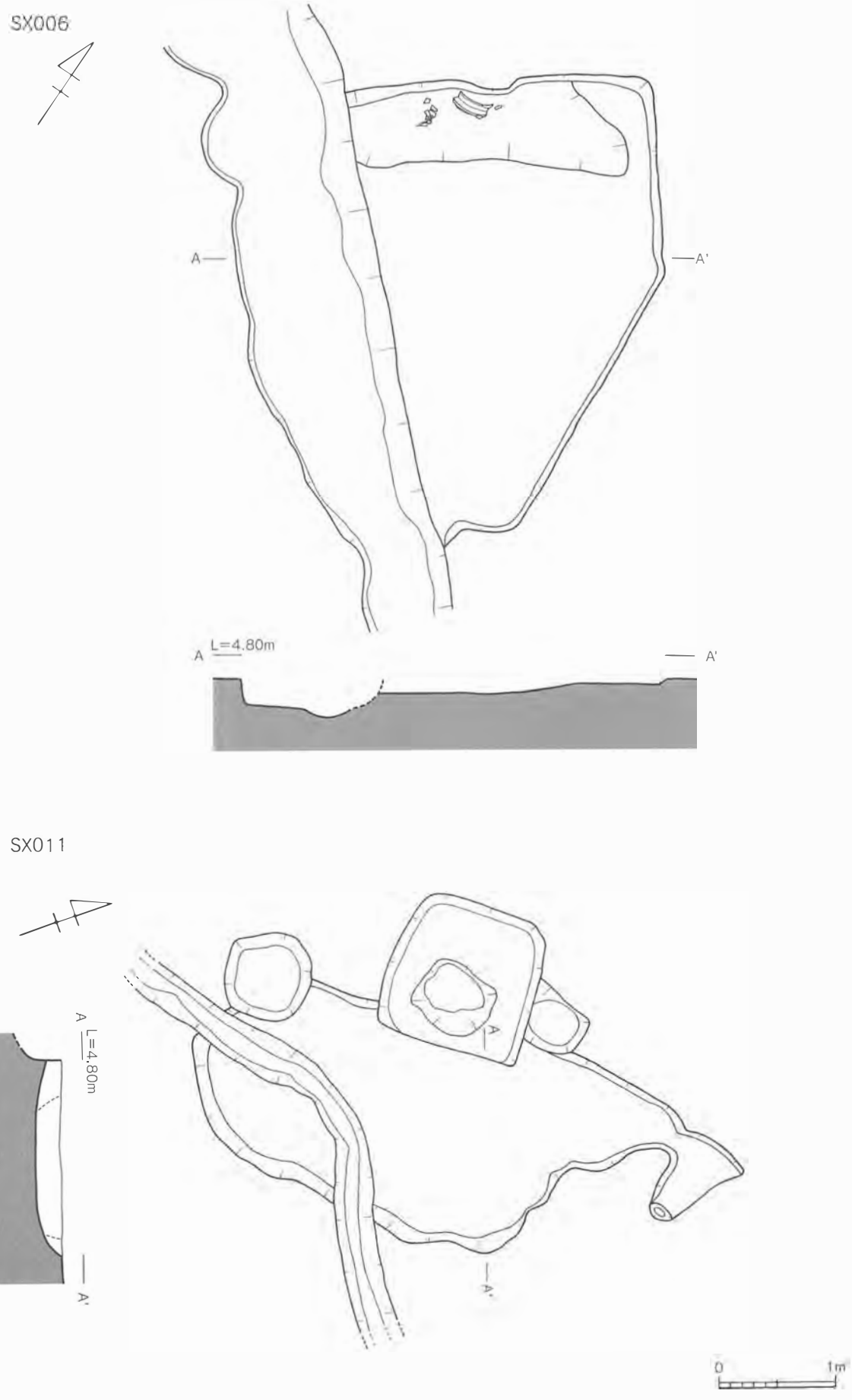
334は杯である。内外面ともになでによる調整が認められる。底面は回転糸切りが認められる。中世の遺物である。335は茶釜である。外面は回転ナデによる調整後に耳を貼り付けている。内面は回転なでによる調整が認められる。中世の遺物である。336は青磁の碗である。外面は回転ヘラ削り後にヘラ状工具による蓮弁文を施している。内面は回転なでによる調整が認められる。高台に砂目あり。全面に施釉である。中世の遺物である337は丸瓦である。外面は斜格子叩きを施し、内面は布目痕が残る。338は火鉢である。内外面ともに回転なでによる調整が認められる。外面に棒状工具による施文が施されている。中世の遺物である。



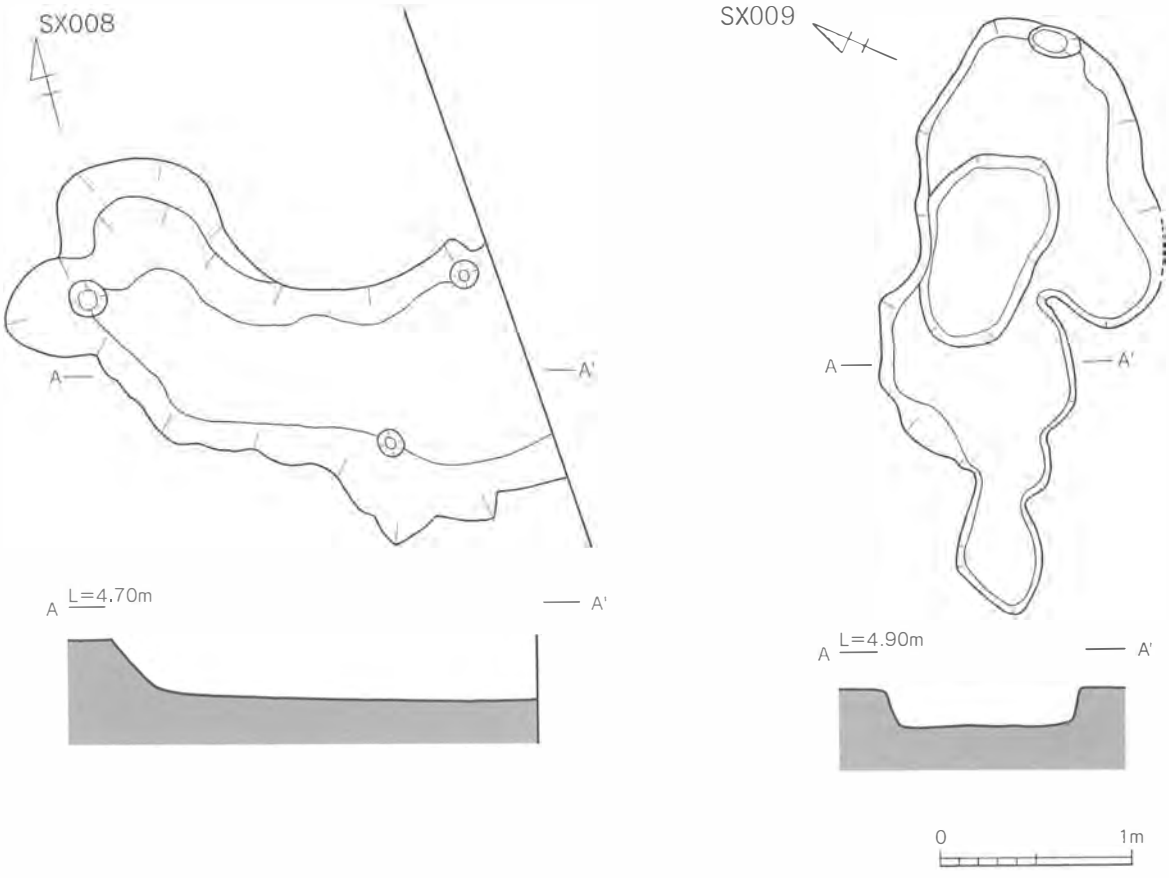
第137図　SK058･061･065･067･071出土遺物実測図



第138図　SK058·059·060、SX007·010実測図



第139図　SX006･011実測図



第140図　SX008･009実測図

SK058（第138図）

平面形は不整形を呈する。ＳＸ007に切られている。長辺約1.4ｍ、短辺約1.2ｍ、深さ約22㎝で底はややフラットである。中世の遺物を含むことから、中世の遺構と考えられる。

SK059（第138図）

平面形は隅丸長方形を呈する。ＳＸ010を切っている。長辺約1.9ｍ、短辺約1.3ｍ、深さ約10㎝で底はフラットである。

SK060（第138図）

平面形は不整形を呈する。長辺約2.6ｍ、短辺約2.5ｍを測る。

4　不明遺構（SX）

SX006（第139図）

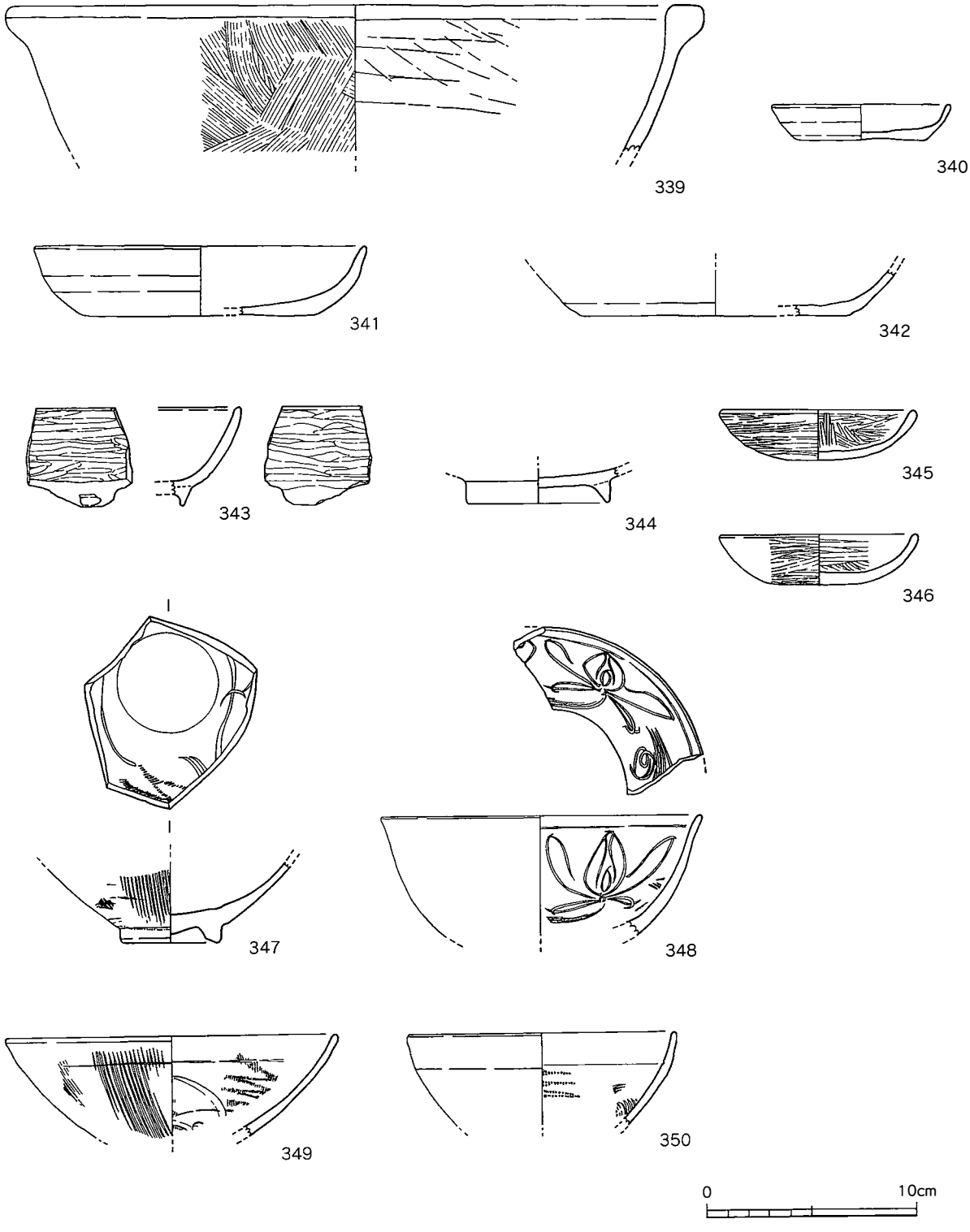
平面形は不整形を呈する。SD039に切られている。中世の遺物を含む。浅鉢や黒色土器、

SX007（第138図）

平面形は不整形を呈する。SD039に切られている。切っている。出土遺物がないため、遺構の性格は不明である。

SX008（第140図）

平面形は不整形を呈する。ＳＫ058を切っている。出土遺物がないため、遺構の性格は不明である。



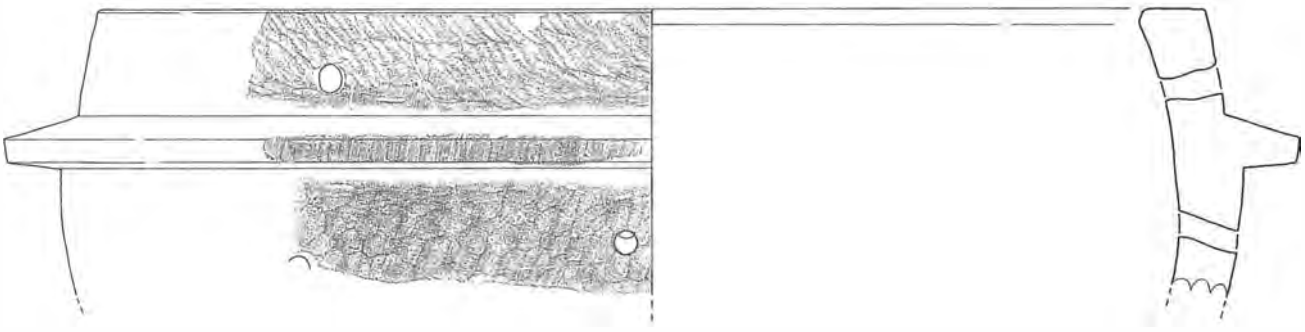
第141図　SX006出土遺物実測図

SX009（第140図）

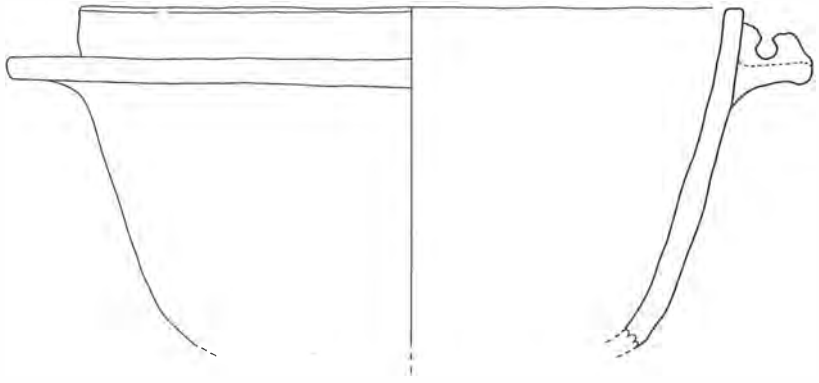
平面形は不整形を呈する。出土遺物がないため、遺構の性格は不明である。

SX010（第138図）

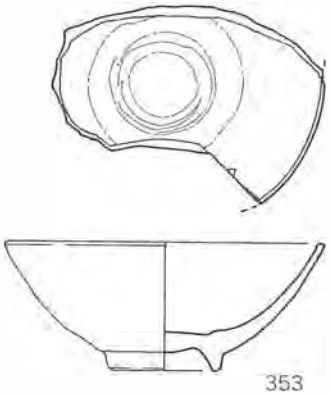
平面形は不整形を呈する。ＳＫ059に切られている。出土遺物がないため、遺構の性格は不明である。



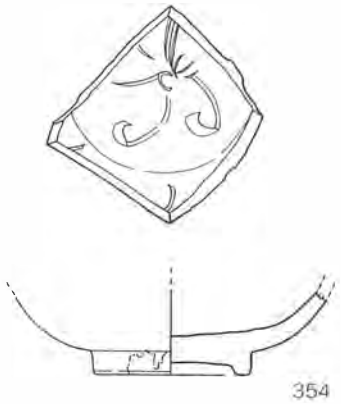
351



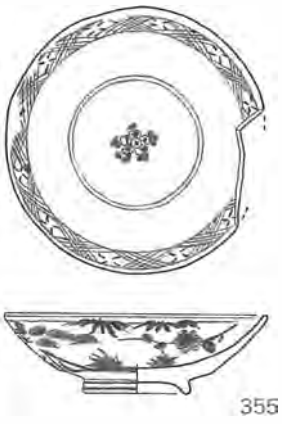
352



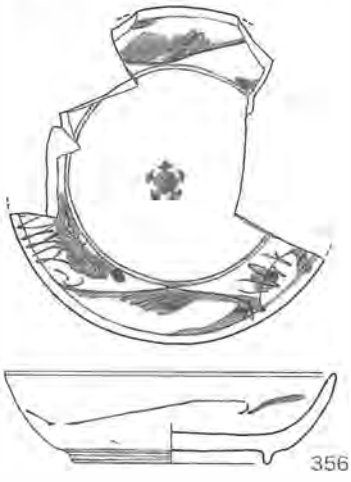
353



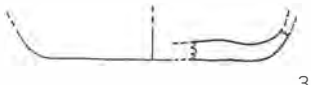
354



355



356



357

第142図　SX007･009･011出土遺物実測図

SX011（第 139 図）

平面形は不整形を呈する。出土遺物がないため、遺構の性格は不明である。

SX006 の遺物ついて（第 141 図）

339は中世の浅鉢である。外面はハケ目後なでによる調整が認められる。内面はヘラ削り後なでによる調整が認められる。口縁は横なでによる調整が認められる。340 は杯である。内外面ともなでによる調整が認められる、底部はヘラ切り後なでによる調整が認められる。古代の遺物である。341 は杯である。内外面ともになでによる調整が認められる。底面は回転糸切りが認められる。中世の遺物である。342 は瓦質土器である。外面は回転なでによる調整が認められる。内面は回転ﾅﾃﾞ後なでによる調整が認められる。底部は糸切り後なでによる調整が認められる。343 は黒色土器である。外面は回転ヘラ削り後に棒状工具による磨きが施されている。内面は回転ナデ後棒状工具による磨きが施されている。中世の遺物である。344 は黒色土器である。内外面ともになでによる調整が認められる。貼り付け高台である。中世の遺物である。345 は黒色土器である。内外面ともに回転なでによる調整後棒状工具による磨きが施されている。底部はヘラ切り後なでによる調整が認められる。中世の遺物である。346 は黒色土器である。内外面ともに回転なでによる調整が認められる。底部はヘラ切り後なでによる調整が認められる。中世の遺物である。347 は青磁の碗である。外面は回転ヘラ削り後、縦に櫛目文が施されている。内面はヘラによる施文とジグザグ状の櫛点描文が施されている。高台は削り出しである。中世の遺物である。348 は青磁の碗である。外面は回転ヘラ削り後施釉がある。内面はヘラ状工具による片彫蓮花文後施釉あり。中世の遺物である。349 は青磁の碗である。外面は回転ヘラ削り後縦の櫛目文が施されている。内面は回転ナデ後ヘラ状工具による施文と櫛点描文が施されている。釉は全面に施釉が認められる。中世の遺物である。350 は青磁の碗である。外面は回転ヘラ削り調整。内面はヘラによる施文と櫛点描文が施されている。釉は全面に施釉あり。中世の遺物である。

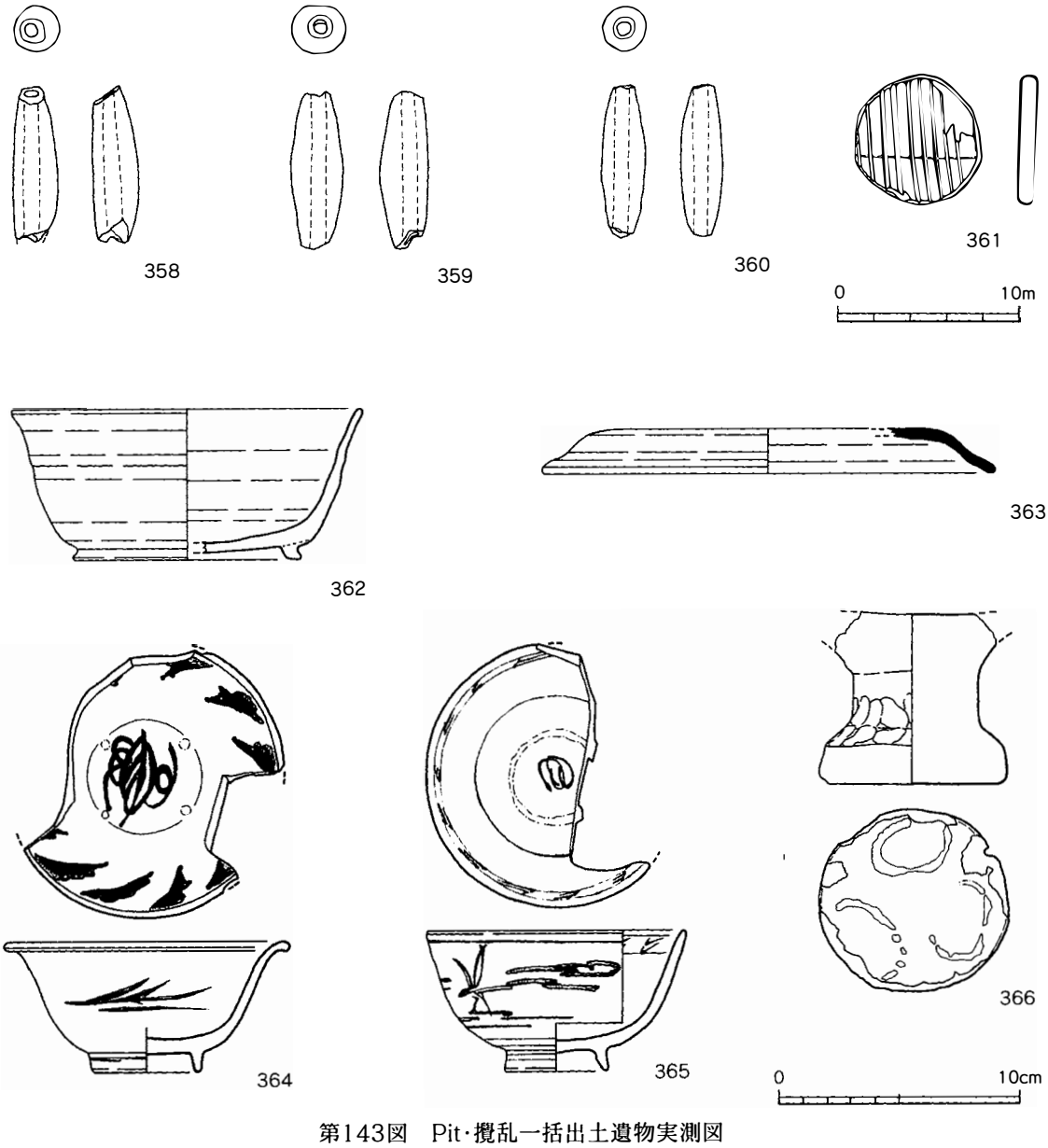
SX007・009・011 の遺物ついて（第 142 図）

351 は滑石製石釜である。外面は削りが施されている。口縁に３ヵ所に孔が穿たれている。中世の遺物である。352 は釜である。外面はハケ目後なでによる調整が認められる。内面は回転なでによる調整が認められる。中世の遺物である。353 は染め付けの碗である。内外面ともに回転なでによる調整が認められる。見込みは蛇の目状に釉掻き取り跡が認められる。354 は青磁の碗である。外面は回転ヘラ削りが認められる。内面は回転ﾅなでによる調整後に釉を施している。見込みにヘラ状工具による印文（草花）あり。高台は削りだしである。中世の遺物である。355 は染め付け小皿である。内外面ともに回転なでの後に染付している。高台は削りだしである。近世の遺物である。356 は染め付け小皿である。内外面ともに回転なでの後に染付を施している。高台は削りだしである。近世の遺物である。357 は杯である。外面は回転なでによる調整が認められる。内面は回転ナデ後なでによる調整が認められる。底部は糸切りである。中世の遺物である。

Pit・撹乱一括・調査区一括遺物について（第 143・144 図）

358 から 360 は漁労具の土錘である。361 は土製のめんこである。すり鉢を転用している。362 は須恵器の杯である。内外面ともなでによる調整が認められる、底部はヘラ切り後なでによる調整が認められる。古代の遺物である。363 は須恵器の杯蓋である。内外面ともなでによる調整が認められる、底部はヘラ切り後なでによる調整が認められる。古代の遺物である。364 は染付けの碗である。内外面ともに回転なでによる調整後に染付施釉を施している。高台は削りだしで作られている。近世の遺物である。365 は染付けの碗である。内外面ともに回転なでによる調整後に染付施釉を施している。高台は削りだしで作られている。近世の遺物である。366 は『トチン』と呼ばれる窯道具である。

中片小路遺跡では、２点の銅銭が出土している。１枚は宋銭でもう１枚は日本銭である。367 は宋銭である。1008 年頃、中国の北宋で用いられていて、日本にも入ってきている。字体は真書で『祥符元寶』と読み取れる。368 は日本で江戸時代に広く流通した『寛永通寶』である。



第143図　Pit･攪乱一括出土遺物実測図

第144図　Ⅷ･Ⅺ区　出土銅銭(1/1)

第５章　まとめ

九州新幹線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査により西片稲村遺跡と中片小路遺跡の存在が八代平野で新たに確認された。

西片稲村遺跡では、古墳時代前期の住居跡と古代末から中世初頭にかけての掘立柱建物群が確認された。

中片小路遺跡の。Ⅰ区～Ⅴ区では、古代末から中世初頭にかけての掘立柱建物群と土壙群が、Ⅵ区からⅧ区では、中世の掘立柱建物群が、Ⅸ区～Ⅺ区では、近世の掘立柱建物群が確認された。

今回の調査は、九州新幹線の本線部及び付帯施設に限られていたので、両遺跡の広がる範囲や周辺の様相まで明らかにすることは出来なかった。

今後、調査で検出した遺構や遺物が八代地方の文化を明らかにする資料として広く活用されることを望む。

出土遺物観察表

第2表　西片稲村遺跡　出土遺物(土器)観察表

図版-報番	遺構	取上No.	時期	器種	部位	法量(cm) 口径	胴部径	底径	高台径	高台高	器高	残存高	残存率	焼成	胎土	色調・釉調 外面	色調・釉調 内面	調整	備考
12-1	SI005	144	古代	土師器 甕	口縁	–	–	–	–	–	–	3.2～	一部	良	角閃石・長石・石英・白色粒・赤褐色粒	にぶい橙 7.5YR6/6	にぶい橙 7.5YR7/4	内外面ともにナデ,調整。外面胴部には指頭圧痕あり。	
12-2	SI005	一括	古代	土師器 甕	口縁	–	–	–	–	–	–	2.6～	一部	良	角閃石・長石・石英	橙 7.5YR7/6	浅黄橙 7.5Y8/4	内外面ともにナデ調整。	
12-3	SI005	一括	古代	土師器 甕	口縁	–	–	–	–	–	–	3.6～	一部	良	角閃石・長石・石英・赤褐色粒	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	外面はハケ目調整。内面、口縁部は横ナデ調整。	
12-4	SI005	42	古代	土師器 甕	口縁	–	–	–	–	–	–	6.0～	一部	良	角閃石・長石・石英・輝石	淡赤橙 2.5YR7/4	灰黄褐 10YR5/2	内外面ともにナデ調整、外面には一部ハケ目がみられる。	
12-5	SI005	3	古代	須恵器 坏	口縁	–	–	–	–	–	–	3.2～	一部	良	長石・角閃石	灰白 2.5Y7/1	灰白 2.5Y7/1	内外面ともにナデ調整。摩滅が著しい。	
12-6	SI005	一括	古代	土師器 壺	口縁	–	–	–	–	–	–	1.7～	一部	良	角閃石・石英・白色粒	橙 7.5YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/4	内外面ともにナデ調整。	
12-7	SI005	27	古代	須恵器 蓋	蓋部	(16.5)	–	–	–	–	3.0	–	1/3	良	角閃石・黒色粒	灰白 N8/	灰白 2.5Y7/1	内外面ともに回転ナデ調整。摩滅が著しい。つまみあり。	
12-8	SI005	123	古代	土師器 蓋	蓋部	–	–	–	–	–	–	3.0～	1/3	良	長石・石英・白色粒	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/3	内外面ともに回転ナデ調整。擬宝珠つまみ。	
12-9	SI005	8・12	古代	土師器 蓋	蓋部	–	–	–	–	–	–	3.0～	1/2	良	角閃石・長石・石英・白色粒	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	内外面ともにナデ調整。擬宝珠つまみ。	
12-10	SI005	120	古代	須恵器 蓋	蓋部	–	–	–	–	–	–	1.3～	一部	良	角閃石・石英・白色粒	灰白 2.5YR7/1	灰白 2.5YR7/1	内外面ともにナデ調整。	
12-11	SI005	一括	古代	土師器 坏	口縁～底部	(15.6)	–	(9.3)	–	–	1.9	–	1/2	良	長石・石英・白色粒	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい橙 10YR7/4	内外面ともに回転ナデ調整。	
12-12	SI005	134 一括	古代	須恵器 坏	底部	–	–	7.8	–	–	–	1.9～	1/4	良	角閃石・長石・白色粒	灰白 5Y7/1	灰白 N7/	内外面ともに回転ナデ調整。底部は回転ヘラ削り後ナデ調整。摩滅が著しい。	
12-13	SI005	140	古代	須恵器 坏	底部	–	–	–	–	–	–	2.2～	一部	良	角閃石・長石・白色粒・黒色粒	灰白 5Y8/1	灰白 7.5Y8/1	内外面ともに回転ナデ調整。底部は回転ヘラ削り後ナデ調整。摩滅が著しい。	
12-14	SI005	39	古代	土師器 坏	口縁～底部	(12.5)	–	(6.5)	–	–	3.9	–	1/2	良	角閃石・石英・白色粒	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	内外面ともに回転ナデ調整。摩滅が著しい。	
12-15	SI005	122	古代	須恵器 甕	頸部	–	–	–	–	–	–	5.2～	一部	良	白色粒・黒色粒	灰白 N7/	灰 N6/	外面は叩き後カキ目。内面は同心円当て具痕。	
12-16	SI005	141	古代	須恵器 坏	胴部～底部	(13.1)	–	7.9	–	–	4.4	–	4/5	良	角閃石・石英・白色粒・長石	灰白 5Y7/1	灰白 5Y7/1	内外面ともに回転ナデ調整。底部は回転ヘラ削り後ナデ調整。摩滅が著しい。	
12-17	SI005	47	古代	須恵器 甕	胴部	–	–	–	–	–	–	9.8～	一部	良	白色粒・黒色粒	灰 N5/	灰 N5/	外面は平行タタキ目文。内面は同心円当具痕。	
12-18	SI005	86	古代	土師器 甑	把手	–	–	–	–	–	–	8.6～	一部	良	角閃石・石英	浅黄橙 7.5YR8/4	橙 7.5YR7/6	外面はハケ目調整後ナデ。指頭圧痕あり。内面はハケ目調整であるが摩滅が著しく不明。把手あり。	
12-19	SI006	一括	中世	内黒土器 –	胴部～底部	–	–	–	(6.4)	0.7	–	2.5～	1/3	良	角閃石・長石・石英・白色粒・赤褐色粒・金雲母	にぶい褐 7.5YR7/3	黒 5Y2/1	内外面ともにナデ調整。内面は全面的にスス付着。内黒。	
14-20	SI005 SI008	84.92.95	古代 10C	土師器 甕	口縁	–	–	–	–	–	–	4.3～	一部	良	角閃石・長石・輝石・石英・金雲母	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	内外面ともにナデ調整。摩滅が著しい。	
14-21	SI008	114	古代	須恵器 壺	口縁	–	–	–	–	–	–	2.4～	一部	良	輝石・白色粒・黒色粒	灰白 N7/	灰白 N7/	内外面ともに回転ナデ調整。	
14-22	SI008	214	古代	土師器 蓋	口縁～底部	(16.4)	–	–	–	–	–	2.3～	1/5	良	長石・石英・白色粒	浅黄橙 7.5YR8/6	橙 7.5YR7/6	内外面ともにナデ調整。	
14-23	SI008	125	古代	土師器 坏	口縁～底部	(14.0)	–	(10.6)	–	–	1.7	–	1/4	不良	長石・金雲母	橙 5YR7/8	橙 5YR7/8	内外面ともに回転ナデ調整。摩滅が著しい。	
14-24	SI008	130	古代 10C	土師器 坏	口縁～底部	14.5	–	12.1	–	–	2.2	–	ほぼ完形	良	角閃石・長石・石英・赤色粒	にぶい橙 7.5YR7/4	橙 7.5YR7/6	内外面ともに回転ナデ調整、内外面ともに赤色顔料を塗布。	赤色顔料塗布
14-25	SI008	81	古代	土師器 坏	口縁～底部	(12.2)	–	(7.5)	–	–	3.6	–	1/5	良	白色粒・赤褐色粒	橙 5YR7/6	浅黄橙 7.5YR8/6	内外面ともに回転ナデ調整。摩滅が著しい。外面には赤色顔料が塗布。	赤色顔料塗布

図版-報番	遺構	取上No.	時期	器種	部位	法量 (cm) 口径	胴部径	底径	高台径	高台高	器高	残存高	残存率	焼成	胎土	色調・釉調 外面	内面	調整	備考
14-26	SI008	一括	古代	土師器 坏	底部	−	−	(7.0)	−	−	−	2.1～	一部	良	長石・石英・白色粒	橙 2.5YR6/6	橙 2.5YR6/8	内外面ともにナデ調整。摩滅が著しい。	
14-27	SI008	一括	古代	土師器 坏	底部	−	−	−	−	−	−	2.0～	一部	良	角閃石・長石・赤褐色粒	浅黄橙 7.5YR8/4	橙 5YR7/6	内外面ともに回転ナデ調整。	35と同一か？
14-28	SI008	34	古代	土師器 坏	底部	−	−	(5.2)	−	−	−	2.8～	一部	良	石英・白色粒・赤褐色粒	浅黄橙 7.5YR8/4	橙 7.5YR7/6	内外面ともに回転ナデ調整。摩滅が著しい。	
14-29	SI008	98	古代	須恵器 坏	胴部～底部	−	−	(8.0)	−	−	−	2.3～	一部	良	長石・石英・白色粒・雲母？	灰 7.5Y7/1	灰白 N7/	内外面ともにナデ調整。底部には板目圧痕あり。	外底部板目圧痕
14-30	SI008	一括	古代	土師器 坏	底部	−	−	−	−	−	−	1.5～	一部	良	角閃石・赤褐色粒	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	内外面ともに回転ナデ調整。	32と同一か？
14-31	SI008	一括	古代	土師器 坏	底部	−	−	(6.8)	−	−	−	1.7～	一部	良	角閃石・長石・石英・赤褐色粒	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	内外面ともにナデ調整。摩滅が著しい。	
14-32	SI008	一括	古代	土師器 坏	胴部	−	−	−	−	−	−	1.9～	一部	良	長石・石英・赤褐色粒	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	内外面ともにナデ調整。	
14-33	SI008	207	古代	土師器 坏	胴部～底部	−	−	−	(8.1)	1.0	−	2.9～	一部	良	角閃石・長石・石英・白色粒	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	内外面ともにナデ調整。高台は貼り付け。	
14-34	SI005 SI008	73.212 一括	古代	須恵器 甕	胴部	−	−	−	−	−	−	9.8～	一部	良	石英・黒色粒	褐灰 10YR6/1	灰 N6/	外面上部は平行叩き目文、下部は格子目叩き目文。内面は同心円当て具痕。	
14-35	SI008	64 一括	古代	土師器 坏	底部	−	−	−	(9.8)	0.8	−	2.9～	1/3	良	長石	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	内外面ともにナデ調整。摩滅が著しい。高台は貼り付け。	37と同一か？
14-36	SI008	35	古代	土師器 甑・把手	把手	−	−	−	−	−	−	4.5～	一部	良	石英・長石・白色粒	明赤褐 2.5YR5/6	−	ナデ調整。指頭圧痕が全面的に見られる。	一部黒変している
14-37	SI008	一括	古代	土師器 坏	底部	−	−	−	(9.5)	0.8	−	1.5～	1/4	良	長石	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	内外面ともにナデ調整。摩滅が著しい。高台は貼り付け。	35と同一か？
14-38	SI008	一括	古代	土師器 坏	底部	−	−	−	(8.1)	0.8	−	2.5～	1/3	良	角閃石・石英・赤褐色粒	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/6	内外面ともにナデ調整。摩滅が著しい。高台は貼り付け。	
16-39	SI009	25 一括	古代	須恵器 蓋	蓋部	(14.9)	−	−	−	−	2.8	−	1/4	良	白色粒・黒色粒	灰白 N7/	灰白 N7/	外面上部は回転ヘラ削り後ナデ調整、外面下部は回転ナデ調整。内面は回転ナデ調整。擬宝珠つまみ。	
16-40	SI009	106	古代	須恵器 坏	底部	−	−	−	(8.05)	0.5	−	2.3～	一部	良	角閃石・長石・白色粒	灰白 5Y7/1	灰白 5Y7/1	内外面ともに回転ナデ調整。底部は回転ヘラ削り後ナデ調整。高台は貼り付け。	
16-41	SI009	一括	古代	須恵器 坏	底部	−	−	−	(8.5)	0.4	−	1.1～	一部	良	鉄石・白色粒	灰白 N7/	灰白 N7/	内外面ともに回転ナデ調整。高台は貼り付け。	
16-42	SI009	27、 一括	古代	須恵器 鉢	口縁～胴部	(14.8)	16.0	−	−	−	−	12.1～	1/5	良	長石・白色粒・黒色粒	灰N4/ 灰N7/	灰 N6/	外面は回転ヘラ削り、下部は下から上へのヘラ削り調整。内面は回転ヘラ削り調整。把手あり。	
16-43	SI009	11	古代	土師器 坏	胴部～底部	−	−	5.4	−	−	−	2.1～	1/4	良	石英・長石・茶褐色粒	にぶい橙 7.5YR7/4	橙 7.5YR7/6	内外面ともに回転ナデ調整。底部にヘラ書きあり。	底部ヘラ書き
16-44	SI009	22・23	古代	須恵器 甕	胴部	−	−	−	−	−	−	6.6～	一部	良	白色粒	灰 N6/	灰 N6/	外面は格子目叩き、頸部は横ナデ調整。外面に沈線2条あり。内面は同心円当て具痕。	
16-45	SI009 SD007	一括.43	古代	須恵器 蓋	蓋部	−	−	−	−	−	−	2.8～	一部	良	白色粒	灰 N5/	灰 N6/	内外面ともに回転ナデ調整。	
16-46	SI009	一括	古代	須恵器 壺	底部	−	−	−	−	−	−	3.5～	一部	良	角閃石・長石・白色粒	明青灰 5B7/1	青灰 5B6/1	内外面ともに回転ナデ調整。内部ナデ調整は強め。	一部鉄付着
16-47	SI009	一括	古代	須恵器 甕	胴部	−	−	−	−	−	−	9.6～	一部	良	長石	青灰 5B5/1	青灰 5B6/1	外面は格子目叩き目文。内面は同心円当具痕。外面はやや赤変。	48と同一か？
16-48	SI009	19	古代	須恵器 甕	胴部	−	−	−	−	−	−	10.1～	一部	良	長石	青灰 5B5/1	青灰 5B6/1	外面は格子目叩き目文。内面は同心円当具痕。外面はやや赤変。	47と同一か？
18-49	SI011	49・78・ 85・96	古墳	土師器 甕	口縁～胴部	(12.5)	(25.1)	−	−	−	−	16.5～	1/3	良	長石・白色粒	にぶい橙 7.5YR6/4	褐 7.5YR4/6	外面はハケ目調整。内面は頸部下部は削り調整。口縁部はハケ目調整後ナデ。	
18-50	SI011	69	古墳	土師器 甑	口縁～底部	(13.1)	−	−	−	−	14.3	−	2/3	良	長石・金雲母・黒色粒・白色粒	にぶい橙 5YR6/4	橙 5YR6/6	外面は全体的にハケ目調整、底部付近を強くなでる。内面も全体的にハケ目調整、下部には削ったような工具痕あり。底に穿穴あり。	

図版-報番	遺構	取上No.	時期	器種	部位	法量 (cm)							残存率	焼成	胎土	色調・釉調		調整	備考
						口径	胴部径	底径	高台径	高台高	器高	残存高				外面	内面		
18-51	SI011	39·43·75·77·一括	古墳	土師器甕	口縁~胴部	(17.6)	–	–	–	–	–	9.2~	1/3	良	長石·石英·白色粒	明褐 7.5YR5/6	にぶい褐 7.5YR5/4	外面は全体的にハケ目調整。内面は屈曲部下部は削り調整。口縁部はハケ目調整後ナデ。	
18-52	SI011	30·32·37	古墳	土師器甕	底部	–	–	–	–	–	–	7.0~	1/3	良	角閃石·長石·石英·白色粒	橙 5YR6/6	明赤褐 5YR5/6	外面はナデ調整。内面は一部削りが見られるが全体的にナデ調整。	
18-53	SI011	57.58	古墳	土師器甕	胴部	–	–	–	–	–	–	16.0~	1/3	良	長石·石英·白色粒	明赤褐 5YR5/6	明赤褐 5YR5/6	内外面ともに摩滅が著しい為調整不明。	外部一部に煤付着
18-54	SI011	8	弥生末~古墳	免田式土器壺	胴部	–	–	–	–	–	–	6.0~	一部	良	白色粒	橙 7.5YR6/6	褐 7.5YR4/3	外面は胴部屈曲部上部には重弧文を、下部にはハケ目を施す。内面はハケ目調整。	
18-55	SI011	1	古代	土師器甕	口縁	–	–	–	–	–	–	5.0~	一部	良	角閃石·長石·白色粒·赤褐色粒	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	内外面ともにナデ調整。	
28-56	SD005	一括	古代	須恵器壺	口縁	–	–	–	–	–	–	3.1~	一部	良	長石·黒色粒	灰 N5/	灰 N6/	内外面ともに回転ナデ調整。湾曲部に櫛状工具痕あり。	
28-57	SD005	一括	古代	須恵器坏	口縁	–	–	–	–	–	–	1.7~	一部	良	長石	灰白 N7/	灰 N6/	内外面ともに回転ナデ調整。	
28-58	SD005	一括	古代	須恵器坏	口縁	–	–	–	–	–	–	2.5~	一部	良	長石	灰 N5/	灰 N5/	内外面ともに回転ナデ調整。	
28-59	SD006	一括	古代	須恵器甕	口縁~胴部	–	–	–	–	–	–	5.3~	一部	良	長石·輝石	灰 N6/	灰 N7/	外面は平行叩き目文で、やや赤変色。内面は同心円当具痕。口縁部は横ナデ。	
28-60	SD007	b34	古代	須恵器甕	口縁	–	–	–	–	–	–	3.0~	一部	良	輝石	灰 5Y6/1	灰 5Y5/1	外面は回転ナデ調整後ヘラ状工具による施文。内面は回転ナデ調整、自然釉がかかる。口縁部は横ナデ。	
28-61	SD007	一括	古代	土師器坏	底部	–	–	–	–	–	–	2.1~	1/3	良	長石·石英·赤褐色粒	橙 5YR7/8	橙 7.5YR7/6	内外面ともにナデ調整。	
28-62	SD007	一括	古代	須恵器坏	底部	–	–	–	–	–	–	1.4~	一部	良	長石·輝石	灰白 N7/	灰白 N7/	内外面ともに回転ナデ調整。底部はヘラ切り後ナデ調整。	63と類似
28-63	SD007	3	古代	須恵器坏	底部	–	–	–	–	–	–	2.4~	一部	良	白色粒·黒色粒	灰白 N6/	灰白 N6/	内外面ともに回転ナデ調整。底部はヘラ切り後ナデ調整。	62と類似
28-64	SD007	一括	古代	須恵器坏	底部	–	–	–	(8.9)	0.4	–	1.3~	1/3	良	白色粒	灰 N6/	灰 N6/	内外面ともに回転ナデ調整。高台は貼り付け。	
28-65	SD007	一括	古代	土師器坏	胴部~底部	–	–	–	–	–	–	3.1~	一部	良	輝石·白色粒	灰白 2.5Y8/	灰白 2.5Y8/	内外面ともにナデ調整。摩滅が著しい。高台は貼り付け。	
28-66	SD007	b44	古代	須恵器坏	底部	–	–	–	–	–	–	1.4~	一部	良	角閃石·白色粒	灰白 N7/	灰 N6/	内外面ともに回転ナデ調整。底部はヘラ切り後ナデ調整、高台は貼り付け。	
28-67	SD007	6.一括	古代	須恵器甕	胴部	–	–	–	–	–	–	12.0~	一部	良	石英·金雲母·白色粒	灰 N6/	灰 N6/	内外面ともに回転ナデ調整。外面には凹線あり。	42と同器形
28-68	SD007	一括	古代	須恵器壺	肩部	–	–	–	–	–	–	2.3~	一部	良	黒色粒	灰白 N7/	灰 N6/	内外面ともに回転ナデ調整。外面には凹線あり。	
28-69	SD007	一括	古代	須恵器短頸壺	口縁~胴部	(11.2)	(22.2)	–	–	–	–	19.0~	1/3	良	白色粒·黒色粒	灰 N6/	灰 N6/	外面は回転ナデ調整。内面は削り調整後ナデ調整。口縁は横ナデ。	
28-70	SD007	b44	古代	鞴·羽口	–	–	–	–	–	–	–	4.0~	一部	良	角閃石·長石·白色粒·赤褐色粒·石英	灰白 10YR8/2	褐灰 10YR6/1	内外面ともにナデ調整。	
31-71	SB002	P6	古代	須恵器坏	胴部~底部	–	–	(9.9)	(10.2)	0.5	–	2.5~	一部	良	角閃石·石英·白色粒	灰 N5/	灰 N6/	内外面ともに回転ナデ調整。底部は回転ヘラ削り後ナデ調整。高台は貼り付け。	
31-72	SB003	P6	古代	土師器捕鉢	口縁	–	–	–	–	–	–	5.7~	一部	良	角閃石·長石·輝石	灰白 2.5Y8/1	灰白 2.5Y8/1	内外面ともにナデ調整。片口あり。摩滅が著しい。	
31-73	SB004	P3	中世	瓦質捕鉢	口縁	–	–	–	–	–	–	5.6~	一部	良	長石·石英	灰白 2.5Y7/	灰白 2.5Y7/	外面はナデ調整。内面は丁寧なナデ調整後櫛状工具による5本単位の描目。	
31-74	SK002 SD007	一括 1·4	古代	土師器坏	口縁~底部	16.0	–	4.6	–	–	4.6	–	1/2	良	角閃石·長石·石英·輝石·白色粒	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR6/4	内外面ともに回転ナデ調整。内面には赤色顔料が塗布。	
31-75	SK002	10	古代	須恵器蓋	蓋部		–	–	–	–	–	1.85~	一部	良	輝石·白色粒	灰 N6/	灰 N6/	外面上部は回転ヘラ削り後ナデ調整、外面下部は回転ナデ調整。内面は回転ナデ調整。	

図版-報番	遺構	取上No.	時期	器種	部位	法量 (cm)							残存率	焼成	胎土	色調・釉調		調整	備考
						口径	胴部径	底径	高台径	高台高	器高	残存高				外面	内面		
31-76	SK002	34	古代	須恵器 壺	底部	−	−	−	(10.8)	1.0	−	1.8～	一部	良	長石・石英・白色粒・黒色粒	灰 N6/	灰白 5Y7/1	内外面ともに回転ナデ調整。貼り付け高台。	
31-77	SK003	−	8～9C	須恵器 蓋	蓋部	−	−	−	−	−	−	3.8～	1/4	良	角閃石・白色粒・赤褐色粒	にぶい赤褐 5YR5/3	褐灰 10YR6/1	外面上部はヘラ削り後ナデ調整、以下は回転ナデ調整。内面は回転ナデ調整と横ナデ。擬宝珠つまみ。	
31-78	SK002	一括	古代	須恵器 坏	底部	−	−	−	(8.5)	0.4	−	1.2～	一部	良	輝石・白色粒	灰白 N7/	灰白 N7/	内外面ともに回転ナデ調整。底部はヘラ切り後ナデ調整。貼り付け高台。	
31-79	SK004	1	古代	須恵器 坏	底部	−	−	−	(9.1)	0.5	−	1.5～	一部	良	長石・白色粒	灰 N5/	灰 N6/	内外面ともに回転ナデ調整。貼り付け高台。	
31-80	SK004	一括	古代	土師器 坏	口縁	−	−	−	−	−	−	4.4～	一部	良	長石	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	内外面ともにナデ調整。	
31-81	SK002	28	古代	土師器 坏	底部	−	−	−	−	−	−	2.3～	一部	良	長石・石英・白色粒	にぶい橙 7.5YR6/4	黒褐 2.5Y3/1	内外面ともにナデ調整。内黒。	
31-82	SK004	2	古代	須恵器 甕	胴部	−	−	−	−	−	−	8.4～	一部	良	黒色粒・長石	灰 N5/	灰 N6/	外面は格子目タタキ目文。内面は同心円当具痕。	
31-83	SK005	一括	古代	須恵器 ?	胴部	−	−	−	−	−	−	5.1～	一部	良	輝石・白色粒・黒色粒・角閃石	灰 N5/	灰 N6/	外面は平行タタキ目文。内面は同心円当具痕。	
31-84	−	17・23・24・一括	古代	土師器 甕	口縁～胴部	(21.0)	−	−	−	−	−	12.0～	1/3	良	角閃石・長石・石英・白色粒・赤褐色粒	暗褐 7.5YR3/3	暗褐 10YR3/3	内外面ともにナデ調整。	
31-85	一括	10・一括	古代	土師器 盤	脚部	−	−	−	−	−	−	4.8～	1/3	良	角閃石・金雲母・白色粒	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	内外面ともにナデ調整。	
31-86	SK003 Pit1	一括	中世	土師質 茶釜	口縁～胴部	(18.9)	−	−	−	−	−	14.8～	1/3	良	角閃石・長石・石英・金雲母・赤褐色粒	灰黄褐 10YR6/2	にぶい黄橙 10YR7/3	内外面ともにナデ調整。内面には指頭圧痕がみれる。	
31-87	一括	6	古代	土師器 甕	口縁	−	−	−	−	−	−	3.8～	一部	良	角閃石・石英・雲母・赤褐色粒	橙 7.5YR7/6	橙 5YR7/6	内外面ともにナデ調整。	
33-88	SE001	一括	中世	土師質 茶釜	胴部	−	−	−	−	−	−	5.3～	一部	良	長石・石英・白色粒・赤褐色粒	灰黄褐 10YR4/2	にぶい黄褐 10YR5/3	内外面ともにナデ調整と指頭圧痕が多く見られる。外面には線刻？スタンプ？の花紋あり。	
33-89	SE001	一括	古代	須恵器 坏	口縁～底部	−	−	−	−	−	−	2.2～	一部	良	白色粒・黒色粒	灰白 7.5Y7/1	灰 7.5Y6/1	内外面ともに回転ナデ調整。	
33-90	SE001	一括	中世	土師質 火鉢	脚部	−	−	−	−	−	−	6.0～	1/4	良	角閃石・長石・石英	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	内外面ともにナデ調整。外面には1条の突帯を施す。指頭圧痕あり。	
33-91	SE001	一括	中世	土師質 火鉢	口縁	−	−	−	−	−	−	4.3～	一部	良	黒色粒・白色粒・赤褐色粒	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/3	口縁はやや肥厚し、横ナデ調整。突帯を施し、スタンプあり。	
33-92	SE001	5	中世	瓦質 擂鉢	胴部	−	−	−	−	−	−	3.9～	一部	良	−	灰白 N8/	灰白 7.5Y7/1	外面は丁寧なナデ調整。内面はナデ調整後櫛状工具による6本単位の擂目。	
33-93	SE001	6	中世	瓦質 擂鉢	−	−	−	−	−	−	−	4.4～	一部	良	長石・輝石・白色粒	灰白 N7/	灰白 N7/	外面は丁寧なナデ調整。内面はナデ調整後櫛状工具による6本単位の擂目。	
33-94	SE001	一括	中世	瓦質 火鉢	底部	−	−	−	−	−	−	3.9～	一部	良	長石	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR7/2	全面に摩滅著しい。	
33-95	SE001	4	中世	瓦質 擂鉢	底部	−	−	−	−	−	−	1.7～	一部	良	長石・白色粒	灰白 7.5Y6/1	灰白 7.5Y7/1	外面は丁寧なナデ調整。内面はナデ調整後櫛状工具による5本単位の擂目。	
33-96	SE001	一括	中世	瓦質 擂鉢	胴部～底部	−	−	−	−	−	−	4.8～	一部	良	角閃石・長石・白色粒・黒色粒	灰白 N7/	灰白 N7/	外面はナデ調整。内面はナデ調整後櫛状工具による6本単位の擂目。	
33-97	SE001	8.一括	中世	瓦質 擂鉢	口縁～底部	(33.2)	−	(14.0)	−	−	10.5	−	1/3	良	長石・角閃石	灰白 2.5Y8/1	灰白 2.5Y8/1	外面はナデ調整、指頭圧痕あり。内面はナデ後櫛状工具による6本単位の擂目。口唇部は横ナデ。	
34-108	一括	−	古代	土師器 坏	底部	−	−	−	−	−	−	1.0～	一部	良	長石・石英・白色粒	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/3	内外面ともにナデ調整。底部にヘラ書き（主万？）あり。	底部ヘラ書き
34-109	一括	−	古代	須恵器 坏	底部	−	−	−	−	−	−	1.0～	一部	良	長石・白色粒	灰白 7.5Y7/1	灰白 7.5Y7/1	内外面ともにナデ調整。底部に墨書（茂□）あり。	底部墨書
34-110	−	一括	中世	瓦質 茶釜	肩部	−	−	−	−	−	−	5.8～	1/4	良	角閃石・長石・石英	灰白 5Y7/1	灰白 N8/	内外面ともにナデ調整。内面に指頭圧痕あり。	

図版-報番	遺構	取上No.	時期	器種	部位	法量 (cm) 口径	胴部径	底径	高台径	高台高	器高	残存高	残存率	焼成	胎土	色調・釉調 外面	内面	調整	備考
34-111	一括	−	中世	瓦質土器鍋	胴部	−	(30.4)	−	−	−	−	9.2～	1/3	良	角閃石・長石・石英・雲母・赤褐色粒	灰黄 2.5Y7/2	灰黄 2.5Y7/2	外面は粗いナデ調整。内面は丁寧なナデ調整。	
34-112	−	一括	中世	土師質羽釜	口縁～胴部	(23.6)	−	−	−	−	−	6.5～	1/3	良	角閃石・長石・金雲母	にぶい黄橙 10YR6/4	灰黄 2.5YR7/2	外面はナデ後指頭圧痕がみれる。内面は横ナデ調整。鍔上部付近には穿孔あり。	

第3表　西片稲村遺跡　出土遺物(土錘)観察表

図版-報番	遺構	取上No.	時期	器種	法量 (cm) 全長	質量(g)	幅	孔径	L	P	判定	残存率	焼成	胎土	色調 外面	内面	備考
32-98	−	一括	古代	土錘	3.3～	3.5	0.70	0.40	0.16	4.71	刺	ほぼ完形	良	長石・石英・金雲母	にぶい黄橙 10YR7/4	−	
32-99	SI005	146	古代	土錘	3.9	3.7	1.00	0.40	0.16	3.9	刺	ほぼ完形	良	長石・石英・黒色粒	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	
32-100	−	一括	古代	土錘	3.7	4.4	1.15	0.35	0.12	3.21	刺	ほぼ完形	良	長石・石英・白色粒	にぶい黄橙 10YR7/4	−	
32-101	一括	−	古代	土錘	3.6～	4.4	1.25	0.40	0.16	2.88	刺	ほぼ完形	良	石英・金雲母・白色粒	にぶい黄橙 10YR6/4	−	
32-102	拡張部分	一括	古代	土錘	4.3～	3.6	1.10	0.45	0.20	3.9	刺	ほぼ完形	良	角閃石・長石・石英・白色粒	橙 5YR6/6	−	
32-103	−	一括	古代	土錘	4.3～	6.3	1.20	0.35	0.12	3.58	刺	3/4	良	長石・白色粒・赤褐色粒	橙 7.5YR6/6	−	
32-104	SB007 付近Pit	−	古代	土錘	2.9～	3.9	1.30	0.40	0.16	2.23	刺	2/3	良	角閃石・長石・石英	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	
32-105	一括	−	古代	土錘	2.6～	4.9	1.75	0.55	0.30	1.48	袋	1/3	良	長石・赤褐色粒	にぶい黄橙 10YR7/3	−	
32-106	一括	−	古代	土錘	3.0～	3.5	1.30	0.65	0.42	2.3	袋	2/3	良	石英	浅黄橙 10YR8/3	−	
32-107	SI005	一括	古代	土錘	3.9～	4.3	1.00	0.35	0.12	3.9	刺	2/3	良	角閃石・長石・石英・金雲母	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	

第4表　中片小路遺跡　出土遺物(土器)観察表

図版-報番	調査区	遺構	層位	取上No.	時期	器種	部位	法量 (cm) 口径	胴部径	底径	高台径	高台高	器高	残存高	残存率	焼成	胎土	色調 外面	色調 内面	調整	備考
38-1	I区	SK001	−	−	弥生後期	甕	口縁〜頸部	−	−	−	−	−	−	6.1〜	一部	良	長石・白色粒・黒色粒赤褐色粒	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	内外面ともにナデ調整。磨滅が著しい。	
38-2	I区	SK001	−	2	弥生後期	脚付甕	脚部	−	−	−	8.9	3.0	−	3.6〜	一部	良	長石・石英・白色粒黒色粒・茶褐色粒	橙 7.5YR6/6	にぶい橙 7.5YR7/4	内外面ともにナデ調整。	
39-5	I区	撹乱一括	−	−	古代	土師器坏	底部	−	7.8	(8.1)	(8.1)	0.8	−	1.9〜	一部	良	長石・角閃石・金雲母白色粒・黒色粒	橙 7.5YR7/6	褐灰 10YR4/1	内面はナデ調整。内黒。底部は回転ヘラ切り後ナデ調整。高台は貼り付け。	
41-8	II区	SD004	−	36	中世	土師質高台付盤	底部・基部	−	−	−	−	−	−	2.9〜	一部	良	長石・黒色粒	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/3	内外面ともにナデ調整。	
41-13	II区	一括	−	−	中世	須恵器甕又は壺	口縁	−	−	−	−	−	−	5.3〜	一部	不良	白色粒・黒色粒	褐灰 5YR6/1	にぶい橙 5YR6/3	内外面ともに回転ナデ調整。口縁部は横ナデ。	
41-16	II区	一括	−	−	古代	須恵器甕又は壺	胴部〜底部	−	−	−	−	0.6	−	3.4〜	一部	良	白色粒・黒色粒	灰 N6/1	灰白 N7/1	内外面ともに回転ナデ調整。内面をヘラ状工具によって削っている。	
44-18	IV・V区	SI001	−	−	古代	土師器	底部	−	−	−	(9.2)	1.0	−	1.8〜	一部	良	長石・石英・白色粒	にぶい黄橙 7.5YR6/4	褐灰 10YR5/1	内外面ともにナデ調整。高台は貼り付け。	内黒
44-19	IV・V区	SI001	−	50.51	中世	黒色土器	底部	−	−	−	9.2	0.9	−	2.0〜	−	良	長石・石英・白色粒	にぶい黄橙 10YR6/4	黒 10YR2/1	内外面ともにナデ調整。外底部中央にヘラ状工具による削り痕が放射状に残る。高台貼り付け。	内黒
44-20	IV・V区	SI001	−	36	中世	黒色土器	底部	−	−	−	(9.0)	1.0	−	2.4〜	一部	良	石英・輝石・白色粒赤褐色粒	黄灰 2.5Y4/1	黄灰 2.5Y4/1	内外面ともにナデ調整。高台貼り付け。	
44-21	IV・V区	SI001	−	44	古代	土師器坏	底部	−	−	−	−	−	−	2.3〜	−	−	長石・石英・金雲母白色粒・赤褐色粒	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	内外面ともにナデ調整。外底部中央にヘラ状工具による削り痕が放射状に残る。	
44-22	IV・V区	SI001	−	6	古代	土師器坏	底部	−	−	(5.2)	−	−	−	1.9〜	1/4	良	長石・黒色粒	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい黄橙 7.5YR6/4	内外面ともにナデ調整。	
44-23	IV・V区	SI001	−	8	古代	土師器坏	底部	−	−	−	−	−	−	2.2〜	一部	良	石英・白色粒・黒色粒	浅黄橙 10YR8/3	黒 5Y2/1	内外面ともにナデ調整。	内黒
44-24	IV・V区	SI001	−	34	古代	土師器坏	底部	−	−	−	−	−	−	1.3〜	一部	良	長石・石英・角閃石白色粒・赤褐色粒	にぶい黄橙 10YR7/2	黒 7.5Y2/1	内外面ともにナデ調整。	内黒・煤付着
56-26	IV・V区	SD016	−	7	古代末	土師器坏	口縁〜底部	(15.3)	−	(7.7)	−	−	−	3.5	2/3	良	長石・角閃石・輝石	明赤褐 2.5YR5/6	明赤褐 2.5YR5/6	内外面ともにナデ調整、ともに朱が全面に塗布。磨滅が著しい。	
56-27	IV・V区	SD016	−	5	?	須恵器壺	胴部〜底部	−	(9.2)	(6.2)	−	−	−	5.4〜	一部	良	長石・白色粒・黒色粒黄褐色粒	青灰 10BG6/1	青灰 10BG6/1	外面は回転ナデ後粗いナデ調整。内面は回転ナデ調整。	
56-28	IV・V区	SD016	−	7	?	土師器坏	口縁〜底部	(15.0)	−	(8.7)	−	−	−	2.8	1/3	良	石英・角閃石・白色粒	灰白 10YR8/2	黒 10YR2/1	内外面ともにナデ調整。外面には朱が全面に塗布。磨滅が著しい。	内黒
56-29	IV・V区	SD016	−	4	−	−	底部	−	−	−	(6.8)	0.9	−	2.2〜	1/4	良	石英・黒色粒	橙 7.5YR7/6	褐灰 10YR5/1	外面はヘラ状工具による調整。内面は回転ナデ調整。貼り付け高台。	内面黒色
56-30	IV・V区	SD016	−	8	古代	土師器壺	口縁〜胴部	26.0	−	−	−	−	−	9.2〜	一部	良	長石・石英・角閃石赤褐色粒	浅黄橙 7.5Y8/4	橙 7.5Y7/6	外面は縦方向のハケ目調整、内面はヘラ削り後ナデ調整、指頭圧痕あり、口縁は外面はナデ調整、内面は横方向のハケ目調整。	内外面一部黒変
63-34	IV・V区	SE001	−	−	古代	土師器坏	口縁〜胴部	−	−	−	−	−	−	6.8〜	一部	不良	長石・石英・角閃石金雲母	橙 7.5YR7/6	にぶい橙 7.5YR7/4	内外面ともに横または斜め方向のハケ目調整。口唇部は肥厚する。	外面煤付着
63-35	IV・V区	SE001	−	−	古代	須恵器壺	蓋部	(16.5)	−	−	−	−	2.0	−	1/2	良	白色粒・黒色粒	灰白 N7/	灰白 N7/	蓋上部は削りのちナデ調整。下部は回転ナデ調整。内面は回転ナデとナデ調整。	
63-36	IV・V区	SE001	−	17	古代	土師器坏	底部	−	−	(11.0)	−	−	−	2.0〜	一部	不良	長石・黒色粒赤褐色粒	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	内外面ともにナデ調整。	
65-39	IV・V区	SE002	−	112	古代	土師器坏	口縁〜底部	(16.3)	−	(12.2)	−	−	3.0	−	1/4	良	金雲母・茶褐色粒灰白色粒	浅黄橙 7.5YR8/6	橙 7.5YR7/6	内外面ともにナデ調整。磨滅が著しい。	
65-40	IV・V区	SE002	−	90	古代	土師器坏	口縁〜底部	(13.9)	−	(10.7)	−	−	3.0	−	一部	良	白色粒・黒色粒赤褐色粒	浅黄橙 7.5YR8/6	橙 7.5YR7/6	内外面ともにナデ調整。磨滅が著しい。	
65-41	IV・V区	SE002	−	47	中世	須恵器壺	底部	−	−	(13.8)	−	−	−	4.1〜	一部	良	石英・白色粒	灰 N6/	灰 N6/	内外面ともに回転ナデ調整。底部は回転糸きり。	
65-42	IV・V区	SE002	−	91.92	中世末	土師器坏	−	9.1	−	7.9	−	−	1.7	−	完形	良	白色粒・茶褐色粒黄褐色粒	橙 7.5YR7/6	橙 5YR7/8	内外面ともにナデ調整。磨滅が著しい。	

図版-番	調査区	遺構	層位	取上No.	時期	器種	部位	法量 (cm)							残存率	焼成	胎土	色調		調整	備考
								口径	胴部径	底径	高台径	高台高	器高	残存高				外面	内面		
65-44	Ⅳ·Ⅴ区	SE002	−	99	古代	土師器 坏	底部	−	−	−	8.0	0.4	−	2.3～	一部	良	白色粒·黒色粒	灰白 7.5Y7/1	灰白 7.5Y8/1	内外面ともに回転ナデ調整。底部はヘラ切り後ナデ調整。	
65-45	Ⅳ·Ⅴ区	SE002	−	59	中世	長頸壺	底部	−	−	−	−	0.5	−	3.6～	一部	良	石英·黒曜石·白色粒	灰 5Y6/1	灰白 N7/	内外面ともに回転ナデ調整。内面下部には削り痕あり。高台貼り付け。	
67-57	Ⅳ·Ⅴ区	一括	−	91	古代	土師器 皿	底部	(9.9)	−	(8.4)	−	−	1.6	−	一部	良	金雲母·白色粒茶褐色粒	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	内外面ともにナデ調整。	
67-58	Ⅳ·Ⅴ区	一括	−	91.92. 95.99	中世	黒色土器	口縁～底部	(14.8)	−	(9.6)	−	−	2.9	−	1/2	不良	金雲母·赤褐色粒	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	内外面ともにナデ調整。磨滅が著しい。底部はヘラ切り後粗いナデ。	内面黒色
67-59	Ⅳ·Ⅴ区	一括	−	−	古墳	土師器 坏	口縁～底部	(14.6)	−	(8.1)	−	−	5.8	−	1/4	良	金雲母·白色粒 黒色粒·黄褐色粒	にぶい赤褐 5YR4/4	赤褐 5YR4/6	内外面ともに粗い削り調整。口唇部は強いナデ調整。	実No.38と同一
67-60	Ⅲ区	一括	−	−	中世	土師器 −	−	12.4	−	−	6.8	0.8	5.4	−	4/5	良	長石·石英·白色粒 赤褐色粒	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/3	内外面ともに丁寧なナデ調整。外底部中央にヘラ状工具による削り痕が放射状に残る。	
67-63	Ⅳ·Ⅴ区	一括	−	−	中世	−	口縁～胴部	−	−	−	−	−	−	4.3～	一部	良	石英·輝石·赤褐色粒	灰白 10YR8/2	黒 10YR2/1	内外面ともに丁寧なナデ調整。	内黒
72-78	Ⅵ区	SX002	−	−	古代	土師器 坏	口縁～底部	14.0	−	7.1	−	−	3.8	−	完形	良	輝石·赤褐色粒	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/4	内外面ともに回転ナデ調整。底部はヘラ切り後ナデ調整。内外面ともに朱が全面に塗布か？磨滅が著しい。	
72-79	Ⅵ区	SX002	−	−	古代	土師器 坏	口縁～底部	(13.2)	−	(6.1)	−	−	3.5	−	1/4	良	長石·白色粒	橙 2.5YR6/6	橙 2.5YR6/6	内外面ともにナデ、磨滅が著しい。	
72-80	Ⅵ区	SX002	−	−	古代	須恵器 無頸壺	口縁～頸部	−	−	−	−	−	−	5.5～	一部	良	白色粒·黒色粒	灰白 7.5Y8/1	灰白 7.5Y8/1	内外面ともにナデ調整。外面には沈線あり。	
72-81	Ⅵ区	SX002	−	2	？	須恵器 高坏	脚部	−	−	−	−	−	−	6.5～	一部	良	白色粒·黒色粒	灰白 5Y8/2	灰白 5Y8/1	内外面ともにナデ調整。	
72-82	Ⅵ区	SX002	−	1	古代	土師器 蓋	蓋	−	−	−	−	−	−	1.2～	一部	不良	長石·石英·角閃石 白色粒·赤褐色粒	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	内外面ともにナデ調整。磨滅が著しい。	
72-83	Ⅵ区	Pit027	−	−	古代	土師器 皿	口縁～底部	15.1	−	−	−	−	1.9	−	完形	不良	石英·角閃石·白色粒黒色粒·茶褐色粒	橙 7.5YR6/6	橙 5YR6/8	内外面ともにナデ調整。磨滅が著しい。	
72-84	Ⅵ区	Pit009	−	−	古代	須恵器 坏	底部	−	−	−	−	0.5	−	2.6～	一部	良	石英·白色粒·黒色粒	青灰 5B6/1	青灰 5B6/1	外面は回転ナデ調整。内面は回転ナデとナデ調整。底部はヘラ切り後ナデ調整。高台は貼り付け。	
72-85	Ⅵ区	一括	−	−	古代	須恵器 坏	口縁～底部	(12.6)	−	(8.0)	−	−	3.5	−	1/3	良	石英·白色粒·黒色粒緻密	灰白 5Y8/1	灰白 5Y8/1	内外面ともに回転ナデ	
80-102	Ⅶ区	SD027	−	1	弥生	土師器 甕	底脚部	−	−	−	−	−	−	6.0～	一部	良	長石·石英·角閃石 白色粒	橙 5YR6/6	にぶい橙 7.5YR7/4	外面は縦方向のハケ目調整。内面と底部は削り後ナデ調整。	
80-103	Ⅶ区	SD026	−	−	古墳	土師器 高坏	脚部	−	−	−	−	−	−	8.9～	一部	良	長石·石英·輝石 白色粒	赤褐 5YR4/6	赤褐 5YR4/6	内外面ともにハケ目調整。	
80-104	Ⅶ区	SD026	−	2	古墳	土師器 壺	口縁	18.1	−	−	−	−	−	6.0～	一部	良	長石·石英·輝石 白色粒	にぶい橙 7.5YR7/3	にぶい橙 5YR7/4	外面はナデ調整。内面は削り後ナデ調整。	
80-105	Ⅶ区	SD025	−	−	古墳	土師器 甕	口縁～底部	(13.8)	−	−	−	−	20.8	−	完形	良	長石·石英·白色粒 黒色粒	褐 7.5YR4/4	褐 7.5YR4/3	外面上部は縦方向のハケ目後ナデ調整。下部は多方向のハケ目。内面はハケ調整後丁寧なナデ。口縁外面は縦方向。内面は横方向のハケ目調整。	外面煤付着
80-106	Ⅶ区	SD026	−	−	古墳5C	土師器 坩	口縁～底部	12.5	12.0	3.0	−	−	13.7	−	4/5	良	長石·石英·白色粒	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	外面上部は斜め方向、下部は横方向のハケ目調整。内面は不定方向のハケ目調整。口縁内面は横方向のハケ目調整。	
80-107	Ⅶ区	SD029	−	−	？	土師器 甕？壺？	口縁	−	−	−	−	−	−	3.2～	一部	良	石英·金雲母·白色粒	褐 7.5YR4/3	褐 7.5YR4/3	内外面ともにナデ調整。	
80-108	Ⅶ区	SD029	−	−	古代	土師器 甕？壺？	口縁	−	−	−	−	−	−	3.7～	一部	良	白色粒·黒色粒	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/3	内外面ともにナデ調整。	
80-109	Ⅶ区	SD030	−	−	古代	土師器 坏	口縁～底部	(16.2)	−	(12.0)	−	−	3.1	−	1/3	良	石英·黒色粒	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	内外面ともに回転ナデ調整。磨滅が著しい。	
80-110	Ⅶ区	SD030	−	−	古代	土師器 坏	口縁～底部	15.6	−	10.0	−	−	3.4	−	3/4	良	長石·輝石	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR7/6	内外面ともに回転ナデ調整。底部は回転糸きり。磨滅が著しい。	
80-111	Ⅶ区	SD030	−	−	古代	土師器 坏	口縁～底部	(17.3)	−	(7.0)	−	−	2.1	−	1/3	良	黒色粒	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	内外面ともに回転ナデ調整。磨滅が著しい。	

図版-報番	調査区	遺構	層位	取上No.	時期	器種	部位	法量 (cm) 口径	胴部径	底径	高台径	高台高	器高	残存高	残存率	焼成	胎土	色調 外面	色調 内面	調整	備考
80-112	Ⅶ区	SD030	−	−	古代	土師器 坏	口縁～底部	17.2	−	10.3	−	−	3.2	−	4/5	良	長石・輝石	橙 7.5YR6/6	橙 7.5YR6/6	内外面ともに回転ナデ調整。底部は回転糸きり。磨滅が著しい。	
80-113	Ⅶ区	SD029	−	−	古代 10C	須恵器 杯	底部	−	−	−	(12.2)	0.9	−	1.7～	一部	良	長石・白色粒・黒色粒	灰 N5/	灰白 N7/	内外面ともに回転ナデ調整。高台は張り付け。	
80-114	Ⅶ区	SD029	−	−	古代 平安	土師器 杯	口縁～底部	(14.2)	−	−	8.4	2.0	6.1	−	1/2	−	赤褐色粒・黒色粒	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4		
80-115	Ⅶ区	SD029	−	−	古代	土師器 坏	口縁～底部	−	−	−	−	−	2.6	−	1/4	良	黒色粒	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	内外面ともに回転ナデ調整。磨滅が著しい。	
80-116	Ⅶ区	SD029	−	−	古代	土師器 坏	底部	−	−	6.0	−	−	−	3.0～	一部	良	黒色粒	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	内外面ともに回転ナデ調整。磨滅が著しい。	
80-117	Ⅶ区	SD030	−	−	古代	土師器 坏	−	−	−	−	−	−	−	3.0～	一部	良	長石・石英・白色粒 赤褐色粒	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	内外面ともにナデ調整。底部はヘラ切り後ナデ調整。	
80-118	Ⅶ区	SD029	−	−	古代 平安	土師器 高台付坏	一部	−	−	−	−	−	−	3.0～	一部	良	長石・黒色粒	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	内外面ともに回転ナデ調整。磨滅が著しい。	
80-119	Ⅶ区	SK019	−	5	古代	土師器 甕	口縁～頸部	28.8	−	−	−	−	−	5.7～	一部	良	石英・角閃石	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/3	内外面ともにナデ調整。磨滅が著しい。	
80-120	Ⅶ区	SK019	−	14	古代	土師器 壺	口縁～頸部	−	−	−	−	−	−	6.2～	一部	良	長石・輝石・赤褐色粒	橙 7.5YR7/6	橙 5YR7/6	外面は縦方向のハケ目調整。内面はナデ調整。口縁は横ナデ調整。	
83-121	Ⅶ区	SK019	−	29	古代	土師器 甕	口縁～胴部	(24.2)	−	−	−	−	−	10.5～	一部	良	長石・石英・角閃石 白色粒・赤褐色粒	にぶい黄橙 10YR7/6	橙 7.5YR7/6	外面は縦方向のハケ目調整で一部指頭圧痕あり。内面は縦方向の削り調整。	
83-122	Ⅶ区	SK019	−	−	古代	土師器 小型甕	口縁	(14.1)	−	−	−	−	−	3.5	一部	不良	長石・石英・角閃石 輝石	にぶい黄褐 10YR5/3	にぶい赤褐 5YR5/4	内外面ともにナデ調整。内面には指頭圧痕あり。	
83-123	Ⅶ区	SK019	−	33	古代	土師器 甕	口縁～頸部	(20.0)	−	−	−	−	−	5.1～	一部	良	長石・石英・金雲母	明赤褐 2.5YR5/6	明赤褐 2.5YR5/6	外面はナデ調整。内面は削り後ナデ調整。口縁内面は一部削り後ナデ調整。	
83-124	Ⅶ区	SK019	−	30·48	古代	土師器 甕	口縁	(18.0)	−	−	−	−	−	4.4～	一部	良	長石・石英・角閃石	橙 5YR7/6	浅黄橙 7.5YR8/4	外面はナデ調整。内面は削り後ナデ調整。	
83-125	Ⅶ区	SK019	−	3	古代 奈良	土師器 坏	−	(15.3)	−	(6.2)	−	−	3.5	−	1/3	良	長石・石英・白色粒	にぶい橙 7.5YR7/4	橙 7.5YR7/6	内外面ともに回転ナデ調整。	
83-126	Ⅶ区	SK019	−	16	古代	土師器 浅鉢	口縁	−	−	−	−	−	−	5.7～	一部	不良	石英・角閃石・白色粒	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい橙 5YR7/4	内外面ともにナデ調整。磨滅が著しい。	
83-127	Ⅶ区	SK020	−	−	古代	土師器 浅鉢	口縁～胴部	−	−	−	−	−	−	5.7～	一部	良	長石・金雲母・黒色粒	にぶい赤褐 5YR4/4	褐灰 5YR5/4	外面・口縁はナデ調整。内面はヘラ削り調整。	
83-128	Ⅶ区	SK019	−	1·10 11·26	古代 奈良	土師器 坏	口縁～底部	15.0	−	6.5	−	−	4.2	−	4/5	良	長石・石英・金雲母 赤褐色粒	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	内外面ともに回転ナデ調整。磨滅が著しい。	
83-129	Ⅶ区	SK019	−	27	古代	土師器 蓋	蓋部	−	−	−	−	−	−	1.2～	一部	良	長石・白色粒・黒色粒	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	内外面ともに回転ナデ調整。	
83-130	Ⅶ区	SK020	−	−	古代 奈良	土師器 坏	口縁～底部	−	−	−	−	−	−	3.1～	一部	不良	角閃石・黒色粒・赤褐色粒	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	内外面ともに回転ナデ調整。	
83-131	Ⅶ区	SK019	−	12	古代	須恵器 蓋	蓋部	15.6	−	−	−	−	1.9	−	4/5	良	白色粒・黒色粒	青灰 5B6/1	青灰 5B6/1	外面上部は回転ヘラ削り、回転ナデ調整。内面は回転ナデ調整。	
83-132	Ⅶ区	SK019	−	−	古代	須恵器 蓋	蓋部	(17.8)	−	−	−	−	−	1.0～	一部	良	白色粒	灰 10Y5/1	灰 N6/	外面上部は回転ヘラ削り、回転ナデ調整。内面は回転ナデ調整。	
83-133	Ⅶ区	SK019	−	8	古代 奈良	土師器 坏	口縁～底部	(15.0)	−	(5.8)	−	−	3.8	−	1/2	良	長石・石英・角閃石 赤褐色粒	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	内外面ともに回転ナデ調整。	
83-134	Ⅶ区	SK020	−	−	古代 奈良	須恵器 −	口縁～底部	(14.5)	−	−	(8.0)	0.6	4.6	−	1/2	良	白色粒・黒色粒	灰 N5/	灰 N6/	内外面ともに回転ナデ調整。底部はヘラ切り後ナデ調整。貼り付け高台。	
83-135	Ⅶ区	SK019	−	13	古代 奈良	須恵器 杯	口縁～底部	(14.0)	−	−	(9.0)	0.5	3.9	−	1/2	良	白色粒・黒色粒	緑灰 10G5/1	緑灰 10G5/1	内外面ともに回転ナデ調整。貼り付け高台。	
84-136	Ⅶ区	SK021	−	7	古代	土師器 甕	口縁～胴部	(26.9)	−	−	−	−	−	16.8	1/3	良	長石・角閃石・金雲母・赤褐色粒	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4	外面はハケ目調整。内面はヘラ削り後口縁から頸部にかけてナデ調整。	

図版・番号	調査区	遺構	層位	取上No.	時期	器種	部位	法量 (cm) 口径	胴部径	底径	高台径	高台高	器高	残存高	残存率	焼成	胎土	色調 外面	色調 内面	調整	備考
84-137	Ⅶ区	SK021	—	—	古代	土師器 小型甕	口縁～頸部	(13.8)	—	—	—	—	—	4.3～	一部	良	石英・角閃石・白色粒	にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい褐 7.5YR5/4	外面はナデ調整。内面は削り後ナデ調整、指頭圧痕あり。	
84-138	Ⅶ区	SK021	—	—	古代	土師器 小型甕	口縁～頸部	(13.2)	—	—	—	—	—	4.1～	一部	良	長石・石英・輝石 白色粒	にぶい黄褐 10YR6/3	にぶい黄褐 10YR6/3	内外面ともにハケ目調整。口縁部は横ナデ調整。	
84-139	Ⅶ区	SK021	—	7	古代	土師器 甕	口縁～胴部	(24.0) 最大 (25.4)	—	—	—	—	—	7.2～	一部	良	長石・石英・角閃石	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	外面は縦方向のハケ目調整。内面はヘラ削り後ナデ調整。口縁内部には横方向のハケ目調整。	
84-140	Ⅶ区	SK021	—	23	古代	須恵器 蓋	蓋部	(15.5)	—	—	—	—	—	1.7～	1/3	良	石英・白色粒・黒色粒	灰白 5Y8/1	灰白 5Y8/2	外面上部は回転ヘラ削り。外面下部と内面は回転ナデ調整。	
84-141	Ⅶ区	SK021	—	—	古代	須恵器 蓋	蓋部	(15.4)	—	—	—	—	—	1.4～	一部	良	白色粒・黒色粒	灰白 7.5Y7/1	灰白 7.5Y7/1	外面上部は回転ヘラ削り。外面下部と内面は回転ナデ調整。	
84-142	Ⅶ区	SK021	—	24	古代 奈良	土師器 甕	口縁～胴部	(28.8)	—	—	—	—	—	7.1～	一部	良	角閃石・金雲母 白色粒	灰黄褐 10YR4/2	にぶい黄褐 10YR5/3	外面は縦方向のハケ目調整。内面はヘラ削り後ナデ調整。口縁内部には横方向のハケ目調整。	
84-143	Ⅶ区	SK021	—	5	古代	土師器 皿	口縁～底部	(16.7)	—	(7.4)	—	—	2.3	—	1/3	良	石英・白色粒・黒色粒	浅黄橙 7.5YR8/4	橙 7.5YR7/6	内外面ともに回転ナデ調整。底部にはヘラ書き(稲庭)あり。	底部ヘラ書き
84-144	Ⅶ区	SK021	—	19	古代	土師器 甕	口縁～頸部	—	—	—	—	—	—	6.3～	一部	良	長石・石英・角閃石 金雲母	にぶい褐 7.5YR6/3	橙 7.5YR6/6	外面は縦方向のハケ目調整。内面はヘラ削り後ナデ調整。口縁内部には横方向のハケ目調整。	
84-145	Ⅶ区	SK021	—	17	古代 奈良	須恵器 —	口縁～底部	(14.0)	—	—	(9.5)	0.6	4.4	—	1/3	良	白色粒・黒色粒	灰白 7.5Y8/1	灰白 7.5Y8/1	内外面ともに回転ナデ調整。底部はヘラ切り後ナデ調整。高台は張り付け。磨滅が著しい。	
84-146	Ⅶ区	SK021	—	—	古代 奈良	須恵器 —	口縁～底部	(14.0)	—	—	(10.0)	0.4	3.5	—	1/4	良	角閃石・白色粒 黒色粒	灰白 7.5Y7/1	灰白 7.5Y7/1	内外面ともに回転ナデ調整。	
84-147	Ⅶ区	SK021	—	4	古代 奈良	須恵器 —	口縁～底部	(13.7)	—	—	(9.5)	0.65	4.6	—	2/3	良	白色粒・黒色粒	灰白 5Y8/1	灰白 5Y8/1	内外面ともに回転ナデ調整。底部はヘラ切り後ナデ調整。高台は張り付け。	
84-148	Ⅶ区	SK021	—	—	古代 奈良	須恵器 —	底部	—	—	—	(8.4)	0.5	—	1.8～	一部	良	白色粒・黒色粒	灰 7.5Y6/1	灰 7.5Y6/1	内外面ともに回転ナデ調整。底部はヘラ切り後ナデ調整。高台は張り付け。	
85-149	Ⅶ区	SK022	—	—	古代	土師器 甑	口縁～胴部	(29.8)	—	—	—	—	—	24.9～	—	良	長石・石英・角閃石 赤褐色粒	橙 7.5YR7/6	橙 5YR7/6	外面はナデ調整、内面は縦方向の削り調整。口縁部は横ナデ調整。把手には指頭圧痕あり。	
85-150	Ⅶ区	SK022	—	—	古代	土師器 甕	口縁～胴部	—	—	—	—	—	—	3.8～	一部	良	石英・長石・角閃石	にぶい赤褐 5YR5/4	にぶい橙 7.5YR5/3	外面・口縁は横ナデ調整。内面はヘラ削り調整。	
85-151	Ⅶ区	SK022	—	31	古代	土師器 甕	口縁	(20.2)	—	—	—	—	—	7.2～	1/5	良	石英・角閃石・金雲母	橙 2.5YR7/6	にぶい黄橙 10YR7/3	外面は縦方向のハケ目調整。内面は縦・横方向の削り後ナデ調整。口縁は横ナデ調整。	
85-152	Ⅶ区	SK022	上層一括	—	古代	土師器 甕	口縁～胴部	(14.8)	—	—	—	—	—	8.0～	一部	良	長石・角閃石・白色粒・黒色粒	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR6/4	内外面ともに削り後ナデ調整。口縁部は横ナデ調整。	
85-153	Ⅶ区	SK022	—	—	古代	土師器 甕	口縁～胴部	(17.6)	—	—	—	—	—	6.8～	1/3	良	長石・石英・黒色粒 金雲母	赤褐 2.5YR4/6	赤褐 2.5YR4/6	外面はナデ調整。内面はヘラ削り調整。口縁は横ナデ調整。	
85-154	Ⅶ区	SK022	上層一括	16	—	土師器 甕	口縁	—	—	—	—	—	—	6.9～	一部	良	角閃石・白色粒	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	外面はナデ調整。内面は縦方向の削り後ナデ調整。	
85-155	Ⅶ区	SK022	—	—	古代	土師器 甕	口縁～胴部	(12.4)	—	—	—	—	—	8.6～	1/4	良	長石・輝石・石英・赤褐色粒	にぶい黄褐 10YR5/3	にぶい橙 7.5YR5/4	内外面ともにナデ調整。	
85-156	Ⅶ区	SK022	—	1·10 29·47	—	土師器 甕	口縁～胴部	(25.2)	—	—	—	—	—	8.3	一部	良	石英・角閃石・白色粒 黒色粒	にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい黄橙 10YR7/2	外面は縦方向のハケ目調整。内面はハケ目調整後、斜め方向の削り調整。口縁は横ナデ調整。	
85-157	Ⅶ区	SK022	上層一括	—	古代	土師器 小型鉢	口縁	(12.9)	—	—	—	—	—	4.8～	一部	良	石英・角閃石・白色粒・黒色粒	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 7.5YR5/4	外面はナデ調整。内面はヘラ削り調整。口縁は横ナデ調整。	
85-158	Ⅶ区	SK022	—	37	古代	土師器 甕	口縁	—	—	—	—	—	—	3.2～	一部	良	長石・白色粒 赤褐色粒	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	内外面ともにナデ調整。外面には一部、指頭圧痕あり。内面には横方向のハケ目調整あり。	
85-159	Ⅶ区	SK022	—	16	—	土師器 甕	口縁	—	—	—	—	—	—	6.8～	一部	良	石英・角閃石・白色粒	橙 5YR7/6	にぶい橙 5YR7/4	外面はハケ目調整。内面は縦方向の削り後ナデ調整。頸部に一部、指頭圧痕あり。	
85-160	Ⅶ区	SK022	上層	—	—	土師器 甕	口縁	(15.1)	—	—	—	—	—	4.2～	一部	良	角閃石・石英・白色粒	橙 7.5YR6/6	にぶい橙 7.5YR6/4	内外面ともにナデ調整。内面に指頭圧痕あり。	
86-161	Ⅶ区	SK022	上層一括	72	—	土師器 浅鉢	口縁～胴部	(33.4)	—	—	—	—	—	7.5～	1/4	良	石英・角閃石・黒色粒	橙 2.5YR6/6	淡橙 5YR8/3	内外面ともに削り後ナデ調整。口縁部は横ナデ調整。	

図版-番番	調査区	遺構	層位	取上No.	時期	器種	部位	法量 (cm)							残存率	焼成	胎土	色調		調整	備考
								口径	胴部径	底径	高台径	高台高	器高	残存高				外面	内面		
86-162	Ⅶ区	SK022	−	15	−	土師器 蓋	蓋部	−	−	−	−	−	−	1.9	一部	良	長石・白色粒	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	内外面ともに回転ナデ調整。	
86-163	Ⅶ区	SK022	上層一括	−	古代	土師器 蓋	蓋部	−	−	−	−	−	−	1.1～	一部	良	長石・白色粒・黒色粒	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	外面・口縁は回転ナデ調整。内面はナデ調整。	
86-164	Ⅶ区	SK022	−	12	−	土師器 鉢	口縁～胴部	(29.2)	−	−	−	−	−	6.9～	一部	良	石英・長石・角閃石	にぶい橙 5YR7/4	橙 7.5YR7/6	外面は横方向のハケ目調整。内面は横方向のヘラ削り調整。口縁部は横ナデ調整。	
86-165	Ⅶ区	SK022	−	20	古代	土師器 甕	底部	−	−	−	−	−	−	4.7～	一部	良	角閃石・白色粒	にぶい褐 7.5YR7/4	褐灰 7.5YR4/1	内外面ともにナデ調整。	
86-166	Ⅶ区	SK022	上層一括	−	−	土師器 無頸壺	口縁	(25.8)	−	−	−	−	−	6.2～	一部	良	長石・角閃石・白色粒 黒色粒	橙 5YR7/6	橙 5YR6/6	内外面ともにナデ調整。	
86-167	Ⅶ区	SK022	−	8	古代	須恵器 蓋	蓋部	15.2	−	−	−	−	2.2	−	完形	良	白色粒・黒色粒	灰白 2.5Y8/1	灰白 5Y8/1	内外面ともに回転ナデ調整。外面上部は回転ヘラ削り調整。	
86-168	Ⅶ区	SK022	−	−	−	土師器 蓋	蓋部	18.2	−	−	−	−	3.6	−	完形	良	長石・石英・角閃石	橙 5YR7/6	にぶい橙 5YR7/4	内外面ともに回転ナデ調整。外面上部は回転ヘラ削り後ナデ調整。内面上部はナデ調整。つまみあり。	
86-169	Ⅶ区	SK022	−	36.40 50	−	土師器 蓋	蓋部	15.8	−	5.7	−	−	2.9	−	完形	良	長石・鉧石・金雲母 赤褐色粒	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	内外面ともに回転ナデ調整。外面上部は回転ヘラ削り後ナデ調整。	
86-170	Ⅶ区	SK022	−	18	−	土師器 蓋	蓋部	16.4	−	−	−	−	3.7	−	1/2	良	長石・白色粒	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	内外面ともに回転ナデ調整。外面上部は回転ヘラ削り後ナデ調整。つまみあり。	
86-172	Ⅶ区	SK022	−	−	−	土師器 蓋	口縁	(14.7)	−	−	−	−	−	1.0～	一部	良	長石・石英	橙 5YR6/6	橙 5YR6/6	内外面ともに回転ナデ調整	
86-173	Ⅶ区	SK022	−	−	古代	土師器 蓋	口縁	(15.0)	−	−	−	−	−	2.2～	一部	良	長石・赤褐色粒	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	内外面ともに回転ナデ調整	
86-173	Ⅶ区	SK022	−	1	−	土師器 蓋	蓋部	(16.3)	−	−	−	−	2.3	−	2/3	良	長石・白色粒・黒色粒	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/3	内外面ともに回転ナデ調整。外面上部は回転ヘラ削り後ナデ調整。	
86-174	Ⅶ区	SK022	−	3	−	土師器 坏	口縁～底部	11.6	−	7.3	−	−	3.9	−	完形	良	石英・金雲母・白色粒	浅黄橙 7.5YR8/4	にぶい橙 7.5YR7/4	内外面ともに回転ナデ調整。底部は回転ヘラ削切り後丁寧なナデ調整。	
86-175	Ⅶ区	SK022	−	12	−	土師質 坏	口縁～底部	14.8	−	5.3	−	−	4.4	−	1/2	不良	白色粒・黒色粒	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR6/4	内外面ともに丁寧な回転ナデ調整。	
86-176	Ⅶ区	SK022	−	15.27	−	土師器 坏	口縁～底部	19.6	−	8.0	−	−	5.6	−	2/3	良	長石・鉧石・白色粒	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	内外面ともに回転ナデ調整。外面下部は回転ヘラ削り後ナデ調整。底部は回転ヘラ切り後ナデ調整。	
87-177	Ⅶ区	SK022	−	−	−	須恵器 坏	口縁～底部	15.5	−	−	9.1	0.5	6.2	−	7/8	良	白色粒・黒色粒	灰白 N7/	灰白 N7/	内外面ともに回転ナデ調整。見込みはナデ調整。底部は回転ヘラ切り後ナデ調整。貼り付け高台。	
87-178	Ⅶ区	SK022	上層	−	−	須恵器 坏	口縁～底部	(15.5)	−	−	9.6	0.6	5.6	−	1/2	良	角閃石・白色粒 黒色粒	灰 N6/	灰白 7.5Y7/1	内外面ともに回転ナデ調整。見込みはナデ調整。底部は回転ヘラ切り後ナデ調整。貼り付け高台。	
87-179	Ⅶ区	SK022	−	17	古代	須恵器 坏	底部	−	−	−	(7.5)	0.5	−	1.7～	一部	良	白色粒・黒色粒	灰白 N7/	灰白 N7/	内外面ともに回転ナデ調整。	
87-180	Ⅶ区	SK022	−	−	−	須恵器 坏	口縁～底部	(12.4)	−	−	7.6	0.6	4.8	−	1/3	良	白色粒・黒色粒	灰白 7.5Y7/1	灰白 7.5Y7/1	内外面ともに回転ナデ調整。見込みはナデ調整。底部は回転ヘラ切り後ナデ調整。貼り付け高台。	
87-181	Ⅶ区	SK022	−	21	古代	須恵器 坏	口縁～底部	(12.4)	−	−	(7.7)	0.6	4.6	4.6	1/2	良	白色粒・黒色粒	灰 7.5Y6/	灰白 7.5Y7/1	内外面ともに回転ナデ調整。底部は回転ヘラ切り後ナデ調整。高台は貼り付け。	
87-182	Ⅶ区	SK022	−	9	古代 奈良	須恵器 坏	口縁～底部	(12.7)	−	−	−	−	−	3.8～	1/2	不良	黒色粒・砂粒	灰 N5/	灰 N6/	内外面ともに回転ナデ調整。底部は回転ヘラ切り後ナデ調整。貼り付け高台。	
87-183	Ⅶ区	SK022	−	8	古代	須恵器 坏	口縁～底部	(17.4)	−	(12.6)	−	−	3.0	−	1/4	良	白色粒・黒色粒	灰白 7.5Y7/1	灰白 7.5Y7/1	内外面ともに回転ナデ調整。底部は回転ヘラ削切り後ナデ調整。	
87-184	Ⅶ区	SK022	上層	−	−	須恵器 皿	口縁～底部	(19.4)	−	(17.1)	−	−	2.0	−	一部	良	角閃石・白色粒 黒色粒	灰白 5Y7/1	灰白 5Y7/1	内外面ともに回転ナデ調整。	実No.162と同一固体
87-185	Ⅶ区	SK019 SK022	上層一括	−	−	須恵器 坏	口縁～底部	(12.8)	−	(9.8)	−	−	3.9	−	1/2	良	白色粒	灰白 N7/	灰 N6/	内外面ともに回転ナデ調整。底部は回転ヘラ切り後ナデ調整。高台は貼り付け。	
87-186	Ⅶ区	SK022	上層	−	−	須恵器 蓋	蓋部	18.2	−	−	−	−	−	2.2～	1/2	良	長石・角閃石・白色粒 黒色粒	灰白 5Y7/1	灰白 5Y7/1	内外面ともに回転ナデ調整。外面上部は回転ヘラ削り後ナデ調整。	

図版-種番	調査区	遺構	層位	取上No.	時期	器種	部位	法量 (cm) 口径	胴部径	底径	高台径	高台高	器高	残存高	残存率	焼成	胎土	色調 外面	色調 内面	調整	備考
87-187	Ⅶ区	SK022	−	30	−	須恵器 坏	口縁～底部	12.0	−	4.2	−	−	4.0	−	1/3	良	白色粒・黒色粒	灰 7.5Y6/1	灰 7.5Y6/1	内外面ともにナデ調整。底部は回転ヘラ切り後ナデ調整。	
87-188	Ⅶ区	SK022	上層	−	−	須恵器 蓋	蓋部	−	−	−	−	−	−	1.6～	一部	良	白色粒・黒色粒	灰 N6/	灰 N6/	内外面ともに回転ナデ調整。外面上部は回転ヘラ削り後ナデ調整。	
91-189	Ⅶ区	SR001	−	−	古代 平安末	内黒 土器坏	口縁～底部	(14.2)	−	−	1.5	(8.3)	5.3	−	3/5	良	長石・角閃石・石英・輝石・赤褐色粒	にぶい黄橙 10YR7/3	黒褐 2.5YR3/1	外面は横ナデ調整。内面は雑し後不定方向の磨き調整。底部は回転ヘラ切り。貼り付け高台。	外面一部黒変
91-190	Ⅶ区	SR001	上層一括	−	古代	土師器 甕	口縁	−	−	−	−	−	−	3.0～	一部	良	角閃石・石英・黒色粒・白色粒	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	外面にヘラ当て痕あり。内面・口縁は横ナデ調整。外面頸部は縦方向のハケ目調整。	
91-191	Ⅶ区	SR001	−	−	古代	土師器 甕	口縁	−	−	−	−	−	−	4.7～	一部	良	角閃石・石英・赤褐色粒	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4	外面は縦方向のハケ目後ナデ調整。内面は横方向のハケ目後ナデ調整。内面頸部はヘラ削り調整。	
91-192	Ⅶ区	SR001	−	−	古代 奈良	土師器 坏	口縁～底部	(10.7)	−	(6.6)	−	−	−	3.2	3/4	良	金雲母・黒色粒・白色粒・赤褐色粒	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/3	内外面ともに回転ナデ調整。底部に回転ヘラ切り。	
91-193	Ⅶ区	SR001	−	2	−	土師器 皿	口縁～底部	11.6	−	8.2	−	−	2.5	−	2/3	良	長石・石英・黒色粒・白色粒	橙 5YR6/6	灰黄褐 10YR4/2	内外面ともに回転ナデ調整。底部は回転ヘラ切り後ナデ調整。	
91-194	Ⅶ区	SR001	−	1	古代	土師器 坏	底部	−	−	7.9	−	−	−	1.3～	2/3	良	白色粒・黒色粒	浅黄橙 10YR8/3	灰白 10YR8/1	内外面ともに回転ナデ調整。底部は回転ヘラ切り後ナデ調整。	
91-195	Ⅶ区	SE003	−	1	古代	土師器 坏	口縁～底部	(16.8)	−	(10.7)	−	−	3.3	−	2/3	良	長石・輝石・赤色粒	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	内外面ともに回転ナデ調整。底部は回転糸きり。	
91-196	Ⅶ区	SR001	上層一括	−	古代 奈良	須恵器 坏	底部	−	−	−	−	0.5	−	2.4～	一部	良	白色粒・黒色粒	灰 N6/	灰 N6/	内外面ともに回転ナデ調整。底部はヘラ切り。貼り付け高台。	
93-207	Ⅶ区	一括	−	−	古代	土師器 甕	口縁～胴部	(23.0)	−	−	−	−	−	8.8～	1/3	良	長石・角閃石・金雲母・褐色粒	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4	外面・口縁はナデ調整。内面はヘラ削り後ナデ調整。表面の荒れがひどく、外面にハケ調整の痕跡がわずかに認められる。	
93-208	Ⅶ区	一括	−	−	古代	土師器 甕	口縁	−	−	−	−	−	−	5·5～	一部	良	長石・石英・角閃石・白色粒	にぶい赤褐 2.5YR4/4	暗褐 7.5YR3/3	外面はナデ調整。内面はヘラ削り後ナデ調整。	
93-209	Ⅶ区	一括	−	−	古代 奈良	須恵器 甕	底部	−	−	−	−	−	−	7.0～	一部	良	黒色粒・白色粒	灰 N6/	灰白 2.5Y7/1	外面は回転ナデ調整。内面はナデ調整。底部はハケ後ナデ調整。	
93-210	Ⅶ区	一括	−	−	古代	土師器 甕	口縁～頸部	−	−	−	−	−	−	5.5～	一部	良	角閃石・石英・黒色粒・白色粒	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	外面上部は横ナデ調整。外面下部は縦方向のハケ目調整。口指頭・頸部は横方向のハケ目調整。口縁は横ナデ調整。内面下部はヘラ削り調整。	
93-212	Ⅶ区	一括	−	−	古代 平安	土師器 坏	口縁～底部	14.8	−	7.2	−	−	3.9	−	3/4	良	長石・角閃石・白色粒	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	内外面ともに回転ナデ調整。磨滅が著しい。	
93-213	Ⅶ区	Pit94	−	−	古代 奈良	須恵器 蓋	蓋部	16.0	−	−	−	−	3.2	−	完形	不良	長石・白色粒	にぶい褐 7.5YR5/3	灰褐 7.5YR5/2	外面は回転ナデ調整。内面は回転ナデ後横ナデ調整。宝珠つまみあり。	焼成による変形が著しい。
93-214	Ⅶ区	一括	−	−	古代 奈良	土師器 坏	口縁～底部	(14.2)	−	(7.9)	−	−	3.7	−	1/4	良	黒色粒・白色粒	橙 7.5YR7/6	にぶい橙 7.5YR7/4	内外面ともに回転ナデ調整。底部はナデ調整。	
93-215	Ⅶ区	一括	−	−	古代 奈良	須恵器 蓋	蓋部	(14.6)	−	−	−	−	−	1.6～	一部	良	黒色粒・白色粒	灰 N6/	灰 N6/	内外面ともに回転ナデ調整。	
93-216	Ⅶ区	一括	−	−	古代 奈良	須恵器 坏	底部	−	−	−	(12.2)	0.8	−	2.4～	1/3	良	白色粒	灰 N5/	灰 N6/	外面は回転ナデ調整。一部ヘラ削りあり。内面は回転ナデ調整。底部は回転ヘラ削り後ナデ調整。貼り付け高台。	
93-217	Ⅶ区	一括	−	−	古代 奈良	須恵器 坏	底部	−	−	−	(8.0)	1.1	−	2.5～	1/3	不良	石英・白色粒	灰黄 2.5Y7/2	灰白 2.5Y8/2	外面は回転ナデ調整。内面はナデ調整。底部は回転ヘラ切り後ナデ調整。貼り付け高台。	
93-218	Ⅶ区	一括	−	−	古代 奈良	須恵器 坏	底部	−	−	(9.2)	−	−	−	1.6～	1/4	良	輝石・白色粒	灰 N6/	灰 N6/	内外面ともに回転ナデ調整。底部はヘラ切り。	
100-220	Ⅷ区	SB024 Pit98	−	−	古代 奈良	須恵器 −	口縁～底部	(13.2)	−	−	(8.4)	0.6	4.4	−	1/4	良	黒色粒・白色粒	灰 N6/	灰 N6/	内外面ともに回転ナデ調整。高台は貼り付け。	
103-221	Ⅷ区	SD032	−	−	古代	須恵器 −	底部	−	−	−	(11.0)	0.8	−	3.8～	1/4	良	黒色粒・白色粒	灰 N6/	灰 N6/	内外面ともに回転ナデ調整。高台は貼り付け。	
103-222	Ⅷ区	SD032	−	−	中世	土師器 皿	口縁～底部	(8.6)	−	7.2	−	−	2.0	−	2/3	良	白色粒	橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	内外面ともにナデ調整。底面は回転糸切り。全体的にいびつ。	
103-223	Ⅷ区	SD032	−	−	中世	土師器 皿	口縁～底部	(10.2)	−	(8.3)	−	−	1.4	−	4/5	良	石英・金雲母・赤褐色粒	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	内外面ともにナデ調整。底面は回転糸切り。全体的に磨滅している。	

図版-番番	調査区	遺構	層位	取上No.	時期	器種	部位	法量 (cm) 口径	胴部径	底径	高台径	高台高	器高	残存高	残存率	焼成	胎土	色調 外面	色調 内面	調整	備考
107-224	Ⅷ区	SK072	—	—	古代奈良	土師器甕	口縁～胴部	(22.4)	—	—	—	—	—	9.4～	一部	良	角閃石・石英・白色粒	橙 5YR7/6	橙 5YR7/6	外面口縁は横ナデ調整,外面下部は縦方向のハケ調整,内面口縁は横方向のハケ調整後ナデ調整,内面下部はヘラ削り調整,	
107-225	Ⅷ区	SK072	—	5	古代奈良	土師器甕	口縁～胴部	(16.0)	—	—	—	—	—	6.3～	一部	良	長石・角閃石・石英	にぶい橙 5YR6/4	にぶい橙 5YR6/4	外面はナデ調整。内面はヘラ削り調整。口縁は横ナデ調整。	
107-226	Ⅷ区	SK041	—	37.38	古代	土師器甕	口縁	(26.4)	—	—	—	—	—	6.3～	1/4	良	長石・角閃石・輝石・金雲母・赤褐色粒	浅黄橙 10YR8/3	灰白 10YR8/2	外面・口縁は回転ナデ調整。内面はヘラ削り調整。口縁部ややいびつ。	外面煤付着
107-227	Ⅷ区	SK043	—	15	古代奈良	土師器坏	口縁～底部	—	—	—	—	—	—	3.8～	一部	良	角閃石・石英・黒色粒	明赤褐 2.5YR5/8	浅黄橙 7.5YR8/3	内外面ともに回転ナデ調整。外面に赤色顔料付着。	赤色顔料塗布
107-228	Ⅷ区	SK045	—	20.29	古代奈良	土師器甕	口縁～胴部	(18.4)	—	—	—	—	—	13.1～	一部	良	長石・石英・金雲母・赤褐色粒	にぶい赤褐 5YR5/4	明赤褐 5YR5/6	外面・口縁は丁寧なナデ調整。内面下部はヘラ削り調整。	
107-229	Ⅷ区	SK045	—	21	古代奈良	土師器手捏ね	口縁～底部	(6.0)	—	(2.0)	—	—	5.7	—	1/3	良	長石・金雲母・砂粒	橙 5YR6/6	橙 5YR6/8	内外面ともにナデ後指頭圧痕。	
107-230	Ⅷ区	SK051	—	3	—	土師器壺	口縁	(22.3)	—	—	—	—	—	2.4～	一部	良	角閃石・石英・黒色粒・白色粒	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	内外面ともナデ調整。内面下部に一部ヘラ削りあり。	
107-231	Ⅷ区	SK040	—	—	古代	土師器甕	口縁	—	—	—	—	—	—	3.1～	一部	良	角閃石・金雲母・白色粒・茶褐色粒	にぶい橙 10YR7/3	にぶい橙 10YR7/3	外面頸部は縦方向ハケ目後横ナデ調整,外面下部は縦方向ハケ目調整,口縁部は横ナデ調整,内面は横方向ハケ目調整,内面に一部ヘラ削り痕あり,	
107-232	Ⅷ区	SK051	—	2	—	土師器壺	口縁	—	—	—	—	—	—	5.4～	一部	良	角閃石・石英・黒色粒・白色粒	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい褐 7.5YR6/3	内外面下部は縦方向のハケ目調整。口縁は横方向のハケ目調整。	
107-233	Ⅷ区	SK041	—	—	古代	須恵器蓋	蓋部	(16.2)	—	—	—	—	2.2	—	1/3	良	黒色粒	灰白 5Y7/1	灰白 5Y7/1	内外面ともに回転ナデ調整。	
108-234	Ⅷ区	SK044	—	7	古代奈良	須恵器蓋	蓋部	(16.0)	—	—	—	—	—	2.8～	1/4	良	石英・白色粒	灰白 N7/	灰 N5/	内外面ともに回転ナデ調整。	
108-235	Ⅷ区	SK045	—	26.28	古代奈良	須恵器甕	口縁～胴部	—	—	—	—	—	—	8.8～	一部	不良	黒色粒・赤褐色粒	灰白 N7/ オリーブ灰 10Y5/2	灰白 N7/ 灰 10Y5/2	内外面ともに回転ナデ調整。内面体部に同心円当具痕。内外面体部に自然釉,遺物付着。	遺物付着
108-236	Ⅷ区	SK041	—	—	古代奈良	須恵器高坏	脚部	—	—	10.0	—	—	—	10.7～	1/2	良	黒色粒・白色粒	灰白 N7/	灰白 N7/	内外面ともに回転ナデ調整。	
108-237	Ⅷ区	SK043	—	5.6.7	古代奈良	須恵器鉢	口縁～底部	(21.4)	—	(11.0)	—	—	14.0	—	1/4	良	長石・赤褐色粒	暗灰黄 2.5Y5/2	暗灰黄 2.5Y5/2	内外面ともに回転ナデ調整。底部は回転ヘラ削り調整。	
108-238	Ⅷ区	SK046	—	4.8	古代奈良	須恵器坏	口縁～底部	(16.3)	—	(12.0)	—	—	5.1	—	3/8	良	黒色粒・白色粒	灰白 N7/	灰白 N7/	内外面ともに回転ナデ調整。底部は回転ヘラ削り。	焼成による変形著しい
108-239	Ⅷ区	SK041	古代層一括	10	古代奈良	土師器坏	胴部～底部	—	—	(7.5)	—	—	—	3.1～	1/3	良	角閃石	浅黄橙 7.5YR8/4	橙 7.5YR7/6	内外面ともに回転ナデ調整。底部は回転ヘラ切り後ナデ調整。	
108-240	Ⅷ区	SK073	—	—	中世	土師器皿	口縁～底部	(8.0)	—	(6.6)	—	—	1.8	—	一部	良	石英	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	内外面ともにナデ調整。底面は回転糸切り。	
108-241	Ⅷ区	SK073	—	—	中世	土師器皿	口縁～底部	9.4	—	6.9	—	—	1.4	—	2/3	良	黒色粒・白色粒	浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/6	内外面ともに回転ナデ調整。高台は回転糸切り後ナデ調整。	
108-242	Ⅷ区	SK073	—	—	中世	土師器坏	口縁～底部	(18.6)	—	(14.2)	—	—	2.9	—	1/4	良	黒色粒・赤褐色粒	にぶい橙 5YR7/4	にぶい橙 5YR7/4	内外面ともにナデ調整。内面下部は横ナデ調整。底面は板目圧痕後ナデ調整。	
108-243	Ⅷ区	SK073	—	—	中世	土師器皿	口縁～底部	(9.0)	—	(8.8)	—	—	1.3	—	1/4	良	黒色粒	にぶい黄橙 10YR7/2	にぶい黄橙 10YR7/2	内外面ともにナデ調整。底面は回転糸切り。	
108-244	Ⅷ区	SK073	—	—	中世	土師器皿	口縁～底部	9.0	—	7.9	—	—	1.3	—	3/4	良	赤褐色粒	にぶい橙 7.5YR6/4	にぶい橙 5YR6/4	内外面ともにナデ調整。底面は回転糸切り。	板目圧痕
108-245	Ⅷ区	SK045	—	20.25	—	土師器甕	頸部～胴部	—	—	—	—	—	—	17.0～	一部	良	長石・金雲母・黒色粒	にぶい赤褐 2.5YR5/4	にぶい赤褐 2.5YR5/3	外面はヘラ削り後ナデ調整,外面下部に煤痕,内面上部は横方向のヘラ削り調整,内面中部はヘラ削り調整,内面下部は下から上方向のヘラ削り調整,	黒斑
109-246	Ⅷ区	SK043	—	1.2.3	古代	須恵器甕	頸部～胴部	—	—	—	—	—	—	19.5～	一部	良	長石・角閃石・黒色粒・白色粒	灰 10Y6/1	灰 10Y6/1	内外面上部は回転ナデ調整。外面下部は回転ナデ後格子目タタキ文,内面は回転ナデ後同心円当て具痕,	
109-247	Ⅷ区	SK041	—	—	—	須恵器甕	胴部	—	—	—	—	—	—	15.6～	一部	良	白色粒	灰 N6/	灰 N6/	内外面上部は横ナデ調整。外面下部は平行タタキ目文。内面下部は同心円当具痕。	
109-248	Ⅷ区	SK041	—	—	古代	須恵器—	口縁～底部	(16.0)	—	—	(9.2)	0.4	5.8	—	1/5	良	角閃石・白色粒	灰白 5Y7/1	灰オリーブ 5Y6/1	内外面ともに回転ナデ調整。底部は回転ヘラ切り後ナデ調整。貼り付け高台。	

図版・報番	調査区	遺構	層位	取上No.	時期	器種	部位	法量 (cm)							残存率	焼成	胎土	色調		調整	備考
								口径	胴部径	底径	高台径	高台高	器高	残存高				外面	内面		
109-249	Ⅷ区	SK042	—	5.8.10	古代 奈良	須恵器 —	口縁～ 底部	10.7	—	—	(6.5)	0.4	4.0	—	2/3	良	白色粒	灰 7.5Y6/1	灰 7.5Y6/1	内外面ともに回転ナデ調整。底部は回転ヘラ切り後ナデ調整。貼り付け高台。	
109-250	Ⅷ区	SK051	—	—	古代	須恵器 盤	口縁～ 底部	—	—	—	—	—	—	2.2～	一部	良	黒色粒・白色粒	灰 5Y7/1	灰 10Y6/1	内外面ともに回転ナデ調整。底部は回転ヘラ切り後ナデ調整。	
109-251	Ⅷ区	SK043	—	—	古代 奈良	須恵器 碗	口縁～ 底部	(12.0)	—	—	(7.5)	0.5	4.5	—	1/6	良	黒色粒・白色粒	オリーブ灰 2.5GY6/	灰 2.5GY6/	内外面ともに回転ナデ調整。底部は貼り付け痕あり？	
109-252	Ⅷ区	SK043	—	14	古代 奈良	須恵器 坏	胴部～ 底部	—	—	(8.5)	—	—	—	2.1～	一部	良	長石・石英	灰白 5Y8/	灰白 5Y8/	内外面ともに回転ナデ調整。底部は回転ヘラ削り調整。貼り付け高台。	
111-253	Ⅷ区	Pit227	—	20	古代	須恵器 蓋	蓋部	(11.8)	—	—	—	—	—	2.1～	一部	良	白色粒	灰 N6/	灰 N5/	内外面ともに回転ナデ調整。	
111-254	Ⅷ区	Pit96	—	—	古代	須恵器 坏	口縁	—	—	—	—	—	—	4.1～	一部	良	黒色粒・白色粒	灰白 7.5Y7/1	灰白 N6/	内外面ともに回転ナデ調整。	
111-255	Ⅷ区	Pit141	—	—	古代	須恵器 —	口縁～ 底部	—	—	—	—	0.5	—	3.8～	1/4	良	黒色粒・白色粒	灰白 10Y5/1	灰白 7.5Y6/1	内外面ともに回転ナデ調整。底部は回転ヘラ切り後ナデ調整。貼り付け高台。	
112-264	Ⅷ区	検出面 一括	検出面	—	古代	土師器 甕	口縁～ 胴部	—	—	—	—	—	—	8.3～	一部	良	長石・角閃石・白色粒・赤褐色粒	にぶい橙 7.5YR6/4	橙 7.5YR6/6	内外面ともにナデ調整。全体的に器面が磨滅。	
112-265	Ⅷ区	中世層 一括	中世層	—	古代	土師器 甕	口縁	—	—	—	—	—	—	5.1～	一部	良	長石・角閃石・石英	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	外面・口縁はナデ調整。外面は磨滅のためハケ目痕不明。内面下部はヘラ削り後ナデ調整。	
112-266	Ⅷ区	古代層 一括	古代層	—	古代	土師器 甕	口縁	—	—	—	—	—	—	5.7～	一部	良	角閃石・石英・砂粒	明赤褐 2.5YR5/6	にぶい橙 7.5YR6/4	外面・口縁はナデ調整。内面はヘラ削り後ナデ調整。	
112-267	Ⅷ区	SA002 Pit13	—	—	中世	土師器 皿	口縁～ 底部	(9.2)	—	(7.8)	—	—	1.4	—	1/3	良	石英・白色粒・褐色粒	にぶい橙 7.5YR7/4	橙 7.5YR7/6	内外面ともにナデ調整。片口あり。	
112-268	Ⅷ区	SA002 Pit13	—	—	中世	土師器 皿	口縁～ 底部	(9.0)	—	(7.6)	—	—	1.5	—	1/3	良	石英・白色粒	橙 7.5YR7/4	橙 7.5YR7/4	内外面ともにナデ調整。磨滅が著しい。	
112-269	Ⅷ区	表土 一括	表土	—	中世	土師器 皿	口縁～ 底部	10.0	—	8.3	—	—	1.5	—	4/5	良	金雲母	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	内外面ともに回転ナデ調整。内面底部は横ナデ調整。底部は回転糸切り後板目圧痕あり。全体的にいびつ。	板目圧痕
112-270	Ⅷ区	一括	—	—	中世	土師器 —	底部	—	—	(6.4)	—	—	—	2.0～	1/5	良	長石・黒色粒・赤褐色粒・茶褐色粒	浅黄橙 7.5YR8/3	浅黄橙 7.5YR8/4	外面は回転ナデ調整。内面は回転ヘラ削り後ナデ調整。底部はヘラ切り後ナデ調整。	
112-271	Ⅷ区	表土 一括	表土	—	古代	土師器 甕？壺？	口縁～ 頸部	—	—	—	—	—	—	5.2～	一部	良	角閃石・石英・金雲母・赤褐色粒	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/3	口縁は横ナデ調整。外面下部は縦方向のハケ目。内面頸部は横方向のハケ目後ナデ調整。内面下部はヘラ削り調整。	
112-272	Ⅷ区	古代層 一括	古代層	—	—	土師器 甕	口縁	—	—	—	—	—	—	8.3～	一部	良	長石・石英・赤褐色粒	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい褐 7.5YR6/3	外面口縁は横ナデ調整。外面下部は縦方向のハケ目。一部横ナデ調整。内面口縁は横方向のハケ目。内面下部は下から上方向のヘラ削り調整。	
112-273	Ⅷ区	撹乱 一括	—	—	古代 奈良	須恵器 坏	口縁～ 底部	12.8	—	—	6.7	0.5	5.6	—	2/3	良	黒色粒・白色粒	灰 N5/	灰 N6/	内外面ともに回転ナデ調整。内底面はナデ調整。貼り付け高台。底部にヘラ書きあり。	
112-274	Ⅷ区	SA002 Pit13	—	—	中世	土師器 坏	口縁～ 底部	(15.0)	—	(9.2)	—	—	2.8	—	1/3	良	石英・白色粒・褐色粒	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	外面・口縁はナデ調整。内面は多方向のナデ調整。底部はヘラ切り後ナデ調整。	
112-275	Ⅷ区	包含層 一括	包含層	—	古代 奈良	須恵器 坏	口縁～ 底部	(13.8)	—	—	(8.8)	0.6	4.3	—	1/3	良	黒色粒・白色粒	灰 N4/	灰 N5/	内外面ともに回転ナデ調整。底面は回転ヘラ切り後ナデ調整。貼り付け高台。	
120-276	X区	SD035	—	一括	中世	土師器 坏	口縁～ 底部	(7.6)	—	(6.2)	—	—	2.0	—	1/4	良	金雲母・赤褐色粒	にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	内外面ともにナデ調整。	
120-277	X区	SD035	—	一括	中世 12C頃	土師器 燈明皿	口縁～ 底部	(7.8)	—	(6.4)	—	—	1.4	—	1/4	良	鉄石・金雲母	にぶい橙 7.5YR7/3	にぶい橙 7.5YR7/3	内外面ともに回転ナデ調整。底部は回転糸切り。	
120-278	X区	SK053	—	一括	中世	土師器 燈明皿	口縁～ 底部	(8.0)	—	(7.0)	—	—	1.2	—	1/4	良	石英・黒色粒・白色粒	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	内外面ともに回転ナデ調整。底部は回転ヘラ切り後ナデ調整。	
120-279	X区	SK052	—	9	古代	土師器 坏	口縁～ 底部	(14.0)	—	(10.0)	—	—	3.0	—	1/3	良	石英・金雲母・黒色粒・白色粒	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	内外面ともに回転ナデ調整。底部は回転ヘラ切り後ナデ調整。	
120-281	X区	Pit401	—	3	中世 12C	土師器 燈明皿	口縁～ 底部	(8.0)	—	(7.0)	—	—	1.9	—	1/5	良	黒色粒・白色粒	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/4	内外面ともに回転ナデ調整。底部は回転ヘラ切り後ナデ調整。	
120-282	X区	SK056	—	一括	—	釜用具 (ハマ？)	—	全長 3.3	—	—	—	—	—	0.9	1/4	良	長石・黒色粒・白色粒	—	—	内外面ともにナデ調整。	一部黒斑

図版-報番	調査区	遺構	層位	取上No.	時期	器種	部位	法量 (cm)							残存率	焼成	胎土	色調		調整	備考
								口径	胴部径	底径	高台径	高台高	器高	残存高				外面	内面		
120-283	X区	SE004	−	2.6.9	古代	須恵器 甕	口縁	−	−	−	−	−	−	10.6～	一部	不良	長石	暗灰 N3/	灰白 5Y7/1	内外面ともにナデ調整。外面に一部指頭圧痕あり。	
120-284	X区	SE004	−	一括	中世	瓦器 擂鉢	底部	−	−	−	−	−	−	3.0～	一部	良	長石・石英	灰白 5Y7/1	灰白 5Y7/1	外面はナデ調整。内面はナデ後6本単位の櫛状工具による擂目。	
120-285	X区	SE004	−	8	中世	瓦器 擂鉢	底部	−	−	−	−	−	−	3.0～	一部	良	長石・石英	灰 N4/	灰 N4/	外面はナデ調整。内面はナデ後8本単位の櫛状工具による擂目。底面に板目圧痕あり。	
120-286	X区	SE004	−	5	中世	土師器 羽釜	頸部	−	−	−	−	−	−	7.0～	一部	良	長石・角閃石・白色粒・赤褐色粒	灰黄 2.5Y6/2	にぶい黄橙 10YR5/3	外面はナデ調整。外面頸部下に強いナデ調整。内面はナデ後頸部付近に指頭圧痕あり。	外面煤付着
120-288	X区	Pit356	−	一括	中世	土師器 皿	口縁～底部	(9.1)	−	(7.4)	−	−	1.6	−	1/4	良	長石・金雲母	にぶい橙 7.5YR7/4	にぶい橙 7.5YR7/3	内外面ともに回転ナデ調整。内面底部はナデ調整。底部は回転糸切り。	
120-289	X区	Pit391	−	一括	古代	土師器 皿	口縁～底部	(8.8)	−	(7.9)	−	−	1.05	−	1/4	良		橙 5YR7/6	にぶい橙 5YR7/4	内外面ともに回転ナデ調整。内外面底部はナデ調整。	
131-293	XI区	SD039	−	一括	古代	土師器 坏	底部	−	−	8.85	−	−	−	2.1～	ほぼ完形	良		浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/4	内外面ともにナデ調整。底部はヘラ切り後ナデ調整。	
131-296	XI区	SD044	2層	一括	古代	土師器 坏	口縁～底部	(13.4)	−	(10.8)	−	−	3.4	−	1/2	良		にぶい黄橙 10YR7/4	にぶい黄橙 10YR7/4	内外面ともにナデ調整。底部はヘラ切り後ナデ調整。	板状圧痕
131-297	XI区	SD004	2層	一括	中世	須恵器 壺	口縁	(18.2)	−	−	−	−	−	3.1～	1/2	良		灰 N6/0	暗灰 N6/0	外面頸部は工具よる強いナデ、体部はハケ目後ナデ調整。内面は回転ナデ調整。	瓦質土器 黒色土器
131-298	XI区	SD044	1層	一括	中世	柄付 小型鍋	受皿	(15.8)	(15.8)	−	−	−	−	2.8～	1/2	良		橙 10YR7/4	暗灰黄 2.5Y4/2	外面は回転ヘラ削り調整。内面は回転ナテ調整。	煤付着
131-299	XI区	SD044	1層	一括	中世	柄付 小型鍋	把手	−	−	−	−	−	−	−	1/2	良		浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	内外面ともにナデ調整。	煤付着
131-300	XI区	SD044	1層	一括	中世	柄付 小型鍋	把手	−	−	−	−	−	−	−	1/2	良		浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4	内外面ともにナデ調整。	煤付着
131-301	XI区	SD044	2層	一括	−	須恵器 甕	口縁	−	−	−	−	−	−	4.6～	一部	良	角閃石・白色粒・黒色粒	灰 N5/	灰白 N7/	内面と口縁部に粗いナデ調整。外面に叩き痕あり。	
131-302	XI区	SD044	1層	一括	古墳	高坏	脚部	−	−	6.4	−	−	−	9.6～	1/2	良	長石・石英・雲母	赤褐 5YR4/8	−	外面はヘラ削り後ナデ調整。底部はヘラ削り調整。	磨滅著しい
131-303	XI区	SD044	1層	一括	中世	片口鉢	口縁～底部	20.2	−	15.5	−	−	10.2	−	1/2	良		灰赤 10YR5/2	にぶい赤褐 2.5YR5/3	外面はヘラ削り後ナデ調整。内面は回転ナデ調整。	
131-304	XI区	SD044	2層	一括	−	瓦質土器 擂鉢	口縁～胴部	(31.0)	−	−	−	−	−	10.5～	1/2	良	石英・雲母・角閃石	灰 N5/	灰 N4/	内面はナデ調整後、櫛状工具による6本単位の擂目。外面はナデ調整。	
131-305	XI区	SD044	2層	一括	−	瓦質土器 擂鉢	口縁～底部	(32.6)	−	(16.0)	−	−	13.4	−	1/2	良	石英・長石・角閃石・鉆石	浅黄橙 10YR8/2	灰白 10YR8/1	内面はナデ調整後、櫛状工具による5本単位の擂目。外面はナデ調整。	
133-315	XI区	SD044	I層	一括	中世	瓦質 火鉢	口縁	(36.0)	−	−	−	−	−	13.5～	1/2	良	長石・石英・雲母	褐灰 10YR4/1	褐灰 7.5YR4/1	内外面ともに回転ナデ後ナデ調整。突帯は貼り付け。	
133-316	XI区	SD044	2層	一括	中世	瓦質 火鉢	口縁～胴部	(34.8)	−	−	−	−	−	13.8～	1/2	良	長石・石英・角閃石	浅黄 2.5Y7/3	灰黄 2.5Y7/2	外面はナデ調整、突帯貼り付け、外面上部にスタンプあり。内面はヘラ削り後ナデ調整。	
137-329	XI区	SK065	−	8	古代 奈良	土師器 坏	口縁～底部	9.0	−	7.4	−	−	1.6	−	ほぼ完形	良		橙 7.5YR7/6	橙 7.5YR7/6	外面は回転ナデ。内面は回転ナデ後ナデ調整。底部は糸切り。	
137-330	XI区	SK065	−	1	古代 奈良	土師器 坏	口縁～底部	8.0	−	6.4	−	−	1.5	−	ほぼ完形	良		浅黄橙 7.5YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/4	外面は回転ナデ調整。内面は回転ナデ後ナデ調整。底部は糸切り。	
137-331	XI区	SK065	−	15	古代 奈良	土師器 坏	口縁～底部	7.75	−	6.6	−	−	1.4	−	ほぼ完形	良		にぶい橙 7.5YR7/4	浅黄橙 7.5YR8/4	外面は回転ナデ調整。内面は回転ナデ後ナデ調整。底部は糸切り後ナデ調整。	
137-332	XI区	SK065	−	14	古代 奈良	土師器 坏	口縁～底部	9.3	−	6.9	−	−	2.1	−	ほぼ完形	良		浅黄橙 7.5YR8/6	浅黄橙 7.5YR8/6	外面は回転ナデ調整。内面は回転ナデ後ナデ調整。底部は糸切り。	
137-333	XI区	SK065	−	10.17	古代 奈良	土師器 坏	口縁～底部	12.0	−	9.25	−	−	3.35	−	完形	良		橙 7.5YR7/6	浅黄橙 7.5YR8/6	外面は回転ナデ。内面は回転ナデ後ナデ調整。底部は糸切り。	
137-334	XI区	SK065	−	1.2	古代 奈良	土師器 坏	口縁～底部	12.3	−	8.3	−	−	3.15	−	ほぼ完形	良		浅黄橙 7.5YR8/6	橙 7.5YR7/6	外面は回転ナデ。内面は回転ナデ後ナデ調整。底部は糸切り。	

図版-報番	調査区	遺構	層位	取上No.	時期	器種	部位	法量 (cm)							残存率	焼成	胎土	色調		調整	備考
								口径	胴部径	底径	高台径	高台高	器高	残存高				外面	内面		
137-335	XI区	SK058	–	一括	中世	茶釜	胴部	–	–	–	–	–	–	4.8～	1/2	良	石英	灰 10Y5/1	灰白 10Y7/1	外面は回転ナデ後耳貼り付け。内面は回転ナデ調整。	
137-338	XI区	SK071	–	一括	中世	火鉢	口縁	(15.4)	–	–	–	–	–	6.8～	1/2	良	–	灰白 10YR8/2	浅黄橙 10YR8/3	内外面ともに回転ナデ調整。外面に棒状工具による施文。	
141-339	XI区	SX006	–	一括	中世	浅鉢	口縁	(33.2)	–	–	–	–	–	7.2～	1/2	良	石英・長石・輝石・雲母	にぶい黄橙 10YR7/3	にぶい黄橙 10YR7/3	外面はハケ目後ナデ調整。内面はヘラ削り後ナデ調整。口縁は横ナデ調整。	
141-340	XI区	SX006	–	25	古代 奈良	土師器 坏	口縁～底部	8.4	–	6.1	–	–	1.7	–	1/2	良	石英	橙 7.5YR7/6	にぶい橙 7.5YR7/4	外面は回転ナデ調整。内面は回転ナデ後ナデ調整。底部はヘラ切り後ナデ調整。	板状圧痕
141-341	XI区	SX006	–	一括	古代 奈良	土師器 坏	口縁～底部	(15.8)	–	(11.4)	–	–	3.3	–	1/2	良	–	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 10YR8/4	外面は回転ナデ。内面は回転ナデ後ナデ調整。底部は糸切り。	摩滅
141-342	XI区	SX006	–	一括	古代 奈良	土師器 坏	底部	–	–	(12.9)	–	–	–	2.1～	1/2	良	–	浅黄橙 10YR8/4	浅黄橙 7.5YR8/6	外面は回転ナデ調整。内面は回転ナデ後ナデ調整。底部は糸切り後ナデ調整。	
141-343	XI区	SX006	–	一括	古代 奈良	瓦質土器 碗	口縁～底部	–	–	–	–	–	–	4.7～	1/2	良	–	灰白 N8/0	灰 N6/0	外面は回転ヘラ削り後棒状工具によるミガキ。内面は回転ナデ後棒状工具によるミガキ。	
141-344	XI区	SX006	–	一括	中世	黒色土器 碗	底部	–	–	–	6.8	0.8	–	1.7～	1/2	良	長石・石英・雲母	にぶい橙 5YR6/4	褐灰 10YR4/1	内外面ともにナデ調整。貼り付け高台。	内黒
141-345	XI区	SX006	–	24	中世	黒色土器 坏	口縁～底部	(9.2)	–	(4.5)	–	–	2.4	–	1/2	良	–	黒 N2/	黒 N2/	内外面ともに回転ナデ後棒状工具によるミガキ調整。底部はヘラ切り後ナデ調整。	瓦質
141-346	XI区	SX006	–	一括	中世	黒色土器 坏	口縁～底部	(9.3)	–	(4.4)	–	–	2.4	–	ほぼ完形	良	角閃石・石英	褐灰 10YR4/1	黒褐 10YR3/1	内外面ともに回転ナデ後ミガキ調整。底部はヘラ切り後ナデ調整。	内黒
142-352	XI区	SX007	–	26	中世	釜	口縁～胴部張り出し部	26.0	20	–	–	–	–	13.2～	1/2	良	長石	浅黄橙 10YR8/3	にぶい橙 7.5YR7/4	外面はハケ目後ナデ調整。内面は回転ナデ調整。	煤付着
142-357	XI区	SX011	–	一括	古代 奈良	土師器 坏	底部	–	–	(8.4)	–	–	–	1.3～	1/2	良	–	浅黄橙 7.5YR8/6	浅黄橙 7.5YR8/6	外面は回転ナデ調整。内面は回転ナデ後ナデ調整。底部は糸切り。	
143-362	XI区	Pit266	–	一括	古代 平安	須恵器 坏	口縁～底部	(14.4)	–	–	(9.4)	0.5	6.3	–	1/2	良	石英	オリーブ灰 10Y5/1	灰 7.5Y6/1	内外面ともに回転ナデ調整。底部はヘラ削り後貼り付け高台。	
143-363	XI区	Pit266	–	一括	古代 奈良	須恵器 蓋	口縁	(18.6)	–	–	–	–	1.9	–	1/2	良	–	灰白 7.5Y7/1	灰白 10Y7/1	内外面ともに回転ナデ調整。外面上部はヘラ削り後ナデ調整。	

第5表　中片小路遺跡　出土遺物(陶磁器)観察表

図版-報番	調査区	遺構	層位	取上No.	時期	器種	部位	法量 (cm) 口径	底径	高台径	高台高	器高	残存高	残存率	焼成	胎土	釉薬	調整	新調整	備考
39-3	Ⅰ区	撹乱一括	−	−	中世	碗	底部	−	−	(4.6)	0.6	−	1.7~	一部	良	緻密	C-141 白茶	内外面ともに回転ヘラ削り調整。高台は削り出し。見込みには胎土目が三箇所残る。全面的に施釉。細かい貫入あり。		
39-4	Ⅰ区	一括	−	−	中世	青磁碗	口縁	−	−	−	−	−	3.8~	一部	良	緻密	C-218 ベージュ	外面は回転ヘラ削り調整。内面は二又工具で器面を分割。		大宰府編年龍泉窯系青磁碗Ⅰ-4a類
39-6	Ⅰ区	撹乱一括	−	−	中世	青磁碗	−	−	−	(5.1)	0.7	−	2.8~	一部	良	黒色粒・緻密	C-135 白茶	内外面ともに配点ヘラ削り。底部は削り出し。釉は体部下部までかかる。		
41-7	Ⅱ区	SD004	−	−	中世	青磁碗	口縁	17.5	−	−	−	−	2.7~	一部	良	緻密	C-215 大理石の色	外面は回転ヘラ削り。内面は二又工具で器面を分割し、その中に飛雲文を施す。口縁は箆部は箆花。	口縁は花弁を施す。内面に沈線をもつ。	大宰府編年龍泉窯系青磁碗Ⅰ-4b類
41-9	Ⅱ区	SD004	−	20	中世	青磁碗	底部	−	5.0	−	−	−	2.0~	一部	良	緻密	C-216 すずかけの樹の色	外面は回転ヘラ削り。内面は三又工具とクシによる粗い施文。釉は全面に施釉後、底部の釉を掻き取る。	外面はヘラ削り調整。内面に鳥文を施す。	大宰府編年同安窯系青磁皿Ⅰ-2b類
41-10	Ⅱ区	SD004	−	25	中世	白磁 高台付碗	底部	−	−	(6.9)	1.2	−	2.6~	一部	良	茶褐色粒	C-135 白茶	外面は回転ヘラ削り。内面はクシによる施文。釉は体部までで高台にはかからない。	内面に沈線あり。	
41-11	Ⅱ区	一括	−	−	中世	白磁碗	口縁	−	−	−	−	−	2.4~	一部	良	灰白色粒	C-214 海老の殻の灰色	外面は回転ヘラ削り。内面はクシによる施文。	内面に沈線で鳥文を表わす。	大宰府編年白磁碗Ⅴ-4b類
41-12	Ⅱ区	一括	−	−	中世	青磁皿	口縁~胴部	−	−	−	−	−	5.6~	一部	良	緻密	C-216 すずかけの樹の色	外面は回転ヘラ削り調整。内面はヘラと三又工具による蓮華文を描く。	外面はヘラ削り後ナデ調整。内面は鳥文を施す。	大宰府編年龍泉窯系青磁碗Ⅰ-2b類
41-14	Ⅱ区	一括	−	−	中世	青磁 台付碗	口縁~底部	−	−	−	−	2.2	−	一部	良	緻密	C-216 すずかけの樹の色	外面は回転ヘラ削り。内面は三又工具とクシによる施文。釉は全面に施釉後、底部の釉を掻き取る。	外面はヘラ削り調整。内面はナデ調整。削り出し高台。焼	大宰府編年同安窯系青磁皿Ⅰ-2b類
41-15	Ⅱ区	一括	−	−	中世	青磁皿	底部	−	4.4	−	−	−	2.1~	1/3	良	緻密	C-218 ベージュ	外面は回転ヘラ削り。内面は三又工具とクシによる粗い施文。釉は全面に施釉後、底部の釉を掻き取る。		大宰府編年同安窯系青磁皿Ⅰ-2b類
41-17	Ⅱ区	一括	−	−	中世	青磁碗	底部	−	5.4	−	−	−	1.1~	一部	良	緻密	C-240 冬の灰色	内面は回転ヘラ削り調整、焼台痕あり。底部は削り出し。		
56-31	Ⅳ・Ⅴ区	SD017	P18	−	中世	青磁碗	口縁~胴部	(17.0)	−	−	−	−	4.5~	一部	良	緻密	C-216 すずかけの樹の色	外面は回転ヘラ削り後、縦にクシ目を施文。内面はヘラ、二又工具、クシによる施文。釉は体部下部まで施釉。	外面はクシ描き文を施す。内面は花鳥文を施す。	大宰府編年同安窯系青磁碗Ⅰ-1b類
59-32	Ⅲ区	SK005	−	1	中世	白磁碗	口縁~底部	(16.5)	−	(4.9)	1.5	6.6	−	1/3	良	緻密	透明釉	内外面ともに回転ヘラ削り調整。見込みには1条の沈線あり。高台は削りだし。釉は外面体部下部まで施釉。		
59-33	Ⅲ区	SK005	−	1	中世	白磁碗	−	(17.2)	−	6.2	1.0	5.6	−	1/2	良	緻密	透明釉	内外面ともに回転ヘラ削り。釉は体部下部まで施釉。高台は削り出し。	外面はヘラ削り後ナデ調整。内面はナデ調整。	大宰府編年白磁碗Ⅴ-4a類
63-37	Ⅳ・Ⅴ区	SE001	−	−	中世	青磁碗	口縁	−	−	−	−	−	6.1~	一部	良	緻密	C-216 すずかけの樹の色	外面は回転ヘラ削り。内面はヘラによる片彫りの蓮華文。		大宰府編年龍泉窯系青磁碗Ⅰ-2類
63-38	Ⅳ・Ⅴ区	SE001	−	−	中世	青磁碗	口縁~底部	(16.9)	−	(4.8)	0.9	7.4	−	1/3	良	黒色粒	C-171 ろくしょう色	外面は回転ヘラ削り後、縦にクシ目を施文。内面はヘラ、クシによる施文。釉は体部下部までで高台にはかからない。高台は削り出し。		SE002と接合
65-43	Ⅳ・Ⅴ区	SE002	−	40	中世	青磁碗	口縁	(12.3)	−	−	−	−	4.6~	一部	良	茶褐色粒	C-218 ベージュ	外面は回転ヘラ削り後、縦にクシ目を施文。内面はクシによる施文。		大宰府編年同安窯系青磁碗Ⅰ-1b類
65-46	Ⅳ・Ⅴ区	SE002	−	1	中世	青磁 高台付碗	胴部~底部	−	−	(5.8)	0.8	−	5.1~	一部	良	緻密	C-218 ベージュ	外面は回転ヘラ削り後、縦にクシ目を施文。内面はヘラ、二又工具、クシによる施文。釉は体部までで高台にはかからない。	外面はクシ描き状に調整。内面は鳥文を施す。	大宰府編年同安窯系青磁碗Ⅰ-1b類
65-47	Ⅳ・Ⅴ区	SE002	−	104	中世	青磁皿	底部	−	4.4	−	−	−	1.0~	一部	良	緻密	C-201 薄灰緑	外面は回転ヘラ削り。内面は三又工具とクシによる施文。釉は全面に施釉後、底部の釉を掻き取る。		大宰府編年同安窯系青磁皿Ⅰ-2b類
65-48	Ⅳ・Ⅴ区	SE002	−	−	中世	青磁 高台付碗	底部	−	−	−	1.0	−	1.7~	一部	良	白色粒・黒色粒	C-207 龍泉窯青磁色	見込みには放射線状にヘラによる施文。釉は高台内部までかかるが掻きとられている。	内面に鳥文を施す。削り出し高台。	
65-49	Ⅳ・Ⅴ区	SE002	−	98	中世	白磁碗	口縁~底部	(16.4)	−	(6.6)	0.9	6.5	−	一部	良	白色粒・黒色粒・緻密	透明釉	内外面ともに回転ヘラ削り。釉は体部上部まで施釉。口縁はやや丸みを帯びる玉縁。	内面はナデ調整。底部は削り出しで台を成形。	大宰府編年白磁碗Ⅳ-1a類
65-50	Ⅳ・Ⅴ区	SE002	−	−	中世	白磁碗	口縁~胴部	−	−	−	−	−	5.5~	一部	良	茶褐色粒	透明釉	内外面ともに回転ヘラ削り。釉は体部下部まで施釉。	外面はヘラ削り調整。内面はクシ状工具で調整。	大宰府編年白磁碗Ⅴ-4a類
65-51	Ⅳ・Ⅴ区	SE002	−	48	中世	白磁碗	口縁~胴部	(16.2)	−	−	−	−	4.9~	一部	良	白色粒・黒色粒	C-162 鉛の白	内外面ともに回転ヘラ削り。釉は体部下部まで施釉。	外面はヘラ削り後ナデ調整。内面はナデ調整。	大宰府編年白磁碗Ⅴ-4a類
65-52	Ⅳ・Ⅴ区	SE002	−	−	古代	白磁碗	底部	−	−	(6.2)	1.4	−	4.4~	一部	良	緻密	C-282 雪の灰白	内外面ともに回転ヘラ削り。高台は削り出し。釉は体部下部まで施釉。	内面はナデ調整。口縁部は一部釉がかからない。	
65-53	Ⅳ・Ⅴ区	SE002	−	111	中世	白磁 高台付碗	底部	−	−	6.9	1.1	−	2.0~	一部	良	緻密	透明釉	内外面ともに回転ヘラ削り調整。内面見込みの釉を蛇の目状に掻き取る。高台は削り出し。釉は体部下部まで施釉。	外面はヘラ削り調整。内面は焼台痕あり。	

図版-番番	調査区	遺構	層位	取上No.	時期	器種	部位	法量 (cm) 口径	底径	高台径	高台高	器高	残存高	残存率	焼成	胎土	釉薬	調整	新調整	備考
65-54	Ⅳ·Ⅴ区	SE002	−	−	中世	白磁碗	口縁	(16.0)	−	−	−	−	4.6~	一部	良	緻密	C-163 貝の白	内外面ともに回転ヘラ削り。見込みには1条の沈線を伴う。貫入あり。		
66-55	Ⅳ·Ⅴ区	SX001	−	−	中世	青磁碗	口縁~胴部	(17.2)	−	−	−	−	6.4~	1/2	良	緻密	C-135 白茶	外面は回転ヘラ削り。内面はヘラによる蓮花文を施文。	外面はヘラ削り後ナデ調整。内面は花文を施す。	大宰府編年龍泉窯系青磁碗,-2類
66-56	Ⅲ区	SK005	−	11	中世	青磁皿	底部	−	5.0	−	−	−	1.4~	1/3	良	緻密	C-206 薄青磁色	外面は回転ヘラ削り。内面は二又工具とクシによる施文。釉は全面に施釉後,底部の釉を掻き取る。		大宰府編年同安窯系青磁皿,-2b類
67-61	Ⅲ区	一括	−	−	17C中	青磁碗	口縁部	−	−	−	−	−	5.5~	一部	良	白色粒·赤褐色粒·茶褐色粒	C-107 白茶	内外面ともに回転ヘラ削り調整。内面にはクシによる施文あり。		
67-62	Ⅱ·Ⅳ·Ⅵ区	撹乱一括	−	−	近世	青白磁皿	口縁	−	−	−	−	−	3.4~	一部	良	緻密	C-204 あかるの緑の青	内面は陽刻。口縁は輪花。	内外面ともにナデ調整。内面が陽刻で蔓草文を施す。横花口縁。	
67-64	Ⅳ·Ⅴ区	一括	−	−	中世	青磁碗	口縁~胴部	(16.6)	−	−	−	−	3.0~	一部	良	緻密	C-206 薄青磁色	外面は回転ヘラ削り後ヘラ状工具による縦方向の削り,鎬蓮弁を作る。内面には2条の沈線がはいる。釉は外面体部上部までかかる。	外面は縦方向にヘラ状工具による押付痕あり。内面は横方向のナデ調整。	大宰府編年龍泉窯系青磁小碗Ⅲ類
67-65	Ⅳ·Ⅴ区	一括	−	−	中世	青白磁碗	−	−	−	−	−	−	2.3~	一部	良	黒色粒·緻密	C-201 薄灰緑	外面は回転ヘラ削り後ヘラ状工具による縦方向の削り,鎬蓮弁を作る。内面には2条の沈線がはいる。釉は外面体部上部までかかる。		大宰府編年龍泉窯系青磁小碗Ⅲ類
67-66	Ⅳ·Ⅴ区	一括	−	−	中世	青磁碗	口縁~胴部	−	−	−	−	−	4.1~	一部	良	緻密	C-206 薄青磁色	外面は回転ヘラ削り後ヘラ状工具による縦方向の削り,鎬蓮弁を作る。釉は外面体部上部までかかる。		大宰府編年龍泉窯系青磁小碗Ⅲ類
67-67	Ⅲ区	一括	−	−	中世	青磁皿	口縁~底部	(12.1)	(9.0)	−	−	2.6	−	一部	良	緻密	C-143 銀灰色	外面は回転ヘラ削り。内面は三又工具とクシによる施文。釉は全面に施釉後,底部の釉を掻き取る。		大宰府編年同安窯系青磁皿,-2b類
67-68	Ⅲ区	一括	−	−	中世	青磁碗	−	−	−	6.2	1.0	−	2.0~	一部	良	緻密	C-230 鉄の緑	外面は回転ヘラ削り。内面はヘラによる施文。高台は削り出し,焼台痕の付着あり。		
67-69	Ⅲ区	一括	−	−	中世	白磁碗	底部	−	−	6.1	0.9	−	3.1~	一部	良	金雲母·白色粒 黒色粒·赤褐色粒	透明釉	内外面ともに回転ヘラ削り。内面には焼台痕あり。高台は削り出し。釉は体部下部まで施釉。		
67-70	Ⅲ区	一括	−	−	中世	青磁碗	底部	−	−	4.8	0.7	−	1.7~	一部	良	黒色粒·緻密	C-208 春緑	外面は回転ヘラ削り。高台は削り出し。		
67-71	Ⅲ区	一括	−	−	中世	白磁碗	底部	−	−	(6.3)	0.9	−	3.0~	一部	良	緻密	C-143 銀灰色	内外面ともに回転ヘラ削り調整。内面見込みの釉を環状に掻き取る。高台は削り出し。		大宰府編年白磁碗Ⅷ類
67-72	Ⅳ·Ⅴ区	一括	−	−	中世	青磁碗	底部	−	−	5.7	0.7	−	2.9~	一部	良	緻密	C-107 白茶	内外面ともに回転ヘラ削り調整。高台は削り出し。焼台痕あり。	外面はヘラ削りで整えている。内面はナデ調整。削り出し高台。	
72-77	Ⅵ区	SD024	−	−	中世	青磁	肩部	−	−	−	−	−	3.4~	一部	良	緻密	C-215 大理石の色	内外面ともに回転ヘラ削り調整。		
72-86	Ⅵ区	一括	−	−	中世	青白磁鉢	口縁	−	−	−	−	−	4.0~	一部	良	緻密	C-194 淡い灰緑	体部は型押しで外面に押し出し。押し出しの境には輪花を作る。釉は厚くかかる。		
72-87	Ⅵ区	Pit040	−	−	近代	染付碗	底部	−	(4.8)	(4.9)	0.5	−	2.4~	一部		緻密	透明釉	内外面ともに回転ナデ後染付施釉。高台は削りだし。		H19.10.29
93-211	Ⅶ区	一括	−	−	中世 鎌倉	青磁小碗	胴部~底部	−	−	(3.6)	0.7	−	3.2~	1/3	良	緻密	C-216 すずかけの葉の色	外面は回転ヘラ削り後ヘラによる蓮弁文。内面は回転ナデ調整。釉は全面に施釉。		
99-219	Ⅷ区	SB023	−	−	中世	青磁碗	口縁~胴部	−	−	−	−	−	5.7~	一部	良	緻密	C-216 すずかけの葉の色	外面は回転ヘラ削り後ヘラによる蓮弁文。内面は回転ナデ調整。		
111-257	Ⅷ区	Pit44	−	−	中世 鎌倉	青磁皿	口縁~底部	−	−	−	−	−	2.5~	一部	良	緻密	C-282 雪の灰白	内外面ともに回転ナデ調整。内面はクシによる文様がある。		
120-280	Ⅹ区	SK053	−	一括	中世 13C	白磁皿	口縁~底部	11.0	−	6.1	−	3.6	−	3/4	良	緻密	C-144 灰白	内外面ともに回転ナデ調整。底部は回転ヘラ切り,外面体部下部は回転ヘラ削り。釉は外面体部下部まで施釉。口縁は施釉なし。		
120-287	Ⅹ区	Pit379	−	一括	中世 13C	青磁碗	胴部~底部	−	−	5.2	0.8	−	4.2~	一部	良	白色粒·赤褐色粒	C-228 焦茶色	内外面ともに回転ナデ調整。。外面にヘラ状工具による施文。底部は削り出し,焼台痕あり。釉は全面に施釉。		
132-306	Ⅺ区	SD044	2層	一括	中世	陶器坏	口縁~底部	12.8	−	3.8	0.6	3.1	−	1/2	良	緻密	C-107 白茶	外面は回転ヘラ削り調整。内面は回転ナデ調整。見込みに4ヶ所胎土目あり。貼付けに胎土目。高台は削りだし。		
132-307	Ⅺ区	SD044	2層	一括	中世	陶器坏	口縁~底部	13.4	−	5.0	0.5	3.0	−	1/2	良	緻密	C-107 白茶	外面は回転ヘラ削り調整。内面は回転ナデ調整。見込みに4ヶ所胎土目あり。貼付けに胎土目。高台は削りだし。		
132-308	Ⅺ区	SD044	5層	一括	中世	陶器鉢	口縁~底部	29.6	8.0	−	−	9.1	−	1/2	良	長石·石英	C-104 薄香色	内外面ともに回転ナデ後鉄釉。底部回転ヘラ削り。見込みに5ヶ所胎土目あり。		

図版-報番	調査区	遺構	層位	取上No.	時期	器種	部位	法量 (cm)						残存率	焼成	胎土	釉薬	調整	新調整	備考
								口径	底径	高台径	高台高	器高	残存高							
132-309	XI区	SD044	2層	一括	近世	染付小碗	口縁~底部	10.0	–	4.0	0.6	5.1	–	ほぼ完形	良	緻密	透明釉	内外面ともに回転ナデ後染付施釉。高台は削りだし。		
132-310	XI区	SD044	1層	一括	近世	染付小皿	口縁~底部	9.2	–	3.2	0.8	4.6	–	1/2	良	緻密	透明釉	内外面ともに回転ナデ後染付施釉。		
132-311	XI区	SD044	1層	一括	近世	染付小碗	口縁~底部	12.0	–	4.8	0.8	7.2	–	3/4	良	緻密	透明釉	内外面ともに回転ナデ後染付施釉。口縁の内面に意図的な厚い釉。		
132-312	XI区	SD044	1層	一括	近世	染付碗	口縁~底部	11.2	–	4.3	0.7	5.2	–	ほぼ完形	良	長石・石英	透明釉	内外面ちもに回転ナデ調整後染付施釉。高台は削り出し。見込みは蛇の目状に釉掻き取り。	貫入	
132-313	XI区	SD044	4層	一括	近世	染付碗	口縁~底部	11.0	–	6.6	1.9	6.5	–	1/2	良	緻密	透明釉	内外面ともに回転ナデのち染付施釉。高台は削りだし。		
132-314	XI区	SD044	1層	一括	近世	染付皿	口縁~底部	8.4	3.7	–	0.4	2.6	–	ほぼ完形	良	緻密	透明釉	内外面ともに回転ナデのち染付施釉。見込みは蛇の目状に釉掻き取り。		
134-320	XI区	SD044	2層	一括	中世	陶磁器小碗	口縁~底部	8.6	4.6	–	0.7	4.7	–	ほぼ完形	良	緻密	C-144 灰白	内外面ともに回転ナデ調整。外面上部に3本の沈線あり。全面施釉。高台は削り出し。		
134-321	XI区	SD044	2層	一括	中世	青磁小碗	口縁~底部	10.4	–	3.5	0.8	6.0	–	ほぼ完形	良	緻密	C-143 銀灰色	内外面ともに回転ナデ調整。全面施釉。		
134-322	XI区	SD044	1層	一括	中世	青磁鉢	口縁~底部	15.6	–	7.2	1.3	11.5	–	1/2	良	緻密	C-293 瓦の鼠茶	内外面ともに回転ナデ調整。底部は削り出し。		
134-323	XI区	SD044	1層	一括	中世	青白磁碗	底部	–	–	4.4	1.2	–	3.3	–	良	緻密	C-201 薄い灰緑	内外面ともに回転ナデ調整。外面に沈線あり。削りだし高台。		
134-324	XI区	SD044	2層	一括	–	青磁碗	口縁~底部	16.6	–	4.8	0.7	6.9	–	1/2	良	緻密	C-228 焦茶色	外面は回転ヘラ削り後ヘラによる蓮弁文,内面は回転ナデ調整。見込みには印文(草花)あり。高台は削りだし。		
134-325	XI区	SD044	2層	一括	中世	青磁碗	底部	–	–	5.0	0.7	–	4.7	3/4	良	緻密	C-217 海老の盈の灰緑	外面は回転ヘラ削り後ヘラによる蓮弁文,内面は回転ナデ調整後ヘラによる蓋文。見込みには印文(草花)あり,高台は削りだし。		
134-326	XI区	SD044	–	一括	南宋	青磁碗	底部	–	–	5.0	0.7	–	1.7	3/4	良	緻密	C-217 海老の盈の灰緑	内外面ともに回転ナデ調整。見込みに文字印文(河濱遺範)あり。高台は削りだし。		貫入
137-336	XI区	SK067	–	20	中世	青磁碗	口縁~底部	15.4	–	5.4	0.7	6.1	–	1/4	良	長石・石英・黒色粒	C-134 焦茶色	外面は回転ヘラ削り後ヘラ状工具による蓮弁文,内面は回転ナデ調整,高台に砂目あり。釉は全面に施釉,高台底面に砂付着。		貫入
141-347	XI区	SX006	–	一括	中世鎌倉	青磁碗	底部	–	–	4.6	0.8	–	3.8	1/4	良	長石、砂粒粗い	C-135 白茶	外面は回転ヘラ削り後、縦に櫛目文あり。内面はヘラによる施文とジグザグ状の櫛点描文。高台は削り出し。		
141-348	XI区	SX006	–	29	中世鎌倉	青磁碗	口縁	15.0	9.2	–	–	6.0	–	1/4	良	緻密	C217 海老の盈の灰緑	外面は回転ヘラ削り後施釉。内面はヘラ状工具による片彫連花文後施釉。		
141-349	XI区	SX006	–	29	中世鎌倉	青磁碗	口縁	15.8	–	–	–	–	5.0	1/6	良	長石	C-216 ナデかけの盈の色	外面は回転ヘラ削り後縦の櫛目文。内面は回転ナデ後ヘラ状工具による施文と櫛点描文。釉は全面に施釉。		
141-350	XI区	SX006	–	一括	中世鎌倉	青磁碗	口縁	15.6	–	–	–	–	4.0	1/4	良	長石・石英	C-293 瓦の鼠茶	外面は回転ヘラ削り調整。内面はヘラによる施文と櫛点描文。釉は全面に施釉。		
142-353	XI区	SX009	–	一括	近世	小碗	口縁~底部	11.8	–	4.0	0.9	5.0	–	1/2	良	緻密	C-110 コーヒー色	内外面ともに回転ナデ調整。見込みは蛇の目状に釉掻き取り、環状に砂目あり。畳付けに砂目あり。		
142-354	XI区	SX011	–	一括	中世	青磁碗	底部	–	6.0	–	–	–	–	1/6	良	緻密	C-293 瓦の鼠茶	外面は回転ヘラ削り後施釉,内面は回転ナデ後施釉。見込みにヘラ状工具による印文(草花)あり。高台は削りだし。釉は高台まで施釉。		
142-355	XI区	SX009	–	一括	近世	染付小皿	口縁~底部	10.0	3.8	–	0.5	3.2	–	ほぼ完形	良	緻密	透明釉	内外面ともに回転ナデのち染付施釉。高台は削りだし。		
142-356	XI区	SX009	–	一括	近世	染付皿	口縁~底部	12.7	7.4	–	0.5	3.7	–	3/4	良	長石・石英	透明釉	内外面ともに回転ナデ後染付施釉。高台は削りだし。高台に目跡あり。		
143-364	XI区	撹乱	–	一括	近世	染付碗	口縁~底部	11.6	–	4.3	0.9	5.5	–	2/3	良	長石・黒色粒	透明釉	内外面ともに回転ナデのち染付施釉。見込みに4ヶ所釉が剥げている。高台は削り出し,目跡あり。		
143-365	XI区	撹乱	–	一括	近世	染付碗	口縁~底部	10.8	–	4.2	0.9	5.9	–	2/3	良	緻密	透明釉	内外面ともに回転ナデのち染付施釉。見込みに環状の目跡あり。高台は削りだし。		

第6表　中片小路遺跡　出土遺物(土錘)観察表

図版-報番	調査区	遺構	層位	取上No.	時期	法量(cm)				L	P	判定	残存率	焼成	胎土	色調		備考
						全長	幅	重量(g)	孔径							外面	内面	
72-89	I区	SK001	−	7	−	3.4	1.1	3.13	0.4	0.16	3.09	刺	4/5	良	長石・石英	橙 7.5YR6/6	−	
72-90	III区	SK004	−	−	−	3.3	1.0	2.73	0.3	0.09	3.30	刺	4/5	良	長石・石英	明黄褐 10YR6/6	−	
72-91	III区	一括	−	−	−	5.0	2.0	14.61	0.4	0.16	2.50	刺	−	良	長石・石英	にぶい黄橙 10YR7/4	−	
72-92	III区	一括	−	−	−	4.3	0.9	3.29	0.4	0.16	4.78	刺	ほぼ完形	良	石英	にぶい黄橙 10YR6/3	−	
72-93	III区	一括	−	−	−	3.2	1.0	2.61	0.4	0.16	3.20	刺	2/3	良	長石・石英・金雲母・黒色粒	にぶい黄橙 10YR6/4	にぶい黄橙 10YR6/4	
72-94	III区	一括	−	−	−	5.2	2.0	17.09	0.55	0.30	2.60	袋	2/3	良	長石・金雲母・赤褐色粒・茶褐色粒	橙 7.5YR6/6	黒褐 7.5YR3/1	
72-95	III区	一括	−	−	−	3.5	1.0	3.20	0.35	0.12	3.50	刺	2/3	良	長石・金雲母・赤褐色粒・茶褐色粒	明黄褐 10YR7/6	明黄褐 10YR7/6	
72-96	III区	一括	−	−	−	4.3	1.1	4.72	0.35	0.12	3.91	刺	ほぼ完形	良	長石・石英・角閃石・赤褐色粒	明黄褐 10YR7/6	明黄褐 10YR7/6	
72-97	III区	SE001	−	−	−	2.4	0.9	1.15	0.45	0.20	2.67	刺	ほぼ完形	良	石英・角閃石・赤褐色粒	にぶい黄橙 10YR7/2	−	
72-98	III区	SE001	−	60	−	3.9	1.0	3.20	0.45	0.20	3.90	刺	ほぼ完形	良	石英・金雲母・赤褐色粒	にぶい黄橙 10YR6/3	にぶい黄橙 10YR6/3	
72-99	III区	一括	−	−	−	3.3	1.0	3.20	0.35	0.12	3.30	刺	4/5	良		灰黄褐 10YR5/2	−	
72-100	III区	一括	−	−	−	3.9	1.0	4.71	0.3	0.09	3.90	刺	4/5	良	雲母・白色粒	黒褐 7.5YR3/2	−	
74-101	III区	一括	−	−	−	3.6	0.9	2.98	0.3	0.09	4.00	刺	4/5	良	白色粒	明赤褐 5YR5/6	−	
92-197	VII区	SK021	一括	−	−	2.4	1.1	2.4	0.4	0.16	2.18	刺	ほぼ完形	良	石英・黒色粒・白色粒	浅黄橙 10YR8/3	−	
92-198	VII区	SK022	上層	−	−	5.1	1.85	10.8	0.5	0.25	2.76	刺	ほぼ完形	良	石英・白色粒	橙 7.5YR6/6	−	
92-199	VII区	SK022	一括	−	−	3.0	1.1	2.4	0.6	0.36	2.73	袋	ほぼ完形	良	黒色粒・白色粒	にぶい黄橙 10YR7/4	−	
92-200	VII区	検出面一括	検出面	−	−	3.6	1.2	3.8	0.4	0.16	3.00	刺	ほぼ完形	良	白色粒	にぶい黄橙 10YR7/3	−	
92-201	VII区	検出面一括	検出面	−	−	2.95	0.9	2.2	0.35	0.12	3.28	刺	ほぼ完形	良	長石・白色粒	橙 7.5YR7/6	−	
92-202	VII区	一括	−	−	−	4.6	1.2	11.5	0.4	0.16	3.83	刺	ほぼ完形	良	白色粒	にぶい橙 7.5YR6/4	−	
92-203	VII区	一括	−	−	−	4.6	1.6	10.8	0.35	0.12	2.88	刺	ほぼ完形	良	石英・白色粒	にぶい黄橙 10YR6/4	−	
92-204	VII区	一括	−	−	−	4.1	1.1	3.9	0.35	0.12	3.73	刺	ほぼ完形	良	石英・白色粒	橙 7.5YR6/6	−	
92-205	VII区	一括	−	−	−	3.4	0.9	2.3	0.35	0.12	3.78	刺	ほぼ完形	良	石英・白色粒	にぶい黄橙 10YR6/4	−	
92-206	VII区	一括	−	−	−	3.1	1.1	2.7	0.4	0.16	2.82	刺	4/5	良	石英・白色粒	褐 7.5YR4/3	−	
111-261	VIII区	古代層一括	−	−	−	5.7	1.8	14.6	0.5	0.25	2.17	刺	ほぼ完形	良	長石・黒色粒・赤褐色粒	明黄褐 10YR7/4	−	
111-262	VIII区	検出面一括	−	−	−	5.4	1.1	4.3	0.35	0.12	4.91	刺	ほぼ完形	良	石英	灰白 10Y8/1	−	

図版-報番	調査区	遺構	層位	取上No.	時期	法量(cm) 全長	幅	重量(g)	孔径	L	P	判定	残存率	焼成	胎土	色調 外面	内面	備考
111-263	Ⅷ区	SK015	–	–	–	4.85	1.4	6.9	0.45	0.2	3.46	刺	ほぼ完形	良	長石・石英	褐灰 10YR5/	–	
120-292	X区	Pit300	一括	–	–	4.2	1.1	5.1	0.3	0.09	3.82	刺	ほぼ完形	良	長石・石英	にぶい黄 2.5YR6/3	–	
143-358	XI区	SK058	一括	–	–	4.4	1.3	0.3	5.4	0.09	3.38	刺	ほぼ完形	良	長石・石英・角閃石・金雲母	灰白 5Y8/2	–	
143-359	XI区	SD044	–	–	–	4.4	1.5	0.4	7.6	0.16	2.93	刺?	ほぼ完形	良	長石・石英・角閃石	灰白 2.5Y8/2	–	
143-360	XI区	Pit102	–	–	–	4.3	1.2	0.4	5.2	0.16	3.58	刺	ほぼ完形	良	長石・石英	にぶい黄橙 10YR7/4	–	

第7表　中片小路遺跡　出土遺物(石製品)観察表

図版-報番	調査区	遺構	層位	取上No.	時期	器種	部位	法量(cm) 全長	全幅	器厚	重量(g)	残存率	調整	備考
56-25	Ⅳ・Ⅴ区	SB005	–	–	中世	滑石製石鍋	–	–	–	1.1	–	一部		
67-73	Ⅳ・Ⅴ区	S026	–	–	中世	滑石製石鍋	–	4.8～	2.8～	2.2～	–	一部		
67-74	Ⅳ・Ⅴ区	一括	–	–	中世	滑石製石鍋	–	4.2～	8.2～	–	–	一部		
73-88	I～Ⅵ区	一括	–	一括	弥生	磨石	–	18.7	11.0	6.7	2710.0	–		
111-256	Ⅷ区	Pit145	–	–	中世	滑石製石鍋	–	–	–	2.4～	–	一部		
111-258	Ⅷ区	–	–	–	弥生	石斧	–	11.7	5.8	2.1	128.1	–		
120-290	X区	Pit407	–	一括	中世	砥石	–	11.7	14.5	9.3	1855.0	–		
120-291	X区	SE004	–	一括	中世	砥石	–	6.4～	4.5	3.0～	115.1	砂岩(天草砥石)		
131-294	XI区	SD040	–	一括	–	滑石製石鍋	底部	3.4	–	–	–	1/2	内外面ともにヘラ削り調整	炭化物・ス ス付着
134-328	XI区	SD044	2層	一括	–	石鍋	–	–	–	–	–	1/2	内外面ともに削り調整。	
144-351	XI区	SX007	–	26	–	滑石製石釜	口縁	11.0	(46.0)	–	–	1/2	外面は削り。口縁に3ヵ所に穿孔あり。	

第8表　中片小路遺跡　出土遺物(鞴・紡錘車)観察表

図版-報番	調査区	遺構	層位	取上No.	時期	器種	法量 (cm)				残存率	焼成	胎土	色調		調整	備考
							全長・外径	孔径	厚み	残存高				外面	内面		
68-75	Ⅳ区	SB004	−	P-8	?	鞴 羽口	7.4	2.3	−	7.7〜	一部	良	黒曜石・白色粒・茶褐色粒	にぶい黄橙 10YR7/2	明黄褐 10YR6/6	ナデ調整。	
68-76	Ⅵ区	Pit041	−	−	古代	鞴 羽口	−	−	−	8.3〜	一部	良	長石・白色粒・黒色粒	橙 7.5YR6/6	にぶい橙 7.5YR6/4	ナデ調整。	
111-259	Ⅷ区	中世層一括	中世層	−	−	土師質紡錘車	6.0	0.8	1.1	−	一部	良	石英・黒色粒	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 10YR8/3	よく研磨されている。	土器片再利用
111-260	Ⅷ区	Pit445	−	1	−	滑石製紡錘車	4.6	0.8	0.9	−	一部	−	−	−	−	よく研磨されている。	

第9表　中片小路遺跡　出土遺物(銅銭)観察表

図版-報番	調査区	遺構	銭貨名	国名	初鋳年	書体	備考
144-367	Ⅷ区	一括	祥符元寶	北宋	1008年	真書	
144-368	Ⅺ区	一括	寛永通寶	日本	1626年		

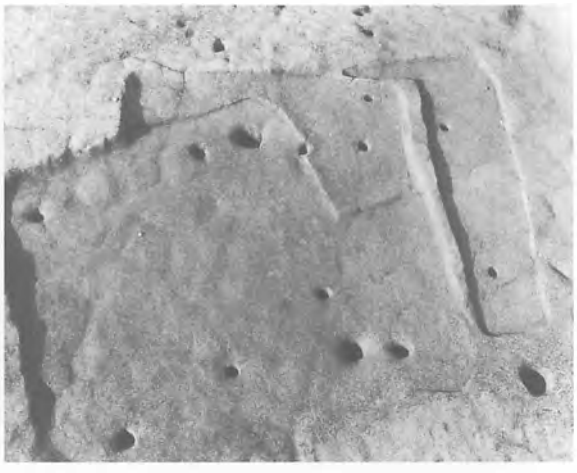
第10表　中片小路遺跡　出土遺物(特殊遺物)観察表

図版-報番	調査区	遺構	層位	取上No.	時期	器種	部位	法量 (cm)				残存率	焼成	胎土	色調		調整	備考
								全長・長径	底径	器高・厚み	残存高				外面	内面		
120-282	Ⅹ区	SK056	−	一括	−	釜用具(ハマ?)	−	3.3〜	−	−	0.9	1/4	良	長石・黒色粒・白色粒	にぶい橙 7.5YR6/4 灰黄褐 10YR5/2 にぶい橙 7.5YR7/4	−	内外面ともにナデ調整。一部黒斑がみられる。	
131-295	Ⅺ区	SD044	1層	一括	中世	火舎	胴部	−	−	−	−	一部	良	長石・石英・金雲母・赤色粒	にぶい橙 7.5Y6/4	にぶい橙 7.5Y5/3	外面はナデ調整後ヘラ状工具による花文。内面は回転ナデ調整。	
133-317	Ⅺ区	SD044	1層	一括	中世	火舎	−	−	−	−	−	一部	良	長石・石英・雲母・角閃石	灰黄 2.5Y7/2	灰白 2.5Y7/1	内面はナデ後、5本を一単位とする条線が描かれている。条線は強い力で、互いに斜交している。外面は丁寧なナデ調整。	煤付着
133-318	Ⅺ区	SD044	2層	一括	近世	トチン	−	−	(6.7)	−	7.6	1/2	良	小石	暗赤褐 5YR3/3	−	ナデ後施釉。	
133-319	Ⅺ区	SD044	2層	一括	近世	タコハマ	−	18.0	−	4.0	−	ほぼ完形	良	長石・石英・黒色粒	にぶい黄橙 10YR7/4	−	一部に釉がかかる。	布目痕
134-327	Ⅺ区	SD044	2層	一括	−	丸瓦	−	8.2	−	−	−	1/2	良	石英・角閃石	浅黄橙 10YR8/3	浅黄橙 7.5YR8/3	外面は斜格子目叩き、内面は布目痕。	
137-337	Ⅺ区	SK061	1層	一括	−	丸瓦	−	−	−	−	−	−	良	良	−	−	外面は斜格子叩き、内面は布目痕。	
143-361	Ⅺ区	SD044	1層	一括	近世	メンコ	−	−	−	−	3.5	−	ほぼ完形	良	−	にぶい橙 5YR6/4	にぶい橙 5YR6/4	ナデ調整。櫛状工具による9本の条線。垂直に1本の条線。	擂鉢を転用
143-366	Ⅺ区	撹乱	−	一括	近世	トチン	−	−	7.1	−	7.3	1/2	良	−	暗赤褐 5YR3/3	−	ナデ後施釉。	

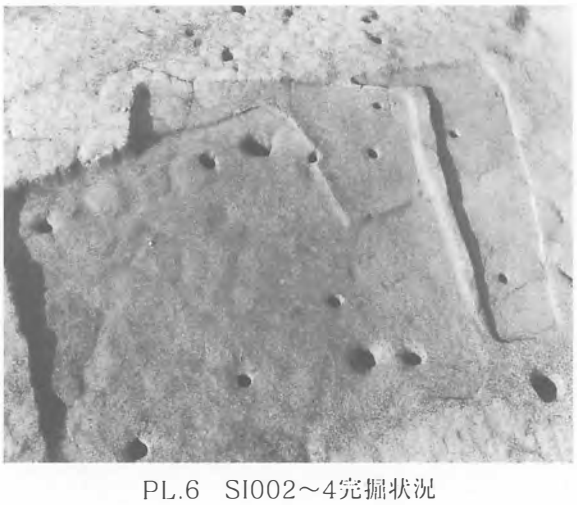
写　真　図　版

PL.3　西片稲村遺跡全景

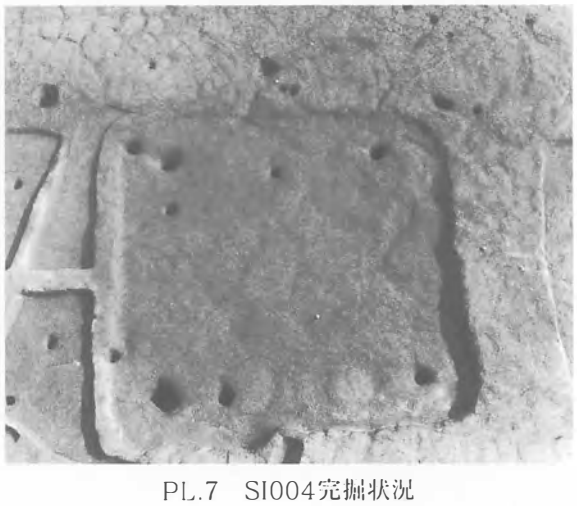
PL.4　SI001完掘状況



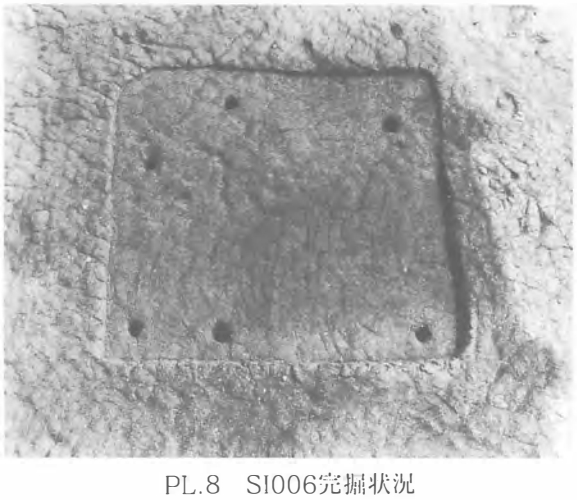
PL.5　SI002～4完掘状況



PL.6　SI002～4完掘状況

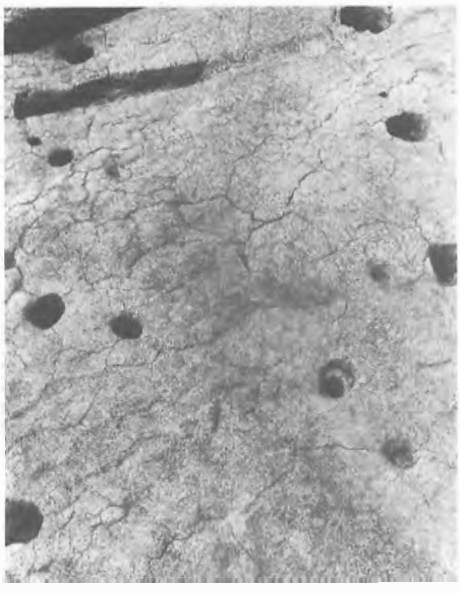


PL.7　SI004完掘状況

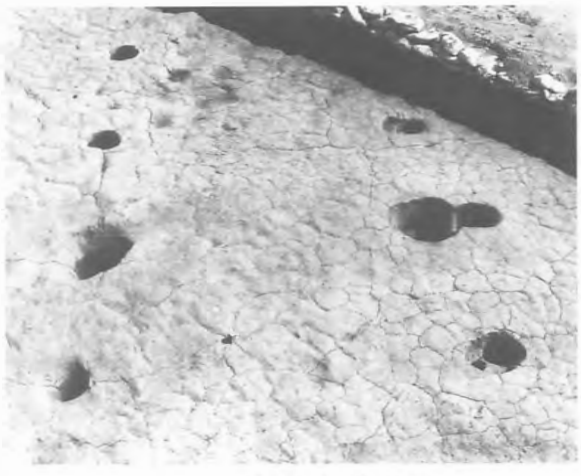


PL.8　SI006完掘状況

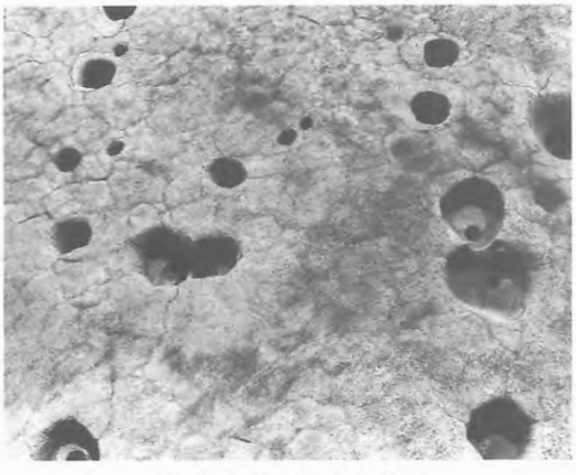
PL.9　SI009完掘状況



PL.10　SB001 完掘状況

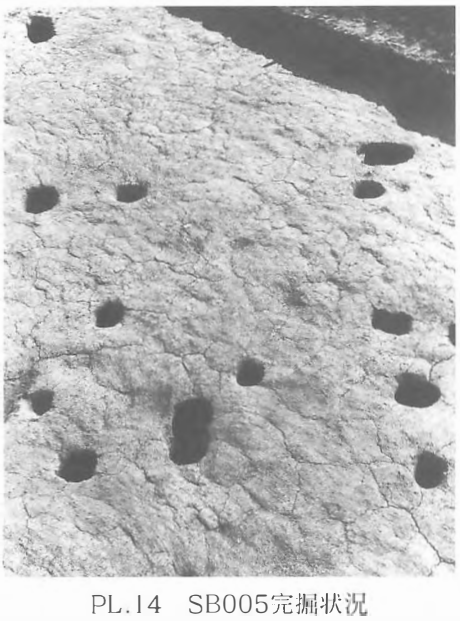


PL.11　SB002完掘状況

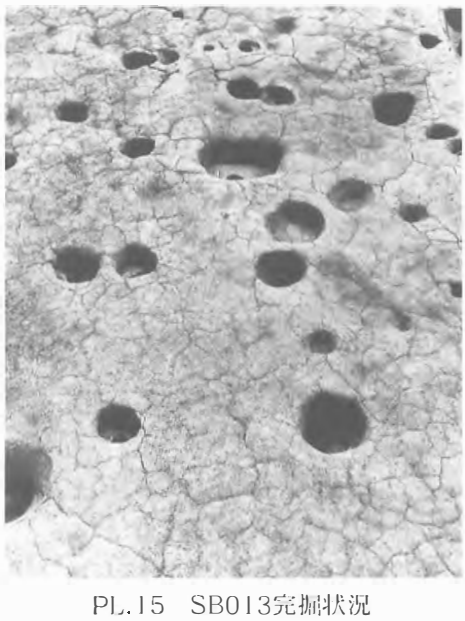


PL.12　SB003完掘状況

PL.13　SB004完掘状況



PL.14　SB005完掘状況



PL.15　SB013完掘状況

PL.16　SD001完掘状況

PL.17　SD001完掘状況

PL.18　SD005完掘状況

PL.19　SD006·7完掘状況

PL.20　SK002完掘状況

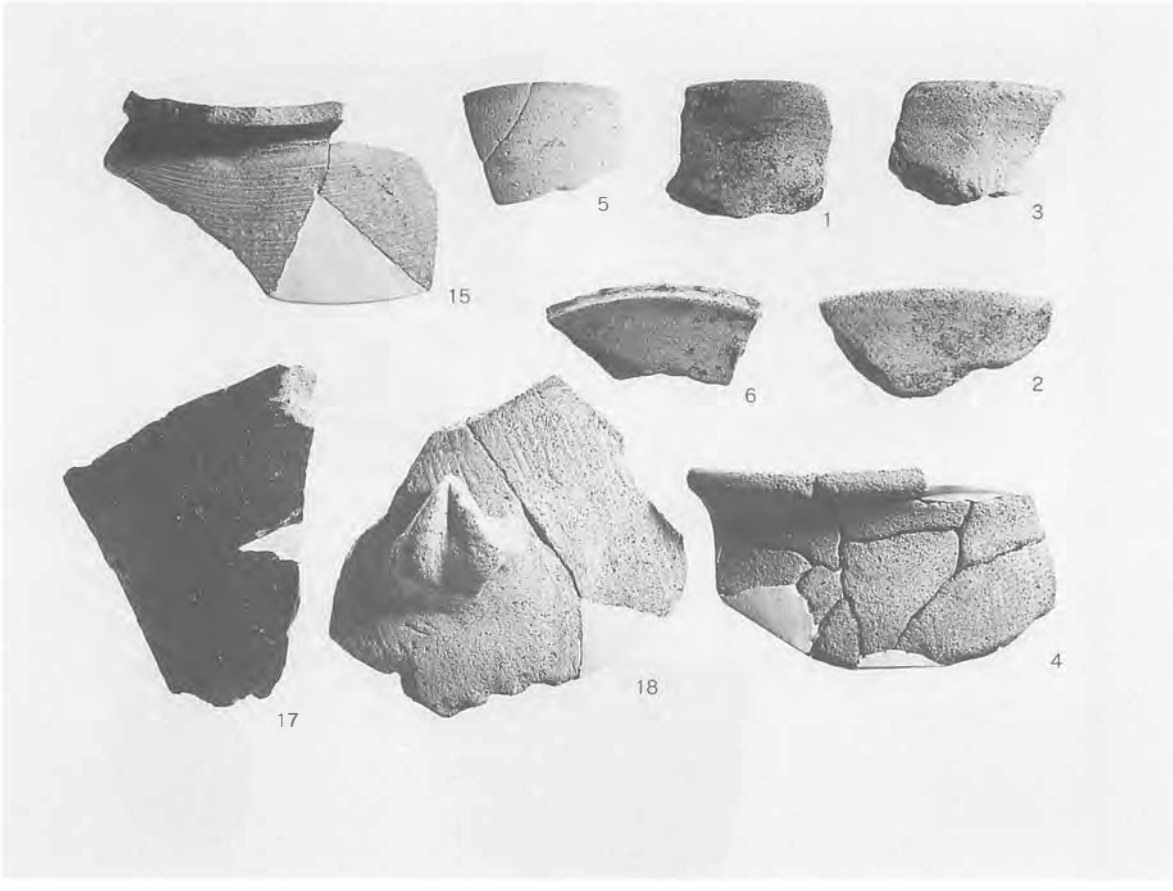
PL.21　SK003完掘状況

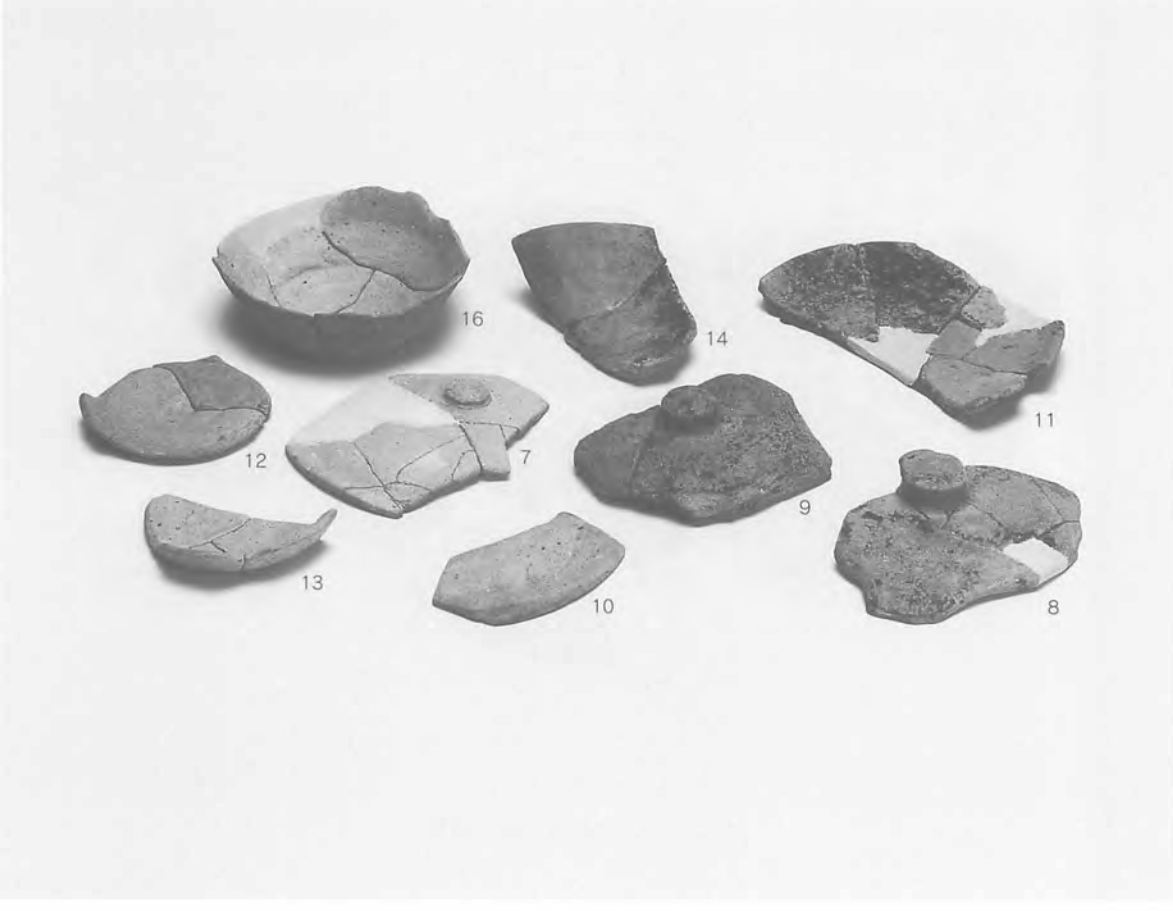
PL.22
SE001石材検出状況

PL.23
SE001石組完掘状況

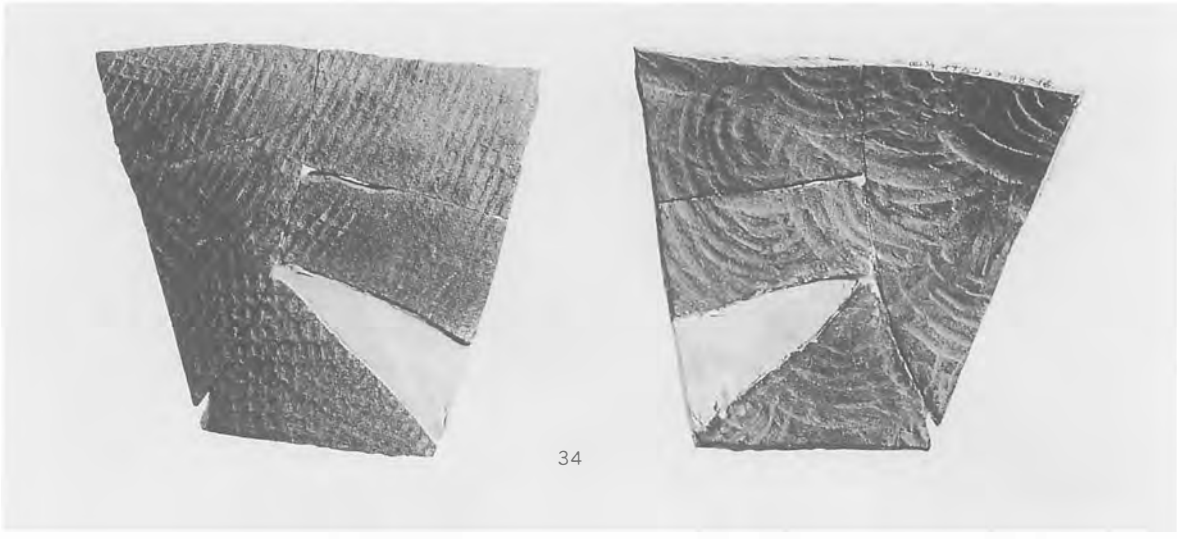
PL.24
SE001井戸枠検出状況

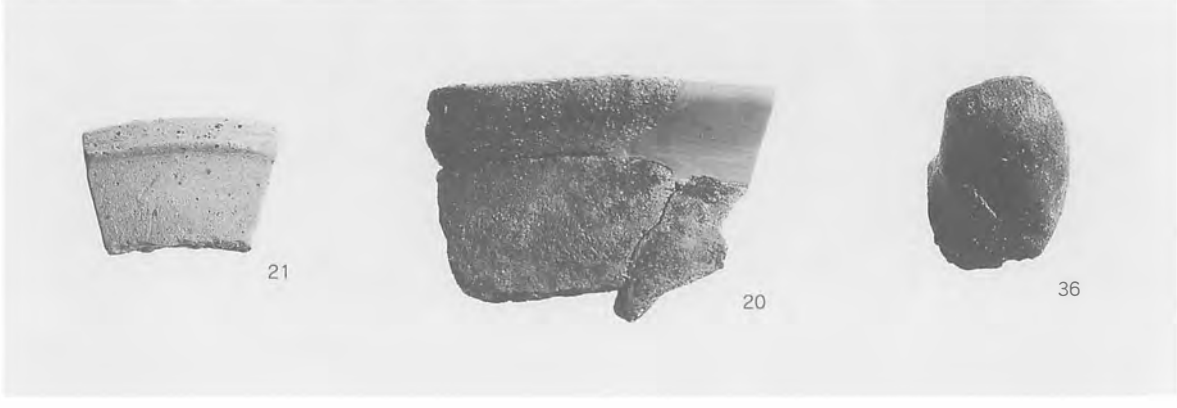
PL.25 SE001井戸枠



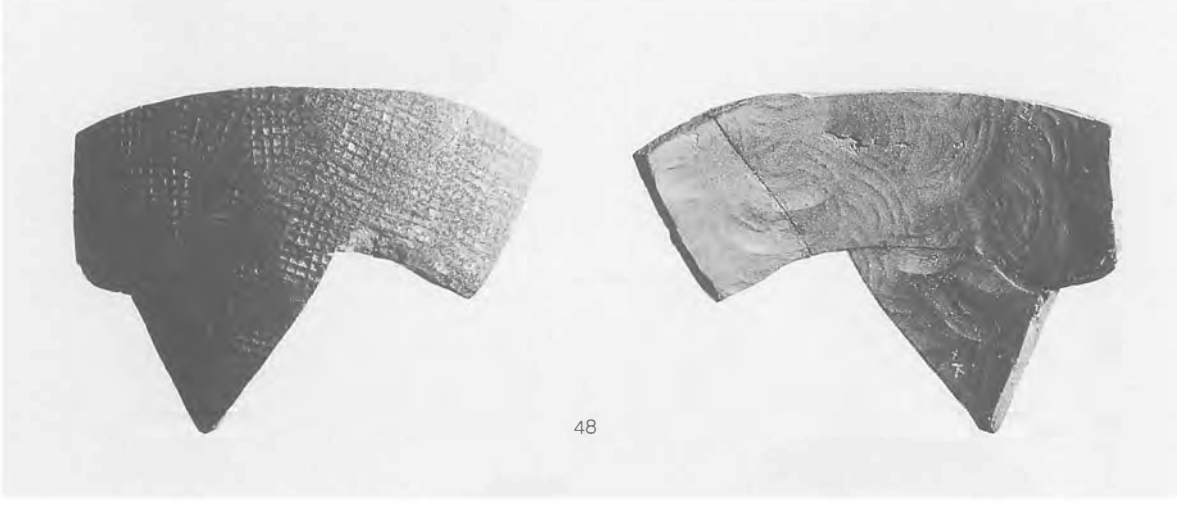


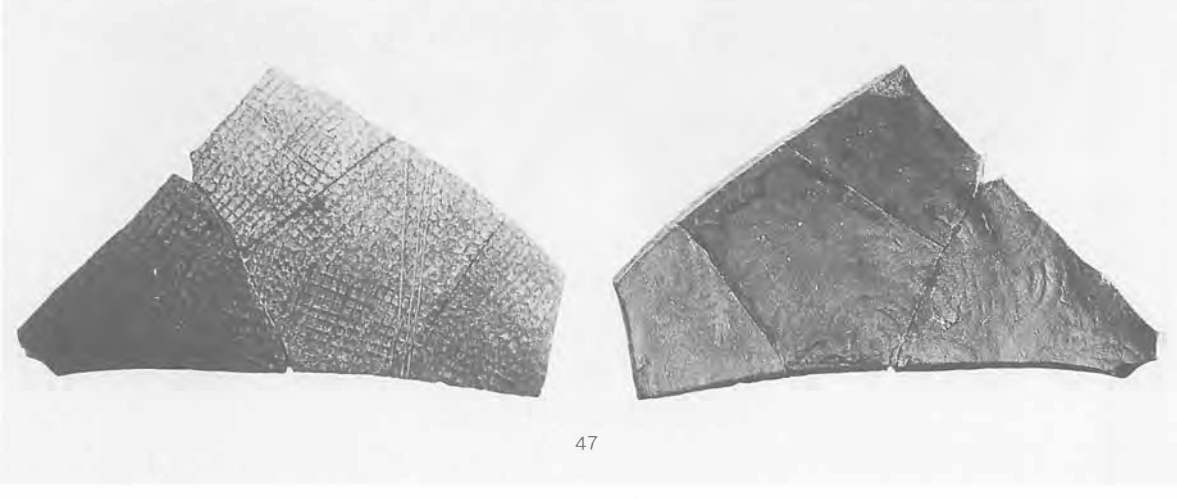
PL.26　SI005出土遺物



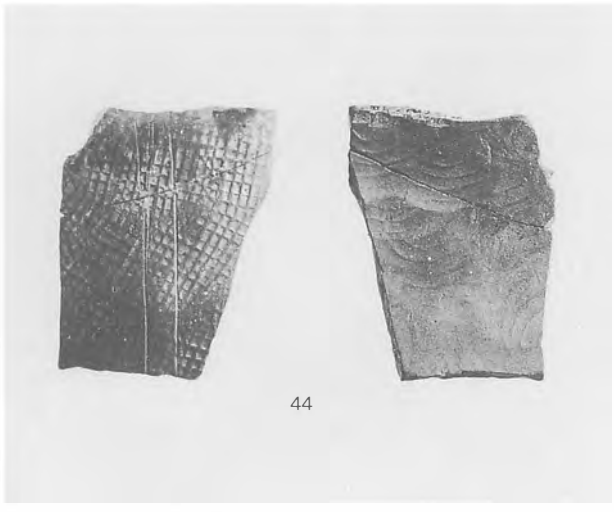


PL.27　SI006·008出土遺物

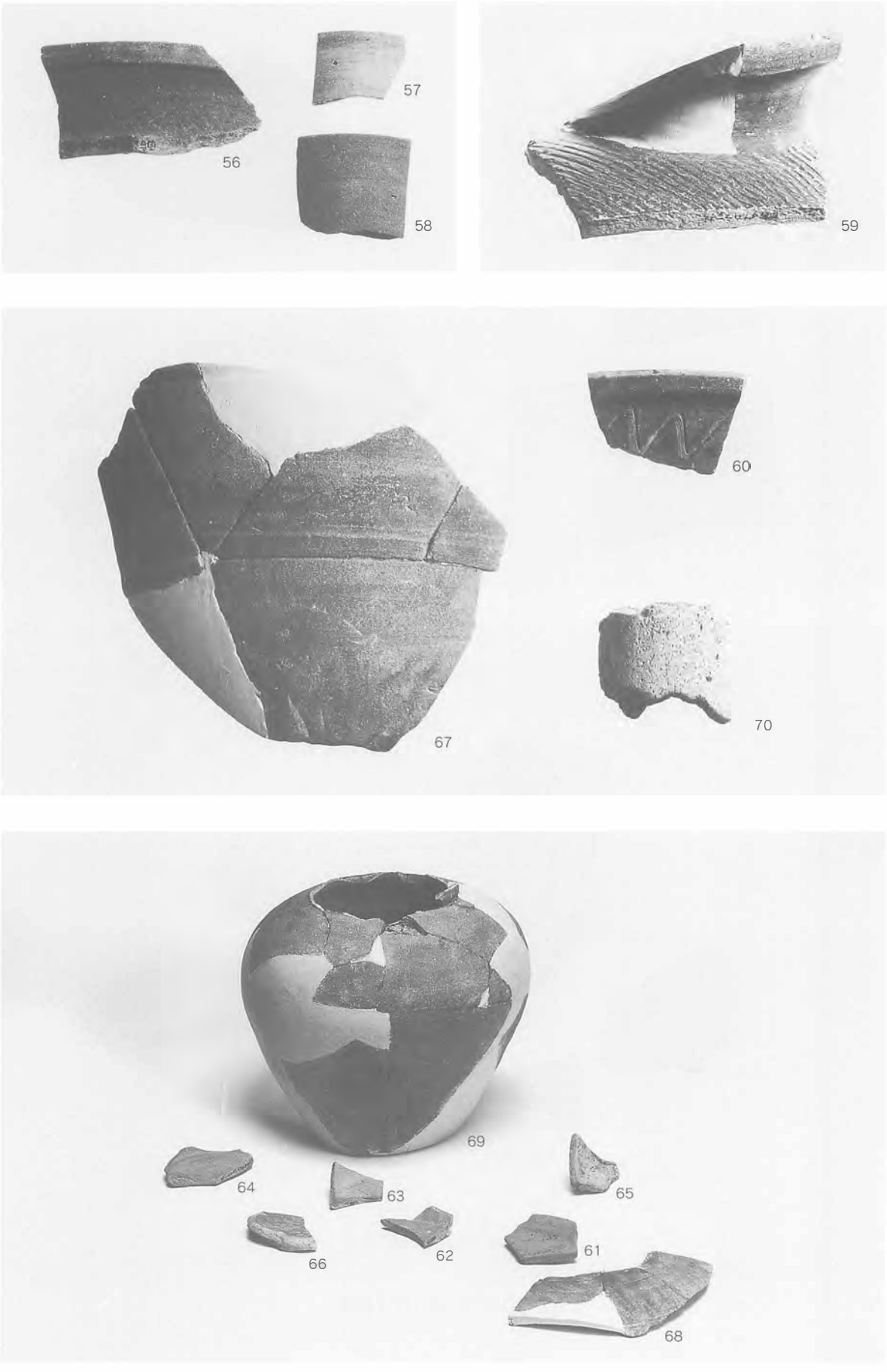




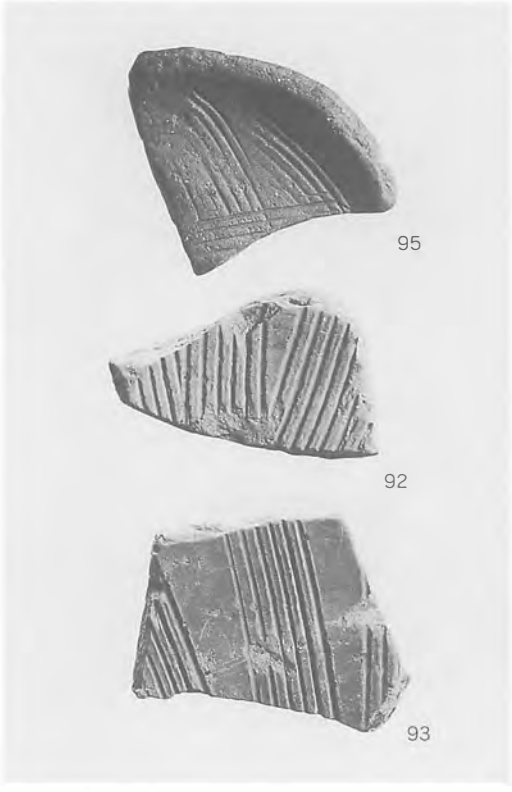
PL.28　SI009出土遺物

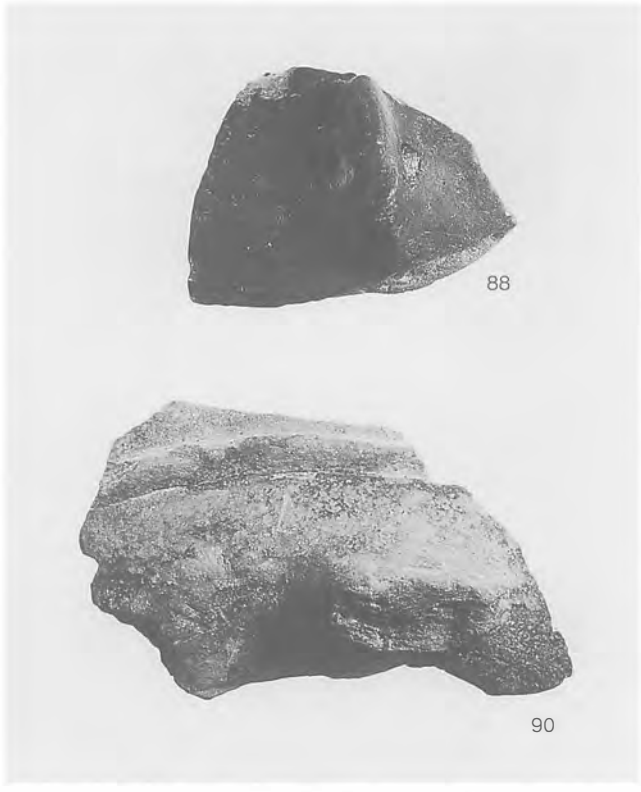


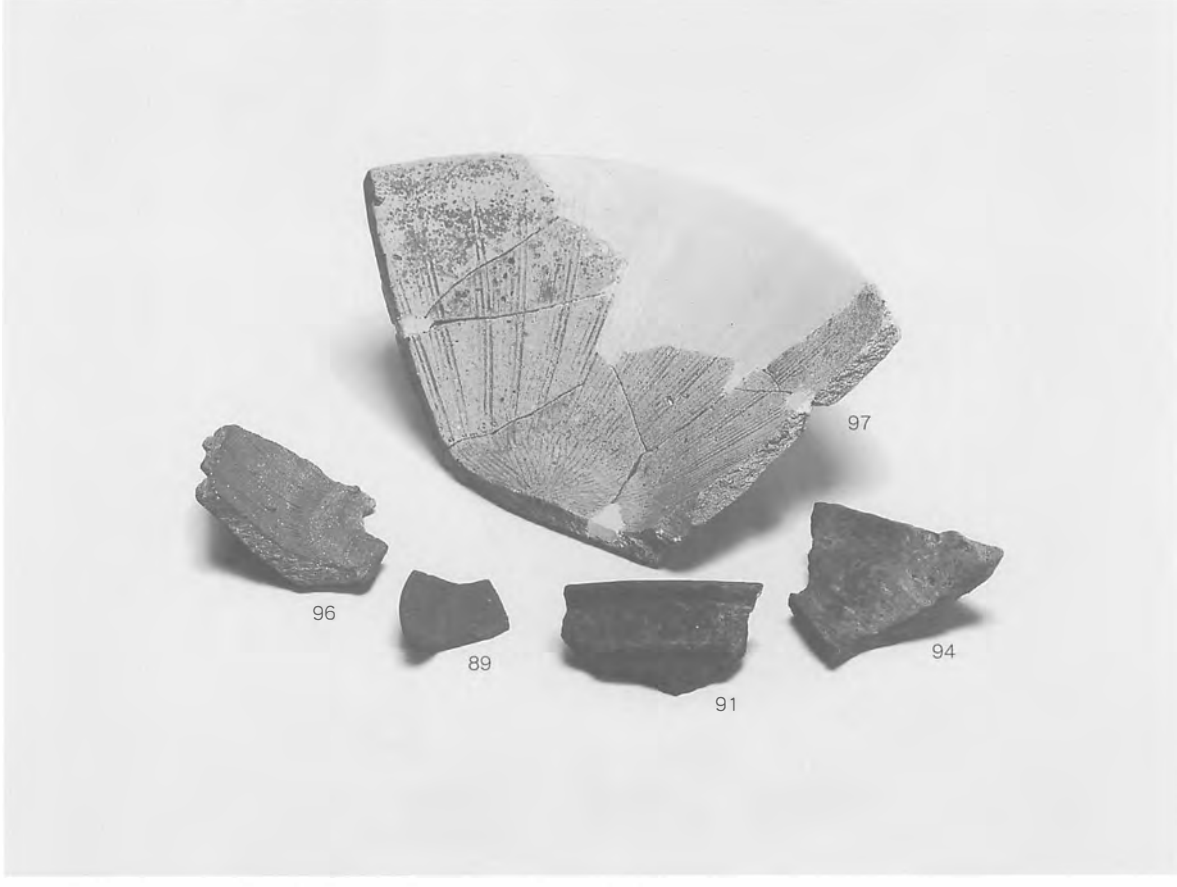
PL.29　SI009·011出土遺物



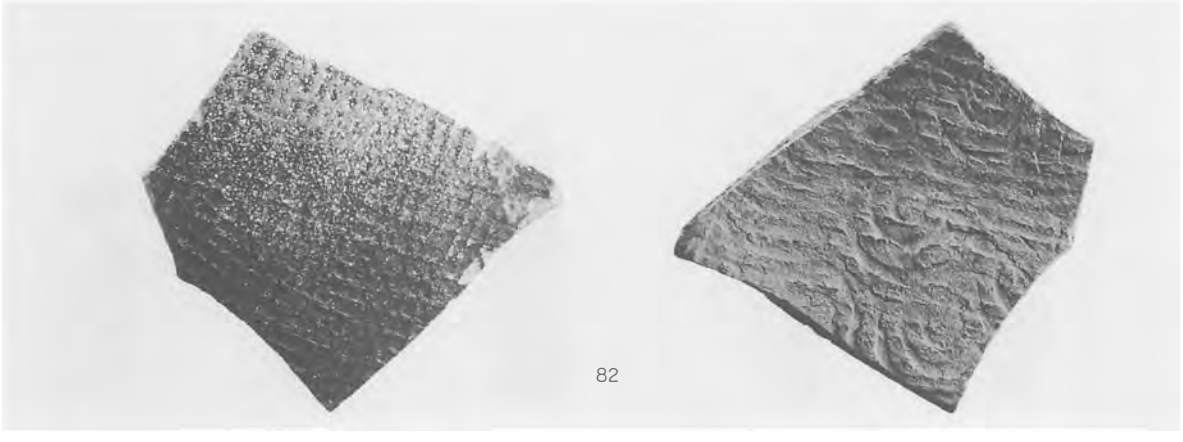
PL.30　SD005·006·007出土遺物

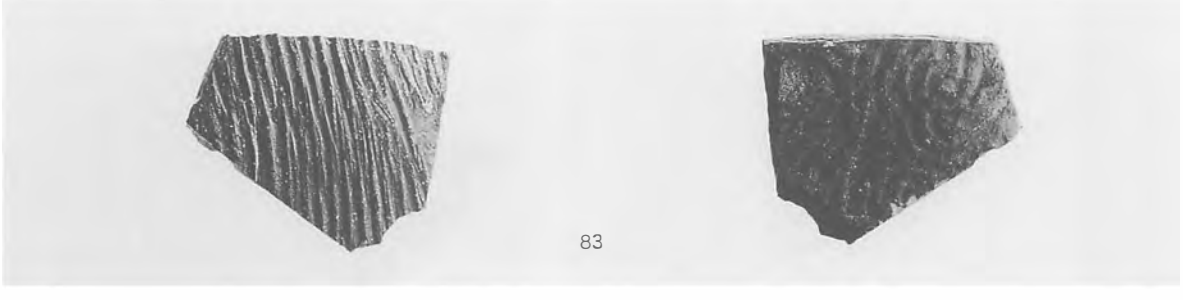




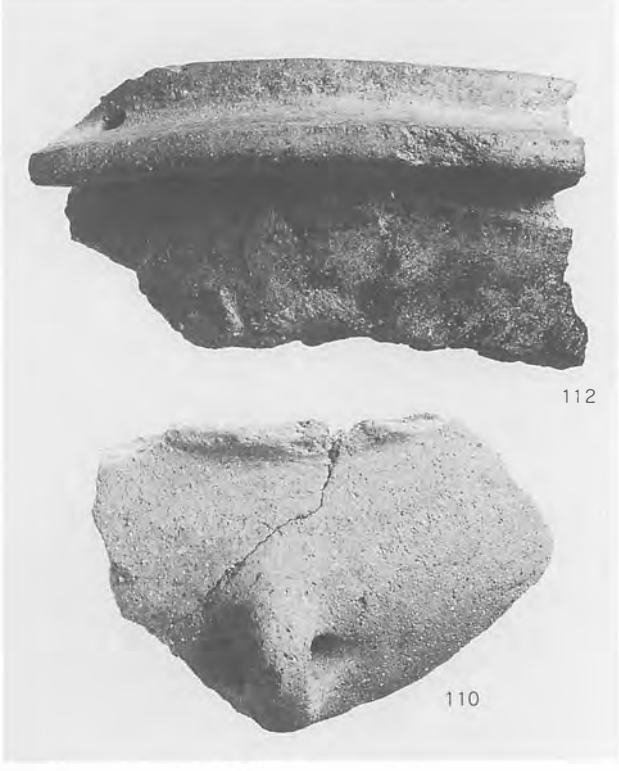


PL.31　SE001出土遺物

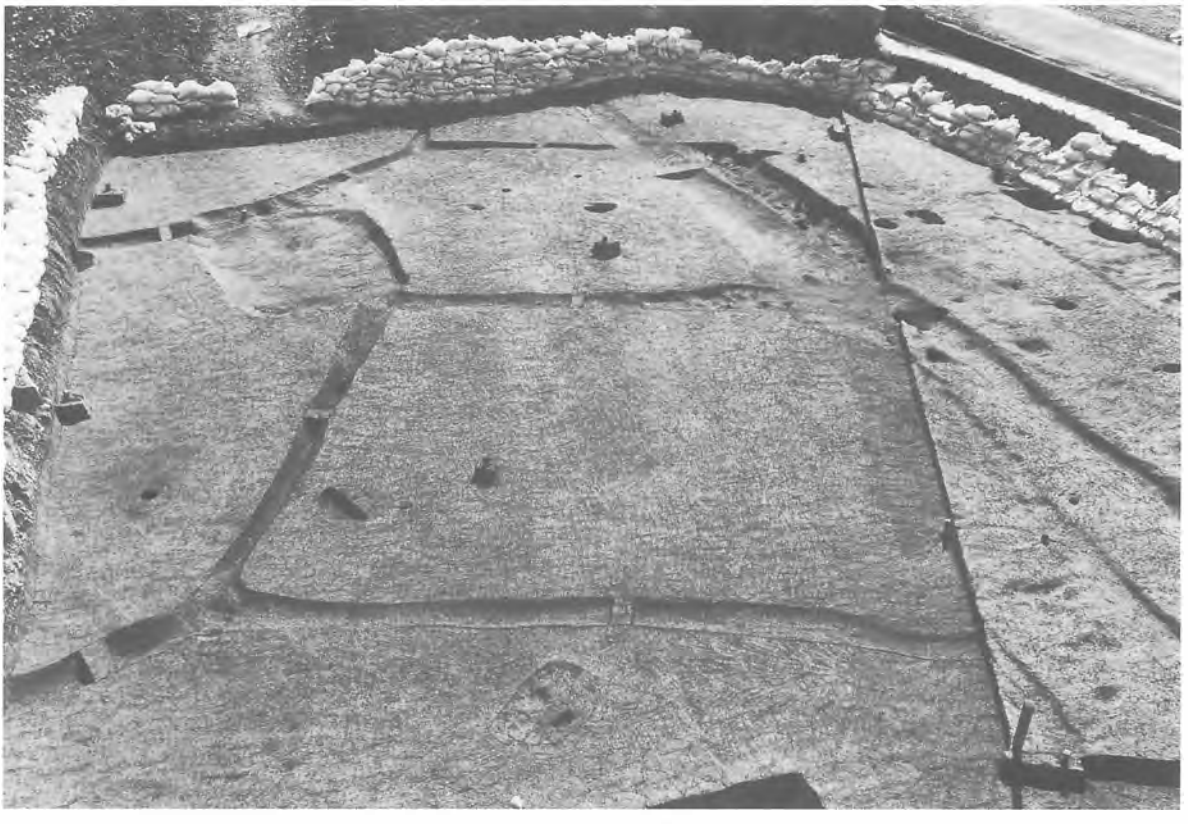




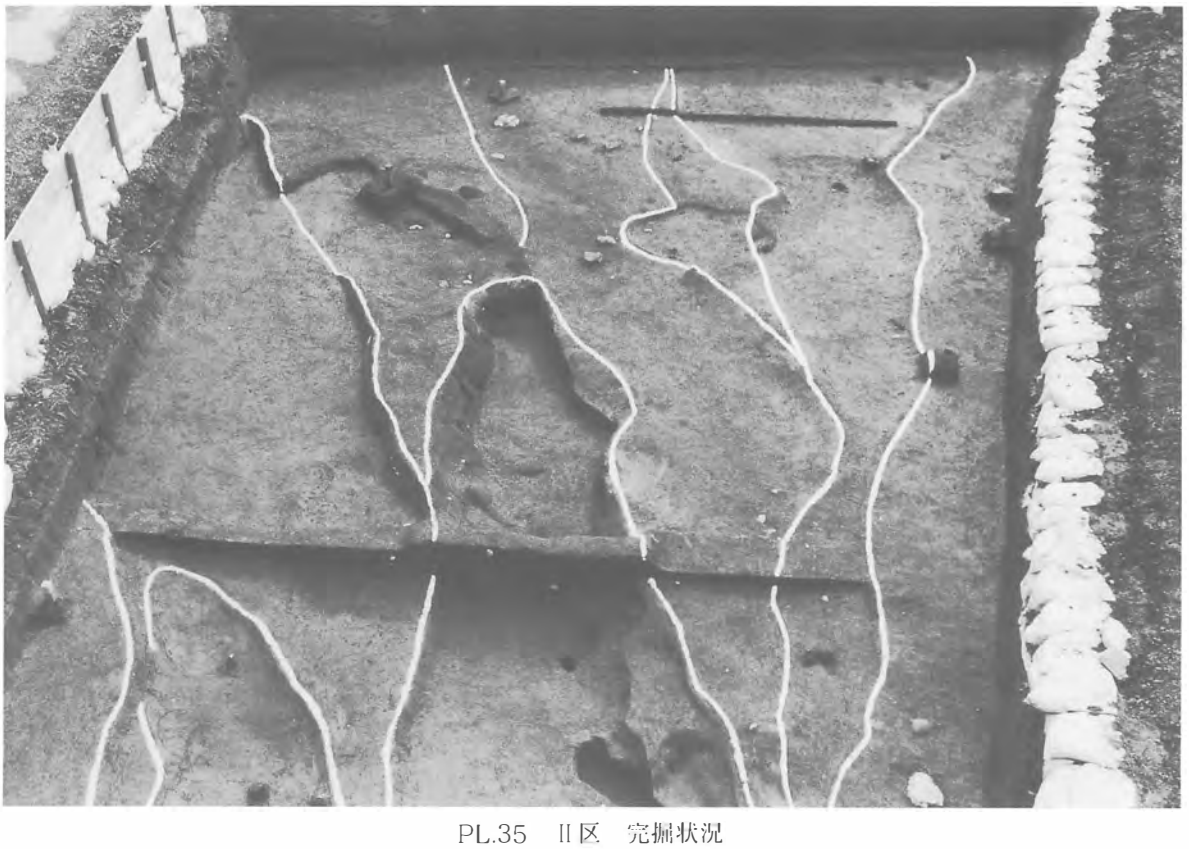
PL.32　SB002·003、SK002·003·004·005出土遺物



PL.33　調査区一括遺物



PL.34　I区　溝状遺構完掘状況



PL.35　II区　完掘状況

PL.36　Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区　完掘状況

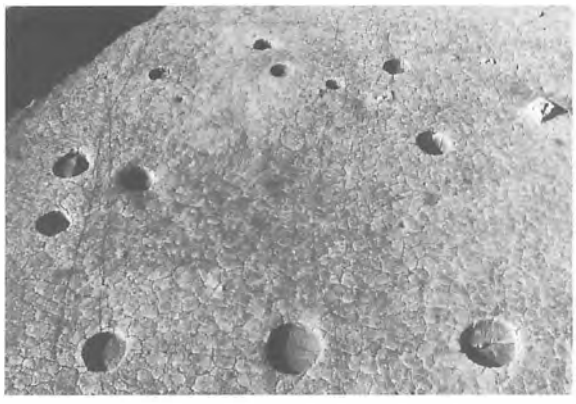
PL.37　Ⅵ区　完掘状況

PL.38　Ⅶ区　完掘状況

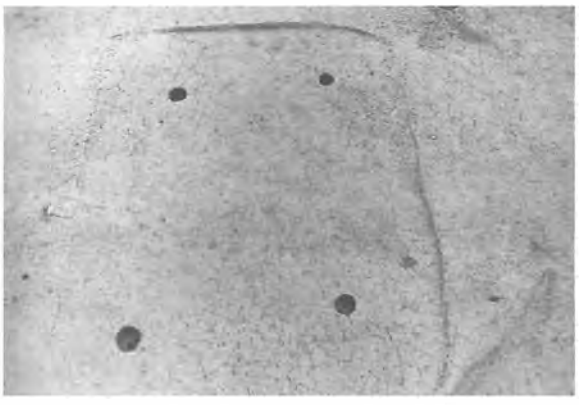
PL.39　Ⅷ区　完掘状況

PL.40　X区　完掘状況

PL.41　XI区　完掘状況

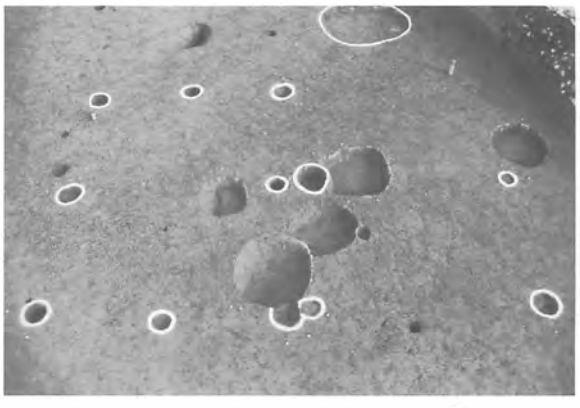


PL.42　Ⅲ区　SB001完掘状況

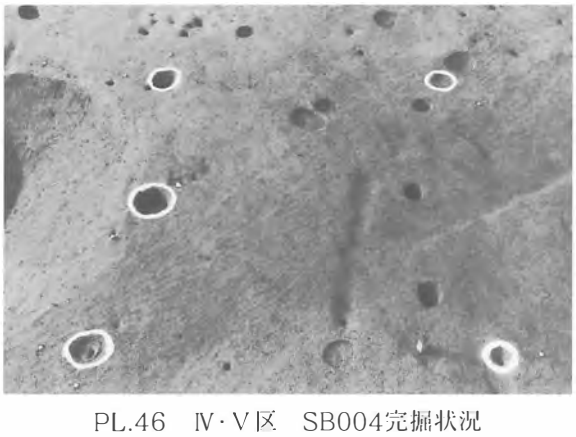


PL.43　Ⅲ区　SI001完掘状況

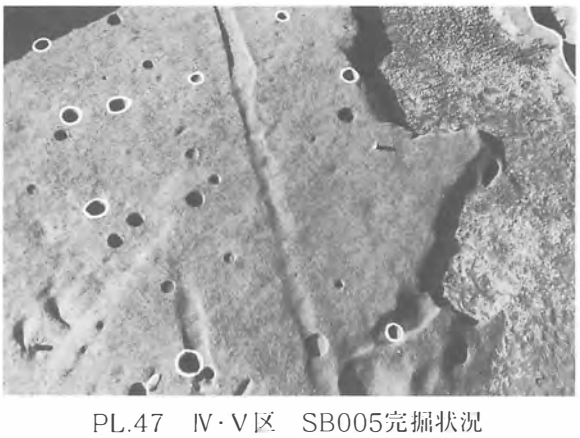
PL.44　Ⅲ区　SX001遺物出土状況



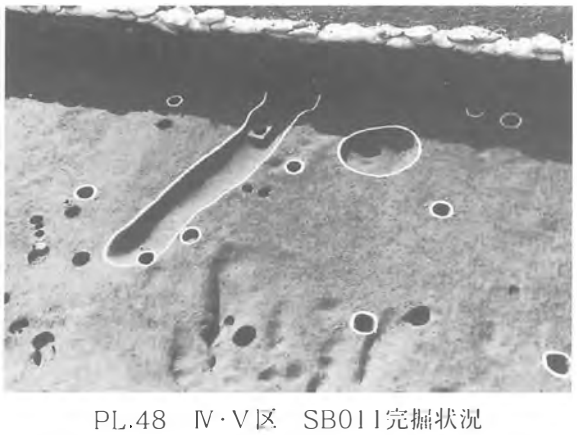
PL.45　Ⅳ・Ⅴ区　SB002・003完掘状況



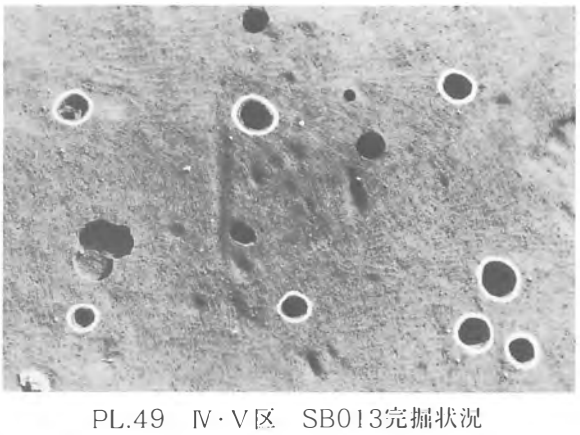
PL.46　Ⅳ・Ⅴ区　SB004完掘状況



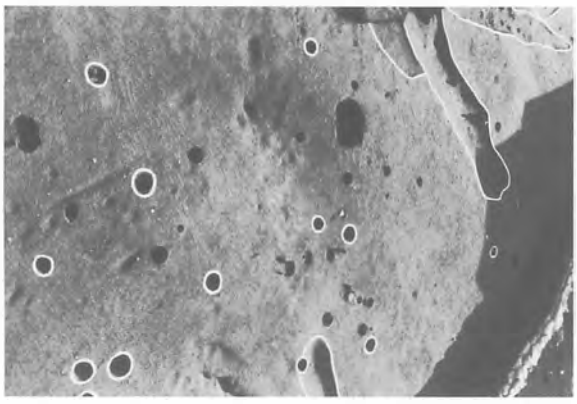
PL.47　Ⅳ・Ⅴ区　SB005完掘状況



PL.48　Ⅳ・Ⅴ区　SB011完掘状況



PL.49　Ⅳ・Ⅴ区　SB013完掘状況



PL.50　Ⅳ・Ⅴ区　SB012・015完掘状況

PL.51　Ⅳ・Ⅴ区　SD009・017完掘状況

PL.52　Ⅳ・Ⅴ区　SD009・017完掘状況

PL.53　Ⅳ・Ⅴ区　SD019遺物出土状況

PL.54　Ⅳ・Ⅴ区　SB002・003完掘状況

PL.55　Ⅵ区　SK016半裁状況

PL.56　Ⅵ区　SK017完掘状況

PL.57　Ⅵ区　SK018半裁状況

PL.58　Ⅵ区　SX002完掘状況

PL.59　Ⅶ区　SB018完掘状況

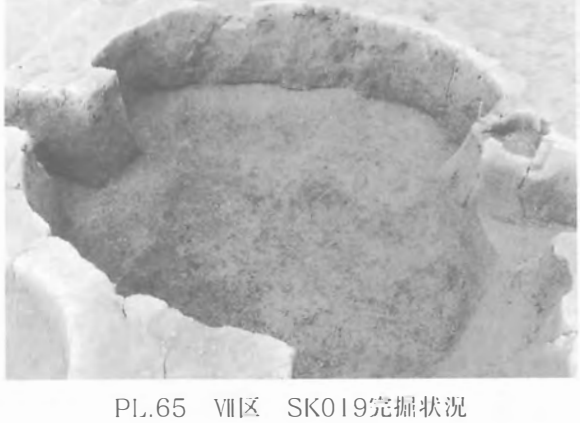
PL.60　Ⅶ区　SD030完掘状況

PL.61　Ⅶ区　SR001完掘状況

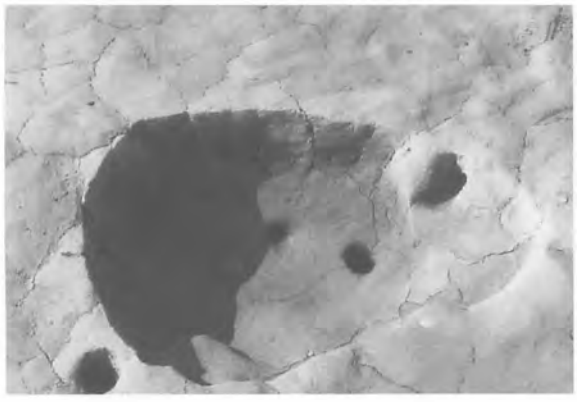
PL.62　Ⅶ区　SR001·SD030遺構断面状況

PL.63　Ⅶ区　Pit074·SK019検出状況

PL.64　Ⅶ区　SK022遺物出土半裁状況

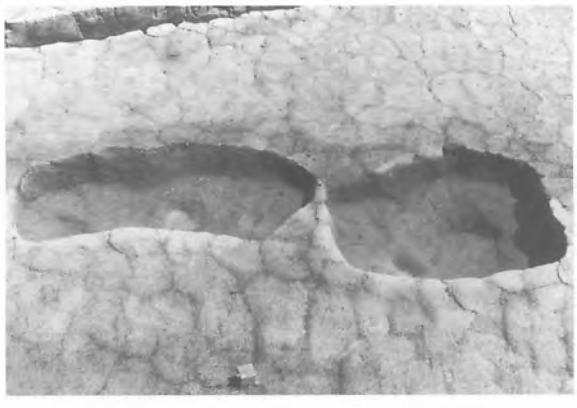


PL.65　Ⅶ区　SK019完掘状況

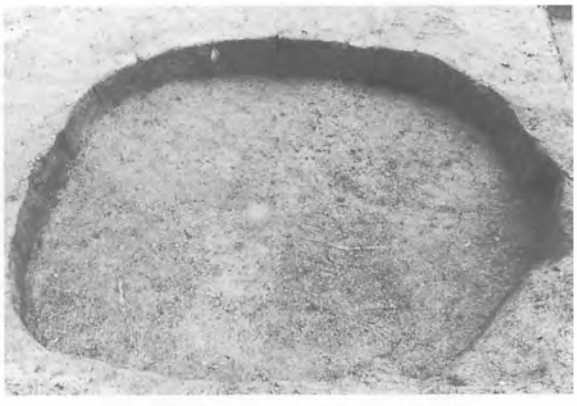


PL.66　Ⅶ区　SK025·026完掘状況

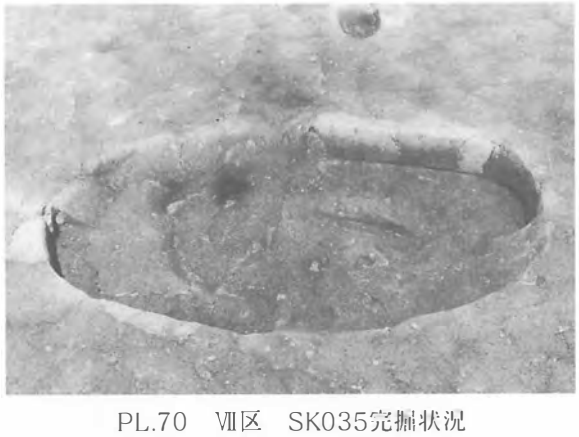
PL.67　Ⅶ区　SK027完掘状況



PL.68　Ⅶ区　SK031·032完掘状況



PL.69　Ⅶ区　SK035完掘状況



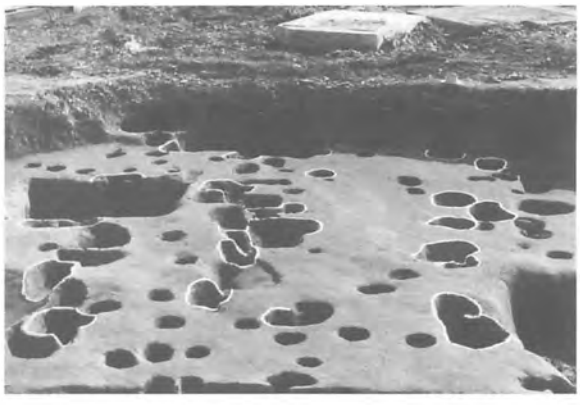
PL.70　Ⅶ区　SK035完掘状況

PL.71　Ⅶ区　SD025·026完掘状況

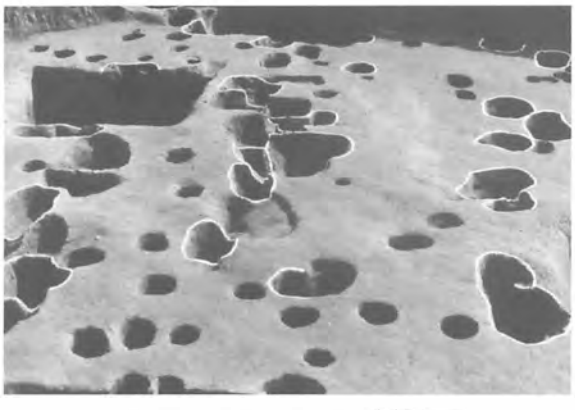
PL.72　Ⅶ区　SR001完掘状況

PL.73　Ⅶ区　SD027·028完掘状況

PL.74　Ⅷ区　SB021完掘状況



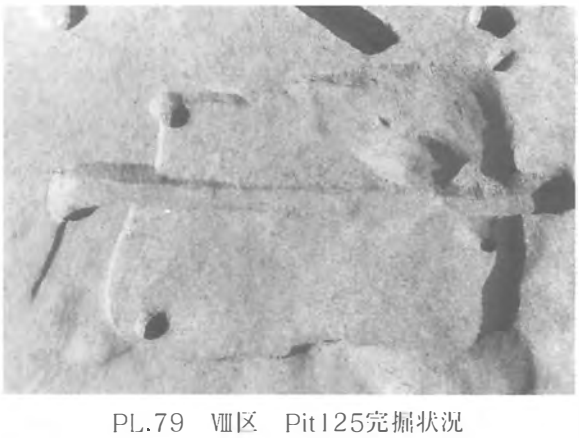
PL.75　Ⅷ区　SB021·023完掘状況



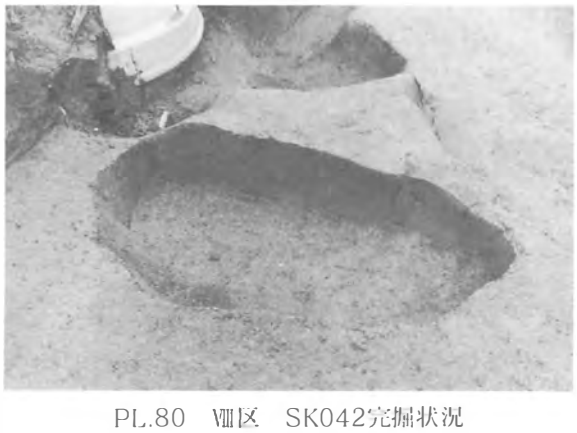
PL.76　Ⅷ区　SB024完掘状況

PL.77　Ⅷ区　Pit127·SK039完掘状況

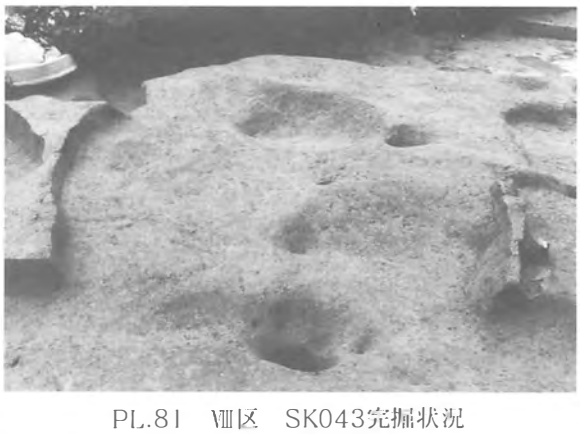
PL.78　Ⅷ区　Pit127·SK039完掘状況



PL.79　Ⅷ区　Pit125完掘状況



PL.80　Ⅷ区　SK042完掘状況



PL.81　Ⅷ区　SK043完掘状況

PL.82　Ⅷ区　SK045完掘状況

PL.83　Ⅷ区　拡張区完掘状況(1)

PL.84　Ⅷ区　拡張区完掘状況(2)

PL.86　X区　完掘状況

PL.85　X区　SE004井戸枠検出状況

PL.88　XI区　SB031完掘状況

PL.87　XI区　SB030 Pit186柱穴完掘状況

PL.89　XI区　SB029完掘状況

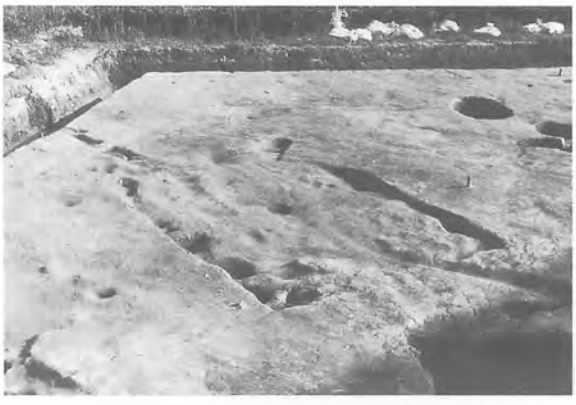
PL.90　XI区　SB030完掘状況

PL.91　XI区　SB033完掘状況

PL.92　XI区　SB034完掘状況

PL.93　XII区　SD036·037·038完掘状況

PL.94　XI区　SB031完掘状況



PL.95　XI区　SD043完掘状況

PL.96　XI区　SD044検出状況

PL.97　XI区　SD044完掘状況

PL.98　XI区　SD044水没状況

PL.99　XI区　SK061·062·063·064完掘状況

PL.100　XI区　SK065·Pit117完掘状況

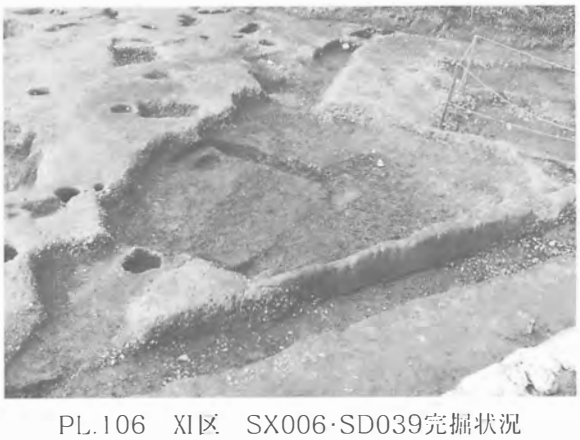
PL.101　XI区　SX009擂鉢出土状況

PL.102　XI区　SX009半裁状況

PL.103　XI区　Pit111半裁状況

PL.104　XI区　SX006遺物出土状況

PL.105　XI区　SX006遺物出土状況

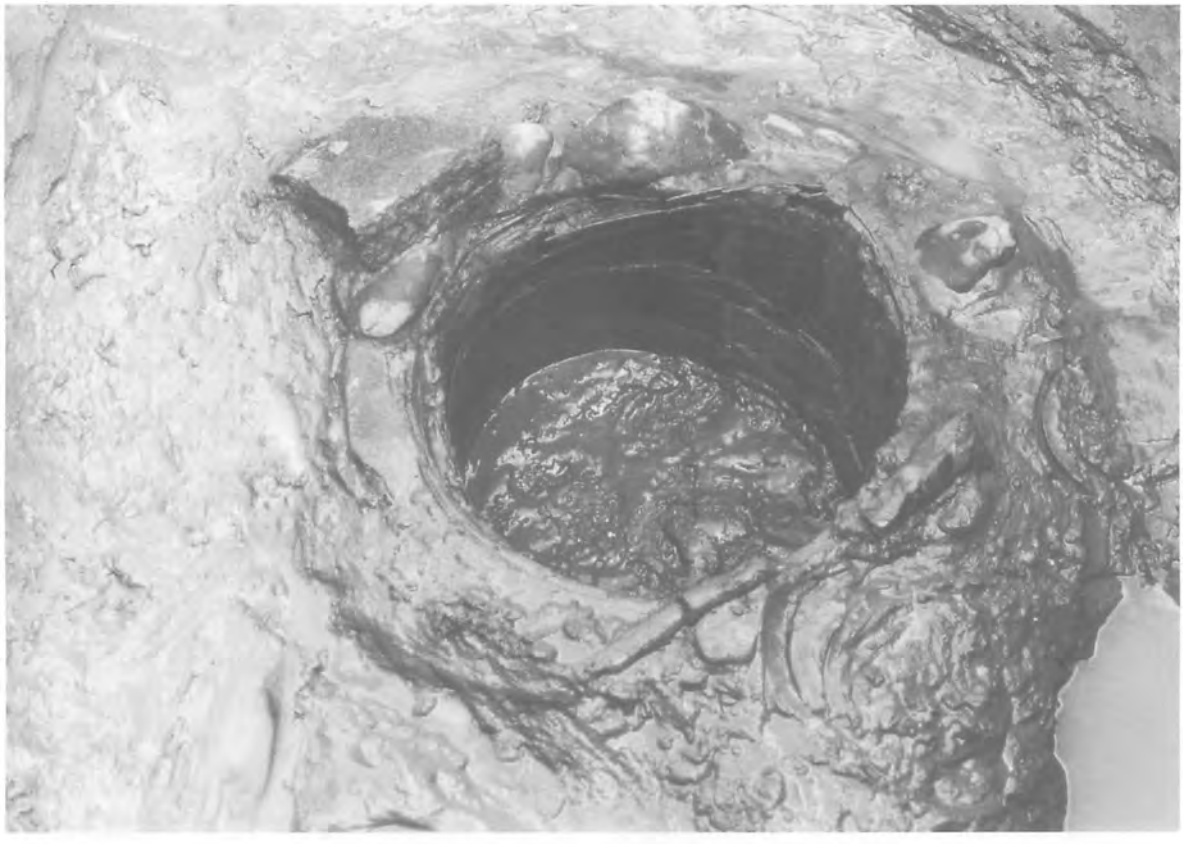


PL.106　XI区　SX006·SD039完掘状況

P.L107　XI区　SX007遺物出土状況

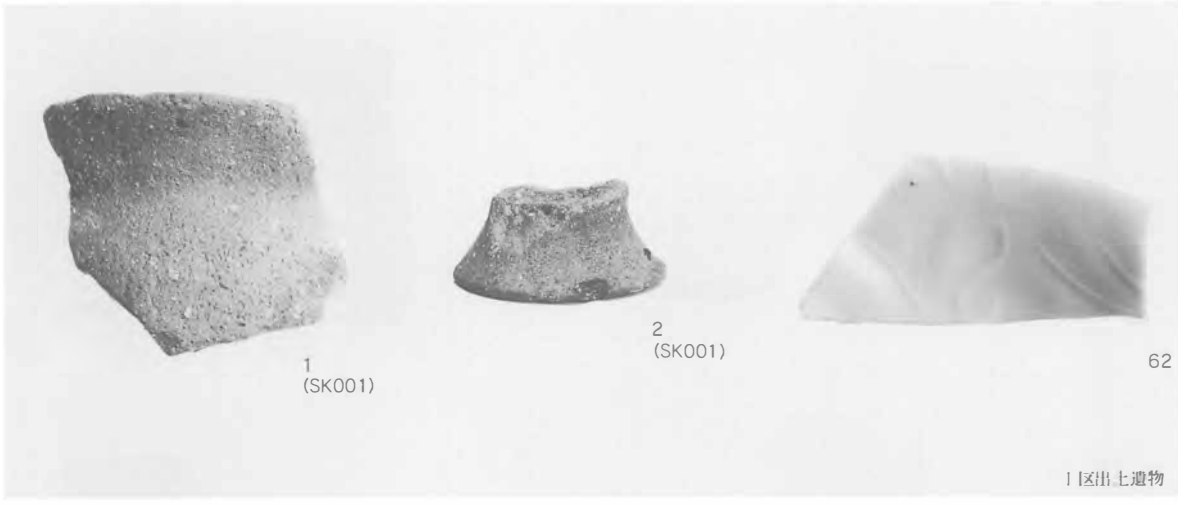
PL.108　XI区　SX007遺物出土状況

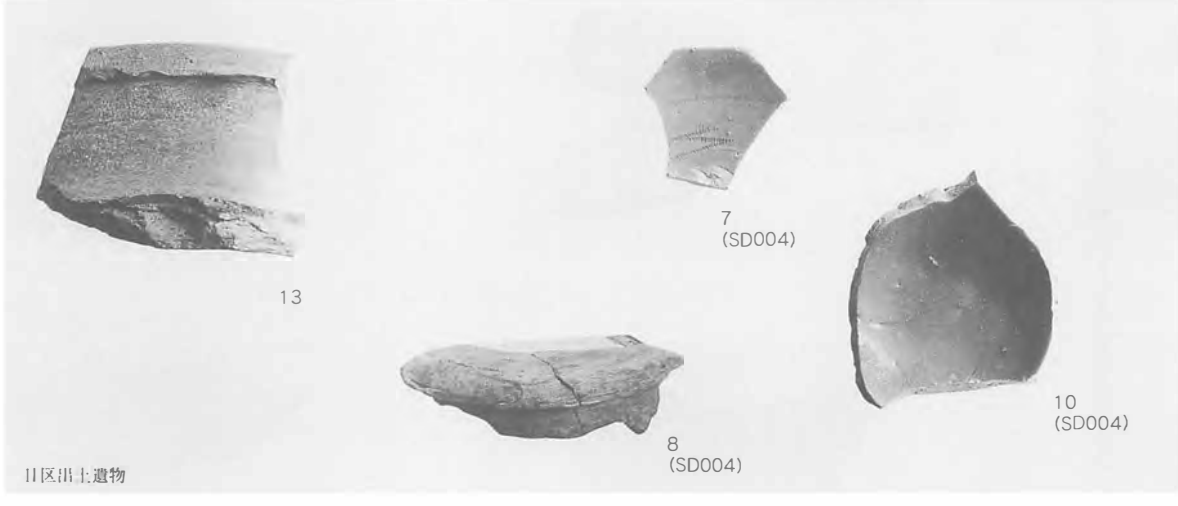
PL.109　XI区　SX011完掘状況

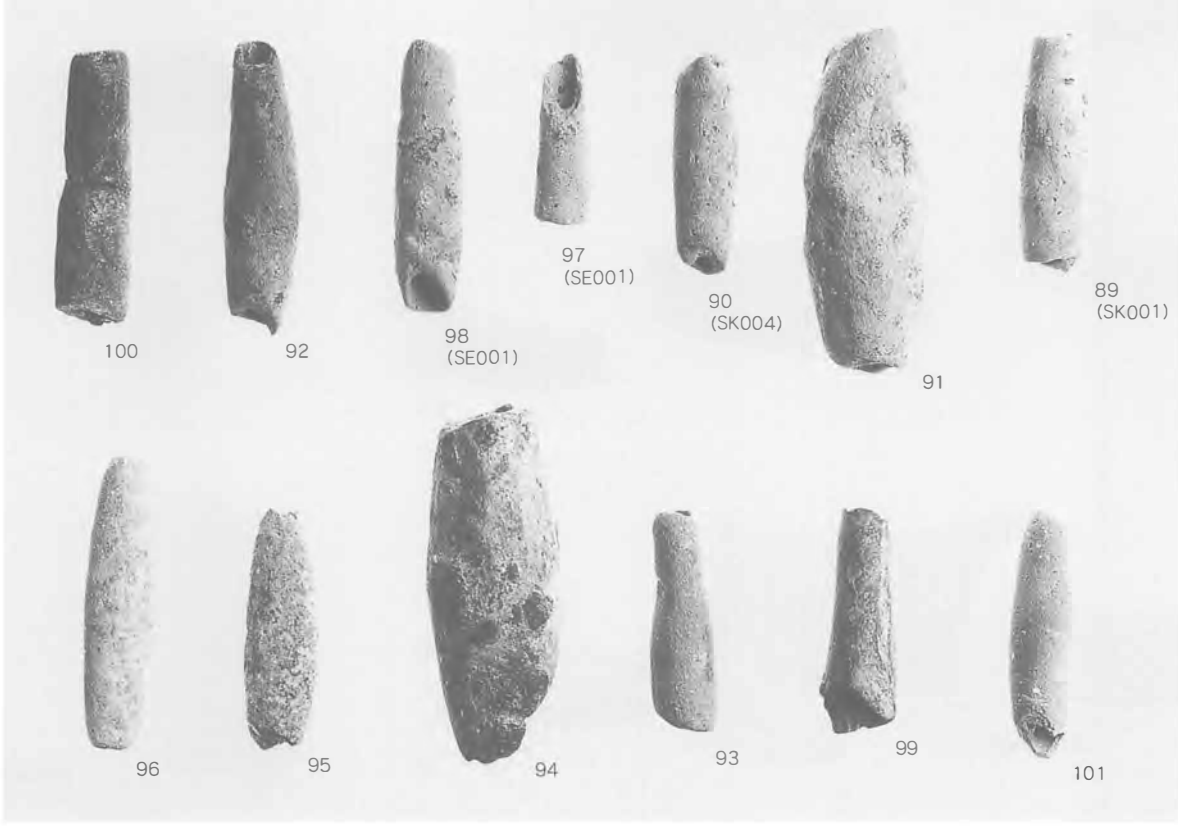


PL.110　X区　SE004井戸枠検出状況

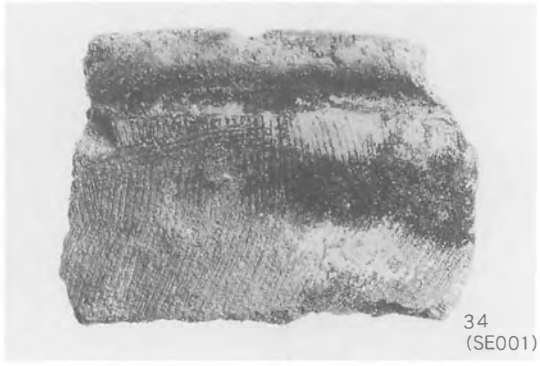
PL.111　X区　SE004井戸枠

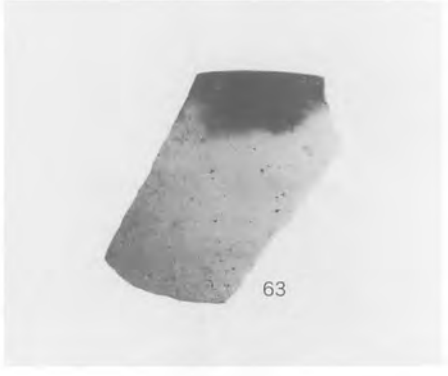


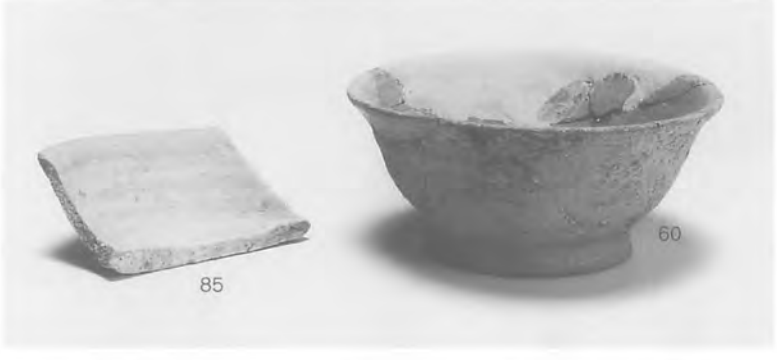


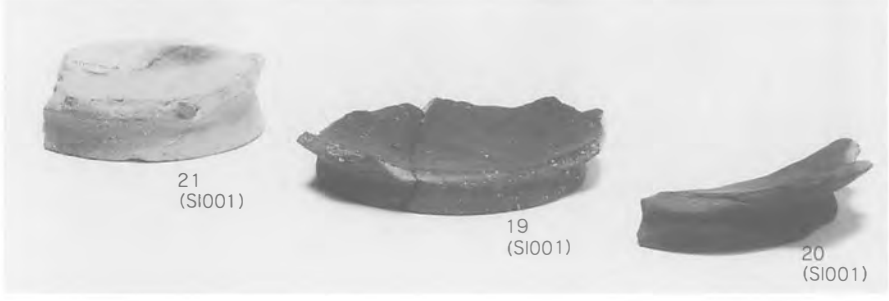


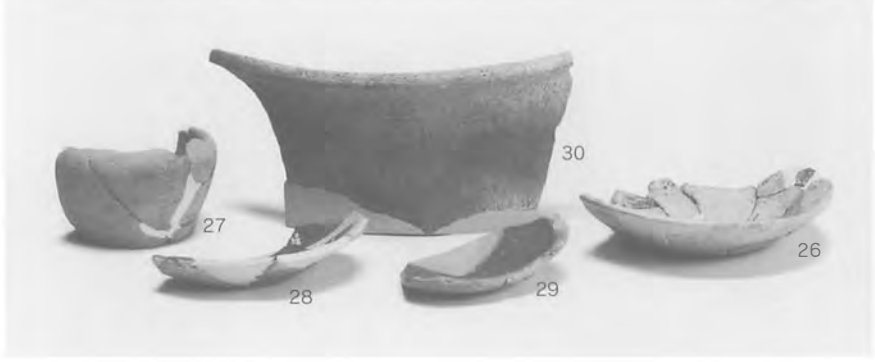
PL.112　I・II・III区　出土遺物



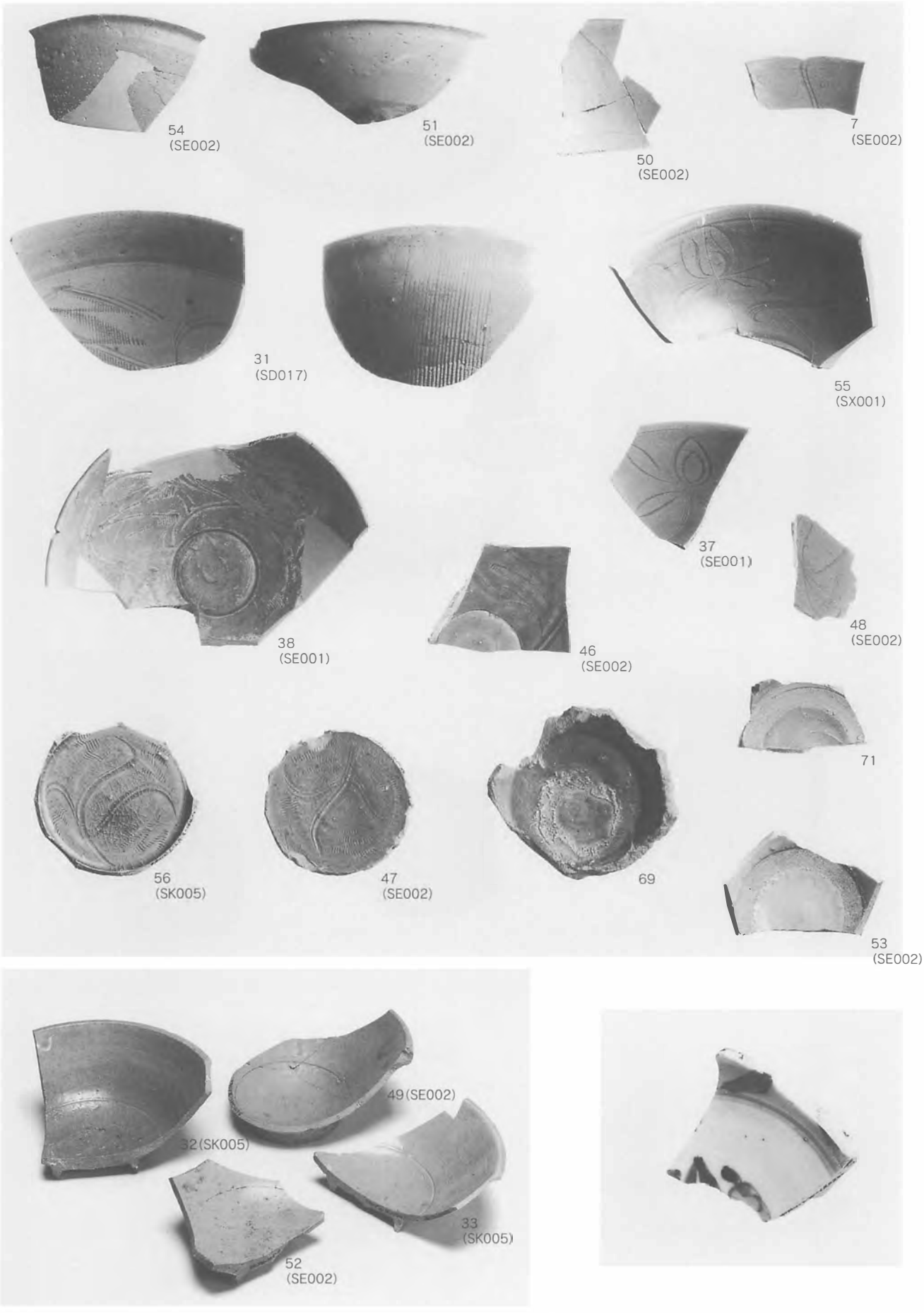




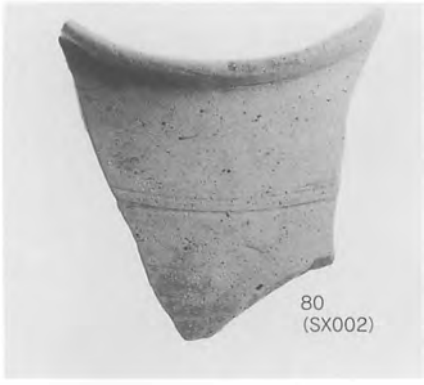


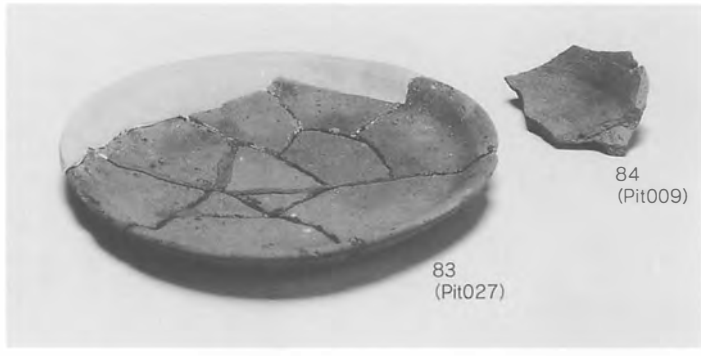


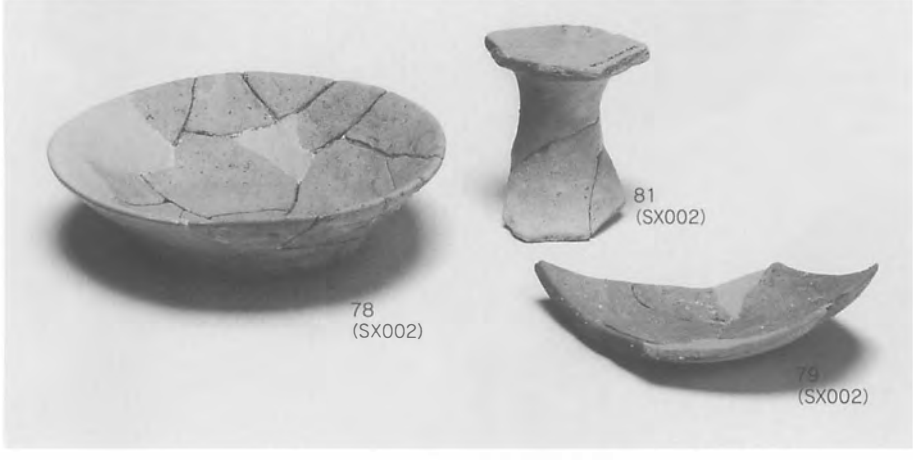
PL.113　Ⅲ·Ⅳ·Ⅴ区　出土遺物(1)

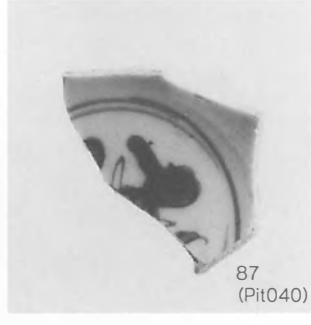


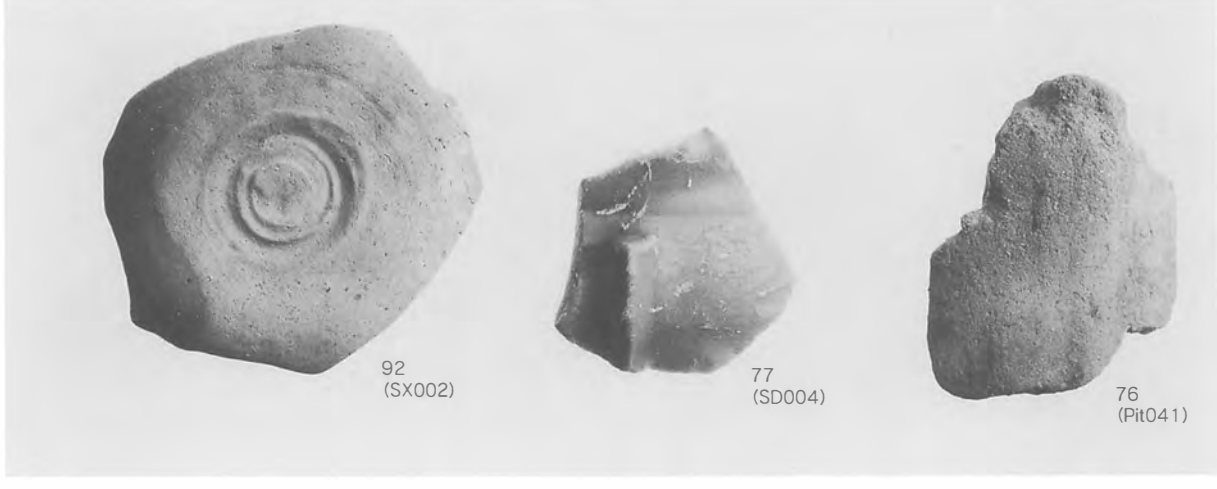
PL.114　Ⅲ·Ⅳ·Ⅴ区　出土遺物(2)



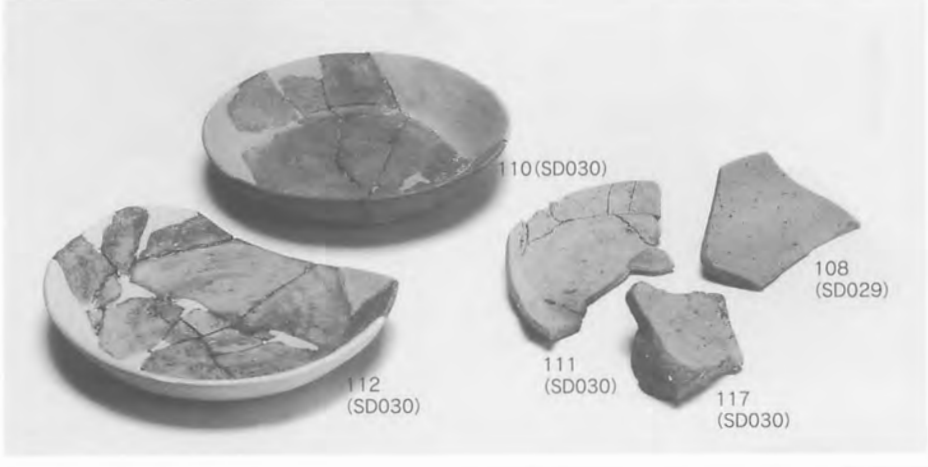


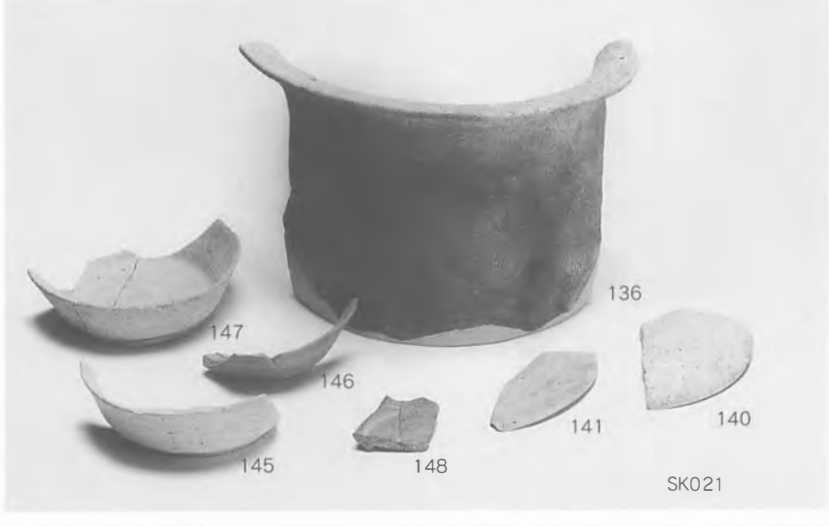


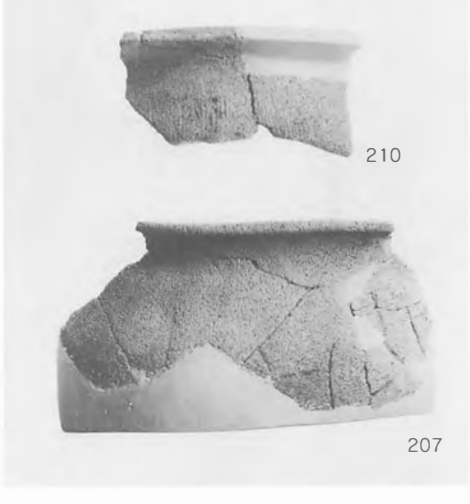




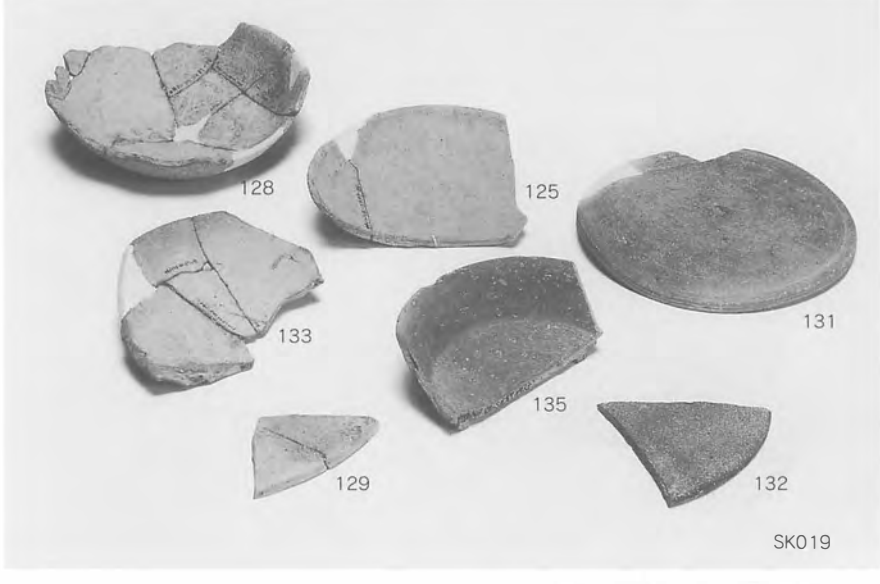
PL.115　Ⅵ・Ⅰ～Ⅳ区　出土遺物



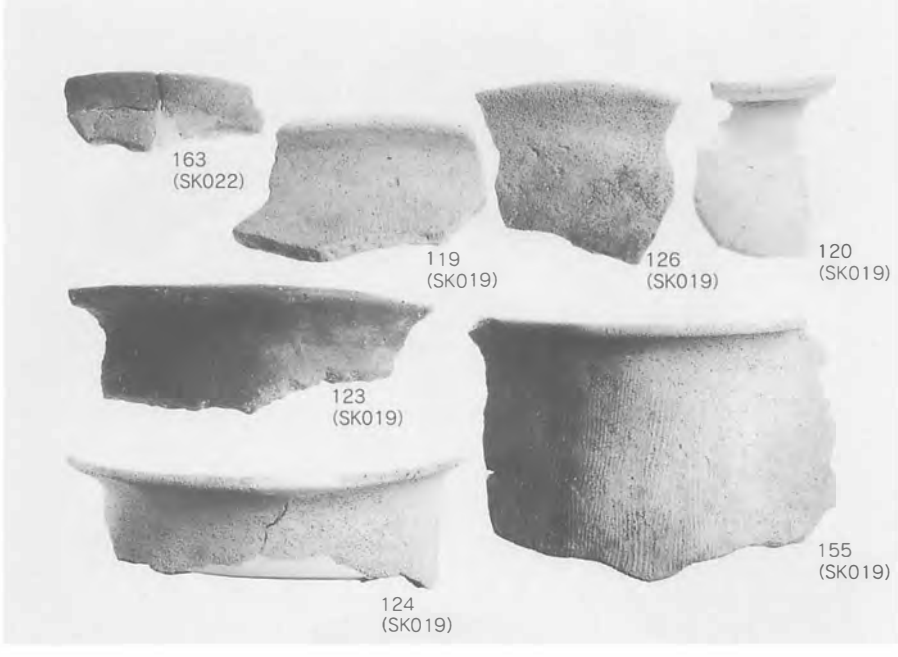


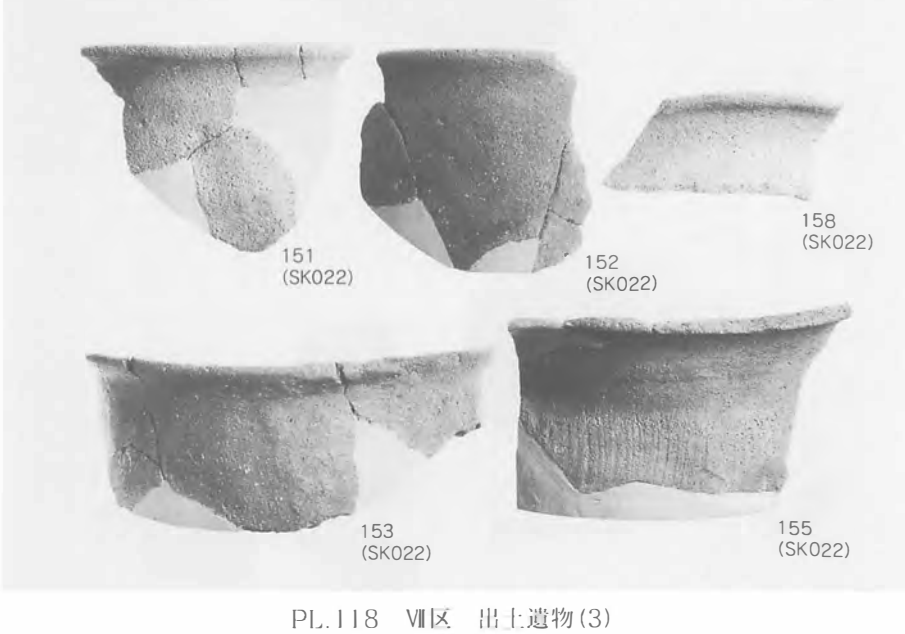


PL.116 Ⅶ区 出土遺物(1)

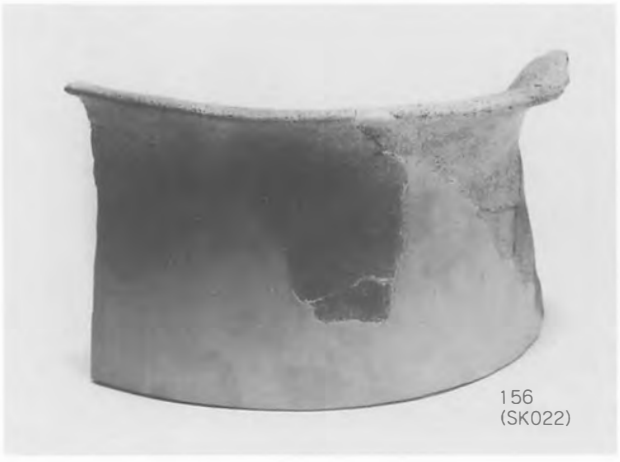


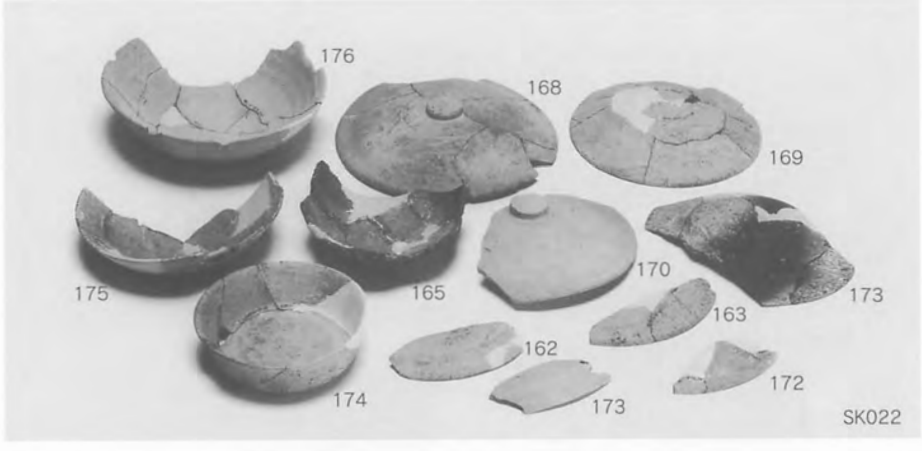
PL.117　Ⅶ区　出土遺物(2)



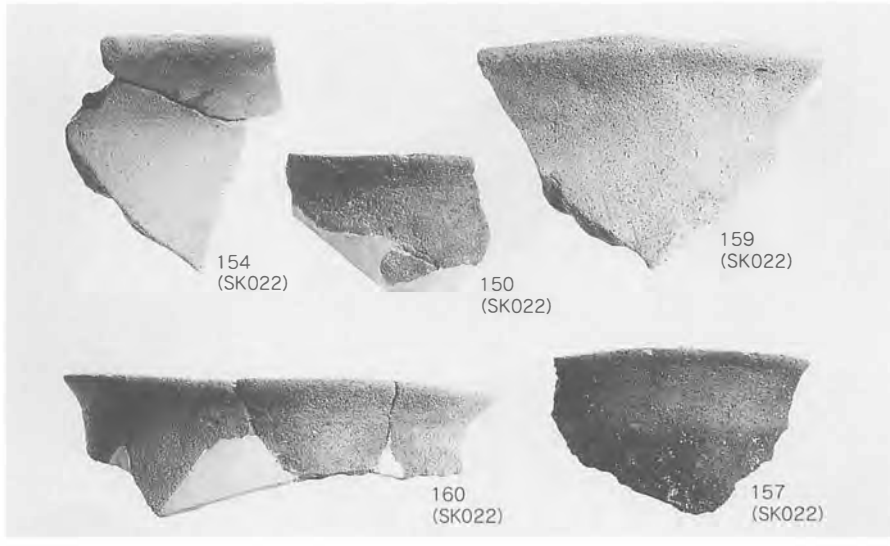


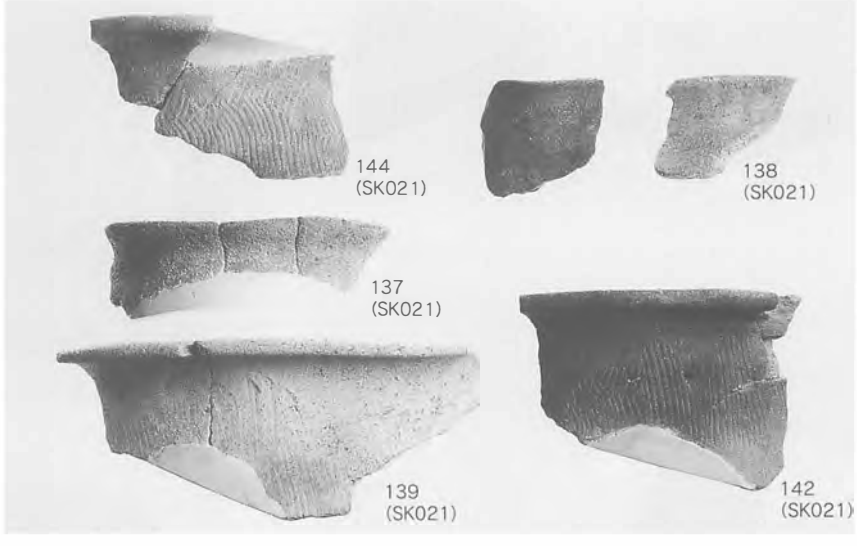
PL.118 Ⅶ区 出土遺物(3)



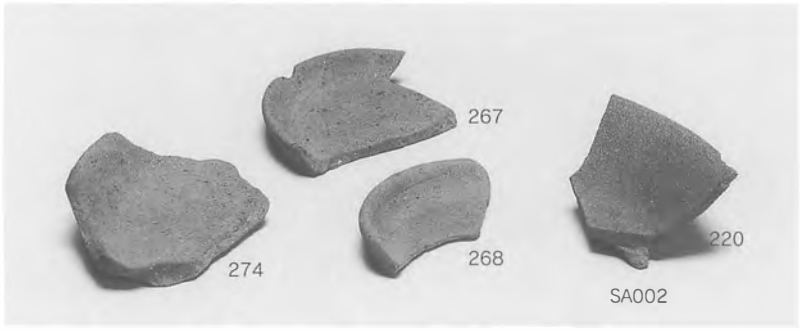


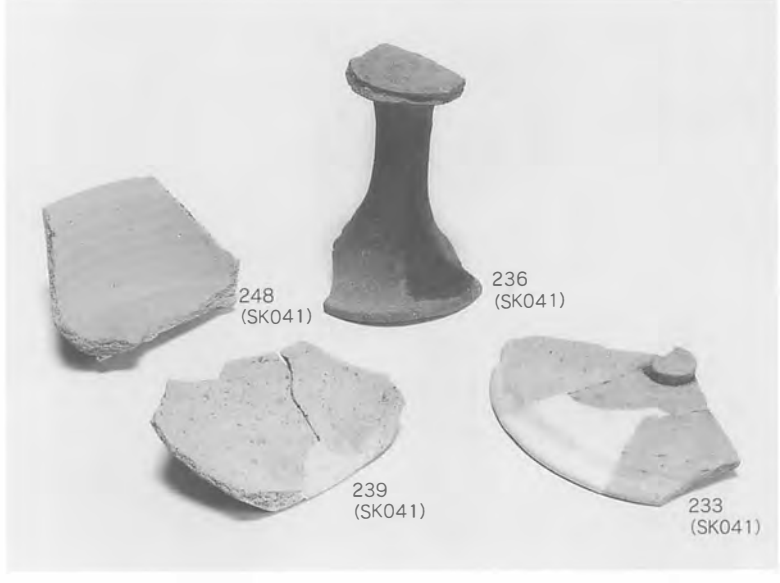
PL.119 Ⅶ区 出土遺物(4)

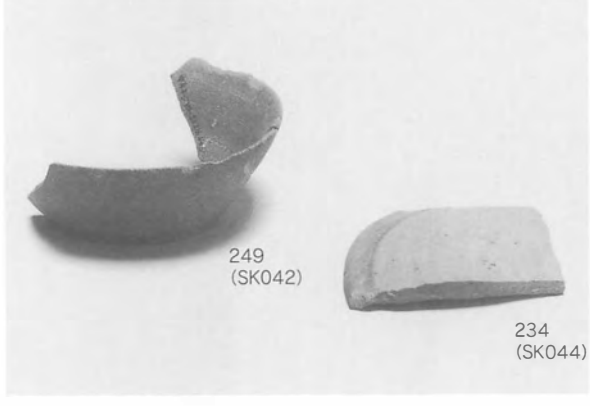




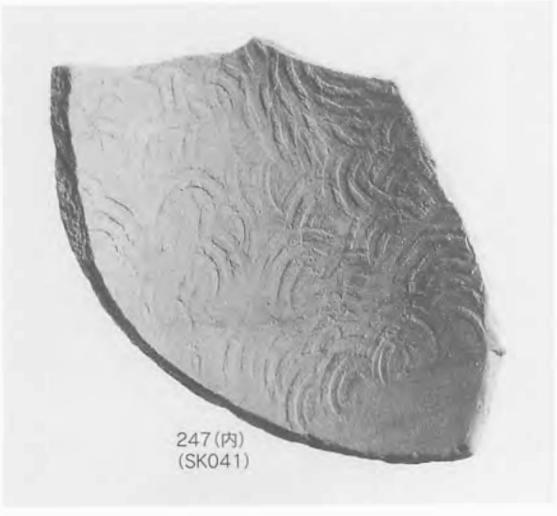
PL.120 Ⅷ区 出土遺物(5)



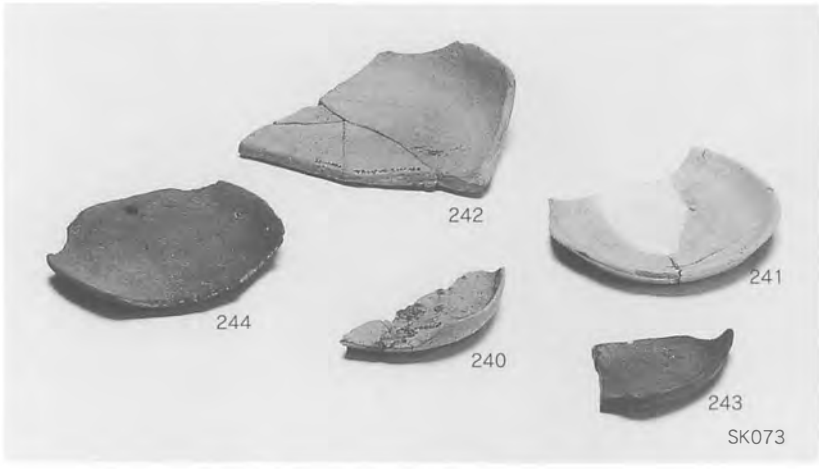


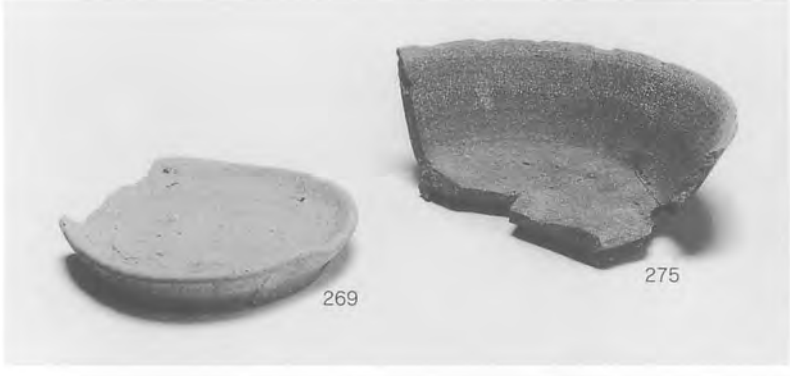


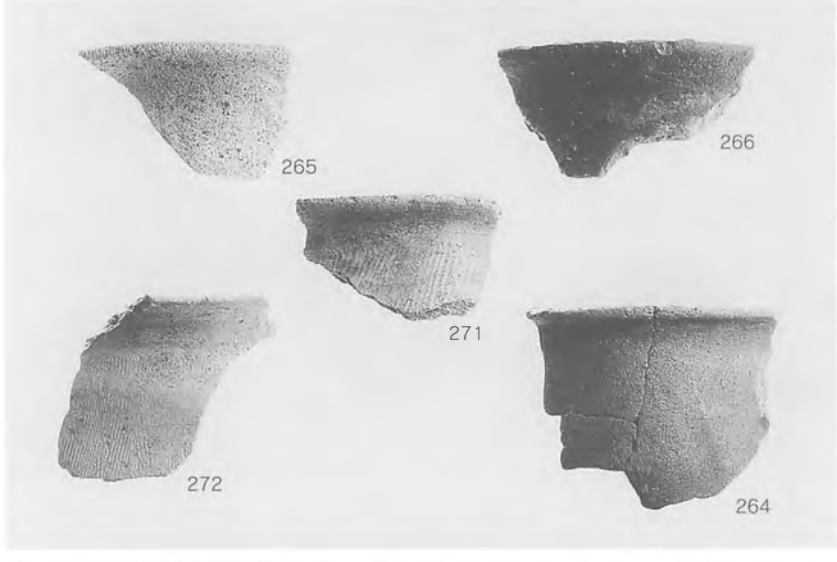
PL.121　Ⅷ区　出土遺物(1)



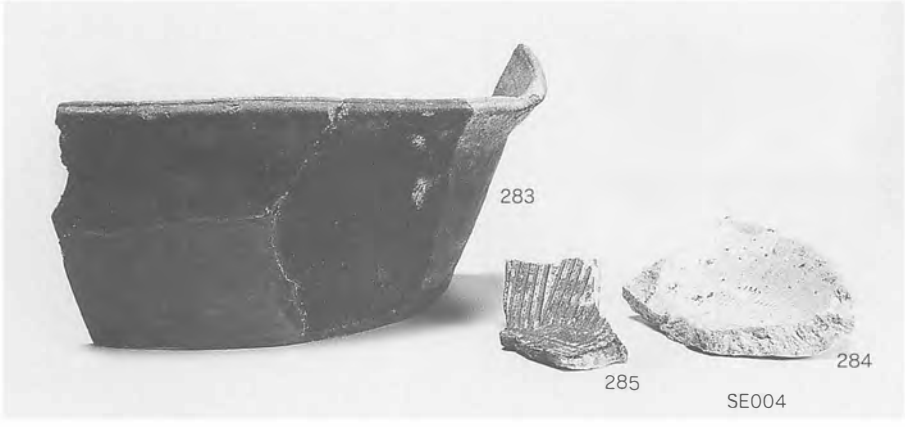
PL.122　Ⅷ区　出土遺物(2)

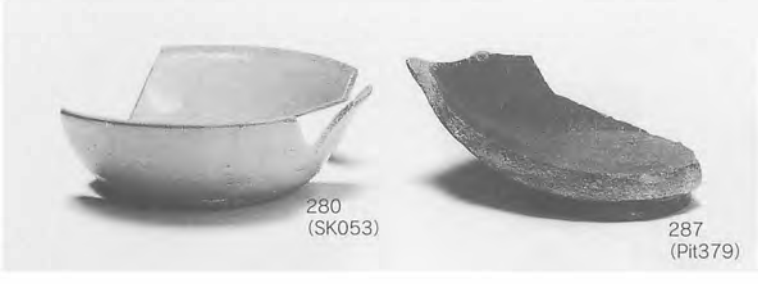


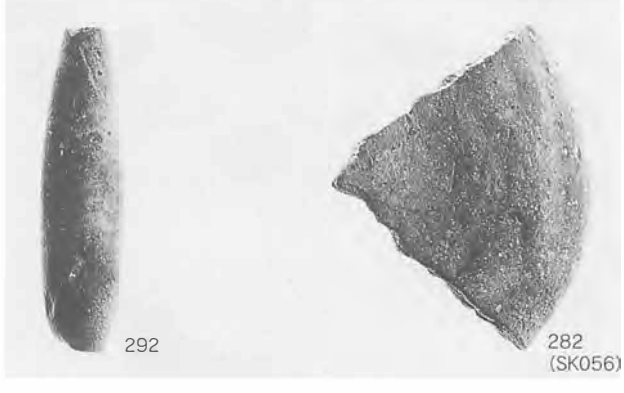


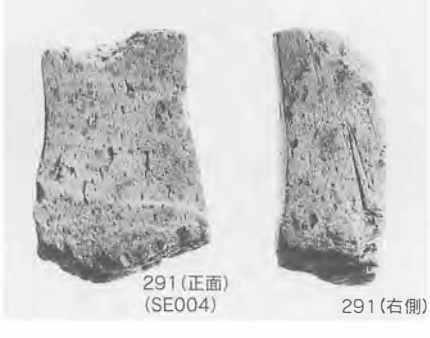


PL.123　Ⅷ区　出土遺物(3)

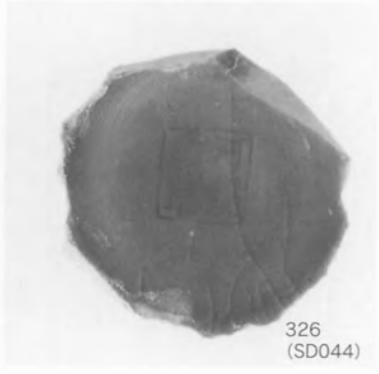


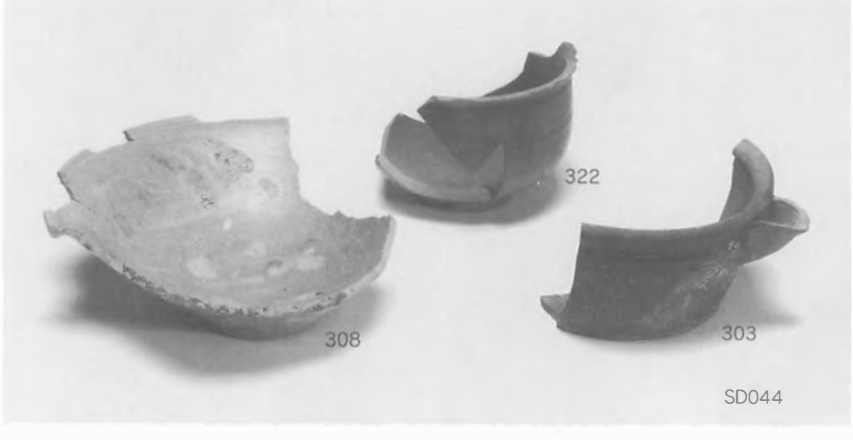






PL.124　X区　出土遺物

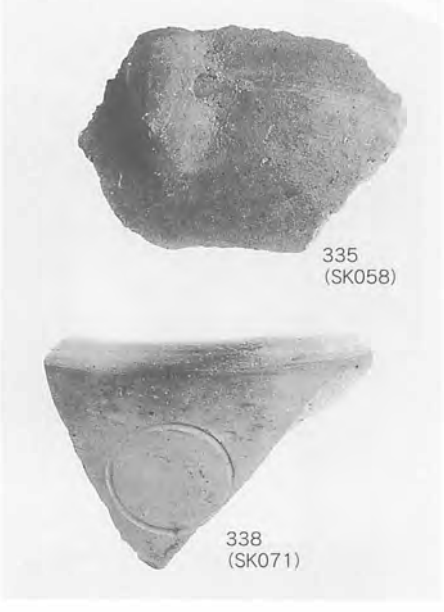




PL.125　XI区　出土遺物(1)

337(内)

337(外)
(SK061)

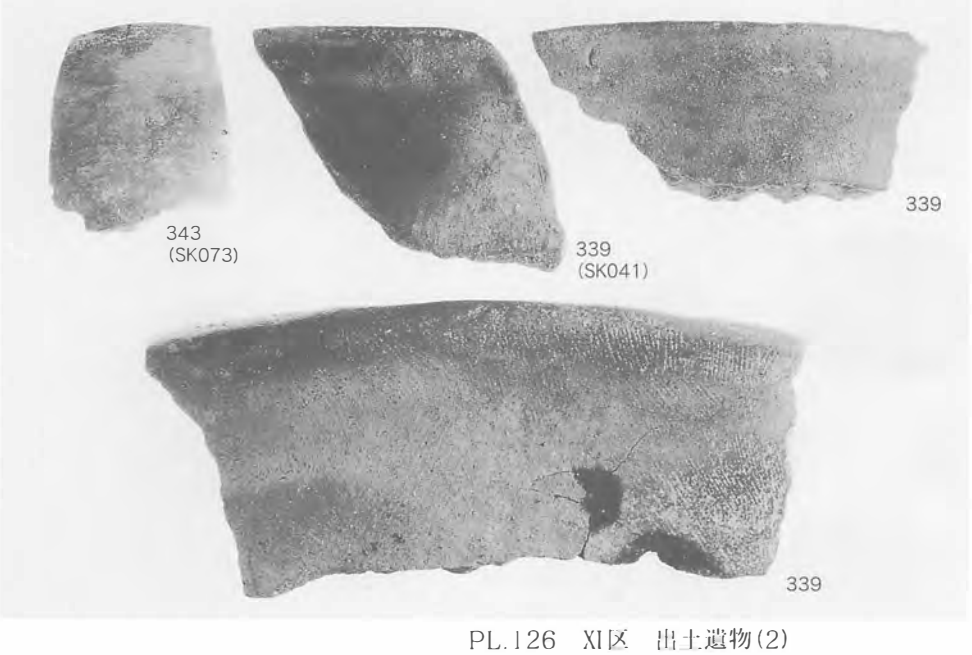

335
(SK058)

338
(SK071)

345(SX006)

346
(SX006)

344
(SX006)

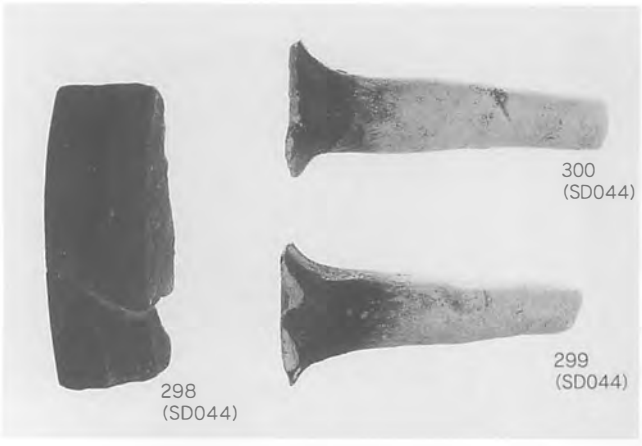

343
(SK073)

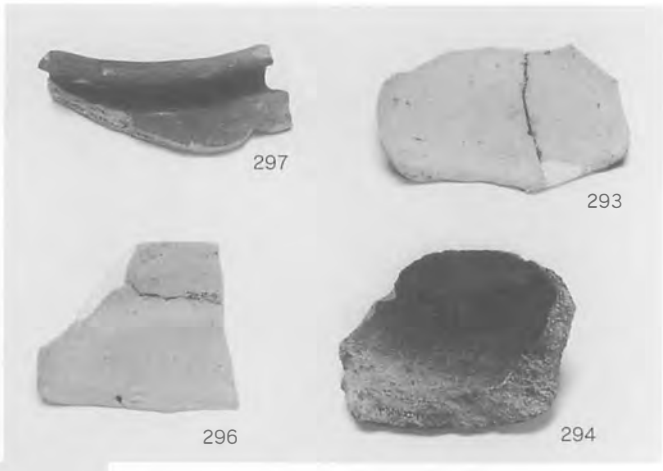
339
(SK041)

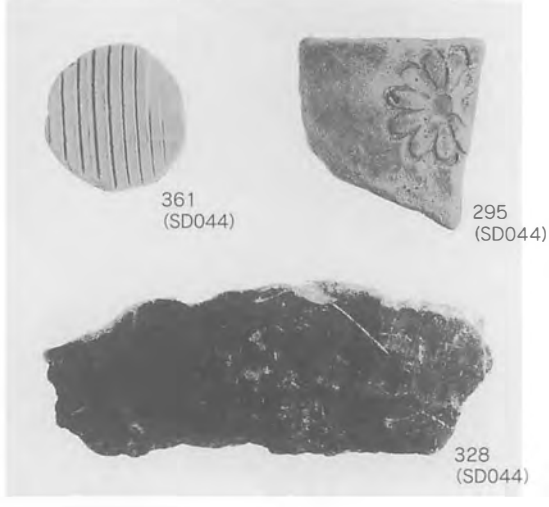
339

339

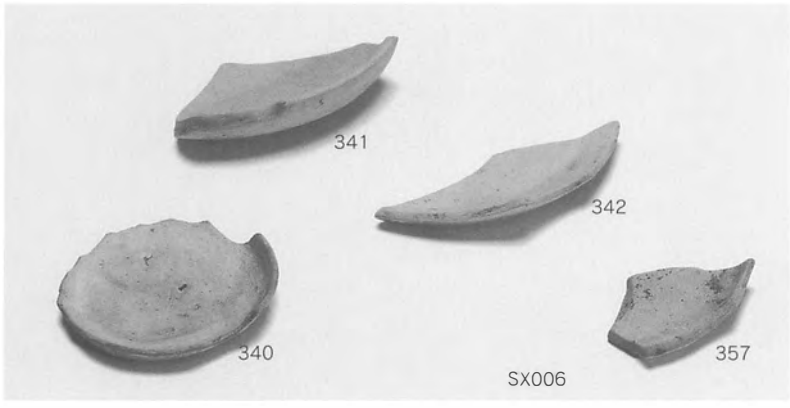
PL.126　XI区　出土遺物(2)

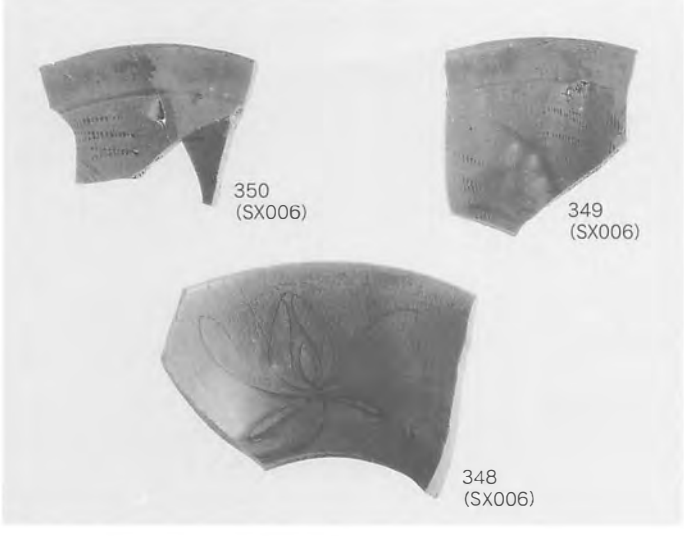


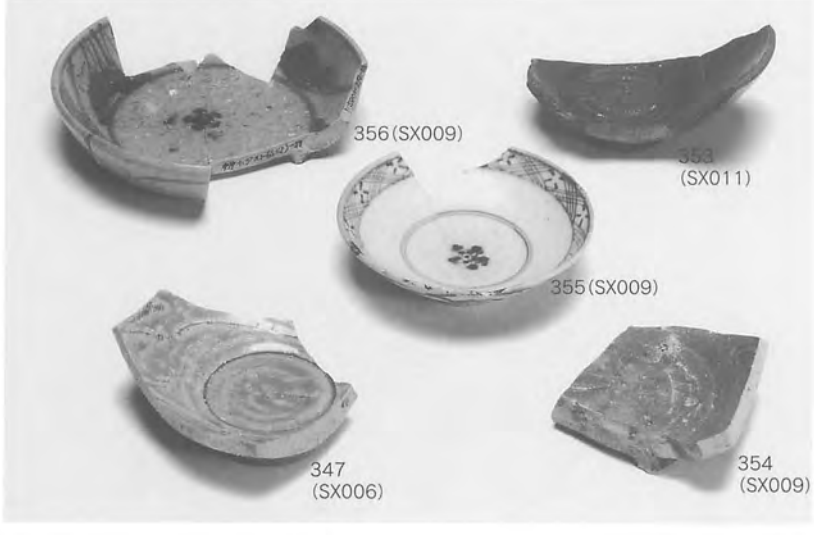




PL.127　XI区　出土遺物(3)







PL.128　XI区　出土遺物(4)

あ と が き

平成１４年度に熊本県教育委員会が九州新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財調査を行った西片稲村遺跡･中片小路遺跡の報告書が完成しました。

平成１５年度から整理を開始し、平成１６年度で報告書に取りまとめることができたのは、ひとえに発掘作業と整理作業に携わった多くの方々のお力添えによるものです。

この報告書が地元の方々並びに県民の皆様の文化財に対する認識と理解をより深めることになるよう希望いたします。

報 告 書 抄 録

フ リ ガ ナ	ニシカタイナムライセキ・ナカカタショウジイセキ
書　　名	西片稲村遺跡・中片小路遺跡
副　書　名	九州新幹線新八代・西鹿児島間建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査
シ リ ー ズ 名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第228集
編　著　者	坂口　圭太郎
編 集 機 関	熊本県教育委員会
所　在　地	〒862-8570　熊本県熊本市水前寺6丁目18番1号
発 行 年 月 日	平成１７年3月３１日

フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード		北 緯	東 経	調査期間	調査 面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にしかたいなむらいせき 西片稲村遺跡	クマモトケンヤツシロシ 熊本県八代市 ニシカタマチオオアザイナムラ 西片町大字稲村	202	225	32° 30’ 33”	130° 38’ 14”	H13.4.15 ～ H14.2.26	西片稲村遺跡 2,800㎡ 中片小路遺跡 3,800㎡	九州新幹線 建設工事
なかかたしょうじいせき 中片小路遺跡	クマモトケンヤツシロシ 熊本県八代市 ナカカタマチオオアザショウジ 中片町大字小路	202	223	32° 30’ 27”	130° 38’ 15”			

熊本県文化財調査報告　第228集

西片稲村遺跡・中片小路遺跡

発行年月日　平成１７年３月３１日

編集・発行　熊本県教育委員会
〒862-8609 熊本市水前寺6丁目18番1号

印　　刷　株式会社林田印刷
〒860-0029 熊本市米屋町1-9

16　教　教文
② 006

正誤表

	誤	正
例言 10	坂本	坂口
P208～210	第5表 中片小路遺跡 出土遺物(陶磁器)観察表	別紙有り

第 5 表　中片小路遺跡　　出土遺物(陶磁器)観察表

図版-報番	調査区	遺構	層位	取上No.	時期	器種	部位	法量 (cm) 口径	底径	高台径	高台高	器高	残存高	残存率	焼成	胎土	釉薬	調整	備考
39-3	Ⅰ区	撹乱一括			中世	椀	底部	—	—	(4.6)	0.8	—	1.7～	一部	良	緻密	C-141 白茶	内外面ともに回転ヘラ削り調整。高台は削り出し。見込みには胎土目が三箇所残る。全面的に施釉。細かい貫入あり。	
39-4	Ⅰ区	一括			中世	青磁椀	口縁	—	—	—	—	—	3.8～	一部	良	緻密	C-218 ベージュ	外面は回転ヘラ削り調整。内面は二又工具で器面を分割。	
39-6	Ⅰ区	撹乱一括			中世	青磁椀		—	—	(5.1)	0.7	—	2.8～	一部	良	黒色粒・緻密	C-135 白茶	内外面ともに記点ヘラ削り。底部は削り出し。釉は体部下部までかかる。	
41-7	Ⅱ区	SD004			中世	青磁椀	口縁	17.5	—	—	—	—	2.7～	一部	良	緻密	C-215 大理石の色	口縁は花弁を施す。内面に沈線をもつ。	
41-9	Ⅱ区	SD004		20	中世	青磁椀	底部	—	5.0	—	—	—	2.0～	一部	良	緻密	C-216 すずかけの樹の色	外面はヘラ削り調整。内面に鳥文を施す。	
41-10	Ⅱ区	SD004		25	中世	白磁 高台付椀	底部	—	—	(6.9)	1.2	—	2.6～	一部	良	茶褐色粒	C-135 白茶	内面に沈線あり。	
41-11	Ⅱ区	一括			中世	白磁椀	口縁	—	—	—	—	—	2.4～	一部	良	灰白色粒	C-214 海老の殻の灰色	内面に沈線で鳥文を表わす。	
41-12	Ⅱ区	一括			中世	青磁皿	口縁～胴部	—	—	—	—	—	5.6～	一部	良	緻密	C-216 すずかけの樹の色	外面はヘラ削り後ナデ調整。内面は鳥文を施す。	
41-14	Ⅱ区	一括			中世	青磁 台付椀	口縁～底部	—	—	—	—	2.2	—	一部	良	緻密	C-216 すずかけの樹の色	外面はヘラ削り調整。内面はナデ調整。削り出し高台。焼成痕あり。	
41-15	Ⅱ区	一括			中世	青磁皿	底部	—	4.4	—	—	—	2.1～	1/3	良	緻密	C-218 ベージュ	外面は回転ヘラ削り。内面は三又工具とクシによる粗い施文。釉は全面に施釉後、底部の釉を掻き取る。	
41-17	Ⅱ区	一括			中世	青磁椀	底部	—	5.4	—	—	—	1.1～	一部	良	緻密	C-240 冬の灰色	内面は回転ヘラ削り調整、焼台痕あり。底部は削り出し。	
56-31	Ⅳ・Ⅴ区	SD017			中世	青磁椀	口縁～胴部	(17.0)	—	—	—	—	4.5～	一部	良	緻密	C-216 すずかけの樹の色	外面はクシ描き文を施す。内面は花鳥文を施す。	
59-32	Ⅲ区	SK005		1	中世	白磁椀	口縁～底部	(16.5)	—	(4.9)	1.5	6.6	—	1/3	良	緻密	透明釉	内外面ともに回転ヘラ削り調整。見込みには1条の沈線あり。高台は削りだし。釉は外面体部下部まで施釉。	
59-33	Ⅲ区	SK005		1	中世	白磁椀		(17.2)	—	6.2	1.0	5.6	—	1/2	良	緻密	透明釉	外面はヘラ削り後ナデ調整。内面はナデ調整。	
63-37	Ⅳ・Ⅴ区	SE001			中世	青磁椀	口縁	—	—	—	—	—	6.1～	一部	良	緻密	C-216 すずかけの樹の色	外面は回転ヘラ削り。内面はヘラによる片彫りの蓮華文。	
63-38	Ⅳ・Ⅴ区	SE001			中世	青磁椀	口縁～底部	(16.9)	—	(4.8)	0.8	7.4	—	1/3	良	黒色粒	C-171 ろくしょう色	外面は回転ヘラ削り後、縦にクシ目を施文。内面はヘラ、クシによる施文。釉は体部下部までで高台にはかからない。高台は削り出し。	
65-43	Ⅳ・Ⅴ区	SE002		40	中世	青磁椀	口縁	(12.3)	—	—	—	—	4.6～	一部	良	茶褐色粒	C-218 ベージュ	外面は回転ヘラ削り後、縦にクシ目を施文。内面はクシによる施文。	
65-46	Ⅳ・Ⅴ区	SE002		1	中世	青磁 高台付椀	胴部～底部	—	—	(5.8)	0.8	—	5.1～	一部	良	緻密	C-218 ベージュ	外面はクシ描き状に調整。内面は鳥文を施す。	
65-47	Ⅳ・Ⅴ区	SE002		104	中世	青磁皿	底部	—	4.4	—	—	—	1.0～	一部	良	緻密	C-201 薄灰緑	外面は回転ヘラ削り。内面は三又工具とクシによる施文。釉は全面に施釉後、底部の釉を掻き取る。	
65-48	Ⅳ・Ⅴ区	SE002			中世	青磁 高台付椀	底部	—	—	—	1.0	—	1.7～	一部	良	白色粒・黒色粒	C-207 龍泉窯青磁色	内面に鳥文を施す。削り出し高台。	
65-49	Ⅳ・Ⅴ区	SE002		98	中世	白磁椀	口縁～底部	(16.4)	—	(6.6)	0.9	6.5	—	一部	良	白色粒・黒色粒・緻密	透明釉	内面はナデ調整。底部は削り出しで台を成形。	

図版-報番	調査区	遺構	層位	取上No	時期	器種	部位	法量 (cm)						残存率	焼成	胎土	釉薬	調整	備考
								口径	底径	高台径	高台高	器高	残存高						
120-280	X区	SK053		一括	中世 13C	白磁皿	口縁～底部	11.0	—	6.1	—	3.6	—	3/4	良	緻密	C-144 灰白	内外面ともに回転ナデ調整。底部は回転ヘラ切り。外面体部下部は回転ヘラ削り。釉は外面体部下部まで施釉。口縁は施釉なし。	
120-287	X区	Pit379		一括	中世 13C	青磁椀	胴部～底部	—	—	5.2	0.8	—	4.2～	一部	良	白色粒・赤褐色粒	C-228 焦茶色	内外面ともに回転ナデ調整。。外面にヘラ状工具による施文。底部は削り出し、焼台痕あり。釉は全面に施釉。	
132-306	XⅠ区	SD044	2層	一括	中世	陶器杯	口縁～底部	12.8	—	3.8	0.6	3.1	—	1/2	良	緻密	C-107 白茶	外面は回転ヘラ削り調整。内面は回転ナデ調整。見込みに4ヶ所胎土目あり。畳付けに胎土目。高台は削りだし。	
132-307	XⅠ区	SD044	2層	一括	中世	陶器杯	口縁～底部	13.4	—	5.0	0.5	3.0	—	1/2	良	緻密	C-107 白茶	外面は回転ヘラ削り調整。内面は回転ナデ調整。見込みに4ヶ所胎土目あり。畳付けに胎土目。高台は削りだし。	
132-308	XⅠ区	SD044	5層	一括	中世	陶器鉢	口縁～底部	29.6	6.0	—	—	9.1	—	1/2	良	長石・石英	C-104 灰香色	内外面ともに回転ナデ後鉄釉。底部回転ヘラ削り。見込みに5ヶ所胎土目あり。	
134-320	XⅠ区	SD044	2層	一括	中世	陶磁器小椀	口縁～底部	8.6	4.6	—	0.7	4.7	—	ほぼ完形	良	緻密	C-144 灰白	内外面ともに回転ナデ調整。外面上部に3本の沈線あり。全面施釉。高台は削り出し。。	
134-321	XⅠ区	SD044	2層	一括	中世	青磁小椀	口縁～底部	10.4	—	3.5	0.8	6.0	—	ほぼ完形	良	緻密	C-143 銀灰色	内外面ともに回転ナデ調整。全面施釉。	
134-322	XⅠ区	SD044	1層	一括	中世	青磁鉢	口縁～底部	15.6	—	7.2	1.3	11.5	—	1/2	良	緻密	C-293 瓦の風茶	内外面ともに回転ナデ調整。底部は削り出し。	
134-323	XⅠ区	SD044	1層	一括	中世	青白磁椀	底部	—	—	4.4	1.2	—	3.3		良	緻密	C-201 薄い灰緑	内外面ともに回転ナデ調整。外面に沈線あり。削りだし高台。	
134-324	XⅠ区	SD044	2層	一括		青磁椀	口縁～底部	16.6	—	4.8	0.7	6.9	—	1/2	良	緻密	C-228 焦茶色	外面は回転ヘラ削り後ヘラによる蓮弁文。内面は回転ナデ調整。見込みには印文(草花)あり。高台は削りだし。	
134-325	XⅠ区	SD044	2層	一括	中世	青磁椀	底部	—	—	5.0	0.7	—	4.7	3/4	良	緻密	C-217 海老の殻の灰緑	外面は回転ヘラ削り後ヘラによる蓮弁文。内面は回転ナデ調整後ヘラによる施文。。見込みには印文(草花)あり。高台は削りだし。	
134-326	XⅠ区	SD044		一括	南宋	青磁椀	底部	—	—	5.0	0.7	—	1.7	3/4	良	緻密	C-217 海老の殻の灰緑	内外面ともに回転ナデ調整。見込みに文字印文(河濱遺稿)あり。高台は削りだし。	
137-336	XⅠ区	SK067		20	中世	青磁椀	口縁～底部	15.4	—	5.4	0.7	6.1	—	1/4	良	長石・石英・黒色粒	C-134 焦茶色	外面は回転ヘラ削り後ヘラ状工具による蓮弁文。内面は回転ナデ調整。高台に砂目あり。釉は全面に施釉。高台底面に砂付着。	
141-347	XⅠ区	SX006		一括	中世 鎌倉	青磁椀	底部	—	—	4.6	0.8	—	3.8	1/4	良	長石、砂粒粗い	C-135 白茶	外面は回転ヘラ削り後、縦に櫛目文あり。内面はヘラによる施文とジグザグ状の櫛点描文。高台は削り出し。	
141-348	XⅠ区	SX006		29	中世 鎌倉	青磁椀	口縁	15.0	9.2	—	—	6.0	—	1/4	良	緻密	C217 海老の殻の灰緑	外面は回転ヘラ削り後施釉。内面はヘラ状工具による片彫蓮花文後施釉。	
141-349	XⅠ区	SX006		29	中世 鎌倉	青磁椀	口縁	15.8	—	—	—	—	5.0	1/6	良	長石	C-216 すずかけの樹の色	外面は回転ヘラ削り後縦の櫛目文。内面は回転ナデ後ヘラ状工具による施文と櫛点描文。釉は全面に施釉。	
141-350	XⅠ区	SX006		一括	中世 鎌倉	青磁椀	口縁	15.6	—	—	—	—	4.0	1/4	良	長石・石英	C-293 瓦の風茶	外面は回転ヘラ削り調整。内面はヘラによる施文と櫛点描文。釉は全面に施釉。	
142-353	XⅠ区	SX009		一括	近世	小椀	口縁～底部	11.8	—	4.0	0.9	5.0	—	1/2	良	緻密	C-110 コーヒー色	内外面ともに回転ナデ調整。見込みは蛇の目状に釉掻き取り、環状に砂目あり。畳付けに砂目あり。	
142-354	XⅠ区	SX011		一括	中世	青磁椀	底部	—	6.0	—	—	—	—	1/6	良	緻密	C-293 瓦の風茶	外面は回転ヘラ削り後施釉。内面は回転ナデ後施釉。見込みにヘラ状工具による印文(草花)あり。高台は削りだし。釉は高台まで施釉。	

図版-報番	調査区	遺構	層位	取上No.	時期	器種	部位	法量 (cm) 口径	底径	高台径	高台高	器高	残存高	残存率	焼成	胎土	釉薬	調整	備考
65-50	Ⅳ・Ⅴ区	SE002			中世	白磁椀	口縁～胴部	—	—	—	—	—	5.5～	一部	良	茶褐色粒	透明釉	外面はﾍﾗ削り調整。内面はｸｼ状工具で調整。	
65-51	Ⅳ・Ⅴ区	SE002		48	中世	白磁椀	口縁～胴部	(16.2)	—	—	—	—	4.9～	一部	良	白色粒・黒色粒	C-162 船の白	外面はﾍﾗ削り後ナデ調整。内面はナデ調整。	
65-52	Ⅳ・Ⅴ区	SE002			古代	白磁椀	底部	—	—	(6.2)	1.4	—	4.4～	一部	良	緻密	C-282 雪の灰白	内面はナデ調整。口縁部は一部釉がかからない。	
65-53	Ⅳ・Ⅴ区	SE002		111	中世	白磁 高台付椀	底部			6.9	1.1		2.0～	一部	良	緻密	透明釉	外面はﾍﾗ削り調整。内面は焼台痕あり。	
65-54	Ⅳ・Ⅴ区	SE002			中世	白磁椀	口縁	(16.0)	—	—	—	—	4.6～	一部	良	緻密	C-163 貝の白	内外面ともに回転ﾍﾗ削り。見込みには1条の沈線を伴う。貫入あり。	
66-55	Ⅳ・Ⅴ区	SX001			中世	青磁椀	口縁～胴部	(17.2)	—	—	—	—	6.4～	1/2	良	緻密	C-135 白茶	外面はﾍﾗ削り後ナデ調整。内面は花文を施す。	
66-56	Ⅲ区	SK005		11	中世	青磁皿	底部	—	5.0	—	—	—	1.4～	1/3	良	緻密	C-208 薄青磁色	外面は回転ﾍﾗ削り。内面は二又工具とｸｼによる施文。釉は全面に施釉後、底部の釉を掻き取る。	
67-61	Ⅲ区	一括			17C中	青磁椀	口縁部	—	—	—	—	—	5.5～	一部	良	白色粒・赤褐色粒・茶褐色粒	C-107 白茶	内外面ともに回転ﾍﾗ削り調整。内面にはｸｼによる施文あり。	
67-62	Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ区	撹乱一括			近世	青白磁皿	口縁	—	—	—	—	—	3.4～	一部	良	緻密	C-204 あひるの卵の薄青	内外面ともにナデ調整。内面が構刻で蓮草文を施す。稜花口縁。	
67-64	Ⅳ・Ⅴ区	一括			中世	青磁椀	口縁～胴部	(16.6)	—	—	—	—	3.0～	一部	良	緻密	C-208 薄青磁色	外面は横方向にﾍﾗ状工具による押付痕あり。内面は横方向のナデ調整。	
67-65	Ⅳ・Ⅴ区	一括			中世	青白磁椀		—	—	—	—	—	2.3～	一部	良	黒色粒・緻密	C-201 薄灰緑	外面は回転ﾍﾗ削り後ﾍﾗ状工具による横方向の削り、鎬蓮弁を作る。内面には2条の沈線がはいる。釉は外面体部上部までかかる。	
67-66	Ⅳ・Ⅴ区	一括			中世	青磁椀	口縁～胴部	—	—	—	—	—	4.1～	一部	良	緻密	C-208 薄青磁色	外面は回転ﾍﾗ削り後ﾍﾗ状工具による横方向の削り、鎬蓮弁を作る。釉は外面体部上部までかかる。	
67-67	Ⅲ区	一括			中世	青磁皿	口縁～底部	(12.1)	(9.0)	—	—	2.6	—	一部	良	緻密	C-143 銀灰色	外面は回転ﾍﾗ削り。内面は三又工具とｸｼによる施文。釉は全面に施釉後、底部の釉を掻き取る。	
67-68	Ⅲ区	一括			中世	青磁椀		—	—	6.2	1.0	—	2.0～	一部	良	緻密	C-230 鉄の緑	外面は回転ﾍﾗ削り。内面はﾍﾗによる施文。高台は削り出し、焼台痕の付着あり。	
67-69	Ⅲ区	一括			中世	白磁椀	底部	—	—	6.1	0.9	—	3.1～	一部	良	金雲母・白色粒黒色粒・赤褐色粒	透明釉	内外面ともに回転ﾍﾗ削り。内面には焼台痕あり。高台は削り出し。釉は体部下部まで施釉。	
67-70	Ⅲ区	一括			中世	青磁椀	底部	—	—	4.8	0.7	—	1.7～	一部	良	黒色粒・緻密	C-208 春緑	外面は回転ﾍﾗ削り。高台は削り出し。	
67-71	Ⅲ区	一括			中世	白磁椀	底部	—	—	(6.3)	0.9	—	3.0～	一部	良	緻密	C-143 銀灰色	内外面ともに回転ﾍﾗ削り調整。内面見込みの釉を環状に掻き取る。高台は削り出し。	
67-72	Ⅳ・Ⅴ区	一括			中世	青磁椀	底部	—	—	5.7	0.7	—	2.9～	一部	良	緻密	C-107 白茶	外面はﾍﾗ削りで整えている。内面はナデ調整。削り出し高台。	
72-77	Ⅵ区	SD024			中世	青磁	胴部	—	—	—	—	—	3.4～	一部	良	緻密	C-215 大理石の色	内外面ともに回転ﾍﾗ削り調整。	
72-86	Ⅵ区	一括			中世	青白磁鉢	口縁	—	—	—	—	—	4.0～	一部	良	緻密	C-194 淡い灰緑	体部は型押しで外面に押し出し。押し出しの境には釉花を作る。釉は厚くかかる。	
93-211	Ⅶ区	一括			中世 鎌倉	青磁小椀	胴部～底部	—	—	(3.6)	0.7	—	3.2～	1/3	良	緻密	C-216 すずかけの樹の色	外面は回転ﾍﾗ削り後ﾍﾗによる蓮弁文。 内面は回転ﾅﾃﾞ調整。釉は全面に施釉。	
99-219	Ⅶ区	SB023			中世	青磁椀	口縁～胴部	—	—	—	—	—	5.7～	一部	良	緻密	C-216 すずかけの樹の色	外面は回転ﾍﾗ削り後ﾍﾗによる蓮弁文。 内面は回転ﾅﾃﾞ調整。	
111-257	Ⅶ区	Pit44			中世 鎌倉	青磁皿	口縁～底部	—	—	—	—	—	2.5～	一部	良	緻密	C-282 雪の灰白	内外面ともに回転ﾅﾃﾞ調整。内面はｸｼによる文様がある。	

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 228 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：西片稲村遺跡 中片小路遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話： 096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2015 年 12 月 24 日